

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第29集

かち がわ い せき  
勝 川 遺 跡 IV

1992

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター







# 序

愛知県春日井市勝川遺跡の調査は、本センターの前身である財団法人愛知県教育サービスセンターが昭和56年に発掘調査を開始して以来、現地調査を終了した平成2年まで満10年におよびました。この間、昭和60年にはわが財団法人愛知県埋蔵文化財センターが誕生するなど、愛知県の埋蔵文化財保護行政は大きく発展してまいりました。朝日遺跡とともに、本センター発足以来継続しておこなってきました勝川遺跡の調査が本報告書の刊行をもって、一応の終結をむかえることは、私どもにとってきわめて感慨深いものであります。

名古屋環状2号線・JR城北線・JR中央本線があつまり、交通の要衝として日に日に近代都市としての姿を整えつつあるこの勝川の地には、弥生時代から近世にいたるまで連続と人々が生活してきた痕跡がとどめられております。なかでも、弥生時代の木器製作工房跡は大いに話題を呼びました。また、奈良の藤原宮と同じ型でつくられた瓦を葺いていた奈良時代の勝川廃寺も全国的によく知られた存在であります。さらに、県下初の出土例となりました古代のまつりにもちいた人形はこの地に居住していた人々の精神生活の一端を私たちに垣間見せてくれました。これらの成果を掲載しました本書が多くの方々に活用され、歴史研究ならびに文化財保護のお役にたつことを願ってやみません。

最後になりましたが、この勝川遺跡の現地調査および報告書作成に御協力いただいた、関係諸機関ならびに地元の方々に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター  
理事長 高木 鐘三



# 目 次

第 I 章 序章	1
1 調査にいたる経緯と調査の経過 (樋上)	1
2 勝川遺跡の歴史的環境 (樋上)	2
第 II 章 遺構	4
1 発掘調査区と時期区分 (樋上)	4
2 上屋敷地区	5
(1) 基本層序 (樋上)	5
(2) 89A区 (樋上)	5
(3) 89B区 (樋上)	5
(4) 90A区 (岡本)	6
(5) 63D区 (服部)	8
3 南東山地区	11
(1) 63B区 (樋上)	11
(2) 89C区 (樋上)	11
4 苗田地区 (樋上)	13
第 III 章 遺物	26
1 土製品	26
(1) 土器・陶磁器 (樋上・赤塚・松原)	26
(2) 墨書土器・刻書土器 (樋上)	36
(3) 瓦 (樋上・松原)	37
(4) その他 (樋上)	38
2 石製品 (石黒・五藤)	39
(1) 石器の出土状況について	39
(2) 石器各説	40
3 木製品 (樋上)	47
(1) I 期	47
(2) II-1 期	48
(3) II-2 期	50
(4) III-1 期	51

(5) III-2期	51
第IV章 自然科学的分析	53
1 愛知県勝川遺跡の地層および層序 (森)	53
2 珪藻分析 (森)	60
3 花粉分析 (森)	67
4 勝川遺跡群より産した昆虫化石と古環境 (森)	77
5 まとめ (森)	93
6 勝川遺跡出土の韓式系土器の胎土 (永草)	98
第V章 考察	101
墨書土器・祭祀具について (坪井・樋上)	101
第VI章 まとめ (樋上)	110
付表	112

## 挿図目次

第1図	春日井市位置図	2	第2図	勝川遺跡位置図	3
第3図	勝川遺跡発掘調査区	4	第4図	90A区SZ03・04平面図および断面図	7
第5図	63D区II・III期遺構図	9	第6図	63D区IV期遺構図およびSD23断面図	10
第7図	63B区西壁断面図	11	第8図	89C区遺構配置図	12
第9図	62F区I～III期遺構配置図	13	第10図	SD60内木器未製品貯蔵遺構図	14
第11図	SX01木製品出土状態図	15	第12図	掘立柱建物群検出状態図および柱穴断面図	17
第13図	SD13遺物出土状態図	18	第14図	SD08一木鋤出土状態図	20
第15図	NR01内遺構配置図	22	第16図	NR01土層断面図	23・24
第17図	IV期水田遺構図	25	第18図	縄紋土器実測図	26
第19図	62F区石器の分布状態図	40	第20図	刃器(スクレイパー)・剥片の形態区分	43
第21図	町田遺跡62B区における浅谷地形(埋積浅谷I)の断面図	53			
第22図	松河戸遺跡89Dc区における浅谷地形(埋積浅谷II)の断面図	54			
第23図	勝川遺跡深掘りトレンチ断面図	55			
第24図	火山灰の採集・確認地点および昆虫分析試料の採取地点	56			
第25図	主な調査区における地質柱状図	57			
第26図	勝川遺跡(62F区)平面図と珪藻分析試料採取地点	60			
第27図	勝川遺跡(62F区)珪藻分析試料採取地点の断面図	61			
第28図	勝川遺跡(Aサンプル)における主要珪藻化石群集変遷	64			
第29図	町田遺跡PSトレンチにおける花粉化石群集(樹木花粉)	70			
第30図	町田遺跡PSトレンチにおける花粉化石群集変遷(草本花粉・シダ類孢子)	71			
第31図	町田遺跡PSトレンチにおける珪藻分析結果	72			
第32図	墨書土器・祭祀具出土地点一覧	102			
第33図	墨書土器・祭祀具出土分布頻度図(時期別)	105			
第34図	共通する内容の墨書文字集成	107			

## 表目次

第1表	発掘調査区と調査期間	1	第2表	昆虫化石の分布試料と相対年代	77
第3表	勝川遺跡群より産した昆虫化石(科および属レベル)	80			
第4表	勝川遺跡群より産した昆虫化石(種レベル) No1	81			
第5表	勝川遺跡群より産した昆虫化石(種レベル) No2	82			
第6表	勝川遺跡群における古環境の変遷	97			
第7表	分析試料一覧表	98	第8表	勝川遺跡出土試料の偏光顕微鏡観察結果	98
第9表	時期別墨書文字集成表	106			

# 図版目次

巻頭図版 I 63D区SZ02	巻頭図版 II 89C区竪穴住居群
巻頭図版 III 62F区北半部	巻頭図版 IV 62F区SX01木製品出土状況
巻頭図版 V 62F区楯出土状況	巻頭図版 VI 62F区馬鍬出土状況
巻頭図版 VI 62F区馬鍬出土状況	巻頭図版 VIII 62F区墨書土器出土状況
図版 I 石器使用痕拡大写真	46
図版 II 花粉化石	74
図版 III 花粉化石・大形植物遺体	75
図版 IV 昆虫化石の顕微鏡写真(1)	89
図版 V 昆虫化石の顕微鏡写真(2)	90
図版 VI 勝川遺跡産ネクイハムシ3種の電子顕微鏡写真	91
図版 VII ネクイハムシ亜科の電子顕微鏡写真	92
PL.1 上屋敷地区遺構図(1:800)	PL.2 南東山地区・苗田地区遺構図(1:800)
PL.3 89A区遺構図(1:200)	PL.4 89B・90A区遺構図(1:200)
PL.5 63B区遺構図(1:200)	PL.6 89C区遺構図(1:200)
PL.7 62F区遺構図(1)(1:200)	PL.8 62F区遺構図(2)(1:200)
PL.9 62F区遺構図(3)(1:200)	PL.10 62F区遺構図(4)(1:200)
PL.11 62F区NR01遺物出土状態図(1)(1:100)	PL.12 62F区NR01遺物出土状態図(2)(1:100)
PL.13 62F区NR01遺物出土状態図(3)(1:200)	PL.14 I期土器実測図(1)(1:4)
PL.15 I期土器実測図(2)(1:4)	PL.16 I期土器実測図(3)(1:4)
PL.17 I期土器実測図(4)(1:4)	PL.18 I期土器実測図(5)(1:4)
PL.19 I期土器実測図(6)(1:4)	PL.20 I期土器実測図(7)(1:4)
PL.21 I期土器実測図(8)(1:4)	PL.22 I期土器実測図(9)(1:4)
PL.23 II期土器実測図(1)(1:4)	PL.24 II期土器実測図(2)(1:4)
PL.25 II期土器実測図(3)(1:4)	PL.26 II期土器実測図(4)(1:4)
PL.27 II期土器実測図(5)(1:4)	PL.28 III期土器実測図(1)(1:4)
PL.29 III期土器実測図(2)(1:4)	PL.30 III期土器実測図(3)(1:4)
PL.31 III期土器実測図(4)(1:4)	PL.32 III期土器実測図(5)(1:4)
PL.33 III期土器実測図(6)(1:4)	PL.34 III期土器実測図(7)(1:4)
PL.35 III期土器実測図(8)・土製品実測図(1:4)	PL.36 IV期土器・陶磁器実測図(1)(1:4)
PL.37 IV期土器・陶磁器実測図(2)(1:4)	PL.38 IV期土器・陶磁器実測図(3)(1:4)
PL.39 IV期土器・陶磁器実測図(4)(1:4)	PL.40 IV期土器・陶磁器実測図(5)(1:4)
PL.41 墨書土器実測図(1)(1:3)	PL.42 墨書土器実測図(2)(1:3)
PL.43 墨書土器実測図(3)(1:3)	PL.44 墨書土器実測図(4)(1:3)
PL.45 墨書土器実測図(5)(1:3)	PL.46 III期瓦実測図(1)(1:4)
PL.47 III期瓦実測図(2)(1:4)	PL.48 III期瓦実測図(3)(1:4)
PL.49 III期瓦実測図(4)(1:4)	PL.50 III・IV期瓦実測図(1:4)
PL.51 石製品実測図(1)(1:2)	PL.52 石製品実測図(2)(1:2)

- PL.53 石製品実測図(3) (1:2)
- PL.55 石製品実測図(5) (1:2)
- PL.57 石製品実測図(7) (1:2)
- PL.59 I期木製品実測図(2) (1:4)
- PL.61 I期木製品実測図(4) (1:4)
- PL.63 I期木製品実測図(6) (1:4)
- PL.65 I期木製品実測図(8) (1:4)
- PL.67 II-1期木製品実測図(1) (1:4)
- PL.69 II-1期木製品実測図(3) (1:4)
- PL.71 II-1期木製品実測図(5) (1:4)
- PL.73 II-1期木製品実測図(7) (1:8)
- PL.75 II-1期木製品実測図(9) (1:4)
- PL.77 II-1期木製品実測図(11) (1:4)
- PL.79 II-2期木製品実測図(2) (1:4)
- PL.81 II-2期木製品実測図(4) (1:4)
- PL.83 II-2期木製品実測図(6) (1:4)
- PL.85 II-2期木製品実測図(8) (1:8)
- PL.87 III-1期木製品実測図(2) (1:4)
- PL.89 III-1期木製品実測図(4) (1:4)
- PL.91 III-1期木製品実測図(6) (1:4)
- PL.93 III-2期木製品実測図(1) (1:4)
- PL.95 89A区 1.全景(北から) 2.SX01(北から) 3.土坑群(東から)
- PL.96 89B区 1.全景(南東から) 2.SD01(南から) 3.方形周溝墓・土坑群(東から)
- PL.97 90A区 1.全景(東から) 2.SZ06(南から) 3.SX01(東から)
- PL.98 63D区II・III期 1.全景(南から) 2.SZ02(西から) 3.SZ02土器出土状況(西から)
- PL.99 63D区IV期 1.全景(東から) 2.全景(南西から) 3.SE01(北から)
- PL.100 63B区 1.全景(西から) 2.SD01(南から) 3.SD01(西から)
- PL.101 89C区 1.全景(上空から)
- PL.102 89C区 1.全景(北東から) 2.竪穴住居群(北西から) 3.SB16(手前)・15(奥)(南から)
- PL.103 89C区 1.SB15(北西から) 2.SB09(東から) 3.SB18(南西から)
- PL.104 62F区I~III期 全景(上空から)
- PL.105 62F区I期 1.北半部(南西から) 2.掘立柱建物群(西から) 3.SD60(南西から)
- PL.106 62F区I期 1.SX01(西から) 2.SX01木製品出土状況(北から)  
3.SX01広楕出土状況(北西から)
- PL.107 62F区I期 1.SX01広楕出土状況(南東から) 2.SX01膝柄股楕出土状況(北東から)  
3.SX01横斧柄出土状況(南西から) 4.SD60杓子出土状況(北から)
- PL.108 62F区I・II期 1.SD60板材出土状況(南から) 2.SD13木製品出土状況(東から)  
3.SD08一木鋤出土状況(東から)
- PL.109 62F区I期 1.SB10検出状況(北から) 2.SB01・02検出状況(北から)  
3.SB02P14柱穴検出状況(南から) 4.同断ち割り状況(東から)
- PL.110 62F区II・III期 1.NR01全景(西から) 2.NR01 SX03(右)・04(左)(北東から)  
3.NR01 SX03(奥)・04(手前)(南東から)
- PL.54 石製品実測図(4) (1:2)
- PL.56 石製品実測図(6) (1:2)
- PL.58 I期木製品実測図(1) (1:4)
- PL.60 I期木製品実測図(3) (1:4)
- PL.62 I期木製品実測図(5) (1:4)
- PL.64 I期木製品実測図(7) (1:4)
- PL.66 I期木製品実測図(9) (1:8)
- PL.68 II-1期木製品実測図(2) (1:4)
- PL.70 II-1期木製品実測図(4) (1:4)
- PL.72 II-1期木製品実測図(6) (1:4)
- PL.74 II-1期木製品実測図(8) (1:4)
- PL.76 II-1期木製品実測図(10) (1:8・1:4)
- PL.78 II-2期木製品実測図(1) (1:4)
- PL.80 II-2期木製品実測図(3) (1:4)
- PL.82 II-2期木製品実測図(5) (1:8)
- PL.84 II-2期木製品実測図(7) (1:4)
- PL.86 III-1期木製品実測図(1) (1:4)
- PL.88 III-1期木製品実測図(3) (1:4)
- PL.90 III-1期木製品実測図(5) (1:4)
- PL.92 III-1期木製品実測図(7) (1:4)
- PL.94 III-2期木製品実測図(2) (1:4)

- PL.111 62F区II-1期 1. NR01 遺物集中地点IV木製品出土状況（東から）  
2. NR01 遺物集中地点IV一木鋤出土状況（西から）  
3. NR01 遺物集中地点IV膝柄股鍬出土状況（西から）
- PL.112 62F区II-1期 1. NR01 遺物集中地点IV横斧柄出土状況（南から）  
2. NR01 遺物集中地点IV竪杵出土状況（南から）  
3. NR01 遺物集中地点IV木製品出土状況（西から）
- PL.113 62F区II-2期 1. NR01 SX03木製品出土状況（西から）  
2. NR01 SX03広鍬出土状況（南から）  
3. NR01 SX03ナスビ形膝柄鍬出土状況（北から）  
4. NR01 SX03狭鍬出土状況（北から）  
5. NR01 SX03楯出土状況（東から）
- PL.114 62F区II-2期 1. NR01 SX03組合せ鋤出土状況（北から）  
2. NR01 SX03机天板出土状況（南から）  
3. NR01 SX03梯子出土状況（東から）
- PL.115 62F区III-1期 1. NR01 SX04（南西から）  
2. NR01 SX04木製品出土状況（南から）  
3. NR01 SX04ヨコヅチ出土状況（西から）  
4. NR01 SX04折敷底板出土状況（西から）
- PL.116 62F区III期 1. NR01 SX04人形出土状況（北から）  
2. NR01 遺物集中地点I 墨書土器出土状況（西から）  
3. NR01 SX04人形出土状況（西から）  
4. NR01 遺物集中地点I 墨書土器出土状況（北から）  
5. NR01 遺物集中地点II人形出土状況（北から）  
6. NR01 遺物集中地点I 墨書土器出土状況（南から）
- PL.117 62F区III期 1. NR01 遺物集中地点I 墨書土器出土状況（北から）  
2. NR01 SX04馬鍬出土状況（南から） 3. 同（西から）  
4. 同 細部（西から） 5. 同 細部（東から）
- PL.118 62F区IV期 1. 水田検出状況（南から） 2. 同（南西から） 3. 同 全景（上空から）
- PL.119 0期・I期土器  
PL.124・125 III期土器  
PL.127・128 IV期陶磁器  
PL.130・131・132・133 墨書土器  
PL.136 III期瓦・陶錘  
PL.137・138・139・140 石製品  
PL.143 II-1期木製品  
PL.145 II-2期木製品  
PL.147 III-2期木製品
- PL.120・121・122・123 II期土器  
PL.126 III期土器・土製勾玉・陶製品  
PL.129 IV期陶磁器・瓦  
PL.134・135 III期瓦  
PL.137・138・139・140 石製品  
PL.141・142 I期木製品  
PL.144 II-1・2期木製品  
PL.146 III-1期木製品

# 例 言

1. 本書は、愛知県春日井市勝川町・長塚町に所在する勝川遺跡(『愛知県遺跡分布地図(1)尾張地区』による遺跡番号04126・04127)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、名古屋環状2号線(一般国道302号線)建設にともなう事前調査として、愛知県教育委員会を通じ、建設省および日本道路公団からの委託を受けて、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和62(1987)年4月から平成2(1990)年9月までである。
4. 調査に際しては、次の各機関の御指導・御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・建設省中部地方建設局愛知国道工事事務所・日本道路公団名古屋建設局・春日井市教育委員会
5. 発掘調査は、昭和62年度：森勇一(調査課主事)・樋上昇(同)・丹羽博(同嘱託員、現豊前市教育委員会職員)、昭和63年度：平田睦美(同主査、現松陰高校教諭)・服部信博(同主事)・野口哲也(同嘱託員、現愛知県清洲貝殻山資料館学芸員)、平成元年度：神谷友和(同主査、現安城北中学校教諭)・松原隆治(同主事)、平成2年度：真鍋雅治(同主査、現松陰高校教諭)・岡本直久(同嘱託員)が担当した。
6. 発掘調査にあたっては次の方々の御協力を得た。

伊藤隆彦・市川浩代・岡田智子・加藤とよ江・楯真美子・坪井裕司・永草康次・西沢英樹・水野弘子
7. 遺物の整理、製図などについては次の方々の御協力を得た。

坪井知江子・玉作美智子・中馬妙子・星野和子・本多恵子
8. 本書の執筆は、森勇一(調査課課長補佐)・松原隆治・赤塚次郎・石黒立人・服部信博・岡本直久・樋上昇(以上、調査研究員)・坪井知江子・五藤そのみ(以上、調査研究補助員)がおこない、編集は樋上が担当した。なお、執筆分担については目次および文末に執筆者名を記した。
9. 現地調査ならびに報告書作成については次の方々に御教示・御協力を得た。

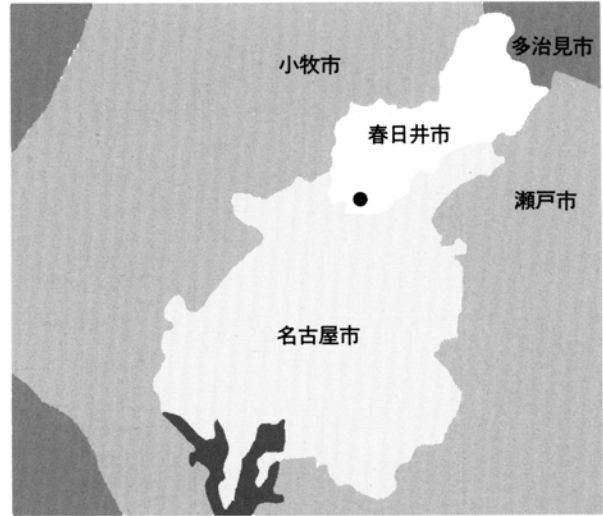
青木和夫・新井房夫・井関弘太郎・上原真人・内田律雄・海津正倫・大平仁夫・岡田篤正・岡村道雄・岡本茂史・加藤 優・金沢 至・金子裕之・河原純之・鬼頭 剛・粉川昭平・斎藤孝正・佐久間 豊・佐原 眞・鈴木敏則・檀原 徹・中井正幸・中村友博・檜崎彰一・橋本裕行・早川庄八・林部 均・春沢圭太郎・平川 南・平野吾郎・藤田三郎・水野正好・光谷拓実・宮田英嗣・宮武頼夫・宮原晋一・宮村典雄・向坂鋼二・森本桂・山内紀嗣・山口譲治・吉川周作・渡辺 誠(50音順、敬称略)
10. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標第Ⅶ座標系に準拠した。
11. 出土遺物および調査記録などの資料は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。



## 2 勝川遺跡の歴史的環境

勝川遺跡の地理的環境については、第IV章で詳しく述べるため、ここでは主として歴史的環境について触れることとする。

勝川遺跡のある春日井市は、愛知県の北西部に位置し、北は岐阜県多治見市、南は名古屋市、東は瀬戸市、西は小牧市に隣接している。遺跡は春日井市の南西端、ほぼ名古屋市と接するところに所在し、鳥居松段丘面の縁辺部とその



第1図 春日井市位置図

南の庄内川の沖積面上に立地する。標高は段丘上で約13m、段丘下の沖積面で約11mをはかる。

**周辺の遺跡** 周辺には、約4km北東の小牧段丘面の縁辺部に旧石器時代の梅ヶ坪遺跡があり、縄紋時代の遺跡には、東約2kmの沖積面に位置する松河戸遺跡(前期～弥生時代前期)、鳥居松段丘面の縁辺部に沿って東4.5kmに篠木遺跡(後期)がある。弥生時代には、勝川遺跡に東接する町田遺跡(中期～古墳時代前期)や、その北東に位置し、王子製紙工場建設に際し弥生土器が見つかった王子遺跡が出現する。古墳時代には、勝川遺跡南東山地区にある洲原山古墳をはじめとして勝川遺跡周辺に分布する勝川古墳群(5～6世紀)、西約1～1.5kmに位置する二子山古墳・白山神社古墳・春日山古墳などの味美古墳群(5～6世紀)、その南の白山藪古墳・長塚古墳・大塚古墳などが属する味鏡古墳群(6世紀)が築かれた。

歴史時代にはいと、飛鳥～奈良時代の寺院跡である勝川廃寺とその瓦を焼いていた高蔵寺瓦窯が築かれる。平安時代には、勝川遺跡付近から東の松河戸遺跡にかけての地域は安食庄と呼ばれ、醍醐寺領の荘園となっていた。現在もなお、付近には条里制地割の水田区画が遺存している。

近世には、京から江戸に向かう中山道の脇街道として、名古屋から小牧・犬山をへて伏見にいたる上街道と、名古屋から内津をへて大井にいたる下街道の分岐点にあたり、勝川の地は宿場として大いに栄え、戦前までは旧東春日井郡の中心地であった。(樋上 昇)



- |                |            |             |             |                 |
|----------------|------------|-------------|-------------|-----------------|
| 1. 勝川遺跡 (勝川廃寺) | 8. 東白塚古墳   | 15. 春日山古墳   | 22. 鳥居松 2号墳 | 29. 小幡城跡 (西城遺跡) |
| 2. 洲原山古墳       | 9. 兜塚古墳    | 16. 伊勢山古墳   | 23. 鳥居松 3号墳 | 30. 川東山古墳群      |
| 3. 勝川大塚古墳      | 10. 町田遺跡   | 17. ドンドン塚古墳 | 24. 八事神明社古墳 | 31. 天神藪古墳       |
| 4. 笹原古墳        | 11. 松河戸遺跡  | 18. 長塚古墳    | 25. 王子遺跡    | 32. 白山藪古墳       |
| 5. 山神古墳        | 12. 二子山古墳  | 19. 岩屋堂古墳   | 26. 牛牧離レ松遺跡 |                 |
| 6. 狐塚古墳        | 13. 白山神社古墳 | 20. 大塚古墳    | 27. 牛牧遺跡    |                 |
| 7. 森オシメンド古墳    | 14. 御旅所古墳  | 21. シギ塚古墳   | 28. 川村北・南城跡 |                 |
- 国土地理院発行1:25,000地形図  
名古屋北部を使用

第2図 勝川遺跡位置図 (1:25,000)

## II 遺 構

### 1 発掘調査区と時期区分

勝川遺跡は大きく3つの地区に分かれる。まず、鳥居松段丘西側を上屋敷地区、次いで段丘上東側を南東山地区、そして段丘下の沖積面を苗田地区とする。主な遺構としては、上屋敷地区には弥生～古墳時代の墓域と奈良時代の勝川廃寺、江戸時代の勝川宿がある。南東山地区には弥生～古墳時代の居住域と古墳があり、苗田地区には弥生時代の生産域と中近世の水田跡が展開している(第3図)。

**発掘調査区** 本報告書であつかう調査区は、上屋敷地区—89A・89B・90A・63D区、南東山地区—63B・89C区、苗田地区—62Fであり、以上の順序で記述をすすめていくこととする。

次に、遺構の時期区分についてのべる。勝川遺跡は、従来よりⅠ～Ⅳ期の4時期に分かれている。Ⅰ期：弥生時代中期、Ⅱ期：弥生時代後期～古墳時代、Ⅲ期：奈良～平安時代、Ⅳ期：江戸時代であるが、本報告書では、Ⅰ期以前の遺物が出土していること、Ⅱ・Ⅲ期がさらに細分化できること、Ⅲ期とⅣ期の間に属する水田遺構が検出されていることを踏まえて、次のように変更する。

**時期区分** 0期：弥生時代中期以前、Ⅰ期：弥生時代中期、Ⅱ期：弥生時代後期～古墳時代(Ⅱ-1期：弥生時代後期～古墳時代前期、Ⅱ-2期：古墳時代後期)、Ⅲ期：古代(Ⅲ-1期：飛鳥～奈良時代、Ⅲ-2期：平安時代)、Ⅳ期：中近世(Ⅳ-1期：鎌倉～室町時代、Ⅳ-2期：江戸～明治時代)とする。なお、0期については明確な遺構はみつかっていない。



第3図 勝川遺跡発掘調査区 (1:5,000)

## 2 上屋敷地区

### (1) 基本層序

上屋敷地区の基本層序について、簡単にのべておく。層位は上から、現代の上部整地層で、厚さ0.3~0.4mの礫混合土。次に、明治期以降の下部整地層が約0.5mの厚さで堆積しており、その下が赤褐色粘質土(厚さ0.2~0.3m)、黄色砂質土(厚さ0.1~0.2m)、洪積世砂礫層(鳥居松層)で、赤褐色粘質土層以下は地山である。遺構検出はおおむね、この赤褐色粘質土の上面でおこなった。ただし、赤褐色粘質土層・黄色砂質土層が削られていたため、洪積世砂礫層の上面で検出をおこなった地区もある。

### (2) 89A区(PL. 3)

57J区の南で、57K区に西接している。

調査区南東隅付近でII-1期に属する方形周溝墓の周溝の一部を検出した。長さ4.5m、**方形周溝墓**幅2.3m、深さ0.4mで、断面は逆台形を呈する。57K区で検出したSZ18の西周溝部分にあたる。

そのほかにめだった遺構としてはIV期の大規模な廃棄土坑SX01がある。規模は長さ7 **廃棄土坑**m、幅5m、深さ1.7mで、埋土は褐色~黄褐色粘質土が細かく層をなして堆積している。なかから、コンテナに約200箱の遺物が出土した。そのうち、3分の2は19世紀代のものであるが、残りの3分の1はIII期の勝川廃寺にともなう布目瓦で、軒丸瓦59点、軒平瓦63点が見つかった。IV期の整地に際して廃棄されたものと思われる。

### (3) 89B区(PL. 4)

90A区の北側に位置する、20m×3mの細長い発掘区である。

調査区の中央やや東よりで、南北方向の溝SD01を約2.5mにわたって検出した。幅2m、深さ0.5mである。溝底からIII期の布目瓦が二次堆積ながら列をなして出土した。この溝は60A区で検出されたSD134の南延長部分にあたり、勝川廃寺主要伽藍の西側を区画するも **区画溝**のと推定されている。89B区南側の90A区ではこの溝の南延長部分がちょうど攪乱によって破壊されており、どこまで続くのかは不明である。

SD02の東側でIV期に属する廃棄土坑SK01を検出した。この土坑は幅約4m、深さ約0.4mの規模で、埋土中からは江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器の良好な一括資料が出土した。位置的には下街道から若干離れており、下街道沿いの家屋の裏庭に掘削されたものと考えられる。そのほか、IV期に属すると思われる溝や土坑をいくつか検出しているが、特にめだった遺物は出土していない。(樋上 昇)

(4) 90A区(PL. 4)

本調査区は愛知県教育サービスセンターが昭和57年度に調査したA・F・K区に囲まれている。もともと民家跡地であったため攪乱が激しく、遺構検出面の残存状態はきわめて悪い。

a. I・II期 調査区全体が墓域の範囲におさまり、方形周溝墓6基を検出した。これらは方形周溝墓 周溝を検出したのみで、マウンド部は地山まで完全に削られ、主体部も残っていない。SZ01 調査区北西隅に位置する。周溝は南溝～東溝のみ検出し、その続きは調査区外に出る。南溝と東溝との間に陸橋をもたない。溝の掘形は比較的ゆるやかな「V」字状で、幅2.0m、深さ0.7mを測る。周溝墓の規模はわからない。

SZ02 調査区東隅に位置する。周溝は西溝の端が調査区外になるものの、ほぼ全容を把握できる。陸橋は北西・南西・南東部についてはもっていない。北東部は攪乱され、はっきりとつかめない。溝の最大幅は2.0m(北溝中央部)で、コーナーは1m前後まで狭まり、掘形はゆるやかな「U」字状である。深さは0.45mと浅い。周溝墓の形状はほぼ正方形で、一辺6.8mである。軸方向はN-5°-W。

SZ03・04 この2基は重複して築かれている(第4図)。周溝は西溝の南端及び南溝の大部分を攪乱により失っている。SZ04は四隅に陸橋をもつタイプで、現状での溝の幅は1.2m、深さ0.5mの箱堀である。周溝墓の形状は一辺5.5mの正方形で、軸方向はN-15°-E。SZ03は北溝・東溝・南溝をそれぞれSZ04のそれらと重複させており、西溝のみSZ04西溝の外に掘っている。そしてこれと北溝とを掘りつなげて陸橋を消している。西溝と南溝との関係は攪乱により確認できない。幅は北溝で1.3m、西溝で1.5mを測る。深さは0.3mと浅い。周溝墓の形状は長方形で、東西7.4m、南北5.7m、軸方向はSZ04と同じ。SZ03はSZ04周溝が埋没する過程でそのくぼみを利用し、再掘削したもので、『四隅の切れるタイプ→「コ」の字あるいは「L」字タイプ』という時期変化を捉える良好な資料である。

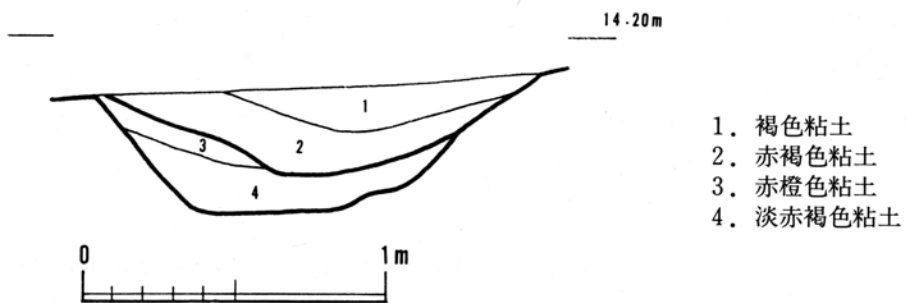
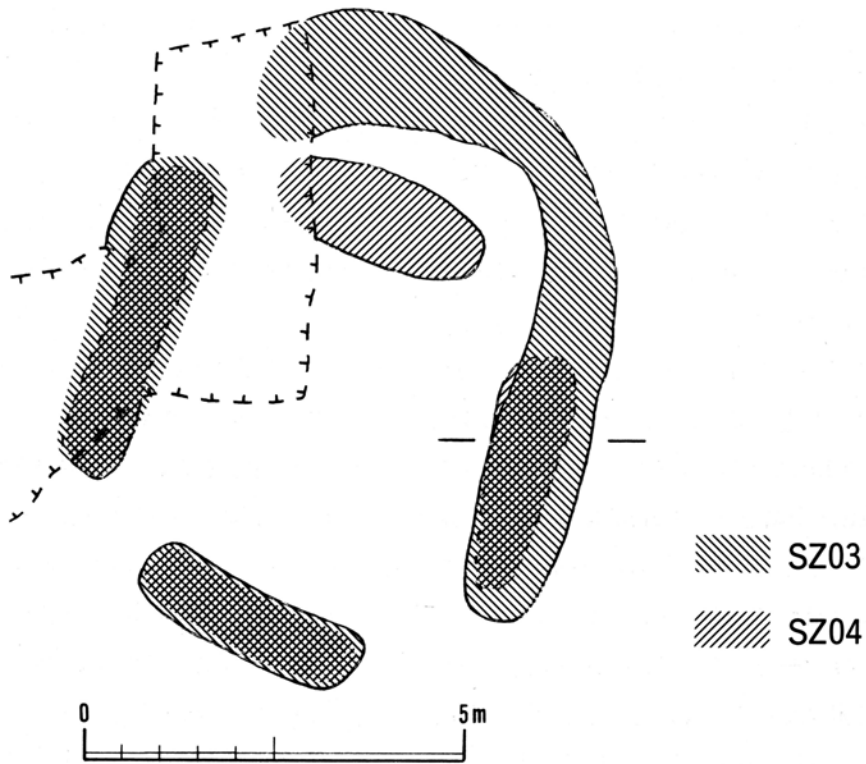
SZ05 攪乱により北溝すべて、西溝の北半分、東溝のほとんどを欠損する。西溝と南溝の境に陸橋を持つ。幅0.9m、深さ0.3m、周溝墓の規模は東西3.7mと小さい。軸方向はN-20°-E。

SZ06 SX01(後述)により上部を削られ、周溝底のみ残存する。北東隅のみ陸橋を持つ。周溝墓の形状は長方形で、東西3.7m、南北4.3mと小型。軸方向真北。

方形周溝墓の規模がわかるSZ02～06を概観すると、すべて7mにも満たない小型墓である。また、これまでの調査によると、本調査区以東に方形周溝墓はほとんど存在せず、本調査区が墓域の東限とみてよいだろう。

b. III期 「勝川廃寺」に関係する遺構を中心とする。本調査区は伽藍を区画する西大溝の推定ラインに含まれており、調査においても北壁でその痕跡を見いだせたものの、攪乱により面的には捉えられなかった。推定ラインの調査区南端は攪乱されていなかったが、溝が検出されないため、西大溝は調査区内で収束すると思われる。

SX01 東西8.7m、南北6.4mの平面不定形の落ち込みである。深さ0.6mと浅くなだらかに落ちる。下層には遺物はほとんど含まれず、炭化物層を間層として上層には瓦・須恵器等を廃棄している。このことから、SX01は単に廃棄用として掘られたのではなく、池のような性格のものであったこともみられる。  
(岡本直久)



第4図 SZ03、04平面図(1:100)及び断面図(1:25)

(5) 63D区

概要 63D区は、昭和57・58年度に調査されたG・L区に接しており、推定「勝川廃寺」の西縁中央部付近に位置する。調査区の一部を除き、江戸時代後期以降の整地土層が厚く堆積しているため、発掘調査は弥生時代後期(II期)から奈良時代(III期)、及び江戸時代後期(IV期)の二面調査となった。

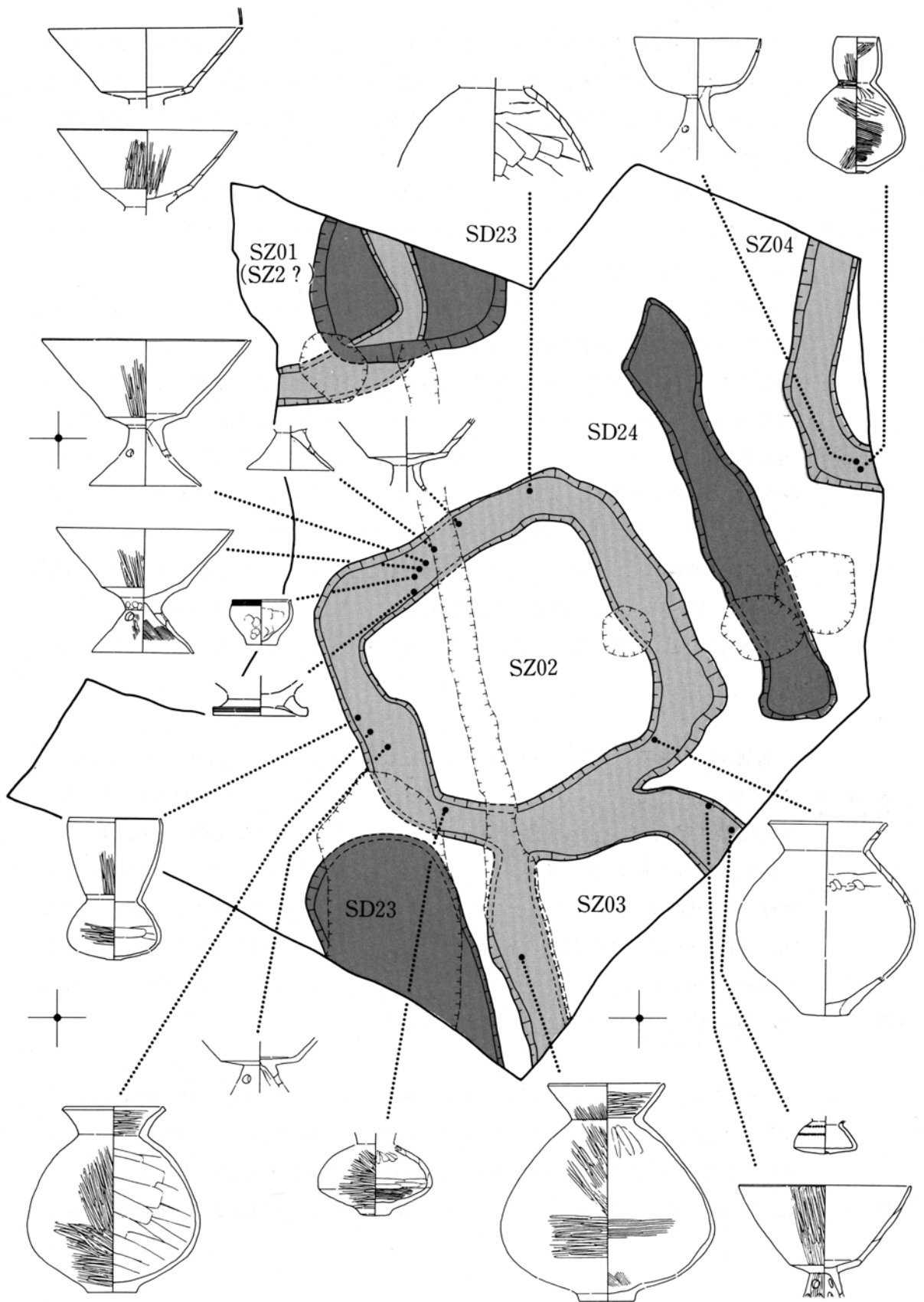
方形周溝墓 a. II期(第5図) II期における調査区周辺の状況は、従来の成果より南東山地区の居住域に対する墓域に相当し、現在までに数多くの方形周溝墓が確認されている。それらの有様は概ね一定の方位を持った整然とした墓づくりがなされており、63D区の調査においても、N-20°-Wの主軸方向を有する方形周溝墓を4基検出している。いずれも墳丘は削平されており、わずかに周溝部分を調査できたにすぎない。

SZ22は、遺構の大半がすでに昭和57・58年度に調査されたG区で確認されており、今時調査では南東隅コーナー部を検出したにすぎない。以前の調査成果とあわせると、8.2×7.4mの規模を有し、北側周溝をSZ21と共有する。廻間I式3段階。SZ02は、8.7×8.7mの規模を有し、溝幅1.5~2.4m、深さ0.4~1.0mを測る。平面形態は周溝が全周するタイプであり、南溝はSZ03と共有する。埋土は大きく2層に分かれ、上層には暗褐色粘質土、下層には暗赤褐色粘質土が堆積する。周溝最下層より廻間I式4段階を中心とする良好な遺物が出土した。SZ03とSZ04は遺構の大部分を調査区外に置き、全形は判然としない。

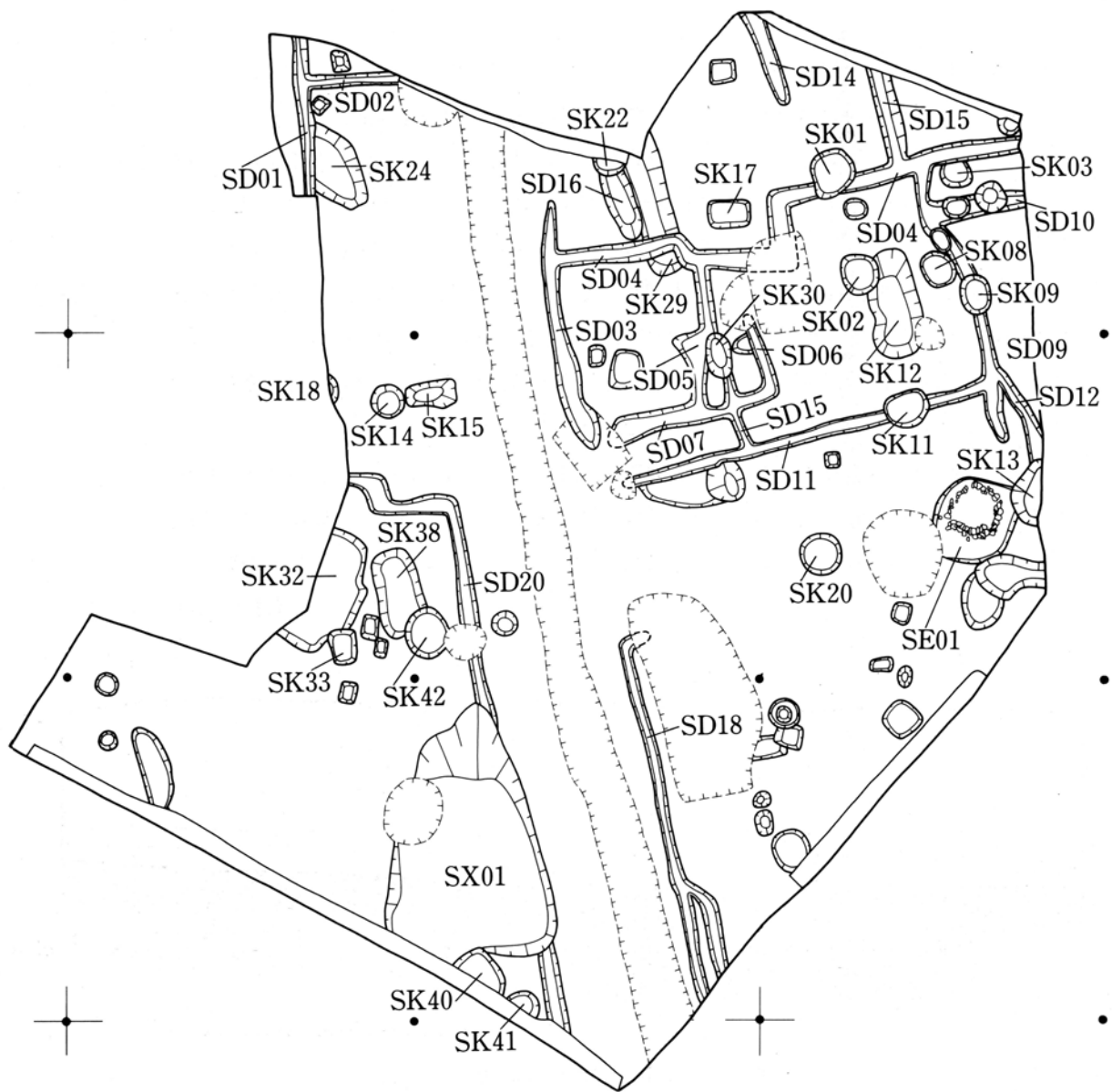
SZ03からは、廻間I式4段階、SZ02からは廻間II式前半期に属する土器が若干出土している。

寺域を画する溝 b. III期(第5・6図) III期の遺構としては、南北方向に走る溝2条を検出している。SD23は幅5.0~6.8m、深さ0.5mを測る。遺物の出土はみられなかったが、検出地点、埋土の堆積状況(第6図)など、従来の成果とあわせると、「勝川廃寺」の寺域を画する西大溝と考えられる。注目すべきは、調査区内において大溝が15mにわたり途切れている点である。調査地点が西大溝のほぼ中間にあたる位置であること、布目瓦・須恵器が出土したSD24(溝幅2.5m、深さ0.3m)が大溝の途切れた間隔を埋める形で存在して、建物に伴う雨落溝的な施設の可能性も考えられることにより、礎石等は検出されなかったが、この大溝が途切れた地西門 点に「勝川廃寺」の西門を推定することができよう。

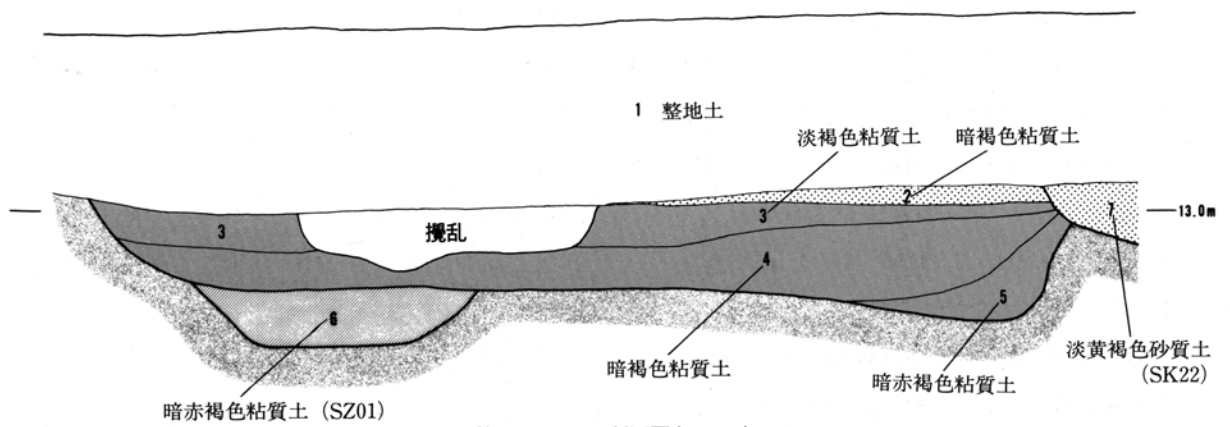
c. IV期(第6図) IV期の遺構は調査区のほぼ全域で確認された。検出し得た遺構には、溝・井戸・土坑等がある。とりわけ溝は、東西・南北方向に縦横に走り、企画性を持った空間をつくりだしている。石組の井戸(SE01)、多量の陶磁器が廃棄された状態で出土した土坑(勝川宿 SK40・41・42)等の存在から、江戸時代幕末期の「勝川宿」の一端を表示する遺構群といえる。(服部信博)



第5图 63D区II·III期遗构图(1:200)



63D区 IV期遺構図(1:200)



第6図 SD23断面図(1:40)

### 3 南東山地区

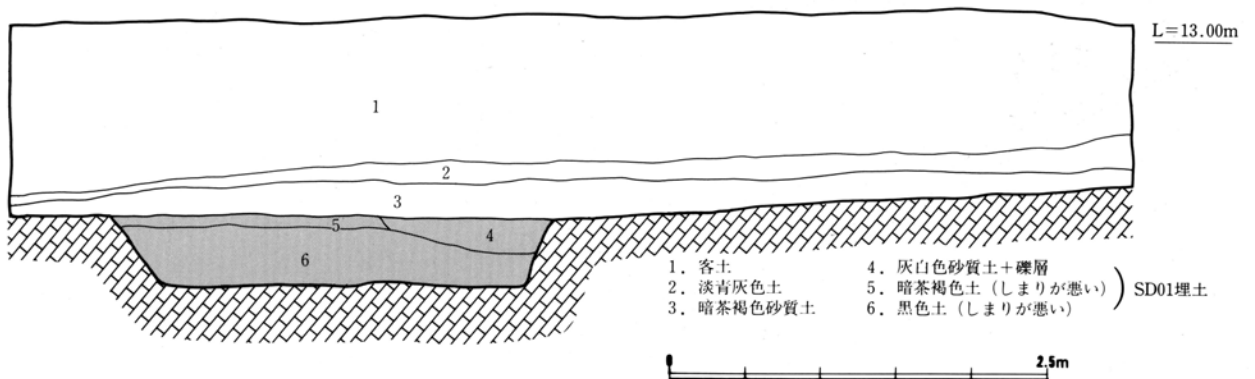
#### (1) 63B区(PL. 5)

苗田地区62F区の北西部の一角に接しており、鳥居松段丘面の縁辺部に位置している。63B区からはI期の遺構として、調査区を東西方向に約13mにわたってのびる溝が一条検出されている(SD01)。幅1.6m、深さ0.4mで、断面は逆台形を呈する(第7図)。埋土はしまりの悪い黒色土で、溝の下層や底面から高蔵期に属する弥生土器が数点出土した。

溝は鳥居松段丘の縁辺にほぼ沿って掘削されていることから居住域をめぐる環濠の可能性が高い。ただ、63B区に西接する89C区ではこの溝の延長部分が検出されていないことや、62J区で見つかっている溝(SD22)との関連など、調査面積が限られているためにまだまだ不明な点が多く、現時点で環濠と断定することはできない。

この溝のほかには調査区東側で土坑が数基検出されたが、時期を特定し得るような出土遺物はみられなかった。また、段丘下の調査区南壁付近の堆積土中より縄紋時代早期の押型紋土器の破片が1点出土しているが、調査区内ではこの時期に属する遺構はみつからない。

(樋上 昇)



第7図 63B区西壁断面図(1:50)

#### (2) 89C区(PL. 6)

89C区は57I区の北で63C区の西にあたり、鳥居松段丘の縁辺部に位置している。検出された遺構は竪穴住居と溝、土坑がある。竪穴住居は24棟が複雑に重複してつくられている(第8図)。築造時期はII-1期からIII-2期におよぶ。うち、床面あるいは埋土中から遺物が出土しているものは6棟ある。まずは時期の判明している住居から説明をくわえる。

II-1期に属する竪穴住居にはSB07・08がある。SB07の規模は5×3.7mで、SB04に切られる。SB08は4.6×4.5mで、SB16が重複している。このほか、SB03・04・06・14・15・17もII-1期に属するものと思われる。

II-2期に属することが判明している竪穴住居はSB09のみである。規模は6×4.3mで、段丘崖に接しており、南辺部は残っていない。段丘崖に平行してのびる溝(SD04)に切られ

ている。

Ⅲ-1期の竪穴住居にはSB16がある。規模は4.4×3.9m。SB08の上に築かれている。

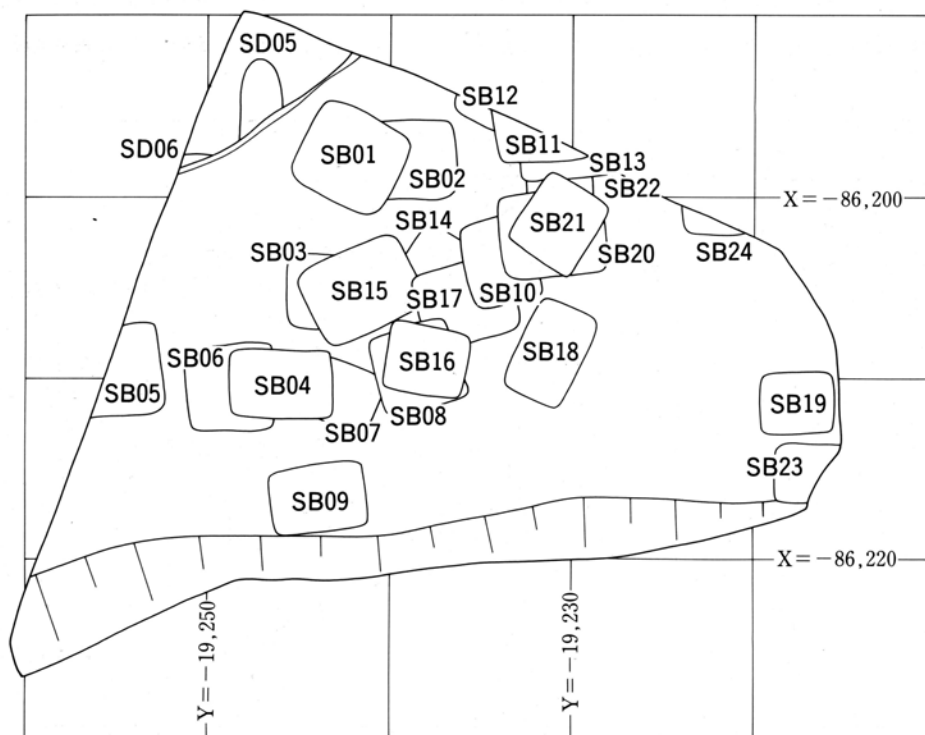
Ⅲ-2期に属する竪穴住居はSB19・21である。SB19の規模は4.1×3.5mで、SD04・20に切られている。SB21の規模は4.1×3.2mで、SB20と重複している。そのほか、SB11・18もⅢ期に属すると思われる。それ以外の時期の判明しない竪穴住居の規模については巻末の付表にまとめる。

このほかに重要な遺構としては、SD05・06がある。調査区の北西隅付近で、東西・南北に「L」字に折れ曲がる溝である。屈曲部分は攪乱および後世の溝によって破壊されているが、本来はひとつながりのものであったと思われる。時期は黒笹90号窯式期の灰釉陶器が出土していることからⅡ-2期に属する。勝川廃寺となんらかのかかわりをもつ可能性がある。また、竪穴住居がほとんど検出されていない調査区東半分でも数多くの柱穴があることから、この部分にも竪穴住居あるいは掘立柱建物が数棟存在していた可能性が高い。

Ⅱ-1・2期の竪穴住居に関しては62F区にも同時期の遺構が存在し、数多くの遺物が出土していることから、この時期の勝川遺跡の居住域にあたとみてよい。

Ⅲ-1期から2期前半はまさに勝川廃寺の存続時期であり、これら寺域外の竪穴住居群は勝川廃寺を底辺で支えた人々の集落、あるいは62F区で出土した人形・墨書土器をもちいた人々の居住地であったのかもしれない。

(樋上 昇)



第8図 89C区 遺構配置図(1:400)

## 4 苗田地区

62F区(PL. 7~13)

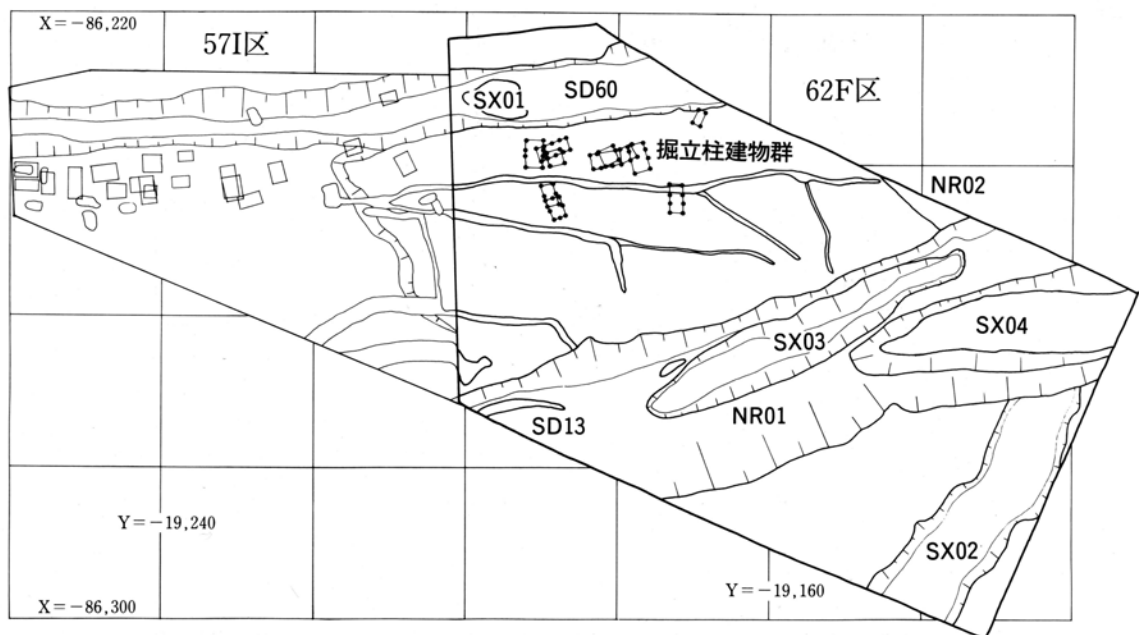
a. 概要(第9図) 62F区は鳥居松段丘下の沖積面に位置し、愛知県教育サービスセンターが調査した57I区に東接している。調査区のほぼ中央部を河川改修以前の旧地蔵川(NR01)が東から西へむかって流れている。

遺構の時期は、I期からIV期までの各時期にわたっている。I期の遺構としては段丘直下を東から西へ流れる溝(SD60)と、その溝のなかに掘られた木器未製品の貯蔵土坑(SX01)、溝と旧地蔵川のあいだに展開する掘立柱建物群、旧地蔵川内の溝(SD13)などがある。

II期は2時期にわかれる。II-1期の遺構には旧地蔵川から北側と南側に分流する二条の自然流路(NR02・SX02)があり、それぞれの流路から木製品が数多く出土している。II-2期には旧地蔵川内に溝(SX03)が掘削され、そのなかからやはり多くの木製品や土器が出土した。

III期も2時期にわかれる。III-1期にはII-2期と同様に、旧地蔵川内に溝(SX04)が掘られ、そのなかから人形が3点、舟形が1点、墨書のあるものを含む須恵器数十点が出土した。旧地蔵川内のIII-1期の溝のやや下流から、III-2期に属する人形4点、曲物数点と墨書されたものを含む一千点を超える灰釉陶器が出土した。これらの遺物は祓などの律令祭祀にもちいたものと考えられる。

また、これらの遺構が形成される以前のI期の基盤層中や旧地蔵川埋土の最下層より縄紋土器が数点出土している。さらに、第2節で後述するようにI期の遺構面から縄紋時代



第9図 62F区I~III期遺構配置図(1:1000)

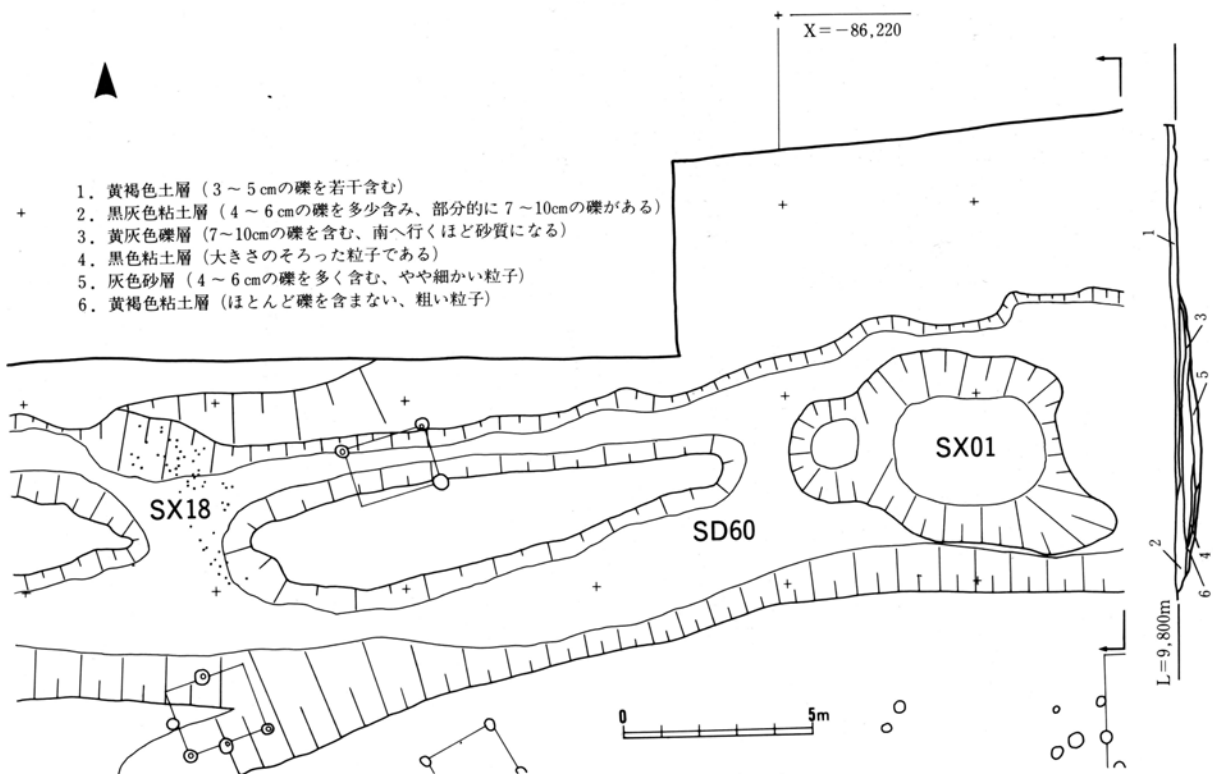
に属する石器も多く出土している。

b. I期 木製品の加工施設を中心とする遺構と掘立柱建物群がある。個々の遺構について記述していく。

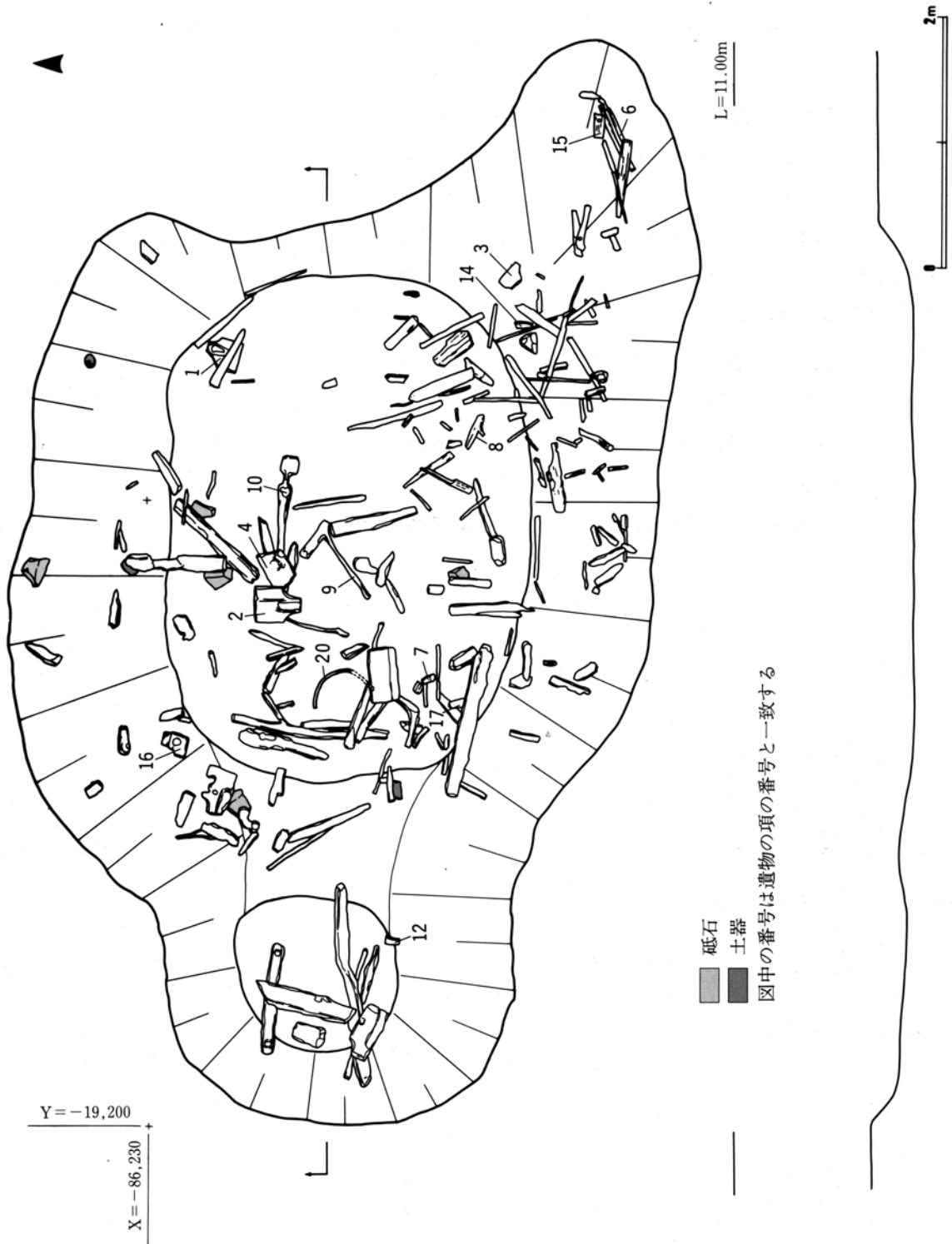
SD60(第10図) 鳥居松段丘下で段丘にそって掘削された溝で、東から西にむかって流れている。62F区では約40mにわたって検出され、西接する57I区も含めれば、全長約90mにおよぶ。幅約10m、深さ約0.5mで、ゆるやかな皿状の断面を呈する。埋土は有機質を多く含む黒色粘土で、上層は礫混じりの黄褐色～茶褐色土で覆われている。埋土の状況や出土土器などから、高蔵期の洪水により埋没したと考えられる。出土遺物としては、土器以外に木製品や石製品が多く出土している。

SX01(第11図) SD60内に掘られた土坑。規模は東西約8m、南北約5m、深さは溝底から約0.5mで、東西方向にむくややいびつな洋梨形を呈する。なかからは木屑・種子・昆虫などの自然遺物とともに約40点の木製品、10点を超える石製品などが出土した。木製品には広鋏や膝柄股鋏、組合せ鋏、縦斧や横斧の柄などがあり、その多くは加工途中の未製品で、ミカン割り状態の板材やこれら未製品の加工にもちいたと思われる横斧の柄も出土している。また、石製品はSD60も含めれば百点を超える数にのぼり、太型蛤刃・挟入柱状片刃・偏平片刃といった石斧類や石ノミ、砥石など、木製品の加工とかかわりをもつものが多い。

SD60・SX01の性格については、すでに『年報 昭和62年度』などで述べてきたように木



器未製品の貯蔵施設と考えている。第10図に示したようにSX01の12mほど下流にはSD60に直交し、長さ約5m、幅約2mにわたって杭(SX18)が密集して打ち込まれている部分が杭列ある。これにシガラミ等をからませることにより、水流をゆるやかにして、水位を一定に保ち、貯蔵した木製品の流失を防ぐなどの機能を有していたと考えている。この杭列と有



第11図 SX01 木製品出土状態図(1:50)

機的な関連をもってSX01は木器未製品の貯蔵機能を果たしていたのであろう。

このような木製品の貯蔵施設については、島根県の西川津遺跡をはじめとして、奈良県唐古・鍵遺跡、兵庫県戎町遺跡など、全国的にも多くの類例をあげることができる。木製品の水漬けの意義については、生木に含まれた樹脂を浸透圧の作用で水に置き換えることにより、ひずみやひび割れを防いで木材を乾燥させるという説と、水に漬けることによりカシなどの硬い樹木の表面をやわらかくして加工しやすくするという2つ考え方がある。ここでは双方の説とも蓋然性が高いものとしておく。

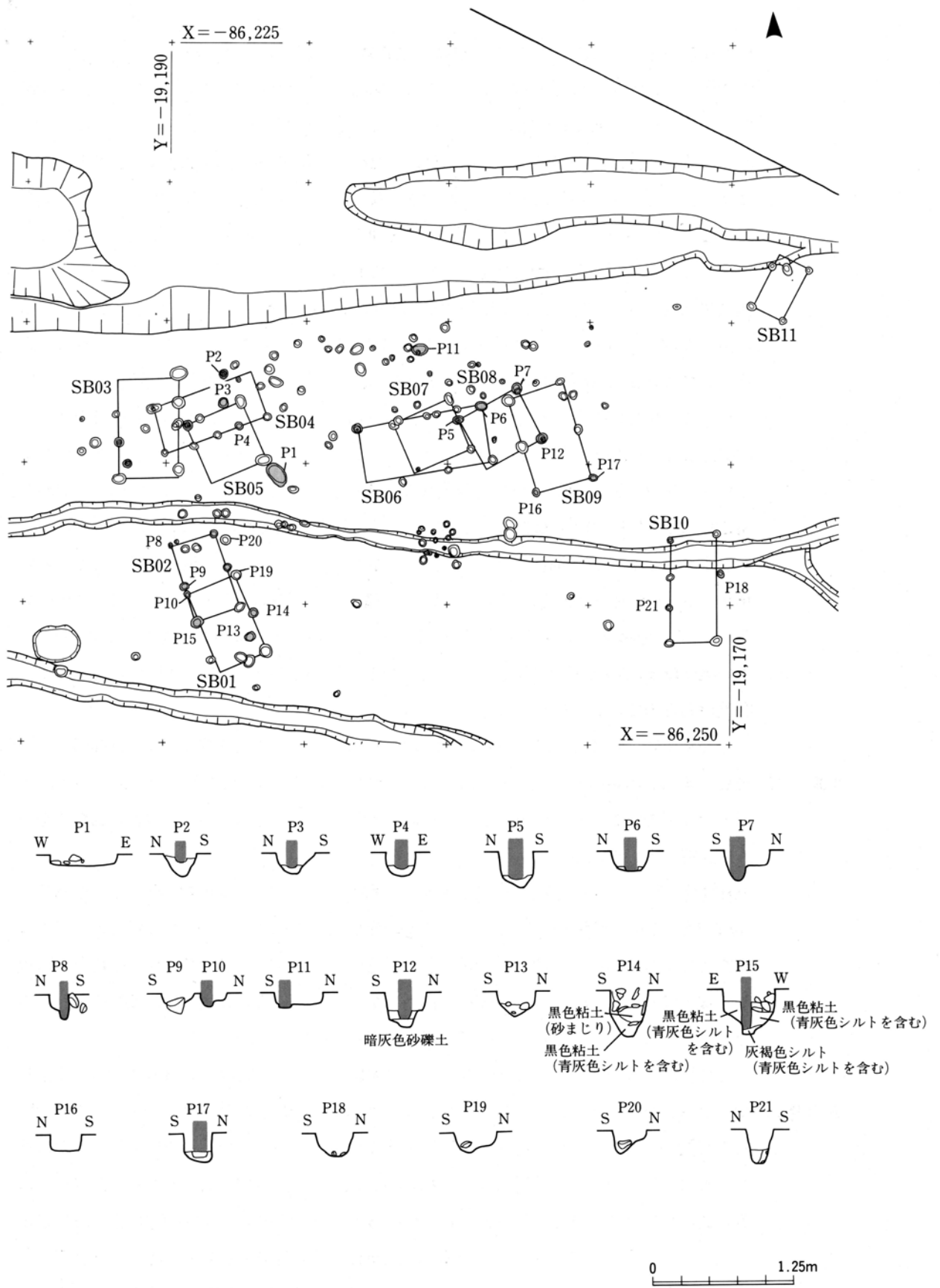
**掘立柱建物群(第12図)** 57I区ではすでに19棟の掘立柱建物がみつかったおり、若干密度は希薄となるが、本調査区(62F区)においても11棟の掘立柱建物を検出した。このほかにも建物としてまとまらない柱穴が多数あることから、実際にはさらに多くの建物があったことがわかる。建物の規模は1×1間—4棟、2×1間—3棟、3×1間—4棟で、57I区とはほぼ共通する。建物の方位・重複関係などから、4ないし5回の建て替えがおこなわれたようだが、個々の建物の同時期性を認定することははなはだ困難である。ただし、SB03とSB10、SB06とSB09などは方位・柱通りが揃うことから同時期に建てられたものと認定できよう。やはり、57I区同様、4棟1組で南に空間をもつコの字形の建物配置をとるものと思われる。柱の掘形は直径0.15m～0.45mの不整形円形、深さは0.2～0.4mほどで、埋土は黒色粘土。柱の根固めのため多くの礫が充填されている。なかには柱痕跡をもつものがあり、柱の径はほぼ0.1m前後である。なお、建物の桁行・梁間寸法や柱間寸法については付表に記載があるのでここでは述べない。

その機能については、すでに愛知県教育サービスセンターによる報告書の考察において、**作業小屋** 丹羽 博氏が木製品の製作・加工にかかわる作業小屋であろうとの見解を述べている。今回の調査区でもこの説に矛盾する遺構・遺物等はみられないため、57I区の調査成果を全面的に支持しておきたい。

**SD13(第13図)** 調査区西端付近で、NR01の北肩にそって一条の溝を検出した。全長約10m、幅約1m、深さ約0.5mで、断面は逆台形を呈しており、ゆるやかに弧をえがきつつ調査区外にのびている。埋土は、最下層が灰色粘土、上層は礫を含む黒色～茶褐色の砂層である。溝内からは組合せ式の横斧の柄のほか、丁寧に加工をほどこした板材や角材が出土しており、ところどころに杭が打ち込まれていた。

この溝の機能を特定するのは困難だが、調査区南西方向で地蔵川北岸の沖積面に弥生時代の水田が展開していたことが想定できるため、地蔵川から未検出の水田への**導水施設** 導水施設である可能性が高い。また、直接的な根拠とはなり得ないが、この付近で出土したIII期に属する墨書土器のなかに「井手」と記されたものが2点ある。「井手」とはすなわち河川からの導水施設の呼称であり、地形的に制約をうけるであろうこのような「井手」が弥生時代以来古代にいたるまで、ほぼ同位置に継続して築かれてきた可能性も十分に考えられよう。

**その他の遺構** このほかのI期に属する遺構としては、57I区のSK51から東へのびる2条の溝(SD14・19)や、SD61の東延長部分を検出した。このSD61は62F区の西端付近で終結し



第12図 掘立柱建物群検出状態図(1:200)(上) および柱穴断面図(下)

ている。その他の溝は、さらに東にわかってのびつつ、途中で終結しているが、本来はNR01につながっていた可能性が高い。いずれも東から西にむかって流れている。その他、いくつかの土坑はあるが、めだった遺物の出土はなく、特記すべき事項もない。

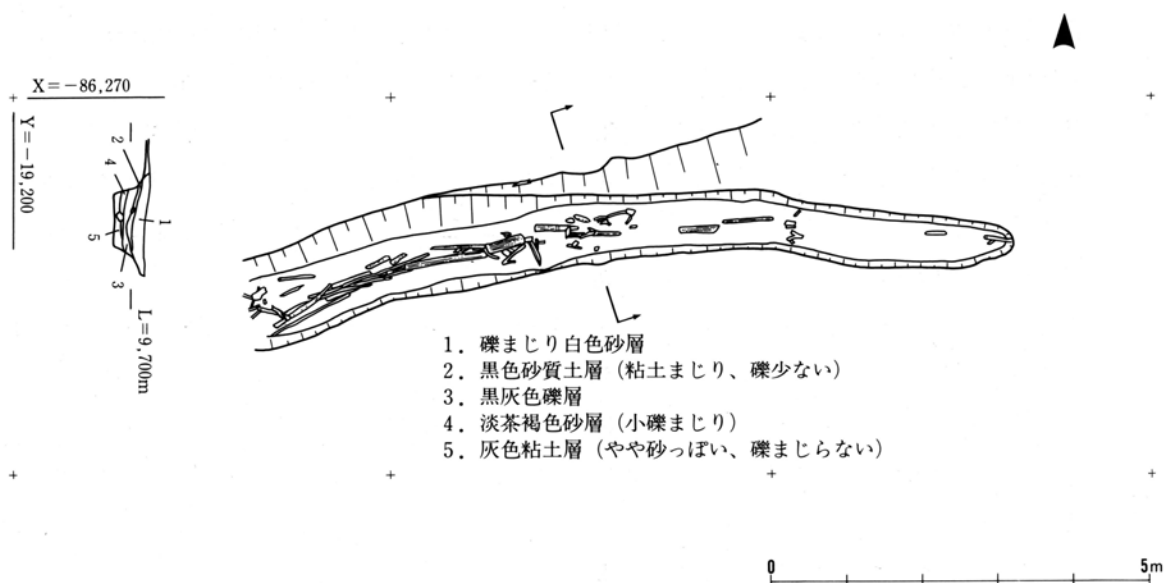
c. II・III期 II・III期の遺構はNR01より分流する2条の自然流路と、NR01内に掘削された溝がある。NR01内の遺構についてはII・III期まとめて述べることにし、まず、II-1期に属する自然流路について記述する。

NR02 NR01より北に分流する自然流路。調査区内では南肩のみ、約17mにわたって検出している。南東より北西にむかって流れており、NR01との分岐点付近で山中期の土器や木製品が多く出土している(遺物集中地点IV)。

SX02 NR01より南に分流する自然流路。幅約10m、深さ約0.2mで、南西から北西にかけて約38m分検出した。山中期の土器が出土している。

SD08 SX02のほぼ中央で、南北方向の溝を一条検出した。幅約1m、深さ約0.1mで、全長約23mである。SD08の中央やや北よりから一木鋤が1点出土した。検出時にはすでにかなり風化しており、取り上げ後の実測図を作成することができない状況であるため、縮尺10分の1の出土状態図を実測図に代わるものとして第13図に掲載して若干の説明をくわえておく。全長96.4cm、身部は長さ31.0cmで、幅は16.2cm。左側縁がやや欠損している。柄部は長さ35.4cm、径は最も太いところで3.8cmある。把手は逆三角形を呈し、握部をくり抜く。右側の一辺を欠損している。

次にNR01内の遺構について述べる。現在の地蔵川は調査区の東側を北東から南東にむ



第13図 SD13遺物出土状態図(1:40)

かって流れているが、本来の流路は調査区中央を東西に横切り、そこから大きく南に屈曲し、さらに屈曲しつつ南西にむかっていた。本調査区では約90mにわたって検出した。II・III期に属する遺構は、幅約20mにおよぶNR01(旧地藏川)のほぼ北半部分にあり、南半部は近世以降の流路となっている。

NR01内には先述のSD13のほかに2条の大きな溝(SX03・04)がある。まずはじめに遺構について述べ、遺物の出土状況については後ほど触れることにしたい。

SX03 NR01の北岸に接して47mにわたって掘削されている。幅は最も広いところで約8.5m、深さは約7mである。方向は東でやや北に振れ、中央部で若干S字状に屈曲する。掘削時期は5世紀末頃で、II-1期にあたる。

SX04 SX03の南側に位置しており、調査区内では約30mにわたって検出した。西端はNR01の中央やや東よりにあたり、東側は調査区外までのびている。溝の北肩は完存しているが、南肩は中世以降の流路によって破壊されている。方向はNR01にほぼ平行しているが、調査区東端付近で若干北側に屈曲している。埋土中から出土する遺物の時期は8世紀後半が中心で、III-1期に属する。

d. NR01内遺物出土状況 NR01からは弥生時代後期から鎌倉時代にかけての土器・陶磁器と共に大量の木製品が出土している。これらの出土状況は次のとおりである。

まず、NR01内を第15・16図にしたがって西からA・B・C・Dの4つの地区にわけ、次に遺物の出土状況を時期を追って説明する。

II-1期 D地区、NR02との分岐点に山中式新段階から廻間I式期前半に属する土器と共に、広鋏・膝柄鋏・膝柄股鋏・鋏膝柄・泥除け・一木鋏・竪杵など大量の木製品が投棄される(遺物集中地点IV)。おおむね使用痕跡をとどめる破損品であるが、二連の広鋏や斧膝柄などの未製品も若干含まれる。めだった遺構はないが、灰白色～黒褐色砂礫層がC地区からD地区にかけて堆積しており、SX03・04はこの砂礫層を掘削して形成されている。

遺物集中  
地点IV

II-2期 BからD地区にかけてSX03が掘削されている。5世紀末～6世紀前半頃の土器と共に、広鋏未製品・狭鋏・ナスビ形膝柄鋏・鋏膝柄・楯・機織具・建築材など多種多様な木製品が出土している。土器の出土層位はSX03下層の黒褐色粘土層と砂礫層で、平安時代の堆積層が深くまで達しているB地区の遺物集中地点IIを除くSX03ほぼ全域にわたっているが、木製品・土器が特に集中しているのはC地区の遺物集中地点IIIである。先に述べた多様な木製品のほか、東山11号窯式期から下原2号窯式期の須恵器、宇田型甕などが一括して出土した。これらの遺物はNR01の南側にかつて所在したとされる勝川大塚古墳になんらかのかかわりをもつ資料である可能性が高い。SX03そのものも勝川大塚古墳との関

遺物集中  
地点III

勝川大塚

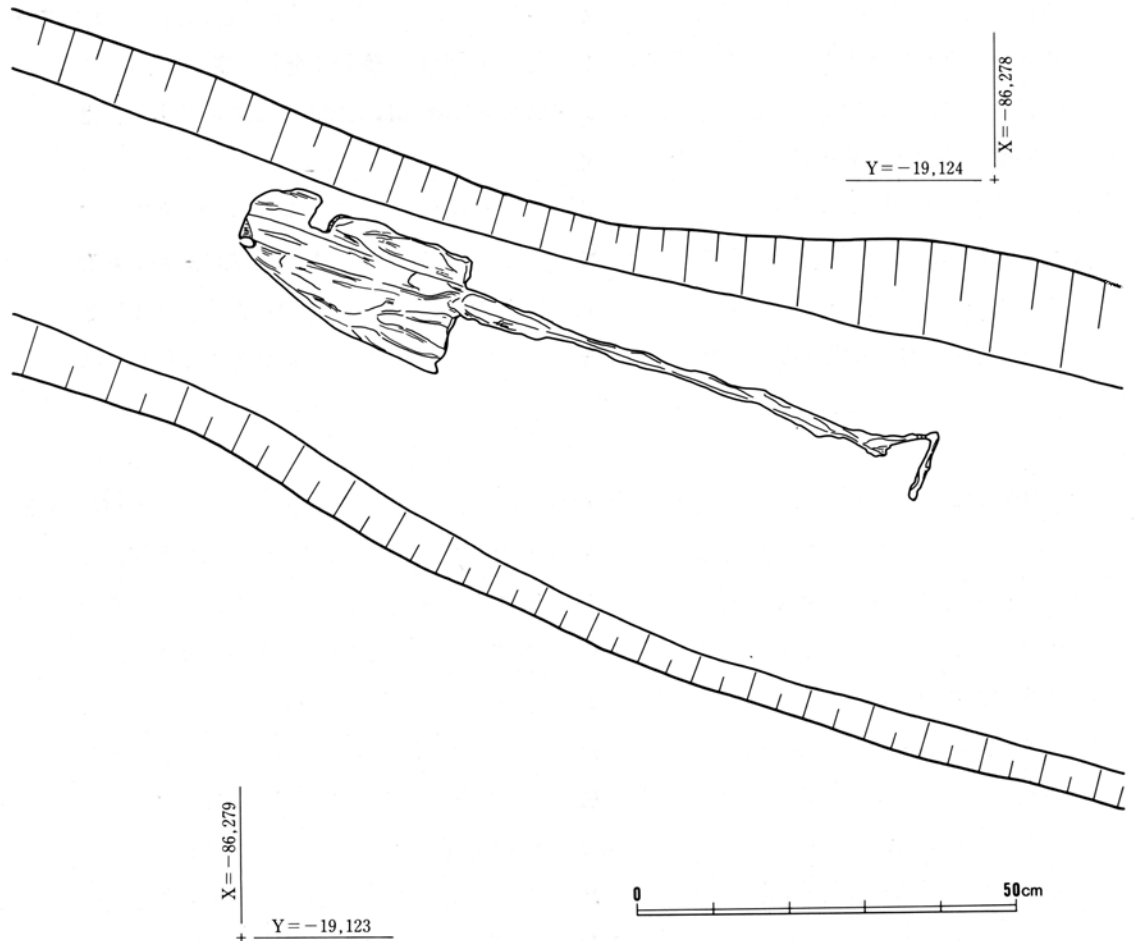
III-1期 C・D地区のSX04から、高蔵寺2～井ヶ谷78号窯式期の須恵器と共に、人形3点・舟形1点といった祭祀具のほか曲物・馬鋏などの木製品が出土している。土器は主として折戸10～井ヶ谷78号窯式期に属する供膳形態の須恵器が多く、土師器の甕などの煮炊

具はきわめて少ない。また、須恵器のなかには墨書をもつものが4点あり、人形などと共  
 人 形 に律令祭祀にもちいられた可能性が高い。人形のうちの1点は顔を墨描きで表現し、胸部  
 に×状の緊縛痕を有する。1点は顔を綿刻で表現し、頭部に切れ込みをもつ荷札木筒状の  
 形態をとっている。かなりの厚みをもつため、おそらく未使用の荷札木筒を転用して人形  
 としたのであろう。もう1点は頭部のみの破片である。そのほか、A・B地区遺物集中地点  
 Iからもこの時期の須恵器が多く出土している。

III-2期 A地区とB地区のSX03上層からゆうに一千点を超える量の黒笹14~百代寺窯式  
 期の灰釉陶器と共に、木筒1点・人形4点・曲物7点などの木製品が出土している。なお、  
 灰釉陶器の器種はほとんど碗・皿に限られ、他の器種や土師器の煮炊具などはきわめて少  
 ない。

黒笹14号窯式期の灰釉陶器は、A・B地区の遺物集中地点I・IIからごく少量ではあるが  
 墨書土器 出土している。めだった共伴遺物は無く、地点Iの墨書土器「卍」はこの時期に属すると考  
 えられるが、あるいはK-90窯式期に含まれるのかもしれない。

黒笹90号窯式期には墨書陶器24点を含む数百点もの大量の灰釉陶器がA・B地区の地点



第14図 SD08—木鋤出土状態図 (1:10)

I・IIから出土している。地点I西半部では、「寺」・「別院」・「宅北」など、勝川廃寺との関連をうかがわせる内容のものや、NR01からの分水施設の存在に示唆する「井手」など、建物や施設の名を記した墨書陶器が集中しており、これらと共に見込み部に花卉をえがく緑釉緑彩陶器2点や大量の灰釉陶器が出土している。ついで、地点IIからは「井上」・「行」・「別」などの墨書陶器と共に、頭部に切れ込みのある「五斗」の記載をもつ白米の荷札、荷札木簡、木簡1点と人形4点、曲物7点が集中して出土している。4点の人形のうち2点は同一地点からの出土で、ほぼ同形同大、1点は墨描きで顔と共に衣服の表現をしており、背部に人形墨で文字を1字書いている。文字は判読しづらいが「柚」である可能性が高い。もう1点は顔を墨描きし、胸部にやはり墨で文字を1字書いている。こちらも判読しがたい字だが、「楊」である可能性が高い。この2点はあきらかに異なる樹種をもちいているため、使用した樹種の名を書いているとも考えられる。いずれにせよ、二点一組で使用したとみられる人形の出土例としては、きわめて良好な資料といえよう。この一群の墨書陶器の文字内容については全体としての意味はみいだしがたいが、人形などと共に祓などの律令祭祀にもちいられた可能性がある。

折戸53～東山72号窯式期のものは、地点Iを中心としてA・B地区のNR01上層から灰釉陶器が大量に出土している。墨書陶器は19点あり、いずれも東山72号窯式期に属し、ほぼ墨書土器、地点Iの東半部に集中している。墨書内容は、「万」・「太」・「徳」・「全」・「富井」・「南」など、あきらかに吉祥句といえるものが多い。共伴する木製品は曲物が1点のみである。墨書陶器は黒笹90号窯式期同様、祭祀的な用途に使われたと考えられる。

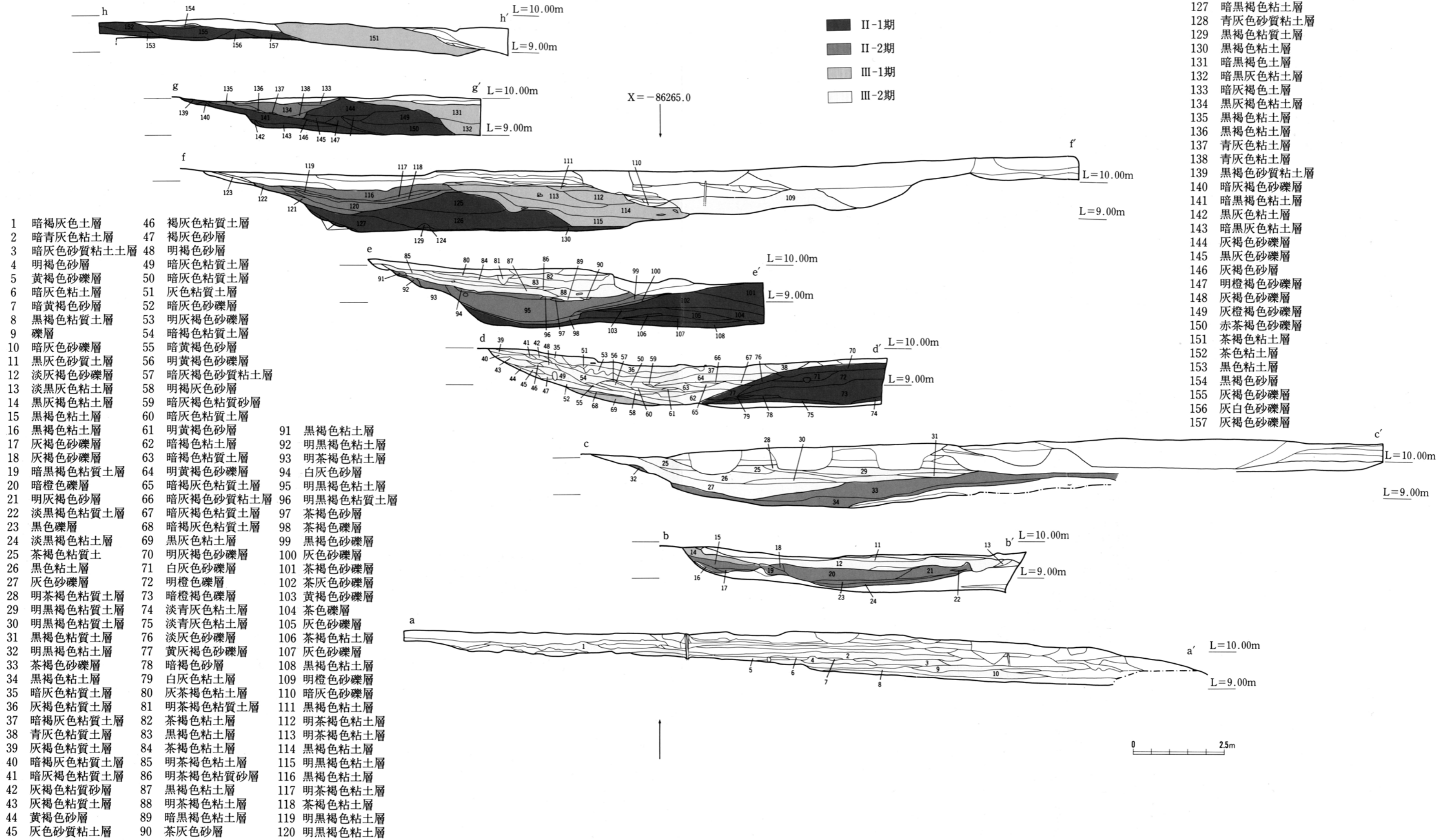
百代寺窯式期以降も灰釉(系)陶器が多く出土しているが、黒笹14～東山72号窯式期の出土量にはおよばない。出土地点は折戸53～東山72号窯式期と同じくA・B地区の上層から出土しているが、墨書をもつものはなく、他の共伴遺物もみられない。おそらく、東山72号窯式期と百代寺窯式期の間で灰釉(系)陶器を川に流す(投棄する)意味が大きく変化したのであろう。

e. IV期(第17図) IV期の遺構は条里型地割の水田跡である。57I区では15筆の水田区画がみ条里型水田つかっている。今回の調査区では約13筆の水田区画を検出したが、旧地蔵川の氾濫等により、南東側では畦畔の遺存状況が悪く、正確な水田区画がつかめない。このため、1筆の面積がほぼ確定しているのはST16～21の6筆にすぎない。それぞれの水田区画の東西・南北方向の畦畔の長さや面積等については巻末の付表にまとめる。

水田区画の方向性は、57I区ではST01から09の9筆は長辺を南北方向にとり、その南の水田からは長辺が東西方向に変化している。62F区ではST10・11のラインにあたるST19・23よりもう一区画北側のST18・22のラインより南側が東西方向となっている。これは、水田跡の北側にある段丘崖や南側の地蔵川(NR01)との位置関係から区画の方向性を変化させたものと考えられる。これら水田区画の施行時期は出土遺物の年代観から、57I区の調査成果と同じく14世紀頃であろう。(樋上 昇)



第15図 NR01内連携配置図



- |             |              |             |
|-------------|--------------|-------------|
| 1 暗褐灰色土層    | 46 褐灰色粘質土層   | 91 黑褐色粘土層   |
| 2 暗青灰色粘土層   | 47 褐灰色砂層     | 92 明黑褐色粘土層  |
| 3 暗灰色砂質粘土層  | 48 明褐色砂層     | 93 明茶褐色粘土層  |
| 4 明褐色砂層     | 49 暗灰色粘質土層   | 94 白灰色砂層    |
| 5 黃褐色砂礫層    | 50 暗灰色粘質土層   | 95 明黑褐色粘土層  |
| 6 暗灰色粘土層    | 51 灰色粘質土層    | 96 暗灰褐色粘質土層 |
| 7 暗黃褐色砂層    | 52 暗灰色砂礫層    | 97 茶褐色砂層    |
| 8 黑褐色粘質土層   | 53 明灰褐色砂礫層   | 98 茶褐色礫層    |
| 9 礫層        | 54 暗褐色粘質土層   | 99 黑褐色砂礫層   |
| 10 暗灰色砂礫層   | 55 暗黃褐色砂層    | 100 灰色砂礫層   |
| 11 黑灰色砂質土層  | 56 明黃褐色砂礫層   | 101 茶褐色砂礫層  |
| 12 淡灰褐色砂礫層  | 57 暗灰褐色砂質粘土層 | 102 茶灰色砂礫層  |
| 13 淡黑灰色粘土層  | 58 明褐灰色砂層    | 103 黃褐色砂礫層  |
| 14 黑灰褐色粘土層  | 59 暗灰褐色粘質砂層  | 104 茶色礫層    |
| 15 黑褐色粘土層   | 60 暗灰色粘質土層   | 105 灰色砂礫層   |
| 16 黑褐色粘土層   | 61 明黃褐色砂層    | 106 茶褐色粘土層  |
| 17 灰褐色砂礫層   | 62 暗褐色粘土層    | 107 灰色砂礫層   |
| 18 灰褐色砂礫層   | 63 暗褐色粘質土層   | 108 黑褐色粘土層  |
| 19 暗黑褐色粘質土層 | 64 明黃褐色砂礫層   | 109 明橙色砂礫層  |
| 20 暗橙色礫層    | 65 暗褐灰色粘質土層  | 110 暗灰色砂礫層  |
| 21 明灰褐色砂層   | 66 暗灰褐色粘質土層  | 111 黑褐色粘土層  |
| 22 淡黑褐色粘質土層 | 67 暗灰褐色粘質土層  | 112 明茶褐色粘土層 |
| 23 黑色礫層     | 68 暗褐灰色粘質土層  | 113 明茶褐色粘土層 |
| 24 淡黑褐色粘土層  | 69 黑灰色粘土層    | 114 黑褐色粘土層  |
| 25 茶褐色粘質土   | 70 明灰褐色砂礫層   | 115 明黑褐色粘土層 |
| 26 黑色粘土層    | 71 白灰色砂礫層    | 116 黑褐色粘土層  |
| 27 灰色砂礫層    | 72 明橙色礫層     | 117 明茶褐色粘土層 |
| 28 明茶褐色粘質土層 | 73 暗橙褐色礫層    | 118 茶褐色粘土層  |
| 29 明黑褐色粘質土層 | 74 淡青灰色粘土層   | 119 明黑褐色粘土層 |
| 30 明黑褐色粘質土層 | 75 淡青灰色粘土層   | 120 明黑褐色粘土層 |
| 31 黑褐色粘質土層  | 76 淡灰色砂礫層    |             |
| 32 明黑褐色粘土層  | 77 黃灰褐色砂礫層   |             |
| 33 茶褐色砂礫層   | 78 暗褐色砂層     |             |
| 34 黑褐色粘土層   | 79 白灰色粘土層    |             |
| 35 暗灰色粘質土層  | 80 灰茶褐色粘土層   |             |
| 36 灰褐色粘質土層  | 81 明茶褐色粘質土層  |             |
| 37 暗褐灰色粘質土層 | 82 茶褐色粘土層    |             |
| 38 青灰色粘質土層  | 83 黑褐色粘土層    |             |
| 39 灰褐色粘質土層  | 84 茶褐色粘土層    |             |
| 40 暗褐灰色粘質土層 | 85 明茶褐色粘土層   |             |
| 41 暗灰褐色粘質土層 | 86 明茶褐色粘質砂層  |             |
| 42 灰褐色粘質砂層  | 87 黑褐色粘土層    |             |
| 43 灰褐色粘質土層  | 88 明茶褐色粘土層   |             |
| 44 黃褐色砂層    | 89 暗黑褐色粘土層   |             |
| 45 灰色砂質粘土層  | 90 茶灰色砂層     |             |

- |               |
|---------------|
| 121 黑褐色粘土層    |
| 122 暗茶褐色粘質土層  |
| 123 暗黑褐色粘質土層  |
| 124 明茶褐色粘質土層  |
| 125 白灰色砂礫層    |
| 126 茶色砂礫層     |
| 127 暗黑褐色粘土層   |
| 128 青灰色砂質粘土層  |
| 129 黑褐色粘質土層   |
| 130 黑褐色粘土層    |
| 131 暗黑褐色土層    |
| 132 暗黑灰色粘土層   |
| 133 暗灰褐色土層    |
| 134 黑灰褐色粘質土層  |
| 135 黑褐色粘質土層   |
| 136 黑褐色粘質土層   |
| 137 青灰色粘質土層   |
| 138 青灰色粘質土層   |
| 139 黑褐色砂質粘質土層 |
| 140 暗灰褐色砂礫層   |
| 141 暗黑褐色粘質土層  |
| 142 黑灰褐色粘質土層  |
| 143 暗黑褐色粘質土層  |
| 144 灰褐色砂礫層    |
| 145 黑灰褐色砂礫層   |
| 146 灰褐色砂礫層    |
| 147 明橙褐色砂礫層   |
| 148 灰褐色砂礫層    |
| 149 灰橙褐色砂礫層   |
| 150 赤茶褐色砂礫層   |
| 151 茶褐色粘質土層   |
| 152 茶色粘質土層    |
| 153 黑色粘質土層    |
| 154 黑褐色砂層     |
| 155 灰褐色砂礫層    |
| 156 灰白色砂礫層    |
| 157 灰褐色砂礫層    |

第16圖 NR01土層断面圖



第17図 IV期水田遺構図

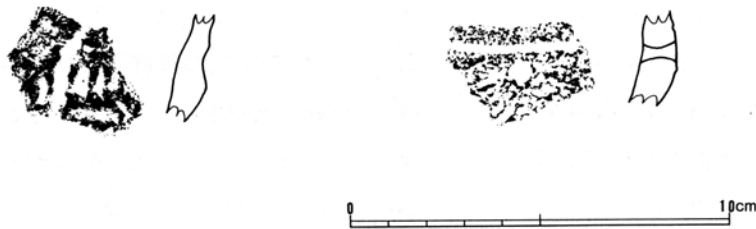
### III 遺物

#### 1 土製品

##### (1) 土器・陶磁器

a. 0期(第18図) 62F区からは本章第2節において述べるように縄紋時代に属する石器片が数点みつまっている。ここにあげた縄紋土器もやはり62F区で出土したものである。1は調査の最終段階で弥生時代中期の基盤層を断ち割った際に出土したものである。前期前葉の清水ノ上II式に属する深鉢の破片である。隆帯をもち、その上部にはへら状工具(貝殻の可能性あり)による押し引きで紋様をほどこす。2はD地区のSX03下層から出土しており、口縁端部直下に沈線をほどこし、その下に円孔をうがう。時期は中期後半の咲畑式に属する可能性が高い。

これらの土器以外にも、63B区で鳥居松段丘崖直下の堆積土中から早期の押型紋土器の破片が1点出土している。(樋上 昇)



第18図 縄紋土器実測図(1:2)

b. I期 I期に属する弥生土器はおおむね62F区SX01・SD60からの出土である。うち、弥生土器 SD60は調査の際、上・中・下の三層にわけて取り上げた。時期的に大きな差はないと思われるが、一応ここでは下・中・上層の順に記述をすすめることとする(PL. 14~22)。

SX01 1は口縁部のみの破片で全体の器形は不明だが、外面には上半部は横方向、下半部は縦方向のへらミガキをおこない、内面には指頭圧痕をとどめる。2は太頸壺の口縁部で内外面に櫛描波状紋、端部内面には竹管紋をほどこす。3は壺の体部上半で、縦ハケののち、9本1単位の櫛描波状紋をくわえる。4は体部中央の破片。外面は縦ハケののち、櫛描波状紋、内面は下半部に粗い斜めハケをとどめる。5は体部下半で、全体をハケで調整し、上端部には3条1単位の直線紋をえがく。6・7は細頸壺の体部で、6は上半部に波状紋と直線紋を交互にえがき、下半部は粗い横ハケののち縦ハケをおこなう。内面は粗いハケ。7は体部中央に直線紋をえがき、上半部は細かく、下半部は粗い縦ハケをおこなう。内面は粗い縦ハケ。8は大形壺で、外面は全体に細かくハケで調整し、上半部に3条1単位の直線紋を9条ほどこす。内面は上半部が横から斜め、下半部が縦方向の粗いハケ調整

をおこなう。9は体部上半で、外面は2条1単位の直線紋をほどこし、内面は粗いハケ調整をおこなう。10・11は高杯の口縁部で、いずれも口縁端部直下に沈線をほどこし、下半部はハケ調整。12・13は甕。12は口縁端部をへらで刻み、外面調整は横ハケ(あるいはタタキ)→縦ハケ→上半部の横ハケの順でおこない、内面は口縁部および体部上半をハケ、体部下半はへラケズリをほどこす。13はやはり口縁端部にへらで刻みをほどこし、外面は口縁部を斜めハケ、体部はタタキののち縦ハケをおこなう。内面は口縁部に粗い横ハケ、体部には縦ハケをとどめる。

SD60下層 14は細頸壺。口縁部に2条の沈線をくわえる。15は細頸壺の頸部。紋様は、上から9条の直線紋、簾状紋、3+3+4条の直線紋、3+3+4条の波状紋、3+3+1の直線紋である。16は大形壺の体部上半。外面は細かいハケ調整ののち、直線紋と波状紋を交互にほどこし、内面は上半部には横方向、下半部に斜めの粗いハケ調整をおこなう。

17~20は細頸壺の体部。17・18は外面を粗いハケ調整。内面は、17はハケ、18はハケののち縦方向のナデ。19は上半部に2~3条1単位の直線紋をほどこす。20は外面に細かいハケ調整ののち、上半部に7条の直線紋。内面は粗いハケ。21は壺底部。外面調整は上から斜めハケ、横方向のへらミガキ、縦方向のへらミガキである。内面は底部に蜂の巣状のハケ、体部下半には斜めのハケをほどこす。22~25は甕。22・23・25は口縁端部にへらで刻みをいれる。22の外面調整は斜めハケ→縦ハケ→横ハケである。内面は口縁部に粗いハケ、体部上半は斜めハケ、下半部は縦方向のへラケズリ。23は縦ハケののち、口縁直下に沈線をほどこす。内面は口縁部に横ハケ、体部上半は斜めハケ、下半部は縦方向のへラケズリをおこなう。

24は摩滅のため調整不明。25も体部の調整は不明である。口縁部内面は横ハケをおこなう。

SD60中層 26~32・34は太頸壺の口縁部。26は口縁端部を4ヶ所つまみ出し、頸部には櫛描直線紋をくわえる。27・28は口縁部が大きく開き、若干下垂する。端部には27は波状紋、28は斜格子紋をほどこす。29は口縁端部を上方につまみ上げ、外傾面にはへら状工具で刺突をくわえる。30~32・34は受口状の口縁で、31・32・34は口縁部に3条の沈線をほどこす。30は頸部に板状工具により連続圧痕をくわえる。40は太頸壺の頸部。3条の突帯とその下に竹管による施紋をおこなう。33・35~37は細頸壺の口縁部。33は大きく外反する口縁部。35は受口状口縁で、沈線が1条めぐり。36・37は口縁部に4条の沈線、羽状紋をほどこし、36は縦ハケ、37は直線紋をくわえる。38は細頸壺の頸部。外面は縦ハケののち、3条の沈線、8条の直線紋、4条1単位の直線紋を3条ほどこす。内面上半部は横ハケ。39~42・44は細頸壺、43は大形壺の体部。いずれもハケ調整ののち、直線紋と波状紋を交互にくわえる。45~47は壺の底部。45は大形壺で、外面は縦ハケ、内面は底部付近に横ハケをほどこす。46は底部外面に木の葉の圧痕をとどめる。47は下半部をへラケズリ、上半部は横方向にへらミガキをほどこす。48は大きく下垂する壺の口縁部で、羽状紋と竹管紋をくわえる。49~55は壺の体部。49・50・52~55はハケ調整ののち、直線紋と波状紋をくわえる。51は上半部は横、下半部は斜め方向に櫛描紋をほどこす。56・57は鉢。56は口縁部に4条の沈線をほどこし、その下部に簾状紋をくわえる。57は3条の沈線をほどこす。

小形の甕あるいは鉢。口縁部は体部より大きく開き、内外面ともハケで調整する。59～63は甕。61・62は大形の甕で、61は口縁端部を上方につまみ出す。59は縦ハケののち、楕で直線紋をくわえる。60は口縁端部に列点紋、体部はタタキののち、上半部に縦ハケをおこなう。61は口縁端部に二段に刻みをくわえ、体部は細かい横ハケののち、粗い縦ハケをおこなう。62は口縁端部に刻み、体部には上から粗い縦ハケ、横ハケ、斜めハケをほどこす。

SD60上層 64・65は細頸壺。64は受口状口縁で、沈線が2条めぐり。65は口縁部に外傾面をもち、外面はハケで調整する。66は直立に近い口縁とゆるやかな肩部で、外面は縦ハケ。円窓付壺か。67～71は太頸壺。67～69は口縁端部が下垂して面をつくり、67は二段に竹管紋、68・69は横方向の沈線ののち、縦の沈線を刻む。68は頸部に4条の突帯をつくりだし、刻みと簾状紋を交互にくわえる。69は4条の直線紋。口縁部内面には、楕により67・69は羽状紋、69は押しびきをおこなう。67・68には瘤状突起がつく。70・71は受口状口縁で、70は2条、71は4条の沈線をほどこす。73は太頸壺の頸部。3条の突帯と竹管紋をほどこす。72～77は壺体部の破片。72はハケ調整ののち、直線紋・波状紋をくわえる。74は細かい波状紋と直線紋をえがく。75は球状の体部にハケで曲線の紋様をえがく。76は大形壺。外面はハケののち、上半部に波状紋をほどこす。77は細頸壺。外面には波状紋と直線紋をえがき、内面下半部には粗い縦ハケをおこなう。78～80は壺の底部。いずれも外面は縦ハケ。内面は、78は縦ハケ、79はへラケズリをおこなう。81～87は高杯。81は口縁端部が大きく下垂する。82は口縁端部がほぼ水平にのび、83は頸部に3条と2条の直線紋がある。86・87は外面に粗い縦ハケをおこない、86の杯部内面には横ハケののち、縦方向のへラミガキをほどこす。87は口縁端部に波状紋をくわえる。84は口縁部外面に楕で羽状紋をえがく。85はゆるやかに内湾する杯部の外面にへラミガキ、内面には横ハケをほどこす。脚部には4方向に円孔をうがち、端部には沈線を2条めぐらせる。88～112は甕。89・90・92・94・96～98は口縁部に刻みをいれる。外面調整は、88は横ハケ、89は細かい斜めハケ→粗い縦ハケ、90は不整方向に粗いハケをほどこし、口縁端部は上方につまみ出す。91はタタキ、92は横ハケ→斜めハケ、93はタタキののち、上半部のみ粗い縦ハケ、94は横ハケ→縦ハケ。95は口縁部に沈線を1条めぐらせ、体部は横ハケ→体部下半に縦ハケ→斜めハケ。96は上半部にはタタキ→縦ハケ→斜めハケ、下半部は斜めハケ→横ハケで、間に1条波状紋をえがく。97はやや扁平な体部で、上半部に横ハケ、下半部に縦ハケが残る。98は粗い縦ハケののち、上半部に粗い横ハケをほどこす。内面はいずれもハケ調整。99～112は底部の破片。うち、111は焼成前、112は焼成後に穿孔をおこなっている。99～102・108は外面縦ハケ、内面へラケズリで、底部外面にもハケメが残る。103は外面縦ハケ、内面横ナデで、底部はへラケズリ。104は外面縦ハケ、内面横ナデである。105は外面は摩滅により調整不明、内面・底部はへラケズリ。106は外面・内面ともハケによる調整で、底部はナデ。107は外面が縦方向の条痕、内面は横ナデ。109・110は台付甕。109の外面は摩滅、内面・底部はナデ調整。110は外面横ハケ、内面・底部はナデ。111は外面摩滅、内面ナデ、底部は粗いハケメが残る。112は台付甕で、外面縦ハケで、底部は指ナデ。

(樋上 昇)

c. II期 ここで取り扱う資料は山中式から廻間式に所属するものと、宇田型甕を伴う5世紀後半の時期に大きく二分できる。中心となる遺構は62F区—SX03・遺物集中地点III・遺物集中地点IVと63D区—SZ02である(PL. 23~27)。

SX03 須恵器及び土師器の出土がみられる。PL. 26—76は初期須恵器の形状をとどめるもので、体部外面は手動的なヨコズリが認められる。78・79の蓋杯は天井部のケズリが大きく、形態は箱状をとどめ、城山2号窯式期に所属する資料であろう。

城山2号  
窯式期

PL. 26—82~84は「尾張型円筒埴輪」で外面回転ヨコハケがみられ、凸帯は突出高と側面幅が約1:2になる。84は最下段部の資料で、底部底面はケズリが施され、味美技法はみられない。また、底部内面にはヨコズリ(1回)を施す。形態は「大型埴輪」と思われ、内面調整技法等から「尾張IV期後半」、6世紀前半の資料と考えられる。

尾張型円筒  
埴輪

その他には、山中式新から廻間I式期にかけての資料が出土しているが、量的な比率からいうと廻間I式期に所属する資料が多い。高杯14・22(PL. 23)はI式期後半、15は有稜高杯の脚部で、脚部に凹線紋を施す。23はS字甕A類新段階の資料である。

廻間I式期

SX03—遺物集中地点III 地点IIIから出土した資料は、その出土状況から2つの資料に大別できる。すなわち地点III中央北掘形部において一括して出土したもの(以後、地点III一括資料)と、それ以外である。前者はPL. 24—26・28~33・39・40・43、PL. 25—54・55・64・66~69の資料である。

須恵器はやや時期幅をもち、東山11号窯式期から下原2号窯式期にかけてを中心としたものが主体を占めるが、地点III一括資料は下原2号窯式期に限定できよう。杯身80、有蓋高杯36・42・73はやや古い形態をとどめ、東山11号窯式期に所属するが、他の資料はおおむね下原2号窯式期の範疇で考えてよいものであろう。尾張型有蓋高杯35・38・39・43は比較的口径が大きいもので占められ、蓋杯においてもその傾向が認められる。

下原2号  
窯式期

土師器は各種の形式が存在し、そのうち高杯は2種類認められる。まず47・49・50の脚部と48の杯部によって代表される有段で外反する杯部をもつもの。44・45は前者に比べやや小型の椀形杯部をもつ形式。54は宇田型甕で、口縁部に変化から宇田型甕3段階に所属する資料である。55・70・71は平底の甕で、55は外面ハケメ調整を施し、口縁端部は肥厚する。70・71は外面を指あるいは部分的に板で整える。56~58は口縁部が外傾する椀である。その他63~68は内湾する椀で、口縁端部には強いヨコナデが認められる。外面には指により整えることが一般的である。60・61・69は小型壺で、69は外面ヨコ方向のミガキが施される。62は小型の甕、59は丸底土器であるが、外面ハケメ、口縁部はヨコナデ調整が認められる。

宇田型甕

遺物集中地点IV おおむね山中式土器新段階に所属する資料である。1・2は広口壺の口頸部で口縁端部は広く拡張し、刺突紋が施される。また、端部内面にも櫛状工具による羽状刺突紋がみられる。10は長頸壺で、外面には凹線紋と貝殻刺突紋の組合せがみられる。8・17は高杯の杯部で、杯部上位は大きく外方に湾曲する。4・7は台付甕で口縁端部に刺突紋がみられ、内面はケズリ調整が施される。19・20・21は器台で、外面ミガキ調整。

山中式  
新段階

そのうち21は廻間 I 式期前半に下がる資料である。

廻間 II 式期 SZ02 廻間 II 式 1 段階の良好な資料である。有段高杯の杯部は大きく外傾し、端部に面あるいは擬凹線がみられる資料もある。脚部は屈曲部から大きく外方に開く形状のものであるが、91・100ではわずかに内湾する痕跡が残存する。97は内湾直口壺であるが、体部の最大径を著しく下半に置く形状である。94は小型の直口鉢で、口縁部が内湾し擬凹線を施す。87は広口壺で、体部はしもぶくれ状を呈するものの、外面にはミガキ調整が施される。85は脚付パレス壺の低い脚部。

その他 102・103・105はSZ04出土品。103はヒサゴ壺で外面ミガキ調整がみられ、口頸部はタテ方向のミガキを残す。口縁端部は内面に斜面を残し、頸部は相対的に短くなる傾向を示す。体部は最大径が下半に下がり、上げ底状を呈している。以上の特色から廻間 II 式前半に所属する資料と理解してよからう。なお、105は椀形高杯。

S Z 03 89・101・104はSZ03からの出土品。89は下ぶくれが著しい広口壺で、外面にはミガキ調整が残る。101は小型壺で、体部上半は竹管紋による施紋が施される。最大径は大きく下降し、上げ底状を呈する。以上は廻間 II 式期前半の特色をもつものであろう。104は脚部に多孔透かしがみられる有段高杯で、廻間 I 式期後半に所属する。(赤塚次郎)

d. III期(PL. 28~35) 62F区NR01をはじめとして、各調査区から多くのIII期に属する須恵器・灰釉陶器・灰釉系陶器・緑釉陶器・白磁が出土している。なかには55点の墨書土器のほか、刻書土器や陶錘などもみられるが、これらについては別項で述べることとし、本項では器形・時期のわかる資料248点を図示し、説明をくわえる。

なお、記述は62F区・89B区・90A区・89C区の出土遺構・地点ごとに須恵器・灰釉陶器・灰釉系陶器・緑釉陶器・白磁の順にすすめる。

#### 62F区

出土地点は第二章第4節にしたがい、遺物集中地点 I・遺物集中地点 I と II の中間地点・遺物集中地点 II・SX04として記述していく。

遺物集中地点 I (PL. 28~32) 地点 I からは岩崎17号窯式期(I-17)からK-G-20号窯式期におよぶ時期の須恵器・灰釉陶器・灰釉系陶器が出土している。

1~9は杯B蓋である。1~4は笠形の頂部に口縁部は折り返すのみで、ほぼ高蔵寺2号窯式期(C-2)から鳴海32号窯式期(NN-32)に属する。5~7は頂部が直線的になり、口縁端部を折り曲げる形態で折戸10号窯式期(O-10)に属する特徴をもつ。5は内面にへら記号を有する。8・9はゆるやかな笠形の頂部から口縁部にかけて強く屈曲し、端部の折り返しが短くなる。井ヶ谷78号窯式期(IG-78)に属する一群である。10~14は無台の杯身(杯A)である。平底で底部から口縁部にかけてクロヘラケズリにより2ヶ所に鋭い稜をもつ。底径は6~7cmでほぼ一定しており、いずれもO-10~IG-78号窯式期に属するものと思われる。15~22は高台を有する杯身(杯B)である。口径に大小があり(I~III類)、さらに器高の高いもの(19)と低いもの(21・22)の2種類にわかれる。15は杯BIII。16~20は杯

BIIで、21・22が杯B Iである。底部にはいずれもロクロヘラケズリをほどこす。21には中央部に糸切り痕が残る。時期はNN-32~IG-78号窯式期に属する。23は有台の皿(皿B)である。24・25は無台の椀(椀A)で底部に糸切り痕をもつ。IG-78~黒笹14号窯式期(K-14)に属する。26~28は有台の椀(椀B)。底部から口縁部にかけてゆるやかに湾曲しつつ広がる器形である。29・30は高杯で、いずれもI-17号窯式期頃に属する。杯部は深い椀形で、下半部にはロクロヘラケズリをほどこす。脚部は低く、ほぼ中央に一条沈線をめぐらす。31は大型の盤。底部には静止ヘラケズリをほどこす。32は壺の口縁部。強く外反し、端部は肥厚して幅広の面をなす。33は鉢あるいは甕の上半部。短く立ち上がる口縁はわずかに外反し、端部は外傾面をなす。体部外面にはタタキをほどこす。34・35は甌。いずれも体部外面上半部にはタタキ、下半部にはヘラケズリをほどこす。口縁部からほぼ3分の1の位置に牛角状の把手がつく。底部は、34は小孔を数カ所うがち、35は円筒状に底部をすっぱり抜いている。34は把手の上部に切れ目がはいる韓式系土器であるが、胎土は東濃地方の須恵器と共通する。

韓式系土器

36~148は灰釉陶器である。36~40はK-14号窯式期に属する。36~38は椀で、39・40は皿である。いずれもハケで内面にのみ全面施釉されており、高台は低い角高台である。38は底部外面にヘラ記号をもつ。39は内外面に三叉トチンの痕跡が残る。39の口縁部は部分的につまみ上げられているが、輪花ではない。40は口縁部が「て」の字状に屈曲する段皿である。

41~90は黒笹90号窯式期(K-90)に属する。41~73は椀、74~90は皿である。椀は法量の大小により2種類(I・II類)にわかれる。41~53は小型の椀IIで、54~70は大型の椀Iである。皿もまた、法量に大小が認められる。74~76は小型の皿IIで、77~80は大型の皿Iである。施釉はハケにより内外面におこなわれる。トチンをもちいず、重ね焼きにより焼成されるため、融着を防ぐために見込み部の高台接地部分のみ施釉さず、口縁部と見込み部に施釉する例と見込み部に施釉しない例がみられる。時期的には前者が古く、後者が新しいとされる。高台はいずれも接地面の狭い、いわゆる三日月高台である。口縁端部は外反し、体部下半から底部にかけてロクロヘラケズリをほどこす。71・72は底部外面、73は見込み部と底部外面に墨が付着するが、文字が書かれた痕跡はない。89は見込み部付近にススが付着し、部分的に強い焦げ跡があることから灯明皿にもちいたと推測される。90は見込み部から口縁部にかけて強く屈曲する段皿である。

灯明皿

91~118は折戸53号窯式期(O-53)に属する。91~116が椀で、117・118は皿である。椀は法量で3種類にわかれる。91は小型の椀III、92~95は中型の椀IIで、96・97は緒方の椀Iである。いずれも漬けがけにより、内外面とも口縁部に施釉される。退化した三日月高台は強く外反して底部のやや外側につき、底部は肥厚してくる。口縁端部の外反度は少なくなり、底部から口縁部にかけてやや直線的に開くようになる。

119~138は東山72号窯式期(H-72)に属する。119~129は椀、130~138は皿である。椀はほとんどが口径14cm前後と小型のものであるが、126~129などは大型の椀として分類でき

るかもしれない。皿には大小2種類の口径のものがみられる。130は小型の皿IIで、きわめて分厚い底部と退化した高台をもち、内面には沈線が一条めぐる。131~133は大型の皿Iで、130同様分厚い底部と退化した高台をもつ。133は口縁部の四方に輪花を有する。132・  
転用 硯 133は見込み部に墨が付着しており、硯あるいは墨皿としてもちいられた可能性がある。138は耳皿である。内面のみに施釉されている。

139~148は百代寺窯式期に属する。いずれも椀形の器形で、小型の椀II(139)と大型のもの(140~148)がある。高台は高い三角高台で、施釉されたもの(114・147・148)と無釉のもの(139~143・145・146)がある。

149~164は灰釉系陶器。149~162は南部系、163・164は北部系である。149はやや腰の張る体部と強く外反する口縁部で、底部には低い三角高台がつく椀。150は口縁部に輪鼻を有する椀である。151~162は高台にモミ痕が残る。いわゆるモミ高台をもつ。151~154は底部からゆるやかに湾曲しつつ立ち上がる口縁部で、155~162は底部から口縁部にかけて直線的に広がる形態をとる。163は直線的に開く口縁部の破片。胎土は精選され、きわめて薄手のづくりである。164はきわめて退化したモミ高台に若干内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。

遺物集中地点IとIIの中間地点(PL. 33) 165・166は須恵器。165は甑の体部の破片である。外面はタタキで、沈線が一条めぐる。166は高杯の脚部。I—17号窯式期に属する。

167~169はK—90号窯式期の灰釉陶器。167は椀、168は皿、169は小型の壺である。169は平底で下ぶくれの形状をしており、外面にはハケにより施釉がおこなわれている。

170はH—72号窯式期に属する深手の椀である。口縁部には4ヶ所に輪花をほどこす。

171~173は百代寺窯式期。171は3ヶ所に輪花をもつ稜椀である。172は皿、173は口縁部が屈曲して外反する折縁皿である。

174~177は灰釉系陶器の椀である。174・175は南部系で、176・177は北部系。174は輪花をもつ深手の椀。175は低いモミ高台を有する。174・175は直線的に開く口縁部ときわめて退化したモミ高台をもつ。

遺物集中地点II(PL. 33・34) 178~183は須恵器。178は杯B蓋である。笠形の頂部に強く屈曲する口縁部がつく。口縁部は2ヶ所打ち欠きがあり、その部分にススが付着すること  
灯明皿 から上下を逆転させて灯明皿に転用していたらしい。O—10~IG—78号窯式期に属する。

179・180は杯Aで、いずれも底部には丁寧にロクロヘラケズリをほどこす。C—2号窯式期に属する。181は杯B。体部外面に灰をかぶる。182は平瓶。丸底で、底部にはタタキ、体部中央にはロクロヘラケズリをほどこす。I—17号窯式期頃か。183は播鉢の底部。底部外面には糸切り痕が残る、細い棒状工具による小孔がたくさんあけられている。

硯の台皿 184~190はK—90号窯式期の灰釉陶器。184~186は椀。184は底部外面に墨痕がある。187~190は皿。187は底部外面に、189は見込み部に墨の跡が残る。189は硯の台皿としてもちいられた可能性が高い。

191~193はO—53号窯式期の灰釉陶器。191・192は椀、193は皿である。

194～199はH-72号窯式期に属する灰釉器である。194～197は椀。197は口縁部内面に沈線がめぐる。198・199は皿。

200～203は百代寺窯式期の灰釉陶器で、200～202は椀、203は皿である。

204～206は灰釉系陶器で、204・205は南部系、206は北部系の椀。206は口縁端部にシャープな外傾面をもつ。

SX04(PL. 34) SX04からはO-10号窯式期以降に属する須恵器が出土している。207～210は杯B蓋。いずれも笠形の頂部に屈曲する口縁部をもつ。ツマミは偏平。211～215は杯A。法量には大中小の3種類が認められる。211～213は杯AIII、214は杯II、215は杯A Iである。216・217は杯B。217はきわめて退化した三角形の高台がつく。218は椀Aで、腰部の張りは少ない。219は椀B。220は平瓶で、口縁部と把手の一部を欠損しているがほぼ完形である。体部の上半と下半の境には明確な稜をもつ。体部上半には淡緑褐色の自然釉がかかる。221は壺の体部。頸部付近を除いてほぼ全面にロクロヘラケズリをほどこす。222は甕。外反度の少ない口縁部をもち、体部はタタキで成形している。223は甑の把手である。周囲にタタキの痕跡が残る。

62F区出土緑釉陶器・白磁(PL. 35) 224・225は緑釉緑彩陶。224は内面に丁寧なヘラミガキをほどこし、全面に緑釉をかけ、見込み部には濃緑色の釉で花卉をえがく。底部外面にヘラ記号をもつ。225は224とは別個体であるが、224と同一器種と思われる。224にえがかれた中心の花卉の周囲何ヶ所かに配された小花卉の一部である。226～230は緑釉陶器。226は内湾する高台と若干外反する口縁部を有する。見込み部には重ね焼きの痕跡が残る。H-72号窯式期頃か。231・232は白磁。231は玉縁状の口縁端部である。

#### 89B区(PL. 35)

89B区ではSD02とSK20から須恵器が出土している。233はSD02出土の杯B蓋である。口径21.4cmと大型で、口縁部が屈曲する形態をとる。234は瓶類の高台の破片である。底部との接合面にはタタキの痕跡が残る。

#### 90A区(PL. 35)

90A区ではSX01から須恵器が出土している。235は杯蓋である。頂部には宝珠形のツマミをもつ。やや肩の張る形態で、口縁部には退化したかえりを有する。I-17号窯式期頃か。236は高杯の脚部。237は鉢の口縁部である。

#### 89C区(PL. 35)

89C区ではSB09・16・19・21、SD05・06から須恵器・灰釉陶器が出土している。SB09では5世紀中葉頃に属する須恵器の杯蓋(238)がある。SB16からは須恵器の高杯の脚部(239)が出土している。240・241はSB19出土の灰釉陶器の皿である。214は輪花をもつ。いずれもO-53号窯式期に属する。242はSB21出土の灰釉陶器でK-90号窯式期。SD05からは灰釉陶器の椀(243)・長頸瓶(244)、須恵器の甕(245)が出土している。243はK-90号窯式期に属する。SD06からは須恵器の杯A(246)・椀A(247)・皿(248)が出土している。時期はIG-78～K-90号窯式期頃か。

(樋上 昇)

e. IV期(PL. 36~40)

概要

江戸時代になると街道が整備され、名古屋から中山道に繋がる交通網も整備された。小牧を経て可児へ抜ける藩営の上街道と、一般の商人などが利用した恵那で中山道に合流する下街道がそれである。勝川はこの二本の街道の分岐点に位置し、いわゆる追分の宿として江戸時代から明治時代にかけて栄えた。勝川遺跡IV期はこの時代に相当する。調査地点は勝川宿の東はずれにあたり、天保年間の絵図には下街道両側に民家が軒を連ねて立ち並ぶ様子が描かれており、これまでの発掘調査でもこれを裏付けるように溝や井戸などが検出されている。ここでは街道南側に並ぶ民家の南に掘られたごみ穴(廃棄土坑)と推定される89B区SK01と89A区SX01から出土した一括遺物について報告する。

陶器・磁器・土器

日常雑器は、使用目的に応じて陶器・磁器・土器を使い分けている。そのうち日本で使用される磁器は、中国などからの輸入品、九州で生産されたもの、そのほか地元の瀬戸や美濃で生産されたものなどがあり、勝川遺跡で出土する磁器は地元生産品ばかりであることから、地元で磁器生産が開始された19世紀以降という年代が与えられる。碗や皿に注目すると同じ器種でも陶器と磁器が見られることから、陶器をI類、磁器をII類とし、形状の違いによって器種分類をし、説明の煩わしさを避ける。

- 碗 A 胴部下方が丸みを帯びる碗。  
B 高い高台から直線的に開く灰釉の碗で、呉須による紋様がある、広東碗。  
C 高台脇から丸みをもって開く端反りの碗。  
D 高台から直線的に開き、低い高台の碗。  
E 高台脇から垂直に立ち上がる筒型の碗。
- 皿 A 小型の皿で、高台が無い、もしくは僅かに底裏がえぐられる碁筒底の皿。  
B 腰部がやや丸みを帯び、直線的な口縁部を持つ皿。  
C 端反りの口縁の皿。  
D 体部が緩やかに広がる大型の皿。
- 鉢 A 丸みを帯びた体部で玉縁の口縁部の鉢。  
B 端反りの口縁の鉢。  
C 丸みを持った深い体部の鉢。  
D 大型で口縁部が外へ折れる鉢。  
E 体部が直線的に上へ伸びる鉢。

89B区SK01(PL. 36) 碗、皿、鉢、播鉢、瓶などが出土した。1は碗IA。外面は灰釉に呉須で割菊文と円形文、見込みに円形文を描く。2~5は碗IB。灰釉が施され外面に濁った紺色の呉須で竹、松、菊など、見込みにはコンニャク版による梅文が描かれる。6は碗II B。7~9は碗IC。10・11は碗IIC。12は碗IIE。かなり鮮やかな呉須で文様を描き、磁胎。13は皿IA。灰釉が掛り、油煙で汚れており灯明皿として使用されたい。14・15は灯明

皿。16は皿IIC。淡い青緑色の釉が厚く掛かる。17~19は皿IA。濁った紺色で文様を描き見込みには五弁花のコンニャク版が押される。20は鉢IA。文様構成は19に似る。21は鉢IB。内面に亀文を描く。22は片口鉢である。黄色味を帯びた灰釉が掛かる。23は厚く黒色の釉が掛り、体部下方には小さな粘土を張り付けた形ばかりの足が着く。露胎部分には厚く煤が付着している。24・25は鬼板化粧の鉄釉播鉢。全体的には、磁器碗の少なさ、鮮やかな発色の呉須が少ないことから19世紀前半に年代比定できよう。

89A区SX01(PL. 37~40) 碗、皿、蓋、鉢、播鉢、瓶などが出土した。26・27は碗IB。外面には単純な文様と見込みに五弁花文がある。28・29は碗IIB。外面の文様がやや複雑になる。30~46は、碗IIC。ただし35はIIA。いずれも外面には松竹梅や花などを描き、見込みにはデザイン化された「寿」字を書く。46はまったく文様を施さない。47・48は碗IID。47は内外は共に手描きで花文や「説」字を描く。底裏に「大日本瀬戸説四造之」と記す。内側口縁部の花房状の文様も手描きなのが注目される。48は文様すべて摺絵。49は碗IC。内外面共に朱と黒の縦の線を交互に引くいわゆる蕎麦手茶碗。50・51は碗IIC。いずれも銅版転写。52~54は碗IE。貫入が入るが陶胎とも磁胎とも区別しがたい。呉須も鮮やかではない。55は摺絵、56は腰部に丸ノミで削り、手描きで細かな花文を描く。57は皿IB。見込みに単純な花文の摺絵を施す。58・59は皿IIB、非常に細かな摺絵を見込みに持つ。60・61も皿IIB、銅判転写。62~64は環状のつまみの蓋。磁器。65は環状のつまみのほかにかえりのある蓋。陶器。66~70はいずれも陶器。71は鉢IIB。72・74は鉢IB。73は鉢IIA。75は鉢IIC。内外面に摺絵を施す。77~80は灰釉を掛けた合子。81~88は灯明具。89は軟質のきめ細かな胎土を持ち、鮮やかな緑色の釉薬をかけた平面D字形の皿。見込みに細い二条の環状の沈線があり、布目の圧痕が残る。90は灰釉の陶器。91は瓦質の三足鉢。外面は細かな線刻を全面に施す。92は仏餉具。陶器。93は四角い筒形の銅色の焼き物。「金刀比羅宮」と刻書される。94は灰釉の水滴。型押し成型。95は灰釉に呉須で竹文を描いた小壺。96は備前写しの瓶。97は厚く褐色釉を施した小型壺。98は腹部に二箇所指で窪みをつけた灰白色釉の瓶。99は瓶。100~102は通い徳利。磁器。103・104は瓶。底部、体部下半に厚く煤がつく。105は片口鉢。106は取手、片口付きの鍋。107・108は土器。焙烙。底裏に三葉文が押印されるものがある。109~112は播鉢。播目の上に丸印にカ、玉などのスタンプが押されるものもある。113~115は鉢IC。117・118は鉢ID。116~121は鉢IE。116は内外面に鉄釉を施す。121は表面は須恵器に似た色合いで、タガも表現し、桶を模している。119は内外面共に褐色釉を施し、外面には黒色釉を流し掛けにする。肩部に浅い沈線が数条巡る。120は鉄釉を施した大型の壺。122は三足と把手がつき全面に緑色釉に鉄釉を流し掛けにする。123は常滑産のアカモノ。蚕火入れ。肩に6箇所の円孔があく。外面はナデ調整、内面は指頭圧痕が認められる。磁器碗の多さ、摺絵、銅版転写が少ないことなどから19世紀後半に比定できよう。

(松原隆治)

(2) 墨書土器・刻書土器(PL. 41~45)

a. 墨書土器(PL. 41~45) 62F区では、第II章第4節で述べたように、遺物集中地点I・II・SX04から計55点の墨書土器と文字が刻書された土器2点が出土した。墨書内容の解釈については第V章の考察で詳述するため、本項では出土地点・時期・文字内容ごとに概略をのべるにとどめる。墨書・刻書とも須恵器・灰釉陶器両者にえがかれているため、本来は墨書土(陶)器とすべきであるが、記述の煩雑さをさけるため、ここでは墨書(刻書)土器に統一しておく。なお、墨書土器の文字内容の判読については国立歴史民族博物館の平川南教授に御指導いただいた。

遺物集中地点I (PL. 41~44) 遺物集中地点Iから出土した41点の墨書土器はIG-78号窯式期・K-90号窯式期・H-72号窯式期のほぼ3時期にわかれる。1~3はIG-78号窯式期の須恵器。1は杯B蓋で外面のやや口縁部寄りに「全」と書かれている。2も杯B蓋。外面に「封」とある。3は杯Aで、底部外面に「×」がえがかれている。4~6は須恵器碗A。時期はK-14~90号窯式期に属する。4は内面に厚く釉がかかる。墨書は底部外面に「夨」とある。5はやはり底部外面に墨書されているが、文字の判読はできない。6は底部外面に「井手」とある。

7以降は灰釉陶器。7は内面のみの全面施釉でK-14号窯式期に属する碗である。底部外面の墨書は文字内容不明。8~26はK-90号窯式期に属し、16以外はいずれも底部外面に墨書されている。8は碗で「寺」。9も碗で「井手」。10は碗で「宅北」と書き、その周囲に蔓で  
花 井 つながった花卉を5つえがく。11は碗あるいは皿で「別院」と書かれている。12は碗で「僧カ」  
勝川 麿 寺 とある。6・8~12はいずれも勝川麿寺あるいはその周辺施設にかかわる墨書内容をもつ  
一群とみることができよう。13は碗で「月カ林」と書かれている。14も碗で「足□」。15は皿  
で「文カ」。16は皿の内面に「中カ」と書かれている。17~26はいずれも底部外面に墨書され  
ているが、文字の判読は不能。

27~41はH-72号窯式期。35以外はいずれも底部外面に墨書されている。27は碗で「全」と  
書かれている。28は碗あるいは皿で「万」、29は碗で「富井」、まず「富」1字を書き、あとで  
「井」を書き足している。30は碗で「太」、31は皿で、「南生」の2文字を組み合わせて1字と  
している。32は碗で「東北」、33も碗で「合」あるいは「人万」である。34は碗で「徳カ」、35は  
転 用 硯 皿で、見込み部に墨を擦った痕跡をとどめた転用硯。見込み部ほぼ中央に「元」と書かれて  
いる。36は碗で「×」である。37~41は判読不能。これらの一群には「全」・「万」・「富」・「太」  
吉 祥 句 など、明らかに吉祥句と考えられるものがめだつ。さらに「南」のような組合せ文字、「東北」  
などの方角を記した墨書など、祭祀的な用途を想像させるものが多い。

遺物集中地点II (PL. 44・45) 遺物集中地点IIからは地点I同様、IG-78~H-72号窯式期に属する墨書土器が9点出土している。42はIG-78号窯式期の須恵器杯Aで、底部外面に「升」と墨書されている。出土当時は判読できたが、現在ではほとんど読めない。

43~46はK-90号窯式期に属する。墨書位置はいずれも底部外面である。43は碗で「井上」、44は皿で「□行」、45は碗で「別」、46は皿で45と同じく「別」と書かれている。これらの

一群の墨書内容にめだつた特徴はみられない。K-90号窯式期の木簡1点と人形5点はこれらの墨書土器と共伴している。

47~50はH-72号窯式期に属する。いずれも底部外面に墨書されている。47は椀で「多万」、48も椀で「物」と書かれている。49・50も椀であるが、文字の判読は不能。「多万」は吉祥文字「万」をさらに強調したものと考えられる。

SX04(PL. 45) SX04にはIG-78号窯式期の須恵器3点と時期不明の灰釉陶器1点がある。51は杯Aで、底部外面に「巫」あるいは「平」と書かれている。52も杯Aの底部外面に「足」と墨書されている。53は須恵器杯の口縁部外面、54は灰釉陶器の底部外面に墨書があるが、文字の判読はできない。SX04出土の人形3点と舟形1点はこの一群の墨書土器にともなう。55はK-90号窯式期の墨書土器であるが、文字の判読はできない。出土地点は不明。

b. 刻書土器(PL. 45) 単なるへう記号が刻まれた土器については土器・陶磁器の項で記述をした。本項ではあきらかに文字が刻まれた土器のみをとりあつかう。56はK-14号窯式期の椀である。見込み部に「勢」と書かれている。57は須恵器椀Aで、底部外面に2文字刻まれているが、判読できない。いずれも焼成前の刻書であり、前述の墨書土器のように用途を示唆する内容のものとは根本的に性格が異なることを附記しておく。(樋上 昇)

### (3) 瓦(PL. 46~50)

本項ではⅢ期とⅣ期に属する瓦について記述する。

a. Ⅲ期(PL. 46~50) Ⅲ期の瓦はいずれも勝川廃寺にもちいたと考えられるものである。したがって勝川廃寺の寺域内である89A・B、90A区から多く出土しているのだが、使用状況をうかがわせる出土例はなく、ほとんどは現代の攪乱ないしⅣ期の廃棄土坑からの出土である。89A区-SX01・SK33、90A区-SX01などがそれにあたる。そのほか、62F区-NR01からも数点出土している。

ここでは主として軒丸・軒平・道具・文字瓦について記述し、丸・平瓦は特に遺存状態の良いものについてのみ説明する。なお、瓦の分類については(財)愛知県教育サービスセンターの『勝川』に準拠している。

軒丸瓦(PL. 46) 1~6は川原寺系の素紋縁複弁8葉蓮華紋の軒丸瓦。中房の蓮子は1+川原寺系4+10である。1・2はKCIa<sub>1</sub>である。2は外区・側面に縄タタキをほどこしたのち、へラケズリをくわえる。中房に範傷が認められる。3~6はKCIa<sub>2</sub>である。4は外区・側面に縄タタキが残る。6は瓦当面に火をうけ、黒色化している。

7~12は藤原宮6233Acと同範の珠紋縁複弁8葉蓮華紋の軒丸瓦である。いずれも小片で藤原宮系全容を知ることができる資料はない。8は珠紋部分に範傷が認められる。

軒平瓦(PL. 47) 13~15はKDIaに分類できる粘土板桶巻づくりによる三重弧紋の軒丸瓦である。いずれも瓦当部凸面に粘土を粘りつけた痕跡が明瞭に認められる。16・17は粘土紐巻づくりのKDIbである。17には粘土紐の接合痕がみられる。

18・19は四重弧紋軒平瓦KDIIである。18の瓦当面は縄タタキののちへラケズリによって調整されており、部分的に縄目が遺存している。

20～27は藤原宮系の偏行唐草紋軒平瓦KDIIIである。20は左側縁、24・27は右側縁が遺存している。20は粘土の接合痕を明瞭にとどめており、製作技法を知るうえで良好な資料である。

平城宮系 28は平城宮系の均整唐草紋軒平瓦KDIVである。瓦当面上半部の接合痕が明瞭に遺存している。

面戸瓦 29・30はいずれも道具瓦である。29は平瓦の右側の隅部を斜めに切り欠く。30は丸瓦を使用した蟹面戸瓦である。

丸瓦(PL. 49) 31・32は丸瓦である。31は狭端部に玉縁をもたない行基葺のKAIIである。凸面は縄タタキののち、横方向にナデ調整。側縁部はへラケズリによる面取りをほどこす。32は玉縁式の丸瓦KA I である。粘土紐の接合痕が残る。

文字瓦(PL. 50) 33は平瓦の破片で、凹面に「恵□」と焼成前にへラで刻書されている。

(樋上 昇)

b. IV期(PL. 50) 89A区SX01からIV期に属する瓦が大量に出土しているが、軒瓦は少ない。34～36は軒棧瓦。34は太めの左巻き三つ巴で、周囲には朱紋はなく、幅広の縁帯をもつ。36は左巻三つ巴で、周囲に12の珠点を配する。焼成は良好で、灰白色。37は軒丸瓦。やはり左巻き三つ巴で、12の珠点を配する。巴の頭の大きさは不揃い。38・39は丸瓦。いずれも焼成は良好。38には2ヵ所の固定用釘穴が穿たれている。41は焼成前に瓦の上面にへら状の道具で「(参)河國 高富カ」と刻書している。42は焼成後に「天」の字を刻している。

(松原隆治)

#### (4) その他(PL. 35)

その他に土製品として土製勾玉・陶錘・不明陶製品が62F区から出土している。

1は土製の勾玉で、NR01の遺物集中地点IVからの出土である。胎土は粗く、ナデ調整で仕上げられている。II-1期に属する。

2～6は陶錘である。主としてSX04から出土している。棒状工具に粘土板を巻つけて成形しており、2・3・5には端部に切り込みがはいる。いずれも灰白色を呈し、焼成は甘い。

7は不明陶製品である。両端が「Y」字状に二股にわかれ、中央で90°ひねった形をしている。全体にへラケズリで調整されており、中央部には円孔が貫通している。胎土は灰釉陶器と共通しており、灰白色を呈する。遺物集中地点の西側SD13の上層から出土しており、時期はK-90～H-72号窯式期に属すると考えられる。

(樋上 昇)

## 2 石製品

ここで扱う石製品については特に時代限定はない。ほとんどが62F区からの出土品である。

### (1) 石器の出土状態について

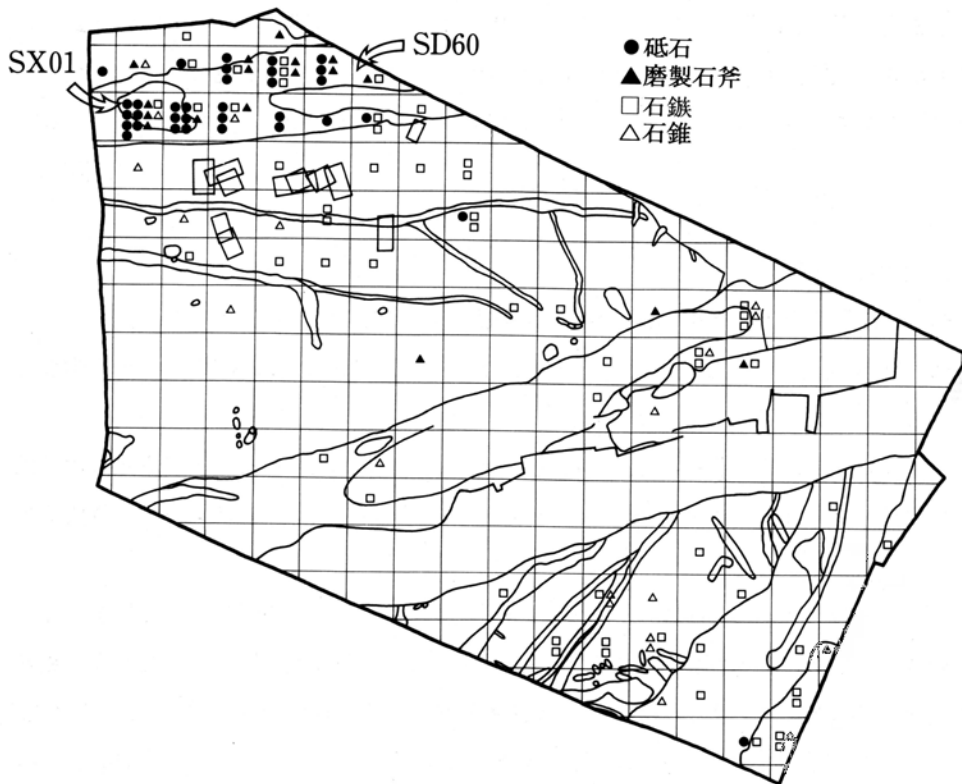
89C区は弥生時代後期以降の居住域であり、ここで出土している石器類相互の関係は特に問題にならないと考える。62F区については、弥生時代中期末の遺構群があり、しかも木製品製作が考えられている地区なので検討する必要がある。

62F区については、砥石・磨製石斧・石鏃・石錐の4種類の分布状態について検討する。石鏃・石錐は特に集中した地点をみせず、新しい遺構や包含層のも含まれているので、出土状況から意味を見いだすことはできない。

それに対し、砥石・磨製石斧(伐採斧・加工斧)は明らかにSD60・SX01付近への集中が顕著である。これらの石器類はSX01付近で木製品の未製品が出土していることやすでに報告された大形板材貯蔵土坑の存在などからして、木製品製作と関連するものである可能性が高い。

つまり、木製品の出土状態については、遺存に関していくつかの条件が伴うのに対して、石器については腐食して残らないというような条件はないことから、SX01付近における木製品製作を強く示唆していると考えられるものである。

以上から、SX01・SD60付近は木製品製作に関する道具類などの廃棄場所と捉える。



第19図 石器の分布状態図

## (2) 石器各説

a. 磨製石器 磨製石器のほとんどは弥生時代に属すると考えられる。種別では伐採斧・加工斧のほか、小破片であるが磨製石剣の破片と思われるものがある。石包丁は出土していない。

伐採斧 敲打痕を残すものと丁寧に研磨されているものがある。1は刃部を欠損している。断面は円形で頭部は小さい。火熱を受けたことによる変色がある。直柄に装着された状態にあったらしく、中を除き頭部と下半部が黒変している。断面形と敲打痕からみて突帯紋土器期以前のものである可能性がある。3・4は断面は偏平であり、1に比べて丁寧に研磨されている。

加工斧 柱状片刃石斧と偏平片刃石斧がある。5は柱状片刃石斧であるが、上下に敲打痕が集中しており、パンチ様の使用が窺える。6・7はえぐり部を有する柱状片刃石斧である。6は身が薄く、前主面刃部はカーブがゆるい。えぐり部も小さく、下部はやや突出している。7はえぐり部、前主面刃部とも6に比べてはっきりしているが、ややすづまりである。再生の程度が進行しているからであろうか。

8～13の偏平片刃石斧は弥生時代の片刃石斧としては通有の形態である。14は刃部が両刃で石材も他と異なる。弥生時代よりも古いかも知れない。

2は一応加工斧に含まれるだろうが、縄紋時代晩期から弥生時代初期の石刀を転用して石ノミ状にしている。

## b. 打製石器

石錐 いずれもチャート製。16は軸の長い形態のものである。15・16は弥生時代にはあまり例をみない。

石鏃 18～21はガラス質石英安山岩製。22から27はチャート製である。ほかにサヌカイト製が若干ある。形態では、無茎鏃は少なく、ほとんどが有茎鏃である。弥生時代に属する資料が大半であろう。朝日遺跡などで目だつ五角形鏃はそれほど出土していない。18・19・22・23は基部両側からの大きな剥離がこの地方の特徴をよく示している。それに対し、チャート製の場合は、茎両側からのくりこみが弱い凸基有茎が特徴的である。25～27は基部両側が細かい剥離の連続となっている。なお、石鏃のなかには石錐に転用されたものが存在する。18は石錐への転用が認められる。

28～35は石鏃未製品であるかどうか問題となる資料である。

31・32は断面形と細かい剥離の連続からみて未製品である可能性が高い。29・30は形態がややいびつで剥離も大きく、上段の石鏃とは趣が異なる。それでも一応未製品あるいは製品である可能性は考えられないことはない。しかし、28は厚みがかなりあり、両側の剥離も強い打撃が加えられてステップが著しく、未製品というよりは別種の石器と考えられる。

33・34は類似した資料で、厚み・形態とも近似しているので、一定の段階にある資料と

いう感じを与える。もう少し剥離が進めば、29・30のような形態になるように見受けられ、上段の石鏃とは異なるグループと考える。

35はいびつで、とうてい石鏃には分類できない。部分磨製異形石器の未製品のようにである。

**大形尖頭器** サヌカイト製。下部の両側(破線部分)には刃潰が加えられている。弥生時代の打製石剣の多くが扁平であるのに比べて、これには厚みがある。石槍としたほうがよいのかも知れない。

**横刃形石器** 37は下辺部を刃部とする剥片石器で、刃部には刃こぼれ状の細かい剥離が観察できる。38はこのままで製品であるのか破損しているのかやや区別がつかかねるけれども、下辺刃部周辺にははっきりとした光沢が観察できる。

しかし、光沢は刃部の小剥離内部にまで及んでいるところとそうでないところがあり、刃部の小剥離が光沢形成後にも生じていることがわかる。

39・40は円礫から打ち剥された剥片で、39では刃部の特定は難しいが、40は下辺部が刃部である。

これらの横刃形石器は前回も多数報告されている。刃部の光沢例からみて弥生時代に属する可能性が高い。

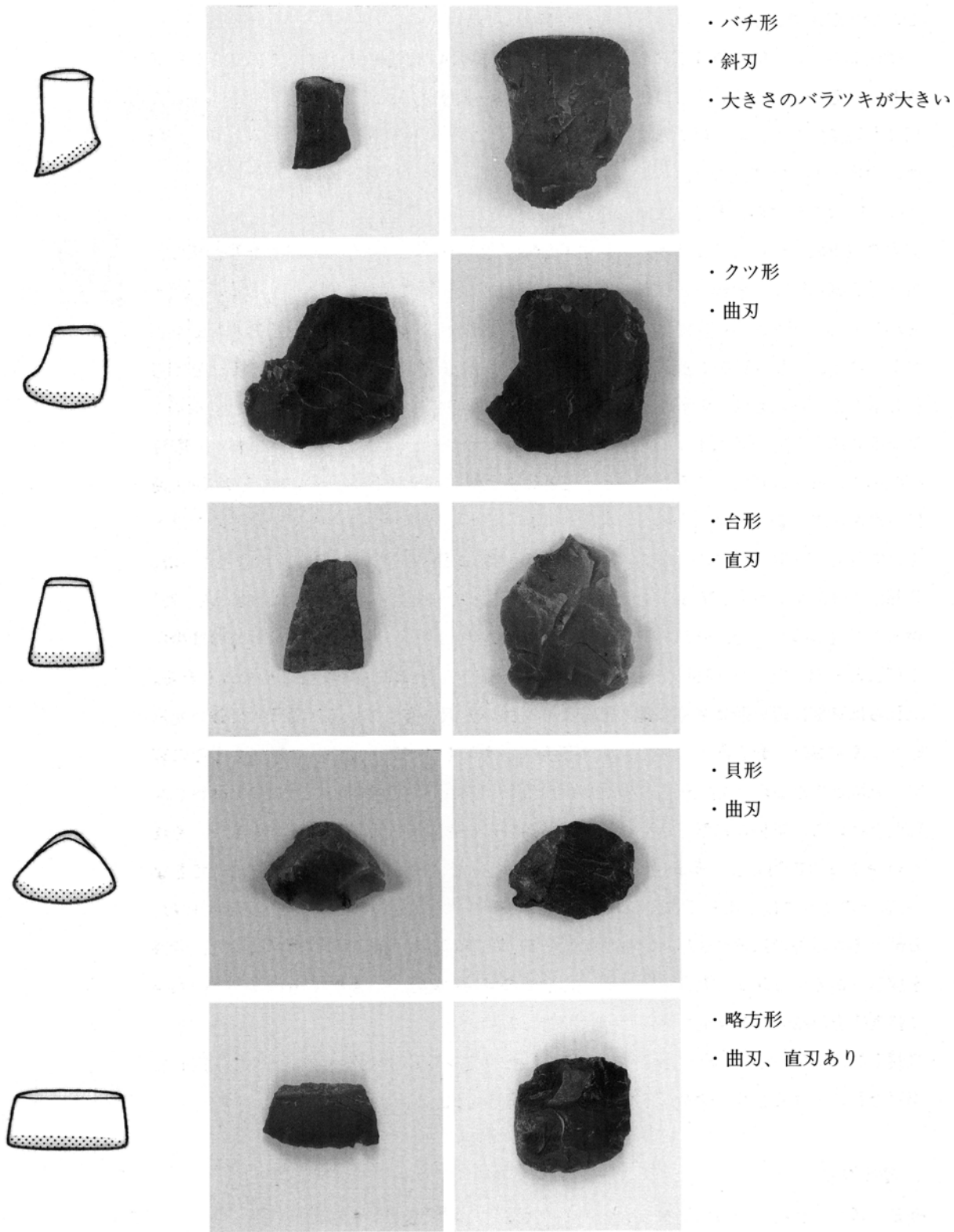
**ナイフ形石器様の剥片石器** 41・42はチャート製の縦長剥片の側縁に小剥離を連続させている資料である。

**石匙** 43・44は典型的な形態である。43は黒色のチャート製で、丁寧な剥離が行われている。縄紋時代前期に属する可能性をもつ。44は安山岩製(サヌカイト?)で、白く風化している。45～47は石匙類似石器で、45・46にはえぐりが施されることによって摘み部に相当する部分が作り出されているようにみえる。47はガラス質石英安山岩製で、石匙というには無理があるかも知れない。

**そのほかの刃部を有する剥片石器** 勝川遺跡ではガラス質石英安山岩よりもチャート製の石核・剥片の出土量が多い。また、それが観察できない場合でも、規格的ではないが、扇形・台形・バチ形などに区分できる傾向が認められ、一定の傾向を有するものとしてまとめることができそうである。これらの剥片は、刃部と想定される部分の反対側(背)が礫面であったり、敲打が集中して潰されているものが多く、指で摘むことを考慮したものであると考えられる。

ここでは、刃部をもつと思われる資料については一応便宜的に「刃器」と呼称し、A類～D類に分類した。また、一定の形態、刃部の調整が明瞭であるものについては一括して「スクレイパー」とした。「スクレイパー」は固有の分類であるから、厳密には不適当な資料も含まれることになる。また、上下に対応する剥離が認められるものについては「クサビ形石器」の可能性を考慮した。

時期については、62F区SX01・SD60周辺出土例のうち木製品細部加工道具であれば、弥生時代中期末ということになる。しかし、それは使用痕分析を経なければならないので、



第20図 刃器(スクレーパー)・剥片の形態区分

※左図アミ点は(推定)刃部。

ここでは断言できない。それ以外についてはよくわからない。

48～55のうち、55のみガラス質石英安山岩で、その他はチャート製である。48～50は下辺部に剥離が行われている。51は平面図右側縁に小剥離が行われ、刃潰しされている。刃部は左側縁にあり、使用による？小剥離が観察される。52は風化の進んだチャートで、剥離は図ほどきれいではない。

53～55はクサビ形石器である。

剥片の使用痕について 剥片に二次加工を加えて刃部を作り出した従来刃器などと呼ばれている石器以外に、刃部と思われる鋭利な部分をもつ例がある。二次加工がほとんど加えられていない剥片が多いが、これらに関し、実体顕微鏡(×64)を用いて使用痕の有無を調べたところ、7点の剥片に使用痕が確認された。7点はいずれもチャート製で(安山岩は風化が進んでいるためか、実体顕微鏡による使用痕の観察はきわめて困難であった)、縁辺に線条痕のみられるもの(PL.57-75)、錐としても使用されたのではないと思われる摩耗痕のみられるもの(62F-308)、ナイフ形石器に似た形状のもの(PL.57-73)など形状・痕跡はさまざま、剥片の利用の仕方にも統一性はみられない。平坦な背部をもつものがほとんどで(PL.57-70・71・72・73・74・76)、自然面の残るものは少ない(PL.57-73・74・76)。刃部は、外湾するもの(PL.57-70・73・74・75・76)と、直線に近いもの(PL.57-71・72)がある。使用痕は、それぞれの剥片につき数ヶ所みられるが、刃部にみられるものは少なく(PL.57-71・73・74・75)、そのほとんどが、稜線あるいは厚みのある部分にみられる。それらは背部に近い所に多く、他の部分よりも強い光沢を有している。こうした強い光沢をもつ使用痕は、光をあてた場合、その角度により強く光が反射するため肉眼でもその存在の確認はできるが、光沢が弱いあるいは範囲が小さい使用痕は肉眼での確認はかなり困難といえる。実体顕微鏡を用いた場合、使用痕の存在や範囲までは確認できるが、それがいかなる対象物により形成されたものであるかまでは倍率が低いため推定すらできない。以上のようにほとんど二次加工を加えずに石器として使用している不定形の剥片には、刃部とそれ以外の部分に使用痕が確認できるが、後者はむしろ装着痕とすべきもので、背部を握る、あるいは何かに装着するといった形での使用に起因するものであろう(その場合に装着痕を形成した物が何であるかは不明である)。

打製石斧 62F区で1点出土している。縄紋時代晩期から弥生時代前期にかけて特徴的な偏平なものとは異なり、やや厚手である。おそらくそれ以前の資料であろう。

### c. 礫塊石器

敲石・砥石・台石 敲石は棒状のものが多い。ほとんど河原石である。

擦った面を有する石器のうち、円礫以外を砥石とした。形状では、大形で厚手のもの、大形で方形をなして偏平なもの、多角柱状のもの、サイコロ状のものがある。ただし、大形で厚手のものは捉え置くことと擦り面のくぼみ方が他とは異なることから台石(石皿)とした。

砥石は砂岩製で粒子の粗いもの、それ以外の石材で擦り面が密で光沢を帯びるものがある。いわゆる荒砥、仕上げ砥というような砥石の使いわけが行われたのか、あるいは磨製石器用の砥石と鉄器用の砥石の区別があったのかどうかはわからないが、光沢を帯びる砥石の擦り面はかっちりとした平面で、砂岩製の場合のようなゆるやかな曲面をもたないので鉄器用の砥石の存在を示唆しているように思える。

59・60は厚手で擦り面の中程が大きく凹面をなしているので台石(石皿)であろう。しかし対応させるべき磨石はほとんど出土していない。

#### d. その他

玉原石 緑色を呈する碧玉の剥片が3点ほど、メノウの剥片が1点出土している。これらが弥生時代に属するかどうかはわからないし、玉砥石といえるようなものも出土していない。一応は勝川遺跡における玉作りの可能性を考慮しておく必要がある。

切子玉 水晶製である。中央に稜をもつ紡錘形をなす。

石帯 雑石による巡方の破片である。

(石黒立人・五藤そのみ)

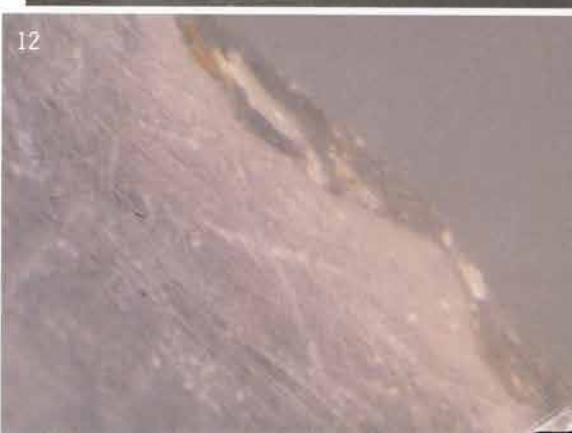
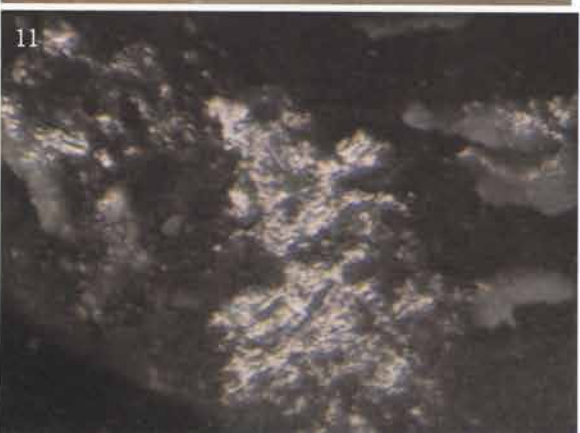
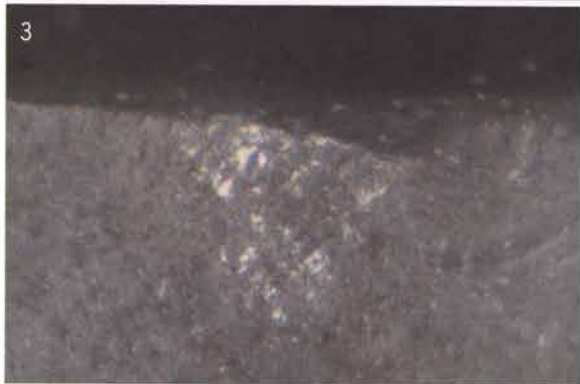
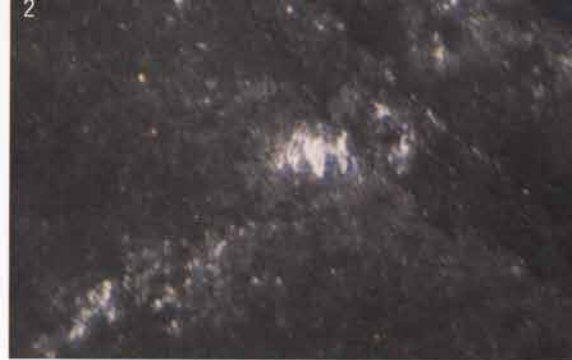
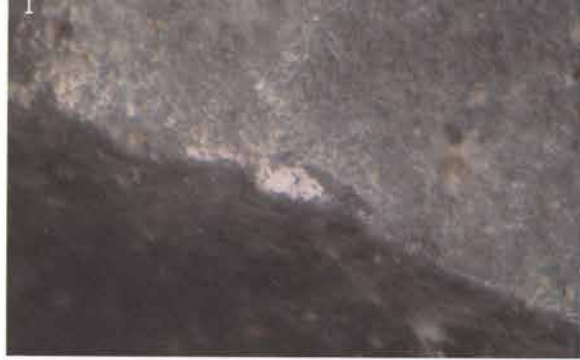


図 版 I 説 明

1. PL.57-70 (×64) 稜線上にみられる痕跡
2. PL.57-71 (×64) 刃部近くにみられる使用痕
3. PL.57-72 (×64) 刃部近くにみられる使用痕
4. PL.57-72 (×64) 稜線上にみられる痕跡
5. PL.57-73 (×20) 刃部近くにみられる使用痕
6. PL.57-73 (×64) ”
7. PL.57-76 (×20) 稜線上にみられる痕跡
8. PL.57-76 (×64) ”
9. PL.57-74 (×20) 背部近くにみられる痕跡
10. PL.57-74 (×64) ”
11. PL.57-75 (×64) 最も厚みのある部分にみられる痕跡
12. PL.57-75 (×64) 刃部にみられる線条痕

### 3 木製品

勝川遺跡62F区出土の木製品については、すでに農耕具を中心として一部を『年報 昭和63年度』で紹介している<sup>1)</sup>。本項では前回に紹介したものも含めて62F区出土の木製品計91点について記述をする。前回報告したなかで、本項と一部時期の所属が異なるものが数点ある。これは遺物の出土状態と共伴遺物を再度検討し直した結果であり、今回の報告がその最終的な結論である。

遺物の説明は時期ごとにおこなう。所属時期と出土遺構は次のとおりで、時期設定および出土遺構は土器の項のそれと共通している。

I 期—SX01・SD60・SD13

II—1 期—NR01遺物集中地点IV

II—2 期—SX03

III—1 期—SX04

III—2 期—NR01遺物集中地点II

なお、各時期における記述は、おおむね祭祀具・農耕具・工具・狩猟漁労具・武器・容器・建築材・その他・用途不明品の順ですすめる。

#### (1) I 期(PL. 58~66)

a. 農耕具 I 期に属する農耕具には広鋤・小型鋤・膝柄股鋤・組合せ鋤がある。

広鋤には上半部の両側縁をえぐり込み、着柄のための隆起部を厚く明確につくりだしたA類(1~3)と、平面形は縦長の長方形で中央やや上寄りに輪郭不明瞭な着柄隆起をマウンド状につくりだすB類(2)の2種類がみられる。いずれも隆起部に柄孔があいていない未製品であるため、完成品がいかなる形態となるかはわからない。ただ、これらはその形状からみて限りなく完成品に近いことは疑いない。ゆえに、完成品はこれらA・B類と大きくその形態を異にすることはないと考えてよい。なお、A類は弥生時代中期には畿内から東海・関東にかけて広い地域で分布している器種である。5は小型鋤。全長11.0cm、刃部の幅わずか9.8cmときわめて小型の鋤でその用途はよくわからない。本遺跡以外には愛知県朝日遺跡・岡島遺跡、静岡県有東遺跡などで出土している。ただし、東海地方以外の地域では出土例は確認されておらず、また弥生時代中期後半にのみ認められる、きわめて特徴的な器種である。6は膝柄股鋤で、軸部がナスビのヘタ状の形態をとらないA類である。軸部は後主面(使用者からみて裏側)の先端と中央に突起をつくりだし、前主面(使用者からみて正面)<sup>2)</sup>は平坦で、この部分に膝柄を組み合わせて鋤として使用する際にズレを防ぐ工夫がなされている。刃部は幅が狭く厚みがある。弥生時代中期に出現する器種で、軸部の形態は東海地方特有のものである。18・19は組合せ鋤である。18では、柄との結合部分はわずかに「U」字状に加工をほどこしている。身の中央部には方形孔があき、柄の先端を差し込むようになっている。18・19とも身の上端部は縁を厚く丈夫につくりだしている。21・23はミカン割り段階の板材である。両者とも全長110cm前後で、広鋤が2ないし3点とれる程度

の長さである。あるいは規格が存在するのかもしれない。

b. 工具 7～9・22は横斧の柄。7は柱状片刃石斧の柄である。台部の下約5cmのところに溝を1条切っている。これに似た例としては大阪府鬼虎川遺跡や長崎県里田原遺跡では横斧の柄のほぼ同じ位置に穿孔をほどこしている。鬼虎川の例では柄の下端部付近にも穿孔があり、この両方の穴に紐をとおして携帯用としたと考えられている。本遺跡の横斧は柄の下端部が欠損しているため対となる溝あるいは穴があったのか否かわからないが、鬼虎川遺跡の例と同様の機能を想定しておく。22は組合せの横斧。台部と柄を別材でつくり、台部に柄孔をあけて組み合わせるきわめてめずらしい例である。やはり柱状片刃石斧の柄である。8・9は横斧の未製品。あるいは鍬の膝柄となるかもしれない。10は縦斧の未製品である。側面の半分が欠損している。握部はほぼ完成しているが、頭部に大きな節があるため加工途中で製作を放棄したのであろうか。

c. 狩猟漁労具 11は丸木弓である。全長55.4cmと短く、一方は欠損している。もう一方は先端を細く削り、弭をつくりだす。13はタモ網の梓木の未製品である。細い丸木をもちい、両端を削り込んでいる。

d. 武器 12は石剣の把頭の未製品と思われる。頭部は段をもち、一回り大きくなっている。一部えぐれがみられるが、加工によるのか節によるのかよくわからない。

e. 容器 20は杓子の未製品である。身部・柄部ともくり込みがなく、柄部との接合部付近に大きな節穴があく。

f. 用途不明品 14は側縁がゆるやかな弧状を呈し、やや厚みを増している。鋤の一部である可能性が高い。15・16は比較的厚みのある板材。いずれも穴があいているが節によるものであろう。鍬の未製品の可能性がある。17は薄い板材。表面に加工痕が明瞭に残っている。

## (2) II-1期(PL. 68~77)

a. 農耕具 II-1期の農耕具には広鍬・膝柄鍬・膝柄股鍬・鍬膝柄・泥除け・一木鋤・竖杵がある。

24は広鍬A類の未製品で、二連につくりだされている。着柄隆起は上端から下端までつながっており、切り離れたのちに形を整えるのであろう。25~30は膝柄鍬である。この時期、畿内では河内平野を中心として弥生時代中期の膝柄鍬A類がナスビ形の軸部をもつB類に変化するのであるが、東海地方では弥生時代中期以来のA類があらたに定型化をみせ、「東海型海型」膝柄鍬として中部・関東・東北にまでその分布範囲を広げる。その形態には、軸部の

先端に膝柄装着時に紐掛け用の溝を切る例が多く、弥生時代中期にみられた軸部中央の突起は消失する・身部は肩を斜めに切り落とす・断面は「へ」の字状を呈し、畿内のナスビ形にくらべて厚みがある、などの特徴があげられる。また、法量もほぼ一定している。30は未製品である。31～33は膝柄股鍬である。膝柄鍬同様ナスビ形の形態をとらないが、刃部はI期のものにくらべて薄く偏平で、幅広化の傾向をみせるなど畿内のナスビ形膝柄股鍬B類の影響がみられる。やはり定型化が著しく「東海型」膝柄股鍬A類として「東海型」膝柄股鍬A類とほぼ同じ分布を示す。34は膝柄鍬・膝柄股鍬とセットになる鍬膝柄である。台部は接着面を平坦につくり、基端部(枝わかれ部分)側に紐掛け用の溝を切る。柄部は火をうけて欠損している。35は泥除けである。上部約3分の1は欠損しており、広鍬との接合部分にゲタとよばれる突起がついていたか否かはわからない。中央下端付近に方形孔があり、柄に装着した際、角度を一定にたもつために紐をとおして柄にくくりつけていたと考えられる。36は一木鋤である。全長106cmと長大で、身部は右側(使用時)のみに足かけをもつ。当初は左右対称であったものが左側が欠損したために加工しなおしている。37は竪杵である。握部から搗部にかけてなだらかに太くなり、搗部はきわめて太い。搗部には面取りの加工痕が明瞭に残る。先端は片方のみが摩滅しており、もう片方は使用された痕跡がない。

b. 工具 38～40は横斧の柄。38・39は製品で、柄部はきわめて長い。石斧用であるのか鉄斧用であるのかよくわからない。40は未製品である。台部が非常に長く、材に弾力性のあるイヌガヤをもちいる珍しい例である。

c. 容器 42は槽である。一部しか遺存していないため全体の形はよくわからない。

d. その他 41はヨコヅチである。敲打部が細く、柄部との境が不明瞭であるため、渡辺 誠氏の分類では豆打ち用にあたる<sup>3)</sup>。

e. 用途不明品 43・44はほぼ同様の形で、片側に細い握部をもち、一方を欠損している。43は握部付近に紋様を刻む。機織具か。45・46は一方の端に突起をつくり、そのやや下側にえぐりをいれた、いわゆる有頭棒である。全長は約145cmでほぼ同じ長さである。建築材、機織具などの用途が想定されているがいずれとも決しがたい。47は裏面が剥離しており梯子の可能性が高いが、梯子としてはステップ部分の幅が狭い。48は断面が台形を呈する厚みのある板材に断面逆台形の溝を切っている。この部分に別材を組み合わせていたと考えられる。どのような用途に使われたのかはわからないが、建築材の可能性が高い。49は一端が弧状を呈する薄板材である。鍬あるいは鋤の破片か。

### (3) II-2期(PL. 78～85)

a. 農耕具 II-2期に属する農耕具には広鍬・狭鍬・膝柄鍬・組合せ鍬・握り棒・鍬膝柄・

鎌柄がある。

50は二通の広鋏未製品である。頭部と刃部が同じ幅で着柄隆起部のみ幅が狭くなる形態で、隆起部は周辺より若干厚みを増している。51は身部と柄が鈍角に着柄された、いわゆる踏み鋏の形態をとる狭鋏である。後主面の先端には段がつく。同様の例は滋賀県妙楽寺遺跡の狭鋏にもみられるが<sup>4)</sup>、どのような意味をもつのかはわからない。着柄隆起はこの時期のものとしては珍しく非常に厚く明確につくりだしている。52は軸部がナスビのヘタの形に似る、いわゆるナスビ形の膝柄鋏B類で、刃部には「U」字形の鉄刃が装着されるようにできている。東海地方ではようやくこの時期にナスビ形農耕具が出現するのだが、すでにナスビのヘタにあたる軸部の突起は退化し、肩部が著しく発達している。これらの要素はこれ以降の東海型ナスビ形農耕具に通有の形態的特徴であり、本遺跡の例はその先駆けといえるものである。刃部の先端が二股にわかれるが機能上特に意味はない。53は組合せ鋏。身部はほぼ長楕円形をしている。54は柄と組み合わせるのではなく、手持ちで土掘り等にもちいる掘り棒であろう。刃部は両面とも削り込まれ、先端は尖っている。握部は断面楕円形である。55は鋏膝柄である。52と組み合わせていたのであろうか。56は鎌の柄の未製品である。先端にある三角形の突起の下部に溝を切り、その部分に鉄刃をはめ込む構造である。側面からみると右側に湾曲しており、右きき用と思われる。

b. 武器 60は楯の一部である。全面に糸かぎりのための小孔が列をなしてあいている。片面は2ヶ所に丹塗りをほどこし、もう一方の面には丹塗り部分のちょうど裏側のみを残して黒漆が塗られている。本来は縦方向でこの倍、横方向では2～3倍の大きさであったと思われる。

c. 容器 19は槽の破片である。ごく一部しかないため、全体の形はわからない。

d. 建築材 66・67は梯子である。66は4段分が、67は5段分が遺存している。67はSX03の遺物集中地点Ⅲで斜面に立てかけられた状態で出土した。使用状況をとどめていたのかもしれない。

e. その他 57～60は木製錘である。丸太の中央上部に穿孔するタイプ(57・58)と丸太の中央に溝を切るタイプ(59)の2種類が出土している。いずれももじり編み用のおもりであるが、この形態の差が何を意味するのかよくわからない。63は机の天板の破片である。裏面に溝が切っており、この部分に足をスライドさせてはめ込むようになっている。コーナー付近に方形孔が貫通している。

f. 用途不明品 62は平面形態が長楕円形で、周縁部が若干立ち上がっており、外側から10ヶ所に小孔がつけられている。舟形あるいは容器の蓋などの機能が考えられる。64・65は

両端部に細工をほどこした小形の板材である。機織具の部品であろうか。

(4) III-1期(PL. 86~92)

a. 祭祀具 68~70は人形、71は舟形である。68は厚みのある短冊形の板で、頭部の側縁に切り欠きをもつ。腕は切り込みにより、足は「V」字状に削りだしている。顔はすべて線刻で表現され、墨描きをもちいていない。その特異な形状からみて未使用の荷札木簡を人形に木簡の転用転用したものと思われる。69は小形の人形。圭頭で、腕は切り込み、足は短い。顔は墨描きで表現されている。胸部に「×」の形の痕跡が残っており、何か別のものに縛りつけて使用された可能性が高い。70は大形の人形で、胸部から上の破片。頭部には髻あるいは冠をあらわしたらしい突起がある。顔は墨描きによるとおもわれるが、すでに遺存していない。71は舟形である。両端をやや尖らせた長楕円形で、内部をわずかにえぐり込み、平底のきわめて簡素なつくりである。

b. 農耕具 農耕具としては馬鍬(代掻)と大足の杵木がある。72は10本歯の大形の馬鍬で、4本分(うち1本欠)の歯と引き手の一方が遺存している。73は大足の杵木。両端が櫛状に湾曲している。側面には小形の方形孔が10ヶ所、大形の方形孔が2ヶ所あいている。全長77cm。

c. 容器 76は折敷の底板。楕円形で両側に方形の突起がつく。側板を結わえるための桜皮が残る。77は曲物の底板。裏面に「⊕」の焼印が押してある。4方に桜皮が残る。

d. その他 74・75はヨコヅチ。74は大形で敲打部が太く、敲打部と柄部に境が直角になるタイプ。ワラ打ち用である。75は小形で敲打部は細い。敲打部と柄部の境は直角である。豆打ち用にあたる<sup>5)</sup>。

e. 用途不明品 78は厚みのある円形の板で、中央に方形孔があく。曲物の類とは異なるため、用途はよくわからないが、容器の蓋である可能性がある。79は上下に切り欠きをもち、十字に組み合わせてもちいる琴柱形に似た木製品である。上辺部の両端に目釘穴がある。他に類例がなく、用途は不明である。80・81は両端に切り欠きをもつ短冊状の板材。機織具の部品か。

(5) III-2期(PL. 93・94)

a. 木簡 圭頭で側縁に切り欠きをもつ荷札木簡。「□□五斗□」と書かれており、白米の付け札である<sup>6)</sup>。

b. 祭祀具 83~86は人形である。ほぼ同形で、いずれも腕は方形の突出部により表現され

る。83・84はすでに顔の墨描きは遺存していない。83は頭部に浅い「U」字形のえぐり込みがある。85・86は2点1組で出土している。85は髪・顔・髭・衣服を墨描きで表現し、背部には文字が書かれている。文字の判読はしづらいが、「柚」が最も近い字形である。86は頭部を欠くが、顔は墨描きで表現され、胸部に文字が書かれている。「楊」が字形としては最も近い<sup>7)</sup>。2点1組でもちいられた人形の胸部と背部のそれぞれに1字ずつ文字が書かれるのは他に例がなく、人形による祭祀を考えるうえできわめて貴重な資料といえよう。

2点1組の  
用 例

c. 容器 87～91は曲物の底板。87～89は円形、90は隅丸方形である。89・90は側板をとめる桜皮が残る。91は中央部に焼けた鉄棒によってあけられた円孔がある。南 博史氏の研究により、曲物製の甑の底板であることがあきらかとなった<sup>8)</sup>。(樋上 昇)

- 註) 1. 樋上 昇1989「木製農耕具の地域色とその変遷」『年報 昭和63年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター  
2. この前主面・後主面の名称は佐原 眞1977「石斧論」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』に準拠している。  
3. 渡辺 誠1985「ヨコヅチの考古・民具学的研究」『考古学雑誌』70—3  
4. 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1980「妙楽寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』VIII—1  
5. 註3に同じ  
6. 奈良国立文化財研究所 加藤 優氏、国立歴史民族博物館 平川 南氏の御教示による。  
7. 平川 南氏の御教示による。  
8. 南 博史1991「遺跡出土の曲物製コシキ」『朱雀』京都文化博物館研究紀要 第4集

## 第IV章 自然科学的分析

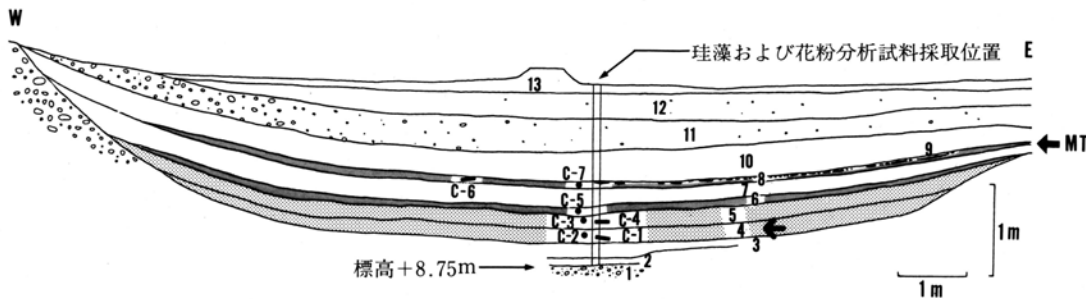
### 1 愛知県勝川遺跡の地層および層序

#### 1. 地形

勝川遺跡は春日井市南西部の勝川町地内に所在し、第四紀更新世後期の低位～最低位段丘を構成する鳥居松面上から庄内川水系地蔵川の沖積面にかけての比高約2mの起伏のある地形面に立地している。

勝川遺跡62F区内には、昭和の中頃まで機能していたとされる地蔵川の旧河道が段丘崖に沿って北東から南西にかけて存在している。この旧河道はわずかに位置を変えながらも、奈良・平安時代から弥生時代後期にまで遡りうるものであることが発掘調査の結果判明した。また、弥生時代中期の頃の地蔵川の河道はさらに北寄りに位置し、段丘崖の直下を流れていたことが1987(昭和62)年度の勝川遺跡62F区の調査によってはじめて明らかになった。なお、勝川遺跡以外では、弥生時代～江戸時代に至る顕著な歴史時代の旧河道の存在は知られていない。

勝川遺跡東方の沖積地一帯では、縄文時代に遡る二時期の浅谷地形の存在が、名古屋環状2号線内の町田・松河戸両遺跡の5年間(1987～1991年)の発掘調査によって明らかになった。その一つは、町田遺跡62B区・松河戸遺跡62E区などに代表される下底を縄文時代



第21図 町田遺跡62B区における浅谷地形(埋積浅谷 I)の断面図

〈断面図凡例〉: 1. 暗灰色砂礫層 2. 暗緑灰色砂質シルト層 3. 植物片まじり暗灰色シルト層 4. 暗灰色泥炭質シルト層(泥炭 I) 5. 暗灰色泥炭質シルト層(泥炭 II) 6. 暗色灰腐植質シルト層(黒バンド I) 7. 暗灰色シルト質粘土層 8. 黒灰色腐植質シルト層(黒バンド II) 9. 橙色を帯びた淡灰色砂質火山灰層 10. 暗灰色シルト層 11. 礫まじり暗灰色砂質シルト層 12. 鉄斑まじり暗灰色砂質シルト層 13. 細礫・砂まじり淡褐色シルト層  
<sup>14</sup>C年代測定値: C-1. 5,260±100y. B. P. (GaK-13806) C-2. 5,000±100y. B. P. (GaK-13805) C-3. 4,640±130y. B. P. (GaK-13807) C-4. 4,470±130y. B. P. (GaK-13808) C-5. 4,400±100y. B. P. (GaK-13809) C-6. 3,770±120y. B. P. (GaK-13811) C-7. 3,120±120y. B. P. (GaK-13810)  
 C-1.4.6: 木片 C-2.3.5.7: 泥炭 MT: 松河戸火山灰層  
 矢印は昆虫試料(縄文時代中期)採取層準

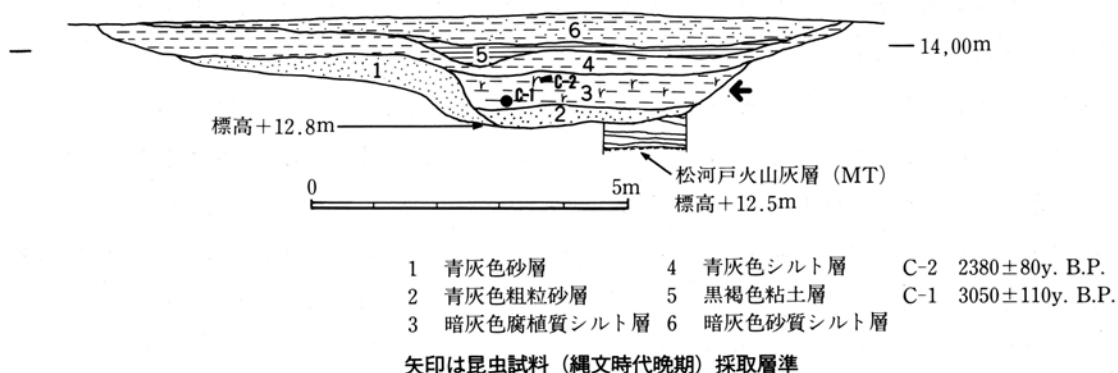
**埋積浅谷 I** 中期の未分解の泥炭層に埋積された比高 2 m 以上に達する浅谷地形 (埋積浅谷 I : 第 21 図)、もう一つは松河戸 89Dc 区に代表される縄文時代晩期の比較的分解の進んだ植物片まじりの腐植質シルト層に埋積された比高約 1.8 m の浅谷地形 (埋積浅谷 II : 第 22 図) である。これらの埋積浅谷の成因は、勝川遺跡をはじめ春日井市内の沖積地に位置する遺跡の立地や、勝川遺跡群のみならず、広く完新世の古環境変遷を考えるにあたってきわめて重要な手がかりを与える。これまでのところ、埋積浅谷 I は太田ほか (1982, 1990)・森ほか (1991)・縄文中期および弥生の小海退 愛知県埋蔵文化財センター (1991) によって指摘された「縄文中期の小海退」、埋積浅谷 II は古川 (1972)・井関 (1974)・海津 (1988) らによって報告されてきた「弥生の小海退」に対応したものであると考えることができる。

## 2. 地層の層相および層序

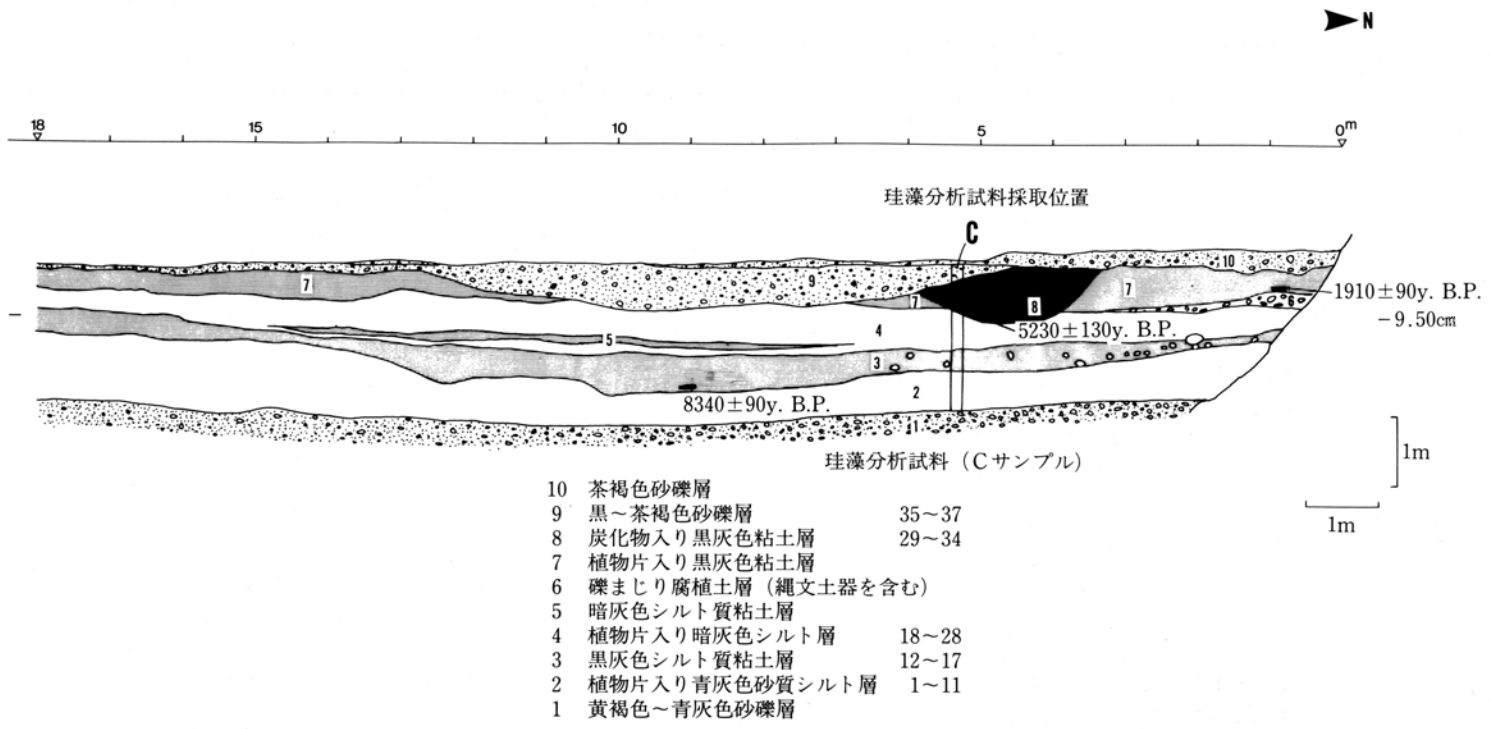
勝川遺跡の基盤層は、深掘りトレンチによる土層観察の結果、第 23 図のように堆積していることが明らかになった。

**勝川遺跡の基盤層** 最下位にはチャート・砂岩・溶結凝灰岩礫を主体とする砂礫層が認められた。これは遺跡北方の鳥居松段丘の堆積物を構成する砂礫層とほぼ同一のもので、砂礫層上面はその後の河川の影響を受けて一部、移動・再堆積した可能性も考えられるが、肉眼的には鳥居松段丘の砂礫層と区別することはできない。

その上位には青灰～暗灰色のシルト層と、二層の黒灰色の腐植質シルト層の互層がみられた。勝川遺跡の深掘りトレンチ内で観察できた地層は、これより東方の町田・松河戸両遺跡にも共通して認められ、黒灰色の腐植質シルト層は、町田遺跡の PS トレンチで見られた二層の分解の進んだ黒色泥炭層 (黒バンド I および II) と共通するものであるとみなす



第 22 図 松河戸遺跡 89Dc 区における浅谷地形 (埋積浅谷 II) の断面図



第23図 勝川遺跡深掘りトレンチ断面図

ことができる。そして、町田遺跡では上位の黒色泥炭層（黒バンドII）中より火山灰層（松河戸火山灰；MT）が発見されている（森ほか、1990）。勝川遺跡では火山灰層は発見されなかったものの、地層の層相や微化石層序等から勝川遺跡の基盤層を構成する地層は、町田・松河戸遺跡の遺跡基盤層と対比して考えることができる。

なお、勝川遺跡の鳥居松段丘崖に接する部分では、上位の黒灰色腐植質シルト層直下の砂礫層中より縄文土器片が何点か発見された。土器片は摩滅が著しいものの、縄文時代前期にあたるものももっとも多く含まれている。

弥生時代中期末の土器片を含む地層は暗灰色の砂礫層、木製品の貯蔵施設内では礫まじりの黒灰色の砂質シルト層である。その後、弥生時代後期～奈良・平安時代にかけて勝川遺跡には継続して旧河道の存在が認められ、河道内の堆積物は概ね植物片まじりの腐植質シルト層が卓越する。その結果、奈良時代から平安時代にかけて一時期、砂礫層が河道を埋めて流速が早くなったほかは、ゆるやかな環境下で地層の堆積が進行したことが伺われる。

河道内の堆積物中からは祭祀遺物を含む多くの考古遺物とともに、大型植物遺体や昆虫化石が多数発見されている。主な大型植物遺体は、弥生時代中期ではオニグルミ・モモ・クリ・ウメ・トチ・ヒョウタン・ウリの仲間および焼け米などの人間により栽培ないし採集された種子に加え、ジュズダマ・オナモミ・ヤマザクラ・ブドウ属・スゲ科の種子、バラ科の刺などの遺跡周辺の自然植生に由来する植物遺体が発見された。弥生時代後期ではモモ・オニグルミ・エゴノキ・ヤマザクラ・ヒメビシ・ブドウ属の種子およびアカガシ亜属の球果が、また古墳時代では、ヒョウタン・モモ・ウリの仲間のほか、アカガシ亜属やコナラ亜属の球果・エゴノキ・カヤ・ヤマザクラなどの種子、およびヒシ・ヒメビシ・ヒ

シモドキなどの水生植物の種子が多数検出された。奈良・平安時代では、ヒョウタン・モモ・ウメのほか、コナラ亜属（少なくともクヌギを含む）・アカガシ亜属・カエデ科・ヤマザクラ・エゴノキ・クマヤナギ・センダン、および多数の水生植物（ヒシ・ヒメビシ・ヒシモドキ）の種子が発見された。

エゴノキを利用した漁法

また、奈良・平安時代の旧河道内の腐植質シルト層中には、エゴノキの種子が多量に検出され、奈良・平安時代の頃にはエゴノキに含まれるアルカロイド系の毒素（エゴサポニン）を利用した漁法がこの河川で行われていたことが考えられる。

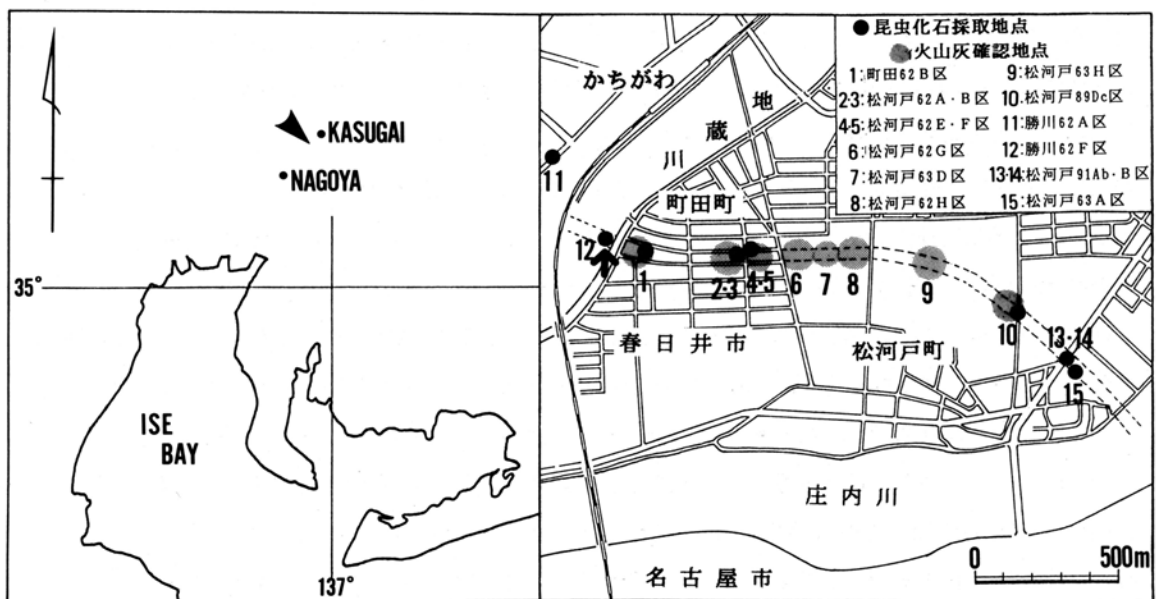
### 3. 松河戸火山灰層について

#### A. 火山灰層の産状

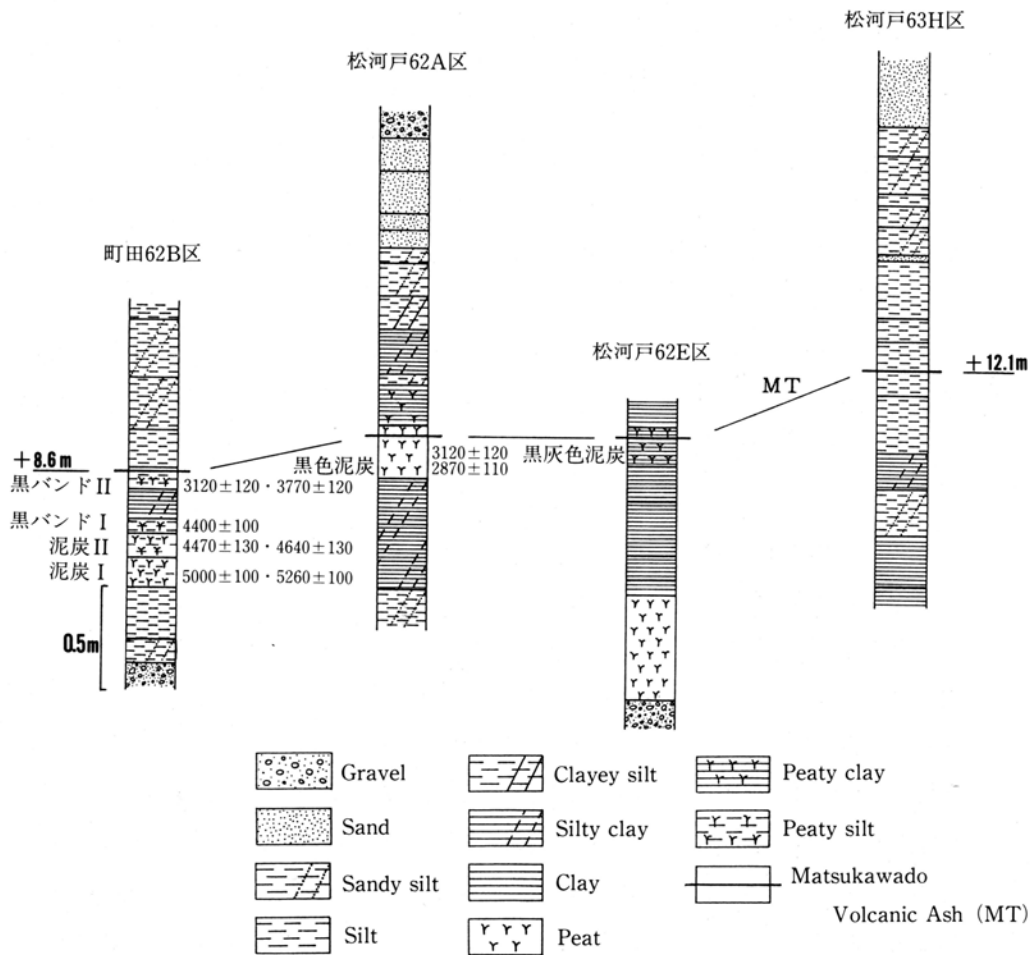
火山灰層は町田遺跡1調査区、松河戸遺跡9調査区の計10調査区より発見された（第24図）。勝川遺跡においても分解の進んだ上位の黒色泥炭層中に火山灰層が発見される可能性が高く、勝川遺跡の層序を考えるうえできわめて重要であることより、その産状および特徴について簡単にふれる。火山灰層の分布は確認されたものだけでも、少なくとも東西約1.5km、南北約300mにわたり、遺跡の基盤層を構成する砂礫層が低くなり浅谷状の地形を形成している部分を中心に、その上位に堆積した泥炭層に挟まれて、レンズ状に堆積していることが確認された。以下に、主な調査区における火山灰層の産状について述べる。

町田62B区

町田遺跡62B区では、二層の未分解の泥炭層（泥炭Ⅰ・泥炭Ⅱ）、その上位に分解の進んだ二層の黒色泥炭層（黒バンドⅠ・黒バンドⅡ）が堆積しており、黒バンドⅡ最上部およびその上限より1～1.3cm下位の層準から火山灰層が検出された（第21図および第25図）。火山灰層の上部には、縄文時代晩期の条痕文系の土器片を含む地層、古墳および奈良～平



第24図 火山灰の採集・確認地点および昆虫分析試料の採取地点  
(矢印はいずれも勝川遺跡の位置を示す)



第25図 主な調査区における地質柱状図

安時代の遺物包含層などがのっている。火山灰層の分布高度は標高9.50～9.80mで、やや赤味を帯びた淡灰褐色の細粒ガラス質火山灰からなる。層厚は3～15mm（平均4mm）、泥炭層（黒バンドII）最上部にレンズ状ないし塊状に堆積していて、層厚は所によって変化する。

松河戸遺跡62A区では、最下位に緑灰色シルト層および暗灰色シルト質粘土層、その上位に黒色泥炭層の堆積が見られ、この泥炭層（黒バンドII）の上部から火山灰層が検出された（第25図）。泥炭層の上位にはラミナの発達した泥炭質粘土層、その上に水田耕作土がのっていて、水田耕作土の最下部から15世紀の遺物が出土した。火山灰層は細～中粒・淡赤褐色ガラス質で、層厚2～21mm（平均3～5mm）、ところによって塊状ないしはブロック状を呈し、断続的ではあるが調査区東半部を中心に広範囲に分布する。ここでの火山灰層の分布高度は標高10.40～10.50mである。

松河戸62A区

松河戸遺跡62E区では、最下位の砂礫層より上位に縄文時代中・後期の土器片を挟在する未分解の厚い泥炭層の堆積が見られる。その上に暗褐色および灰褐色の粘土層の互層がのり、さらに上位に黒灰色泥炭層が堆積している。黒灰色泥炭層（黒バンドII）の上限より1～2cm下位の層準に、淡赤橙色ないし桃白色の細粒ガラス質火山灰層が検出された（第25図）。火山灰層の分布高度は標高10.40～10.45m、最大層厚は22mm、平均の厚さは3～4mmで、層状に点在するのが観察される。火山灰層の検出地点は浅谷状に掘りこまれた部分にあたり、これより東方では高度を上げ、標高約12mの微高地を形成する。この微高地上から縄文時代中期の集石遺構が検出され、その付近より縄文時代中期（一部、前期および後

松河戸62E区

期を含む)の多数の石器およびフレイク・チップ等が出土した。

## B. 火山灰層の年代および対比

**火山灰層の年代** 松河戸火山灰層の放射性炭素年代は、町田・松河戸両遺跡よりそれぞれ火山灰層を挟む泥炭層(黒バンドII)の年代測定値が得られた。その値は、町田遺跡では火山灰層直下で $3120 \pm 120$ y.B.P. (GaK-13810)、火山灰層下位の泥炭層中の木片では $3770 \pm 120$ y.B.P. (GaK-13811)、松河戸遺跡では同じく火山灰層直下で $3120 \pm 120$ y.B.P. (GaK-13521)、火山灰層下位の泥炭層中の木片では $2870 \pm 110$ y.B.P. (GaK-13525)と求められた。遺物では、町田遺跡で火山灰層下位の砂礫層上面より縄文時代中期末の土器片、火山灰層上位のシルト層より縄文時代晩期の土器片が検出された。また、松河戸遺跡では、火山灰層の下位より縄文時代中・後期の土器片が多数発見され、火山灰層の上位の地層からは弥生時代中期～古墳時代にかけての土器片が検出されている。以上の事実から、松河戸火山灰層の降灰年代は3120年前か、それよりいくぶん新しいものと推定され、これは縄文時代後期と晩期の境界付近にあたる。

**火山灰層の性質** 鉱物学的には、松河戸火山灰層中の火山ガラスは吉川(1976)にもとづく主に中間型ガラス(Ca型+Cb型)で構成され、屈折率は1.499～1.504(モード値:1.501～1.502)、重鉱物として角閃石・黒雲母・単斜輝石などを含んでいる。

調査区	Mineral composition(%)				Heavy Mineral composition(%)						Glass shape(%)						Refractive index of volcanic glass
	Gl	Pl	Qz	HM	Am	Opx	Cpx	Bt	Ap	Op	Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	
松河戸62A	90	4	2	4	38	26	9	10	1	16	3	8	50	6	9	24	1.499～1.504(1.501～1.502)
松河戸62E	89	7	2	2	45	33	9	3	1	9	2	11	52	12	8	15	1.497～1.505(1.501～1.503)
松河戸63A	85	12	1	2	39	35	10	6	1	9	1	4	62	12	6	15	1.499～1.504(1.502)
町田62B	82	13	1	4	39	39	8	4		10	4	12	59	12	5	8	1.498～1.504(1.501～1.502)

Gl:火山ガラス Pl:長石 Qz:石英 HM:重鉱物

Am:角閃石 Opx:斜方輝石 Cpx:単斜輝石 Bt:黒雲母 Ap:燐灰石 Op:不透明鉱物

**火山灰層の給源** 給源については、松河戸火山灰層の重鉱物組成は、三瓶・太平山降下火山灰層の中海・宍道湖湖底下における重鉱物分析結果(正岡,1972)、三瓶火山室ノ内カルデラから得られた同火山灰層の鉱物組成の分析結果(三浦・林,1987)とよく調和しており、 $^{14}\text{C}$ 年代値(松井・井上,1970)においても矛盾しないことより、本火山灰層は三瓶・太平山火山灰層(< $3680 \pm 90$ y.B.P.)を含め、山陰に起源を持つ火山灰層に対比される可能性が考えられるが、伊豆半島に起源を有する東方から西方に降灰したとされるカワゴ平バミス(約3000年前)についても検討を加える必要があろう。

なお、松河戸火山灰層は1991年11月、濃尾平野北西部の愛知県一宮市尾張病院・山中遺跡の深掘りトレンチ内の標高+1.0mの泥炭層中から、およびそれに先立つ1990年10月にはやはり濃尾平野西部にあたる岐阜県大垣市荒川遺跡の標高+2.5mの腐植質シルト層中からも見いだされている(未公表;大垣市教委の御好意による)。

**松河戸火山灰層の対比** また、松河戸火山灰層に対比可能な火山灰層として、放射性炭素年代および火山ガラスの性質・重鉱物組成等から、森ほか(1990)は大阪市港区天保山のボーリング試料中より

発見された難波累層最上部火山灰層(吉川ほか、1986)、および滋賀県琵琶湖底200mボーリング試料中のBB7火山灰層(YOSHIKAWA、1982)をあげた。その後吉川(1991)は、松河戸火山灰層がBB7火山灰層および難波累層最上部火山灰層と対比可能であることを確認するとともに、松河戸火山灰層と対比できる火山灰層として同じく琵琶湖高島沖ボーリング試料中のBT1火山灰層(吉川、1991)を追加し、報告している。(森 勇一)

## 謝 辞

松河戸火山灰の分析・地形調査および大型植物遺体同定にあたっては、以下の方々にお世話になった。記して謝意をあらわす。新井房夫(群馬大学) 吉川周作(大阪市立大学)・井関弘太郎(中部大学)・海津正倫(名古屋大学)・岡田篤正(愛知県立大学)・檀原 徹(京都フィッシュン・トラック)・粉川昭平(大阪千代田短期大学)・中井正幸(大垣市教育委員会)・伊藤隆彦(弥富町歴史民俗資料館)・宮田英嗣(大阪市立大学)・鬼頭 剛(九州大学)。

## 文 献

- 愛知県埋蔵文化財センター(1991) 朝日遺跡I。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集, 第2章一遺跡の概観(1. 地理学および地質学的接近), 10-11.
- 新井房夫・町田 洋(1980) 日本のテフラ・カタログI—西日本~東北地方の第四紀後期示標テフラの岩石記載的性質一, 軽石学雑誌, 6, 65-76.
- 井関弘太郎(1974) 日本における2000年B.P.ころの海水準. 名古屋大学文学部研究論集, LXII, 155-176.
- 神谷友和・後藤浩一・森 勇一・山仲廣司・伊藤隆彦(1989) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集, 町田遺跡 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 119p.
- 加藤芳朗(1985) 静清平野下の火山灰—偏東風に乗って富士, 天城から飛来一. 静岡地学, 52.1-3.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ, 古文化財の自然科学的研究, 同朋舎, 865-928.
- 正岡栄治(1972) 重鉱物組成からみた中海・宍道湖湖底下の第四紀火山灰, 第四紀研究, 11, 61-69.
- 松井整司・井上多津男(1970) 三瓶火山噴出物の<sup>14</sup>C年代, —日本の第四紀層の<sup>14</sup>C年代(56), 地球科学, 24.112-114.
- 三浦 清・林 正久(1987) 火山活動史からみた三瓶火山の鉱物特性, 山陰地域研究(自然環境), 3.67-94.
- 森 勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣(1990) 愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界・付近に位置する火山灰層について, 第四紀研究, 29.17-23.
- 森 勇一・前田弘子(1991) 珪藻分析からみた愛知県土田遺跡における古環境. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集, 土田遺跡II, 17-25.
- 太田陽子・松島義章・森脇 広(1982) 日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題, —Atlas of Holocene Sea-level Records in Japan—を資料として, 第四紀研究, 21.133-143.
- 太田陽子・海津正倫・松島義章(1990) 日本における完新世海面変化に関する問題, 第四紀研究, 29.31-48.
- 海津正倫(1988) 濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化, 名大文学部研究論集, CI.285-303.
- 吉川周作(1976) 大阪層群の火山灰層について. 地質学雑誌, 32.497-515.
- YOSHIKAWA. S. (1982) Volcanic Glass in the 200m Core Sample from Lake Biwa. *Paleolim. Lake Biwa Japan. Pleist.* 9.35-49.
- YOSHIKAWA. S. (1984) Volcanic Ash Layers in the Osaka and Kobiwako Groups, Kinki District, Japan. *Jour. Geosci Osaka City Univ.* 27,1-40.
- 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和(1986) 近畿地方中部に分布する後期更新世の火山灰層について. 地球科学, 40.18-38.
- 吉川周作・井内美郎(1991) 琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序, 地球科学, 45.81-100.

## 2 珪藻分析

### 1. 分析試料

珪藻の分析は、勝川遺跡62F区の北東から南西にかけて延びる旧河道内のAサンプル(SX03)、Bサンプル(旧河道内の調査区北東角)、および調査区西部の深掘りトレンチ(J地点)内のCサンプルの計3サンプルについて実施した(第26図)。

Aサンプル(11試料)は古墳時代中期(5世紀末頃)の旧河道を埋積した腐植質シルト層(層厚60cm)、Bサンプル(11試料)は弥生時代後期から古墳時代初頭頃の遺物を包含する同じく腐植質シルト層(層厚27.5cm)より採取した(図27)。Cサンプル(37試料)については、柱状図(図23)に示した勝川遺跡基盤層の灰白ないしは黒灰色シルト層~弥生時代中期末の旧河道に至る連続試料(層厚約210cm)より採取した。

結果は、(株)パリノサーベイの分析結果をふまえ、筆者(森)による勝川遺跡における珪藻の分析データを加えて述べる。分析方法および珪藻の生態性などについては、文末に掲げた文献によった。なお、分析試料の時代は、主に土器編年にもとづいている。

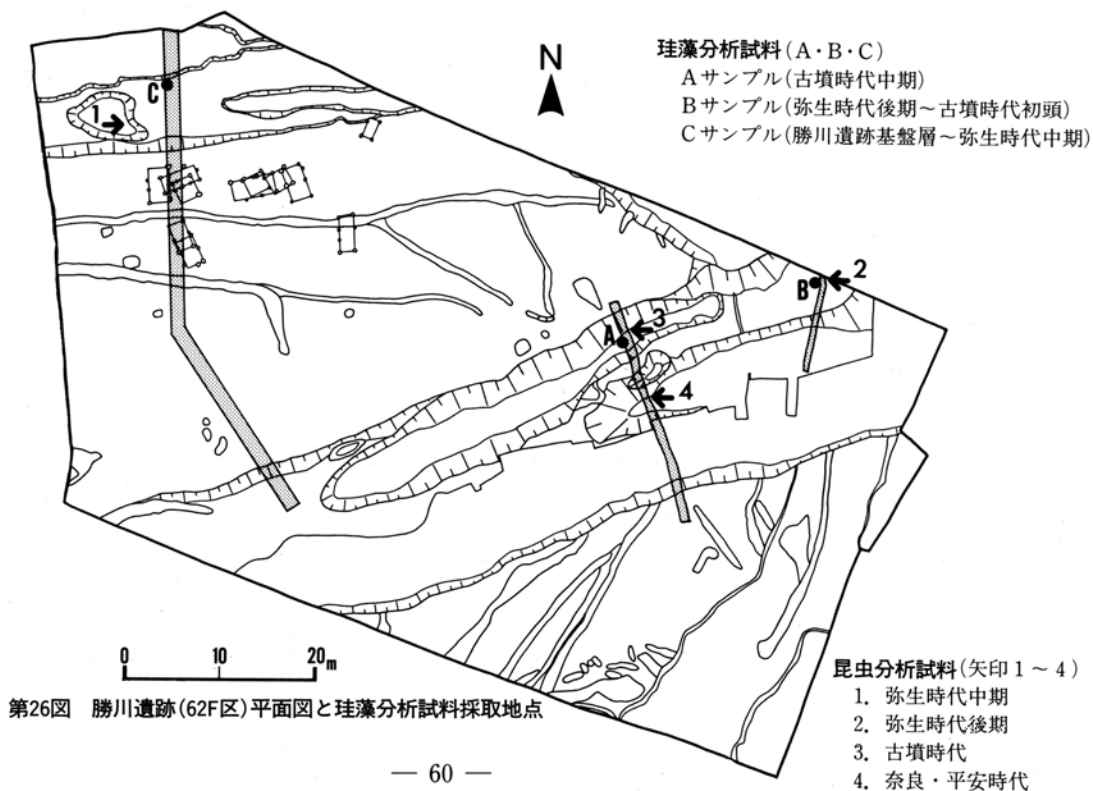
### 2. 分析結果

珪藻化石群集

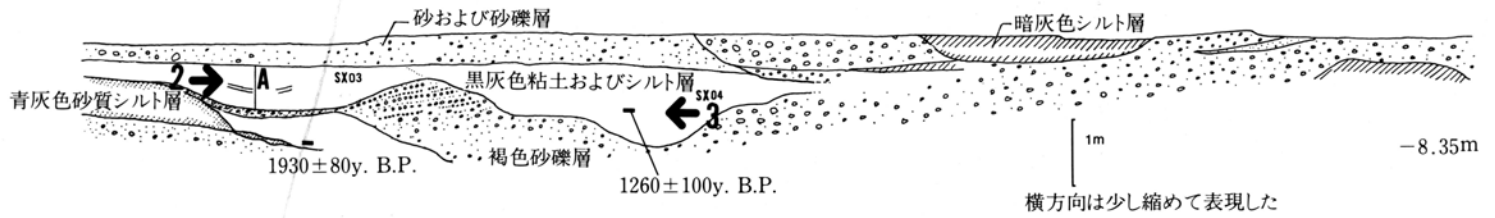
以下に、各サンプルごとの珪藻化石群集の特徴を簡単に記す。データについてはAサンプルのみ図表で示した(第28図)。

#### 1) Aサンプル

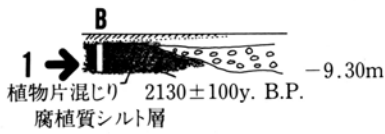
出現種の大部分は貧塩性種(淡水生種)よりなり、33属・148種・35変種・1品種・未同定種7種の計191分類群の珪藻化石が産出した。完形殻の出現率は50~80%と高かった(第



A サンプル(古墳時代中期)



B サンプル(弥生時代後期～古墳時代初頭)



矢印地点は昆虫分析試料採取層準

1. 弥生時代後期 2. 古墳時代 3. 奈良時代

第27図 勝川遺跡(62F区)珪藻分析試料採取地点の断面図

28図)。なお、試料中には、*Thalassionema nitzschioides*などの海生種や*Denticulopsis lauta*などの絶滅種が伴われるが、これは庄内川上流部に分布する新第三紀の地層から二次的に混入した誘導化石と考えられる。珪藻化石群集は、KTA(勝川遺跡A地点珪藻化石群集帯：以下同様) — I・II・III帯に区分することができる。

KTA-I帯(試料番号1・2)

塩分(塩類)・pH・流水に対する適応性は、貧塩不定～嫌塩性・好塩性、好止水性～流水不定性種が多産することにより、特徴づけられる。主要産出種は、流水不定性で好湿地性種湿地性珪藻群集の*Eunotia pectinalis* var. *minor*, 好止水性種の*Fragilaria brevistriata*, *F. construens* var. *venter*, 弱酸性の止水域に多い*Tabellaria fenestrata*, *Eunotia lunaris*, *E. lunaris* var. *subarcuata*などである。

KTA-II帯(試料番号3～6)

生態性の特徴は嫌塩性種・好酸性種が減少し、貧塩不定性・好アルカリ性種および好止水性種が増加することである。主な産出種は、好止水性種の*Aulacosira italica*, 流水不定性種汚濁性珪藻群集の*Eunotia pectinalis* var. *minor*, *Navicula pupula*などである。

KTA-III帯(試料番号7～11)

貧塩不定・好アルカリ性・好止水性種が優占することに特徴づけられる。主要産出種は、好止水性で浮遊生種の*Aulacosira ambigua*が優占し、これに次いで好止水性種の*Aulacosira pensacolae*-*A. granulata*, *Fragilaria construens* var. *venter*, 流水不定性種汚濁性珪藻群集の*Rhopalodia gibberula*, *Pinnularia gibba*などが検出された。なお、優占種の*Aulacosira ambigua*は、現在は有機汚濁の進んだ汚れた水域から特徴的に産出する好汚濁性種とされている種でもある(渡部ほか、1986)。

## 2) Bサンプル

出現種の大部分は貧塩性種（淡水生種）よりなり、31属・105種・36変種・1品種・未同定種7種の計149分類群の珪藻化石が産出した。完形殻の出現率は50～80%と高かった。なお、本地点でもA地点と同様に、*Thalassionema nitzschioides*などの海生種や*Denticulopsis lauta*などの絶滅種がわずかに検出された。珪藻化石群集の特徴から、KTB-I・II帯に分帯される。

### KTB-I帯（試料番号1～10）

貧塩不定・好アルカリ性・好止水性種が優占することに特徴づけられる。主要産出種は、好止水性で浮遊生種の*Aulacosira ambigua*が優占し、これに次いで好止水性種の*Aulacosira pensacolae*-*A. granulata*, *Gomphonema acuminatum*, *G. gracile*, *Eunotia duplicoraphis*, 流水不定性種の*Eunotia pectinalis* var. *minor*, *E. incisa*. *Gomphonema augur* var. *gautieri*などが検出された。

### KTB-II帯（試料番号11）

塩分(塩類)・pHについての適応性はI帯と大差はないが、流水に対しては好止水性種が減少し流水不定性種と好流水性種が増加する。また、好汚濁性種が増加することも本帯の特徴である。主な産出種は、流水不定性種の*Nitzschia palea*. *Actinella brasiliensis*, *Achnanthes hungarica*, 好止水性種の*Aulacosira pensacolae*-*A. granulata*. *A. ambigua*, *Tabellaria fenestrata*, 好流水性種の*Gomphonema parvulum*, 陸生珪藻の*Navicula confervacea*等が検出された。これらのうち、*Nitzschia palea*, *Achnanthes hungarica*, *A. ambigua*, *Gomphonema parvulum*, *Navicula confervacea*は、有機汚濁の進んだ汚れた水域に特徴的に検出される好汚濁性珪藻群集

汚濁性種である（渡辺ほか、1986）。

## 3) Cサンプル

試料番号16以降（3層上部）から珪藻化石が検出されたが、それ以外の15試料は珪藻化石の産出がきわめて少なかった。出現種の特徴は、誘導化石と考えられる海生種の海生誘導化石 *Thalassionema nitzschioides*や、絶滅種の*Denticulopsis lauta*などを高率に産した。出現種は、44属・121種・25変種・未同定種17種の計163分類群である。完形殻の出現率は、誘導化石を含む中部や珪藻化石が非常に少ない下部では25%前後と低率だったが、現地性の群集を含む上部では50～75%と高かった。次に、珪藻化石群集（下位よりKTC-I・II・III帯）の特徴について述べる。

### KTC-I帯（試料番号16～28）

*Thalassionema nitzschioides*や*Denticulopsis lauta*などの誘導化石が優占することに特徴づけられる。

### KTC-II帯（試料番号29～34）

好止水性で浮遊生種の*Aulacosira pensacolae*-*A. granulata*が優占することに特徴づけられる。

### KTC-III帯（試料番号35～37）

珪藻化石群集は急変し、陸生珪藻(小杉, 1986)が多産することにより特徴づけられる。主 陸生珪藻  
な産出種は、陸生珪藻の *Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*,  
*N. mutica*などが検出された。水生珪藻(小杉, 1986)は、流水不定性種で好汚濁性種でもある  
*Nitzschia frustulum*, *Navicula veneta*, 好流水性種で同じく好汚濁性種でもある *Gomphonema*  
*parvulum*などが高率で検出された。

### 3. 古環境

勝川遺跡の堆積物を、東側に隣接した町田・松河戸両遺跡の遺跡基盤層とくらべてみると、勝川遺跡深掘りトレンチ内の3層(黒灰色シルト質粘土層)および7層(暗灰~黒灰色シルト質粘土層)は、放射性炭素年代値ではいくぶん異なるものの町田・松河戸両遺跡に連続して堆積している2枚の腐植質シルト層(黒バンドIおよびII)と、層序・層相・微化石(珪藻・花粉・植物珪酸体)および考古遺物などのうえから対比することができる。

町田および松河戸遺跡において、下位の黒灰色腐植質シルト層(黒バンドI)は4400± 100y. B. P. (GaK-13809)、上位の暗灰色腐植質シルト層(黒バンドII)は3120±120y. B. P. (GaK-13810) という放射性炭素年代値が得られており、このデータより類推すると、勝川遺跡の基盤層の堆積年代は縄文時代中期~後・晩期、およびそれ以前に遡るものと推定される。

勝川遺跡基盤層の年代

次に、これらの放射性炭素年代値および土器編年より得られたデータをもとに、珪藻化石の群集解析にもとづく勝川遺跡周辺の古環境の変遷について述べる。

#### 1) 弥生時代中期以前

深掘りトレンチ内の2および3層は珪藻化石の産出がきわめて少なく、珪藻分析から堆積環境について考察することは困難である。その上部の4層中の試料(KTC-I帯)は、大部分が新第三紀層からの二次化石によって占められ、本層の堆積時には庄内川上流部に分布する新第三紀層の削剝が激しく、鳥居松段丘崖直下にあたる勝川遺跡周辺の沖積地においては河川の運搬や堆積作用が相当速かったものと推定される。

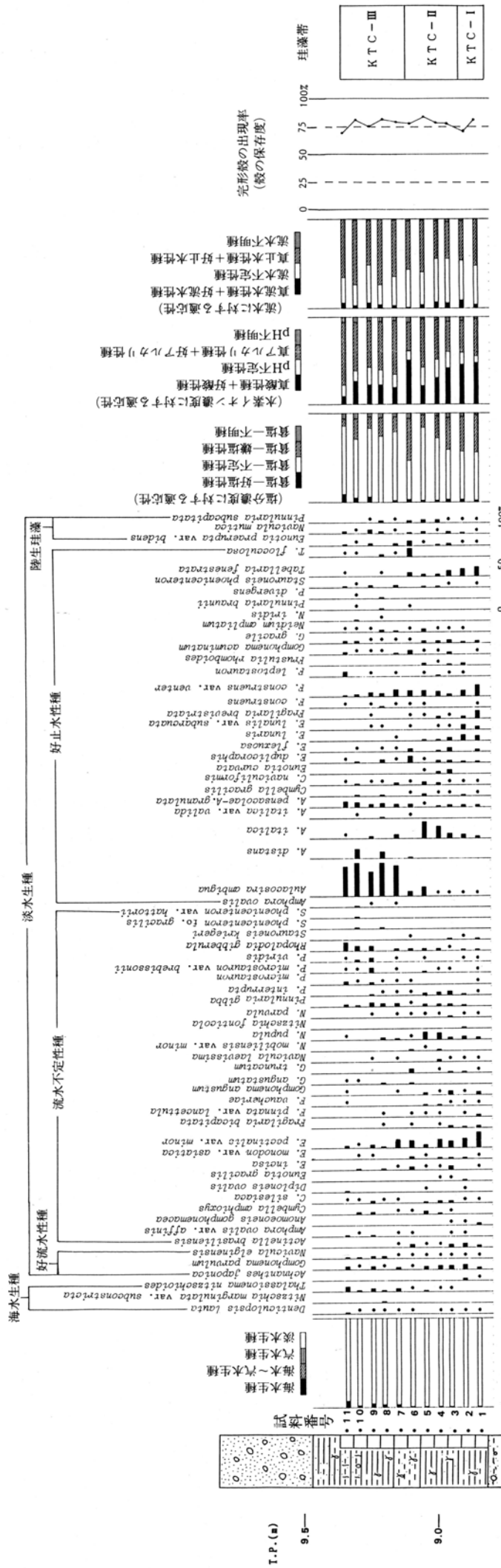
削剝および運搬

8層内の試料(KTC-II帯)では浮遊生珪藻が優占し、一時期池沼のような止水的環境が存在していたものと推定される。8層が弥生時代中期以前のおそらく縄文時代晩期の頃(?)の土坑埋土と考えられていることから、土坑内には一定期間水が溜っていた可能性が考えられる。

#### 2) 弥生時代中期の頃

弥生時代中期末を遡る一時期、河川の運搬作用が活発化して、段丘直下の旧河道周辺に30~60cmの砂礫層が堆積した。珪藻化石群集(KTC-III帯: 試料番号35~37)は本砂礫層に急激に変化し、陸生珪藻が優占することから付近の比較的乾いた場所から陸生珪藻が二次的に砂礫層内にもたらされたか、洪水や流水の影響で砂礫層が堆積したのち、何らかの影響で地表に露出し、陸生珪藻が繁殖するのに適した好氣的環境になったものと考えられる。

好氣的環境



・1%未満の出現を示す。  
 (各種産出棒グラフ及び海水・汽水・淡水生の棒グラフは全体基数、右側の貧塩性種の各生態性に対する適応性の棒グラフは貧塩性種基数として表示した。なお、いずれも100個体以上検出された試料について記した。)

第28図 勝川遺跡(Aサンプル)における主要珪藻化石群集の変遷

T.P. (a)

9.0

9.5

弥生時代中期末になると、旧河道内に木製品の貯蔵施設? (SX01) が造られた。ここからは多量の農具の未製品 (一部完成品) とともに、焼け米、モモやクルミなどの種子、食糞性昆虫やゴミムシ科などの昆虫化石が発見された。埋土中の珪藻化石群集からは、汚濁環境  
汚濁環境  
濁水域を好む種群が多数見いだされ、水質は富栄養に傾いていたものと思われる。その後、この施設は流水によってもたらされた多量の砂礫に再び覆われた。

### 3) 弥生時代後期～古墳時代初頭の頃

珪藻化石群集の特徴から上部の試料番号10を境として2帯に分帯され、下部のKTB-I帯 (試料番号1～10) は富栄養止水域を特徴づける種群が優占することから、本層堆積時  
富栄養水域  
は流水のほとんどない安定した富栄養止水域であったことが考えられる。しかし、上部のKTB-II帯 (試料番号11) の頃になると、好止水性種は減少し、好汚濁性種・流水不定性種・好流水性種が増加することから、止水域は浅くなったかあるいは縮小し、流水の影響を受ける不安定な水域へと変化したものと思われる。

### 4) 古墳時代中期の頃

珪藻化石群集の特徴から、KTA-I帯 (試料番号1・2) の堆積環境は、弱酸性の貧栄養水域で湿地～水はけの悪い沼沢地のような環境であったものと推定される。なお、好流水性  
湿地帯ないしは沼沢地  
性の珪藻が少ないことから、この時期、流水の影響はあまりなかったものと考えられる。

KTA-II帯 (試料番号3～6) の頃になると、浮遊生の珪藻が増加することから、湿地～沼沢地的環境から止水的環境へ移行する移行期的な堆積環境が存在したものと考えられる。さらに、KTA-III帯 (試料番号7～11) になると好酸性種が減少し、富栄養止水域に多い浮遊生種が優占すること、好アルカリ性種や好塩性種が増加することなどから弱アルカリ性を呈した富栄養止水域へ移り変わったものと思われる。このように旧河道周辺の環境は、時代が進むにつれて湿地帯ないしは沼沢地のような環境から、やや水深のある止水的環境へと多様に変化したことが考えられる。 (森 勇一)

## 文 献

- Cholnoky, B.J. (1968), Die Okologie der Diatomeen Binnengewässern. Cramer, Germany. 669p.
- Foged, N. (1954), On the Diatom flora of some Funen lakes. *Fol. Limnol. Scandinavica*, 6, 76p.
- Desikachary, T.V. (1987・1988・1989), Marine Diatoms of the Indian Ocean Region. *Atlas of Diatoms*, Madras Science Foundation Madras, pls. 1-809.
- Hendey, N. I. (1964), An introductory Account of the smaller algae of British coastal waters, Part V : Bacillariophyceae (diatom). Her Majesty's Stationary Office, London, 317p.
- Hustedt, F. (1930), Bacillariophyta. *Die süsswasser Flora Mitteleuropas*, 10, G. Fischer. Jena, 466p.
- Hustedt, F. (1937-1938), Systematische und Ökologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra. nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch. Hydrobiol. Suppl.*, 15, 131-177.
- Hustedt, F. (1927-1966), Die Kieselalgen Deutschland, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. *Kryptogamen Flora von Deutschland* Teil 1～3, Leipzig, W. Deutschland. 920p., 845p., 816p.

- 小杉正人 (1986), 珪藻の古生態学上の基礎的問題, *Diatom* 2, 169-174.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986 · 1988), Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, *Pascher A, Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 876p., 596p.
- 森 勇一 (1989a), 町田遺跡における珪藻遺骸群集, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集, 町田遺跡報告書, 64-73.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1990a), 愛知県岡島遺跡における珪藻遺骸群集, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集, 岡島遺跡報告書, 43-47.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1990b), 清洲城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸 (付・昆虫遺体), 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集, 清洲城下町遺跡報告書, 103-108.
- Patrick, R. and C.W. Reimer (1966 · 1975), *The Diatoms of the United States. Monogr. Acad. Nat. Sci Philadelphia*, no.13, Philadelphia. 688p., 213p.

### 3 花粉分析

#### 1. 試料

試料採取は、勝川遺跡東側に隣接した町田遺跡 (IKC62B区) 西端部に発達した浅谷地形 (埋積浅谷 I にあたる) を横切るP-Sトレンチ中央部より行った (第21図)。試料採取地点は、勝川遺跡よりわずかに100m東に位置しているのみで、勝川遺跡の古環境変遷を考察するうえで密接に関連しているものと思われる。分析試料は、2層から12層にかけて20cm間隔の連続試料をもとに、室内で2cm間隔に細分して使用した。なお、花粉分析については俵パリノ・サーベイに依頼し、その分析結果をもとに筆者 (森) が以下のようにまとめた。また、同じ試料より珪藻および植物珪酸体の分析を実施した (森, 1989) ので、その分析結果を図31に示した。

分析試料

#### 2. 分析方法および結果の表示法

花粉・孢子化石の抽出方法は以下のとおりである。試料約10~15gを秤量し、フッ化水素 (HF) 処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行なう。次に重液分離 (ZnBr<sub>2</sub>, 比重2.2) を行い、有機物を濃集する。その残渣について、アセトリシス処理ののち、KOH処理を行って腐植酸を溶解した。検鏡はプレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての種類 (Taxa) について同定・計数した。

分析方法

次に、古植生の検討を行うために花粉化石群集変遷図を作成した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総花粉・孢子数から不明花粉数を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

栽培植物とされるイネ属花粉の出現層位や産状を調べるために各層について数点の試料を選択し、イネ属の同定を行った。イネ属の同定はノマルスキー微分干渉装置を使用し、外膜の表面模様や発芽孔の構造・粒径などを観察して行った。結果は鈴木・中村 (1977) にしたがって、イネ科花粉総数に対するイネ属花粉数の比率 (イネ属比率) で表示した。

イネ属花粉

#### 3. 分析結果

全試料を通じて検出された花粉・孢子化石数は多く、また化石の保存状態も良かった。花粉化石の群集組成は、主要な樹木花粉化石の産状に基づいて10層下部を境に、2局地花粉化石群集帯 (下位よりIKC-I・II帯とする) に分帯することができる (第29図)。

IKC-I帯 (2~8層: 試料番号1~46)

総花粉・孢子に対する樹木花粉の構成比は65~95%と高率である。樹木花粉では、落葉広葉樹のコナラ亜属が優占することで特徴づけられる。照葉樹のアカガシ亜属も10%前後と比較的安定した出現率を示す。このほか出現率は低率であるが、ウルシ属・モチノキ属

コナラ亜属の優占

数が減少する傾向が認められ、アカメガシワ属やツル性木本のツタ属などが検出されなくなる。またクマシデ属—アサダ属・エノキ属—ムクノキ属は漸減し、逆にハンノキ属が増加する。このことより4層中・下部を境として、下位をIKC-IIa亜帯（試料番号1～19）、上位をIKC-IIb亜帯（同20～46）に細分することができる。

IKC-II帯（10層～12層：試料番号47～78）

総花粉・孢子数に対する樹木花粉の比率は低下し、草本花粉が高率を占めるようになる。

アカガシ亜  
属の増加

I帯で優占していたコナラ亜属は減少傾向を示す。逆にアカガシ亜属が増加傾向を示し、11層ではコナラ亜属より高率に出現するようになる。また針葉樹花粉のスギ属・イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が漸増傾向を示す。I帯で随伴していた種類のうち、モチノキ属・カエデ属はほとんど検出されなくなる。またI帯上部で検出されなくなったツタ属は、再び検出されるようになる。

イネ属の増  
加

草本花粉・シダ類孢子の出現傾向は、樹木花粉の変遷と同様に10層下部で大きく変遷する（第30図）。8層まで低率であったイネ科が10層になると増加傾向を示し、11層以浅では40%前後の安定した出現率を示すようになる。増加するイネ科の中には栽培植物とされるイネ属が含まれており、その比率も11層にかけて増加し11層以浅では50%以上を占めるようになる。

また、水生植物花粉は8層あるいはその前後の地層で変化する。7層まではヒツジグサ・コウホネ属・フサモ属などの比較的水深のある水域に生育する浮葉・沈水植物の種類が出現したが、それ以浅では減少しオモダカ属などの小型の浅い水域あるいは湿地に繁茂する抽水植物が出現するようになる。11層になると抽水植物の種類は増え、イボクサ属・ミスアオイ属などが出現するようになる。

#### 4. 考 察

##### A. 古植生

町田遺跡で認められた花粉化石群集帯の時期は、放射性炭素年代からI帯とII帯の境界が約3200年前頃と考えられる。I帯の下限は不明であるが、4層の年代が約5100年前であることから、それ以前のものとして推定される。II帯の上限についても不明であるが、13層が考古学的に15世紀とされていることから、それ以前であるものと考えてよい。この年代をもとに古植生を考察する。

落葉広葉樹  
の成立

2層堆積時から8層が堆積する約3200年前頃までは、遺跡周辺の段丘上から低地にかけて広範囲にナラ類などを中心とした落葉広葉樹林が成立していたと推定される。その森林には照葉樹のカシ類も混生していた可能性がある。後述するように調査地点付近の堆積環境は安定していたと考えられることから、随伴するアカメガシワ属・エゴノキ属・トチノキ属や、ツル性木本のツタ属なども遺跡周辺の森林構成種であった可能性が高い。このように考えると、当時の森林は現在の冷温帯や暖温帯に分布する種類が混生する、樹種構成の多様な森林であったことが考えられる。また総花粉・孢子数の構成比で樹木花粉が圧倒

的に多いことと、アカメガシワ属やツル性木本のツタ属などが林縁の植生を構成する種類であることから、森林が調査地点の近くまで迫っていたものと推定される。

7層からは縄文時代中期の土器片が出土しており、また松河戸遺跡では微高地上から縄文時代中期の土器片とともに、同時代の集石遺構が検出されている。この当時の森林構成種であるコナラ亜属・アカガシ亜属・クリ属・トチノキ属・アカメガシワ属などは日本各地の縄文時代の遺跡からしばしば出土する食用植物であり、エゴノキ属やアカメガシワ属などは二次林に多い樹種でもあることから、森林植生に対して人類の干渉が及んでいた可能性が考えられる。

当時の基底礫層上に形成された浅谷付近の環境は、コウホネ属・ヒツジグサ属・フサモ属・サンショウモなどの浮葉・沈水植物が繁茂する流れの少ない湿地帯ないしは池沼のような環境を呈していたものと考えられる。その縁辺には抽水植物やツル性草本のゴキヅル属などが生育していたことが推定される。約5000年前から3200年前頃の層準（INC-I b帯；4層上半部～8層）ではハンノキ属が連続して高率に出現し、湿地帯のまわりにハンノキ林が成立していたことが考えられる。

ハンノキ林  
の発達

しかし7層下部から中部層が堆積する頃には、周辺地域の水位低下とあいまって浅谷地形の堆積が進み、分解の進んだ黒泥層（黒バンドIおよびII層）の堆積する水深の浅い沼沢地に移り変わったものと考えられる。花粉分析ではこの時期、浮葉・沈水植物などが減少している。

そして、約3200年前以降の10層が堆積するころになると、遺跡周辺の植生は大きく変化する。調査地付近に生育していたヒツジグサ属などの浮葉・沈水・浮水植物が生育しなくなり、かわって抽水植物の繁茂する低湿地的な環境に変化したものと考えられる。また、草本花粉が高率に出現することから、町田遺跡周辺まで迫っていた森林が減少あるいは後退したものと推定される。本層位が稲作農耕の開始時期にほぼ相当することを考慮に入れるならば、これは人類による大規模な植生干渉に起因している可能性が高い。

人類による  
植生干渉

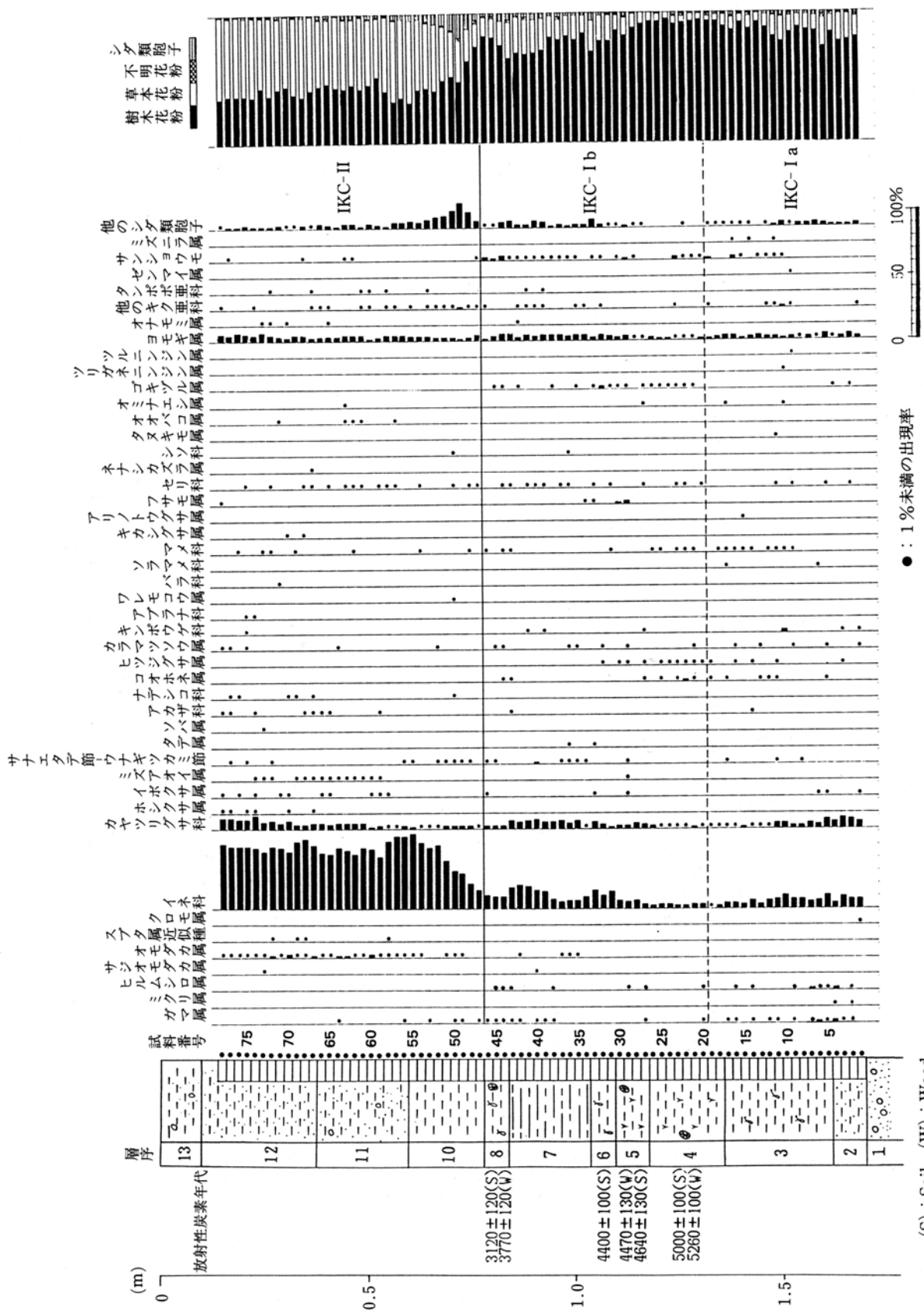
## B. 低地における稲作農耕について

栽培植物とされるイネ属花粉は10層から出現開始する（第30図）。過去の堆積物においてイネ属比率が30%以上を示す層準では、その周辺で現在に近い集約度で稲作が行われていたとみなしてよいとしている（鈴木・中村、1977）。これにしたがえば、10層上部堆積時にはすでに町田遺跡周辺で稲作が行われていた可能性が高いと思われる。しかし、稲作が開始されてからかなりの期間は堆積物中に残存するイネ属花粉量が低いとされていること（中村、1984）を考慮すると、本地点における稲作の開始層準はそれより下部である可能性が高い。10層下部はイネ属比率が低く、水田では人為的な攪乱によりイネ属花粉が下方に移動する（鈴木・中村、1977）ことを考えあわせると、10層下部では稲作の可能性は低いと考えられ、本遺跡における稲作開始層準は10層中部と考えた方がよい。（森 勇一）

## 文 献

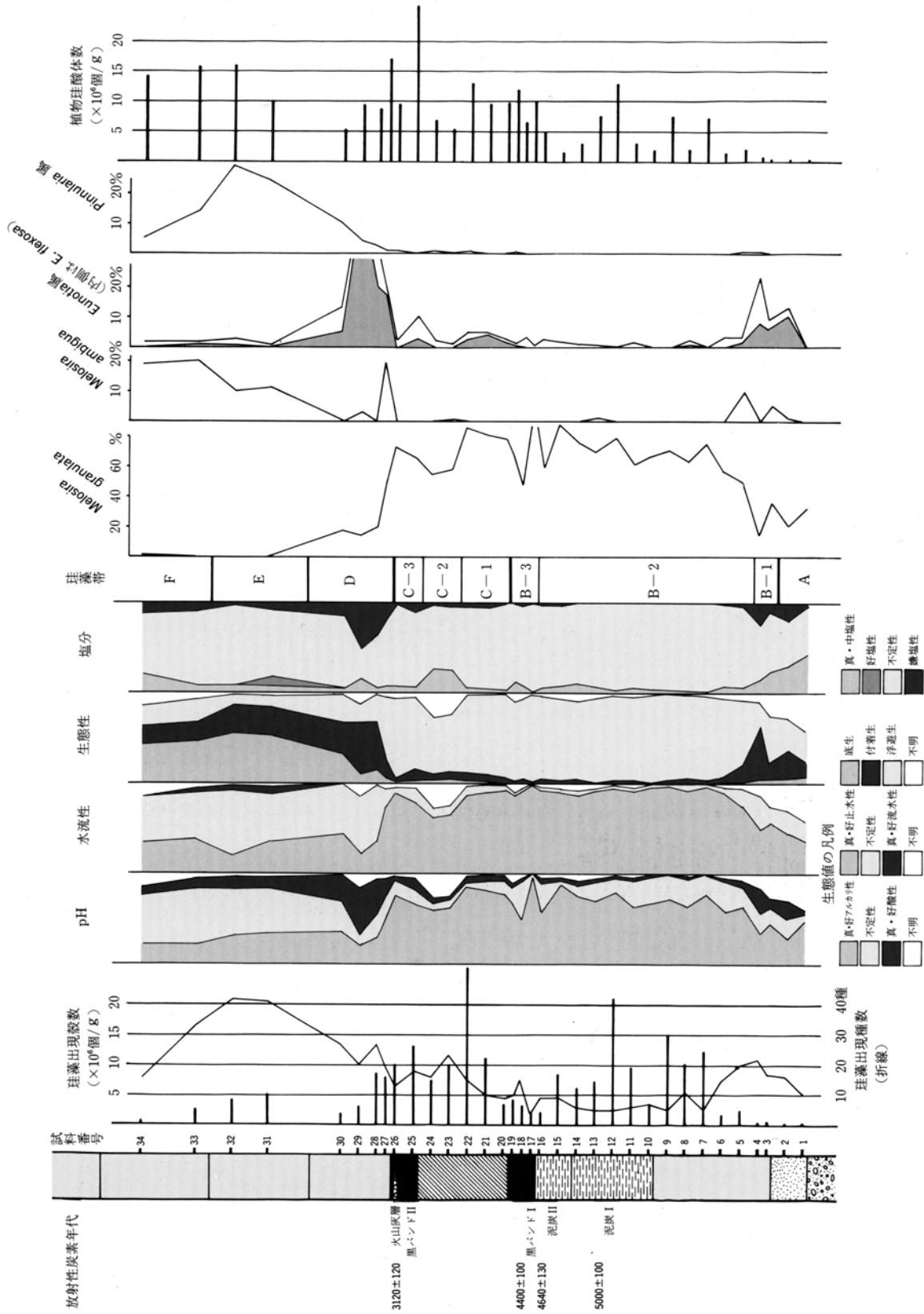
- 森 勇一(1989) 町田遺跡における珪藻遺骸群集. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集, 町田遺跡報告書, 64-73.
- 中村 純(1984) 古代農耕とくに稲作の花粉学的研究. 古文化財の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 同朋舎, 581-602.
- 鈴木功夫・中村 純(1977) 稲科花粉の堆積に関する基礎的研究. 文部省科学研究費特定研究「古文化財」, 稲作の起源と伝播に関する花粉学的研究—中間報告—(中村純編), 1-10.





第30図 町田遺跡PSトレンチにおける花粉化石群集の変遷(草本花粉・シダ類胞子)

(S) : Soil (W) : Wood



第31図 町田遺跡PSトレンチにおける珪藻分析結果  
(森 勇一, 1989)

図版説明 (図版II・III)

図版II

花粉化石

- 1 a, b コウヤマキ属 *Sciadopitys*  
 2 スギ属 *Cryptomeria*  
 3 イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科

TAXACEAE-CEPHALOTAXACEAE-CUPRESSACEAE

- 4 a, b コナラ亜属 *Lepidobalanus*  
 5 a, b アカガシ亜属 *Cyclobalanopsis*  
 6 a, b ハンノキ属 *Alnus*  
 7 a, b エノキ属—ムクノキ属 *Celtis-Aphananthe*  
 8 a, b ツタ属 *Parthenocissus*  
 9 a, b ウルシ属 *Rhus*

図版III

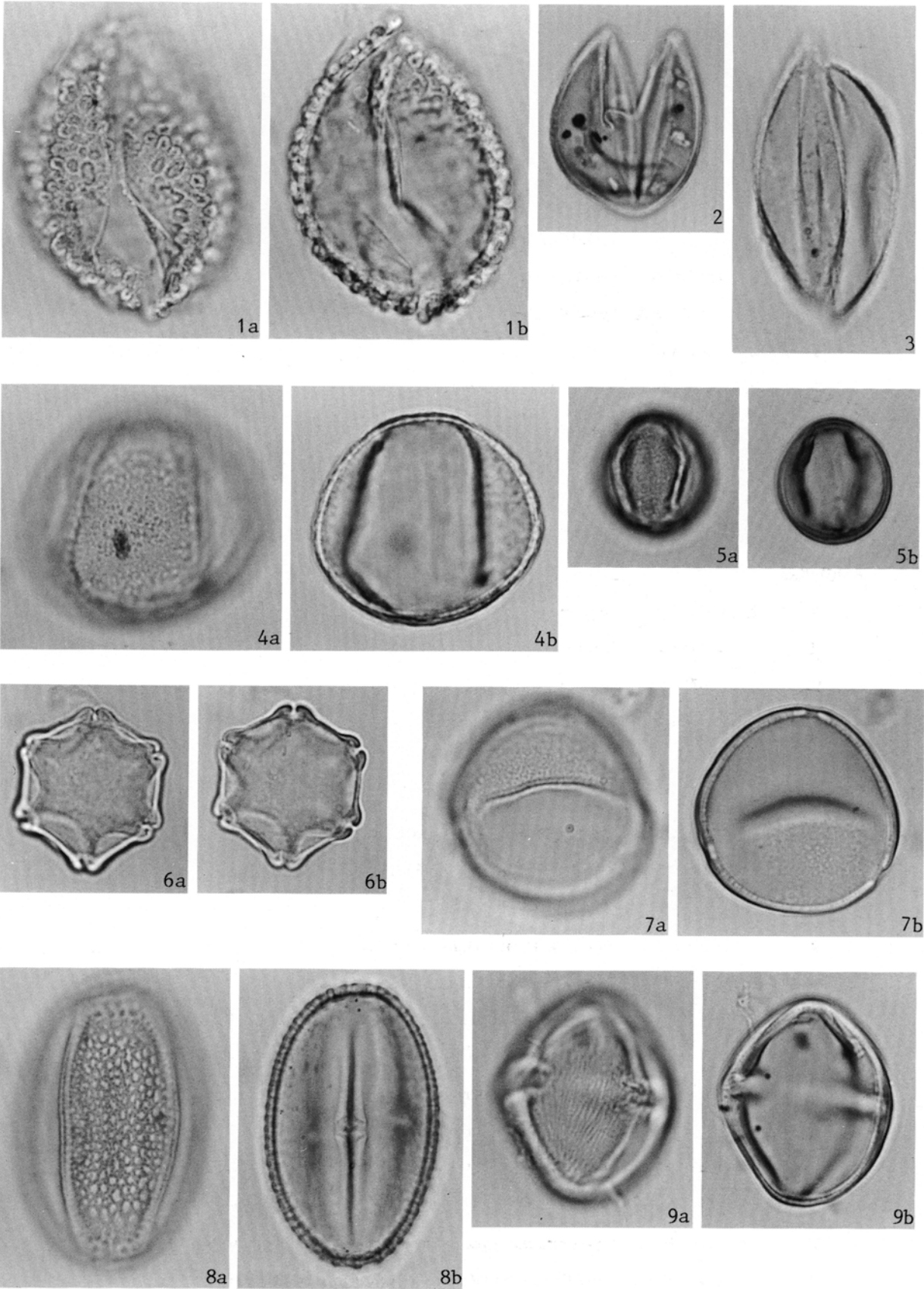
花粉化石

- 10 a, b オモダカ属 *Sagittaria*  
 11 コウホネ属 *Nuphar*  
 12 イネ科 GRAMINEAE  
 13 タヌキモ属 *Utricularia*

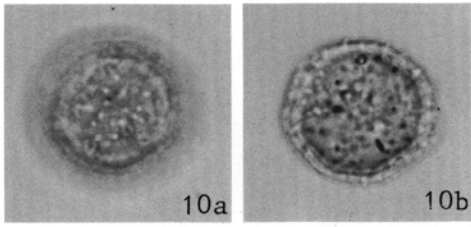
大型植物遺体

- 1 アカガシ亜属 *Quercus* sp. (*Cyclobalanopsis*) 18mm  
 2 アカガシ亜属 *Quercus* sp. (*Cyclobalanopsis*) 19mm  
 3 ヒシ *Trapa japonica* Flerov 30mm  
 4 ヒメビシ *Trapa incisa* Sieb. et Zucc. 10~15mm  
 5 カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc. 24mm  
 6 オニグルミ *Juglans mandschurica* subsp. *Sieboldiana* (Maxim.) Kitam. 37mm  
 7 クマヤナギ *Berchemia reacemosa* Sieb. et Zucc. 4~6mm (1目盛りは1mm)  
 8 ウメ *Prunus Mume* Sieb. et Zucc. 18mm  
 9 モモ *Prunus persica* (Linn.) Batsch. 27mm  
 10 ヤマザクラ *Prunus sargentii* Rehd. subsp. *Jamasakura* (Sieb.) Ohwi  
 6~7mm (1目盛りは1mm)  
 11 エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 8~14mm (1目盛りは1mm)  
 12 ヒシモドキ *Trapella sinensis* Oliv. var. *antennifera* Hara 30~50mm

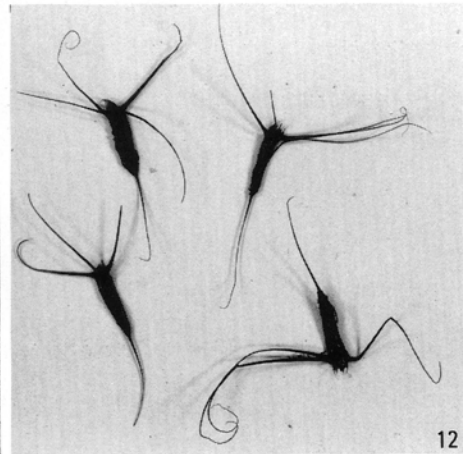
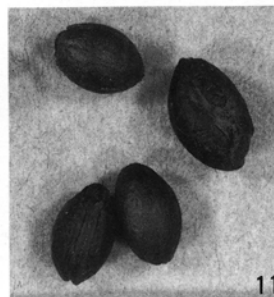
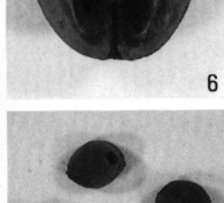
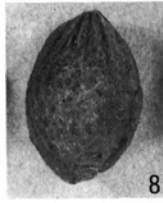
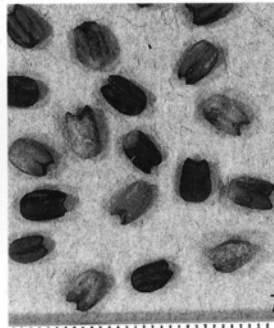
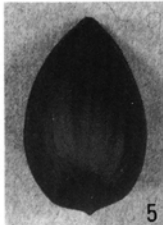
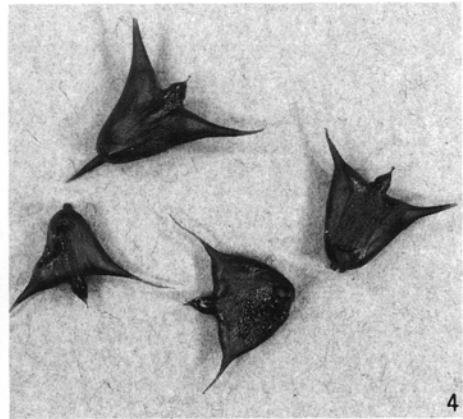
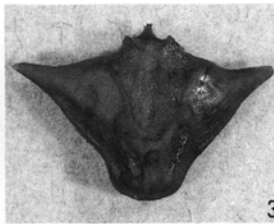
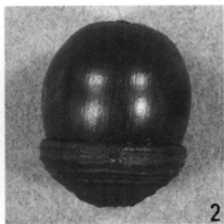
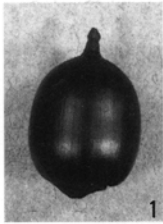
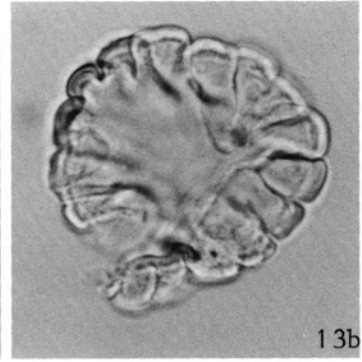
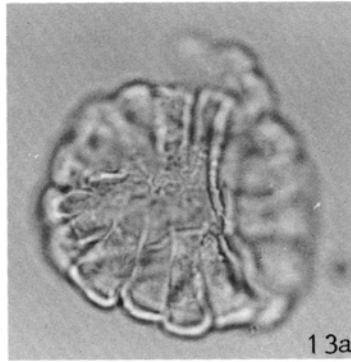
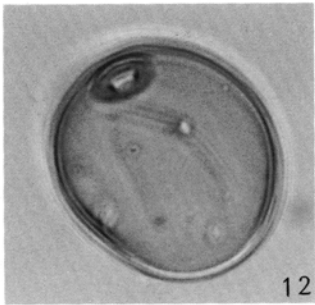
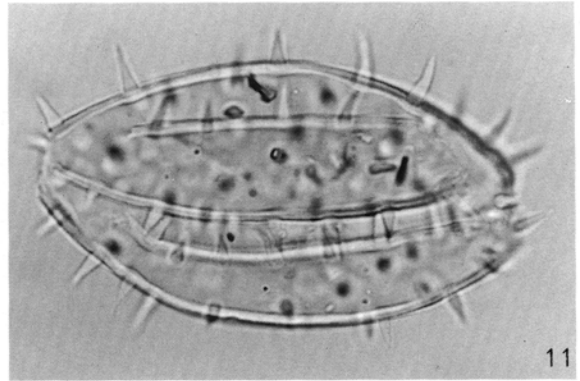
图版II 花粉化石



図版III 花粉化石・大型植物遺体



50μ



## 4 勝川遺跡群より産した昆虫化石と古環境

### 1. はじめに

本センターでは1987年より5年間にわたり、春日井市南西部の庄内川水系地藏川の沖積面上に位置する勝川遺跡(勝川62F区)をはじめ、隣接する町田遺跡・松河戸遺跡など名古屋環状2号線内の計10ヶ所の調査区(便宜的に勝川遺跡群と呼ぶ)の土層中より昆虫化石(昆虫遺体ともいう)の抽出に努めてきた。

遺跡から発見される昆虫化石はいずれも節片ごとに分離していて、しかも土中から採り出すと同時に色彩や形状が変化しはじめ、1ヶ月も経たないうちに発見された当時の鮮やかさが失われてしまうものが多い。遺跡産の昆虫分析の難しさはこの辺にあるということが出来る。分類・同定作業はまだ十分ではないが、勝川遺跡群より発見された昆虫化石の分析結果の概要について述べる。

### 2. 分析試料および昆虫の検出方法

昆虫化石を検出した遺跡の層位とその相対年代は、第2表のとおりである。相対年代はすべて出土した考古遺物によっている。昆虫化石の採取にあたっては、層序が明確になった時点で地層断面およびトレンチ穴等から分析用試料を採取した。分析試料の採取地点および採取層準等は第21および22・24・26・27図に示した。遺跡ごとの分析試料についての概況は次のとおりである。なお、試料の重量はいずれも採取時の湿潤重量である。

試料採取地点および層準

#### 勝川遺跡 (62F区)

弥生時代中期(木製品の貯蔵施設?(SX01)内に堆積した黒灰色シルト層、約20kg)

弥生時代後期(旧河道内の自然堆積の腐植質シルト層、約60kg)

古墳時代中期(旧河道内の自然堆積の腐植質シルト層、約85kg)

奈良時代後期(旧河道内の自然堆積の植物片まじりの黒灰色シルト層、約120kg)

平安時代(旧河道内の自然堆積の腐植質シルト層、約60kg)

#### 勝川遺跡 (62A区)

江戸時代後期(勝川宿内の溝中の埋土、この試料のみ段丘上、約100kg)

#### 町田遺跡 (62A・B区)

縄文時代中期(堆積浅谷下底に堆積した泥炭ないしは腐植質シルト層、約100kg)

平安時代(水田耕作土と推定される砂質シルト層、約60kg)

#### 松河戸遺跡 (62E区)

縄文時代中期(埋積浅谷の下底付近に堆積した泥炭層、約140 kg)

#### 松河戸遺跡 (62A区)

縄文時代後・晩期(埋積浅谷周辺に堆積した黒灰色腐植質シルト層、約10kg)

古墳時代(旧河道付近に堆積した黒灰色腐植質シルト層、約80kg)

#### 松河戸遺跡 (89Dc区)

縄文時代晩期（浅い自然流路河床付近に堆積した分解の進んだ泥炭層、約150kg）

**松河戸遺跡**（91Ab区・91B区）

鎌倉時代（自然流路内に堆積した暗灰色シルト層、近くに井戸、約80kg）

**松河戸遺跡**（63A区）

江戸時代前期（屋敷を区画する溝中の堆積物、約85kg）

**昆虫化石の  
検出法**

昆虫化石の検出は、ブロック割りに浮遊選別法を併用して行なった。昆虫化石の同定は現生標本の各部位と顕微鏡下で比較・検討しながら、一つずつの節片について行なった。

**第2表 昆虫化石の分析試料と相対年代**

	勝川遺跡 (62F、62A)	町田遺跡 (62A、B)	松河戸遺跡 (62A、E、63A、89Dc、91Ab、B)
江戸時代後期	灰白色シルト層		
江戸時代前期			黒灰色シルト層
鎌倉時代			暗灰色シルト層
平安時代	腐植質シルト層	灰白色砂質シルト層	
奈良時代	黒灰色シルト層		
古墳時代	腐植質シルト層		黒灰色シルト質粘土層
弥生時代後期	腐植質シルト層		
弥生時代中期	黒灰色シルト層		
縄文時代晩期			暗灰色腐食質シルト層
縄文時代後晩期			黒灰色腐植質シルト層
縄文時代中期		泥炭質シルト層	泥炭質シルト層

**3. 放射性炭素年代**

昆虫化石の分析試料採取と並行して年代測定用のサンプルを採取し、放射性炭素年代の測定を実施した。年代測定は、(株)パリノ・サーベイを通じて学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼し、<sup>14</sup>C法によって求められた値である。次にその測定結果を遺跡ごとに列記する。ただし、ここでの年代値はすべてLIBBYの半減期5570年を使用し、1950年より起算したものをを用いている。

〈相対年代〉

**勝川遺跡**（IKK62F区）

1020±130y.B.P. (GaK-13816) 木片

1260±100y.B.P. (GaK-13820) 木片

1600±100y.B.P. (GaK-13819) 木片

1930±80y.B.P. (GaK-13815) 木片

2130±100y.B.P. (GaK-13818) 木片

1910±90y.B.P. (GaK-13812) 泥炭

2140±100y.B.P. (GaK-13817) 木片

5230±130y.B.P. (GaK-13814) 腐植質シルト

8340±90y.B.P. (GaK-13813) 腐植質シルト

奈良時代分析試料採取層準

古墳時代分析試料採取層準

弥生時代後期分析試料採取層準

弥生時代中期分析試料採取層準

弥生時代中期分析試料採取層準

#### 町田遺跡 (IKC62B区)

3120±120y. B.P. (GaK-13810) 腐植質シルト	テフラ降灰層準
3770±120y. B.P. (GaK-13811) 木片	
4400±100y. B.P. (GaK-13809) 腐植質シルト	
4470±130y. B.P. (GaK-13808) 木片	縄文時代中期分析試料採取層準II
4640±130y. B.P. (GaK-13807) 泥炭	縄文時代中期分析試料採取層準II
5000±100y. B.P. (GaK-13805) 泥炭	縄文時代中期分析試料採取層準I
5260±100y. B.P. (GaK-13806) 木片	縄文時代中期分析試料採取層準I

#### 松河戸遺跡 (IMD62H区・IMD62A区・IMD89Dc区)

2230±80y. B.P. (GaK-15438) 木片	
2380±80y. B.P. (GaK-15437) 木片	縄文時代晩期分析試料採取層準
3050±110y. B.P. (GaK-15436) 腐植質シルト	縄文時代晩期分析試料採取層準
2850±120y. B.P. (GaK-13821) 腐植質シルト	
2870±110y. B.P. (GaK-13525) 木片	縄文時代後・晩期分析試料採取層準
3120±120y. B.P. (GaK-13521) 腐植質シルト	テフラ降灰層準
3760±150y. B.P. (GaK-15435) 腐植質シルト	テフラ降灰層準直下

(下線を施した数値は、いずれも昆虫化石を分析した試料の年代値である。)

## 4. 昆虫化石群集

### A. 昆虫化石の指標性

昆虫はあらゆる生物のなかでも、環境による棲みわけと種の分化が顕著にみられる生物の一つである。また、微化石にくらべて死後の移動が少ないので、遺跡をとりまく古環境の復元に示相化石として重要な役割を果たす。

古環境の復元に役立つ指標昆虫について、日浦ら (1984) は「水域環境の指標昆虫」、「植生環境の指標昆虫」、「栽培及び農耕の指標昆虫」、「汚物集積の指標昆虫」、「地表環境の指標昆虫」の5項目をあげている。勝川遺跡周辺から産した昆虫化石の指標性およびその意義については、森 (1988a, 1988b) に詳しい。

昆虫化石の分類・同定作業は継続中であり、未同定の甲虫目に属するものも多く、昆虫化石群集のみから古環境の変遷を考察することは容易ではない。また、分析試料の採取場所による違いや、昆虫化石を包含する地層の種類による差異も考慮に入れる必要があり、昆虫化石の群集解析にあたっては解決しなければならないことも多い。しかし、出現する昆虫群集は遺跡周辺の植生や水域環境と密接に関係しているだけでなく、時代性や人間生活との関わりなどについても重要な情報を与える。

### B. 昆虫化石群集の特徴

勝川遺跡群より産した昆虫化石は計5239点 (個体数でなく節片ないしは破片数)、うち種

昆虫化石の  
指標性

昆虫の出現  
点数

レベルまで同定できた昆虫は86種1176点(22.5%)であった。目および科・属レベルまで同定できた昆虫は、1目2点・16科851点・6亜科671点・12属425点(族および亜属を含む)の計1949点(37.2%)であった。なお、現時点では所属不明および未分類の甲虫目として扱った昆虫は2113点(40.3%)であった。

**時代ごとの出土点数** 時代ごとにみると、縄文時代中期1045点、縄文時代後・晩期14点、縄文時代晩期510点、弥生時代中期67点、弥生時代後期341点、古墳時代165点、奈良時代579点、平安時代113点、鎌倉時代504点、江戸時代前期921点、江戸時代後期980点であった。

**生態別出土点数** 昆虫の生態による分類では、湿原ないし湿地帯に生息するネクイハムシ類194点(3.7%)、ネクイハムシをのぞく水生昆虫243点(4.6%)、食糞性昆虫88点(1.7%)、食植性昆虫2187点(41.8%)、地表性歩行虫403点(7.7%)であった。所属不明および未分類のために生態が判明していない昆虫片が2113点(40.3%)存在するが、それらの大半は食植性昆虫の微小節片にあたるものと推定される。次に分析結果(第2～4表)をもとに、時代ごとの昆虫化石群集の特徴について述べる。

**縄文時代中期** 縄文時代中期の試料(町田遺跡62B区・松河戸遺跡62E区)から得られた昆虫化石は、一般に平圧されていて変形が著しく、そのうえ、昆虫化石には黒化が進行しているものも多く、同定は大変困難であった。山間の溪流や流れの付近に棲むマメゲンゴロウ属の一種を多産した。ゴミムシ科やコアオハナムグリ・アオハナムグリおよび森林性のコガネムシ科に加えて、カナブン・シロテンハナムグリなどの樹液に集まる種群も多く発見された。縄文時代後・晩期(松河戸遺跡62A区)は試料不足である。種レベル1点を含め、計9点が発見されたのみである。

**縄文時代晩期** 縄文時代晩期(松河戸遺跡89Dc区)では、ゴミムシ科62点をはじめトクリゴミムシ属・オオゴミムシなどの地表性歩行虫、コメツキムシ科・スジコガネ亜科・サクラコガネ属・ハムシ科などの食葉性昆虫を多産した。エンマコガネ属・ダイコクコガネ亜科・コブマルエンマコガネなどの食糞性昆虫や、ヒメゲンゴロウ・セマルガムシなどの水生昆虫も多数検出された。だが、ここでは湿地帯に多いネクイハムシの仲間は1点も発見されなかった。

**弥生時代中・後期** 弥生時代中期の試料(勝川遺跡62F区)からは、種レベルまで同定できた昆虫化石7種12点など計67点が発見された。コブマルエンマコガネなど4点の食糞性昆虫と、13点のゴミムシ科、および5点のタマムシなどが発見された。弥生時代後期の試料(勝川遺跡62F区)からは、イネネクイハムシ(14点)を多産した。ゴミムシ科(23点)やコガネムシ科(24点)の出現点数も多かった。

**古墳時代** 古墳時代の試料(勝川遺跡62F区・松河戸遺跡62A区)からは、ネクイハムシ亜科の4種(イネネクイハムシ・キンイロネクイハムシ・ツヤネクイハムシ・ガガブタネクイハムシ)14点に加え、ガムシやゲンゴロウ科などの水生昆虫、およびコガネムシ科の食葉群などを産した。

**奈良時代** 奈良時代(勝川遺跡62F区)では、コアオハナムグリやヒラタアオコガネ・ヒメカンショコガネなどの食葉性昆虫が多く検出され、ミヤマカミキリ・カナブン・カブトムシなどの

第3表 勝川遺跡群より産した昆虫化石 (科および属レベル)

昆虫化石の 科および属名		時代	縄文時代				弥生時代		古墳時代		奈良時代	平安時代		鎌倉時代		江戸時代		合計
			中期	後晩期	晩期	中期	後期	勝川	勝川	勝川	松河川	勝川	勝川	町田	松河川	松河川	松河川	
		遺跡名	町田 62B	松河川 62E	松河川 62A	松河川 89Dc	勝川 62F	勝川 62F	勝川 62F	松河川 62A	勝川 62F	勝川 62F	町田 62B	松河川 91Ab	松河川 91B	松河川 63A	勝川 62A	
水生	カワトンボ科 CALOPTERYGIDAE						1	1		1							3	
	ガムシ科 HYDROPHILIDAE					1	1	2	3	5	1						13	
	ゲンゴロウ科 DYTISCIDAE	1	1		2		2	10	1	24	1						42	
	ヒメゲンゴロウ亜科 COLYMBETINAE														5		5	
	ヒメゲンゴロウ族 COLYMBETINI				6												6	
	シマゲンゴロウ属 <i>Hydaticus</i> sp.				1												1	
	マメゲンゴロウ属 <i>Agabus</i> sp.		43														43	
	ミズスマシ属 <i>Gyrinus</i> sp.		2						1	1							4	
	湿地性	ネクイハムシ亜科 DONACIINAE	7	1	1		1	4	2	1	23		10					50
	食糞性	エンマコガネ属 <i>Onthophagus</i> spp.	2	7		15	3	2					2	3		4	2	40
マグノコガネ亜科 APHODIINAE			1			1	1										3	
ケシマクソコガネ族 PSAMMODIINI					1												1	
ダイコクコガネ亜科 SCARABAEINAE					5										2		7	
地表性	オサムシ亜属 <i>Ohomopterus</i> sp.				1												1	
	アオゴミムシ属 <i>Chlaenius</i> spp.	1			4			5		6			1				17	
	ゴミムシ科 HARPALIDAE	11	35	1	62	13	23	11	16	26	18	2	52	9	3	37	319	
	トックリゴミムシ属 <i>Lachnocrepis</i> spp.				3												3	
	ゴミムシダマン科 TENEBRIONIDAE				1												1	
	ハネカクシ科 STAPHYLINIDAE				5	1		1					4	1			12	
	アリ科 FORMICIDAE				2								4	2			8	
	食植性	クマムシ科 BUPRESTIDAE				1							2				1	
食葉性	コメツキムシ科 ELATERIDAE	6	13		27					5		1	5	1	15		70	
	コガネムシ科 SCARABAEIDAE	19	59	1	21	11	16	21	3	58	4	1	1		7	40	266	
	スジコガネ亜科 RUTELINAE		2		28	3	2		1				5		292	247	576	
	サクラコガネ属 <i>Anomala</i> spp.	2			24					20	1		4		147	107	306	
	ハナムグリ亜科 CETONIINAE	10	3		4	3				3					1	2	30	
	コフキコガネ属 <i>Melolontha</i> sp.														2		2	
	ハムシ科 CHRYSOMELIDAE		7		47	1	5	2	1	17	6		3	2	8		99	
	ゾウムシ科 CURCULIONIDAE				4								1				5	
	オトシブミ科 ATTELABIDAE						2			1							3	
	カメムシ科 PENTATOMIDAE				4			1									5	
食肉性	テントウムシ科 COCCINELLIDAE				1												1	
森林性	カナブン属 <i>Rhomborrhina</i> sp.	1															1	
	クワガタムシ科 LUCANIDAE	1		1						1							3	
雑食性	双翅目 DIPTERA											2					2	
所属不明および未分類の甲虫目等		262	487	9	100	17	237	13	29	236	8	5	77	1	395	237	2113	
総計		323	661	13	369	55	296	69	56	427	39	21	164	16	881	672	4062	

第4表 勝川遺跡群より産した昆虫化石(種レベル) No.1

昆虫種名	時代	縄文時代				弥生時代		古墳時代	奈良時代	平安時代		鎌倉時代		江戸時代		種計
		中期		後晩期	晩期	前期	後期			町田	松河戸	松河戸	松河戸	前期	後期	
		町田	松河戸	松河戸	松河戸	勝川	勝川	勝川	松河戸							
ハグロンボ <i>Calopteryx atrata</i> SELYS	水生食肉性								W2							2
ガムシ <i>Hydrophilus acuminatus</i> MOTSCHULSKY	水生食肉性					W1	W1 H1 P1	W2 T2 F2		W3 L2	P1	W1				17
コガタガムシ <i>Hydrophilus bilineatus</i> oshimimensis REDTENBACHER	水生食肉性								W1							1
コガムシ <i>Hydrochara affinis</i> (SHARP)	水生食肉性													W3 P1 T1		5
ヒメガムシ <i>Sternolophus rufipes</i> (FABRICIS)	水生食肉性				W1											1
セマルガムシ <i>Coelostoma stultum</i> (WALKER)	水生食肉性				P7 W26					W2		W1 P1				37
ヒメセマルガムシ <i>Coelostma orbiculare</i> (FABRICIUS)	水生食肉性				W3											3
ゲンゴロウ <i>Cybister japonicus</i> SHARP	水生食肉性					W1			W5 T4 A2	W1						13
コガタノゲンゴロウ <i>Cybister tripunctatus orientalis</i> GSCHWENDTNER	水生食肉性							W1	W1 H1 B1							4
ヒメゲンゴロウ <i>Rhantus pulverosus</i> (STEPHENS)	水生食肉性				W8 T3 P2											13
コシマゲンゴロウ <i>Hydaticus grammicus</i> (GERMAR)	水生食肉性				T1											1
シマゲンゴロウ <i>Hydaticus bowringi</i> CLARK	水生食肉性				W1											1
オオイチモンシマゲンゴロウ <i>Hydaticus pacificus</i> AUBE	水生食肉性				W1											1
オオミズスマシ <i>Dineutus orientalis</i> MODEER	水生食肉性				W3		W1	W2		W5		W2 H1 P2				16
ミズスマシ <i>Gyrinus japonicus</i> (SHARP)	水生食肉性	W1	W5									W1	W2			9
コミズスマシ <i>Gyrinus curtus</i> MOTSCHULSKY	水生食肉性				W1	W1										2
ガガブタネクイハムシ <i>Donacia lenzi</i> SCHONFELDT	水生食肉性						W6 B1	W2	W20 H1 P4	W4	W1					39
イネネクイハムシ <i>Donacia provosti</i> FAIRMAIRE	水生食肉性						W10 P3 B1	W2 P2		W8 P2	W19 T1	W10 P3				61
キンイロネクイハムシ <i>Donacia japana</i> CHUJO et GOECKE	水生食肉性						W4 P1	W4		W21 P2	W1					33
ツヤネクイハムシ <i>Donacia nitidior</i> (NAKANE)	水生食肉性							W4		W1	W4					9
フトネクイハムシ <i>Donacia fukiensis</i> GOECKE	水生食肉性			W1												1
カワホネネクイハムシ <i>Donacia ozeensis</i> NAKANE	水生食肉性	P1														1
ミヤマダクコガネ <i>Copris pecuarius</i> LEWIS	地表性食肉性				H1											1
センチコガネ <i>Geotrupes laevistriatus</i> MOTSCHULSKY	地表性食肉性											W3 F1				4
オオセンチコガネ <i>Geotrupes auratus</i> MOTSCHULSKY	地表性食肉性						L1									1
コマルエンマコガネ <i>Onthophagus atripennis</i> WATERHOUSE	地表性食肉性		P1		T1 W2	P1					P3 L1 W2 T1	W2		W1 P1 H1		17
クロマルエンマコガネ <i>Onthophagus ater</i> WATERHOUSE	地表性食肉性						W1									1
マルエンマコガネ <i>Onthophagus viduus</i> HAROLD	地表性食肉性										P1					1
カドマルエンマコガネ <i>Onthophagus lenzii</i> HAROLD	地表性食肉性				P1 W1											2
オオマクソコガネ <i>Aphodius haroldianus</i> BALTHASAR	地表性食肉性										W2 要検討1					3
コマクソコガネ <i>Aphodius pusillus</i> (HERBST)	地表性食肉性										W1					1
マクソコガネ <i>Aphodius rectus</i> (MOTSCHULSKY)	地表性食肉性		W2								W3					5
イガクロツヤマクソコガネ <i>Aphodius igai</i> NAKANE	地表性食肉性										W1					1
ツヤマルエンマムシ <i>Atholus pirithous</i> (MARSEUL)	地表性食肉性	W1														1
エンマムシ <i>Merohister jekeli</i> MARSEUL	地表性食肉性													W3		3
ヒメエンマムシ <i>Margarinotus weymarni</i> WENZEL	地表性食肉性				W3											3
セアカオサムシ <i>Hemicarabus tuberosus</i> (DEJEAN et BOISDUVAL)	地表性食肉性				W2											2
クロナガオサムシ <i>Leptocarabus procerulus</i> (CHAUPOIR)	地表性食肉性								P1							1
ミカワオサムシ <i>Carabus arrowianus</i> (BREUNING)	地表性食肉性				W2		H1					P2				5
オオトックリゴミムシ <i>Oodes vicarius</i> BATES	地表性雑食性								P1							1
オオゴミムシ <i>Lesicus magnus</i> (MOTSCHULSKY)	地表性雑食性				P3						W2 H1 P2			P3		11
ヒョウタンゴミムシ <i>Scarites aterrimus</i> MORAWITZ	地表性雑食性										P1 L1					2
ナガヒョウタンゴミムシ <i>Scarites terricola pacificus</i> BATES	地表性雑食性				P1					P1	P3			H1		6
アオゴミムシ <i>Chlaenius pallipes</i> GEBLER	地表性雑食性				P2											2
ハンミョウ <i>Cicindela chinensis japonica</i> THUNBERG	地表性食肉性				A1						P1 L1		W1			4
オオヒラタシデムシ <i>Eusilpha japonica</i> (MOTSCHULSKY)	地表性食肉性				W3											3
ベッコウヒラタシデムシ <i>Eusilpha brunnicollis</i> (KRAATZ)	地表性食肉性										W1					1
ゴミムシダマシ <i>Neatus picipes</i> (HERBST)	地表性雑食性											P1 H1				2
クロホシテントウゴミムシダマシ <i>Derispha maculipennis</i> (MARSEUL)	地表性雑食性				W1											1
フトナガゴミムシダマシ <i>Geropria laticollis</i> FAIRMAIRE	地表性雑食性				W1											1

第5表 勝川遺跡群より産した昆虫化石 (種レベル) No.2

昆虫種名	時代	縄文時代				弥生時代		古墳時代		奈良時代	平安時代		鎌倉時代		江戸時代		種計
		中期		後晩期	晩期	前期	後期	勝川	松河戸	勝川	勝川	町田	松河戸	松河戸	松河戸	勝川	
		町田	松河戸	松河戸	松河戸	勝川	勝川										
アカガネサルハムシ <i>Acrothium gschkeitchii</i> (MOTSCHULSKY)	陸生食植性				T1 W6 P1					W4						12	
イモサルハムシ <i>Colasposoma dawricum</i> MANNERHEIM	陸生食植性							W1								1	
ダイコンハムシ <i>Phaedon brassicae</i> BALY	陸生食植性											W2 P1				3	
ルリハムシ <i>Lineidea aenea</i> (LINNE)	陸生食植性												W1			1	
トゲアシクビソハムシ <i>Lema coronata</i> BALY	陸生食植性						W1									1	
ヒメアカホシテントウ <i>Chilocorus kuwanae</i> SILVESTRI	陸生食肉性														W1	1	
タマムシ <i>Chrysocroa fulgidissima</i> (SCHONHERR)	森林食植性		F1			F5 F3			F4					W1		14	
クシコメツキ <i>Melanotus legatus</i> CANDEZE	陸生食植性				P1	P1		W1		P1			W2 A1			7	
アカシオネクシコメツキ <i>Melanotus cete</i> CANDEZE	陸生雑食性	W2							W1 P1							4	
ゲンジボタル <i>Luciola cruciata</i> MOTSCHULSKY	半水性食肉性									W1						1	
ホソセスジムシ <i>Yamatosa nipponensis</i> (LEWIS)	陸生食植性						W1									1	
コフキゾウムシ <i>Eugnathus distinctus</i> ROELOFS	陸生食植性				W2 P1											3	
コガネムシ <i>Mimela splendens</i> CYLLENHAL	陸生食植性				W2			W1	P1	W3			H1 L1 W1 A1			11	
スジコガネ <i>Mimela testaceipes</i> MOTSCHULSKY	陸生食植性												H16 P1		W2	9	
オオスジコガネ <i>Mimela costata</i> HOPE	陸生食植性												P1			1	
ドウガネアヒイ <i>Anomala cuprea</i> HOPE	陸生食植性	W1	P1		W8 L1 A5 T1			W1		W1 A1			W10 H2 P1 A6 L1	H1 L1	W15 P2 H1 F3	W2A2 T1 P16 L1	106
ヤクワコガネ <i>Anomala daimiana</i> HAROLD	陸生食植性															W1	1
ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY	陸生食植性				L2 H2 W1		L1			W1			A2 L3 H1 P2 W8 S1 T8	W7 A1 P1 H1		W181 S1 P5 H5 A1	470
ハンノヒメコガネ <i>Anomala puncticollis</i> HAROLD	陸生食植性								P2	P1							6
ヒラタアオコガネ <i>Anomala octescostata</i> BURMEISTER	陸生食植性							F1		W6						W1	6
ヒメカンショコガネ <i>Apogonia amida</i> LEWIS	陸生食植性		W2		W2		W1	W3	W3	W15 P5							31
マメコガネ <i>Popillia japonica</i> NEWMANN	陸生食植性				W1								W2				3
ピロウドコガネ <i>Maladera japonica</i> (MOTSCHULSKY)	陸生食植性												W1			W1	2
アオスチャコガネ <i>Phyllopertha diversa</i> WATERHOUSE	陸生食植性															W1	1
コアハナムグリ <i>Oxyctena jucunda</i> (FALDERMANN)	陸生食植性	W2 P2 S1 LA A2 F4	W5 P1		W7 H1	W1 P1	W2	S1	L1	W11	W1		W3 P1 S1 A1				54
アハナムグリ <i>Eucetonia roelofsi</i> (HAROLD)	陸生食植性	W1 T1	W8 F3		H1			W1		W1	W3				W3		22
クロコガネ <i>Holotrichia kiotonensis</i> BRENSKE	陸生食植性												W1			P1	2
シロテンハナムグリ <i>Protacta orientalis</i> (GORY et PERCHELOW)	陸生食植性	L2											W1 L2 T1		W4		10
カナブン <i>Rhomborrhina japonica</i> HOPE	森林食植性	W1	F5		W6 A3 H1					W1 S1					H1 T1	W1	21
アオカナブン <i>Rhomborrhina unicolor</i> MOTSCHULSKY	森林食植性				W1					L1							2
カブトムシ <i>Allomyrina dichotoma</i> (LINNE)	森林食植性									P1							1
コカブトムシ <i>Eophileurus chinensis</i> (FALDERMANN)	森林食植性						W1 H1			W1						W1	4
ヒラタクワガタ <i>Serroglyphus platymelus</i> (E. SAUNDERS)	森林食植性						T1										1
クワガタ <i>Macroderas rectus</i> (MOTSCHULSKY)	森林食植性				P1 M1												2
ノコギリカミキリ <i>Prionus insularis</i> MOTSCHULSKY	森林食植性												W1		H1		2
ミヤマカミキリ <i>Massicus ruddeti</i> (BLESSIG)	森林食植性									W1 F1							2
総計		27	34	1	141	12	45	32	8	152	35	18	299	25	40	308	1177

(検出部位凡例)

W (Wings) ; 鞘翅 H (Head) ; 頭部 T (Thorax) ; 胸部 A (Abdomen) ; 腹部

P (Pronotum) ; 前胸背板 S (Scutellum) ; 小楯板 L (Legs) ; 腿脛節

B (Body) ; ほぼ一体分 M (Mandible) ; 大顎 F (Fragments) ; 破片(腹板片ほか)

のクヌギ・カシ類の樹液に集まる種群を随伴した。また、ガガブタネクイハムシ・キンイロネクイハムシなどのネクイハムシ亜科、およびその他の水生昆虫も比較的多く発見された。

**平安時代** つづく平安時代の試料（勝川遺跡62F区および町田遺跡62A・B区）からは、イネネクイハムシを多産した。イネネクイハムシの全出土点数61点のうち、半数以上の33点がこの時代の試料から得られている。

**鎌倉時代** 鎌倉時代の試料（松河戸遺跡91Ab区・同遺跡91B区）は、ヒメコガネ（218点）・ドウガネブイブイ（22点）などの食葉性昆虫の多産と、ゴミムシ科（計72点）やコブマルエンマコガネなどの食糞性昆虫の出現によって特徴づけられる。水生昆虫はまったくといって良いほど出現しなかった。

**江戸時代前・後期** 江戸時代前期の試料（松河戸遺跡62A区）からは、スジコガネ亜科（292点）、サクラコガネ属（147点）およびコメツキムシ科（15点）などを産した。種レベルでは、ドウガネブイブイ・シロテンハナムグリ・エンマムシなどが発見された。江戸時代後期（勝川遺跡62A区）では、ヒメコガネ（245点）・ドウガネブイブイ（43点）、およびスジコガネ亜科（247点）・サクラコガネ属（107点）などのコガネムシ科の食葉群を多産した。

## 5. 昆虫化石から推定される古環境

**人間活動の痕跡** 勝川遺跡周辺の人間の生活の痕跡は、少なくとも縄文時代早期末に遡ることができる。1989年度の松河戸遺跡の発掘調査によって、縄文時代早期末～中期にかけての土器片がかなりまとまった状態で発見された。また、松河戸遺跡62E区では、石英安山岩やチャート、黒曜石を含む数百点の石器片と石鏃の完成品、および大量の円礫の集石跡が発見され、これらは縄文時代中期の石器生産に関連した集石遺構であるとみなされた。この層準の放射性炭素年代は、町田遺跡62B区で $4470 \pm 130$ y.B.P.および $4640 \pm 130$ y.B.P.と測定されている。

**食葉性昆虫と落葉広葉樹林** 町田・松河戸遺跡の縄文時代中期の泥炭層中から発見された昆虫化石は、合計1045点に達した。コアオハナムグリ・アオハナムグリおよびコガネムシ科などの食葉性昆虫の多産や、森林性のハナムグリ亜科・カナブン属・コメツキムシ科・クワガタムシ科などの昆虫化石の出現からは、松河戸・町田両遺跡の周辺にクヌギやコナラなどを中心とした落葉広葉樹の森林が成立していたことが推定される。また、清流に棲息するマメゲンゴロウ属や、ミズスマシなどの水生昆虫、および寒冷型の昆虫であるカワホネネクイハムシをはじめとしたクネイハムシ亜科の出現によって、冷涼で清澄な水域が遺跡付近に存在したことが考えられる。地表性歩行虫で汚物集積の指標昆虫でもあるゴミムシ科や、エンマコガネ属・マグソコガネなどの食糞性昆虫からは、分析試料の採取場所付近に人間や動物の活動圏があったことが想像される。

**浅谷の埋積** 縄文時代中期の泥炭層は、町田・松河戸遺跡ともに、この時代を遡る一時期に形成されたと推定される浅谷底を埋積しており、未分解の黄褐～褐色泥炭層を特徴とする。その上

位には、2枚の分解の進んだ黒泥層（黒バンドIおよびII）が、勝川遺跡から松河戸遺跡に至る広い範囲に堆積していることが観察される。この黒泥層は、地下水位の低下あるいは気候の温暖化に伴って、一度堆積した泥炭層が分解したものと考えることができる。

つづく縄文時代後・晩期の頃、庄内川水系の沖積地一帯の広い地域にわたって最大層厚21mmに達する火山灰層（MT；松河戸火山灰層）が降灰した。火山灰層直下の泥炭層の年代は、町田・松河戸両遺跡ともに $3120 \pm 120$ y.B.P.と求められたので、火山灰層の降灰年代は約3000年前頃のことと考えられる。珪藻分析では火山灰の降灰を境に、好アルカリ性～pH不定性種が減少し、好酸性種が増加するなど水域環境の変化が認められた。

松河戸火山灰の降灰

縄文時代晩期では、松河戸遺跡89Dc区を中心に500点を越える昆虫化石が発見された。昆虫包含層は縄文時代中期の試料同様、浅谷底を埋積する植物片まじりの腐植質シルト層である。昆虫の群集組成は、コメツキムシ科やスジコガネ亜科・サクラコガネ属など食葉性昆虫が多く、遺跡の周りには豊富な樹木が生育していたことが推定される。また、ヒメゲンゴロウやセマルガムシなどの水生昆虫の多産からは、流れのない止水域が存在したことが考えられる。オオゴミムシ・セアカオサムシ・アオゴミムシなどをはじめゴミムシ科の多産や、オオヒラタシテムシ・ヒメエンマムシ・ミヤマダイコクコガネ、およびハネカクシ科・エンマコガネ属等、各種動物の屍体や排泄物に集まる食屍性ないしは食糞性昆虫に属する昆虫片が多数検出されたことより、この付近に人間を含めた大型草食獣が生息していたことが考えられる。放射性炭素年代では、この時期の腐植質シルトおよび木片より $3050 \pm 110$ y. B.P.,  $2380 \pm 80$ y. B.P.という年代値が得られている。

汚物集積の指標昆虫多産

弥生時代中期になると、鳥居松段丘上には多くの人々が定住するようになり、それに伴って樹木の伐採や水域環境の汚染が進行した。勝川遺跡62F区では、段丘直下の旧河道内の木製品の貯蔵施設?と考えられる土坑が構築され、その埋土中からはモモヤクルミ・クリなどの種子が多量に出土した。食糞性昆虫やゴミムシ科などの昆虫化石、および珪藻遺骸の分析結果から、汚れた水溜りのな止水域が存在したことが推定される。

弥生集落の造営と環境汚染

弥生時代後期になると、段丘下の湿地帯からはイネネクイハムシが多産し、勝川遺跡の周辺地域に水田耕作の影響が及んだことが推定される。湿地帯のところどころには、ヒメビシヤヒシモドキ・ヒルムシロなどの水生植物の自生する沼沢地が存在していた。弥生中期および後期の放射性炭素年代は、勝川遺跡62F区で $1910 \pm 90$ y. B.P.,  $2130 \pm 100$ y. B.P.,  $2140 \pm 100$ y. B.P.の年代値が得られている。

稲作指標昆虫の出現

古墳時代では、ネクイハムシ亜科に属する昆虫が4種類発見されるなど、環境要因の多様化と自然度の高い止水域が存在したことが推定される。

奈良時代になると、河床には植物片まじりの腐植質シルト層が厚く堆積した。食葉性昆虫が多く検出され、イネネクイハムシにかわってガガブタネクイハムシ・キンイロネクイハムシなど自然度の高い水域を好む水生昆虫がみられることから、勝川遺跡の周辺には広葉樹林を伴う低湿地帯が広がっていたことが推定される。湿地帯にはジュンサイやヒツジグサ・ヒシなどが浮かんでいた。放射性炭素年代では、勝川遺跡62F区で $1260 \pm 100$ y. B.P.の

自然度の高い止水域

値が得られた。

**イネネクイ  
ハムシの多  
産** 平安時代は、勝川・町田両遺跡ともに再びイネネクイハムシが増加し、水田雑草の一種のカンガレイなどの種子が土層中より多く認められた。この頃、勝川遺跡群のみならず静岡県静岡平野一帯の水田耕作土中からもイネネクイハムシが多産し（未公表資料）、水田開発に伴う低湿地の人工改変が広域に進められ、同じような環境条件のもとでイネネクイハムシが生息場所を拡大していったことが考えられる。

**水田地帯に  
みられる食  
葉性昆虫** 鎌倉時代の松河戸遺跡では、ヒメコガネおよびドウガネブイブイを多く産した。これらは人家の周りや、水田地帯の畦畔・水路・農道などに植栽された果樹・雑木およびその他の草本など人為度の高いところに生育する樹木を食害する食葉性昆虫であり、またゴミムシ科やコブマルエンマコガネなどの産出からは獣糞の存在が考えられる。

**人家の密集  
した環境** 江戸時代前期のデータは、松河戸遺跡63A区から得られた。計921点の昆虫化石の分析結果から、人家の近く、マツなどの樹木の茂った土手と止水域（おそらく水田）の存在が推定される。江戸時代後期の勝川遺跡62A区からは、ヒメコガネやドウガネブイブイなどの食葉性昆虫が多産した。果樹等が植栽された人家の近くや村はずれの草地・林縁などが推定され、付近に家の密集する人の気配の濃い環境だったことが推定される。

## 6. おわりに

勝川遺跡群より産した昆虫化石と、その同定結果により推定される古環境について述べた。微小節片に分離した昆虫の同定は大変困難であり、まだまだ未分類のものも多い。今後、同定が進めばあるいは昆虫化石群集にも修正が必要となり、その結果より導き出された古環境もまた異なったものになるかもしれない。

名古屋環状2号線はすでに開通し、昆虫化石も初期のものは発見以来5年間の歳月を経過して、外骨格の薄い水生昆虫等では標本は著しく劣化してしまった。筆者にとって、小論は勝川遺跡群の昆虫化石についての当面の中間報告であり、今後の限定された時間を考えたならば、残念ながらこれが最終報告になる可能性もないではない。これからも未分類のままになっている勝川遺跡群の昆虫化石の同定に力を注いでいきたいと思います。（森 勇一）

## 謝 辞

大平仁夫氏（元岡崎国立共同研究機構生理学研究所）には、コメツキムシの同定をお願いするとともに、電子顕微鏡の使用・写真撮影にあたって便宜をはかっていただいた。宮武頼夫（大阪市立自然史博物館）・金沢 至（同）の両氏には館所蔵の昆虫の現生標本を多数見せていただき、種々ご指導いただいた。また、森本 桂氏（九州大学農学部）にはゾウムシ科などの鞘翅目を、春沢圭太郎氏（野尻湖昆虫グループ）には食糞性昆虫の分類・同定をお願いした。

勝川遺跡群の昆虫化石の検出と整理作業にあたっては、以下の方々にお世話になった。記して感謝申しあげる。

樋上 昇・赤塚次郎・松原隆治・岡本直久・楯真美子・神谷友和・丹羽 博・後藤浩一・野口哲也・明壁正毅・平野 清・山中廣司・平田陸美・北村和宏・伊藤隆彦・永草康次・前田弘子・萬谷さつき・服部恵子・中村明実・尾崎勝子氏はじめ旧春日井調査事務所昆虫分析班の皆さん。

## 文 献

- 日浦 勇・宮武頼夫・那須孝悌 (1984), 昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究, 古文化財の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 同朋舎, 411-429.
- 平嶋義宏・森本 桂・多田内修 (1989), 昆虫分類学, 川島書店, 597p.
- 宮武頼夫 (1989), 稲作・畑作の害虫, 弥生分化の研究, 1 雄山閣出版, 184-192.
- 森 勇一 (1988a), 勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境, 愛知県埋蔵文化財センター年報 (昭和62年度), 118-137.
- 森 勇一 (1988b), 昆虫化石と古環境, 一愛知県勝川遺跡を中心として一, 弥生文化の研究, 10 雄山閣出版, 202-212.
- 森 勇一 (1989), 昆虫化石から得られた愛知県勝川遺跡周辺の古環境, 考古学と自然科学, 21.57-71.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1989a), 古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷, 愛知県埋蔵文化財センター年報 (昭和63年度), 76-91.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1989b), 昆虫及び珪藻遺骸から得られた縄文時代中期～晩期の古環境, 日本第四紀学会講演要旨集, 19.68-69.
- 森 勇一・伊藤隆彦・中村俊夫 (1990), 西尾市岡島遺跡より発見された昆虫の年代とその古生態, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第14集, 岡島遺跡, 107-115.
- 森本 桂ほか (1984・1985・1986), 原色日本甲虫図鑑, I・II・III・IV, 保育社,
- 中根猛彦 (1975), 原色日本昆虫図鑑, 上・下, 保育社,
- 野尻湖昆虫グループ (1984), 野尻湖発掘 (1978～1982) で産出した昆虫化石, 地団研専報, 27.137-156.
- 野尻湖昆虫グループ (1985), アトラス日本のネクイハムシ, 182p.
- 野尻湖昆虫グループ (1987), 第9次野尻湖発掘および第4回陸上発掘で産出した昆虫化石, 地団研専報, 32.117-136.
- 野尻湖昆虫グループ (1988), 昆虫化石ハンドブック, ニューサイエンス社, 126p.

図版説明 (図版Ⅳ・Ⅴ)

図版Ⅳ 昆虫化石の顕微鏡写真(1)

1. タマムシ *Chrysochroa fulgidissima* (SCHONHERR)  
右鞘翅下半部 (長さ10.5mm) 奈良時代 <勝川遺跡62F区>
2. フトナガニジゴミムシダマシ *Ceropria laticollis* FAIRMAIRE  
右鞘翅 (長さ9mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
3. コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* (FALDERMANN)  
左鞘翅 (長さ12mm) 古墳時代 <勝川遺跡62F区>
4. アカガネサルハムシ *Acrothinium gaschkevichii* MOTSCHULSKY  
右鞘翅 (長さ4mm) 奈良時代 <勝川遺跡62F区>
5. アオカナブン *Rhomborhina unicolor* MOTSCHULSKY  
右中脛節 (長さ3.5mm) 奈良時代 <勝川遺跡62F区>
6. コブマルエンマコガネ ♀ *Onthophagus atripennis* WATERHOUSE  
前胸背板 (幅3.8mm) 弥生時代中期 <勝川遺跡62F区>
7. イネネクイハムシ *Donacia provosti* FAIRMAIRE  
右鞘翅 (長さ5.2mm) 弥生時代後期 <勝川遺跡62F区>
8. キンイロネクイハムシ *Donacia japana* CHUJO et GOECKE  
左鞘翅 (長さ5.5mm) 奈良時代 <勝川遺跡62F区>
9. ツヤネクイハムシ *Donacia nitidior* (NAKANE)  
右鞘翅 (長さ4.9mm) 奈良時代 <勝川遺跡62F区>

図版Ⅴ 昆虫化石の顕微鏡写真(2)

1. ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* HOPE  
右鞘翅 (長さ13.2mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
2. アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi* (HAROLD)  
頭部 (長さ3.2mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
3. セマルガムシ *Coelostoma stultum* (WALKER)  
右鞘翅 (長さ4.2mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
4. ミヤマダイコクコガネ *Copris pecuarius* LEWIS  
頭部 (長さ4.7mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
5. オオゴミムシ *Lesticus magnus* (NOTSCHULSKY)  
前胸背板 (幅7.8mm) 平安時代 <勝川遺跡62F区>
6. アオゴミムシ属 *Chlaenius* sp.  
前胸背板 (幅4.1mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
7. オオヒラタシテムシ *Eusilpha japonica* <松河戸遺跡89Dc区>  
左鞘翅 (長さ15.2mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
8. セアカオサムシ *Hemicarabus tuberculatus* (DEJEAN et BOISDUVAL)  
左鞘翅 (長さ11mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>
9. ミカワオサムシ *Carabus arrowianus* (BREUNING)  
左鞘翅 (長さ18mm) 縄文時代晩期 <松河戸遺跡89Dc区>

図版説明 (図版Ⅵ・Ⅶ)

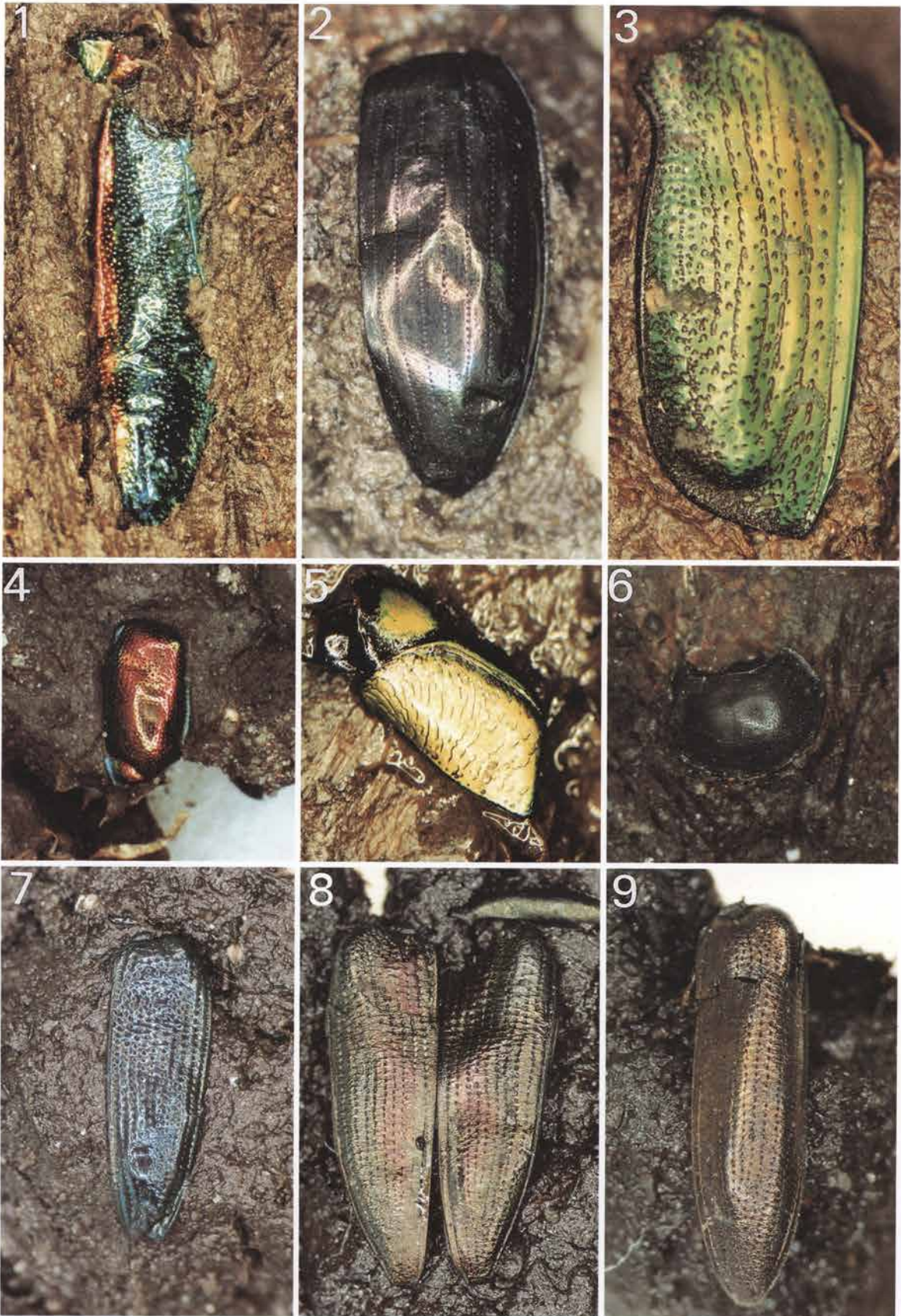
図版Ⅵ 勝川遺跡産ネクイハムシ3種の電子顕微鏡写真

1. ガガブタネクイハムシ *Donacia lenzi* SCHONFELDT  
(勝川遺跡、弥生時代後期)
2. イネネクイハムシ *Donacia provosti* FAIRMAIRE  
(勝川遺跡、平安時代)
3. キンイロネクイハムシ *Donacia japana* CHUJO and GOECKE  
(勝川遺跡、奈良時代)

図版Ⅶ ネクイハムシ亜科の電子顕微鏡写真

1. キヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris sericea* LINNE  
(静岡・池ヶ谷遺跡、平安時代)
2. キヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris sericea* LINNE  
(愛知・岡島遺跡、縄文時代後期)
3. エゾオオミズクサハムシ *Plateumaris constricticollis constricticollis* JACOBY  
(仙台・富沢遺跡、旧石器時代)
4. カワホネネクイハムシ? *Donacia ozensis* NAKANE  
(愛知・朝日遺跡、縄文時代中期)
5. ヒラタネクイハムシ *Donacia hiurai* KIMOTO  
(仙台・富沢遺跡、縄文時代中期)

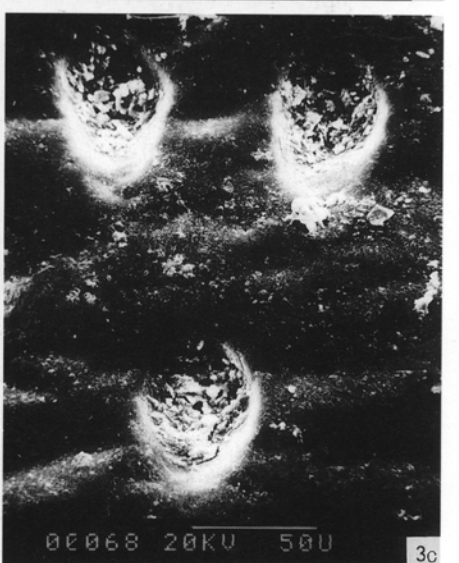
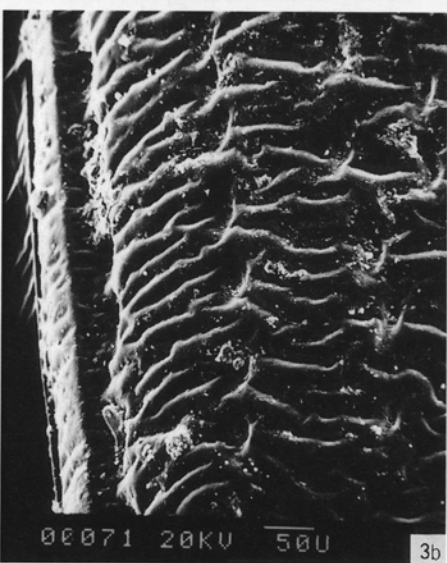
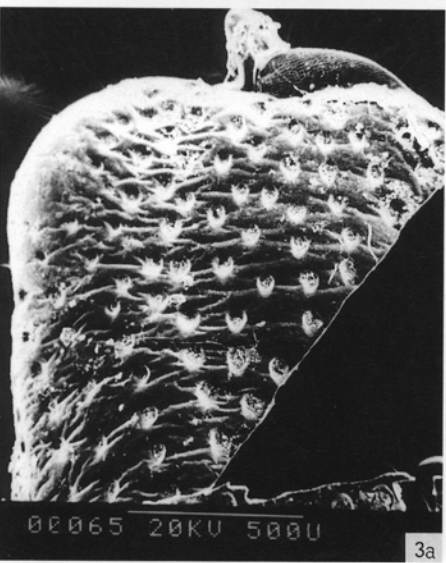
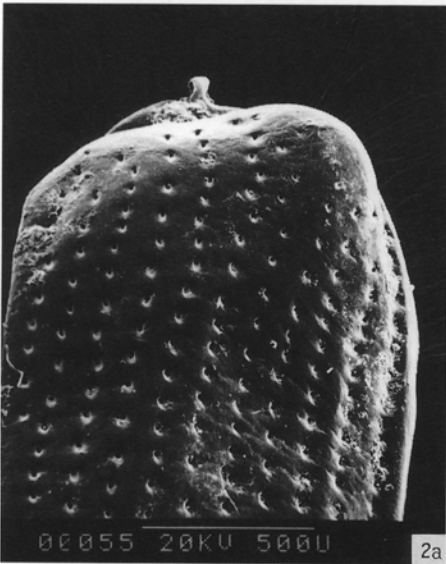
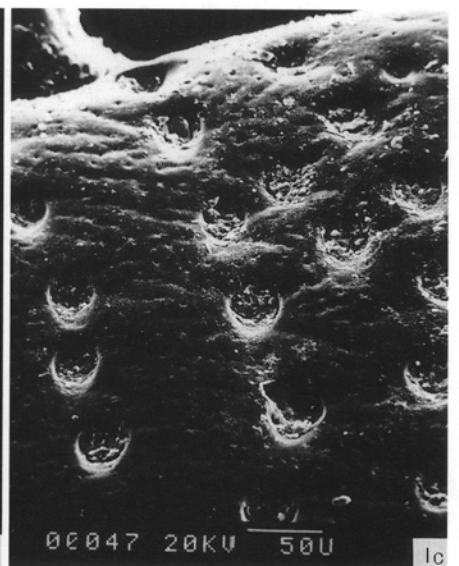
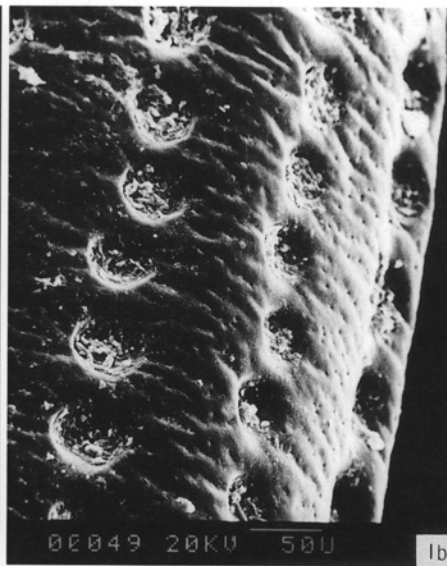
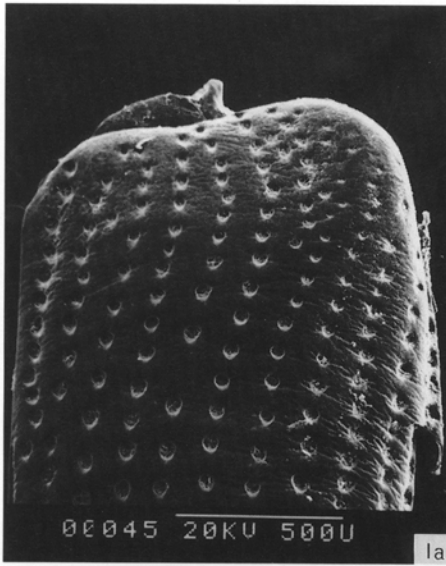
図版Ⅳ 昆虫化石の顕微鏡写真(1)



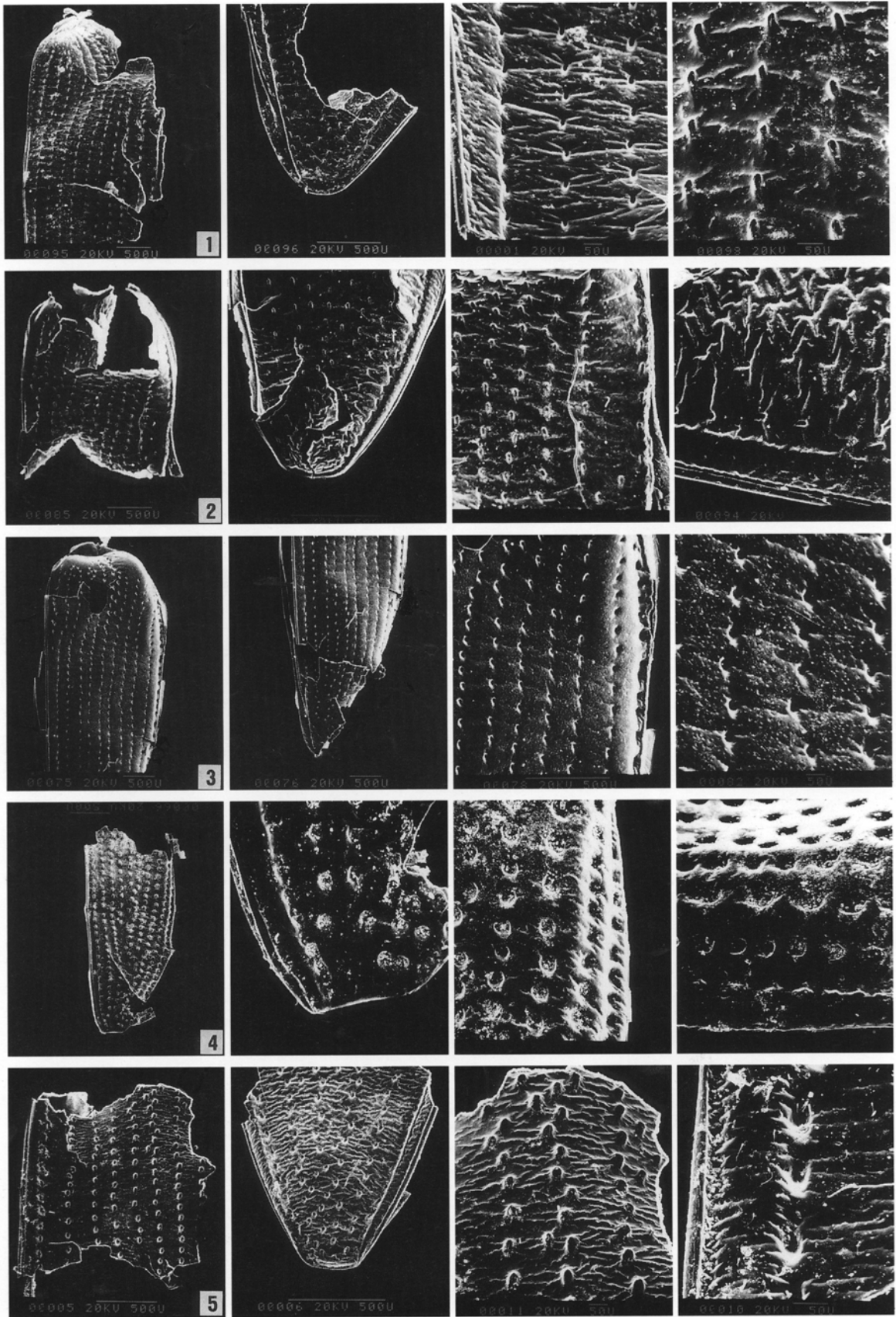
図版 V 昆虫化石の顕微鏡写真(2)



図版VI 勝川遺跡産ネクイハムシ3種の電子顕微鏡写真



図版Ⅶ ネクイハムシ亜科の電子顕微鏡写真



## 5 まとめ

### 1. 地形および地層

勝川遺跡は、第四紀更新世後期の低位～最低位段丘を構成する鳥居松面上から庄内川水系地蔵川の沖積面にかけての比高約2mの起伏のある地形面上に立地する。

勝川遺跡62F区の基盤層には、最下位に砂礫層、その上位に青灰～暗灰色のシルト層と二層の黒灰色の腐植質シルト層の互層が堆積している。黒灰色腐植質シルト層は、町田遺跡の二層の分解の進んだ黒色泥炭層（黒バンド I および II）と共通するものであり、町田・松河戸両遺跡では上位の黒色泥炭層（黒バンド II）中より縄文時代後・晩期の境界付近に位置する「松河戸火山灰層（MT）」（森ほか、1990）が発見された。弥生時代中期末の遺物包含層は黒灰色の砂礫層、木製品の貯蔵施設内では礫まじりの黒灰色の砂質シルト層である。その後、弥生時代後期～奈良・平安時代にかけて勝川遺跡には継続して旧河道が存在し、河道内の堆積物は腐植質のシルト層が卓越する。

松河戸火山灰

勝川遺跡東方の沖積地一帯では、縄文時代に遡る二時期の浅谷地形の存在が確認された。その一つは縄文時代中期の未分解の泥炭層に埋積され、上部～最上部に松河戸火山灰層の堆積がみられる比高2m以上に達する浅谷地形（埋積浅谷 I）、もう一つは松河戸火山灰層の堆積後、縄文時代晩期の比較的分解の進んだ腐植質シルト層に埋積された比高約1.8mの浅谷地形（埋積浅谷 II）である。

埋積浅谷 I

埋積浅谷 II

### 2. 珪藻遺骸群集

勝川遺跡62F区の旧河道・深掘りトレンチ内、および町田遺跡62B区（PSトレンチ）より珪藻遺骸の試料を採取し、分析した。両遺跡とも深掘りトレンチ下層では、新第三紀層から二次的に混入した海生種が伴われ、庄内川上流部の新第三紀層の剝削が著しく、この頃、鳥居松段丘崖下の勝川・町田両遺跡周辺の沖積地においては、河川の侵食・運搬作用が相当激しかったものと推定される。

つづく縄文時代中期（町田遺跡）の試料では、好止水性の浮遊生珪藻を主体とした珪藻群集、その上位の黒色泥炭層（黒泥層）中では陸生珪藻が多産し、地下水位の低下があったことが考えられる。

縄文中期の  
地下水位低  
下

弥生時代中期末の木製品貯蔵施設の埋土中からは、汚濁水域を好む種群が多数見いだされ、その結果、水質は富栄養に傾いていたものと思われる。弥生時代後期～古墳時代初頭の頃は富栄養止水域を特徴づける種群が優占することから、流水のほとんどない安定した富栄養の水域、古墳時代中期の頃は弱酸性の貧栄養水域で、湿地～水はけの悪い沼沢地のような環境であったことが考えられる。奈良・平安時代の試料では好止水性種に加え好流水性の珪藻がみられ、流水的環境と湿地～沼沢地的環境が交錯する河道周辺の変化しやすい環境だったことが推定された。

富栄養水域

### 3. 花粉・大型植物遺体

落葉広葉樹  
林の成立

花粉化石の試料は主に町田遺跡62B区、大型植物遺体の試料は勝川遺跡62F区より得られた。町田遺跡の分析結果より、縄文時代中期から後期にかけての頃、鳥居松段丘上から低地一帯の広い範囲にナラ類などを中心とした落葉広葉樹林が成立していたと考えられる。森林には照葉樹のカシ類も混生し、樹種構成の多様な森林だったことが推定される。草本花粉では、コウホネ属・ヒツジグサ属・フサモ属・サンショウモなどの浮葉・沈水植物が多く認められ、流れの少ない湿地帯ないしは池沼のような環境を呈していたものと考えられる。また、ハンノキ属が連続して高率に出現することから、湿地帯の周りにはハンノキが生育していたことが推定される。

縄文後・晩  
期の好氣的  
環境

縄文時代後期と後・晩期の頃の二層の黒泥層では花粉や珪藻化石の保存が悪く、地層中からはイネ科起源の植物珪酸体が多量に検出されることより、庄内川水系の沼沢地一帯の水深が浅くなり、好氣的な環境になっていたものと考えられる。

弥生時代中期の地層中からはイネ属花粉が多数産出し、同時代の土坑中より焼け米やモモ・オニグルミ・クリなどの栽培ないし採集植物が多量に見いだされたことから、勝川遺跡周辺では人間による低湿地の人工改変が開始されたことが推定される。弥生時代後期ではモモ・オニグルミに加え、ヤマザクラ・ヒメビシ・ブドウ属の種子およびアカガシ亜属の球果が、また古墳時代ではヒョウタン・モモ・ウリの仲間のほか、アカガシ亜属やコナラ亜属の球果、およびヒシ・ヒメビシ・ヒシモドキなどの水生植物の種子が多数検出された。奈良・平安時代では、ヒョウタン・モモ・ウメのほか、コナラ亜属・アカガシ亜属・エゴノキ・クマヤナギおよび多数の水生植物の種子が発見された。

### 4. 昆虫化石群集

勝川遺跡群より産した昆虫化石は計5239点、うち種レベルまで同定できた昆虫は86種1176点であった。目および科・属レベルまで同定できた昆虫は、1目2点・16科351点・6亜科671点・12属425点（族および亜属を含む）の計1949点であった。

溪流性昆虫  
森林性昆虫

縄文時代中期の試料からは、山間の溪流付近に棲むマメゲンゴロウ属を多産した。ゴミムシ科やコアオハナムグリ・アオハナムグリおよび森林性のコガネムシ科なども多く発見された。縄文時代晩期ではゴミムシ科をはじめとした地表性歩行虫、コメツキムシ科・スジコガネ亜科・サクラコガネ属・ハムシ科などの食葉性昆虫を多産した。

イネネクイ  
ハムシの出  
現

弥生時代中期ではコブマルエンマコガネなどの食糞性昆虫とゴミムシ科、およびタマムシなどが発見された。弥生時代後期の試料からは、イネネクイハムシを多産した。ゴミムシ科やコガネムシ科の出現点数も多かった。

古墳時代の試料はネクイハムシ亜科の4種に加え、ガムシやゲンゴロウ科などの水生昆虫、およびコガネムシ科の食葉群などを産した。奈良時代では食葉性昆虫が多く検出され、ミヤマカミキリ・カナブン・カブトムシなどのクヌギ・カシ類の樹液に集まる種群を随伴した。また、ガガブタネクイハムシ・キンイロネクイハムシなどのネクイハムシ亜科、お

よびその他の水生昆虫も多く発見された。平安時代の試料からはイネネクイハムシを多産した。

鎌倉時代の試料からは、ヒメコガネ・ドウガネブイブイなどの食葉性昆虫、およびゴミムシ科やコブマルエンマコガネなどの食糞性昆虫が多く見いだされた。江戸時代前期の試料からは、スジコガネ亜科・ハナムグリ亜科・サクラコガネ属などを産した。江戸時代後期では、ヒメコガネ・ドウガネブイブイ、およびスジコガネ亜科などのコガネムシ科の食葉群を多産した。

## 5. 古環境の変遷

縄文時代中期の泥炭層中の昆虫および花粉分析結果より、勝川遺跡周辺にはクヌギやコナラなどを中心とした落葉広葉樹が繁茂し、当時の人々は木立に囲まれて生活していた。近くには清流が流れ、冷涼で清澄な止水域が存在した。止水域のまわりにはハンノキ林が成立していた。これより以前の一時期、気候がやや寒冷化しそれに伴って沖積地一帯に浅谷（埋積浅谷Ⅰ）が刻まれた。浅谷周辺の湿地帯には寒冷型の昆虫であるカワホネネクイハムシが棲息していた。

落葉広葉樹林

気候の寒冷化

つづく縄文時代後・晩期の頃、庄内川水系の広い地域にわたって最大層厚21mmに達する火山灰層（MT；松河戸火山灰層）が降灰した。火山灰層直下の泥炭層の年代は、町田・松河戸両遺跡ともに $3120 \pm 120$  y. B. P. と求められたので、火山灰層の降灰年代は約3000年前頃のことと考えられる。松河戸火山灰降灰ののち、再び浅谷（埋積浅谷Ⅱ）が形成された。縄文時代晩期の終わり頃には浅谷底の埋積が開始された。なかにはコメツキムシ科・スジコガネ亜科・サクラコガネ属などの食葉性昆虫が多数含有され、勝川遺跡周辺には依然として豊富な樹木が生育していたことが推定される。また、ゴミムシ科の多産やシテムシ・エンマムシ・ダイコクコガネ・ハネカクシ科等、各種動物の屍体や排泄物に集まる食屍性ないしは食糞性昆虫の出現によって、付近には人間を含めた大型草食獣の活動の痕跡が伺われる。

火山灰の降灰と浅谷の埋積

弥生時代中期になると、勝川遺跡の周りには多くの人々が定住するようになり、それに伴って樹木の伐採や水域環境の汚染が進行した。弥生時代後期では、段丘下の湿地帯からイネネクイハムシを多産し、勝川遺跡の周辺地域に水田耕作の影響が及んだことが推定される。湿地帯のところどころには、水生植物の自生する沼沢地が存在していた。

水稲耕作

古墳時代は、昆虫化石ではネクイハムシ亜科に属する4種、大型植物遺体ではヒメビシやヒシモドキなどの水生植物、珪藻遺骸では好湿地性種が多産することより、自然度の高い湿地帯が存在したことが推定される。奈良時代になると、河床には植物片まじりの腐植質シルト層が厚く堆積し、アカガシ亜属およびコナラ亜属の球果に加え、食葉性昆虫が多く検出された。また、ネクイハムシ亜科には自然度の高い水域を好む種群がみられることから、勝川遺跡周辺には広葉樹林を伴う自然度の高い止水域が存在したことが推定される。

自然度の高い止水域

大規模な水田開発

平安時代では勝川・町田両遺跡ともにイネネクイハムシが増加し、水田雑草の一種のカ

ンガレイなどの種子が土層中より多く認められた。大規模な水田開発に伴う低湿地の人工  
改変が進められた様子が伺われる。鎌倉時代の松河戸遺跡では、ヒメコガネおよびドウガ  
ネブイブイなどの食葉性昆虫を多く産した。人家が近くに存在する水田地帯の畦畔や水路・  
農道などが復元される。

勝川宿の繁  
栄

江戸時代前期では、人家近くのマツなどの樹木の茂った土手と止水域（おそらく水田）  
の存在が推定される。江戸時代後期の勝川遺跡からは、ヒメコガネやドウガネブイブイな  
どの食葉性昆虫を多産することより、果樹等が植栽された人家の周辺で、あたりは勝川宿  
に伴う家の密集する環境だったことが推定される。 (森 勇一)

標高(m)	模式柱状図	層相	放射性炭素年代	相対年代	古生物		の分析		果	古環境	人間活動
					昆虫化石等	珪藻遺骸群集	花粉・大型植物遺体				
		灰白色シルト層		江戸時代後期	ヒメコガネ・トウガネアブイアブイおよびスジコガネ亜科などの食葉性昆虫			花粉・大型植物遺体	周囲にはほとんど森林はなく、果樹や草地のみの景観	勝川宿栄える 下街道の整備進む	
		暗灰色シルト層		江戸時代前期	トウガネアブイ・サクラコガネ属に加え、針葉樹や樹液に集まる昆虫群	好アルカリ性の珪藻群集		花粉・大型植物遺体	広葉樹林にかわってマツ林が増加		
		暗灰色シルト層		鎌倉時代	ヒメコガネおよびゴミムシ科・食葉性昆虫など			果	大規模な水田開発	中世の墓および溝が作られる	
		砂質シルト層		平安時代	イネクイハムシ・ゴミムシ科および水生昆虫など			果		醍醐寺領の荘園となる(安食庄)	
		腐植質シルト層	1260±100	奈良時代	ガガアブタネクイハムシ・キンイロクイハムシなどの水生昆虫、コガネムシ科	好止水性珪藻に加え、好流水性珪藻		果	森林の伐採進む	川沿いで律令祭祀行われる 勝川陳寺創建	
		腐植質シルト層	1930±80	古墳時代	ネクイハムシ・亜科および食葉性昆虫など	好アルカリ・浮遊生珪藻の産出		果	河川の流速弱く、湿地帯が広がる	南東山古墳・勝川大塚古墳の遺構	
		黒灰色シルト層	2130±100	弥生時代	イネクイハムシ・食葉性昆虫	好アルカリ・好止水性で汚濁性珪藻が優占する		果	浅谷地形の形成と埋積(埋積浅谷II)	水稲耕作の開始 方形周溝墓の遺構	
		腐植質シルト層	3050±110 3120±120	縄文時代晩期	コムツキムシ科・サクラコガネ属などの食葉性昆虫、ゴミムシ科・水生昆虫ほか	陸生珪藻の増加		果	松河戸火山灰の降灰	松河戸89Dc区付近で狩猟採集生活の痕跡	
		火山灰層 黒泥層		縄文時代後期				果	庄内川水系の低湿地の沼沢地化進行		
		シルト質粘土層						果	地下水位低下	松河戸62E区付近で人々が定住生活進む	
		黒泥層	4400±100			陸生珪藻の増加		果	ナラ属を主体とした落葉樹林と湿地帯の存在		
		泥炭層II	4640±130					果	浅谷地形の形成と埋積(埋積浅谷I)		
		泥炭層I	5000±100	縄文時代中期	カワホネクイハムシなどの寒冷型昆虫 マメケンゴロウ属などの水生昆虫と森林性のコガネムシ科ほか	好止水性の浮遊生珪藻を主体とした珪藻群集 <i>Thalassionema mitschoides</i> , <i>Denticulopsis lauta</i> などの海成二次化石の産出		果	気候の寒冷化(縄文海進)	勝川62F区より縄文前期の土器片出土	
		シルト層						果	第三紀層の削刺盛ん		
		細～中粒砂層		更新世				果	気候の寒冷化(最終氷期)		
		砂礫層						果			

第6表 勝川遺跡群における環境の変遷

## 6 勝川遺跡出土の韓式系土器の胎土

### 1. はじめに

**分析試料** 勝川遺跡の62年度調査区 (IKK62F区) では、韓式系土器の特徴を持つ甗が一点出土した。ここでは、この土器が朝鮮半島から直接運び込まれた物であるのか、あるいは国内で模倣して作られた物であるのか、また国内であるなら遺跡近傍で作られたのかどうかを考えるために、この土器の胎土分析を行った。また同遺跡出土の甗三点も比較試料として分析をおこなった (第7表)。これら4試料は、いずれも出土層位より古墳から奈良時代のものと考えられる。

第7表 分析試料一覧表

No.	試料	調査区	層位・遺構	時代
1	韓式系土器	IKK62F	礫層下黒灰色砂礫層	5世紀末～8世紀
2	比較試料	〃	SX04	〃
3	〃	〃	NR01礫層上	〃
4	〃	〃	礫層	〃

### 2. 分析方法

**分析方法** 筆者らは、これまで弥生土器を中心に、土器表面の実体顕微鏡観察と薄片プレパラートを用いた偏光顕微鏡とを併用して、胎土分析を行ってきた。しかし、今回の分析試料のような土器表面に多くの砂礫を持たない須恵質の土器には、表面観察は適さない。したがってここでは薄片プレパラートによる偏光顕微鏡観察のみの分析を行った。ただし、この方法は観察面積が限られるため、それぞれの試料より3枚のプレパラートを作成し、観察面の偏りを避けるよう配慮した。

### 3. 分析結果と考察

**岩片・鉱物組成** 各試料について、偏光顕微鏡下で観察された鉱物・岩片を第8表に示す。表中の記号はそれぞれの量を表すが、定量的ではなく観察者の判断によった。

第8表 勝川遺跡出土試料の偏光顕微鏡観察結果

No.	石英	斜長石	正長石	黒雲母	ジルコン	チャート	砂岩	溶結凝灰岩
1	++	(-)	-		-	+		-
2	++	(-)	-	(-)	-	-		-
3	++	(-)	-	(-)	(-)	+	(-)	-
4	++	(-)	-		-	+		-

鉱物・岩片の量 ++>+>-> (-)

分析の結果、鉱物では4試料とも石英が砂礫の大半を占め、副成分鉱物としてジルコンが比較的目立った。また岩片ではチャートが多く、これに溶結凝灰岩がともなった。また主要造岩鉱物のうち、斜長石が4試料とも非常に少なく、黒雲母も2試料にわずか1片ず

つ含まれたのみであった。

この結果から、4試料はよく似た胎土であるということができ、試料1を他の試料と区別することは難しい。むしろ普通は多くは含まれないであろうジルコンが普遍的にみられることや、溶結凝灰岩が共通してみられることは、これら4試料の胎土の特異性を示しており、酷似した胎土であるといつてよい。

奥田(1987)による大阪・河内地域出土の韓式系土器の分析結果では、土器中の砂礫に地域ごとのまとまりがあり、多くは遺跡付近の地質に深く関わっているとされており、また韓国産土器は砂礫組成にばらつきがあるものの、花崗岩に由来する砂礫を主体としていることを報告している。この結果より、河内地域出土の韓式系土器の多くは遺跡近くで製作されたか、国内の他所から持ち込まれたものと結論づけている。

他地域の韓式系土器

この結果と試料1を比較すると、花崗岩の岩片・黒雲母が全く含まれないことや、斜長石は少ないと同時に花崗岩源特有の組織も見られないことより、花崗岩地質の影響は考えられない。このことから試料1が朝鮮半島からの搬入品である可能性は少ないといつてことができる。

分析を行った4試料に共通して多く含まれるチャートは、木曾三川や庄内川の中流域に分布しており、遺跡付近の堆積物中やこの地域の土器中には普遍的にみられるものである。また溶結凝灰岩はおそらく一般に濃飛流紋岩と呼ばれているものであり、特に木曾川・庄内川流域に特徴的に分布するものであろう。土器中のこれらの岩片は、両河川の堆積物に由来するものと思われる。しかしながら、この地域の弥生時代の土器胎土と比較すると、弥生土器では上記2種の岩片に加え、木曾川(旧木曾川を含む)流域では輝石・火山岩が、庄内川では雲母・角閃石が少量ながらともなうので、これら4試料とは明らかに区別することができる。今回の分析試料の胎土は、長石類・雲母など風化摩滅に弱い鉱物が非常に少ないこと、逆に石英・ジルコンといった硬度の高い鉱物が多いことなどから、弥生時代の遺跡が立地する低地の堆積物でなく、現在では段丘や台地を形成するより古い堆積物(瀬戸層群・常滑層群など)中の粘土と考えることができそうである。

岩片・鉱物の給源

瀬戸層群は濃尾平野の東縁から東濃地域に、常滑層群は知多半島一帯に分布している互いに対比可能な堆積物である。これらの陶磁器の原料に適していることから、この地域は現在でも陶磁器の産地としてよく知られており、古窯跡も密集している。これらの堆積物と4試料の胎土とを比較すると、前述のように花崗岩地質の影響がほとんどないことより、花崗岩分布域に近い、猿投古窯跡群などのある濃尾平野東縁部の可能性は少ない。また、常滑層群の陶磁器材料は一般に雲母類を多く含み、肉眼的色調も赤っぽい色を呈するなど、分析した4試料とは異なった特徴を有している。これらの理由と胎土中の岩片組成より、胎土の産地が東濃地域である可能性を支持したい。つまり、韓式系土器(試料1)を含む勝川遺跡出土の須恵質甗は、遺跡近辺からの供給であるものとする。当遺跡の近辺にも古窯跡は数多くあり、これらのうちのどれかから供給されたのではなかろうか。韓式系土器という特殊な資料でもあり、これら古窯跡出土資料の分析結果との比較や、類例の検討・

産地推定

試料の時期決定などによる慎重な産地比定が期待される。

(永草康次)

## 文 献

愛知県常滑窯業技術センター開発課(1978)窯業原料利用の手引き—原料の特性把握と土もの製品開発のために—。愛知県常滑窯業技術センター運営協力会, 234p.

三辻 利一(1991)朝鮮三国時代土器窯跡から出土した土器の胎土分析。朝鮮三国時代陶質土器の研究, 財団法人由良大和古代文化研究協会, 99-139.

日本の地質『中部地方II』編集委員会(1988)日本の地質5 中部地方II, 307p.

奥田 尚(1987)韓式系土器の砂礫観察。韓式系土器研究I, 韓式系土器研究会, 99-107.

## 第V章 考察

### 勝川遺跡から出土した墨書土器・祭祀具の意義について

#### (1) はじめに

勝川遺跡の62F区、NR01からは、55点<sup>1)</sup>の墨書土器が、人形や舟形などの祭祀具などと共に出土しており、注目されている。55点という点数は、量的にさほど豊富とはいえず、解読不能の文字も多いことから、墨書土器の性格を知ることは、難しい面もある。

しかし、出土遺構が川であること、人形などと一緒に出土していること、そして「寺」と墨書されている灰釉陶器が出土していることなどから、勝川遺跡の性格を考えることは、大きな意味をもっているともいえる。そこで、墨書土器について、その集中地点ごとに文字内容を検討し、同時に共伴した祭祀具との関係も考えていくことにする。

#### (2) 墨書土器の器種、墨書部位、墨書字数

墨書土器には、須恵器が10点、灰釉陶器が45点含まれる。須恵器では、折戸10号窯式期(以下、O-10期)から黒笹90号窯式期(以下、K-90期)にかけてのものがあり、灰釉陶器では黒笹14号窯式期(以下、K-14期)から東山72号窯式期(以下、H-72期)のものがある。

墨書土器の器種を見ると、須恵器では杯や杯蓋がほとんどであり、灰釉陶器では椀、皿のみである。他の遺跡の墨書土器の器種では一般的に供膳具形態が多いのと同じように、勝川遺跡の墨書土器も供膳形態がほとんどである。

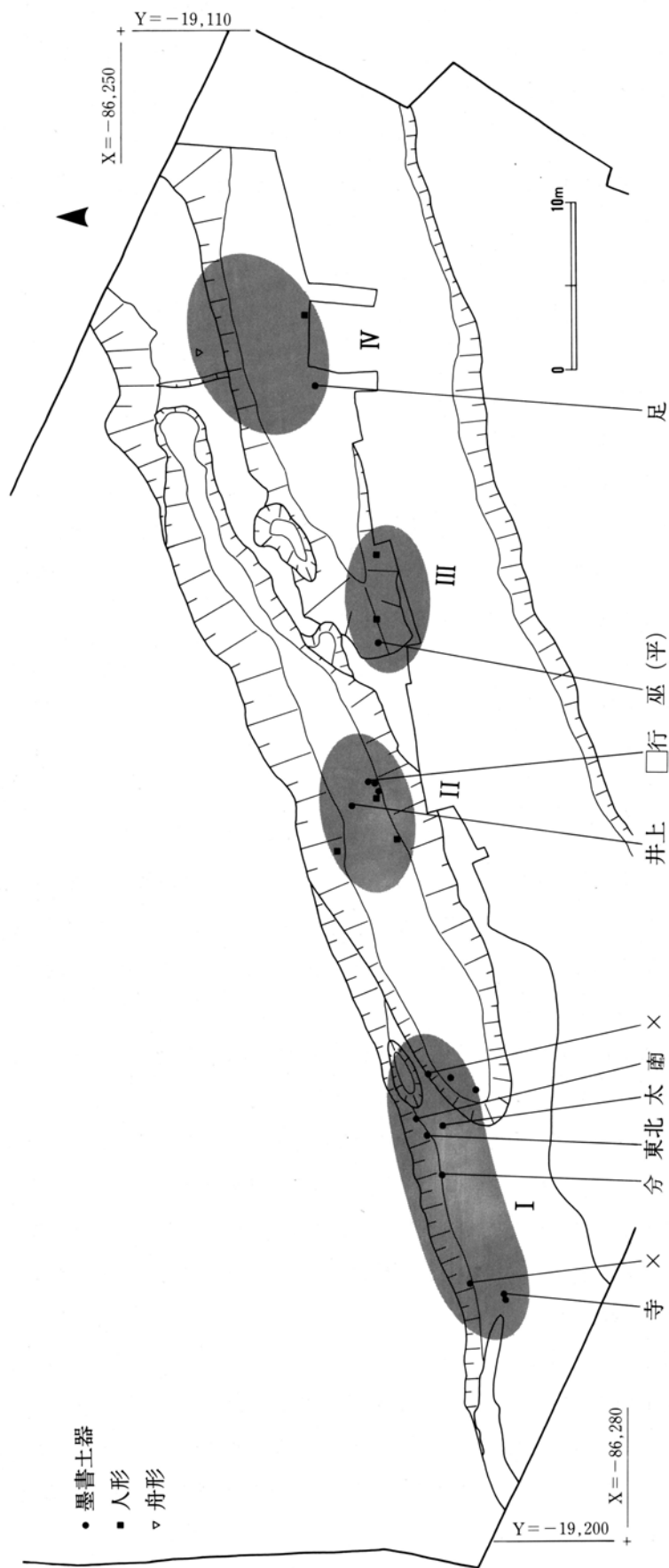
墨書部位は底部外面が圧倒的に多い。須恵器では杯蓋の外面に墨書される例と杯の底部外面に墨書される例がほとんどで、杯の体部外面に墨書される例が1例見られるのみである。灰釉陶器では、ほとんど椀や皿の底部外面に墨書されていて、底部内面に墨書されているのは2例のみである。

墨書を全体として見ると、1字ないし2字のものだけであり、字数の多いものがみられないことも特徴といえる。

#### (3) 墨書土器の出土状況概観

集中して墨書土器が出土した地点は大きく4箇所に分かれる。この集中地点は、墨書土器投棄時の状況のある程度反映していると思われるので、便宜的に西からI~IV地点としておおよその出土状況を見ていく。

I地点は、須恵器の「全」、「×」、「封」(O-10期)、「井手」(K-90期)などの文字がある。灰釉陶器では、「奉」(K-14期)、「宅北」、「寺」、「別院」、「足□」、「文□」、「月林」(K-90期)、「万」、「富井」、「太」、「元」、「全」、「×」、「東北」、「南」(H-72期)の文字が見られる<sup>2)</sup>。そのうち、「元」の墨書をもつものは、転用硯である可能性が高い。



第32図 墨書土器・祭祀具出土地点一覽

この地点は土器がけが集中して出土しており、曲物が1点共伴するのみである。

IIの地点では、「井上」、「□行」、「別」(K-90期)の墨書をもつ灰釉陶器が出土している。

ここでは墨書土器と共に人形4点、曲物7点、木筒1点が出土している。

III地点では、須恵器に墨書されたものが数点見つかったが、はっきり文字の読めるものはない。O-10期には「巫」もしくは「平」と読める須恵器があるが、底部が半分しか遺存していないため、読み方を決定することはできない。

IV地点では、O-10期の「足」という墨書をもつ須恵器が出土している。

III・IVの地点では、人形3点と舟形も出土しているのが注目される。

#### (4) II・III・IV地点の出土の人形・舟形について

つぎに、人形と舟形について考えてみる。

人形はこれまでの研究により、呪詛、病氣治療、祓などに用いられたことがわかっている<sup>3)</sup>。奈良・平安時代において、人形は一般に祓に用いたのだが、祓とは人間の形代である人形に、人間の罪穢を移して流す儀礼である。舟形も人の穢を負った人形を無事に他界へ送るための乗物であったとされる<sup>4)</sup>。

勝川遺跡のNR01では、II地点で4点の人形、III・IV地点で3点の人形と舟形がそれぞれ出土している。年代的には、II地点のものがK-90期、III・IV地点のものはO-10期である。

II地点の4点のうち2点は、同じ形、同じ大きさであり、全くの同位置から一緒に出土したものである。この2点は明らかにセットとして用いられたものであり、祭祀の時に同じ人形を2点ないし数点ずつ使ったことを示している<sup>5)</sup>。

また、その2点の人形に関して注目されるのは、1点は背中に「柚」の墨書、もう1点は胸部に「楊」の墨書をもっていることである。「柚」や「楊」はいずれも木の名前であるが、何を意味するのかわからない。この墨書は土器に墨書をする行為と共通の目的があるのかもしれない。

2点とも墨で顔が描かれていて、「柚」の墨書のもつものは、頭髪・眉毛・目・鼻・口、ヒゲ、そして衣服までもが描かれているのが興味深い。

III、IV地点の3点の人形のうち1点は荷札木筒状を呈している。目、鼻、口は線刻で表現されている。未使用の木筒を人形に転用したようで、きわめて珍しい例である。

他に注目されるものに、顔に墨で目、鼻、口が書かれていて、胸に「×」状の緊縛痕をもつ人形がある。この痕跡は、人形に移した罪穢を人形にしっかり付けておくためのものだろうか。その意味ははっきり分らない。

舟形は、平底で薄い簡単なつくりの舟である。

これらの祭祀具から、いわゆる律令的祭祀<sup>6)</sup>がこの勝川遺跡でも行われていたことが確認できる。また、木製品は遺存し難いかめ、他にも木製祭祀具が用いられていた可能性もある。これら7点の人形と舟形は、NR01から出土した墨書土器の性格を考える上で、大きな意味をもっているといえよう。

#### (5) 墨書内容の検討

墨書土器や人形について、集中地点ごとに概観してきた。次に墨書内容について詳しく見ていくことにする。

I地点の「全」はO-10期の須恵器に墨書されたものと、H-72期の灰釉陶器に墨書されたものが、やや離れて見つまっている。「全」は完全などと使われる全の意味からした吉祥句と考えていいだろう。「×」は何かの記号だろうが、はっきりした意味はわからない。「×」もやや離れた所から、O-10期の須恵器に書かれたものと、O-53期の灰釉陶器に書かれたものが出土している。「封」は封ずるという意味で書かれたものだろうか。「本」は「本」として良いのか、「大」という字と「十」という字と一緒に書いたものなのかは不明である。

「宅北」、「別院」は寺か何かの中心的施設に対しての「宅北」、「別院」<sup>7)</sup>という意味であろうか。「宅北」、「別院」、「寺」の墨書は同じ性格のものであり、墨書土器全体の中でも違った意味をもつ一群とみてよかろう。「宅北」という文字の周囲には、5箇所の花卉が描かれていて目をひく。何のために描かれたのかは不明だが、「宅北」の文字内容の重要性を示しているといえよう。

「井手」は井堰、取入口、引水路などを示す普通名詞と解釈できるが、そこから派生した地名とも考えられる。「井手」の墨書をもつものは、K-90期の須恵器と灰釉陶器がそれぞれ1点ずつ見つまっている。違う書き手によるものと思われるが、同筆でないとも言い切れない。「井手」が地名を指す言葉であるなら、「寺」などの墨書と同じ性格のものかもしれない。

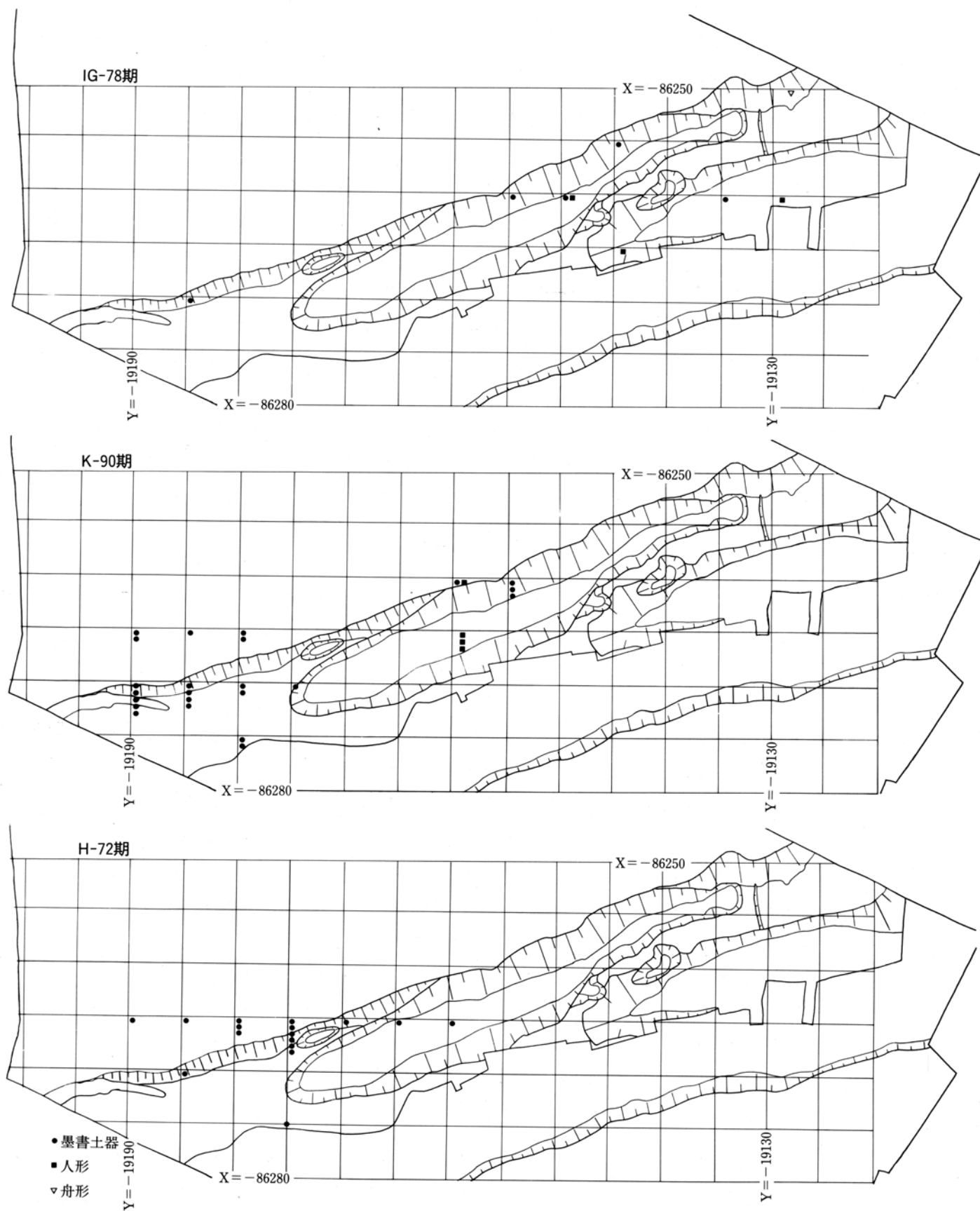
「足□」、「文□」、「月林」はいずれも意味が不明である。「足口」は人名か、あるいは吉祥句を二字組み合わせたものかもしれない。

「万」、「富井」、「太」は吉祥句である。「富井」は初めから2字を書くつもりではなく、後から「井」を書いたようである<sup>8)</sup>。「井」は具体的な数を表すものではなく、富がたくさん来るように、というような願いを込めて付け加えられたのであろう。「分」は「合」という字の変形とすべきか、「人万」と読むべきか、勝川遺跡の墨書土器中では他に類例がないためははっきりしない。

「東北」、「南」も中心的施設に対して、「東北」なり「南」なりを表しているものと解釈すれば、「寺」などと同じ性格のものだろう。「寺」などの墨書土器がK-90期のものであるのに対し、「東北」などの墨書土器がH-72期のものであることを考慮すると、後者は祭祀に関係するような目的で方角が書かれた<sup>9)</sup>とも考えられる。

「南」は「生」という字が「南」という字の中に入った合わせ文字である<sup>10)</sup>。「元」は吉祥句としていいだろう。

II地点の「井上」が人名であるのか地名であるのかは一概に断定できない<sup>11)</sup>。同じK-90期に属することからI地点の「井手」と関係のある言葉なのかもしれない。I地点の「別」は近くから、別人の筆になると思われる2点の墨書土器が見つまっている。I地点の「別院」の省略とみることもできる。「□行」は意味不明である。「多万」は他の遺跡でもよくある「数



第33図 墨書土器・祭祀具出土分布頻度図 (時期別)

字十万」というものと共通するものである<sup>12)</sup>。吉祥句の「万」が更に強調されている。

「物」はよくわからないが、吉祥句の可能性はある。

III地点のO-10期の墨書土器を「巫」と断定することは困難であるが、仮にそうだとすると、この祭祀に携わった人間を示すことになるだろう。「平」であるとするとは吉祥句と解釈できる。

IV地点の「足」は「満ち足りる」という意味に通じ、吉祥句と考えられる。

(6) 時期別 地点別の墨書土器の性格

以上のことから、墨書土器を時期別にまとめてみると、次のことがいえる。

8世紀末～9世紀初頭にあたるO-10期の墨書土器はI地点とIII・IV地点で出土している。III、IV地点では人形、舟形と共伴すること、「足」という吉祥句の内容を考えると、祭祀に用いたと考えられる。I地点の墨書土器の内容も吉祥句のようなので、同じ用途で用いられ投棄されたものが、何かの理由で離れた所に位置することになったのだろう。9世紀前半頃の年代が考えられるK-14期のものは、非常に点数が少ないので、ここでは問題としないことにする。

9世紀後半頃の年代が考えられるK-90期の墨書土器はI・II地点で見ついている。II地点では人形と共に出土していることからまず祭祀に用いられた可能性が考えられる。I地点では土器だけが出土しているうえ、墨書の内容も「寺」に関する特別なものが多いことから祭祀とすぐに結びつけるのは困難である。

そう考えるとII地点の墨書内容にも「別院」の省略と思われる「別」があることから、II地点の土器がすべて祭祀に用いられたとも決めかねる。I地点の「文□」、「月林」、「足□」も意味が不明である上、II地点の「井上」、「□行」も同様である。K-90期の墨書土器のうちで、「寺」「別院」などの勝川廃寺関係の墨書土器以外のものには、人形と共に祭祀に用いられた可能性もある。

このK-90期の墨書土器の性格は今後の課題である。

10世紀後半以降の年代が考えられるH-72期のものは、祭祀具の見つからないI地点で出土しているが、「万」、「太」、「富井」、「全」などの吉祥句が見られることから、祭祀に用いられたと一応考えられる。O-10期と共通する「全」、「×」という文字内容もその裏付

	IG-78期	K-14期	K-90期	H-72期
文字内容	全 メ 封 巫 (平) 足	本	井 足 手 口 別 文 院 口 寺 月 井 林 手 井 宅 上 北	万 × 富 太 井 元 分 多 全 万 東 物 北 北 南

第9表 時期別墨書文字内容



第34図 共通する内容の墨書文字集成

けとなる。

「東北」、「南」は、祭祀に用いられた可能性もある。この墨書の方角が何かの施設に対する方角か道教などのまじないに関する方角なのかによって、墨書の意味も変わってくる。

#### (7) NR01での祭祀

これらの墨書土器は、時期を違えて3回以上にわたって川に投棄されたと思われる。O-10期のもものとK-90期のもとの一部とH-72期のものは、水辺での祭祀の後、川へ投棄されたのだが、その祭祀とは何が考えられるだろうか。人形、舟形の性格と墨書土器の吉祥句の内容を考えると、(4)で述べた祓<sup>13)</sup>もしくは禊が具体的には考えられる。

勝川廃寺の近くのこの川で祓が行われたとすると、その行為を行ったのはどういう人々だったのであろうか。寺の僧たちが祓を行ったとすると、少々似つかわしくないという気がしないでもない<sup>14)</sup>。しかし、金子裕之氏によれば、仏教では人形を使わない、ということはいえない。仏教、神祇などということにこだわる必要はない、とのことであった。このことは、神仏習合という考え方で説明がつく。

NR01は寺のそばにあっても、寺域内で祓をしていたわけではないため、寺のそばに何らかの官衙的施設があって、官人たちが祓をしたとも考えられよう。

#### (8) まとめ

墨書土器の器種では、須恵器は杯、杯蓋が多く、灰釉陶器では椀、皿がほとんどである。墨書部位は、土器の底部外面が多い。この底部外面は、字の書き易い場所であるから選ばれたのかもしれない。

字数は1字のものか2字のものだけである。この中には人名であるものは確認されていない。原則として、1字のものは吉祥句であり、2字のものの中には、地名や寺関係の施設名がかなり含まれる。「別院」の墨書土器から勝川廃寺に「別院」と呼ばれる施設があったと考えられる。また、他にも「宅北」など寺の施設を思わせるものもある。

この勝川遺跡では、少なくとも奈良時代の墨書土器(O-10期)と平安時代の墨書土器(K-14期以降)の性格が違うとは単純にいえない<sup>15)</sup>。

水辺で何かの祭祀が行われたということが考えられる遺跡と言えば、伊場遺跡<sup>16)</sup>、神明原・元宮川遺跡<sup>17)</sup>、但馬国府周辺の遺跡<sup>18)</sup>などがある。このような遺跡との共通点、相違点を考えていくことにより、勝川遺跡のNR01での祭祀の内容も徐々に明らかになっていくと思われる。

(坪井知江子・樋上 昇)

末筆ながら本稿を作成するにあたり、国立歴史民族博物館平川 南教授、放送大学青木和夫教授、奈良国立文化財研究所金子裕之考古第一研究室長の御教示を得たことをここに記し、感謝致します。

- 註) 1. 墨書土器集成表には、墨書と墨書らしいもの55点に、底部などに墨痕のあるもの7点も加えた。
2. このほかにも読み方は確実ではないが、K-90期の「僧カ」や、H-72期の「徳カ」などもI地点から出土している。
3. 金子裕之1985「平城京と祭場」『国立歴史民族博物館研究報告』第7集
4. 註3に同じ
5. 註3 p.261
6. 註3に同じ
7. 「別院」には一宗の本山の出先期間として別の場所に建てられた寺院としての用例がある。例えば『続日本後紀』承和七粘七月戊寅条に「以<sub>二</sub>播磨国揖保郡大道寺。賀茂郡清妙寺。観音寺<sub>一</sub>並<sub>二</sub>天台別院<sub>一</sub>」がある。このような例が「別院」の現代的な解釈であるが、勝川遺跡の「別院」は別屋、別棟という意味に解釈すべきであろう。『日本霊異記』上巻の第三話にみえる「爾の時に臨み、王の力秀れにたる有り。当の時、大宮の東北の角の別院に住む」などという用例と同じである。
8. 平川 南氏の御教示による。
9. 斎藤 忠1980「各地出土の墨書土器より伊場墨書土器」『伊場遺跡遺物編2』浜松市教育委員会 p.61・71
10. 平川 南1991「墨書土器とその字形—古代集落における文字の実相—」『国立歴史民族博物館研究報告』第35集 p.80・81
11. 井上は『姓氏家系大辞典』によると「井上…古訓キノへにして井於と通じ用ひらる。…」とあり、『日本書紀』大化二年条に「井上君」とある。また、『続日本紀』延暦二年九月条に「戸主…井上」、同四年七月条には「外従五位下井上直牛養」などもみえるが、墨書の「井上」を姓氏とは決めがたい。平川氏の御教示によると、「井於」の墨書土器の出土例が各地で増加しているが、固有名詞か普通名詞であるのか決めがたい、そのことである。
12. 註9 p.69  
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1988「梅橋北遺跡」p.48～53によれば、「基数字十万」などの「万」を吉祥句ととらずに人名とすべきであるとしているが、平川氏によると吉祥句と捉えて良いとのことである。また、(財)愛知県埋蔵文化財センター1990「清洲城下町遺跡」には「生万カ」や「上万」などの墨書土器があり、同様に吉祥句として考えられる好例である。
13. 養老令神祇令、大祓条に  
「凡六月十二月晦日大祓者中臣上<sub>二</sub> 御祓麻<sub>一</sub> 東西文部上<sub>二</sub> 祓刀<sub>一</sub> 誦<sub>二</sub> 祓詞<sub>一</sub> 訖百官男女聚<sub>二</sub> 集祓所<sub>一</sub> 中臣宣<sub>二</sub> 祓詞<sub>一</sub> 卜部為<sub>二</sub> 解除<sub>一</sub>」  
また諸国条に  
「凡諸国須<sub>二</sub> 大祓<sub>一</sub> 者每<sub>レ</sub> 郡出<sub>二</sub> 刀一口、皮一張。鍬一口、及雑物等<sub>一</sub>。戸別麻一条。其国造出<sub>二</sub> 馬一疋<sub>一</sub>」
14. 養老令僧尼令、卜相吉凶条の  
「凡相尼卜<sub>二</sub> 相吉凶<sub>一</sub> 及小道巫術療<sub>レ</sub> 病者。皆還俗。其依<sub>二</sub> 仏法<sub>一</sub> 持<sub>レ</sub> 咒教<sub>レ</sub> 疾不<sub>レ</sub> 在<sub>二</sub> 禁限<sub>一</sub>」  
をどう解釈するかにもよる。
15. 向坂鋼二1980「伊場遺跡出土の文字資料について」『伊場遺跡遺物編2』p.52には、「このように、平安時代の、墨書土器は祭祀用として使われたものが主体を占めていると考えられ、奈良時代の墨書土器とは基本的に違う点を強調したい」とあるが、勝川遺跡の墨書土器には、奈良時代と平安時代の違いは見られない。

16. 註11報告書
17. (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1988『大谷川Ⅲ(遺物編)』本文編
18. 金子裕之・加賀見省一1980「特異な木製模造品を出土した兵庫県姫谷遺跡」『月刊文化財』202号  
『統日本後紀』は国史大系本、『日本靈異紀』は岩波古典文学大系本、『養老令』は岩波思想大系本  
『律令』による。

**その他の参考文献**

『国史大辞典』吉川弘文館

『日本国語大辞典』小学館

原 秀三郎1988「土器に書かれた文字」岸 俊男編『日本の古代14 ことばと文字』小学館

**補註)**

なお、本稿は坪井が執筆し、樋上がこれを補稿した。文章表現等で不備の点は樋上にその責があることを明記しておく。

## 第VI章 まとめ

1980年に始まった勝川遺跡の発掘調査は1990年に終了した。この12年間の調査成果をここで簡単にまとめておく。

1. 勝川遺跡は庄内川の支流である地藏川の西岸で、鳥居松段丘の縁辺部に位置する。
2. 遺跡の存続時期はⅠ期—弥生時代中期、Ⅱ期弥生時代後期～古墳時代、Ⅲ期—飛鳥時代～平安時代、Ⅳ期—江戸時代にわたっており、さらにⅠ期に先行する時期（Ⅰ期—縄紋時代）の遺物も多数出土している。
3. 遺跡の範囲は東西約500m、南北約400mにおよんでいる。
4. Ⅰ～Ⅱ期の集落は段丘上の東に居住域と西に墓域、段丘下に生産域が展開している。
5. Ⅱ期の居住域はほとんどが未調査で、不明な点が多いが、ほぼ洲原山古墳下層を中心とした東西約250m、南北約100mの範囲で、南側と西側では環濠の一部とみられる溝がみつまっている。Ⅱ期には環濠が廃絶し、さらに西側に広がっている可能性が高い。
6. 墓域は南東山地区の北側と上屋敷地区の大きく2群にわかれ、Ⅰ期は前者、Ⅱ期は後者を分布の中心としている。墓の形態は方形周溝墓を主体とするが、墳丘はすでに削平され、埋葬施設は遺存していない。
7. 生産域は苗田地区で、Ⅰ期は地藏川より分岐して段丘崖にそって流れる溝とその南に展開する掘立柱建物群によって構成されている。この地では主として木製品の製作がおこなわれており、溝のなかに掘削されて土坑からは農耕具類の未製品が出土し、掘立柱建物群の付近では棺材を埋納した土坑がみつまっている。また、石器や玉類の原石も出土していることから木製品以外にこれらの製作もおこなわれていた可能性がある。これらの遺構はⅠ期で廃絶する。Ⅱ期には地藏川を利用して木製品の製作をおこなっていた可能性が高い。
8. Ⅰ・Ⅱ期の水田跡は未検出であるが、苗田地区南側の沖積地に水田が展開していた可能性がきわめて高い。
9. 本報告書では地藏川の東に接する町田遺跡について特に触れていないが、勝川遺跡Ⅰ・Ⅱ期とほぼ併行する時期に属する小規模な居住域と墓域がみつかり、地理的にも隣接することから勝川遺跡の一地区として認識することができる。とすれば、勝川遺跡の範囲は東西約700mにおよぶこととなり、地藏川をはさんで東西に居住域・墓域をもつ県下屈指の大集落となる。
10. 8世紀のはじめ、段丘上の上屋敷地区に造営された勝川廃寺の寺域は東西227m、南北148mと確定した。寺域の内外を区画する溝および掘立柱建物は数ヵ所で検出されているが、塔・金堂などの主要伽藍の位置はいまだ推定の域を超えていない。ただ、寺の存続時期については8世紀代と従来考えられてきたが、62F区の地藏川から出土した黒笹90号窯式期に属する一群の「寺」関係の墨書土器により、少なくとも9世紀後半代までは存続して

いることがあきらかとなった。

11. 地蔵川から「寺」関係の墨書土器以外にも、井ヶ谷78号窯式期と黒笹90号窯式期に属する人形・墨書土器、東山72号窯式期の墨書土器など祭祀に関連する遺物が数多く出土し、この地で祓に類する律令祭祀がとりおこなわれていたことが判明した。これらの祭祀にかかわった人々が勝川廃寺の僧なのか、あるいはこの付近になんらかの官衙的施設が存在し、そこで働く役人達であったのかはわからないが、この地に都の風俗を知る人々が少なからず居住していたことは疑いない。
12. 江戸時代の勝川宿は中山道の脇街道にあたる上街道と下街道の分岐点に位置していた。我々が発掘調査をおこなった地点は勝川宿の中心よりかなり東にはずれている。しかしながら、下街道ぞいの調査区では、幕末を中心とする時期の町屋の遺構とともに大量の陶磁器が出土しており、当時この地が繁栄していたようすがうかがえる。

以上、12年間の調査成果を簡単に箇条書にまとめてみた。当初、本報告書でおこなう予定であった勝川遺跡に関する詳細な考察を編集者の力量不足のため実現することができなかったことを深く反省し、お詫び申しあげるとともに、今後とも勝川遺跡にかかわる研究をすすめていくことをここに記し、本報告書のまとめとする。 (樋上 昇)

# 附表

## 新旧遺構番号对照表

### 89A区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SD 01	SD 01	SK 01	SK 07	SK 09	SK 09
02	02	02	35	10	04
03	03	03	14	11	08
04	04	04	61	12	03
05	05	05	52	SX 01	SX 01
06	06	06	45	SZ 18	SK 70
07	07	07	40		
08	08	08	37		

### 89B区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SD 01	SD 02	SD 01	—	SX 01	SX 01
02	01	02	—	02	SD 06
03	03	03	—	SZ 01	01
SK 01	SK 19	04	SD 04	02	02
02	20	05	—	03	03
		06	03	04	04
		07	—	05	05
		08	02	06	06
		09	01	12	SD 04

### 90A区

### 63B区

新番号	旧番号
SD 01	SD 01

### 89C区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SB 01	SB 01	SB 14	SB 14	SD 03	—
02	02	15	15	04	SD 04
03	03	16	16	05	05
04	04	17	17	06	06
05	05	18	18	07	20
06	06	19	19	SK 01	SK 01
07	07	20	20	02	383
08	08	21	21	03	03
09	09	22	22	04	423
10	10	23	23	05	497
11	11	24	SP 408	06	133
12	12	SD 01	SD 21		
13	13	02	02		

### 62F区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SB 01	SB 05	SD 09	SD 11	ST 15	ST 13
02	04	10	10	16	01
03	01	11	12	17	02
04	02	12	23	18	08
05	03	13	13	19	11
06	06	14	14	20	03
07	07	15	30	21	04
08	08	16	16	22	09・10
09	09	17	17	23	12
10	10	18	18	24	14
11	11	19	19	25	06
SD 01	SD 24	20	09	26	05
02	02	60	01	27	07
03	03	61	SK 03	SX 01	SX 01
04	—	SK 01	01	02	02
05	05	02	02	03	03
06	04	03	07	04	04
07	29	04	08	NR 01	NR 01
08	08	05	05	02	02

### 63D区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SD 01	SD 01	SD 20	SD 20	SK 20	SK 20
02	02	23	23	22	22
03	03	24	24	24	24
04	04	SE 01	SE 01	29	29
05	05	SK 01	SK 01	30	30
06	06	02	02	32	32
07	07	03	03	33	33
08	08	08	08	38	38
09	09	09	09	40	40
10	10	11	11	41	41
11	11	12	12	42	42
12	12	13	13	SX 01	SX 01
14	14	14	14	SZ 01	SU 01
15	15	15	15	02	02
16	16	17	17	03	03
18	18	18	18	04	04

89C区竪穴住居規模一覧

	長辺m	短辺m	深さm	方位	時期	備考
SB01	4.8	4.6	0.2	N-82° 30' -W		
02	3.4	(2.5)		N-1° -W		周溝あり
03	4.1	(2.4)	0.1	真北	II-1期	一部周溝あり
04	4.1	(3.3)	0.14	N-12° 30' -W	II-1期	
05	(3.8)	3.0	0.15	N-13° 30' -W		
06	4.2	(2.5)	0.1	N-12° 30' -W	II-1期	焼土あり
07	5.1	3.7	0.06	N-70° -W	II-1期	
08	4.6	4.5	0.08	N-9° 30' -W	II-1期	
09	6.0	(4.3)	0.4	N-23° 30' -W	II-2期	
10	5.3	4.9	0.08	N-13° -W		一部周溝あり
11	(3.8)	(2.9)	0.1	N-84° -E	III-2期	一部周溝あり
12	(1.9)	(1.2)	0.09	N-77° -W		
13	(2.9)	(2.6)	0.04	N-80° 30' -E		
14	(2.6)	(2.4)		N-69° 30' -W	II-1期	一部周溝あり
15	5.8	5.3	0.16	N-58° 30' -E	II-1期	突出部あり
16	4.4	3.9	0.07	N-39° -E	III-1期	焼土あり
17	(3.0)	(2.5)		N-71° -E	II-1期	周溝あり
18	4.0	2.6	0.53	N-33° -E	III-2期	焼土あり
19	4.1	3.5	0.2	N-87° 30' -E	III-2期	
20	5.2	3.0	0.13	N-89° 30' -E		
21	4.1	3.2	0.07	N-30° -E	III-2期	一部周溝あり
22	3.2	(1.2)	0.04	N-89° 30' -E		
23	(3.8)	(2.8)	0.32	N-81° -E		
24	(2.0)	(1.1)	0.16	N-84° 30' -E		

62F区掘立柱建物規模一覧

	規模	桁行m	梁間m	柱径cm	方位	備考
SB01	2×1	2.9	1.8	8	N-23° -W	柱根固め石あり
02	2×1	2.7	1.6	8	N-18° -W	柱根固め石あり
03	3×1	3.5	2.1		N-1° -W	
04	3×1	3.8	1.6	12	N-69° -E	
05	1×1	2.2	2.0		N-23° 42' -W	
06	3×1	4.5	2.0	11	N-80° 24' -E	
07	1×1	2.2	2.0		N-66° -E	
08	1×1	2.4	1.9	12	N-61° 12' -E	
09	2×1	3.6	2.0	9	N-17° 42' -W	
10	3×1	3.8	1.7	10	真北	柱根固め石あり
11	1×1	2.1	1.2		N-27° -E	

62F区水田規模一覧

	東西m	南北m	面積㎡	水口の位置
ST15	16			
16	5.5	12.5	68.75	東西隅
17	6.5	(13)	(84.5)	
18	11.5	9	103.5	南西隅
19	14.5	8.5	123.25	
20	8.5	(14.5)	(123.25)	南・南東隅
21	8			
22		7		
23		9		南
24				
25	(6)	(7)	(42)	
26				
27				

# 遺物観察表

## 1. 土器・陶磁器

### 0期

#### 62F区

	登録番号	出土地点	器種
1	62F-E-1	III I 6C 4層 黒灰色シルト	深鉢
2	2	11n~o NR01D-b SX03	深鉢

### I期

#### 62F区-SX01

	登録番号	出土地点	器種	口径cm	器高cm	底径cm
1	62F-E-12	III I 8b			(4.6)	
2	13	8a	太頸壺	20.0	(5.8)	
3	9	7b	壺		(14.8)	
4	8	7b	壺		(10.3)	
5	5	7a	壺		(11.1)	
6	7		細頸壺		(11.3)	
7	14		細頸壺		(20.1)	6.5
8	4	7a	大形壺		(29.8)	
9	11	7b	大形壺		(12.2)	
10	6		高杯	20.6	(5.1)	
11	88	7a	高杯	27.2	(6.4)	
12	3	7a	甕	21.2	(12.3)	
13	10	7b	甕	21.0	(7.3)	

#### 62F区-SD60下層

14	62F-E-110	III I 7b	細頸壺	7.8	(5.0)	
15	115	III H7t	細頸壺		(6.9)	
16	107	III I 7b	大形壺		(14.5)	
17	112	7b	細頸壺		(12.8)	
18	113	7b	細頸壺		(11.2)	
19	109	7b	細頸壺		(10.4)	
20	108	7b	細頸壺		(10.6)	4.6
21	114	7c	壺		(9.2)	
22	111	7b	甕	19.0	(6.1)	
23	106	7b	甕	21.8	(20.3)	
24	93	7b	甕	21.8	(9.1)	
25	105	7a	甕	20.6	(11.4)	

#### 62F区-SD60中層

26	62F-E-67	III I 6a	太頸壺	18.4	(6.5)	
27	86	7a	太頸壺	23.0	(8.2)	
28	78	7a	太頸壺	31.0	(9.4)	
29	74	6e	太頸壺	21.6	(6.6)	
30	76	7a	太頸壺	19.4	(8.8)	
31	69	6d	太頸壺	21.2	(5.8)	
32	75	7a	太頸壺	20.4	(12.5)	
33	89	7a	細頸壺	9.2	(4.1)	
34	71	6d	太頸壺	14.6	(8.4)	
35	103	7b	細頸壺	8.8	(8.2)	
36	104		細頸壺	7.4	(6.2)	
37	66	6a	細頸壺	4.1	(8.3)	
38	95	7b	細頸壺		(9.2)	
39	91	7b	細頸壺		(8.1)	
40	87	7a	太頸壺		(11.8)	
41	94	7b	細頸壺		(14.4)	

42	90	7a	細頸壺		(13.5)	
43	68	6d	大形壺		(15.0)	
44	100	7b	細頸壺		(6.6)	
45	81	7a	大形壺		(13.5)	7.2
46	70	6d	壺		(3.0)	5.6
47	77	7a	壺		(4.8)	6.4
48	80	7a	壺		(2.9)	
49	96	7b	壺		(11.6)	
50	97	7b	壺		(16.1)	
51	82	7a	壺		(8.4)	
52	83	7a	壺		(17.0)	
53	84	7a	壺		(11.9)	
54	102	7b	壺		(12.9)	
55	72	6d	甕		(6.5)	
56	79	7a	鉢	19.2	(8.1)	
57	92	7b	鉢	21.0	(5.5)	
58	73	6e	甕or鉢	13.2	(9.8)	
59	98	7b	甕	19.4	(6.3)	
60	101	7b	甕	19.4	(10.5)	
61	85	7a	甕	18.1	(18.1)	
62	65	6a	甕	41.2	(8.5)	
63	99	7b	甕		(7.1)	8.9

#### 62F区-SD60上層

64	62F-E-60	III I 7e	細頸壺	11.2	(6.1)	
65	20	6e	細頸壺	14.2	(11.3)	
66	23	6c	円窓付壺	11.8	(7.1)	
67	19	6b	太頸壺	27.0	(2.5)	
68	21	6c	太頸壺	28.2	(10.4)	
69	58	7d	太頸壺	29.6	(8.9)	
70	64	7a	太頸壺	27.0	(4.6)	
71	51	7b	太頸壺	22.1	(12.4)	
72	17	6b	壺		(13.5)	
73	16	6a	太頸壺		(7.2)	
74	24	6c	壺		(6.1)	
75	35	7a	壺		(11.2)	4.4
76	15	6a	大形壺		(24.0)	9.0
77	30	6d	細頸壺		(9.5)	
78	28	6d	壺		(6.5)	4.2
79	31	7a	壺		(6.5)	8.2
80	57	7d	大形壺		(14.5)	8.8
81	49	7b	高杯	23.0	(3.5)	
82	53	7b	高杯	25.2	(9.5)	
83	46	7b	高杯		(8.2)	
84	63		高杯	32.8	(5.4)	
85	25	6c	高杯	17.4	10.3	8.0
86	47	7b	高杯	20.6	(12.5)	
87	22	6c	高杯	26.0	19.5	13.0
88	50	7b	甕	18.8	(5.6)	
89	26	6c	甕	13.8	(9.0)	
90	42	7b	甕	17.6	(8.4)	
91	48	7b	甕	18.6	(9.7)	
92	54	7b	甕	22.2	(8.7)	
93	43	7b	甕	24.0	(7.8)	
94	27	6c	甕	9.2	(13.1)	
95	52	7b	甕	25.8	(11.5)	
96	55	7b	甕	26.7	(12.8)	
97	18	6b	甕	33.6	(14.0)	
98	33	7a	甕	36.6	(13.5)	
99	38	7b	甕		(7.1)	6.2
100	39	7b	甕		(4.0)	6.4
101	61	7e	甕		(3.5)	5.6
102	41	7b	甕		(4.0)	6.8
103	44	7b	甕		(3.7)	5.2
104	34	7a	甕		(11.0)	6.6
105	40	7b	甕		(2.7)	7.6
106	32	7a	甕		(5.9)	7.6

107	62	7a	甕	(8.8)	8.0
108	45	7b	甕	(6.6)	6.2
109	37	7b	甕	(3.9)	8.0
110	59	7e	甕	(3.1)	4.4
111	36	7b	甕(穿孔)	(3.6)	5.4
112	56	7d	甕(穿孔)	(7.0)	8.4

II期

62F区—NR01遺物集中地点IV

	登録番号	出土地点	器種	口径cm	器高cm	底径cm
1	62F-E-136	III I 11n~o	広口壺	18.5	(4.7)	
2	137	11n	広口壺	15.8	(4.7)	
4	139	11n~o	台付甕	17.7	(4.6)	
7	142		台付甕	25.3	(7.6)	
8	143	11p	高杯	(32.8)	(7.9)	
10	145	12p	長頸壺	9.6	(10.8)	
12	147	10o	高杯		(5.6)	8.9
13	148		高杯		(11.8)	
17	152	10o	高杯	18.2	(4.7)	
19	154	11o	器台	13.3	(4.0)	
20	155	11o	器台	14.8	(15.6)	
21	156	11o	器台	(16.7)	(9.0)	

62F区—NR01 SX03

3	62F-E-138	III I 14g	広口壺	14.0	(8.4)	
5	140	11b	台付甕	18.7	(6.0)	
6	141	14j	台付甕	16.1	(5.9)	
9	144	15f	高杯	(27.0)	(11.7)	
11	146	15f	小型壺		(7.4)	3.0
14	149	12j	高杯		(7.8)	
15	150	13k	高杯	10.8	(6.0)	
16	151	12l	高杯		(8.0)	9.7
18	153	12m	高杯	25.8	(4.8)	
22	157		高杯		(10.8)	12.8
23	158	12l	S字甕	13.5	(2.7)	
24	159	11m	台付甕	13.0	17.9	
34	169		須恵器・杯蓋	11.4	6.2	
37	172	15f	須恵器・高杯	9.5	7.2	8.2
41	176	15f	須恵器・高杯	9.3	7.9	7.9
46	181	11p	高杯		(6.8)	
51	186		宇田型甕	14.6	(5.5)	
52	184		宇田型甕	16.0	(4.5)	
53	188		宇田型甕	13.7	(3.5)	
72	207		須恵器・杯蓋	10.7	(4.4)	
74	209		須恵器・高杯		(4.8)	9.1
75	210	15f	須恵器・杯蓋	8.9	5.3	
76	211	15f	須恵器・杯身	(9.6)	(4.5)	
77	212		須恵器・高杯		(9.5)	11.3
78	213		須恵器・杯身	(11.9)		(4.9)
79	214	11p	須恵器・杯身	11.7	(6.1)	
81	216	14e	須恵器・杯身	(10.2)	(4.7)	
82	217	18j	円筒埴輪			
83	218	10j	円筒埴輪			
84	219	13o	円筒埴輪			

62F区—NR01 SX03遺物集中地点III

25	62F-E-160	III I 13k	須恵器・杯蓋	12.5	(4.2)	
26	161	13j	須恵器・杯蓋	12.1	4.6	
27	162	12k	須恵器・杯蓋	12.5	5.2	
28	163	12j	須恵器・杯蓋	13.4	4.9	
29	164	12k	須恵器・杯蓋	12.1	4.5	
30	165	12j	須恵器・杯蓋	11.2	4.7	
31	166	12j	須恵器・杯身	12.2	5.2	

32	167	12j	須恵器・杯身	(10.6)	(5.5)	
33	168	12j	須恵器・杯身	10.2	4.8	
34	170	12k	須恵器・杯蓋	12.5	(4.3)	
36	171	12k	須恵器・杯蓋	12.4	5.3	
38	173	13k	須恵器・高杯	11.6	(5.6)	
39	174	12j	須恵器・高杯	10.7	(5.5)	
40	175		須恵器・高杯		(2.9)	
42	177	12k	須恵器・杯蓋	12.2	(4.5)	
43	178	12j	須恵器・高杯	10.7	(5.5)	
44	179	13j	高杯	15.2	(4.8)	
45	180	13k	高杯	12.9	(5.5)	
46	183	12o	高杯		(8.6)	
47	182	13j	高杯		(7.1)	13.9
49	184	13j	高杯		(8.2)	16.0
50	185	13j	高杯		(7.0)	13.6
54	189	12j	宇田型甕	14.0	32.5	10.5
55	190	12j	甕	15.0	(35.1)	6.4
56	191		椀	15.2	5.5	
57	192		椀	13.8	5.4	
58	193	13i	椀	11.0	5.2	5.9
59	194	12l	丸底土器	11.0	5.4	
60	195	13k	小型壺	6.7	9.4	
61	196	15e	小型壺	8.1	8.5	3.9
62	197	13j	小型壺		(10.4)	
63	198	13j	椀	12.4	4.9	
64	199	12j	椀	(11.8)	(4.7)	
65	200	13j	椀	13.3	4.3	
66	201		椀	11.9	(3.6)	
67	202	12k	椀	12.5	5.1	
68	203	12k	椀	12.4	4.9	
69	204		小型壺	8.9	8.6	
70	205	12k	甕	10.9	(14.1)	
71	206	13l	甕	19.5	(13.8)	
73	203		須恵器・高杯	8.9	10.7	
80	215	12l	須恵器・杯身	11.0	4.6	

63D区—SZ02

85	63D-E-1	IIF 8o	パレス壺		(2.9)	13.5
86	2	9e	壺	16.5	(26.4)	6.2
87	3	9c	壺	13.8	25.8	7.0
88	4	7d	壺		(12.2)	
90	5	7~8c	高杯	29.5	(16.4)	
91	6		高杯	25.1	17.1	14.5
92	7	7~8c	高杯	25.8	(9.7)	
93	8	7c	高杯	27.8	(9.3)	
94	9	7~8c	直口鉢	8.3	6.3	4.3
95	10	7e	高杯		(5.8)	12.2
96	11	7c	高杯		(9.6)	
97	12	8c	内湾直口壺	13.0	(19.7)	
98	13	9d	壺		(9.6)	4.4
99	14	9c	高杯		(6.5)	
100	15	7~8c	高杯		(4.0)	15.9

63D区—SZ03

89	63D-E-16		広口壺	16.3	(30.5)	8.0
101	17	9e	小型壺		(4.5)	2.0
104	18	9d	高杯	24.8	(15.5)	
105	19		高杯	(18.0)	(11.3)	

63D区—SZ04

102	63D-E-20		高杯		(2.3)	13.3
103	21		ヒサゴ壺	6.0	19.1	3.1

## III期

## 62F区—NR01遺物集中地点 I

	登録番号	出土地点	器種	口径cm	器高cm	底径cm	時期
1	62F-E-442	III I 14f	須惠器・杯B蓋	16.1	3.3		C-2
2	466	14f	須惠器・杯B蓋	16.6	3.1		C-2
3	441	14f	須惠器・杯B蓋	16.5	(2.7)		C-2
4	234	15d	須惠器・杯B蓋	13.3	(1.7)		NN-32
5	238	15d	須惠器・杯B蓋	17.3	(2.7)		O-10
6	241	15d	須惠器・杯B蓋		(2.0)		O-10
7	276	15b	須惠器・杯B蓋	14.5	3.1		O-10
8	239	15d	須惠器・杯B蓋	16.8	(1.8)		IG-78
9	237	15d	須惠器・杯B蓋	19.8	(3.9)		IG-78
10	484		須惠器・杯A		(1.4)	7.2	O-10~IG-78
11	374	15e	須惠器・杯A		(2.6)	6.2	O-10~IG-78
12	445	14f	須惠器・杯A		(2.4)	6.4	O-10~IG-78
13	483	16e	須惠器・杯A		(2.5)	7.4	O-10~IG-78
14	320	14c	須惠器・杯A		(1.2)	5.2	O-10~IG-78
15	242	15d	須惠器・杯B		(2.1)	6.7	NN-32~IG-78
16	236	15d	須惠器・杯B		(3.6)	10.0	NN-32~IG-78
17	323	15b	須惠器・杯B		(2.5)	9.3	NN-32~IG-78
18	324	15b	須惠器・杯B		(1.9)	11.1	NN-32~IG-78
19	240	15d	須惠器・杯B	17.0	5.8	11.4	NN-32~IG-78
20	403	14f	須惠器・杯B		(1.7)	11.6	NN-32~IG-78
21	443	15e	須惠器・杯B	16.1	3.6	13.4	NN-32~IG-78
22	235	15d	須惠器・杯B	18.6	4.0	14.0	NN-32~IG-78
23	243	15d	須惠器・III B		(2.0)	17.2	
24	406	15f	須惠器・碗A		(1.6)	5.4	K-14
25	446	14e	須惠器・碗A		(2.1)	5.8	K-14
26	321	15c	須惠器・碗B	16.8	(4.5)		
27	325	15c	須惠器・碗B		(2.2)	9.2	
28	447	14c	須惠器・碗B		(2.6)	6.4	
29	378	15c	須惠器・高杯		(5.8)		I-17
30	232	15d	須惠器・高杯		(6.1)		I-17
31	244	15d	須惠器・釜	41.2	7.5	31.6	
32	322	15d	須惠器・壺	19.2	(3.6)		
33	373	15e	須惠器・鉢or甕	28.0	(7.6)		
34	376	15f	須惠器・瓶	19.4		9.3	
35	440	14f	須惠器・瓶	28.4	31.1	12.8	
36	246	15d	灰釉陶器・碗		(1.3)	8.8	K-14
37	245	15d	灰釉陶器・碗		(2.0)	8.0	K-14
38	388	15f	灰釉陶器・碗	13.9	4.5	6.8	K-14
39	247	15d	灰釉陶器・皿	15.2	2.8	7.2	K-14
40	279	15d	灰釉陶器・段皿	15.4	2.2	7.6	K-14
41	266	15d	灰釉陶器・碗	14.0	4.2	6.9	K-90
42	303	14c	灰釉陶器・碗	14.1	4.7	7.2	K-90
43	300	14c	灰釉陶器・碗	14.5	4.5	7.0	K-90
44	297	14c	灰釉陶器・碗	14.4	(2.7)		K-90
45	299	14c	灰釉陶器・碗	15.0	(3.6)		K-90
46	283	14c	灰釉陶器・碗		(2.1)	7.0	K-90
47	448	14f	灰釉陶器・碗		(2.4)	7.0	K-90
48	284	14c	灰釉陶器・碗		(2.5)	6.8	K-90
49	370	15d	灰釉陶器・碗		(2.3)	7.4	K-90
50	309	15d	灰釉陶器・碗		(2.3)	8.2	K-90
51	305	15d	灰釉陶器・碗		(2.4)	7.0	K-90
52	258	15d	灰釉陶器・碗		(3.1)	7.1	K-90
53	339	14e	灰釉陶器・碗		(3.7)	7.0	K-90
54	379	15e	灰釉陶器・碗	17.6	5.5	8.3	K-90
55	327	14c	灰釉陶器・碗	16.7	5.5	8.7	K-90
56	257	15d	灰釉陶器・碗	17.6	(4.9)		K-90
57	334	15c	灰釉陶器・碗		(2.1)	8.3	K-90
58	259	15d	灰釉陶器・碗		(3.3)	7.2	K-90
59	407	14e	灰釉陶器・碗		(3.4)	7.4	K-90
60	298	14c	灰釉陶器・碗		(2.7)	6.8	K-90
61	369		灰釉陶器・碗		(3.0)	6.9	K-90
62	371	15d	灰釉陶器・碗		(2.3)	7.4	K-90
63	267	15d	灰釉陶器・碗		(2.7)	8.6	K-90
64	311	15d	灰釉陶器・碗		(2.9)	8.6	K-90
65	341	14e	灰釉陶器・碗		(2.9)	8.8	K-90
66	253	15d	灰釉陶器・碗		(1.9)	8.8	K-90
67	331	14c	灰釉陶器・碗		(2.9)	8.4	K-90
68	449	14f	灰釉陶器・碗		(2.4)	9.5	K-90
69	390	15f	灰釉陶器・碗		(3.0)	8.6	K-90
70	294	15d	灰釉陶器・碗		(4.5)	11.1	K-90
71	270	15d	灰釉陶器・碗		(1.9)	9.5	K-90
72	269	15d	灰釉陶器・碗		(3.7)	7.6	K-90
73	389	15f	灰釉陶器・碗		(3.3)	9.2	K-90

74	268	15d	灰釉陶器·皿	13.3	2.4	6.0	K-90
75	340	14e	灰釉陶器·皿	13.7	2.6	7.4	K-90
76	310	15d	灰釉陶器·皿	14.1	3.1	7.0	K-90
77	288	14c	灰釉陶器·皿	14.8	3.1	8.6	K-90
78	302	14c	灰釉陶器·皿	16.4	3.3	8.0	K-90
79	301	14c	灰釉陶器·皿	16.1	3.2	8.6	K-90
80	329	14c	灰釉陶器·皿	16.1	(2.1)		K-90
81	333	15c	灰釉陶器·皿		(1.7)	6.8	K-90
82	335	15c	灰釉陶器·皿		(2.0)	8.0	K-90
83	312	15d	灰釉陶器·皿		(2.0)	7.2	K-90
84	282	14c	灰釉陶器·皿		(1.9)	6.7	K-90
85	332	15c	灰釉陶器·皿		(2.0)	7.4	K-90
86	285	14c	灰釉陶器·皿		(2.6)	7.0	K-90
87	364	14d	灰釉陶器·皿		(1.8)	9.1	K-90
88	254	15d	灰釉陶器·皿		(2.8)	8.8	K-90
89	263	15d	灰釉陶器·皿		(2.0)	7.0	K-90
90	296	13c	灰釉陶器·段皿		(2.4)	7.8	K-90
91	453	14f	灰釉陶器·碗	10.8	3.3	6.2	O-53
92	460	15f	灰釉陶器·碗	14.8	3.9	7.5	O-53
93	422	14e	灰釉陶器·碗	14.1	4.7	7.0	O-53
94	412	14e	灰釉陶器·碗	15.0	4.6	7.5	O-53
95	452	14f	灰釉陶器·碗	15.1	5.0	7.7	O-53
96	410	14e	灰釉陶器·碗	16.8	6.4	8.8	O-53
97	365	14d	灰釉陶器·碗	18.0	5.1	10.9	O-53
98	456	14f	灰釉陶器·碗		(2.3)	5.9	O-53
99	352	14e	灰釉陶器·碗		(1.9)	7.0	O-53
100	420	14f	灰釉陶器·碗		(2.5)	7.8	O-53
101	399	14e	灰釉陶器·碗		(2.3)	7.4	O-53
102	413	14e	灰釉陶器·碗		(2.4)	7.2	O-53
103	391	15e	灰釉陶器·碗		(3.3)	7.6	O-53
104	350	15c	灰釉陶器·碗		(3.9)	7.5	O-53
105	381	14d	灰釉陶器·碗		(1.8)	8.8	O-53
106	416	14e	灰釉陶器·碗		(1.7)	7.9	O-53
107	348	15c	灰釉陶器·碗		(1.9)	7.0	O-53
108	349	15c	灰釉陶器·碗		(2.4)	7.6	O-53
109	421	14f	灰釉陶器·碗		(2.7)	8.0	O-53
110	272	15d	灰釉陶器·碗		(3.1)	7.8	O-53
111	487		灰釉陶器·碗		(4.0)	7.5	O-53
112	345	14c	灰釉陶器·碗		(3.8)	8.5	O-53
113	375	15e	灰釉陶器·碗		(4.8)		O-53
114	366	14d	灰釉陶器·碗		(5.1)	8.5	O-53
115	344	14c	灰釉陶器·碗		(4.6)	8.2	O-53
116	488	15e	灰釉陶器·碗		(5.1)	8.0	O-53
117	411	14e	灰釉陶器·皿	11.8	2.4	6.8	O-53
118	423	14e	灰釉陶器·皿		(2.0)	7.5	O-53
119	317	15d	灰釉陶器·碗	13.5	3.8	5.4	H-72
120	429	14f	灰釉陶器·碗	14.3	4.5	7.3	H-72
121	459	15f	灰釉陶器·碗	12.0	(3.4)		H-72
122	274	15d	灰釉陶器·碗	13.4	(3.1)		H-72
123	458	14f	灰釉陶器·碗		(2.9)	7.2	H-72
124	393	15e	灰釉陶器·碗		(2.7)	6.8	H-72
125	356	14e	灰釉陶器·碗		(3.0)	7.3	H-72
126	400	14f	灰釉陶器·碗		(3.5)	8.0	H-72
127	367	14d	灰釉陶器·碗		(3.2)	7.4	H-72
128	392	15e	灰釉陶器·碗		(3.1)	8.0	H-72
129	380	14e	灰釉陶器·碗		(4.2)	7.8	H-72
130	461	15f	灰釉陶器·皿	10.0	2.1	5.2	H-72
131	354	14c	灰釉陶器·皿	11.6	2.1	6.4	H-72
132	426	14f	灰釉陶器·皿	13.8	2.6	7.6	H-72
133	463	15g	灰釉陶器·轮花皿	12.2	2.8	6.4	H-72
134	462	15f	灰釉陶器·皿		(1.6)	7.4	H-72
135	355	15c	灰釉陶器·皿		(1.9)	7.2	H-72
136	424	14e	灰釉陶器·皿		(1.5)	8.2	H-72
137	425	14f	灰釉陶器·皿		(2.0)	7.6	H-72
138	318	14c	灰釉陶器·耳皿	10.2	2.4	4.8	H-72
139	395	15e	灰釉陶器·碗	10.8	3.2	5.8	百代寺
140	397	15f	灰釉陶器·碗	17.2	4.9	7.6	百代寺
141	396	15e	灰釉陶器·碗	18.0	6.1	8.2	百代寺
142	275	15d	灰釉陶器·碗	16.2	(3.8)		百代寺
143	382	14e	灰釉陶器·碗		(2.3)	7.6	百代寺
144	430	14f	灰釉陶器·碗		(2.8)	7.3	百代寺
145	394	15e	灰釉陶器·碗		(3.4)	7.4	百代寺
146	319	15d	灰釉陶器·碗		(2.6)	9.0	百代寺
147	431	15f	灰釉陶器·碗		(3.5)	7.9	百代寺
148	401	14f	灰釉陶器·碗		(3.8)	6.4	百代寺
149	433	15f	灰釉系陶器·碗	16.4	5.4	7.6	
150	432	15f	灰釉系陶器·轮花碗	16.5	5.3	8.6	

151	359	15c	灰釉系陶器・椀	(3.3)	8.2	
152	383	15e	灰釉系陶器・椀	(3.7)	8.6	
153	361	14e	灰釉系陶器・椀	(1.8)	7.0	
154	384	15e	灰釉系陶器・椀	(2.7)	5.7	
155	434	14f	灰釉系陶器・椀	16.1	4.5	8.8
156	385	15f	灰釉系陶器・椀	15.2	5.9	7.0
157	435	15f	灰釉系陶器・椀	(2.5)	7.6	
158	437	15f	灰釉系陶器・椀	(2.5)	7.6	
159	436	16f	灰釉系陶器・椀	(3.4)	8.6	
160	363	15c	灰釉系陶器・椀	13.2	5.2	7.6
161	438	15f	灰釉系陶器・椀	15.6	5.4	7.3
162	360	14e	灰釉系陶器・椀	(2.5)	7.2	
163	362	15c	灰釉系陶器・椀	12.5	(2.5)	
164	386	15e	灰釉系陶器・椀	(3.1)	5.7	

#### 62F区—NR01遺物集中地点 I と II の中間地点

165	62F-E-474	III I 14g	須恵器・瓶			
166	470	15g	須恵器・高杯	(10.0)	6.5	I-17
167	471	15j	灰釉陶器・椀	(2.5)	8.8	K-90
168	475	14g	灰釉陶器・皿	14.2	2.7	7.0 K-90
169	481	15g	灰釉陶器・壺	4.1	10.7	5.3 K-90
170	468	13g	灰釉陶器・椀	17.5	8.3	8.2 H-72
171	469	15g	灰釉陶器・輪花椀	16.2	5.5	8.0 百代寺
172	477	14g	灰釉陶器・皿	13.2	2.7	7.4 百代寺
173	473	15g	灰釉陶器・折縁皿	12.5	2.1	6.7 百代寺
174	467	15h	灰釉系陶器・輪花椀	(4.3)	8.0	
175	478	14g	灰釉系陶器・椀	(2.9)	7.2	
176	479	14g	灰釉系陶器・椀	13.8	4.1	5.6
177	480	14g	灰釉系陶器・椀	14.8	3.6	5.8

#### 62F区—NR01遺物集中地点 II

178	62F-E-524	III I 13j	須恵器・杯B蓋	14.5	3.7	O-10~IG-78
179	520	13d	須恵器・杯A	9.4	3.3	C-2
180	512	13j	須恵器・杯A	(3.2)		C-2
181	511	13j	須恵器・杯B	17.0	(3.6)	
182	519	13j	須恵器・平瓶	7.4	15.1	I-17
183	514		須恵器・播鉢	(4.4)	9.6	
184	515	13i	灰釉陶器・椀	13.9	4.9	6.7 K-90
185	495	14h	灰釉陶器・椀	(2.5)	8.1	K-90
186	493	13i	灰釉陶器・椀	(3.3)	8.4	K-90
187	517		灰釉陶器・皿	13.3	3.3	6.1 K-90
188	522	13i	灰釉陶器・皿	13.6	2.5	6.4 K-90
189	516	13i	灰釉陶器・皿	14.9	2.9	6.5 K-90
190	521	13i	灰釉陶器・皿	(2.3)	7.1	K-90
191	496	13g	灰釉陶器・椀	14.7	5.1	7.7 O-53
192	502	13i	灰釉陶器・椀	16.0	6.4	7.8 O-53
193	528		灰釉陶器・皿	(2.2)	7.3	O-53
194	501	13h	灰釉陶器・椀	12.0	4.5	6.9 H-72
195	513	13i	灰釉陶器・椀	12.4	3.8	7.2 H-72
196	498		灰釉陶器・椀	12.9	4.0	7.0 H-72
197	503	13i	灰釉陶器・椀	14.9	6.2	7.2 H-72
198	491	13h	灰釉陶器・皿	11.6	2.5	6.7 H-72
199	497	14h	灰釉陶器・皿	13.0	3.1	7.0 H-72
200	508	14h	灰釉陶器・椀	14.0	5.4	7.0 百代寺
201	500	13g	灰釉陶器・椀	15.2	6.0	6.4 百代寺
202	492	13i	灰釉陶器・椀	14.4	6.1	7.7 百代寺
203	499	13g	灰釉陶器・皿	12.8	3.1	7.6 百代寺
204	523	13i	灰釉系陶器・椀	16.2	5.1	8.2
205	490	13h	灰釉系陶器・椀	(3.0)	8.0	
206	504	13i	灰釉系陶器・椀	12.5	4.0	4.4

#### 62F—NR01 SX04

207	62F-E-525	III I 14k	須恵器・杯B蓋	(2.1)		O-10~IG-78
208	542	13o	須恵器・杯B蓋	11.7	2.6	IG-78
209	530	12m	須恵器・杯B蓋	13.6	3.1	IG-78
210	543	13o	須恵器・杯B蓋	17.8	(1.9)	IG-78-K-14
211	537	13n	須恵器・杯A	11.0	3.5	5.7 IG-78-K-14
212	535	13n	須恵器・杯A	11.8	3.5	6.3 IG-78-K-14

213	536	13n	須惠器・杯A	11.8	3.9	6.6	IG-78-K-14
214	533	13o	須惠器・杯A	13.0	(3.5)		O-10-IG-78
215	539	13o	須惠器・杯A	15.0	(3.0)		C-2-I-25
216	534	13n	須惠器・杯B		(1.8)	9.4	O-10-IG-78
217	538	13n	須惠器・杯B		(1.6)	10.8	
218	547	12p	須惠器・碗A		(3.3)	6.0	
219	541	13o	須惠器・碗B		(3.0)	9.4	IG-78
220	531	13n	須惠器・平瓶		(6.5)	7.2	O-10
221	532	13n	須惠器・壺		(12.1)	8.4	O-10-IG-78
222	540	13o	須惠器・壺	18.9	(6.3)		O-10
223	526	14k	須惠器・飯				

### 62F区—緑釉陶器・白磁

224	62F-E-606	III I 15d	緑釉緑彩陶・皿	(2.2)	7.6		K-90
225	607	15d	緑釉緑彩陶・皿				K-90
226	610	14f	緑釉陶器・碗	13.8	4.1	6.9	H-72
227	612	6c	緑釉陶器・碗		(1.4)	(5.6)	
228	611	19l	緑釉陶器・碗		(1.1)	(5.4)	
229	608	16d	緑釉陶器・碗or皿		(1.5)	6.4	
230	609	14j	緑釉陶器・碗or皿		(1.6)	6.2	
231	613	11j	白磁・碗	15.0	(3.5)		
232	614	8b	白磁・碗		(2.1)	(5.6)	

### 89B区

登録番号	出土地点	器種	口径cm	器高cm	底径cm	時期
233	89B-E-2	IIG 6c SD02	須惠器・杯B蓋	21.4	(3.8)	
234	1	6b SK20	須惠器・瓶類		(3.4)	17.2

### 90A区

235	90A-E-28	IIG 7a SX01	須惠器・杯蓋	10.5	2.3		I-17
236	29	7a SX01	須惠器・高杯		(6.3)	11.5	I-17
237	30	7a SX01	須惠器・鉢	19.4	(7.5)		

### 89C区

238	89C-E-17	IIIH 41 SB09	須惠器・杯蓋	(3.0)			5世紀中葉
239	16	2o SB16	須惠器・高杯		(7.1)	8.8	
240	19	3q SB19	灰釉陶器・皿	13.5	3.0	7.3	O-53
241	20	3q SB19	灰釉陶器・輪花皿	16.4	3.7	7.4	O-53
242	21	1h SB21	灰釉陶器・皿		(2.8)	8.3	K-90
243	22	II I19k SDk	灰釉陶器・碗		(2.0)	8.8	K-90
244	23	19k SD05	灰釉陶器・長頸瓶		(6.5)		
245	24	19k SD05	須惠器・壺	21.4	(4.5)		
246	25	20j SD06	須惠器・杯A		(1.9)	6.0	IG-78-K-90
247	26	20j SD06	須惠器・碗A		(3.1)	6.8	IG-78-K-90
248	27	20j SD06	須惠器・皿	14.5	2.4	7.4	IG-78-K-90

### 62F区—勾玉・陶錘・不明陶製品

登録番号	出土遺構
1	62F-E-626 IIII 11n 遺物集中地点IV
2	621 13k SX03上層
3	622 13l SX04
4	623 13l SX04
5	624 18l 検出I
6	625 6d ST21
7	220 14b SD13上層

### IV期

登録番号	遺構	器種	口径cm	底径cm	器高cm	備考
1	89B-E-7	SK01 碗IA	10.3	4.4	10.4	
2	89B-E-3	SK01 碗IB	10.8	4.6	5.6	
3	89B-E-1	SK01 碗IB	10.8	5.8	6.0	
4	89B-E-2	SK01 碗IB	11.1	5.3	6.8	
5	89B-E-4	SK01 碗IB	11.5	5.3	—	
6	89B-E-10	SK01 碗IIB	11.9	5.4	6.1	
7	89B-E-6	SK01 碗IC	11.0	4.3	6.2	
8	89B-E-13	SK01 碗IC	10.3	3.8	5.7	
9	89B-E-12	SK01 碗IC	10.4	3.8	5.9	
10	89B-E-11	SK01 碗IIC	9.1	2.8	4.6	
11	89B-E-5	SK01 碗IIC	9.8	3.8	5.4	
12	89B-E-15	SK01 碗IIE	6.1	2.9	6.4	
13	89B-E-22	SK01 皿IA	8.0	3.4	1.7	



## 62F区—墨書土器

番号	登録番号	器種	時期	出土遺構	グリッド	釈文	墨書部位	備考
1	62F-E-563	須惠器杯蓋	IG-78or K-14	NR01遺物集中地点I	III I 15 c	全	外面	置いたときに正位になるように墨書されている
2	E-564	須惠器杯蓋	IG-78?	NR01遺物集中地点I	—	封	外面	
3	E-553	須惠器杯A	IG-78	NR01遺物集中地点I	15 d		底部外面	
4	E-554	須惠器碗A	K-14	NR01遺物集中地点I	14 c	本	底部外面	
5	E-566	須惠器碗A	K-90	NR01遺物集中地点I			底部外面	墨書とへら記号がみえる
6	E-555	須惠器碗A	K-90	NR01遺物集中地点I	15 d	井手	底部外面	
7	E-573	灰釉碗	K-14	NR01遺物集中地点I	15 e		底部外面	
8	E-552	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	15 c	寺	底部外面	
9	E-556	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	14 c	井手	底部外面	
10	E-557	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	14 c	宅北	底部外面	文字の周井5ヶ所に花卉が描かれている
11	E-562	灰釉碗or皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 d	別院	底部外面	
12	E-567	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	13 c	僧カ	底部外面	筆の先が割れている
13	E-574	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	16 e	月林	底部外面	
14	E-565	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	—	足□	底部外面	
15	E-572	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 e	文□	底部外面	見込み部に墨カスの付着あり
16	E-586	灰釉碗or皿	K-90	NR01遺物集中地点I	14 e	□	底部外面	
17	E-576	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	15 e	□	底部外面	
18	E-575	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点I	16 e	□	底部外面	
19	E-559	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 d	□	底部外面	
20	E-568	灰釉碗or皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 c	□	底部外面	
21	E-551	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 c	□	底部外面	
22	E-585	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点I	14 e	□	底部外面	
23	E-578	灰釉碗or皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 f	□	底部外面	
24	E-561	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 c	□	底部外面	
25	E-570	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点I	14 d	□	底部外面	
26	E-558	灰釉碗or皿	K-90	NR01遺物集中地点I	15 d	□	底部外面	
27	E-582	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 f	全	底部外面	
28	E-569	灰釉皿	H-72	NR01遺物集中地点I	14 c	万	底部外面	
29	E-591	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	—	富井	底部外面	はじめから2字書くつもりではなかったような書き方
30	E-589	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 e	太	底部外面	
31	E-584	灰釉皿	H-72	NR01遺物集中地点I	14 f	豊	底部外面	
32	E-583	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 e	東北	底部外面	
33	E-587	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 e	兮	底部外面	
34	E-581	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 f	徳カ	底部外面	
35	E-590	灰釉皿	H-72	NR01遺物集中地点I	14 g	元	底部外面	転用碗、墨をすった痕跡が残る
36	E-588	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 f	×	底部外面	
37	E-577	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	15~16 e~f	□	底部外面	へら記号の一部もみえる
38	E-571	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 d	□	底部外面	
39	E-579	灰釉碗or皿	H-72	NR01遺物集中地点I	14 f	□	底部外面	
40	E-560	灰釉碗or皿	H-72	NR01遺物集中地点I	15 d	□	底部外面	内面にも墨カスの跡が残る
41	E-580	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点I	14 f	□	底部外面	
42	E-595	須惠器杯A	IG-78	NR01遺物集中地点II	13 j	□	底部外面	
43	E-596	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点II	13 i	升カ	底部外面	現状では判読不能
44	E-597	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点II	13 j	井上	底部外面	
45	E-600	灰釉碗	K-90	NR01遺物集中地点II	13 j	□	底部外面	
46	E-598	灰釉皿	K-90	NR01遺物集中地点II	13 j	□行	底部外面	
47	E-592	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点II	—	多万	底部外面	
48	E-594	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点II	—	物	底部外面	
49	E-593	灰釉碗	H-72	NR01遺物集中地点II	14 h	□□	底部外面	
50	E-599	灰釉碗or皿	H-72	NR01遺物集中地点II	14 i	別	底部外面	
51	E-601	須惠器杯A	IG-78	NR01 SX04	13 k	別	底部外面	
52	E-604	須惠器杯A	IG-78	NR01 SX04	13 n	足	底部外面	
53	E-602	須惠器杯A	IG-78	NR01 SX04	12 l	□(恵カ)	底部外面	口縁部の一部のみの遺存
54	E-603	灰釉碗or皿	時期不明	NR01 SX04	11 l	□	底部外面	
55	E-605	灰釉碗or皿	K-90	—	—	—	—	

## 62F—刻書土器

1	62F-E-549	灰釉碗	K-14	NR01遺物集中地点I	III I 14 l	勢	底部内面	
2	E-550	須惠器碗A	時期不明	ST20	6 c	□□	底部内面	

III期 瓦

	登録番号	出土地点	出土遺構	型式
1	62F-E-651	III I 14 d	NR遺物集中地点 I	軒丸瓦KC I a 1
2	89A-E-38	IIF 14 o	SX01	軒丸瓦KC I a 1
3	32・41・43	14~15 o	SX01	軒丸瓦KC I a 2
4	62F-E-616		NR01遺物集中地点 I	軒丸瓦KC I a 2
5	90A-E-6	IIF 7 s	攪乱	軒丸瓦KC I a 2
6	89A-E-33	14 o	SX01	軒丸瓦KC I a 2
7	90A-E-9	6 s ~ t	攪乱	軒丸瓦KC II
8	89A-E-31	14 o ~ p	SX01	軒丸瓦KC II
9	90A-E-8	6 t	表土	軒丸瓦KC II
10	89A-E-30	14 o	SX01	軒丸瓦KC II
11	62	13 o	SX33	軒丸瓦KC II
12	29	14 o	SX01	軒丸瓦KC II
13	59	14 o	SX01	軒丸瓦KD I a
14	50	14 o	SX01	軒丸瓦KD I a
15	58	14 p	SX01	軒丸瓦KD I a
16	63	13 o	SX33	軒丸瓦KD I b
17	2	12 p	SX01	軒丸瓦KD I b
18	89B-E-3		検出 I	軒丸瓦KD II
19	90A-E-12	IIG 7 a	表土	軒丸瓦KD II
20	89A-E-45	IIF 14 o	SX01	軒丸瓦KD III
21	62F-E-619	III I 15 c	NR01遺物集中地点 I	軒丸瓦KD III
22	90A-E-21	IIF 6 s ~ t	攪乱	軒丸瓦KD III
23	22	6 t	攪乱	軒丸瓦KD III
24	19	6 s ~ t	攪乱	軒丸瓦KD III
25	89A-E-46	14 o	SX01	軒丸瓦KD III
26	48	13~14 o	SX01上層	軒丸瓦KD III
27	47	14 o	SX01	軒丸瓦KD III
28	62F-E-618	III I 14 e	NR01遺物集中地点 I	軒丸瓦KD IV
29	90A-E-26	IIG 7 a	SX01	道具瓦
30	25	7 a	SX01	道具瓦(面戸瓦)
31	89B-E-4	6 c	SD02	丸瓦(行基礎)
32	5		SX20	丸瓦(玉縁式)

石器一覧

調査区	登録番号	グリットNo.	遺構 No.	種別	長さ	幅	厚さ	重さ	時期	備考	石材	図版
62F	001											
62F	002	III I 7 a	SD60中層	砥石	92	65	16	130	弥生中期末			
62F	003											
62F	004	III I 7 b	SD60中層	砥石	78	68	38	275	弥生中期末			
62F	005	III I 7 b	SD60中層	砥石	112	73	25	175	弥生中期末			
62F	006	III I 7 d	SD60-B上層	砥石	57	51	19	65	弥生中期末	玉砥石か?		
62F	007											
62F	008											
62F	009	III I 7 e	SD60上層	砥石	54	46	9	30	弥生中期末			
62F	010											
62F	011	III I 7 a	SD60上層	タタキ石	97	96	29	420	弥生中期末			
62F	012	III I 7 b	SD60中層	タタキ石	136	70	24	275	弥生中期末	偏平礫, ただの石か?		
62F	013	III I 7 b	SD60中層	タタキ石	118	43	23	220	弥生中期末	棒状偏平礫,		
62F	014	III I 6 a	SD60中層	タタキ石	126	75	39	510	弥生中期末	偏平角礫		
62F	015											
62F	016	III I 9 k	検 II	打製石斧	47	45	7	20	弥生中期末			
62F	017											
62F	018	III I 7 c	SD60上層	刃器	44	63	14	30	弥生中期末			PL. 54-40
62F	019	III I 7 d	SD60下層	打製石斧	140	72	39	580	弥生中期末			
62F	020	III I 7 d	SD60-B上層	タタキ石	114	66	22	220	弥生中期末	偏平礫		
62F	021	III I 5 c	SD60-A下層	タタキ石	86	75	26	205	弥生中期末	偏平円礫, ただの石か?		
62F	022	III I 7 a	SX01	砥石	88	72	30	140	弥生中期末			
62F	023											
62F	024	III I 6 c	SD60上層	タタキ石	79	58	46	330	弥生中期末			
62F	025	III I 7 c	SD60上層	砥石	61	44	30	80	弥生中期末			
62F	026	III I 6 c	SD60上層	砥石	91	76	32	380	弥生中期末			
62F	027											
62F	028											
62F	029											
62F	030	III I 8 c	SD60-B下層	砥石	95	78	26	300	弥生中期末			
62F	031											
62F	032											
62F	033	III I 7 c	SD60-B下層	砥石	55	47	40	195	弥生中期末	台石片か?		
62F	034	III I 7 f	SD60-B上層	砥石	64	51	47	170	弥生中期末			

62F	035	III 17b	SD60-B	砥石	168	85	54	1190	弥生中期末		
62F	036		SX01	砥石	135	103	65	1140	弥生中期末		PL, 56-60
62F	037		SX01	台石	97	112	101	2115	弥生中期末		
62F	038		SX01	台石	150	142	83	2450	弥生中期末		
62F	039		SX01	台石	192	150	63	2470	弥生中期末		
62F	040	III 17c	SD60-B下層	台石	265	172	92	3760	弥生中期末		
62F	041	III 17c	SD60-B上層	台石(石皿)	198	123	91	1700	弥生中期末		PL, 56-59
62F	042	III 16e	SD60上層	砥石	72	49	28	65	弥生中期末		
62F	043	III 16e	SD60中層	砥石	91	84	34	345	弥生中期末		
62F	044	III 16e	SD60中層	砥石	113	77	55	665	弥生中期末		
62F	045	III 16d	SD60中層	砥石	99	70	26	330	弥生中期末		
62F	046	III 16d	SD60中層	砥石	138	116	35	640	弥生中期末		
62F	047	III 16d	検II	砥石	189	111	28	750	弥生中期末	台石か?	
62F	048	III H6t	SD60上層	砥石	100	115	36	510	弥生中期末		
62F	049	III 16c	SD60中層	砥石	133	60	43	470	弥生中期末	タタキ石か?	
62F	050	III 16c	SD60中層	砥石	102	121	60	780	弥生中期末		
62F	051	III 17c	SD60上層	タタキ石	89	73	68	520	弥生中期末		
62F	052	III 17d	SD60下層	台石	144	104	39	900	弥生中期末	砥石か?	
62F	053	III 17a	SD60上層	台石	195	133	62	2000	弥生中期末		
62F	054	III 17a	SD60上層	台石	139	113	84	1720	弥生中期末		
62F	055	III 17b	SD60中層	台石	277	186	94	4000	弥生中期末		
62F	056	III 17a	SD60中層	砥石	147	111	34	950	弥生中期末		
62F	057	III 16c	SD60中層	磨製石斧(伐採斧)	133	56	48	540	弥生中期末		PL, 51-1
62F	058	III 17c	SD60上層	磨製石斧(伐採斧)	128	30	46	290	弥生中期末	刃部付近のみ研磨。	
62F	059	III 16a	SD60中層	磨製石斧(伐採斧)	97	49	33	210	弥生中期末	全面研磨か?	
62F	060	III 16f	SD60-B上層	磨製石斧(加工斧)	104	44	35	310	弥生中期末	挟入柱状刃石斧。	PL, 52-7
62F	061	III 12g	NR01地点I	磨製石斧(加工斧)	132	31	43	310		挟入柱状刃石斧。	PL, 52-6
62F	062	III 16d	SD60中層	磨製石斧(加工斧)	66	35	32	120	弥生中期末	柱状片刃石斧。	PL, 51-5
62F	063	III 17a	SD60中層	磨製石斧(加工斧)	76	55	13	105	弥生中期末	扁平片刃石斧。	PL, 52-8
62F	064	III 17b	SD60下層	磨製石斧(加工斧)	76	50	14	85	弥生中期末	扁平片刃石斧。	PL, 52-11
62F	065	III 15d	検II	磨製石斧(加工斧)	34	34	12	20	弥生中期末	柱状片刃(挟入?)石斧。	
62F	066	III 16b	SD60上層	磨製石斧(加工斧)	36	42	16	30	弥生中期末	柱状片刃(挟入?)石斧。	
62F	067	III 12n	SX04上層	磨製石斧(加工斧)	82	32	9	20		扁平片刃石斧。	PL, 52-10
62F	068	III 16c	SD60中層	石刃	138	24	17	85	弥生中期末		PL, 51-2
62F	069	III 17a	SD60下層	尖頭器	90	27	15	30	弥生中期末		PL, 53-36
62F	070	III 12n	NR01-D-b, c 礫層	石鏃	40	18	6	3.8	古墳前期		チャート PL, 53-22
62F	071	III 17f	SD60-B上層	石鏃	34	14	5	2.3	弥生中期末		チャート PL, 53-25
62F	072	III 17f	SD60-B上層	石鏃	30	17	6	2.3	弥生中期末		チャート PL, 53-23
62F	073	III 120n	検I	石鏃	33	15	5	2.4		先端欠損。平基有基。	下呂石
62F	074	III 19o	検I	石鏃	25	14	6	1.8		先端欠損。	下呂石 PL, 53-20
62F	075	III 120n	SX02	刃器	47	25	12	12.4	弥生後期	石鏃か?	チャート
62F	076	III 111n	検II	刃器	21	34	7	5.5	弥生中期末		チャート
62F	077	III 17b	SD60中層	打製石斧	84	43	15	70	弥生中期末		
62F	078	III 17a	SD60下層南側	磨製石斧(加工斧)	62	48	18	70	弥生中期末		
62F	079	III 120n	SX02	石鏃未成品	43	25	7	7.6	弥生後期	刃器か?	チャート
62F	080	III 15a	検II	タタキ石	90	48	24	130	弥生中期末	偏平棒状礫。	
62F	081	III 16p	検III	石核	58	42	23	40	弥生中期末	チャート	
62F	082	III 19o	検I	石鏃未成品	24	18	9	3.7		半分欠損	下呂石
62F	083	III I	検I	石鏃未成品	26	14	5	1.6			サヌカイト?
62F	084										
62F	085										
62F	086	III 18f	検I	刃器	14	26	4	1.6		小剥片。	チャート
62F	087	III 16e	検I	磨製石斧(加工斧)	36	26	10	9.2			
62F	088										
62F	089	III 16d	検II	刃器	39	32	6	8.7	弥生中期末		チャート
62F	090										
62F	091	III 17f	検II	刃器	25	17	6	2.2	弥生中期末		下呂石
62F	092	III 12b	検I	刃器	18	26	6	2.4			チャート
62F	093	III 17m	検I	刃器	21	14	4	1.1			
62F	094										
62F	095										
62F	096	III 18g	検I	クサヒ形石器	20	33	7	5.4			チャート
62F	097										
62F	098	III 12p	検I	スクレパー	29	27	8	6.4		D類	下呂石 PL, 55-48
62F	099	III 16a	検III	クサヒ形石器	23	24	12	7.9	弥生中期末		チャート
62F	100	III 111n	検I	黒曜石剥片	33	21	10	7.1			
62F	101										
62F	102	III 13j	NR01地点III	刃器	18	53	7	6.6		石刃状剥片。	サヌカイト?
62F	103	III 17b	SD60最下層	クサヒ形石器	38	34	10	14.3	弥生中期末		
62F	104										
62F	105	III I	SX03地点IV礫層	刃器	30	24	7	3.9	古墳前期	鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。	下呂石
62F	106										
62F	107										
62F	108	III 11p	NR01地点IV	刃器	38	24	12	9.2	古墳前期	石鏃未成品か?	チャート
62F	109	III 11n	NR01-2層	石鏃	26	21	12	5.2		使用痕あり。	チャート
62F	110	III I	SX03地点IV礫層	石鏃	27	21	7	3.9	古墳前期	使用痕あり。	チャート

62F	111	III I 131	SX03上層	石錐	28	15	4	1.8	未成品か?	チャート		
62F	112	III I 5 b	検II	石錐	14	14	3	0.8	弥生中期末	先端部・基部欠損。	下呂石	
62F	113	III I	SX03地点IV礫層	石錐	27	17	8	2.8	古墳前期	石錐に転用。	下呂石	PL. 53-18
62F	114	III I	SX03地点IV礫層	石錐	20	14	5	1.3	古墳前期	未成品か?		チャート
62F	115	III I	SX03地点IV礫層	石錐未成品	31	18	8	4.5	古墳前期			チャート
62F	116	III I 7 b	SD60最下層	石核	60	45	24	59.7	弥生中期末	チャート		
62F	117	III I 7 a	SD60上層	石錐	28	16	7	2.6	弥生中期末	凸基有茎を基部のくり込みは片方が大きい。	チャート	
62F	118	III I 12 m	SD01-1層	石錐	25	14	4	1.2		凹基有茎。	下呂石	PL. 53-19
62F	119	III I 6 f	SD60-B上層	石錐	26	14	5	1.7	弥生中期末		チャート	PL. 53-24
62F	120	III I 6 d	SD60上層	石錐	35	14	5	2.1	弥生中期末	基部のつくり雑。	チャート	PL. 53-26
62F	121	III I 15 p	SD08	石錐	27	15	5	1.9	弥生後期	先端・右下欠損。	下呂石	
62F	122	III I 12 m	SX03上層	石錐	22	14	5	1.4		先端欠損。	チャート	
62F	123	III I 7 b	SD60中層	石錐	18	12	3	0.7	弥生中期末	先端部・基部欠損。	下呂石	
62F	124	III I 7 a	SX01	石錐未成品	24	16	6	1.8	弥生中期末	先端欠損。	チャート	
62F	125	III I 11 m	SX03上層	石錐未成品	24	17	5	2.3			チャート	
62F	126	III I 15 d	NR01地点 I	石錐未成品	40	19	9	6.2		ほとんど製品か?	チャート	PL. 53-30
62F	127	III I 6 b	SD60上層	刃器	30	21	7	5.1	弥生中期末	クサビ形石器か?	チャート	
62F	128	III I 7 b	SD60上層	ナイフ形石器	21	21	6	2.3	弥生中期末		チャート	PL. 55-42
62F	129	III I 7 e	SD60中層	刃器	44	25	6	6.7	弥生中期末	鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。	サヌカイト?	
62F	130	III I 16 l	SD06	刃器	27	42	9	11.7		クサビ形石器か?	チャート	
62F	131	III I 7 d	SD60上層	石匙	39	30	7	7.3	弥生中期末	形が整っていないので違うかもしれない。	下呂石	PL. 55-47
62F	132	III I 7 e	SD06-B上層	石匙	27	19	7	3.2	弥生中期末		チャート	PL. 55-46
62F	133	III I 6 d	検II	石錐	23	15	5	1.5	弥生中期末		下呂石	PL. 53-21
62F	134	III I 6 d	検II	石錐	27	15	9	4.8	弥生中期末		チャート	
62F	135	III I 8 d	検II	石錐	27	13	5	2.1	弥生中期末		チャート	PL. 53-27
62F	136	III I 8 c	ST22	石錐未成品	33	13	5	3.3			チャート	PL. 53-31
62F	137	III I 7 e	ST21	石錐未成品	31	15	10	4.8			チャート	PL. 53-29
62F	138	III I 5 b	検II	石錐未成品	32	15	6	3.2	弥生中期末		チャート	PL. 53-32
62F	139	III I 8 a	ST18	石錐未成品	42	23	10	8.8			チャート	PL. 55-35
62F	140	III I 7 d	検II	石錐未成品	36	20	10	7.1	弥生中期末		チャート	PL. 53-33
62F	141	III I 8 c	ST22	石錐未成品	24	14	5	1.7		先端欠損。	チャート	
62F	142	III I 11 b	ST19	石錐未成品	39	20	7	5.2			チャート	
62F	143	III I 9 b	ST18	石錐	26	10	8	2.3		使用痕ありか?	チャート	
62F	144	III I a以西	ST18	刃器	26	17	7	4.6		スクレーパー、D類	チャート	
62F	145	III I 8 e	ST22	刃器	26	17	4	1.8		石錐未成品か?		
62F	146											
62F	147	III I 7 c	ST20	クサビ形石器	28	27	8	6.5		チャート		
62F	148											
62F	149	III I 9 b	ST18	刃器	22	20	7	3.9		クサビ形石器or使用前か?	チャート	
62F	150	III I 6 e	ST21	刃器	23	21	6	3.2		石錐orポイントの折れたものか?	チャート	
62F	151	III I 7 e	検II	刃器	16	28	4	1.8	弥生中期末	ナイフ形石器か?	チャート	
62F	152	III I 7 a	ST17	刃器	29	14	7	3		石錐未成品か?	チャート	
62F	153	III I 8 a以西	ST16	クサビ形石器	31	17	6	3.3			下呂石	
62F	154	III I 6 d	検II	刃器	41	23	9	9.5	弥生中期末	スクレーパー、D類	チャート	PL. 55-53
62F	155	III I 18 k	検 I	不明	21	16	4	1.7		加工痕のある剥片、クサビ形石器か?	下呂石	
62F	156	III I 18 k	検 I	刃器	32	25	11	9.6		スクレーパーか? B類	チャート	
62F	157	III I 18 m	検 I	刃器	32	20	8	5.8		スクレーパーか? 欠損かC類		チャート
62F	158	III I 10 m	検 I	刃器	24	32	6	5.9		ポイント片か?	チャート	
62F	159	III I 20 m	検 I	刃器	26	18	8	3.8		製作途中でこわれた。	チャート	
62F	160	III I 18 m	検 I	刃器	33	24	6	5.9		スクレーパーorクサビ形石器か? A類	チャート	
62F	161	III I 20 m	検 I	刃器	38	24	8	8.3		クサビ形石器か?	チャート	
62F	162											
62F	163											
62F	164	III I 18 m	検 I	刃器	42	39	7	9.9			チャート	
62F	165	III I 11 i	検 I	刃器	36	24	9	6.9		クサビ形石器か?	チャート	
62F	166	III I 17 o	検 I	刃器	19	14	4	1			チャート	
62F	167	III I 17 k	検 I	石錐	18	15	6	1.5		上半部欠損。平基(やや凸状)有茎。	下呂石	
62F	168	III I 18 j	検 I	石錐	18	16	4	1.3		上半部欠損。	チャート	
62F	169	III I 9 d	検 I	石錐	24	18	5	2.1		下半部欠損。	石英	
62F	170	III I 10 d	検 I	石錐	27	11	5	1.8		欠損品か?	チャート	
62F	171	III I 17 m	検 I	石錐未成品	26	18	6	2.8			チャート	
62F	172	III I 9 h	検 I	石錐未成品	36	15	8	4.1		基部に礫面。	下呂石	
62F	173	III I 11 l	検 I	石錐未成品	24	18	8	4.7		ただの剥片か?	チャート	
62F	174	III I 19 l	検 I	石錐未成品	31	19	7	3			チャート	
62F	175	III I 17 m	検 I	石錐未成品	24	21	10	5.2		半分欠損。	チャート	
62F	176	III I 17 l	III I	石錐	12	10	5	0.5		使用痕あり。	チャート	
62F	177	III I 17 k	検 I	石錐	22	14	5	1.7		使用痕あり。	チャート	PL. 53-17
62F	178	III I 9 c	ST-22	石錐	16	8	5	0.7			チャート	PL. 53-16
62F	179	III I 20 o	検 I	石錐	35	19	10	6.2		使用痕ありか?	チャート	
62F	180	III I 19 m	検 I	石錐	12	18	3	0.6		凸基有茎。基部片。	下呂石	
62F	181		SX03地点IIトレンチ礫層	石層	45	31	8	14.8			チャート	
62F	182	III I 13.14m	SX03地点IV上部礫層	石錐未成品	37	21	8	7.2	古墳前期	クサビ形石器か?	チャート	PL. 53-34

62F	183	III I 11 o	SX03	石核	54	42	23	63.8	古墳前期		チャート
62F	184	III I 11 l	SX03-2層	石核	49	30	19	22.6			チャート
62F	185	III I 11 o	SX03地点IV	石核	57	37	27	38.9	古墳前期		チャート
62F	186	III I 14 f	NR01地点1-4層	石核	45	32	15	24.7			チャート
62F	187	III I 17 o	SX02	石核	80	51	15	104.7	弥生後期	タタキ石か?	チャート
62F	188	III I 18 n	SX02	原石	60	48	31	141.2	弥生後期		チャート
62F	189	III I 14 f	NR01地点I	刃器	29	16	5	3		スクレパー、D類	チャート
62F	190										
62F	191										
62F	192										
62F	193										
62F	194	III I 19 i	SD20	刃器29	18	7	3.4				下呂石
62F	195	III I 14 i	SX03地点上部砂層下	刃器	28	20	5	3.3		スクレパー、B類	チャート
62F	196	III I 14 i	SX03地点II上部砂層下	刃器	32	26	7	5.9		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる	チャート
62F	197		SX04	刃器	36	29	10	8			下呂石
62F	198	III I 11 d	SD19	刃器	38	42	16	19.7	弥生中期末		PL. 55-55
62F	199	III I 11 m	SX03下位(礫層)	刃器	29	19	10	6.5	古墳前期	ただの剥片か?	チャート
62F	200										
62F	201										
62F	202	III I 11 o	SX03	刃器	23	14	5	1.8	古墳前期	スクレパー、A類	チャート
62F	203	III I 11 o	SX03	刃器	39	28	8	10.4	古墳前期	鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。	チャート
62F	204										
62F	205	III I 7 a	SX01	刃器	74	68	12	69.5	弥生中期末		PL. 54-39
62F	206										
62F	207										
62F	208	III I 7 b	SX01	磨製石器片	38	27	4	5.2	弥生中期末	石包丁か?	
62F	209	III I 7 a	SD60中層	刃器	84	102	26	225.3	弥生中期末		PL. 54-37
62F	210										
62F	211	III I 6 e	SD60中層	磨製石斧(加工斧)	49	33	12	55	弥生中期末	扁平片刃石斧。	泥岩
62F	212	III I 7 c	検II	磨製石斧(加工斧)	73	35	12	26.7	弥生中期末	扁平片刃石斧。	
62F	213	III I 6 d	検II	磨製石斧(加工斧)	54	48	42	178.5	弥生中期末		
62F	214	III I 7 b	SD60中層	砥石	69	49	33	146.3	弥生中期末		PL. 56-57
62F	215	III I 7 a	SX01	砥石	64	51	12	51.8	弥生中期末		
62F	216	III I 7 a	検II	砥石	50	41	15	26.1	弥生中期末		
62F	217	III I 7 b	SD60中層	砥石	63	56	20	92.8	弥生中期末		
62F	218	III I 20 m	検I	タタキ石	62	48	12	47.6			
62F	219	III I 7 c	SD60-B上層	タタキ石	102	35	29	174.2	弥生中期末	棒状礫。両端と側面中央付近に敲打痕あり。	
62F	220	III I 12 m	NR01-D-2層	タタキ石	78	39	32	139		ただの石か?	
62F	221	III I 11 p	SX03	タタキ石	43	54	11	41.7	古墳前期	ただの石か?	
62F	222	III I 6 d	SD60中層	タタキ石	79	64	17	102.3	弥生中期末	ただの石か?	
62F	223	III I 7 a	SX01	タタキ石	92	44	18	83.4	弥生中期末		
62F	224		SD60セクションライン	タタキ石	124	39	25	127.7		棒状礫。	
62F	225	III I 7 b	SX01	タタキ石	123	69	24	252.2	弥生中期末	扁平礫。	
62F	226	III I 14 j	SX03地点II上部砂層下	タタキ石	117	57	37	442.3		棒状礫。	ホルンフェルス
62F	227	III I 7 b	SD60下層	タタキ石	109	80	35	491.3	弥生中期末	扁平礫。ただの石か?	ホルンフェルス
62F	228	III I 19 k	検I	刃器	32	23	13	8.7		クサビ形石器か?	
62F	229	III I 19 n	検I	刃器	26	18	6	2.5		石礫未成品か?	チャート
62F	230	III I 19 k	検I	刃器	19	8	2	0.4		microlith か?	チャート
62F	231	III I 8 a	ST18	刃器	28	22	4	1.9		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。	下呂石
62F	232	III I 15 n	検I	刃器	31	20	7	4.3		石礫未成品か?	チャート
62F	233										
62F	234	III I 17 n	検I	刃器	34	37	10	13.4		石核か?	チャート
62F	235										
62F	236										
62F	237	III I 8 a	ST18	刃器	29	20	10	5.9		クサビ形石器か?	チャート
62F	238										
62F	239	III I 19 i	検I	石礫	25	15	6	2.2		使用痕あり。	チャート
62F	240	III I 18 m	検I	石礫未成品	26	16	5	2.3			サヌカイト?
62F	241	III I 18 j	検I	石礫未成品	5	8	3	0.8		石礫か?	チャート
62F	242	III I 18 m	検I	石礫未成品	39	22	13	11.3			下呂石
62F	243	III I 8 a	ST18	石礫	41	26	8	7.2		使用痕あり。	チャート
62F	244	III I 19 n	検I	石核	48	37	21	32.7			チャート
62F	245										
62F	246	III I 18 l	検I	刃器	26	16	8	3.4		石礫か?	チャート
62F	247	III I 18 j	検I	刃器	48	22	11	10.9		実測図にすると瀬戸内打法の剥片になる。	チャート
62F	248	III I 7 b	SD60中層	石核	47	36	16	30	弥生中期末		チャート
62F	249	III I 7 b	SD60中層	刃器	32	17	6	3.2	弥生中期末	スクレパー、A類	チャート
62F	250	III I 7 d	検I	刃器	23	30	7	4		スクレパー、A類	チャート
62F	251										
62F	252	III I 5 a以西	ST16	刃器	26	20	7	3.2		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。	チャート
62F	253	III I 3 c	検I	刃器	24	34	5	4.1			チャート
62F	254	III I 14 k	検I	刃器	21	12	5	1.2		石礫か?	チャート



62F	329	III I 15 p	SD03サブトレ(北側)	刃器	41	24	10	10.9					チャート	
62F	330	III I 16 d	NR01地点 I 上層	刃器	42	40	8	16			スクレパー、A'類		チャート	PL 55-50
62F	331	III I 16 d	NR01地点 I 6層	刃器	20	38	9	4.9			礫面をもつ、玉製作時の石層か?	碧玉		
62F	332	III I 10 j	検II	クサビ形石器	30	30	12	9.3	弥生中期末				チャート	
62F	333	III I 9 e	検II	刃器	37	39	9	12.8	弥生中期末		スクレパー、A'類		チャート	
62F	334	III I 11 d	SD19	不明	26	15	4	1.1	弥生中期末		加工痕のある小切片、		チャート	
62F	335	III I 6 e	SD60上層	刃器	39	26	7	7.3	弥生中期末		尖部あり、石鏃か?		チャート	
62F	336	III I 6 e	SD60上層	刃器	32	14	4	1.8	弥生中期末				チャート	
62F	337	III I 6 e	SD60中層	刃器	43	31	7	9.5	弥生中期末		スクレパー、A'類		チャート	
62F	338	III I 6 e	SD60中層	刃器	28	23	6	3.8	弥生中期末				チャート	
62F	339	III I 6 e	SD60中層	石核	45	29	15	18.7	弥生中期末		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。		チャート	
62F	340	III I 7 g	SD60中層	不明	39	24	12	8	弥生中期末		加工痕のある切片、		チャート	
62F	341	III I 7 g	SD60中層	刃器	38	28	11	10	弥生中期末		クサビ形石器か?		チャート	PL 55-54
62F	342	III I 7 f	SD60-B中層	刃器(使用痕あり)	36	23	9	6.6	弥生中期末				チャート	PL 57-70
62F	343	III I 7 f	SD60-B上層	刃器	21	23	5	2.3	弥生中期末		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。		チャート	
62F	344	III I 7 c	SD60上層	スクレパー、	29	21	7	4.2	弥生中期末		使用痕ありか? A'類		チャート	
62F	345	III I 7 a	SD60中層	不明	34	18	6	4	弥生中期末		加工痕のある切片、石鏃未成破損品か?		チャート	
62F	346	III I 7 a	SD60中層	刃器	44	34	10	20	弥生中期末		スクレパー、A'類		チャート	PL 55-49
62F	347	III I 12 m	SX03	刃器	19	32	12	5.7			クサビ形石器か?		チャート	
62F	348													
62F	349	III I 7 b	SD60中層	刃器	59	37	11	25	弥生中期末		ただの切片か?		チャート	
62F	350	III I 7 b	SD60中層	石核	39	26	21	20	弥生中期末				チャート	
62F	351	III I 7 b	SD60中層	石核	43	38	17	30	弥生中期末		クサビ形石器か?		チャート	
62F	352	III I 7 b	SD60中層	石核	64	36	18	35	弥生中期末		残核		チャート	
62F	353	III I 6 d	SD60中層	石核	17	40	32	15	弥生中期末				チャート	
62F	354	III I 6 a	SD60中層	石核	41	29	23	30	弥生中期末				チャート	
62F	355	III I 6 b	SD60-B	石核	84	35	21	60	弥生中期末				チャート	
62F	356	III I 7 c	SD60上層	石核	48	36	21	30	弥生中期末				チャート	
62F	357	III I 6 e	SD60-B上層	石核	40	33	22	25	弥生中期末				チャート	
62F	358	III I 11 m	SX03	石核	46	55	18	45	古墳前期				チャート	
62F	359	III I 7 g	SD60中層	石核	56	42	20	55.7	弥生中期末		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。スクレパーか? A'類		チャート	
62F	360	III I 7 f	SD60-B上層	石核	38	27	11	13.1	弥生中期末				下呂石	
62F	361	III I 6 e	検II	磨製石斧片	42	32	8	8.2	弥生中期末					
62F	362	III I 6 b	SD60上層	磨製不明品	45	13	4	2.2	弥生中期末		石剣の破片か?			
62F	363	III I 12 m	SX03-1層	石鏃	21	13	6	1.2			使用痕あり、		チャート	
62F	364	III I 7 b	SD60中層	石鏃未成品	31	20	8	3.2	弥生中期末		石鏃か?		チャート	
62F	365	III I 6 d	SD60上層	石核	60	28	14	20	弥生中期末		尖部あり、石鏃か?		チャート	
62F	366	III I 7 a	検II	刃器	25	33	9	7.5	弥生中期末				チャート	
62F	367	III I 6 b	検III	刃器	47	45	7	10	弥生中期末		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。		チャート	
62F	368	III I 7 b	検II	刃器	47	40	11	20	弥生中期末				チャート	
62F	369	III I 7 b	検II	刃器	21	17	5	2.3	弥生中期末		ナイフ形石器か?		チャート	PL 55-41
62F	370	III I 7 a	SD60上層	刃器	36	46	12	20	弥生中期末		スクレパーか? C'類		チャート	
62F	371	III I 7 a	SD60上層	石核	37	28	12	15	弥生中期末				チャート	
62F	372													
62F	373													
62F	374	III I 7 c	検II	石鏃	20	10	4	0.7	弥生中期末				下呂石	
62F	375	III I 4 b	SD60上層	刃器	27	20	8	3.9	弥生中期末		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。		チャート	
62F	376	III H 5 t	検II	刃器	40	57	11	25	弥生中期末		鋭いエッジに小剥離の連続が認められる。		ホルンフェルス	
62F	377	III I 6 e	検II	不明	43	23	9	10	弥生中期末		加工痕のある切片、ポイント未成品の可能性あり、		チャート	
62F	378	III I 6 e	検II	刃器(使用痕あり)	33	12	5	2.1	弥生中期末				チャート	PL 57-72
62F	379	III I 6 a	検III	石鏃	27	12	5	2.1	弥生中期末		使用痕あり、		チャート	
62F	380													
62F	381	III I 6 b	検II	クサビ形石器	21	22	8	3.2	弥生中期末		略円形、		チャート	
62F	382	III I 7 g	ST26	刃器	29	17	4	2.2			小切片利用、		チャート	
62F	383		SX03礫層	刃器	22	31	10	5.7			小切片利用、		チャート	
62F	384	III I 13 h	SX03下層	不明	43	19	12	9.1			加工痕のある切片、縦長切片、石鏃未成品か?		チャート	
62F	385	III I 5 a	ST17	刃器	35	20	8	2.7					下呂石	
62F	386	III I 7 g	ST26	刃器	16	22	7	6.3			小切片利用		チャート	
62F	387	III I 15 e	NR01 2層	タタキ石	81	67	18	130			稜線に敲打痕あり、			
62F	388	III I 8 h	検I	刃器	33	25	9	6.4			スクレパー、A'類		チャート	
62F	389	III I 7 e	ST21	刃器	22	33	13	7.6			ただの切片か?		チャート	
62F	390	III I 8 e	検I	刃器	12	27	7	2.1			石鏃未成品か?		チャート	
62F	391	III I 19 m	検I	刃器	33	25	7	6.2			スクレパー、C'類		チャート	
62F	392	III I 12 m	検I	刃器	25	21	8	4.1			ただの切片か?		チャート	
62F	393	III I 10 e	ST22	石鏃	34	15	7	3.1			先端欠損、基部くり込み弱い、凸蓋有基、		下呂石	
62F	394	III I 6 c	ST20	石鏃	22	18	6	2.5			未成破損品か?		チャート	
62F	395	III I 10 b	SK01	石器(使用痕あり)	36	22	10	7.4	弥生中期末		スクレパー、A'類		チャート	PL 57-73
62F	396	III I 14 g	NR01地点 I 礫層	刃器	30	39	11	13.4					チャート	
62F	397	III I 14 g	NR01地点 I 礫層	刃器	35	30	11	8.6			スクレパー、C'類		チャート	

62F	398	III 114g	NR01地点I礫層	刃器	29	23	8	6.5			チャート	
62F	399	III 114e	NR01地点I礫層	刃器	38	32	8	8.7		ただの剥片か?	チャート	
62F	400	III 16a	検III	刃器	61	74	20	50	弥生中期末	使用痕あり(コーングロス か?)	ホルンフェルス	PL, 54-38
62F	401	III 114g	NR01地点I礫層	刃器	14	29	7	3.5		クサビ形石器か?	チャート	
62F	402	III 120n	試掘溝	石帯	19	17	7	4				PL, 57-69
62F	403	III 16c	SD60	石鏃	29	34	7	5.5	弥生中期末		サヌカイト	PL, 55-44
62F	404	III 112k	検I	石鏃	26	11	5	1.5		先端欠損。基部くり込み弱 い。凸基有茎。	下呂石	
62F	405	III 120o	検I	石鏃	24	17	6	2.5			チャート	PL, 138-r
62F	406	III 118l	検I	石鏃	28	10	5	1.7		先端欠損か?	チャート	
62F	407	III 119o	検I	石鏃	33	14	6	2.6			下呂石	PL, 138-z
62F	408	III 16b	ST17	石鏃	32	12	8	2.8		鈍れ転用か?	チャート	PL, 138-y
62F	409	III 117n	検I	石鏃	27	20	6	3.8		凸基無茎。	チャート	
62F	410	III 18h	検I	石鏃	32	17	5	2.3			チャート	PL, 138-m
62F	411	III 113k	検I	石鏃	25	15	5	1.4		先端欠損。	チャート	PL, 138-f
62F	412	III 118m	検I	石鏃	19	14	5	1		凹基無茎。先端欠損。	サヌカイト?	
62F	413	III 17c	ST20	石鏃	22	11	4	0.9			下呂石	
62F	414	III 118o	検I	石鏃	23	17	4	1.2			チャート	PL, 138-b
62F	415	III 19d	ST22	石鏃	30	17	6	2.2			下呂石	PL, 138-n
62F	416	III 118j	検I	石鏃	24	16	6	1.8			下呂石	PL, 138-s
62F	417	III 17g	検I	石鏃	24	12	5	1.1			下呂石	PL, 138-h
62F	418	III 18h	検I	石鏃	24	15	6	1.9		上半欠損。基部くり込み強 い。凹基有茎。	下呂石	
62F	419	III 110b	ST15	石鏃	24	14	3	1.1			サヌカイト?	PL, 138-l
62F	420	III 118k	検I	石鏃	22	13	6	1.6		先端欠損。平基有茎。	下呂石	
62F	421	III 111j	検I	石鏃	27	13	5	1.6			チャート	PL, 138-d
62F	422	III 110f	検I	石鏃	37	13	7	2.9		先端欠損。基部くり込み弱 い。凸基有茎。	下呂石	
62F	423	III 117k	検I	石鏃	32	13	5	2			チャート	PL, 138-x
62F	424	III 18f	ST21	石鏃	27	12	6	1.9		いびつ。鏃か?	下呂石	
62F	425	III 118l	検I	石鏃	25	14	6	2		先端欠損。平基有茎。	下呂石	
62F	426	III 111n	SX03地点IV	石鏃	27	19	4	1.5	古墳前期		チャート	PL, 138-e
62F	427	III 111i	検I	石鏃	21	10	4	0.9			下呂石	PL, 138-c
62F	428	III 120o	検I	石鏃	25	13	6	1.2		凹基無茎。片方の逆刺小さ い。	下呂石	
62F	429	III 19h	検I	石鏃	22	15	4	1.7		基部欠損。有茎か?	チャート	
62F	430	III 19h	検I	石鏃	26	16	5	1.7		先端欠損。平基有茎。	下呂石	
62F	431	III 18g	検I	石鏃	22	16	6	1.5		先端欠損。平基有茎。	下呂石	
62F	432	III 117i	検I	石鏃	20	15	4	1.1		凹基有茎。五角形だかいび つ。	下呂石	
62F	433	III 118k	検I	石鏃	21	16	4	1.3		先端欠損。平基有茎。	下呂石	
62F	434	III 115f	上部礫層?	石鏃	24	15	5	1.5		凹基無茎。逆刺片方欠損。	チャート	
62F	435	III 114e	NR01地点I礫層 上	石鏃	27	14	6	2.6		未成品か?	チャート	
62F	436	III 116q	検I	石鏃	21	13	6	1.4		先端欠損。平基有茎。	下呂石	
62F	437	III 111l	SX03-1層	磨製石斧(伐採斧)	106	70	43	470				PL, 51-4
62F	438	III 16c	SD60中層	磨製石斧(伐採斧)	73	32	11	26	弥生中期末	小片		
62F	439	III 118p	検I	磨製石斧(加工斧)	41	40	9	36		扁平片刃石斧。		PL, 52-12
62F	440	III 17b	SD60中層	石核	74	56	29	216	弥生中期末	タタキ石か?	チャート	
62F	441	III 17b	SD60中層	タタキ石	84	60	41	328	弥生中期末	棒状礫片。		
62F	442	III 117l	検I	タタキ石	68	65	36	216				
62F	443	III 120n	検I	砥石	87	71	19	136		側面に敲打痕ありか?		
62F	444	III 19h	ST26	砥石	103	35	19	64				
62F	445	III 17d	SD60-B下層	砥石	103	29	29	88	弥生中期末	細かい。		
62F	446	III 17b	SD60中層	砥石	124	94	43	378	弥生中期末	断面三角形。稜に敲打痕あ り。		
62F	447											
62F	448											
62F	449											
62F	450	III 17b	SD60中層	砥石	113	89	61	656	弥生中期末			
62F	451											
62F	452											
62F	453											
62F	454											
62F	455											
62F	456											
62F	457	III 17b	SD60最下層	台石	171	117	64	1915	弥生中期末	敲打痕あり。		
62F	458	III 17b	SD60中層	台石	138	137	98	2320	弥生中期末	砥石に使用か?		
62F	459	III 17b	SD60中層	台石	191	122	76	2475	弥生中期末	凹み石か?		
62F	460											
62F	461	III 119j	検I	原石	26	17	13	4.1			碧玉	
62F	462	III 16g	SD60-B上層	原石	22	16	8	1.8	弥生中期末		碧玉	
62F	463	III 113l	SX03上層	玉原石	29	19	14	4.7			メノウ?	
62F	464	III 112k	SX03茶褐色砂礫	管玉	48	10	10	7.5			碧玉?	PL, 57-61
62F	465	III 17b	SD60上層	管玉	11	3	3	0.1	弥生中期末		碧玉?	PL, 57-64
62F	466	III 19a	検I	管玉	20	5	5	0.8			碧玉	PL, 57-63
62F	467	III 119k	検I	管玉	23	11	11	4.2			碧玉	PL, 57-62
62F	468	III 110b	SD19	管玉	6	2	2	出ない	弥生中期末		碧玉	PL, 57-65
62F	469	III 114k	NR01地点II-1層	玉	9	8	7	0.7		穿孔なし。未成品か?	メノウ?	
62F	470	III 18f	ST26	玉	10	11	11	1.5			水晶	PL, 57-67

62F	471	III I 15 f	NR01層下(No45)	切子玉	25	16	16	8.7		水晶	PL, 57-68
62F	472	III I 19 m	SX02	ガラス小玉	3	4	4	出ない	弥生後期	水色透明	PL, 57-66
62F	473	III I 8 h	ST26	石匙	36	34	7	12		サヌカイト	PL, 55-45
62F	474	III I 7 f	SD60-B上層	刃器	73	92	20	166			
62F	475	III I 8 g	ST26	黒曜石剥片	35	16	9	5.6			
89C	01	III H31	検 I-②	磨製石斧 (伐採斧)	78	65	35	268	弥生後期?		PL, 51-3
89C	02	III H31	SB07	石匙	28	35	5	4	古墳前期	チャート	PL, 55-43
89C	03	III H31	SB08	石鏃	43	15	5	2	弥生後期?	チャート	PL, 138-g
89C	04	III H31	SB07	刃器	46	40	19	24	古墳前期	スクレバーか? A類	チャート
89C	05	III H2 n	SB18	石核	44	51	18	44	弥生後期?	チャート	
89C	06	III H1 k	SK06	刃器	56	32	11	16	弥生後期?	チャート	PL, 55-52
89C	07	III H2 m	SB16	スクレバー	40	13	10	2	D類	チャート	PL, 55-51
89C	08	III H1 P・q	検 I	刃器	29	19	8	4	弥生後期?	ナイフの時代のクテ長剥片の可能性あり。	チャート
89C	09	III H2 l, m	検 I-④	刃器	19	32	7	2	弥生後期?	チャート	
89C	10	II H20 n	SB11	刃器 (使用痕あり)	39	18	10	4	弥生後期?	チャート	PL, 57-74
89C	11	III H1 m	検 I-④	刃器	23	17	5	2	弥生後期?	チャート	
89C	12	III H21	検 I-④	不明	23	30	7	4	弥生後期?	加工痕のある剥片。	下呂石
89C	13	III H4 i	検 I	不明	30	12	4	2	弥生後期?	加工痕のある剥片。	チャート
89C	14	III H21	SB15土器群1	刃器	21	21	8	4	弥生後期?	石鏃にも使用か? orクサビ形石器か?	チャート
89C	15	III H1 m	検 I-③	砥石	68	58	17	124	弥生後期?		PL, 56-56
89C	16	III H31	SB04	砥石	146	81	41	826	弥生後期?		
89C	17	III H3 l	SB08	砥石	100	81	42	958	弥生後期?	大形偏平。	
89C	18	III H31	SB08	砥石	129	113	28	966	弥生後期?	大形偏平。	
89C	19	III H31	SB08	砥石	255	175	44	1820	弥生後期?	大形偏平。	
89C	20	III H1 m	検 I-④	石鏃	19	15	5	1.2	弥生後期?	上半部欠損。平基有茎。	チャート
89C	21	III H1 m	検 I-③	石鏃	22	12	4	1.1	弥生後期?		PL, 138-q
89C	22	III H1 m	検 I-③	石鏃	23	14	4	1	弥生後期?		PL, 138-p
89C	23	III H1 l	検 I	石鏃	21	13	5	1.4	弥生後期?		チャート
89C	24	III H1 l	検 I	石鏃	41	14	8	3.9	弥生後期?		下呂石
89C	25	III H1 l	検 I	石鏃	26	12	4	1.5	弥生後期?	先端部・基部欠損。凸基有茎か?	チャート
89C	26	III H1 l	検 I-③	石鏃	14	12	5	0.5	弥生後期?		PL, 138-a
89C	27	III H1 l	検 I-③	石鏃	35	13	7	2.6	弥生後期?		下呂石
89C	28	III H1 l	SB03	石鏃	25	19	4	2.3		上半部欠損。平基有茎。	チャート
89C	29	III H1 l	SB03	石鏃未成品	26	17	7	3.3			チャート
89C	30	III H1 j	検 I-③	石鏃	36	11	7	2.5	弥生後期?		下呂石
89C	31	III H1 j	検 I-③	磨製石斧 (加工斧)	28	25	6	8.9	弥生後期?	扁平片刃石斧。	PL, 138-v
89C	32	III H1 n	検 I-③	石鏃	42	20	5	4.1	弥生後期?		PL, 52-13
89C	33	III H1 h	検 I-③	石鏃	28	15	5	1.4	弥生後期?		サヌカイト?
89C	34	III H2 l	検 I-④	石鏃	28	16	6	2.2	弥生後期?		チャート
89C	35	II H20 n	検 I	石鏃	22	13	4	1	弥生後期?		PL, 138-k
89C	36	II H20 h	検 I-③	石鏃	28	14	7	2.4	弥生後期?	先端部欠損。凸基有茎。	サヌカイト?
89C	37	II H20 P, q	ST9	石鏃未成品	32	19	8	4.9	弥生後期?		チャート
89C	38	III H4 j	検 I-③	磨製石斧 (加工斧)	64	42	12	66.8	弥生後期?	扁平片刃石斧。	PL, 138-o
89C	39	III H3 g	SD03	台石	167	91	68	1700			PL, 138-j
89C	40	III H1 l	SB15	台石	259	185	169	11500	弥生後期?		
90A	1	II F 10 s	カクラン	砥石	72	47	31	164			PL, 56-58
96A	2	II G 7 c	カクラン	砥石	124	43	11	66			

## 遺構図版

PL.1・2 1 : 800

PL.3~10 1 : 200

PL.11~13 1 : 100

## 遺物図版

PL.14~40 1 : 4

PL.41~45 1 : 3

PL.46~50 1 : 4

PL.51~57 1 : 2

PL.58~94 1 : 4、1 : 8

X = -86,100

X = -86,200

57 E 区

56 D 区

57 G 区

63 D 区

57 J 区

56 F 区

90 A 区

89 B 区

56 A 区

89 A 区

57 K 区

56 B 区

56 C 区

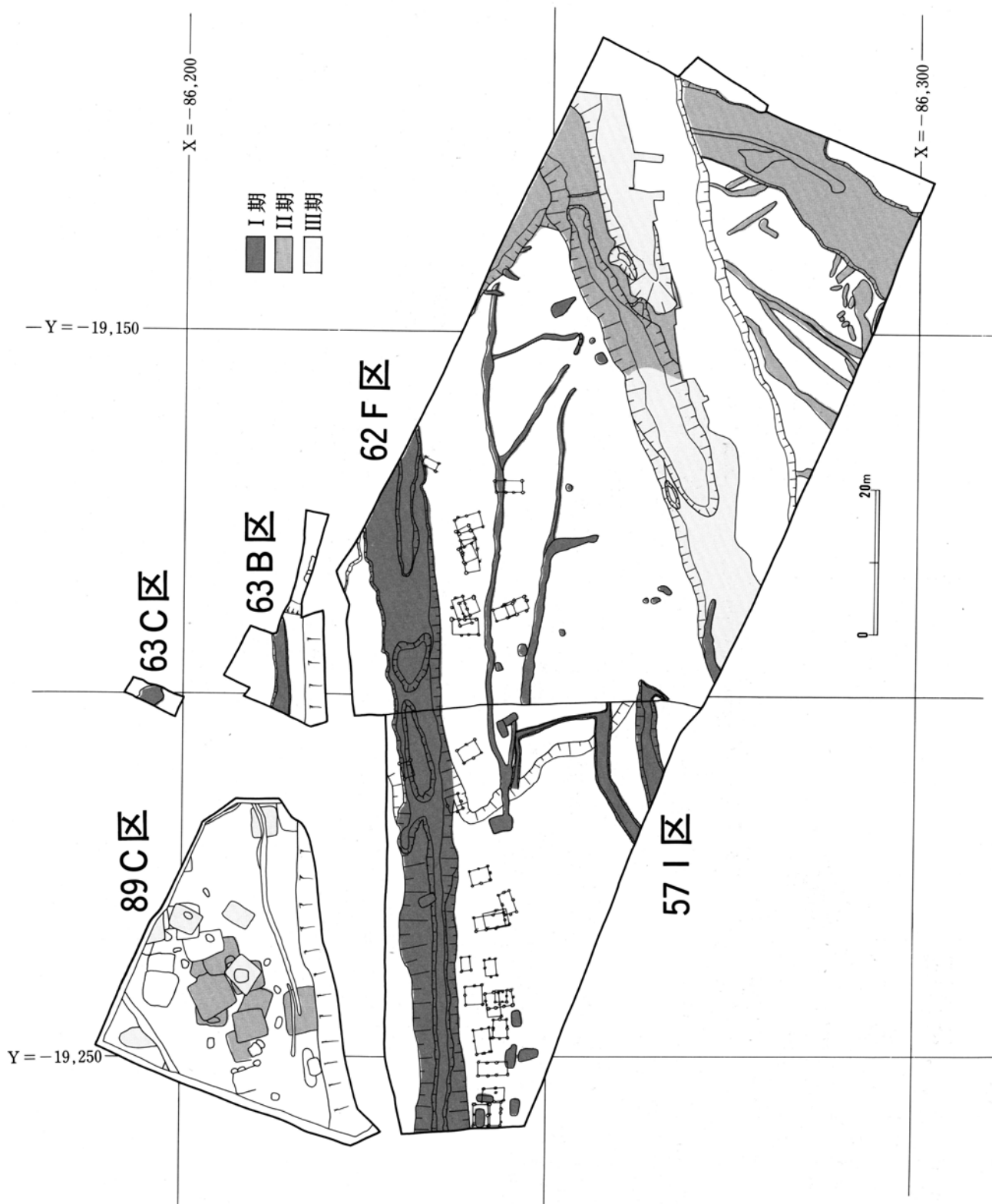
- I 期
- II 期
- III 期
- IV 期および時期不明
- 攪乱



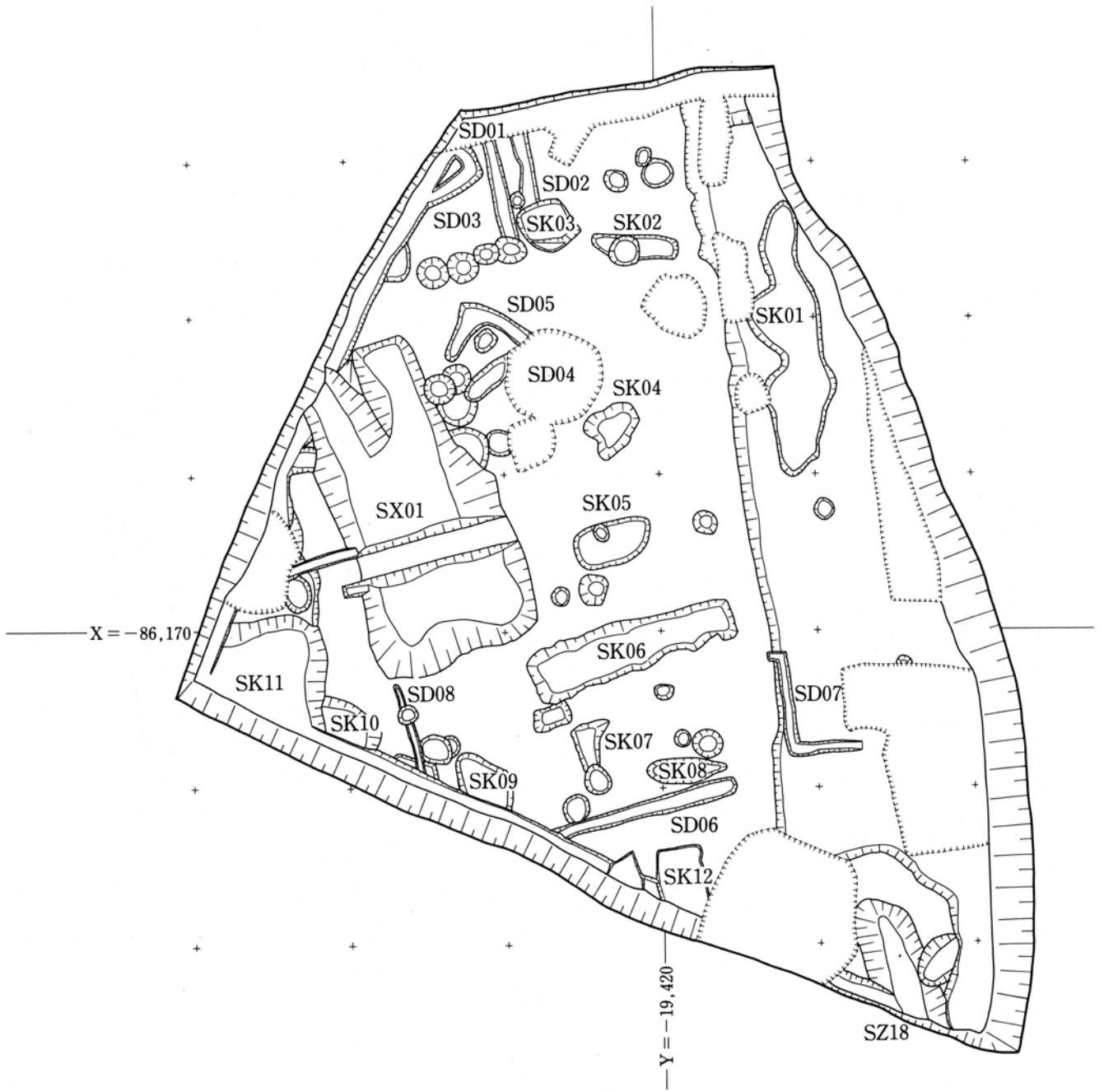
Y = -19,400 -

Y = -19,500 -

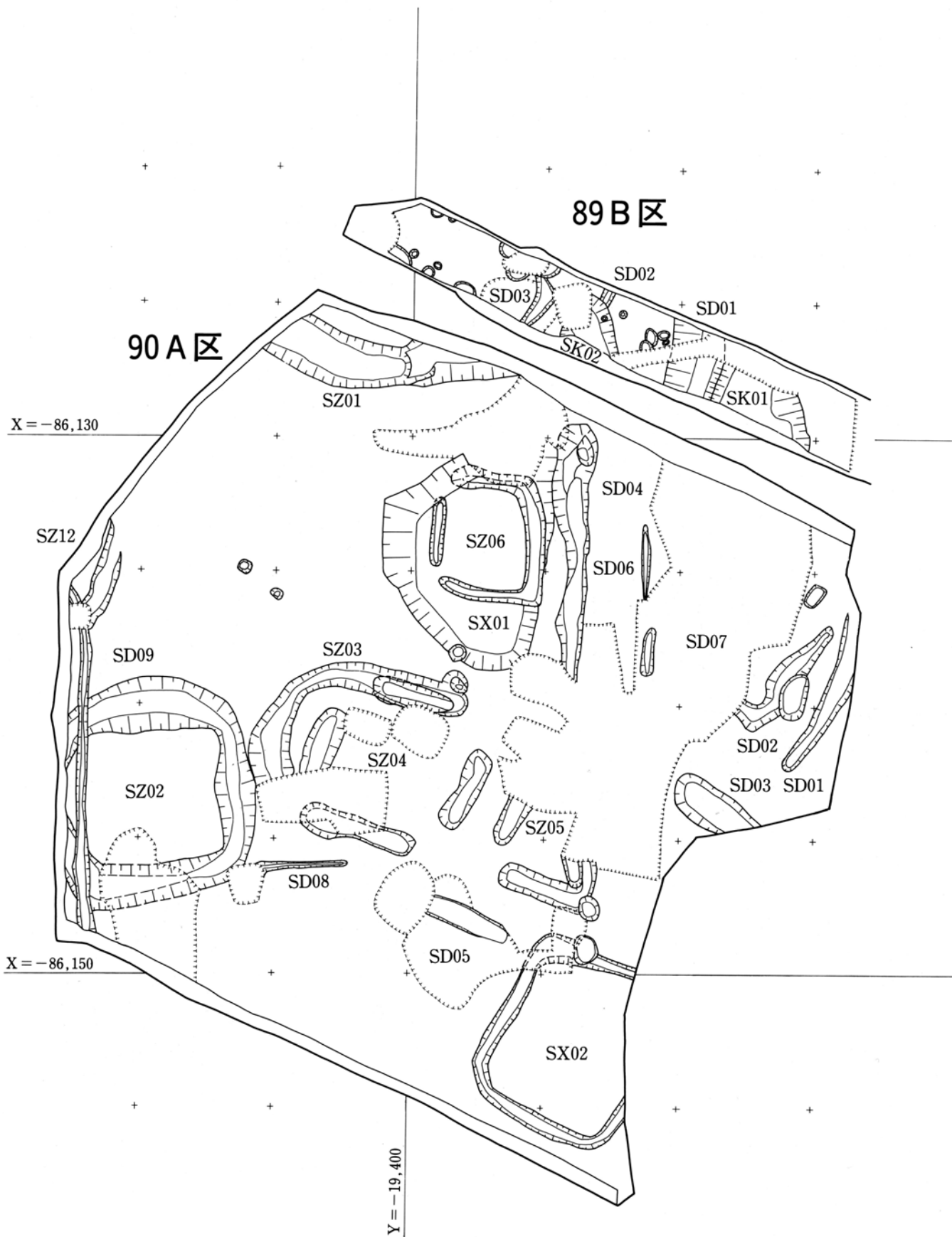
上屋敷地区遺構図(1 : 800)



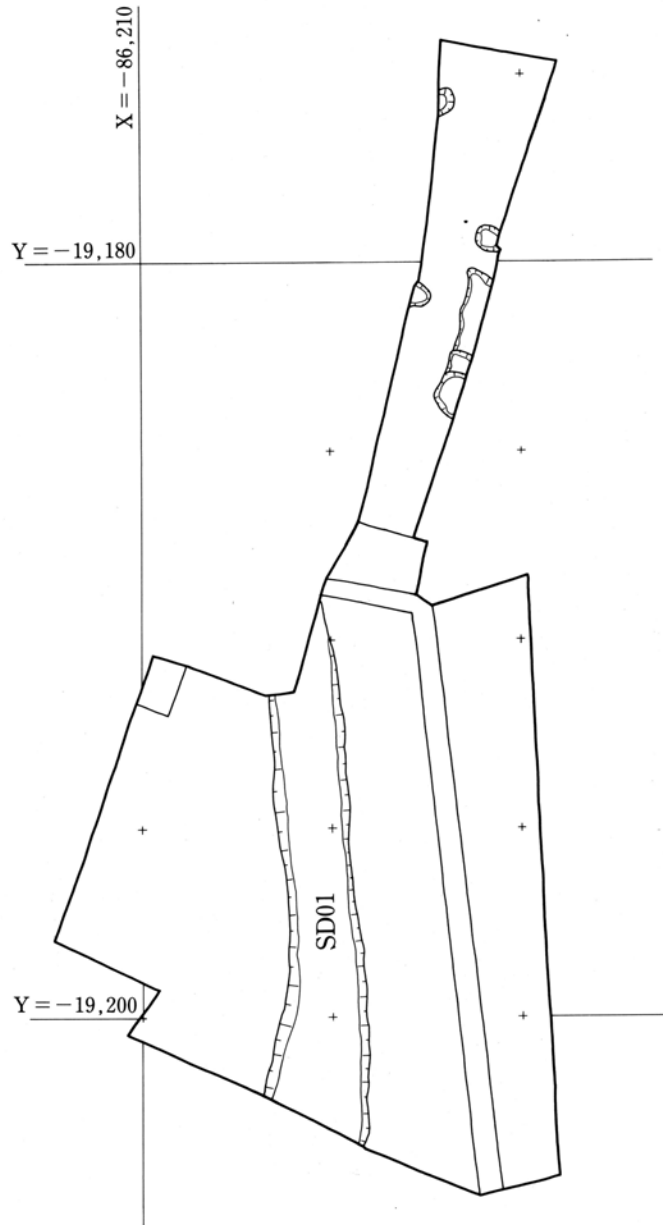
南東山地区・苗田地区遺構図(1:800)



89A区遺構図(1 : 200)



89B・90A区遺構図(1:200)



63B区遺構図(1 : 200)



89C区遺構図(1:200)

Y = -19,160

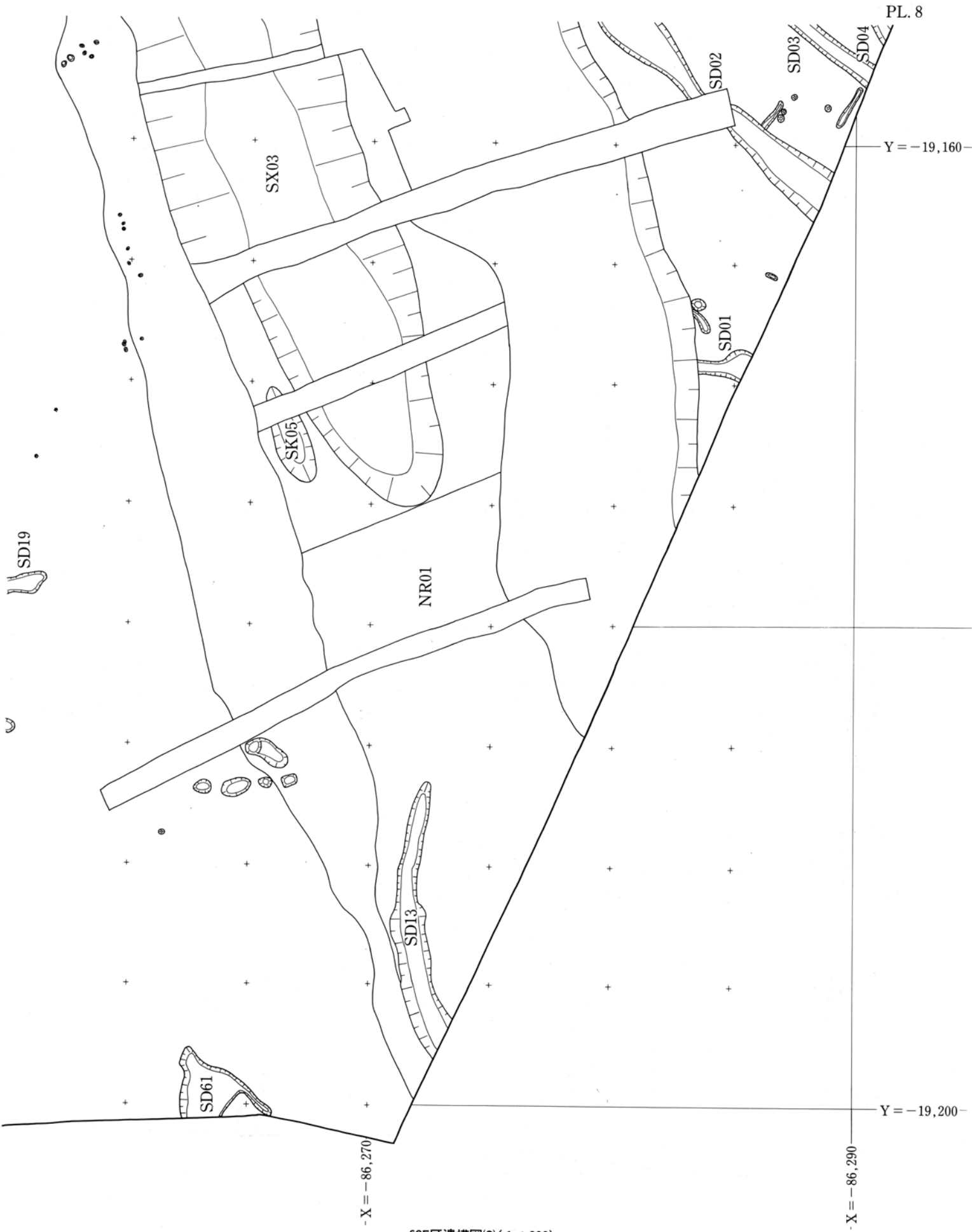
X = -86,230



Y = -19,200

X = -86,250

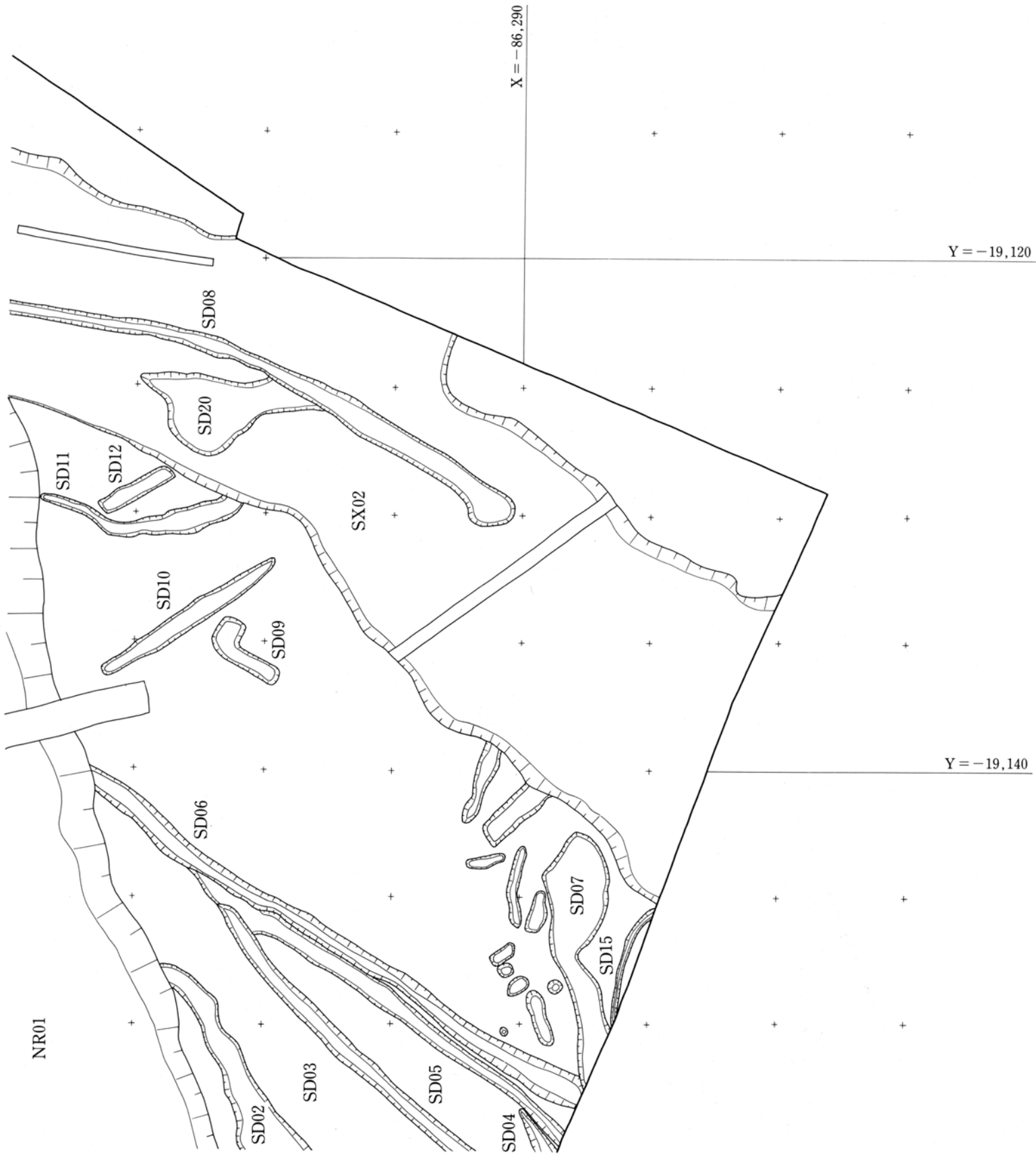
62F区遺構図(1)(1 : 200)



62F区遺構図(2)(1 : 200)



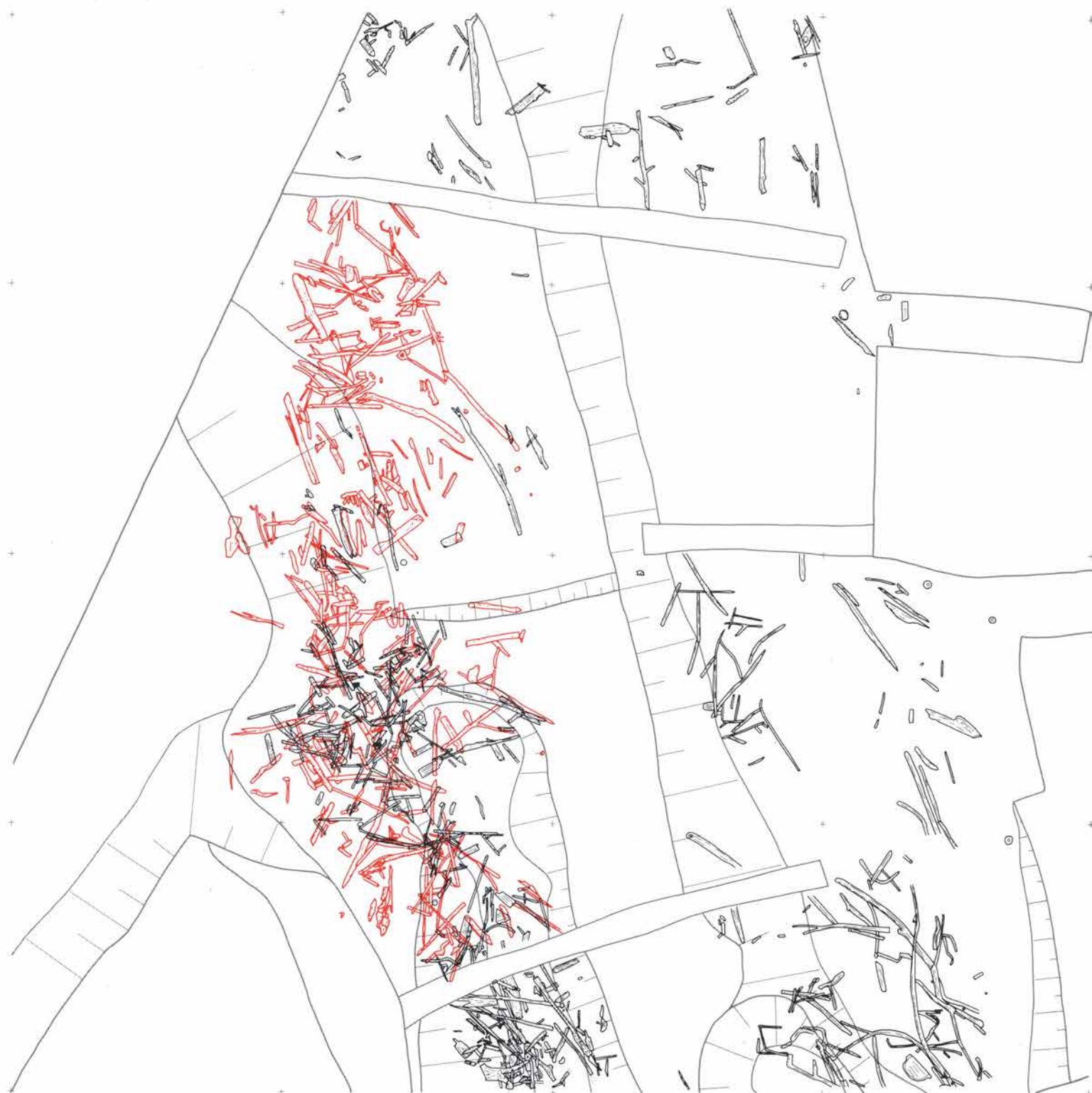
62F区遺構図(3)(1 : 200)



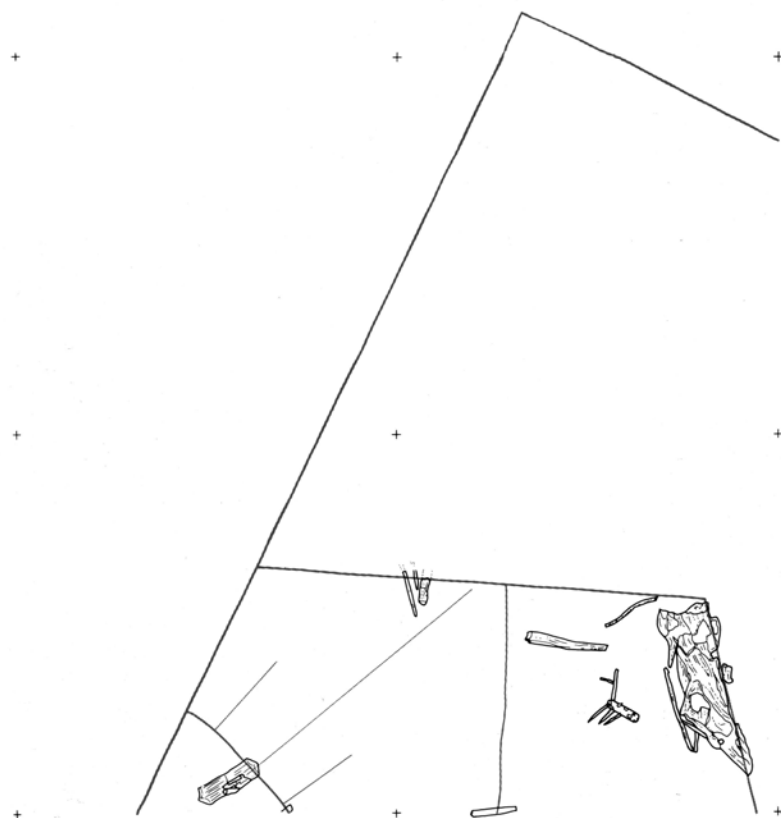
62F区遺構図(4)(1 : 200)



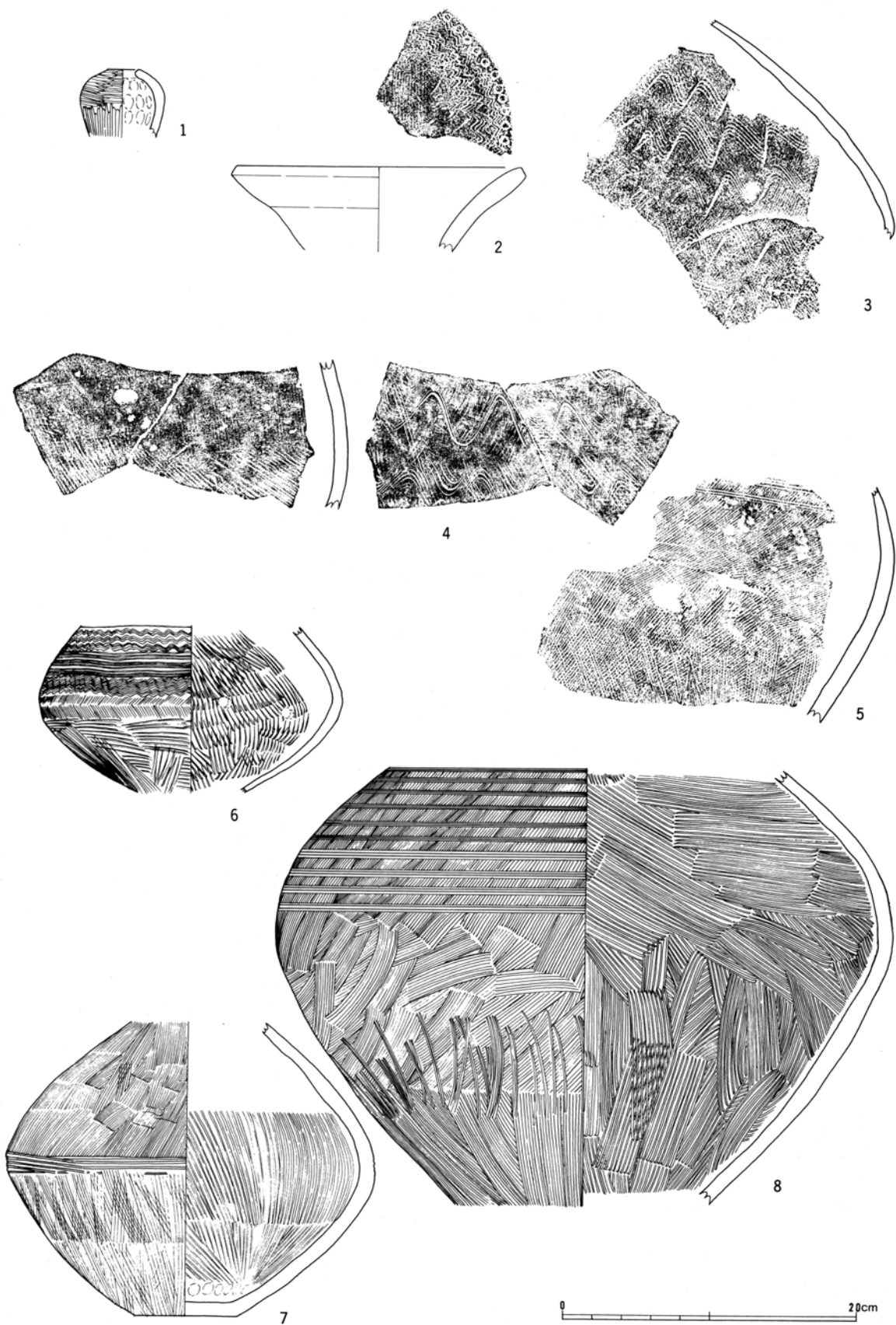
62F区NR01遗物出土状态图(1)(1 : 100)



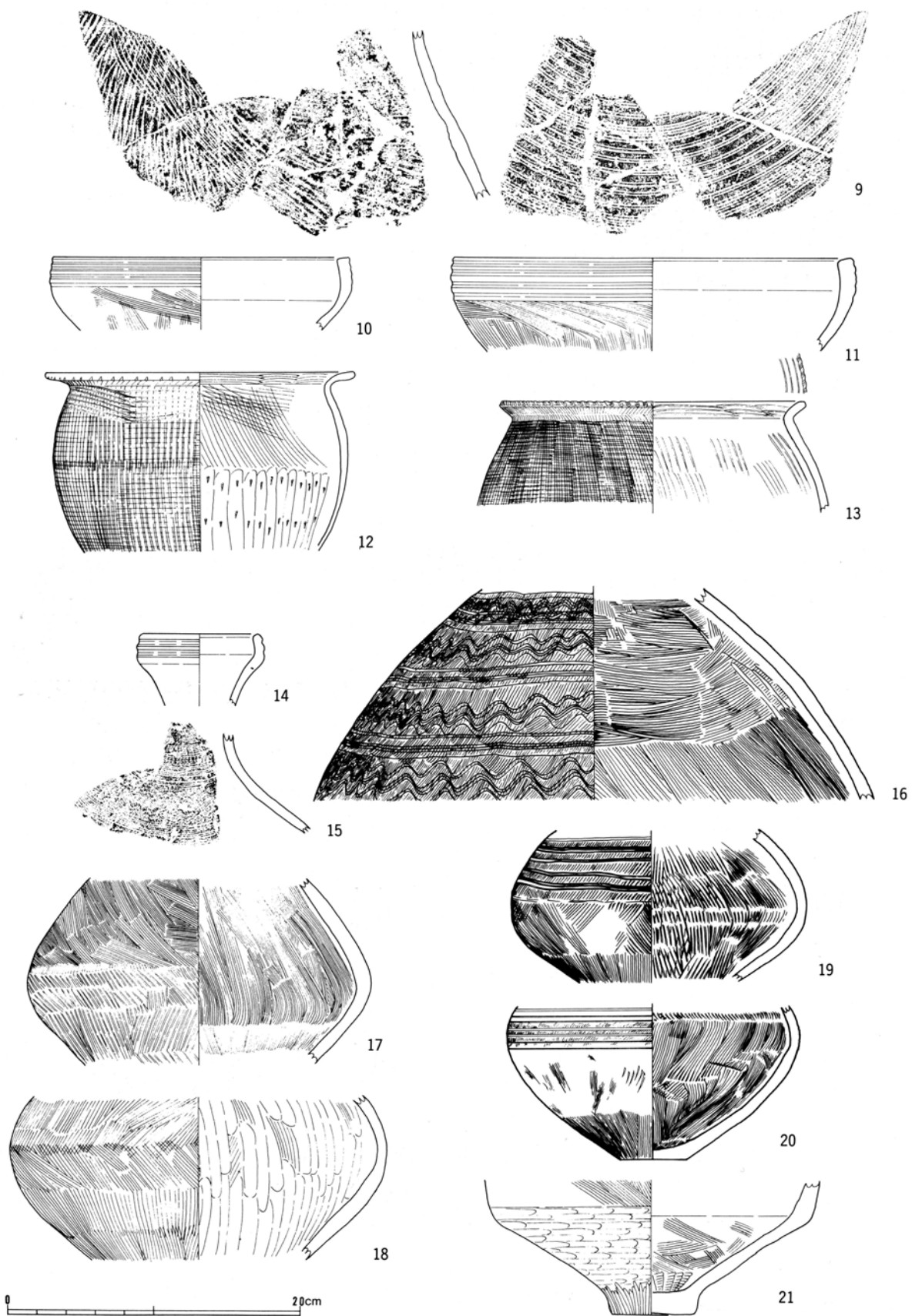
62F区NR01遺物出土状態図(2)(1 : 100)



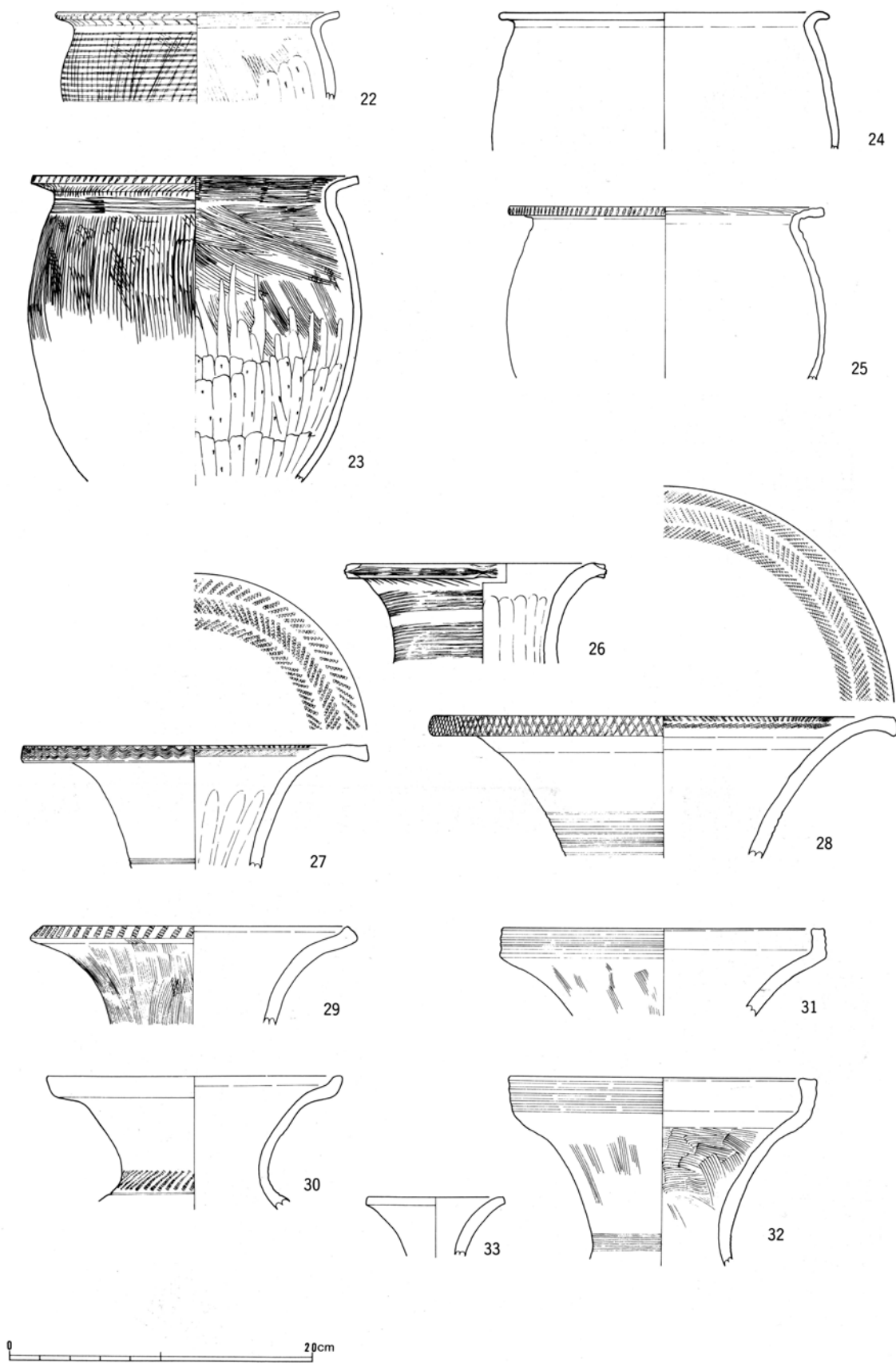
62F区NR01遺物出土状態図(3)(1 : 200)



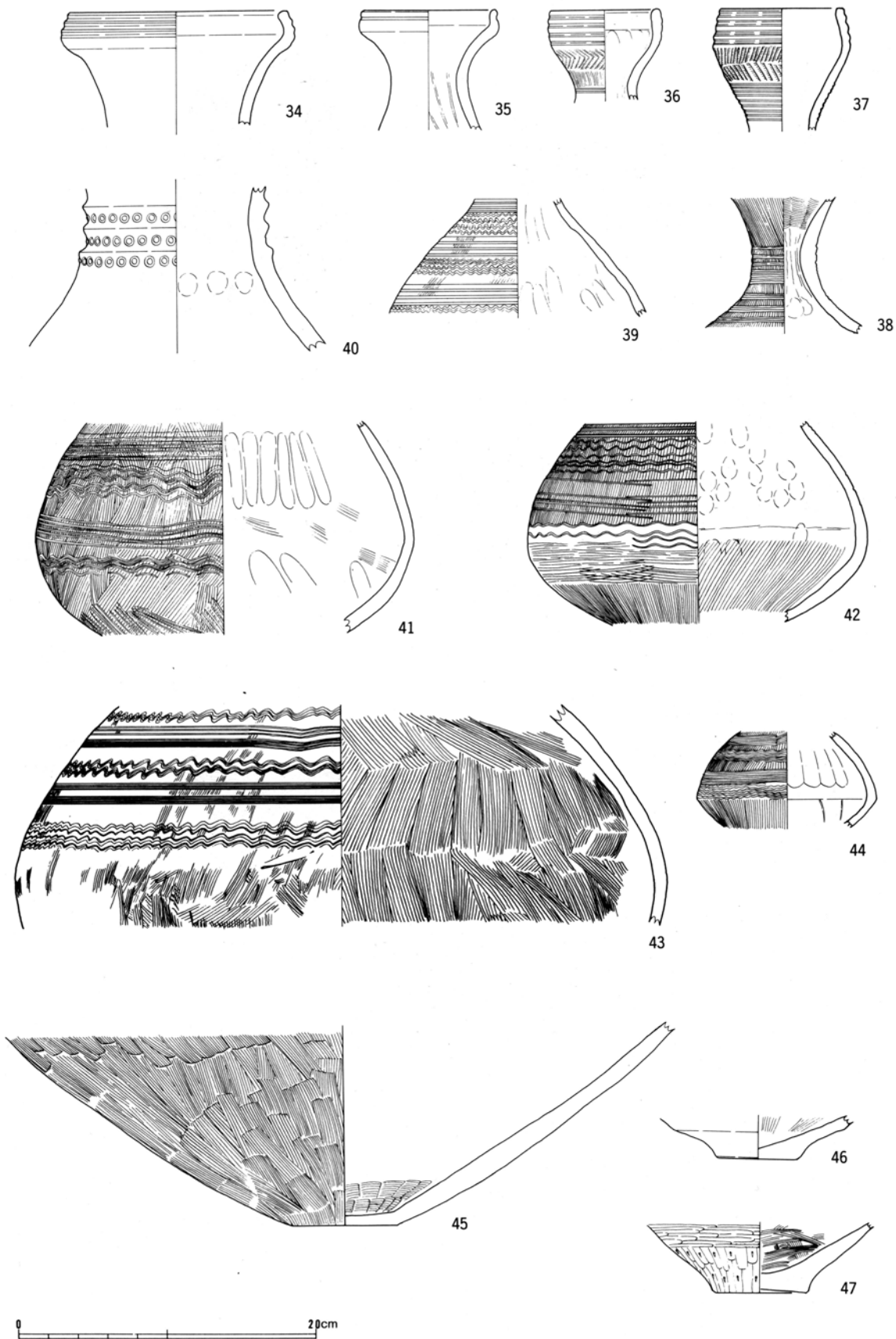
I期土器実測図(1) (1 : 4) SX01



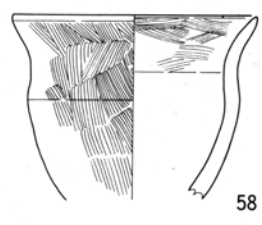
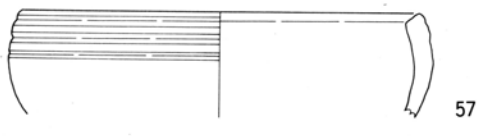
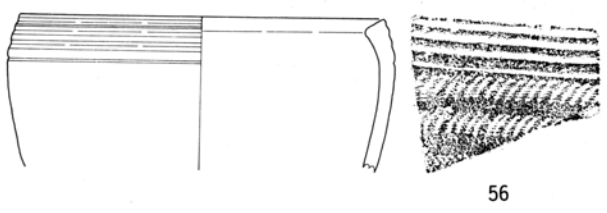
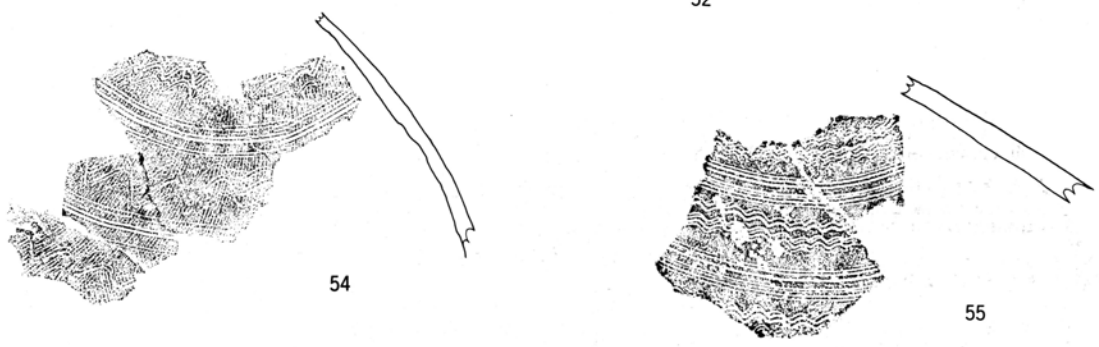
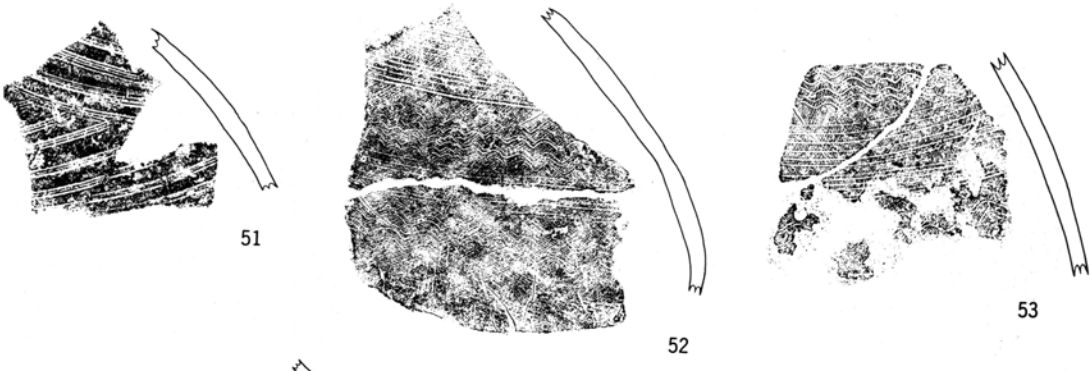
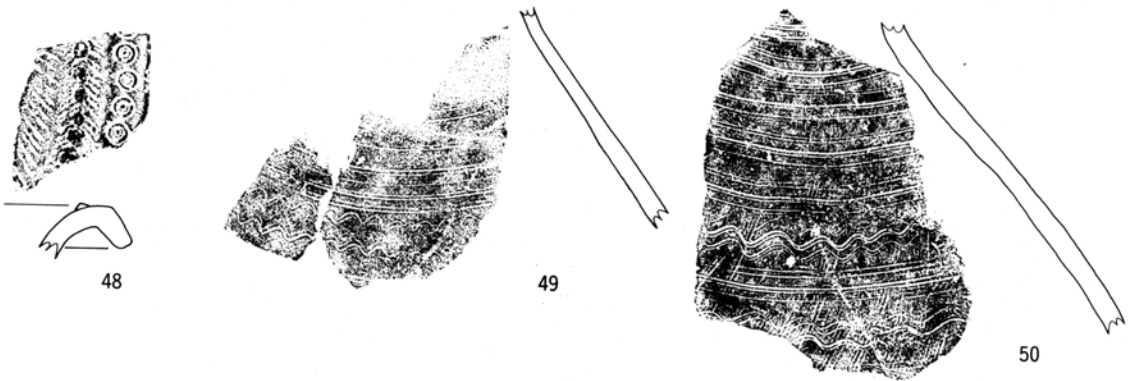
I期土器実測図(2) (1:4) 9~13 SX01 14~21 SD60下層



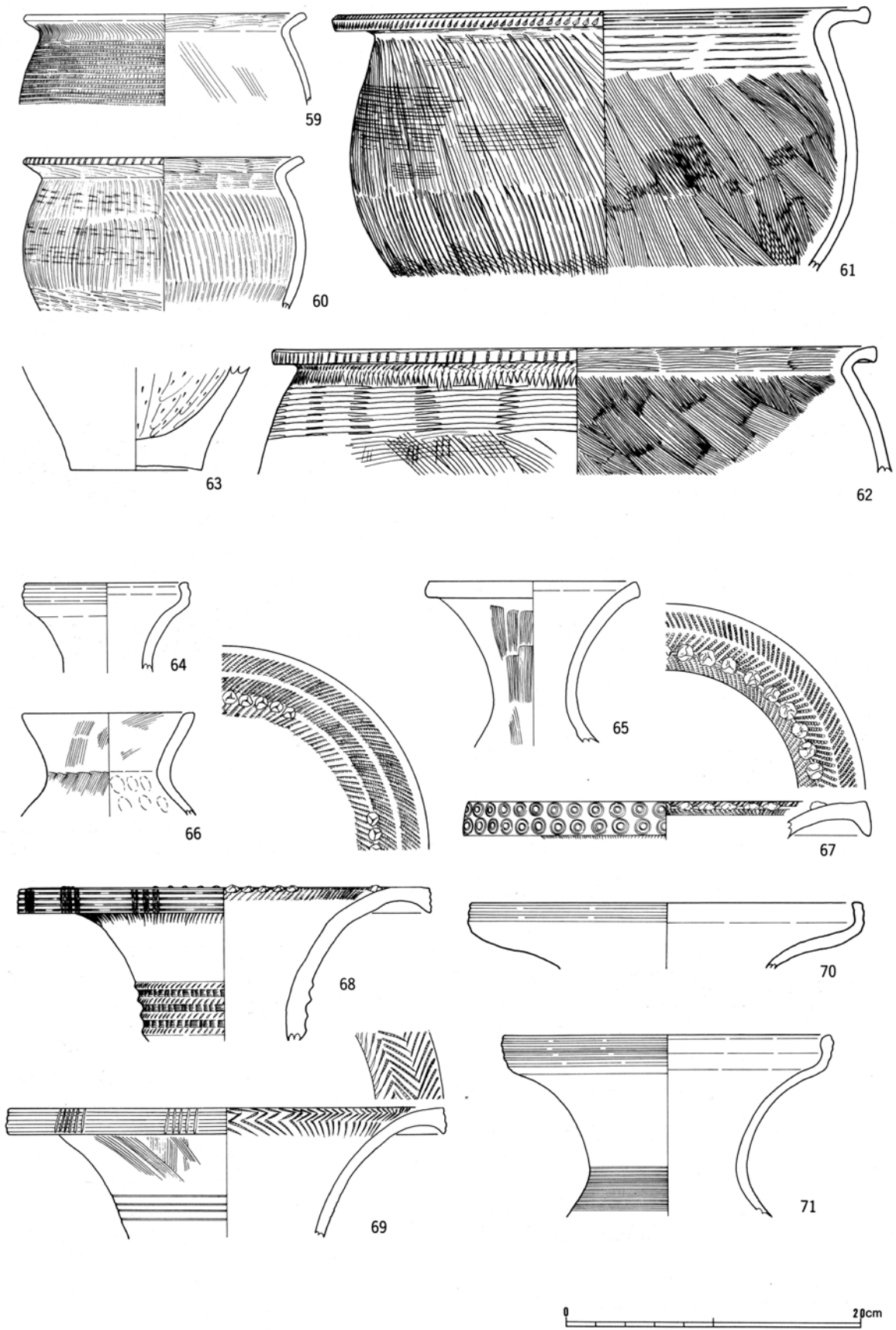
I 期土器実測図(3) (1 : 4) 22~25 SD60下層 26~32 SD60中層



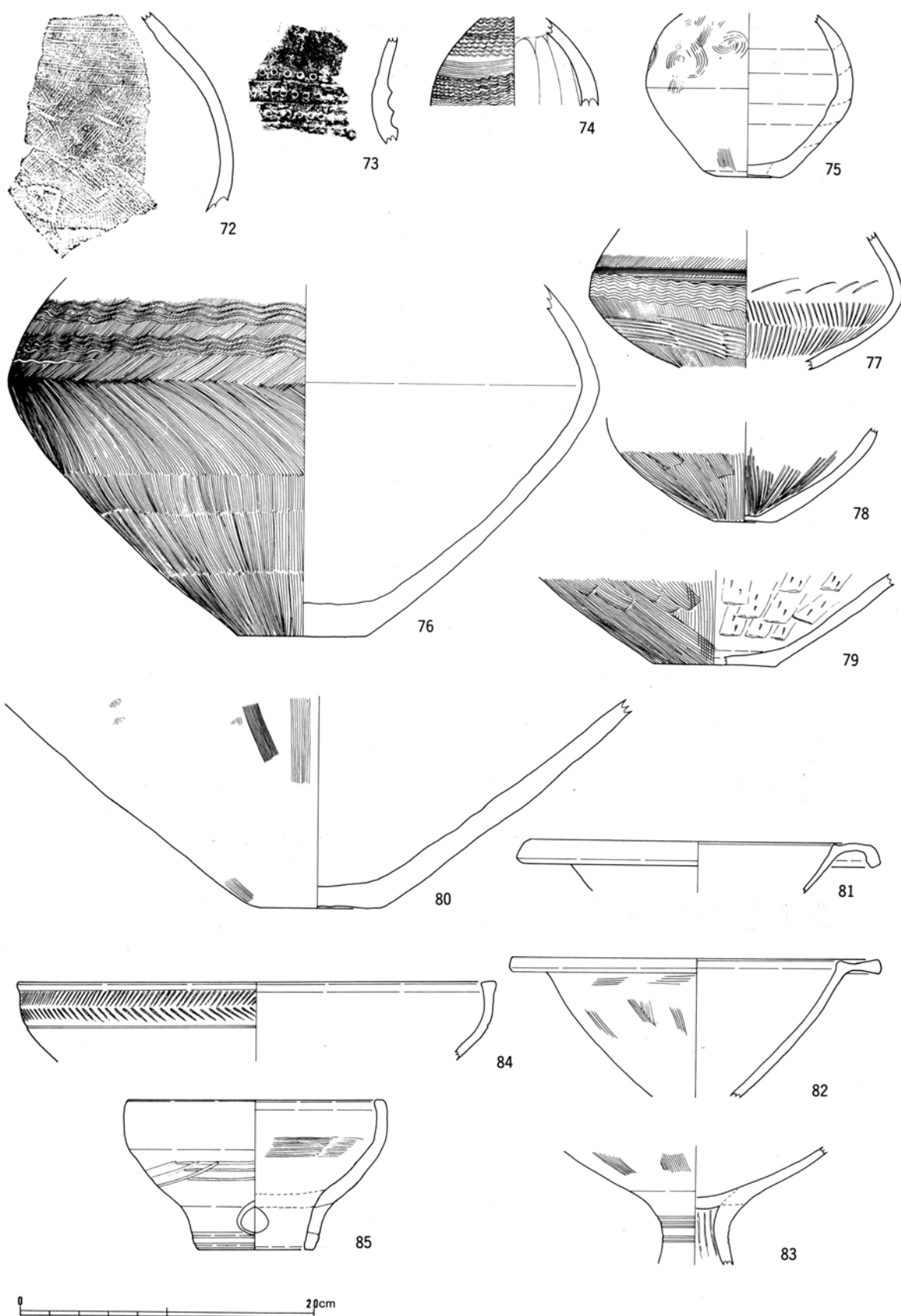
I 期土器実測図(4) (1 : 4) SD60中層



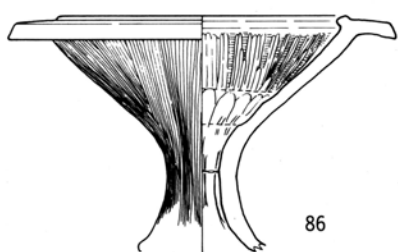
I 期土器実測図(5) (1 : 4) SD60中層



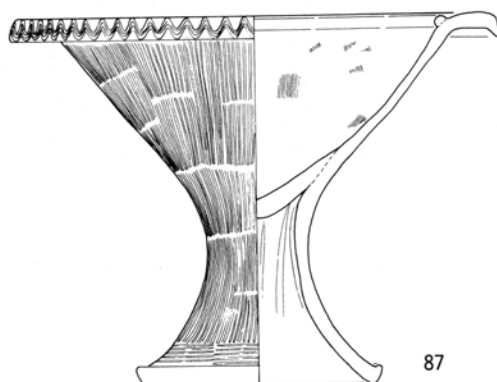
I 期土器実測図(6) (1 : 4) 59~63 SD60中層 64~71 SD60上層



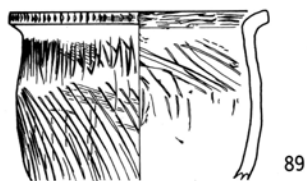
I期土器実測図(7) (1:4) SD60上層



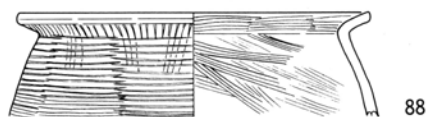
86



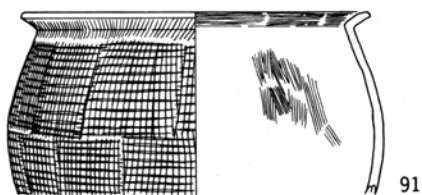
87



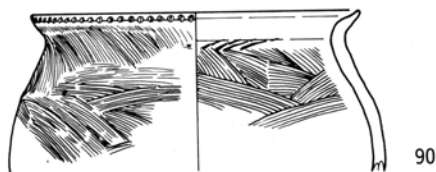
89



88



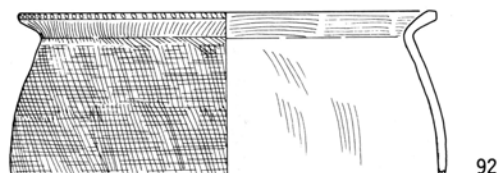
91



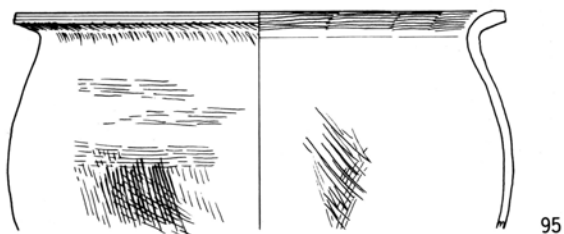
90



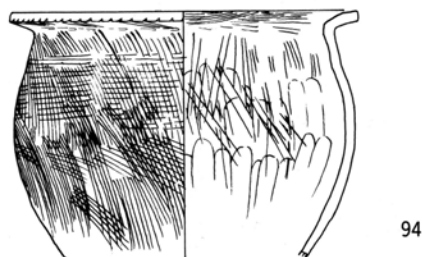
93



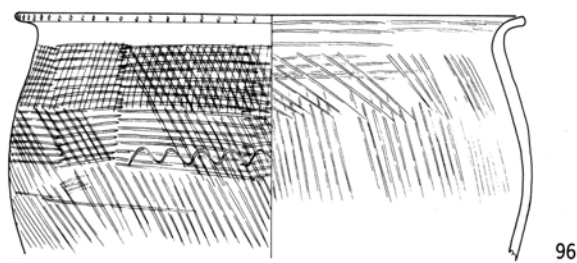
92



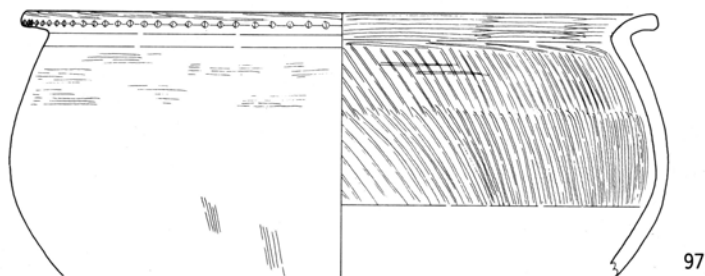
95



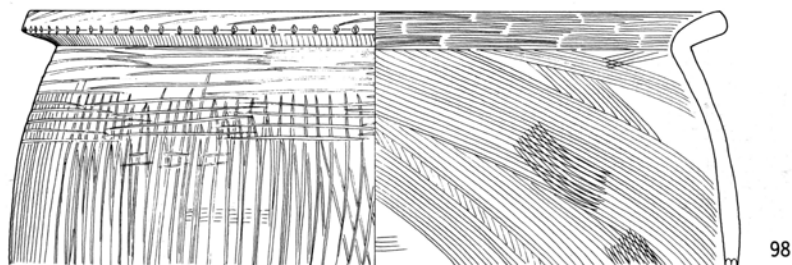
94



96



97



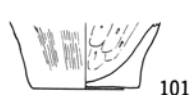
98



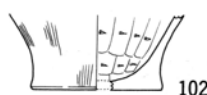
99



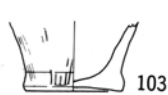
100



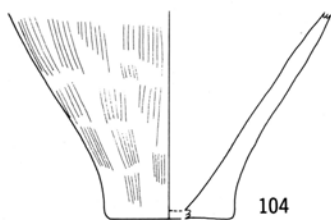
101



102



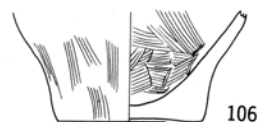
103



104



105



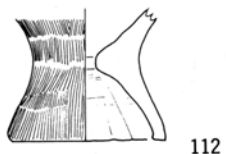
106



107



108



112



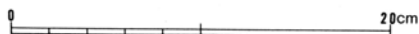
111



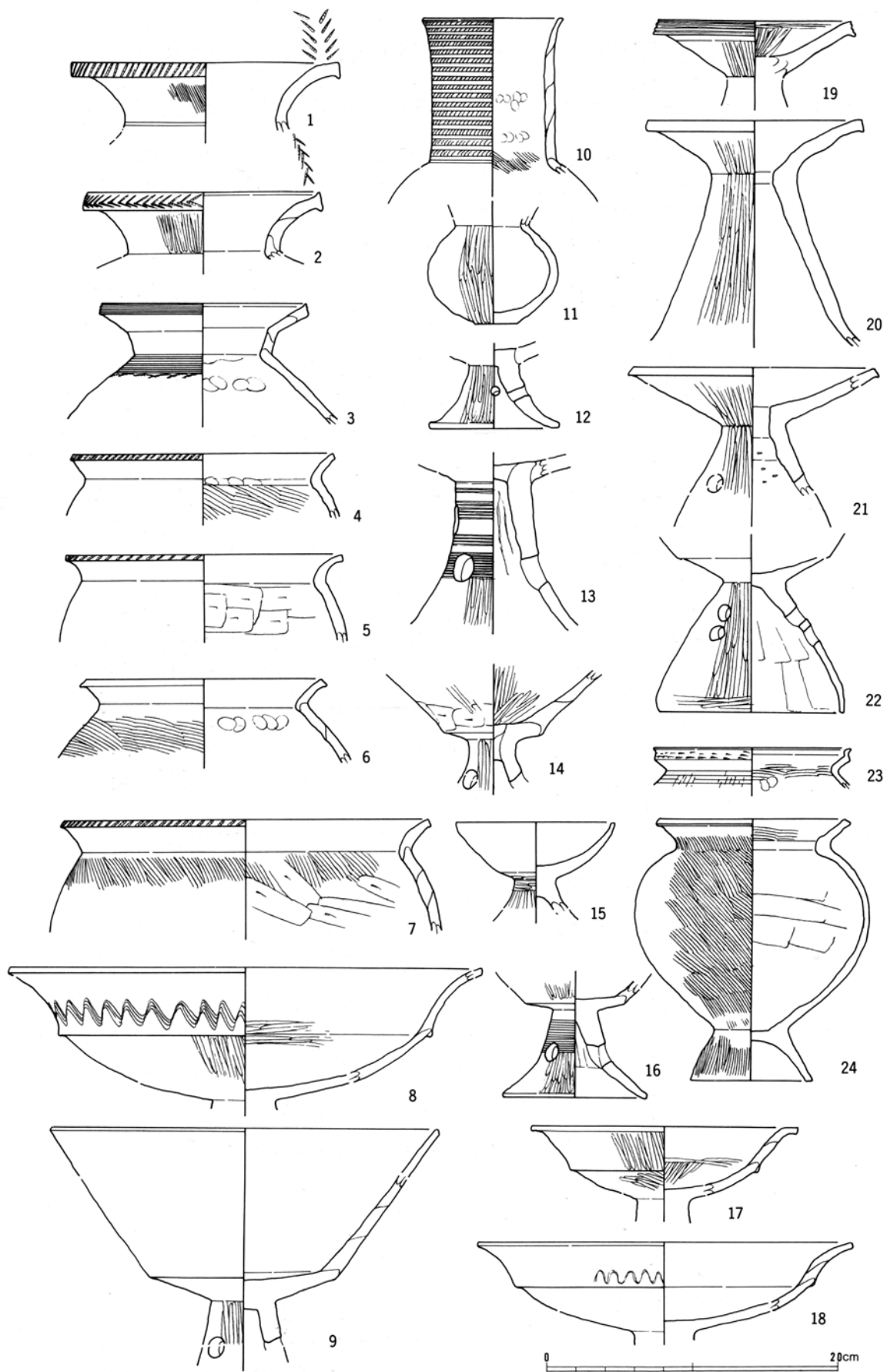
110



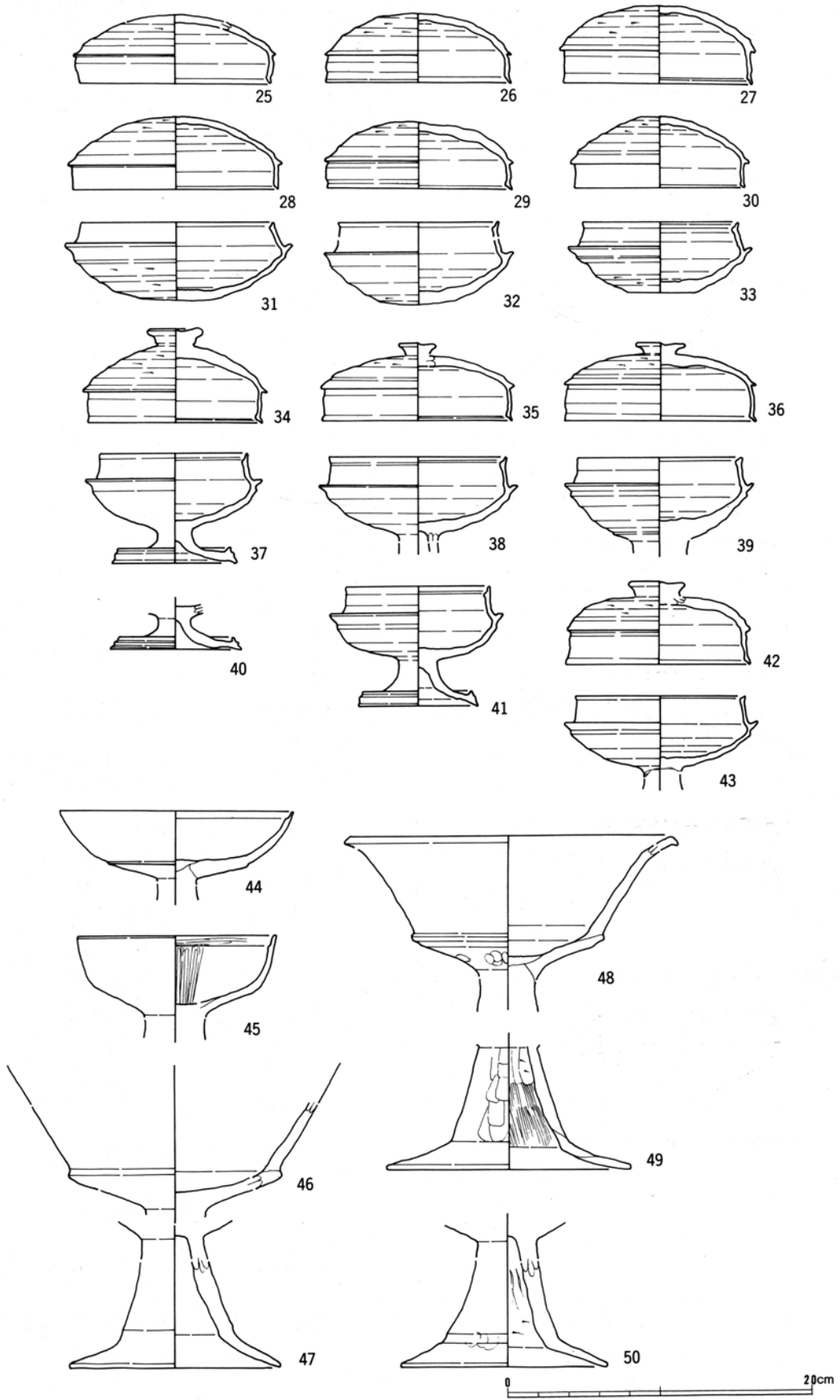
109



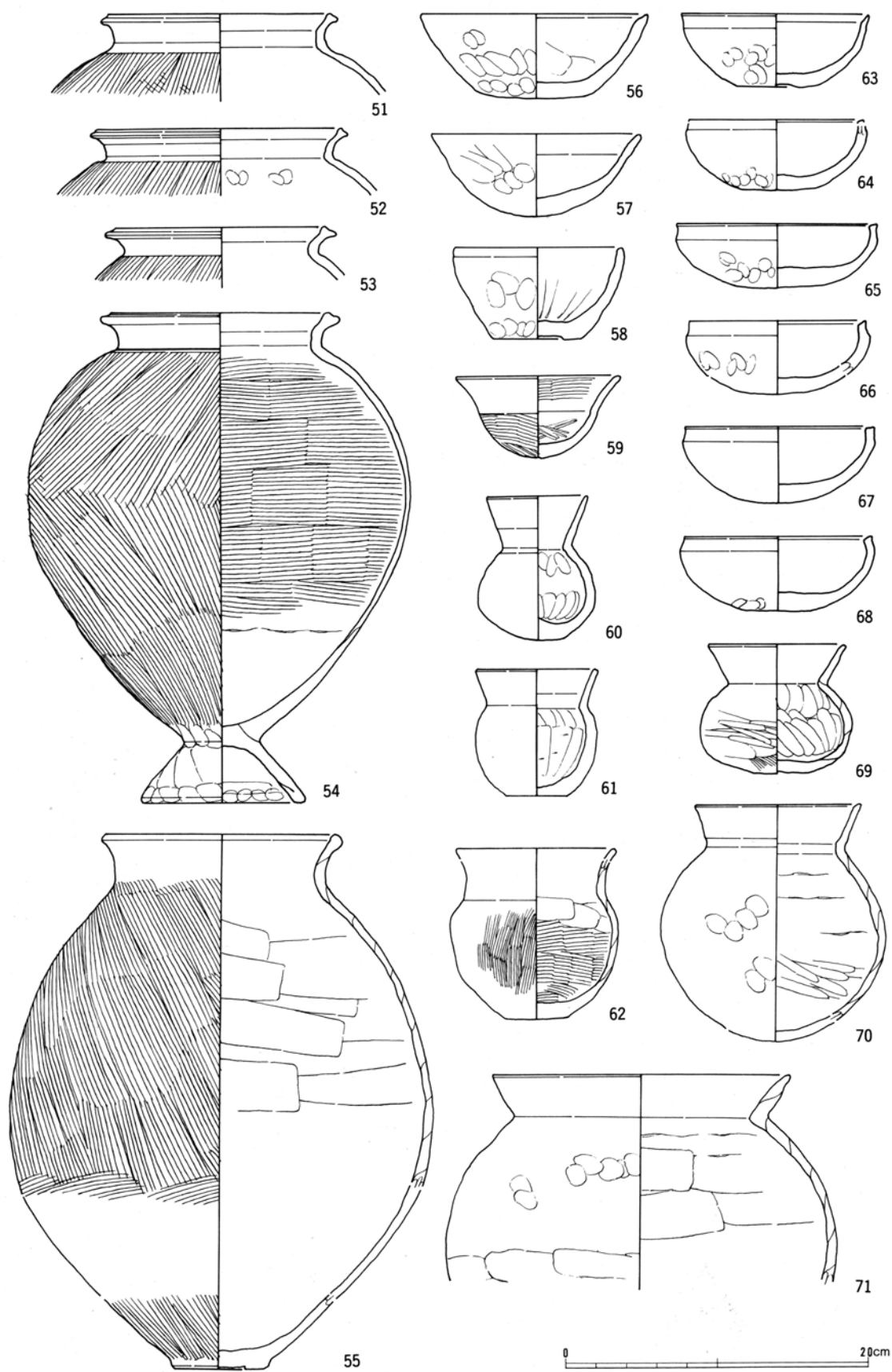
I 期土器实测图(9) (1 : 4) SD60上層



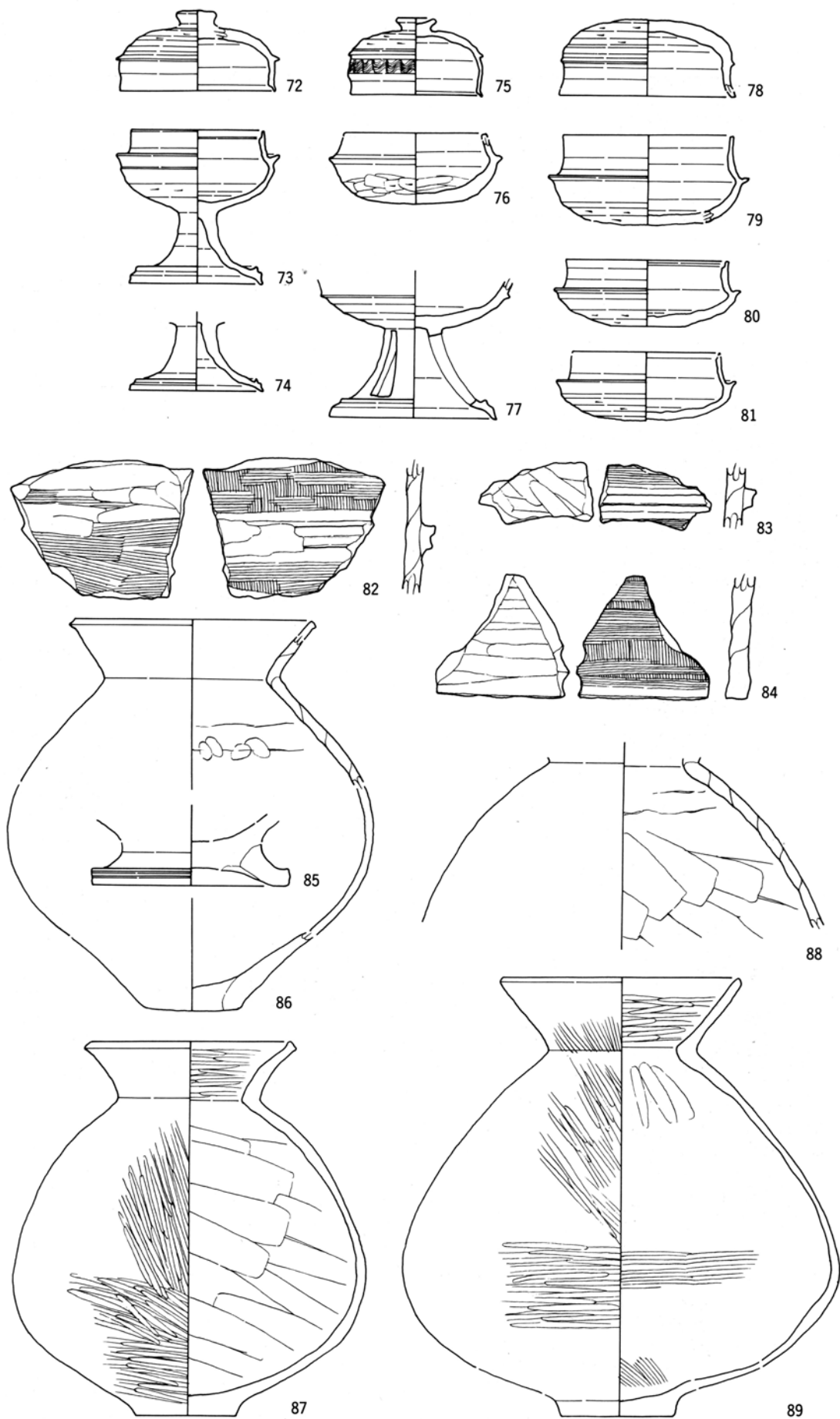
II期土器実測図(1) (1 : 4) 62F NR01



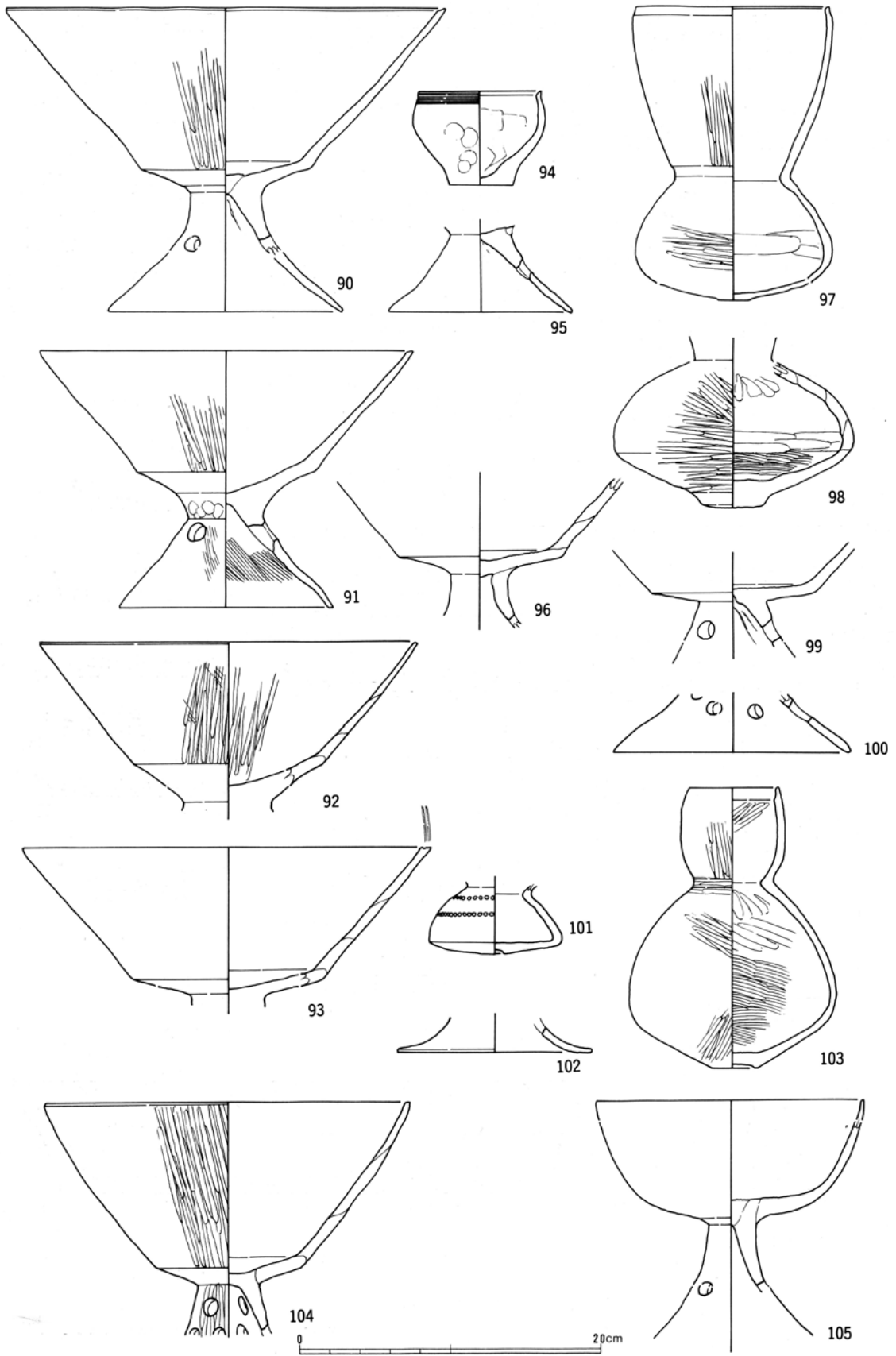
II期土器実測図(2) (1 : 4) 62F NR01



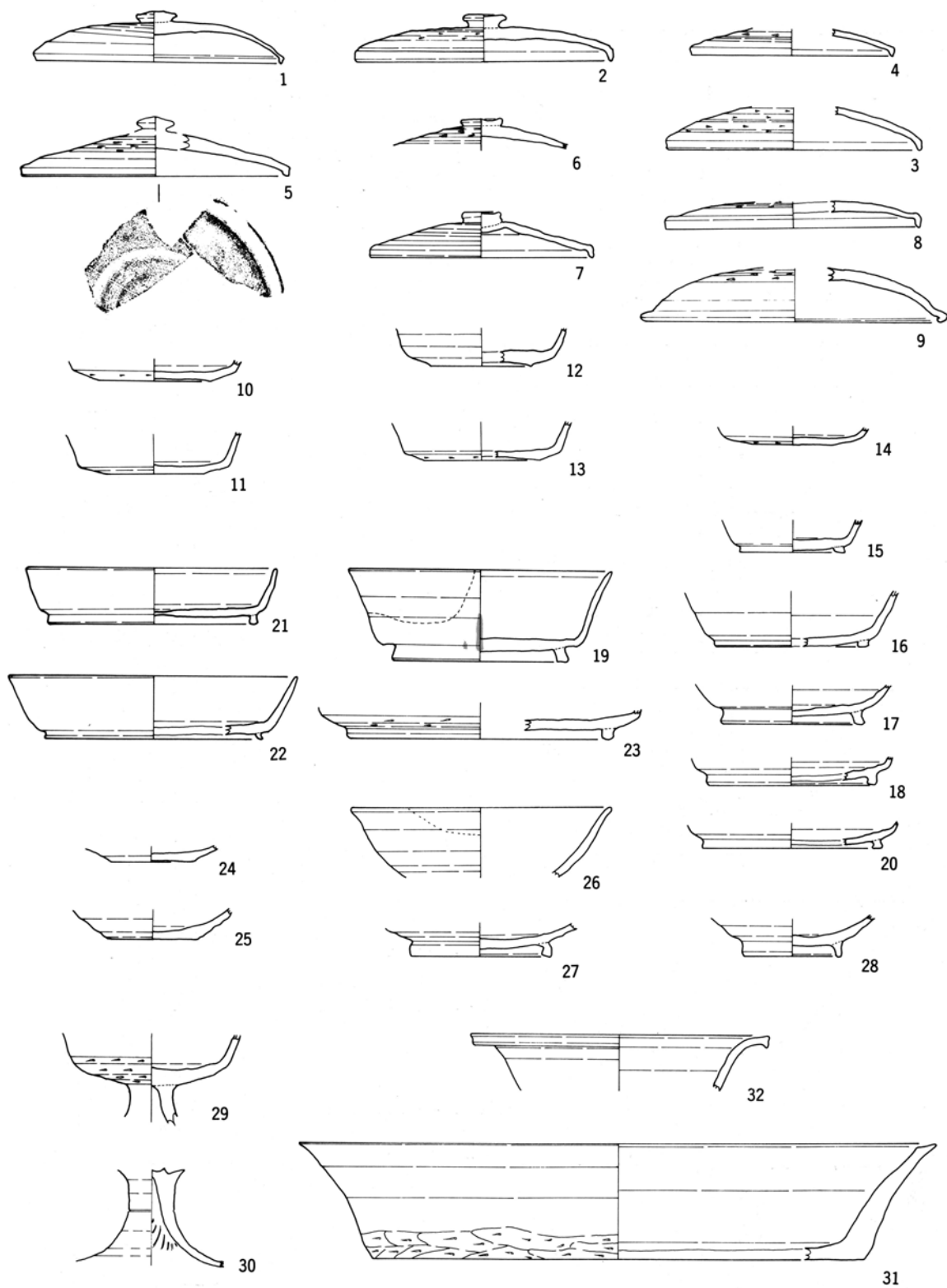
II期土器実測図(3) (1:4) 62F NR01



II期土器実測図(4) (1 : 4) 62F 72~84 NR01 63D 85~88 SZ02 89 SZ03

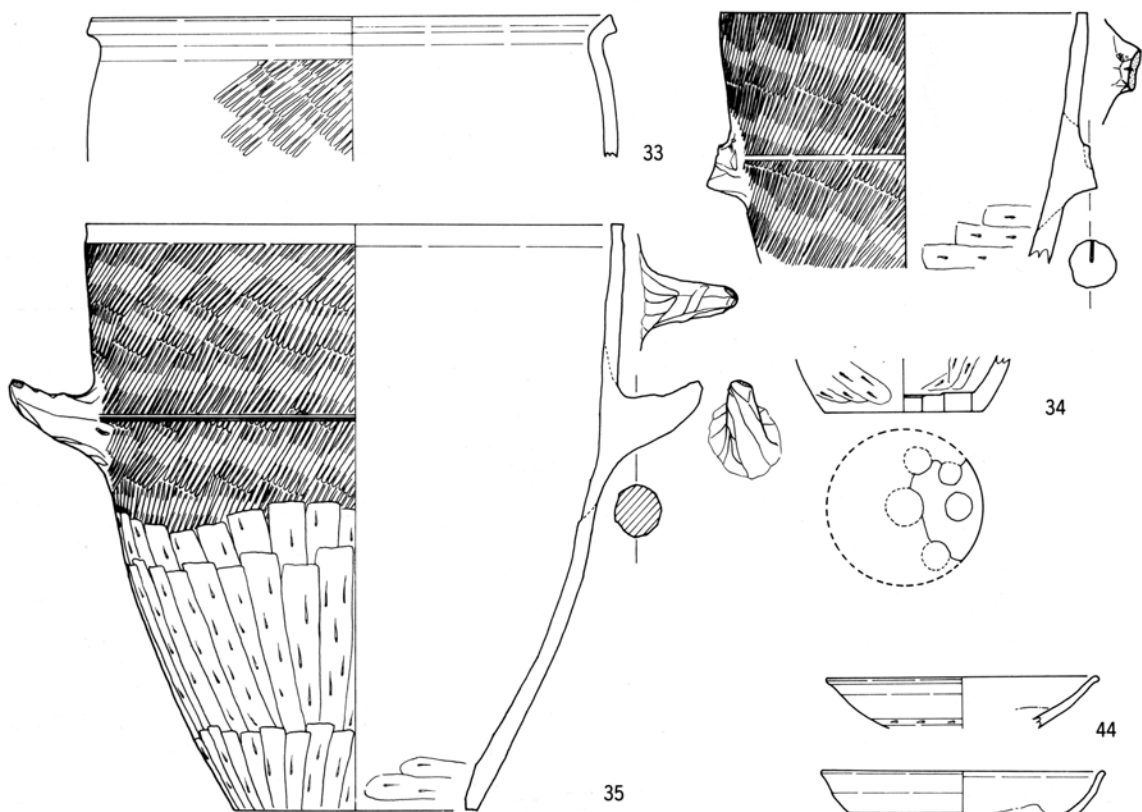


II期土器実測図(5) (1 : 4) 63D 90~100 SZ02 101・104 SZ03 102・103・105 SZ04

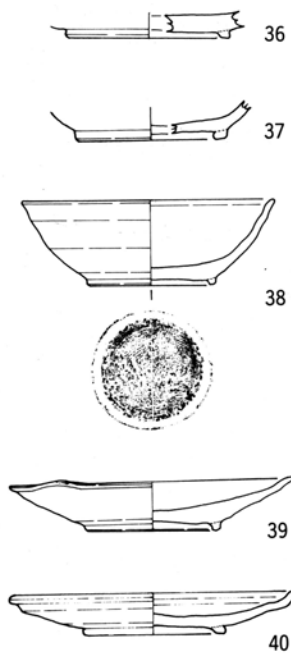


III期土器実測図(1) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点 I

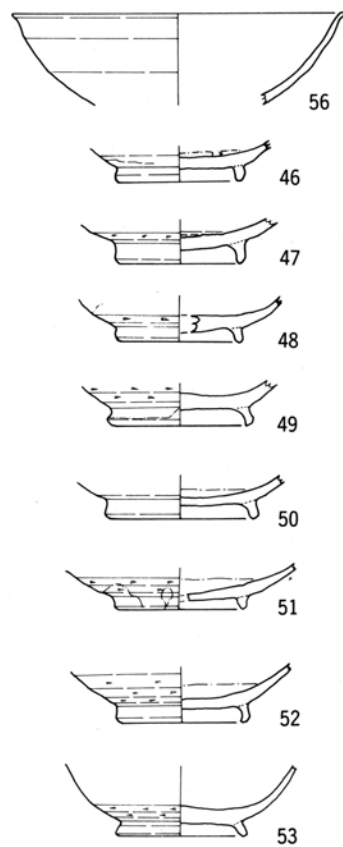
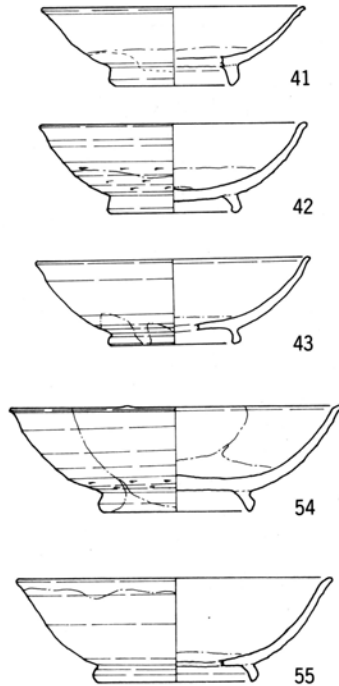
須惠器



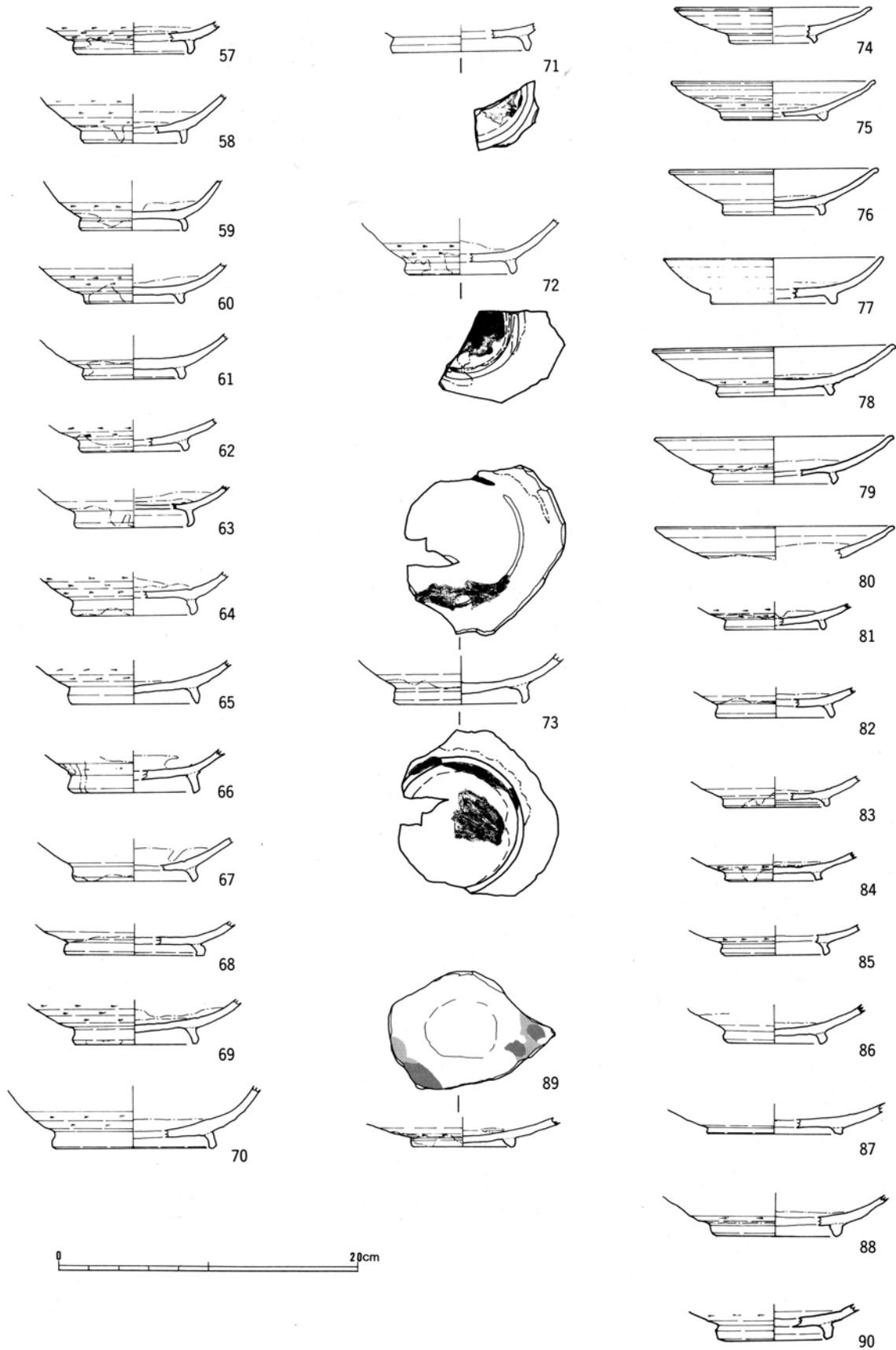
K-14



K-90

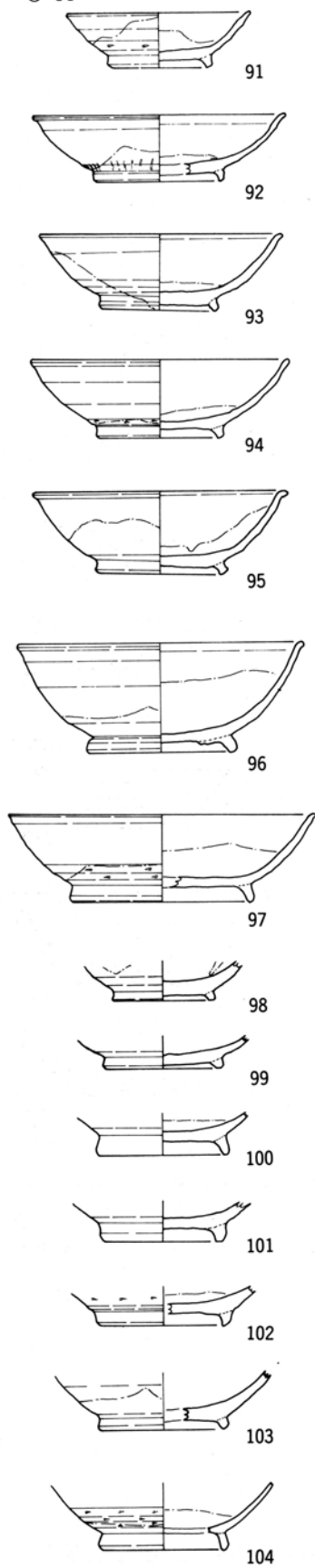


K-90

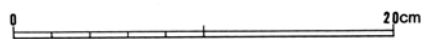
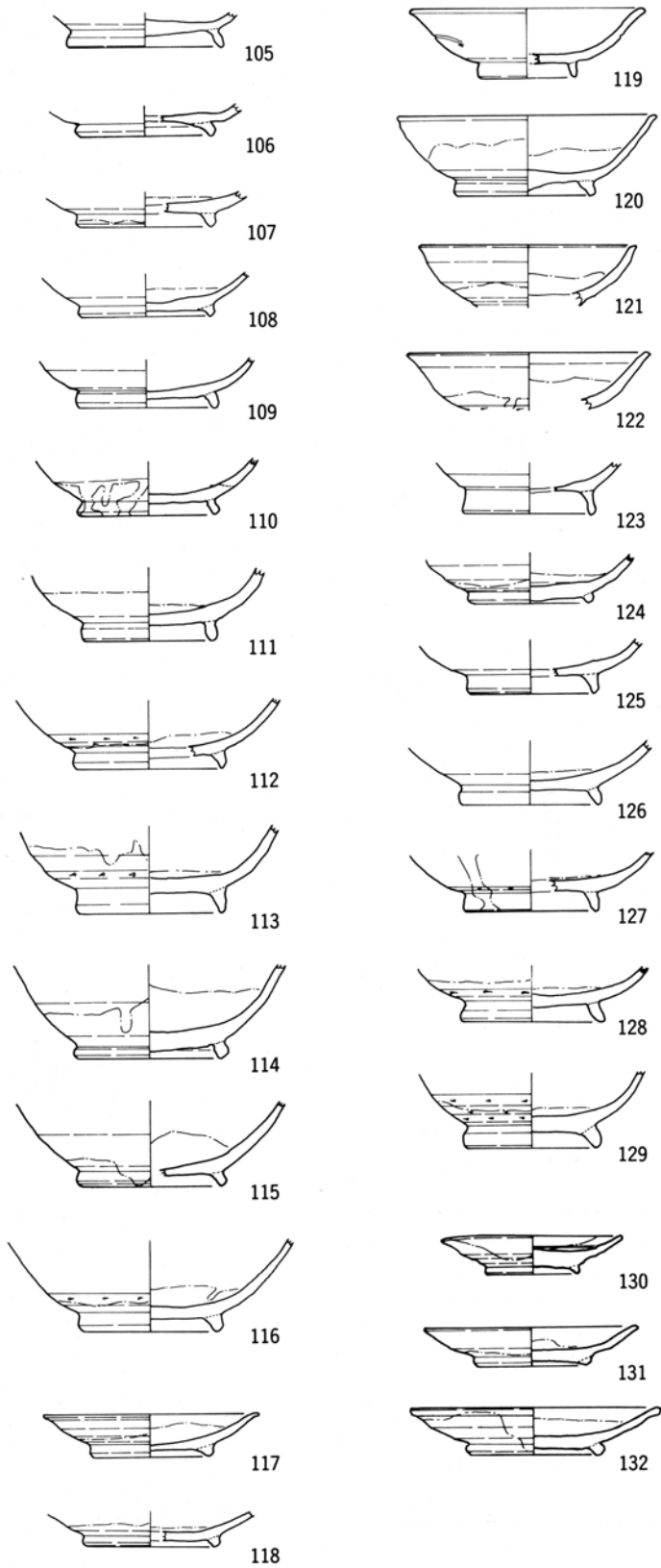


III期土器実測図(3) (1:4) 62F NR01 遺物集中地点 I

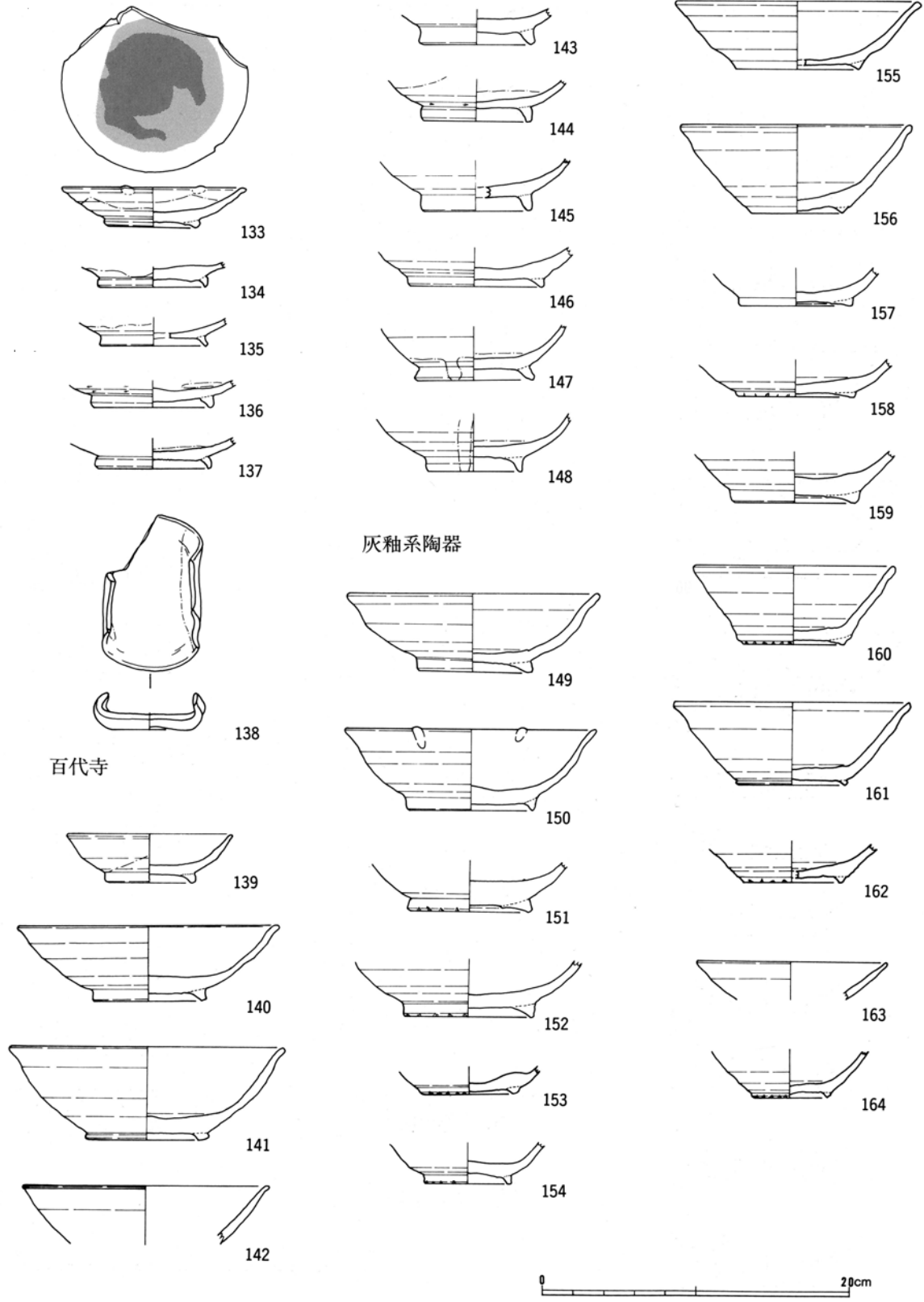
O-53



H-72



III期土器実測図(4) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点 I

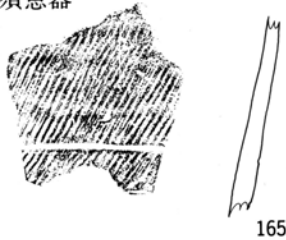


灰釉系陶器

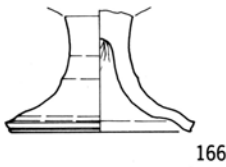
百代寺

III期土器実測図(5) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点 I

遺物集中地点 I と II の中間地点  
須恵器

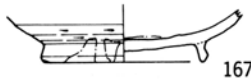


165



166

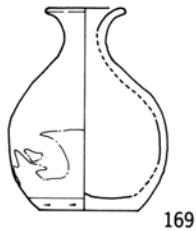
K-90



167

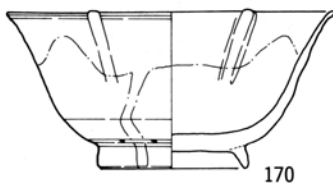


168



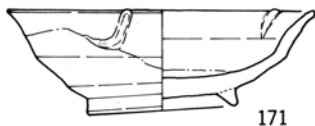
169

H-72



170

百代寺



171

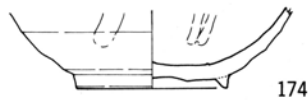


172



173

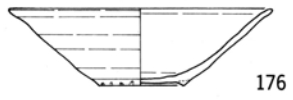
灰釉系陶器



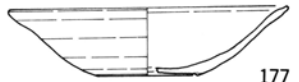
174



175



176

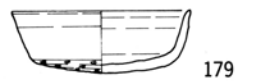


177

遺物集中地点 II  
須恵器



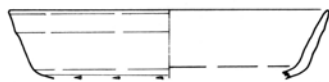
178



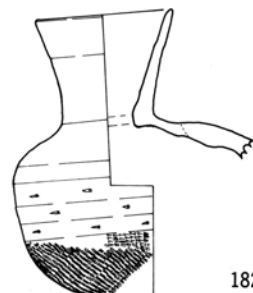
179



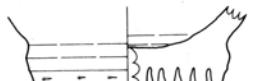
180



181



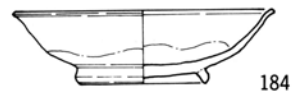
182



183



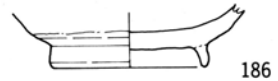
K-90



184



185



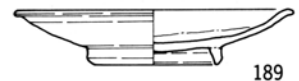
186



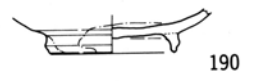
187



188



189

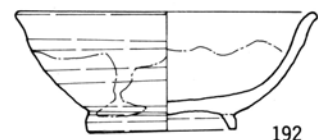


190

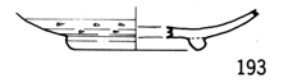
O-53



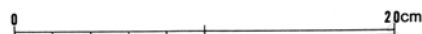
191



192

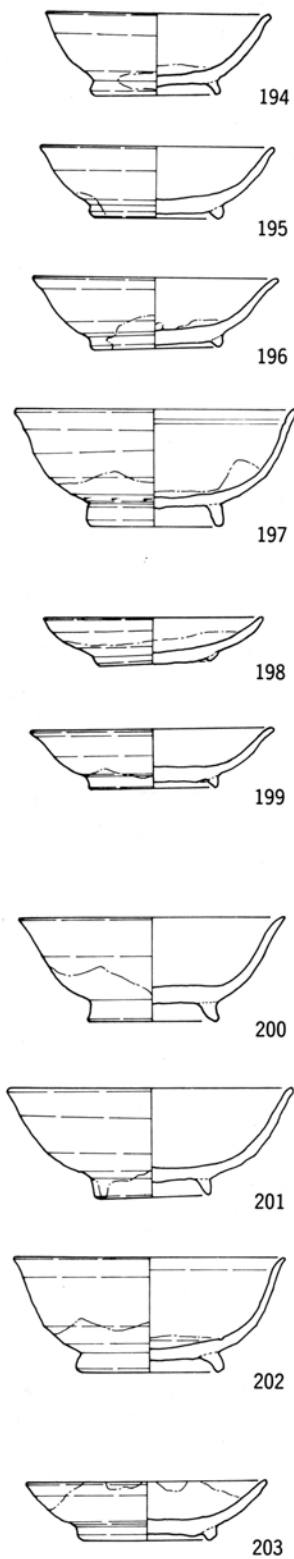


193

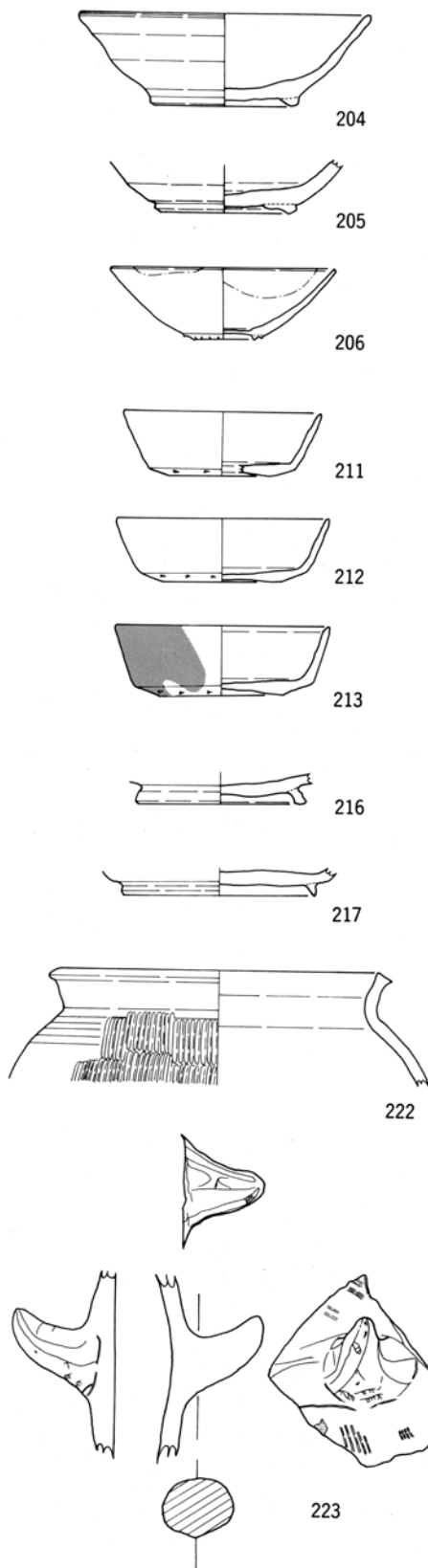


III期土器実測図(6) (1 : 4) 62F NR01 165~177 遺物集中地点 I と II の中間地点 178~193 遺物集中地点 II

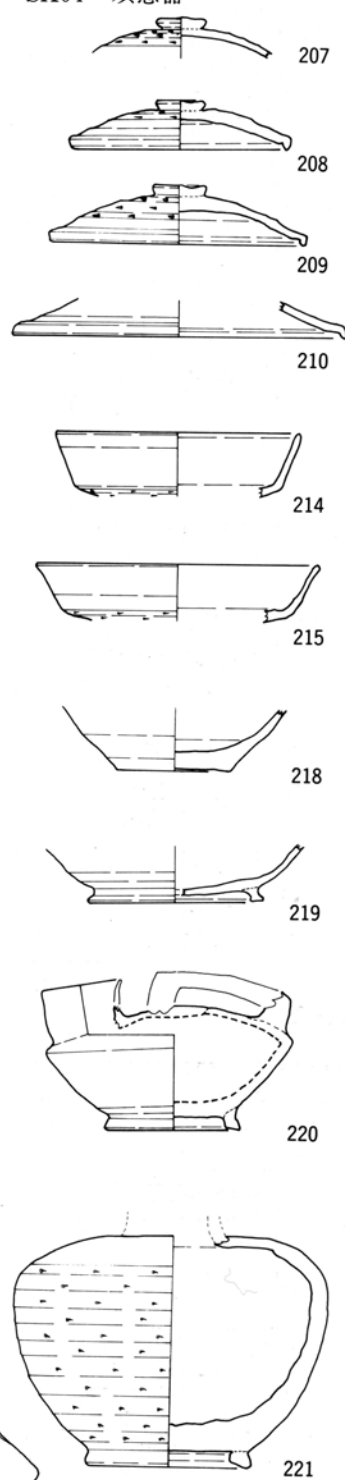
H-72



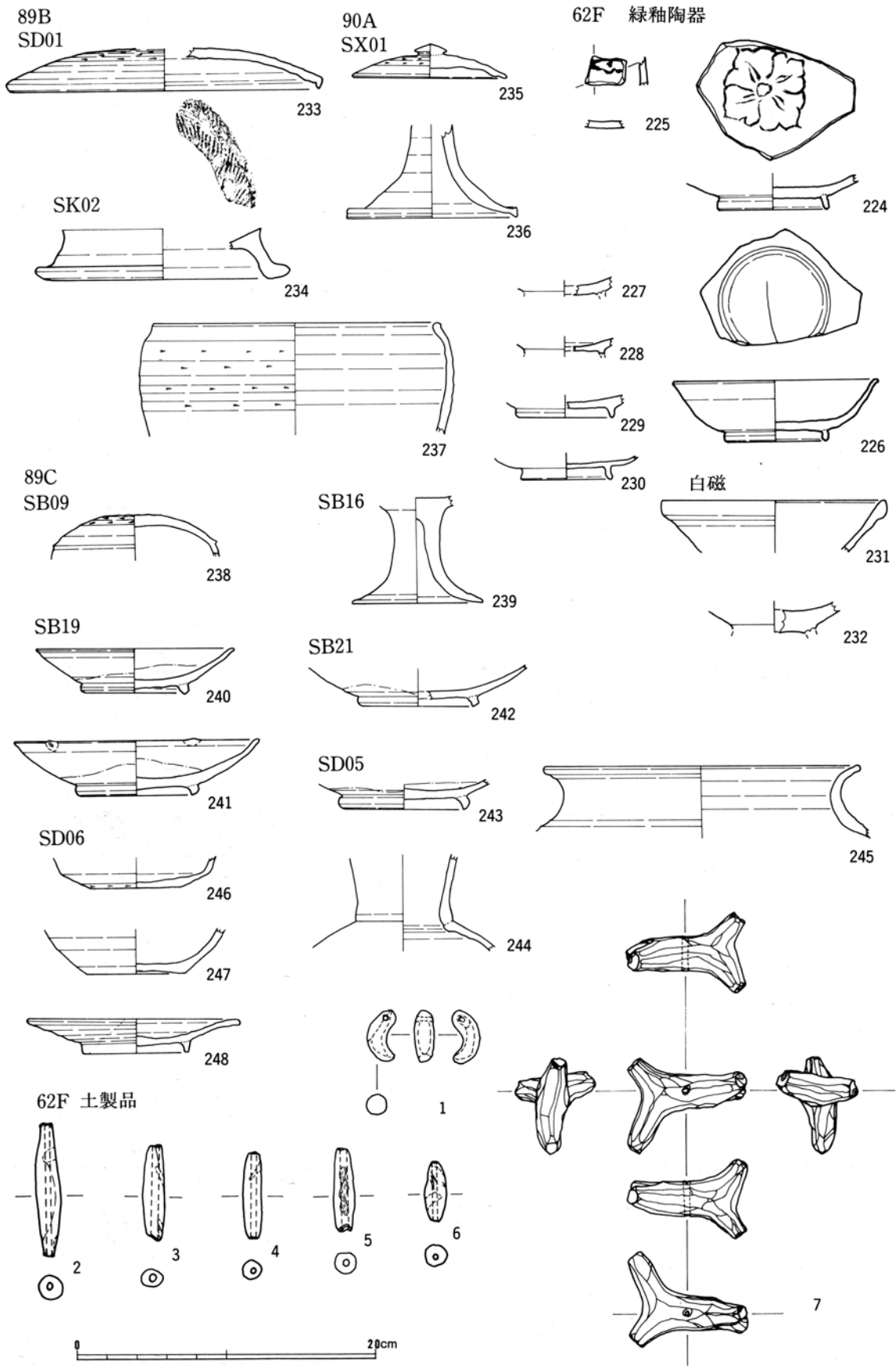
灰釉系陶器



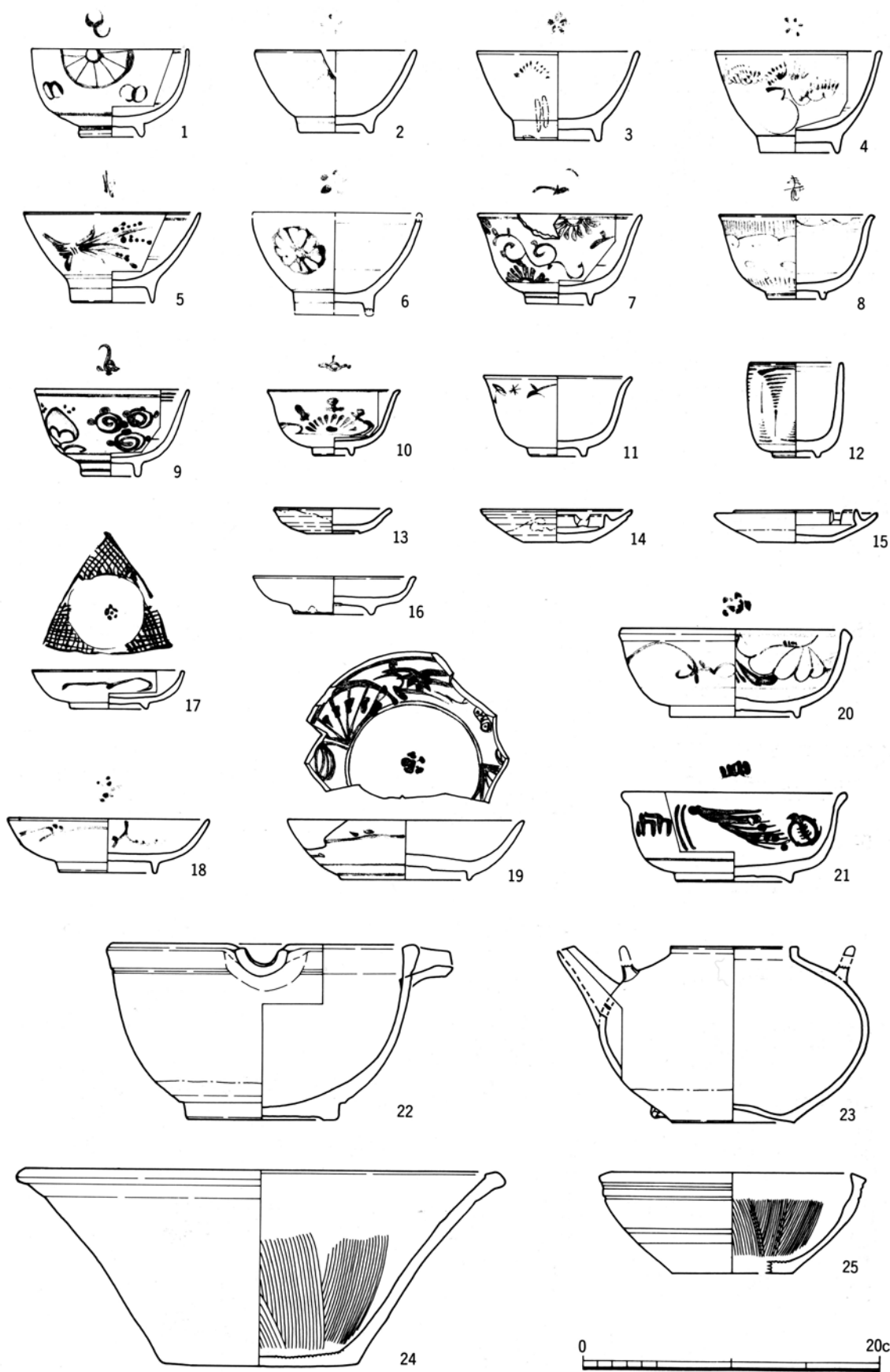
SX04 須恵器



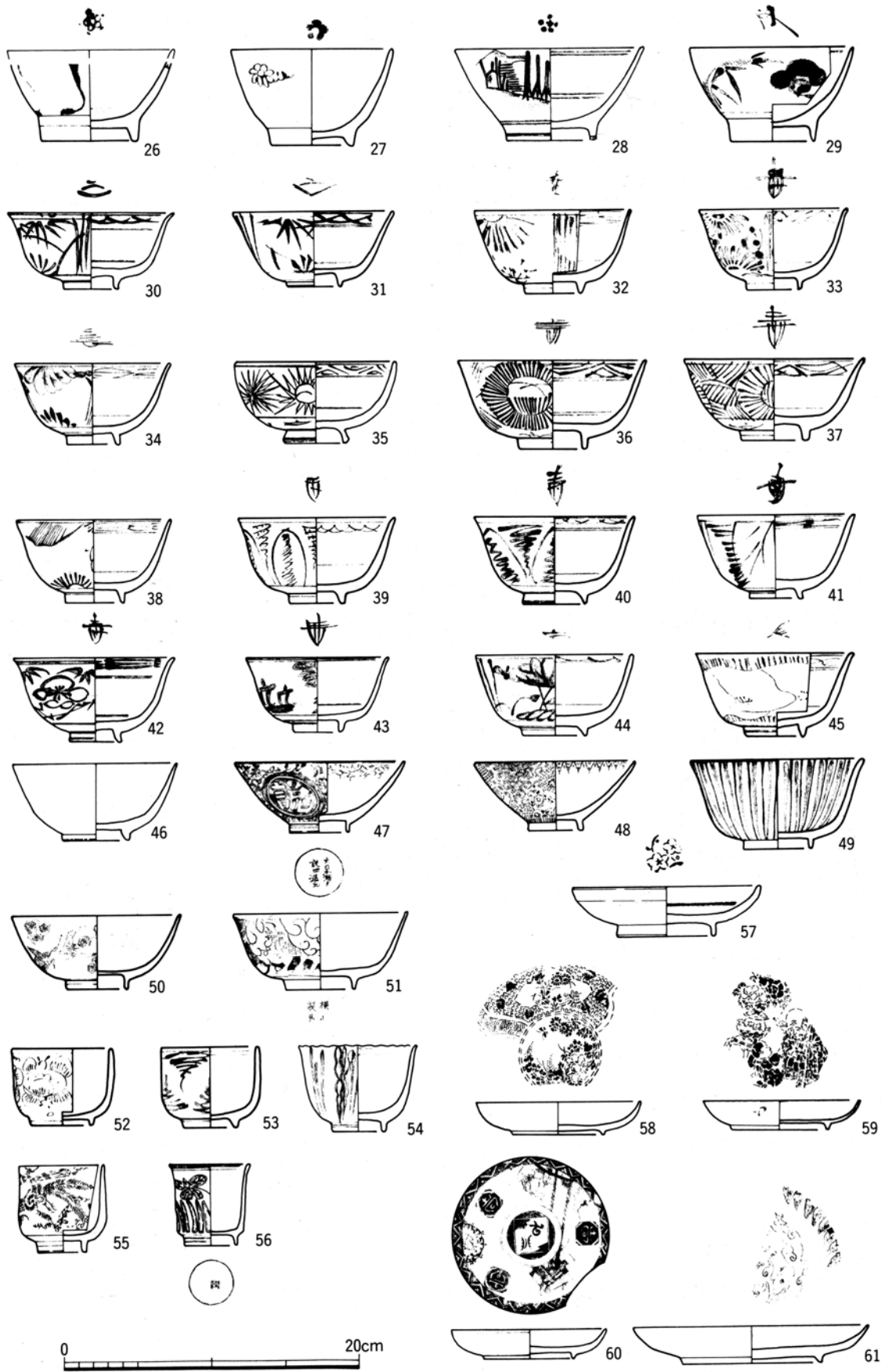
III期土器実測図(7) (1 : 4) 62F NR01 194~206 遺物集中地点II 207~223 SX04



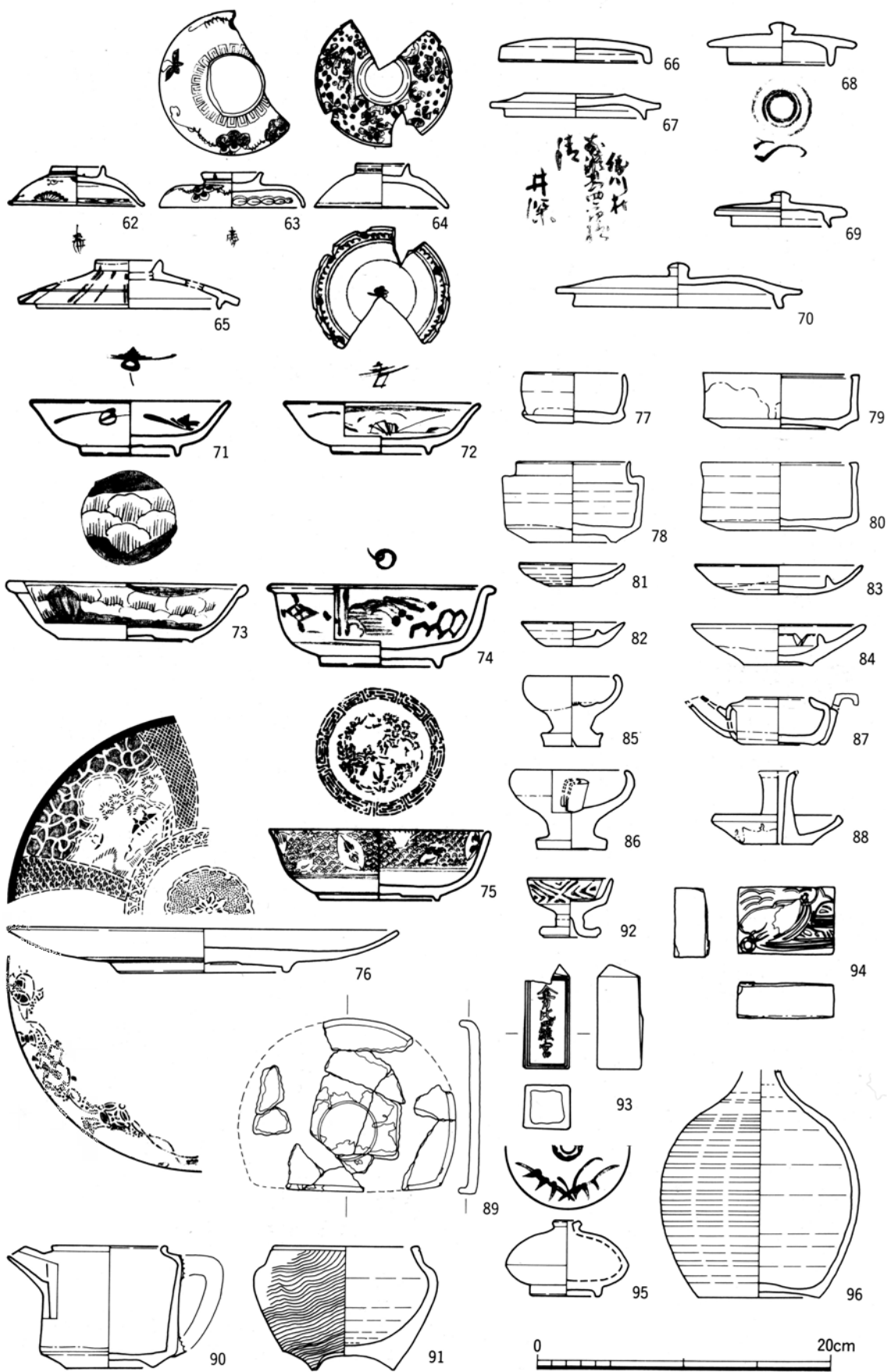
III期土器実測図(8) (1 : 4) 224~232 62F 233・234 89B 235~237 90A 238~248 89C  
 土製品実測図 (1 : 4) 1~7 62F NR01



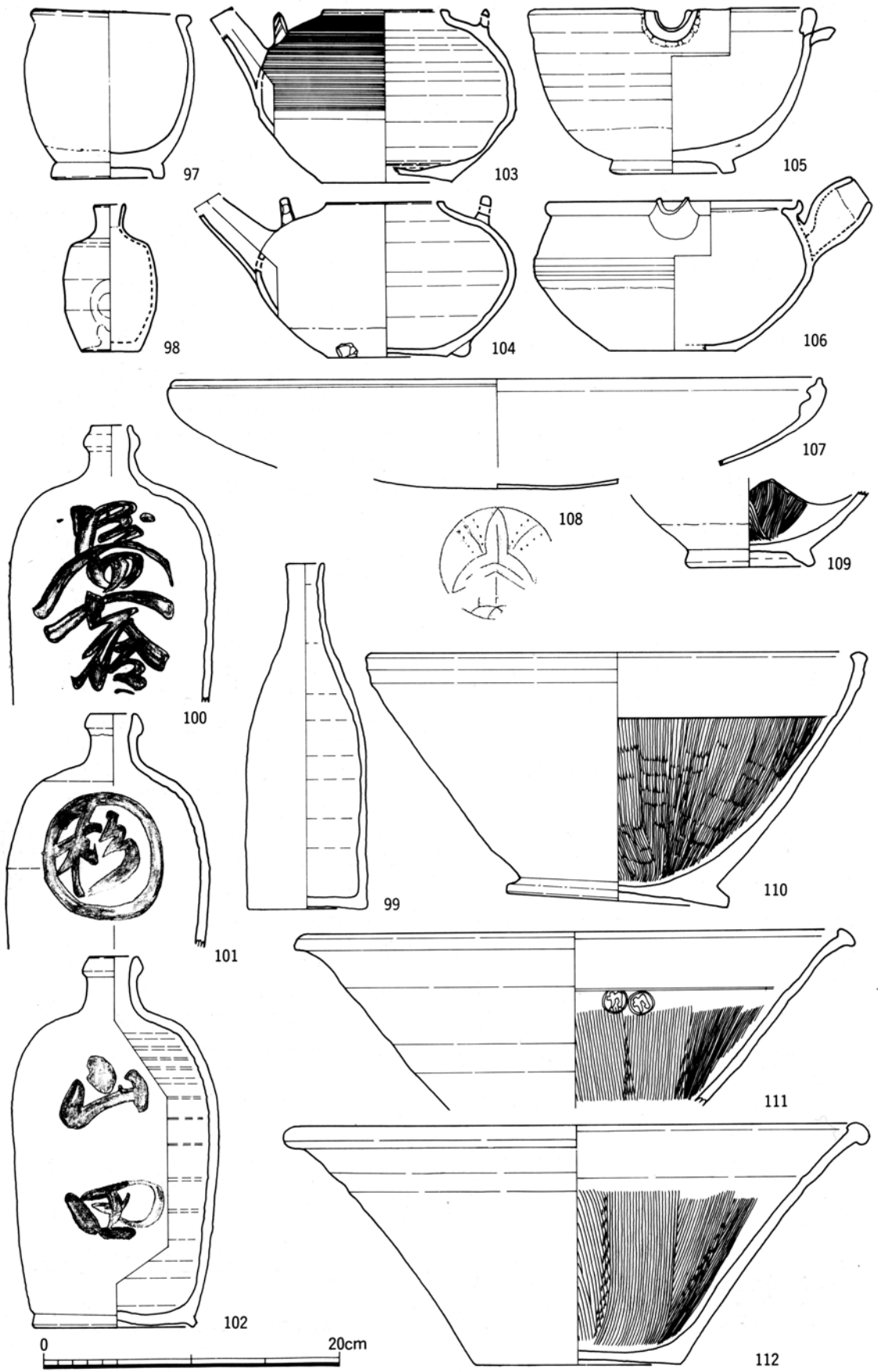
IV期土器・陶磁器実測図(1) (1 : 4)



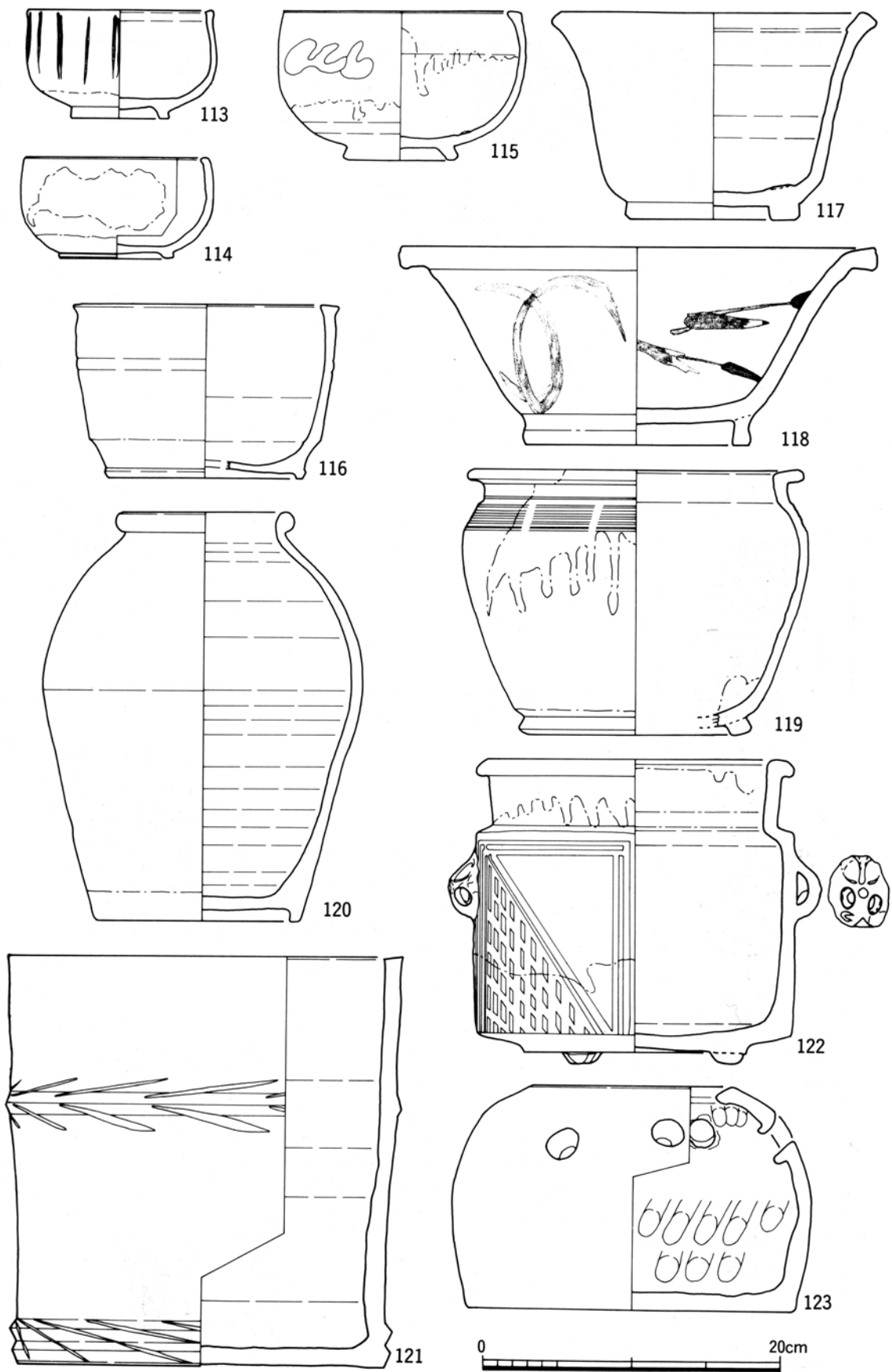
IV期土器・陶磁器実測図(2) (1 : 4)



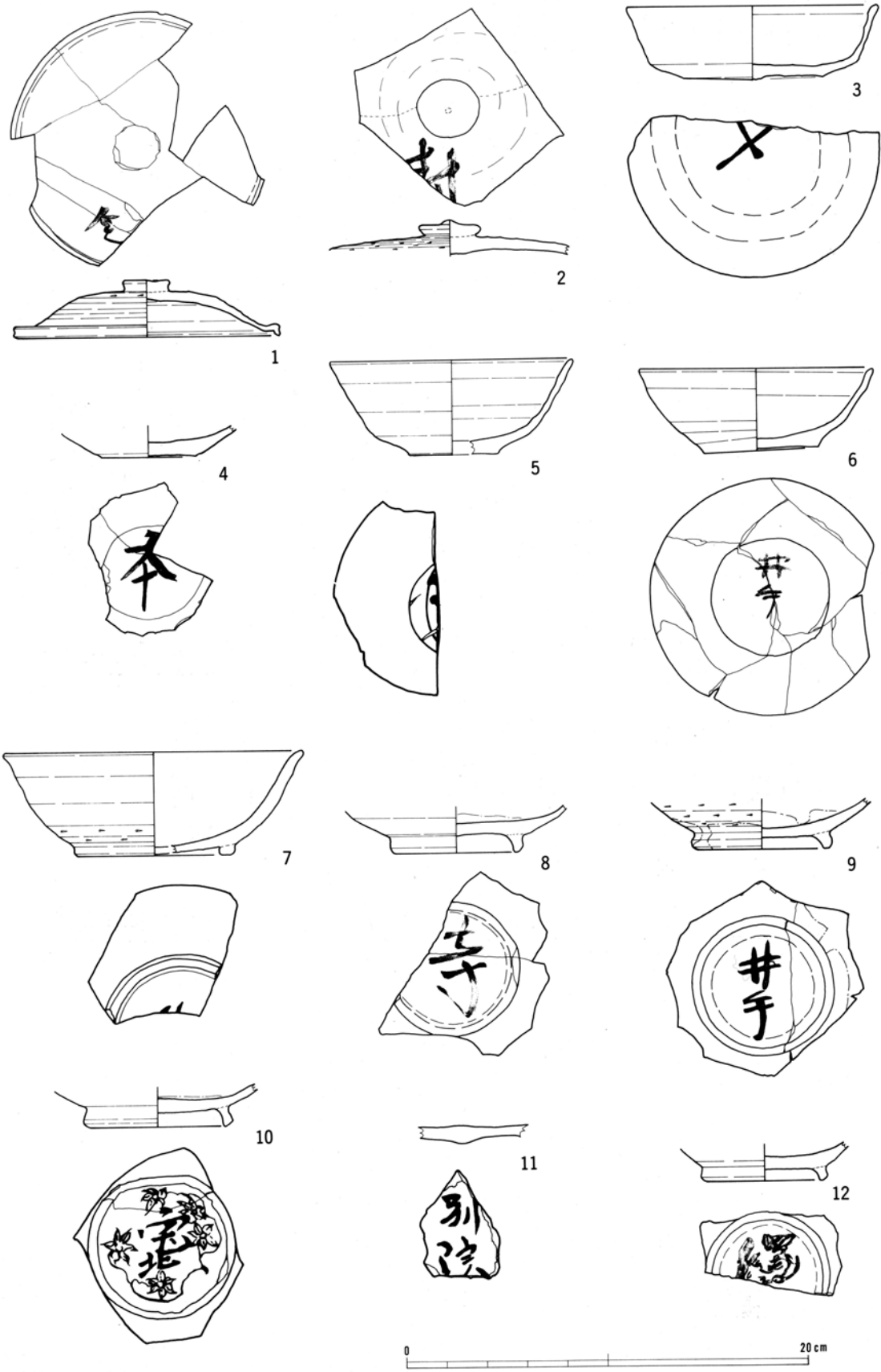
IV期土器・陶磁器実測図(3) (1:4)



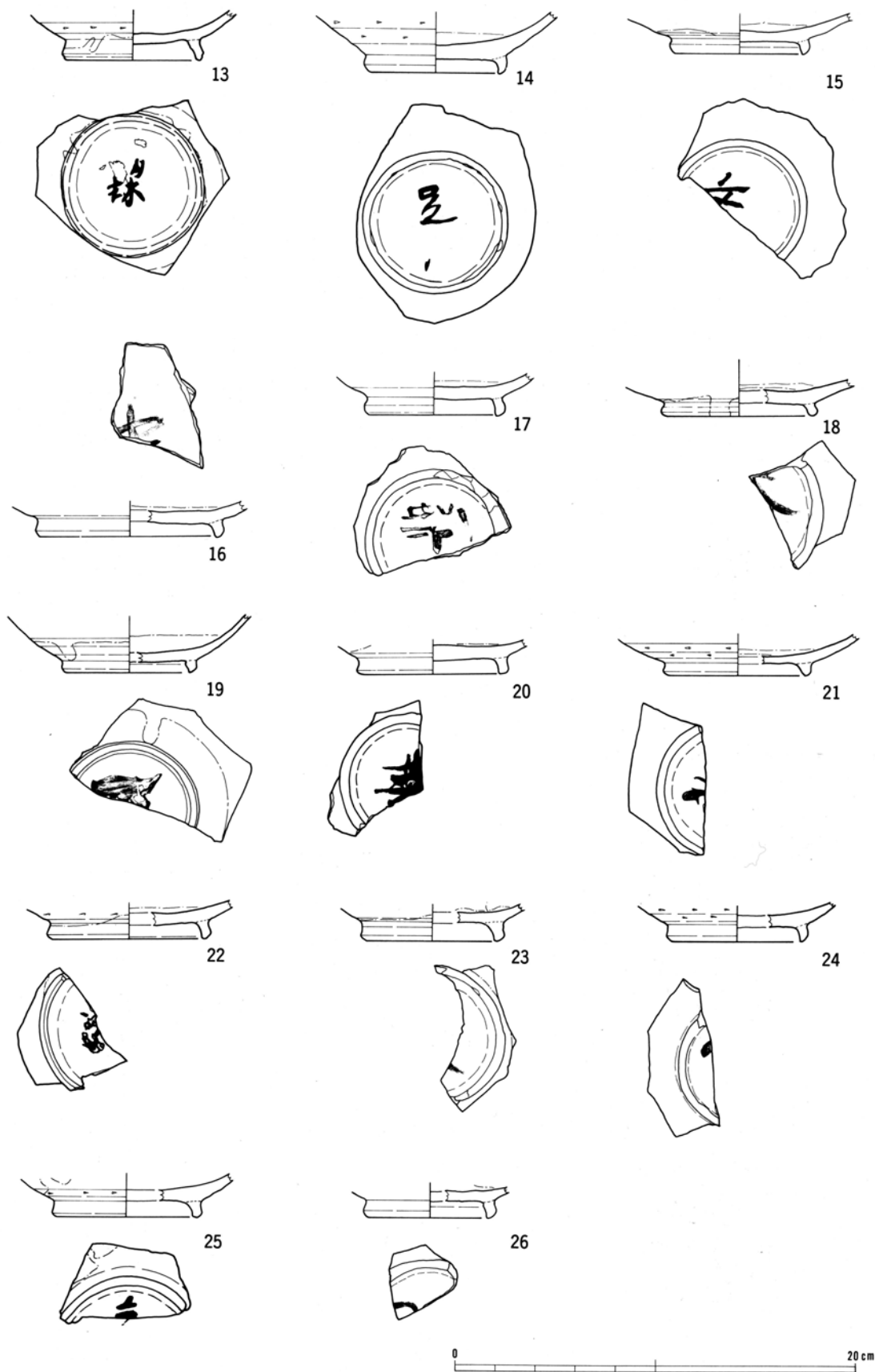
IV期土器・陶磁器実測図(4) (1 : 4)



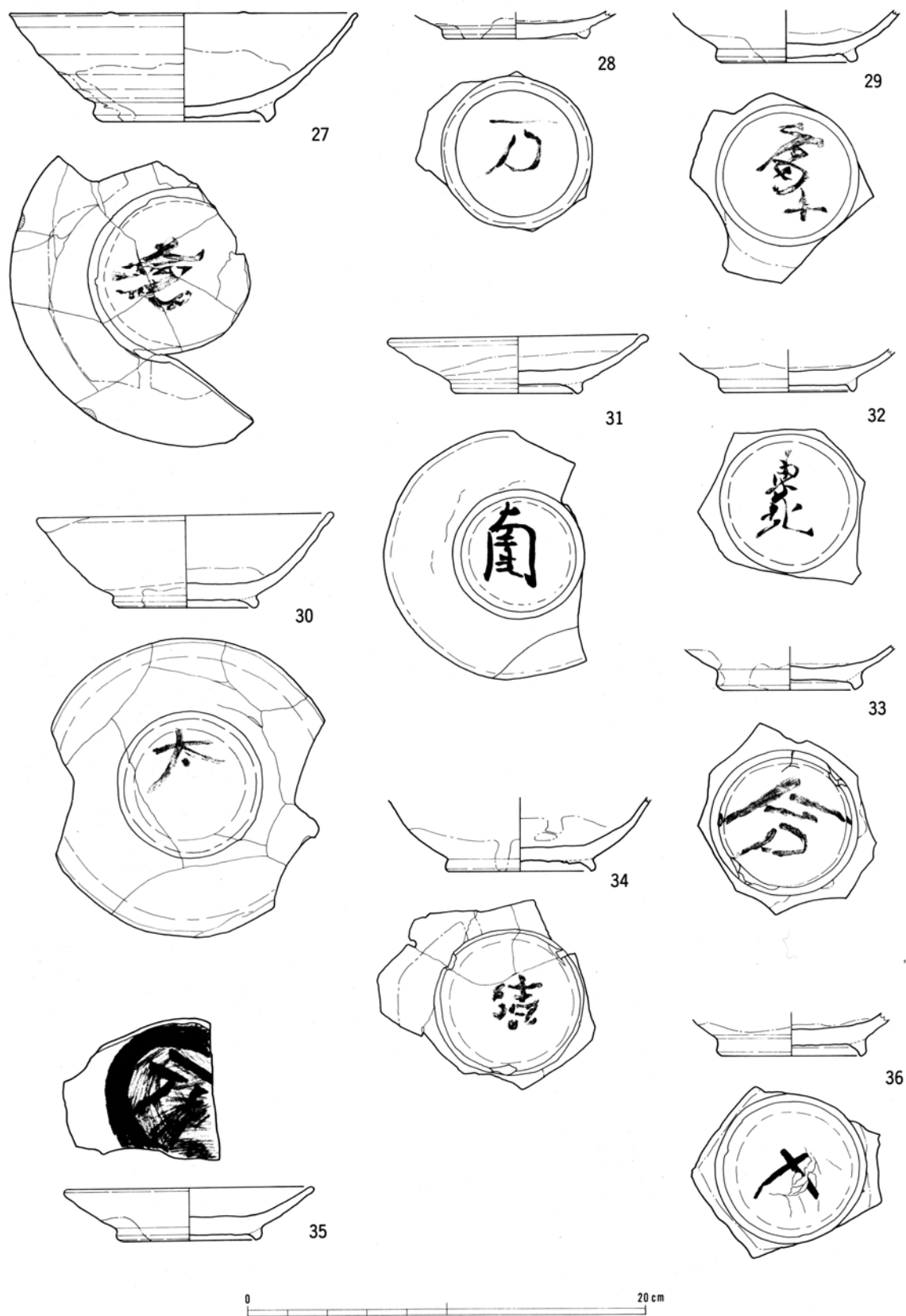
IV期土器・陶磁器実測図(5) (1:4)



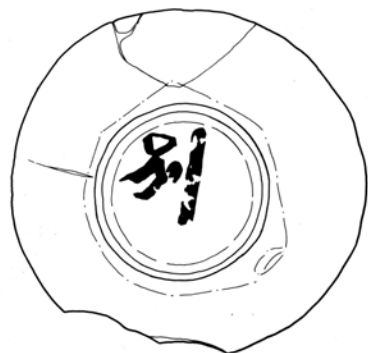
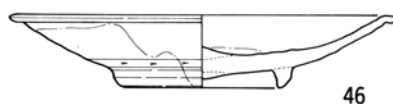
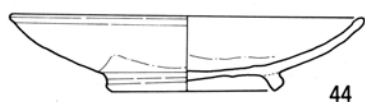
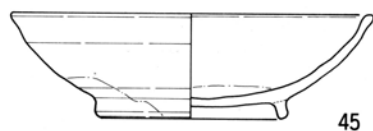
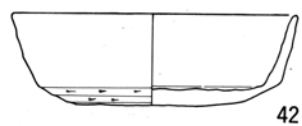
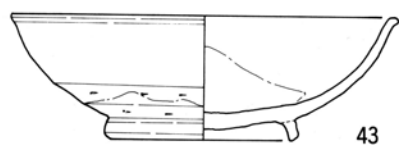
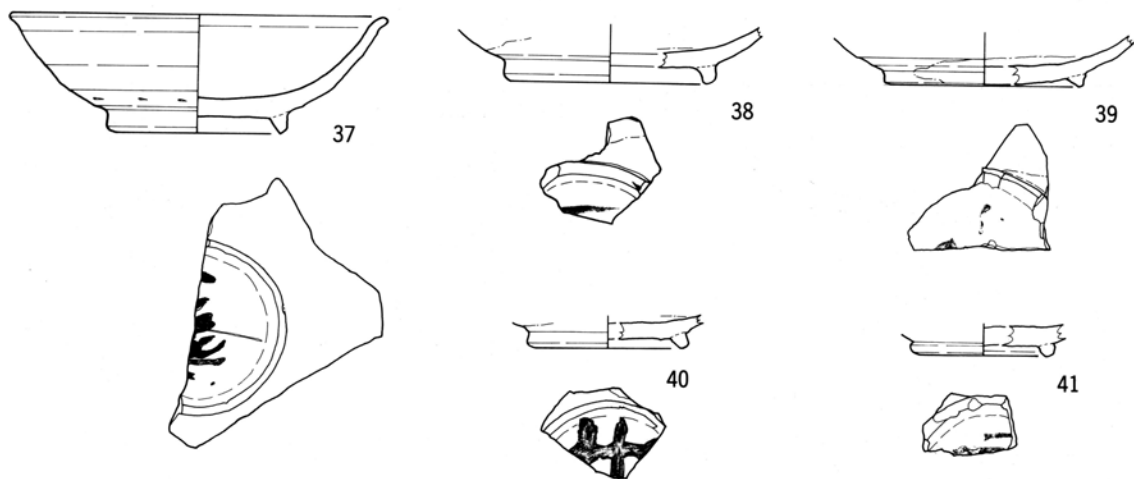
墨書土器実測図(1) (1 : 3) 遺物集中地点 I 須恵器・灰釉陶器 1 K-14・90



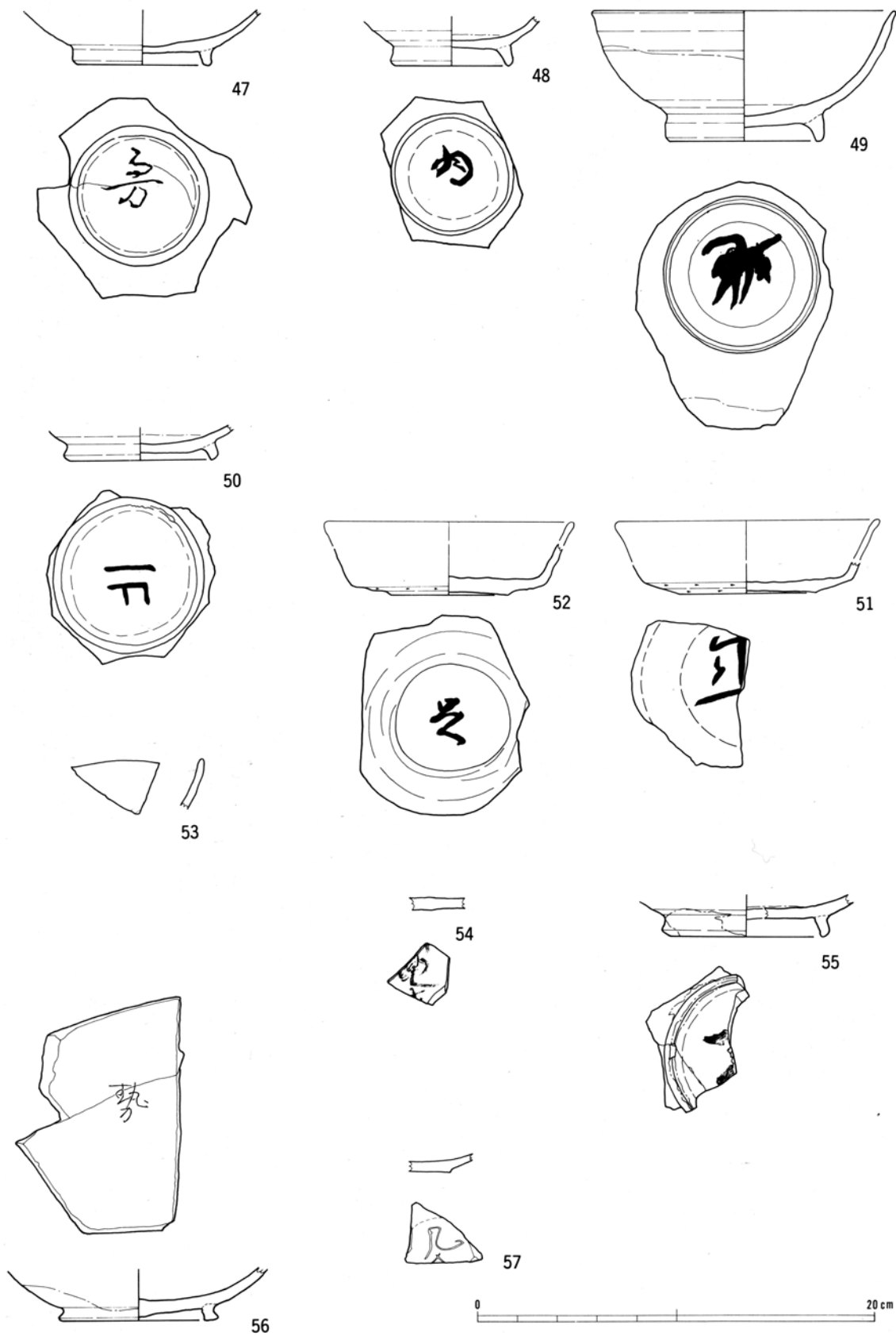
墨書土器実測図(2) (1:3) 遺物集中地点 I 灰釉陶器 2 K-90



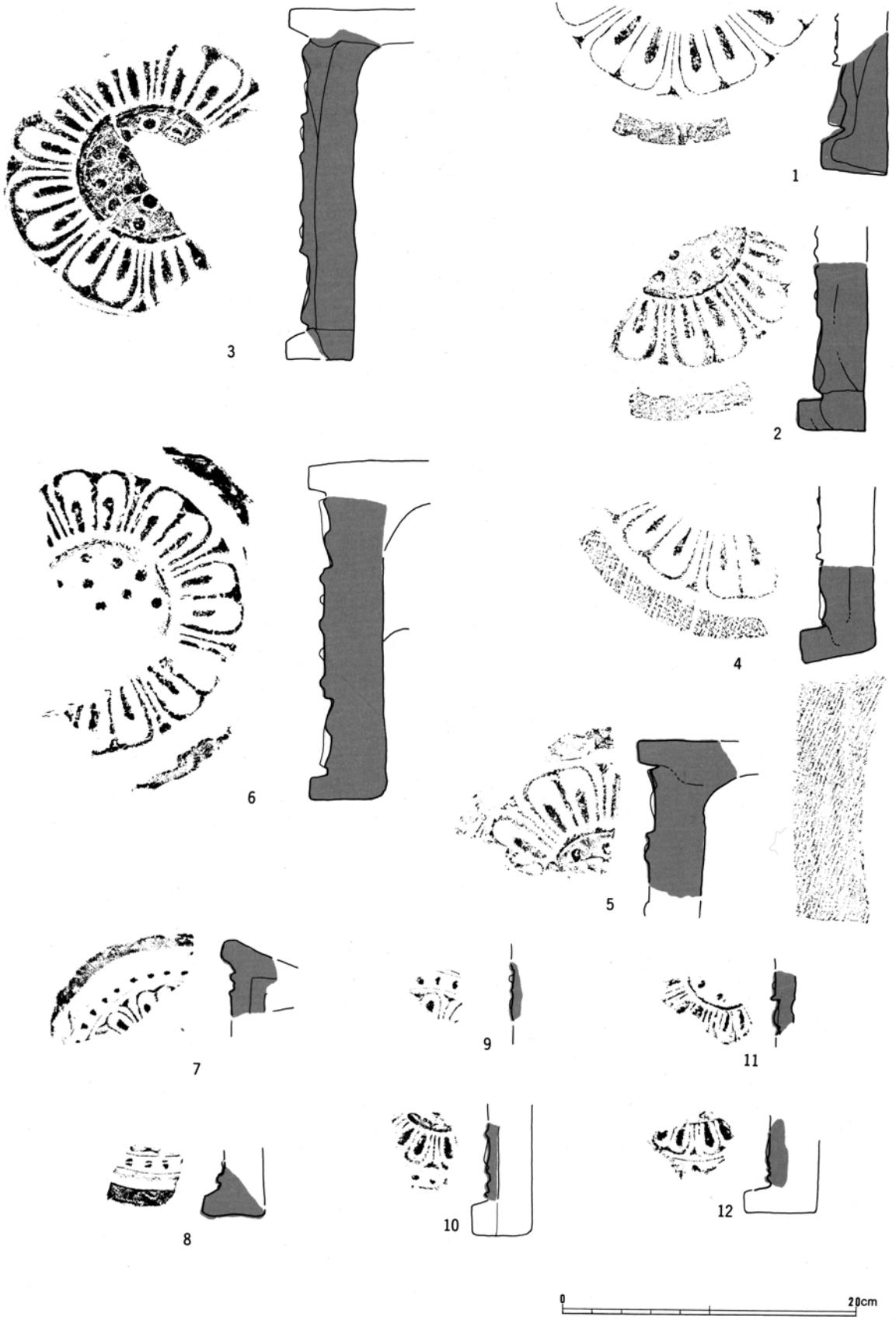
墨書土器実測図(3) (1 : 3) 遺物集中地点 I 灰釉陶器 3 H-72



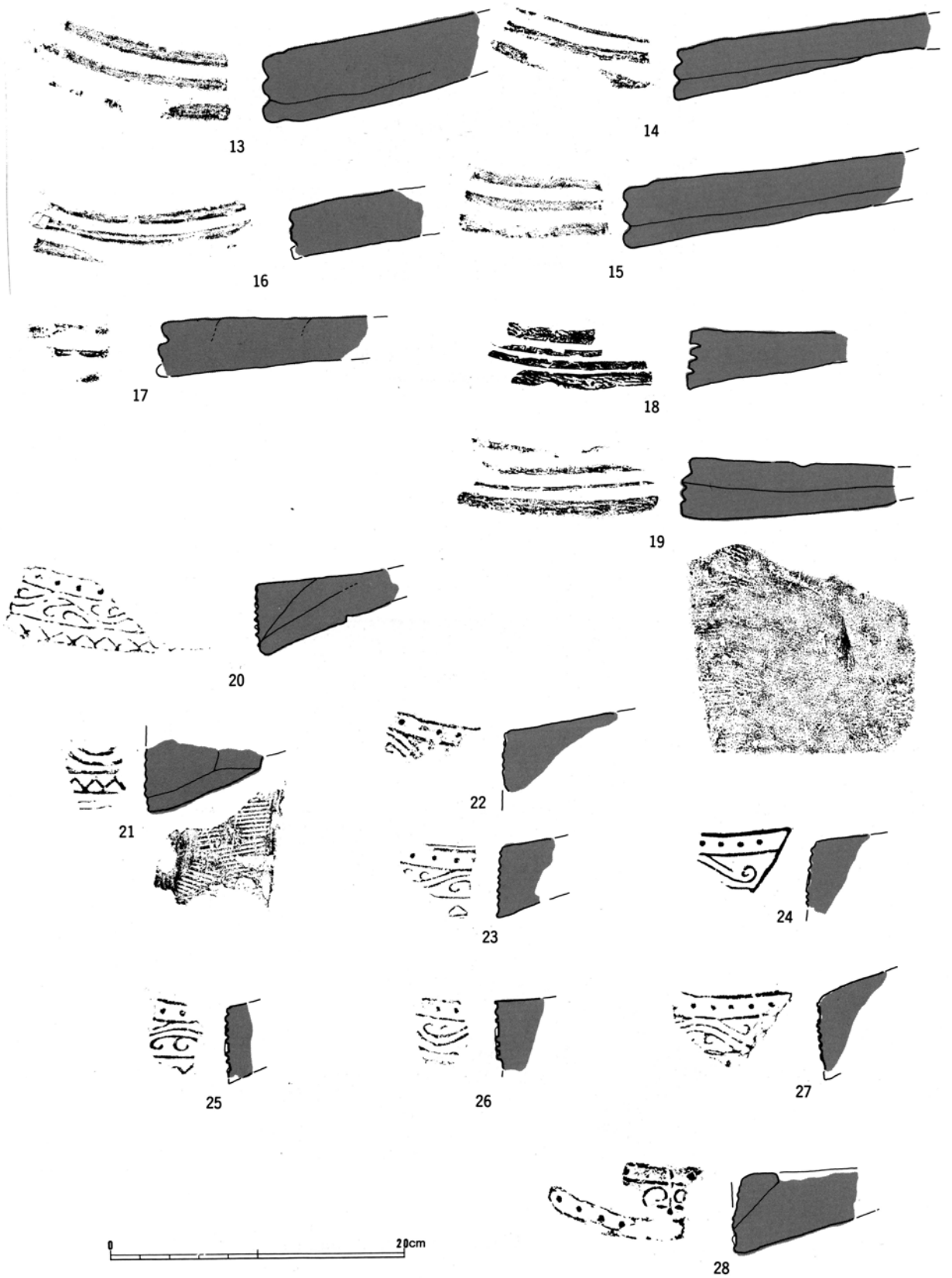
墨書土器実測図(4) (1 : 3) 遺物集中地点 I 灰釉陶器 4 H-72 遺物集中地点 II 灰釉陶器 1 K-90



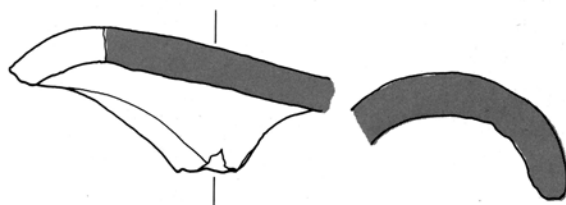
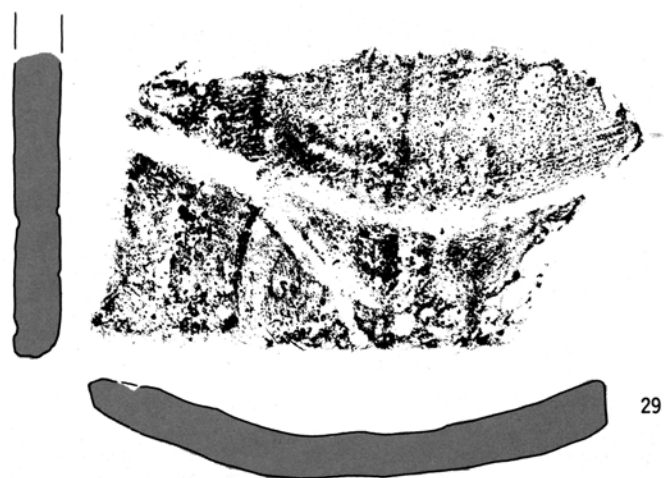
墨書土器実測図(5) (1 : 3) 遺物集中地点II 灰釉陶器 2 H-72 SX04 須恵器・刻書土器



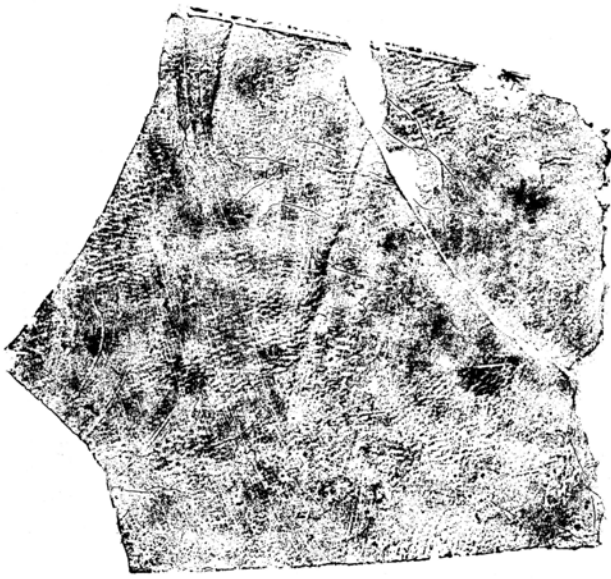
III期瓦実測図(1) (1 : 4) 軒丸瓦 KCI KCI



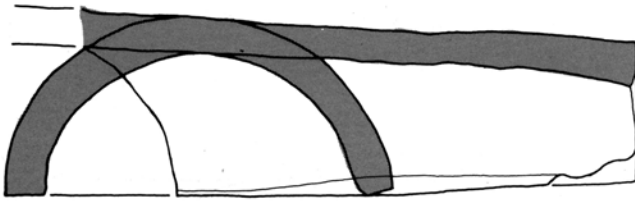
III期瓦实测图(2) (1:4) 軒平瓦 KDI KDII KDIII KDIV



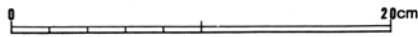
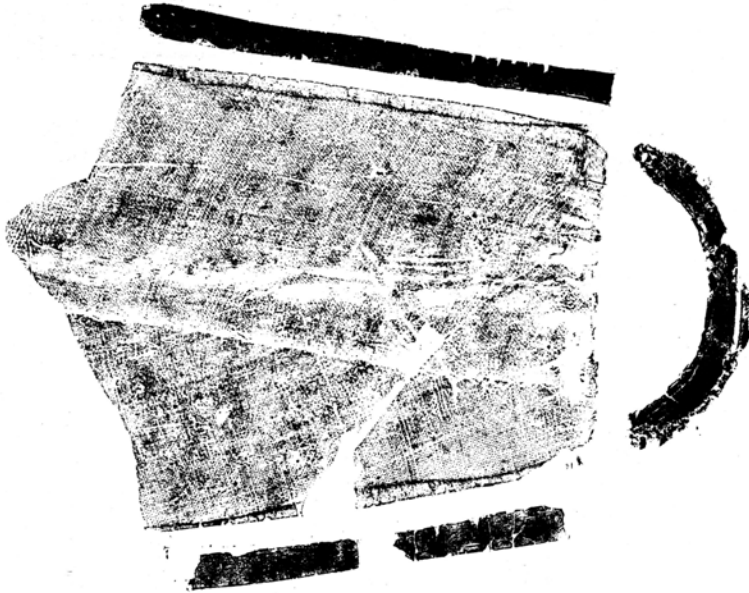
III期瓦突測図(3) (1 : 4) 道具瓦



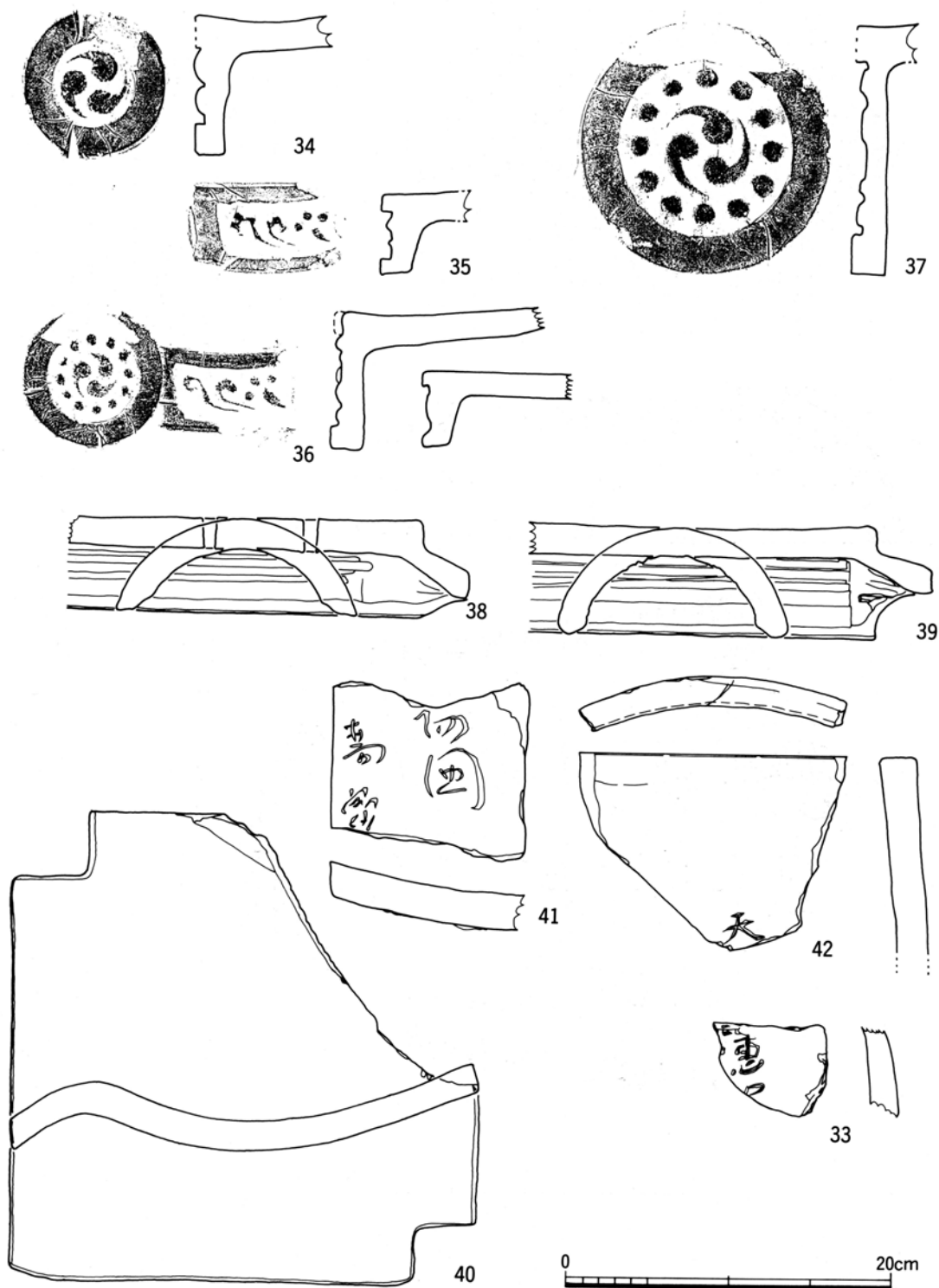
32



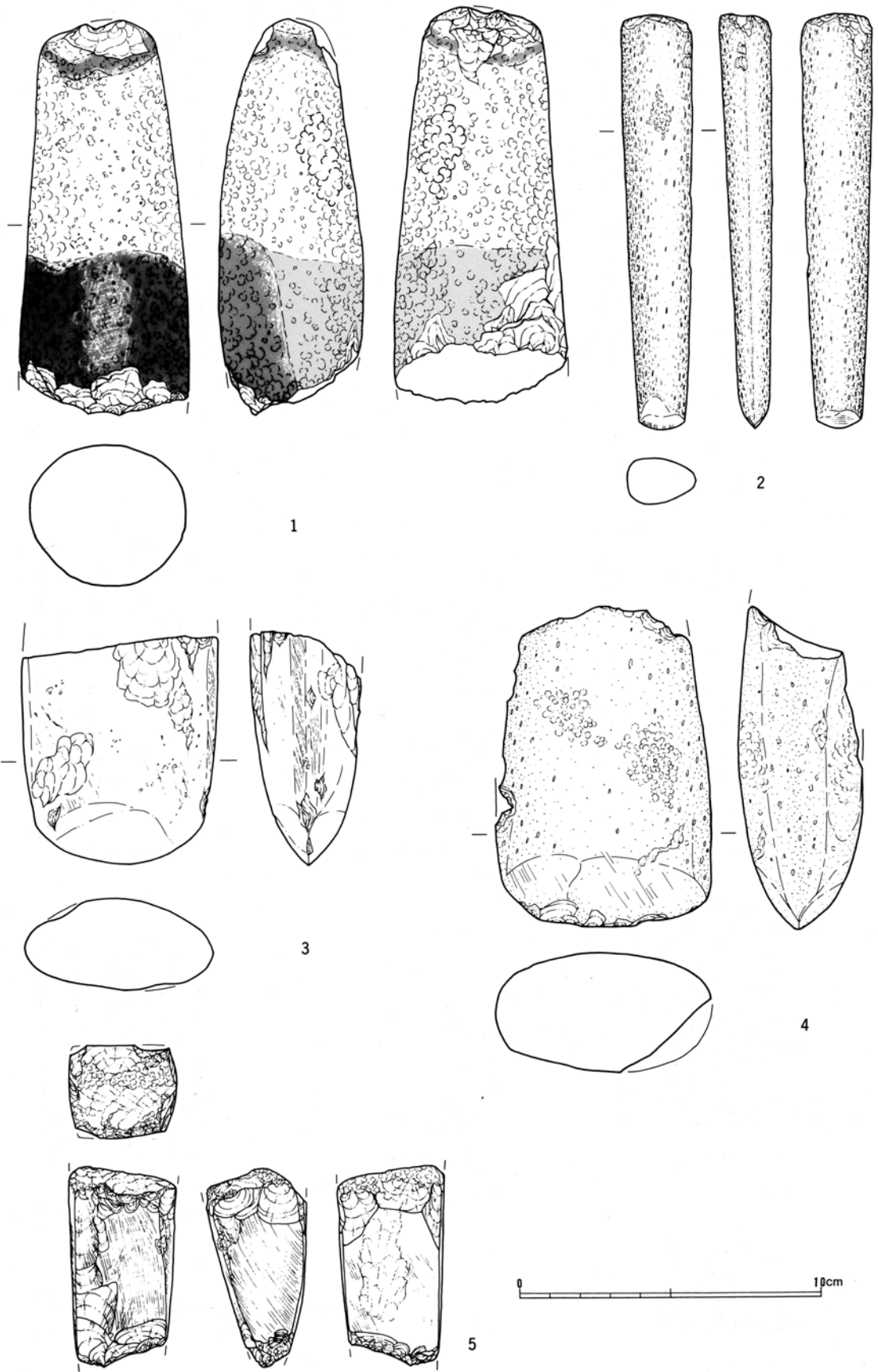
31



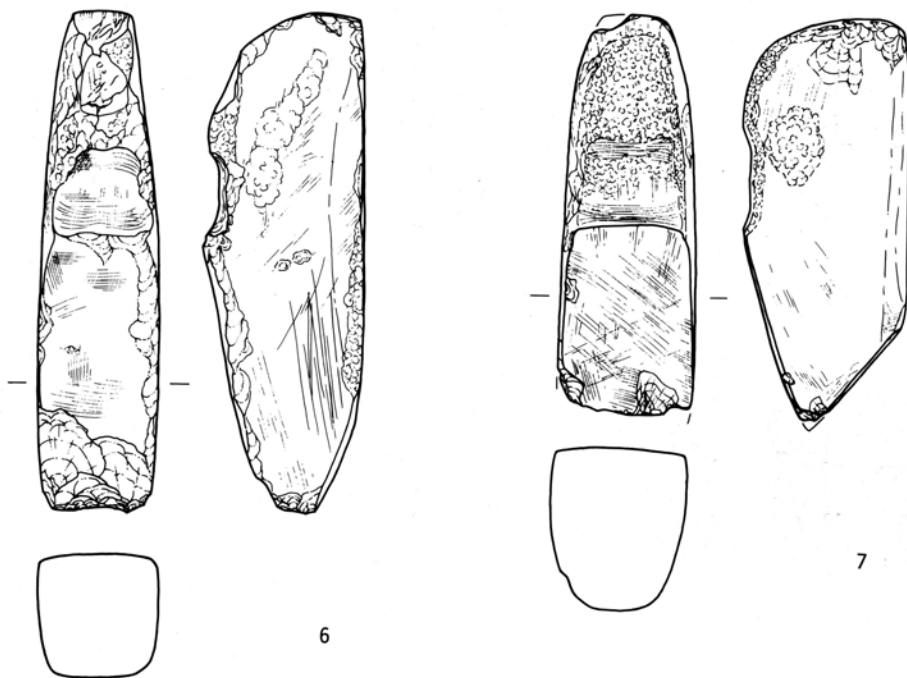
III期瓦実測図(4) (1 : 4) 丸瓦



III・IV期瓦実測図(1:4)

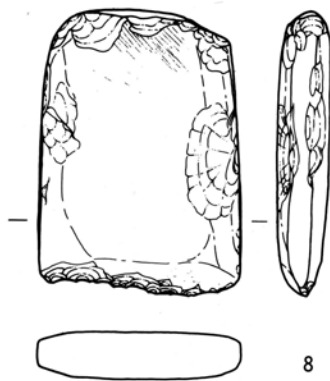


石製品実測図(1) (1 : 2)

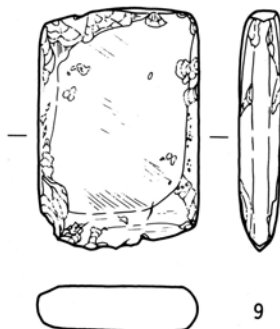


6

7



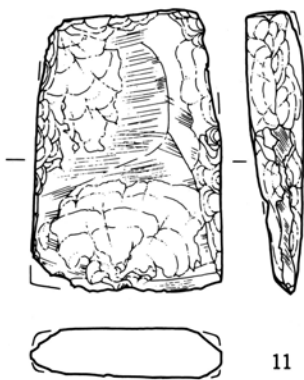
8



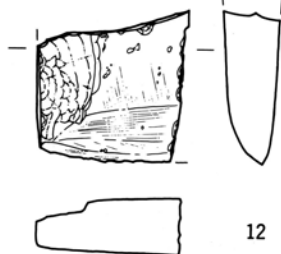
9



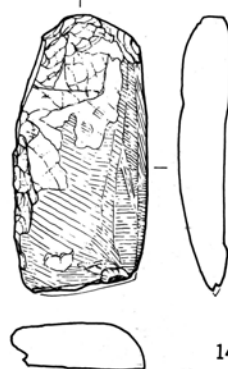
10



11



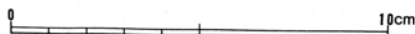
12



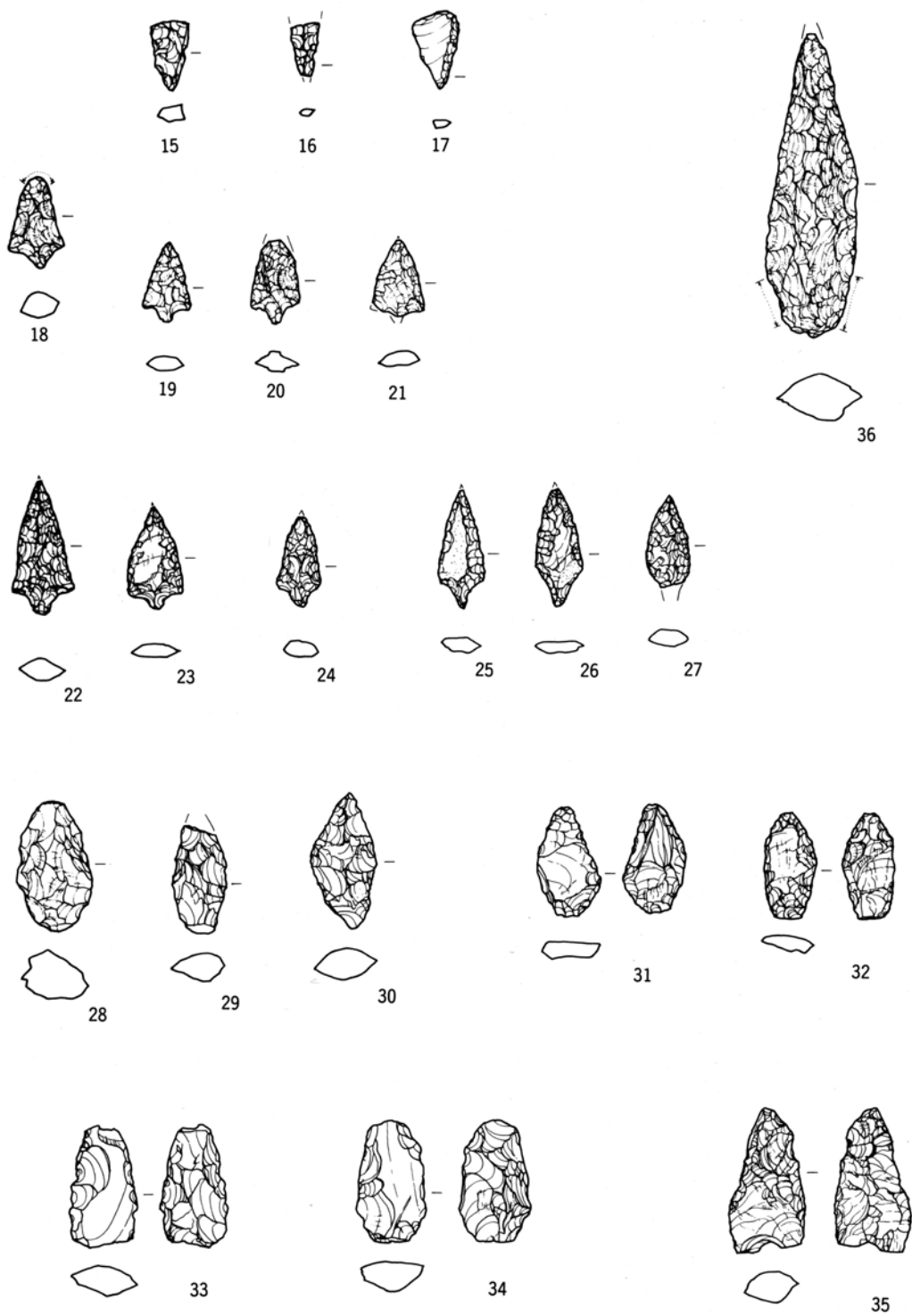
14



13

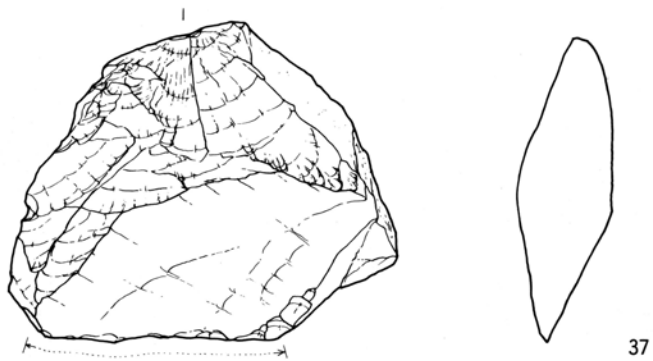


石製品実測図(2) (1 : 2)

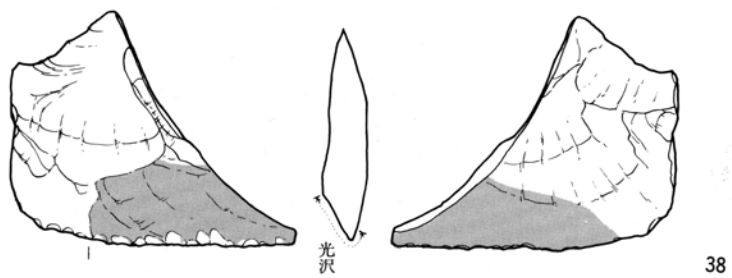


0 10cm

石製品実測図(3) (1 : 2)



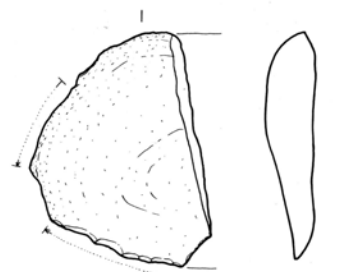
37



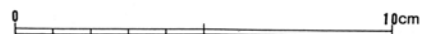
38



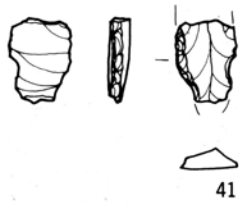
39



40



石製品実測図(4) (1 : 2)



41



42



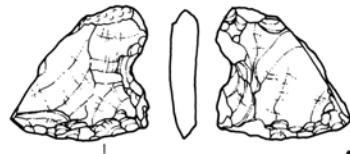
43



44



46



45



48



47



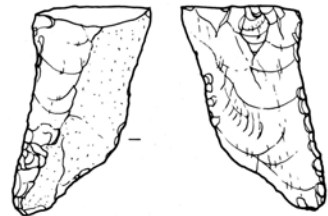
49



51



50



52



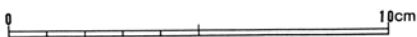
53



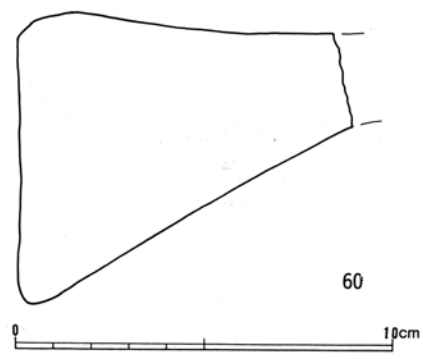
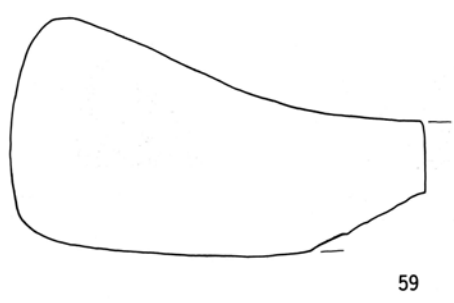
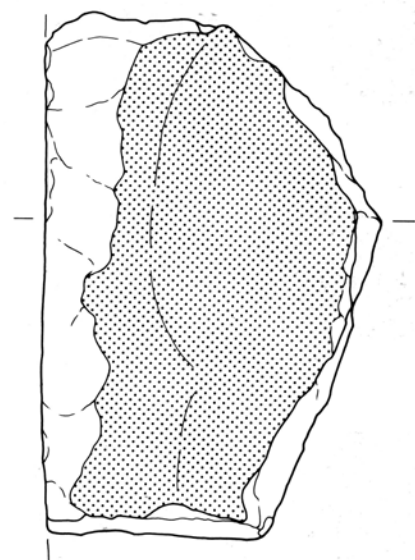
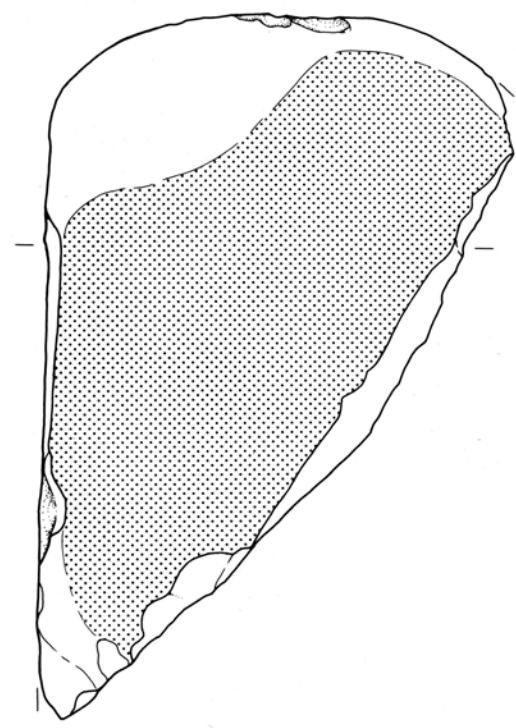
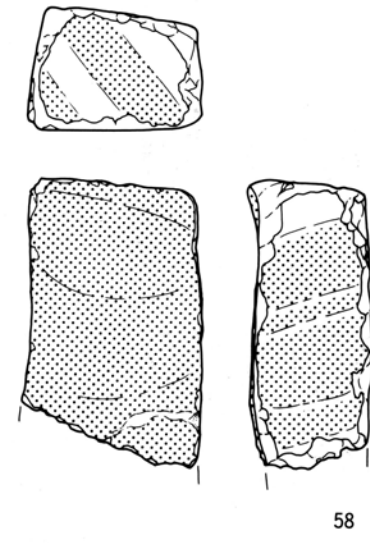
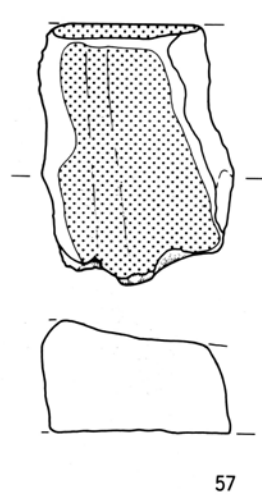
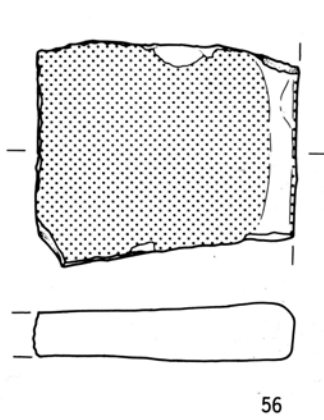
54



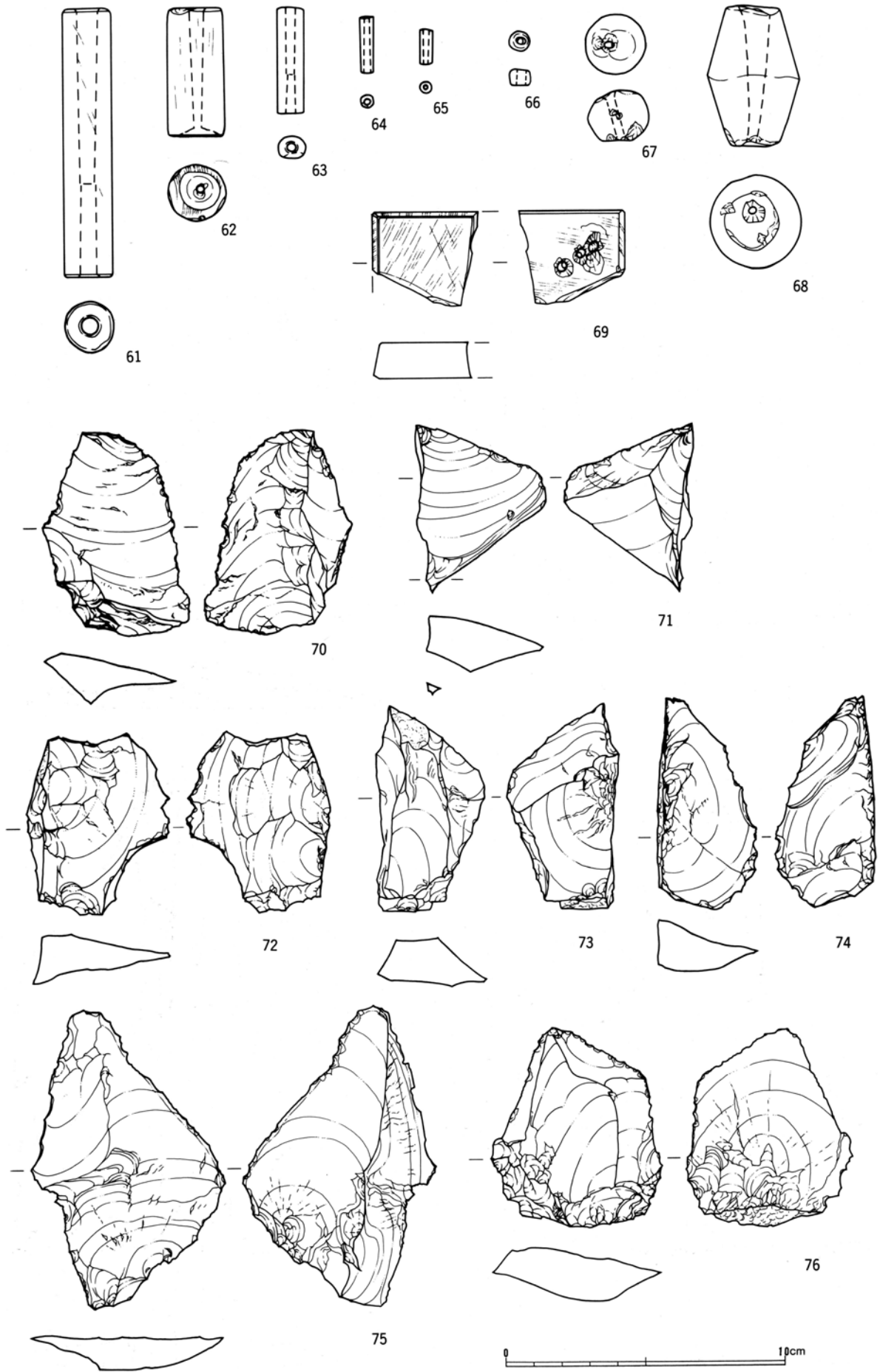
55



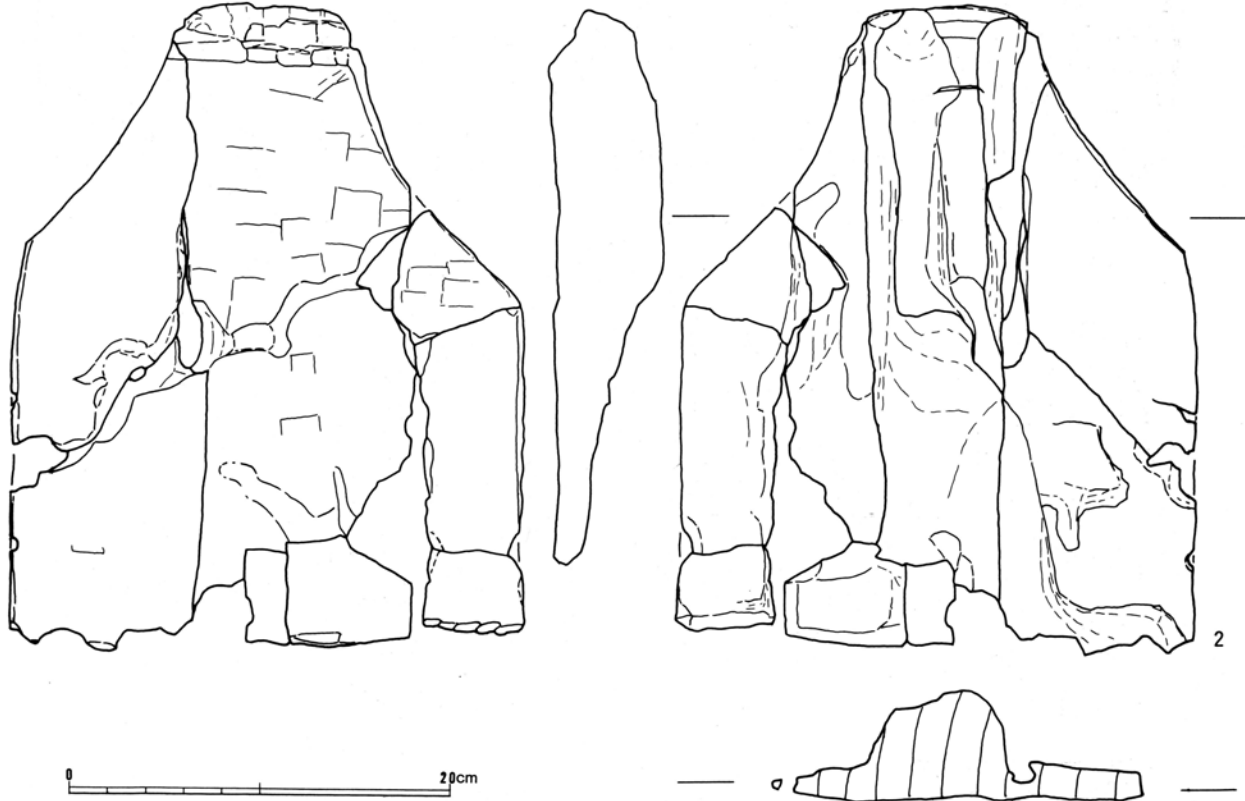
石製品実測図(5) (1 : 2)



石製品実測図(6) (1 : 2)

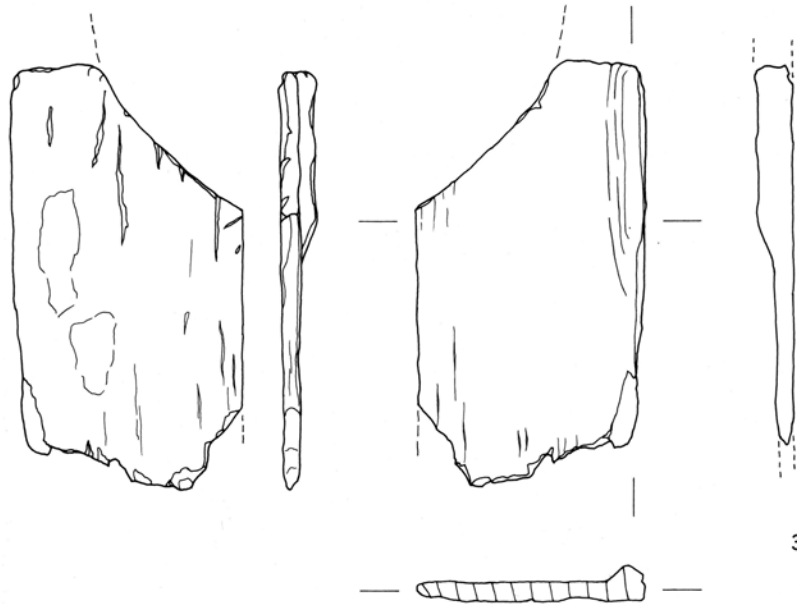


石製品実測図(7) (1 : 2)

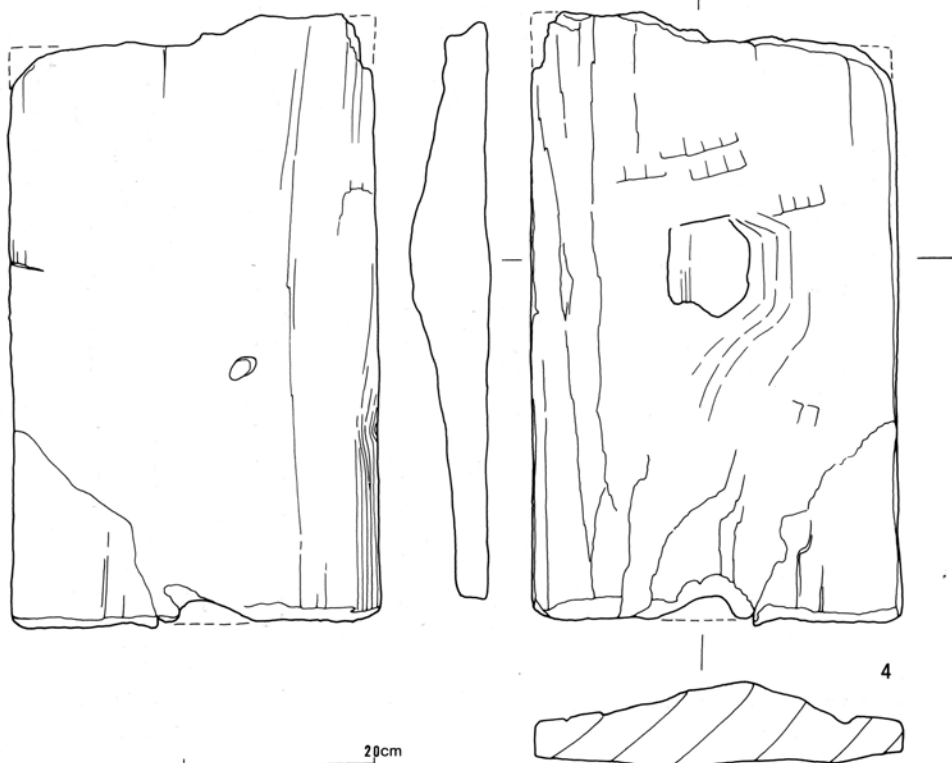


0 20cm

I 期木製品実測図(1) (1 : 4) 62F SX01



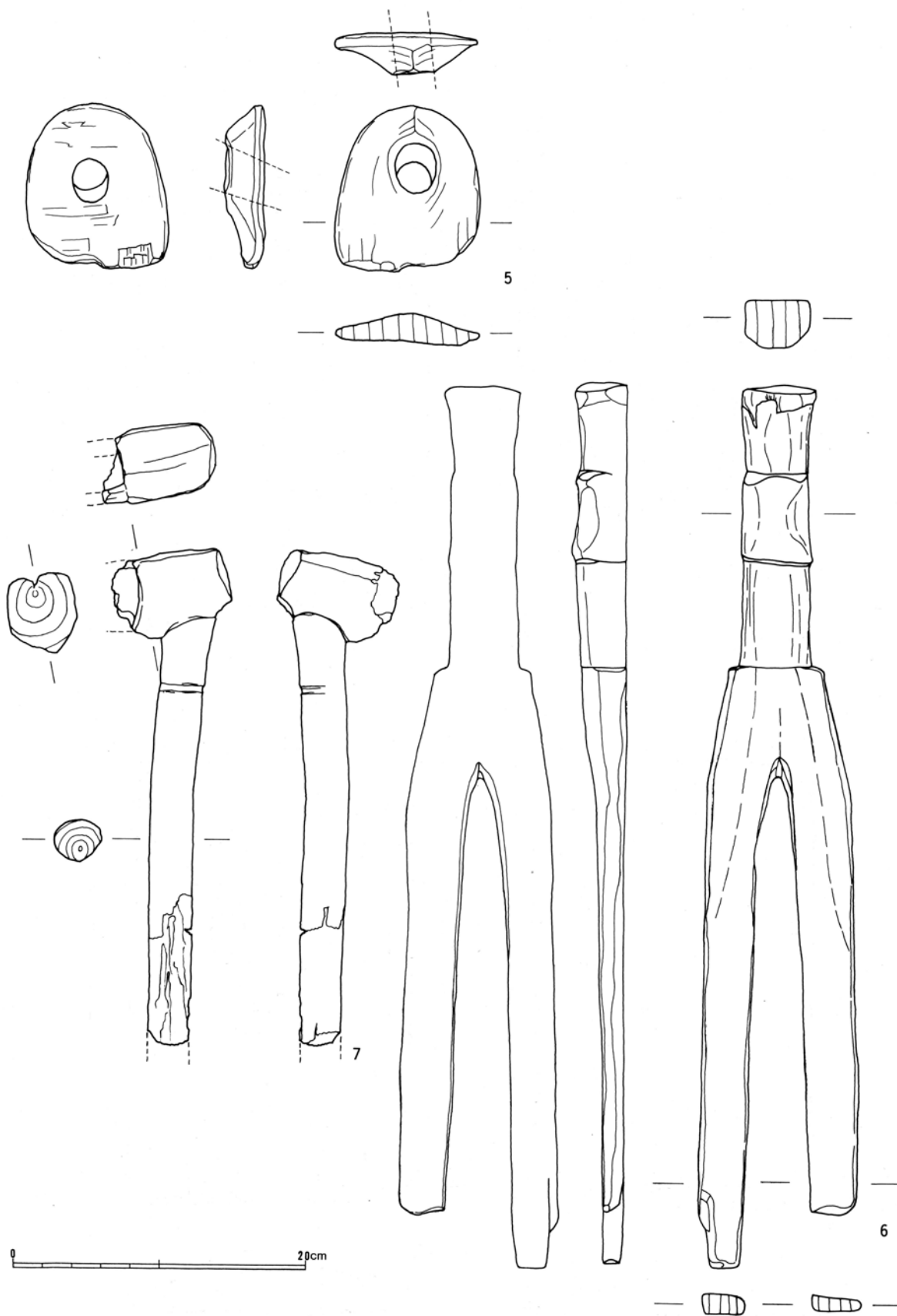
3



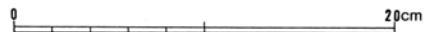
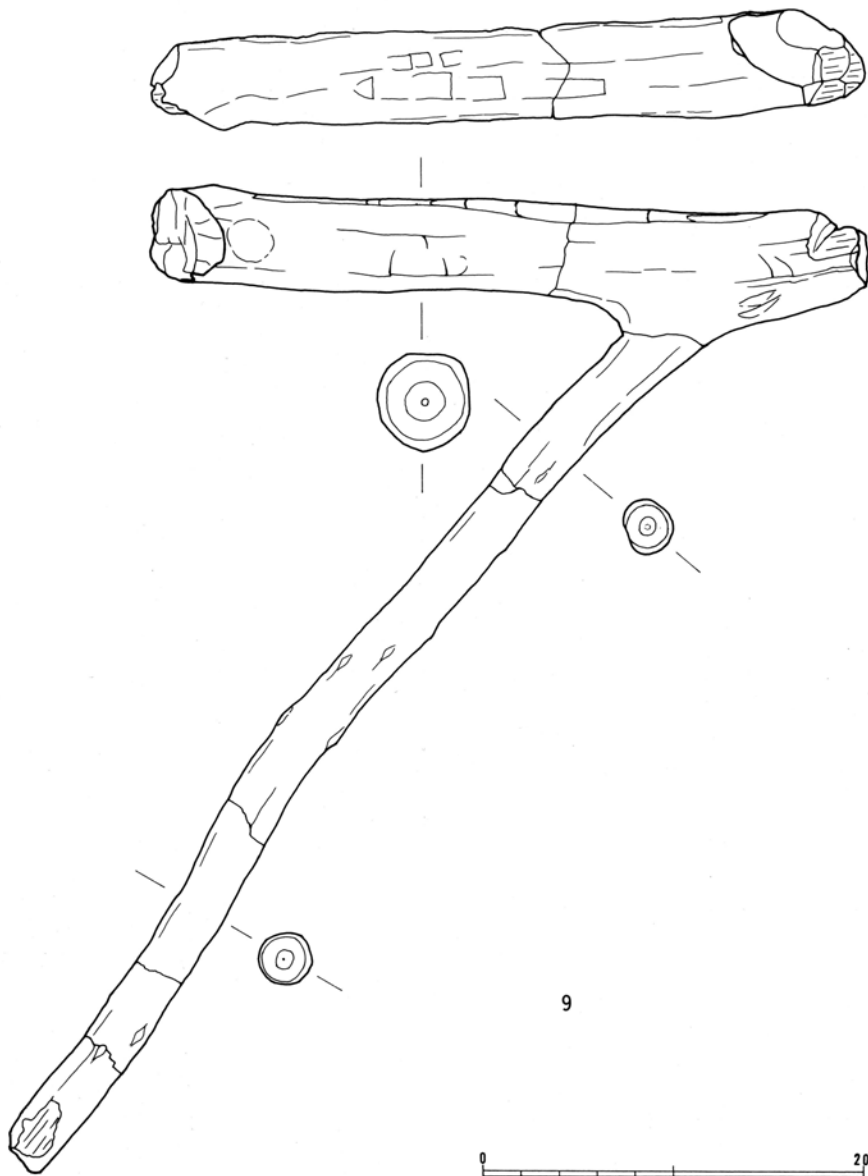
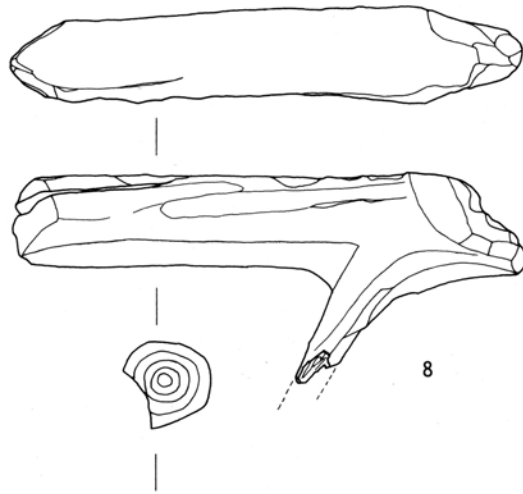
4

0 20cm

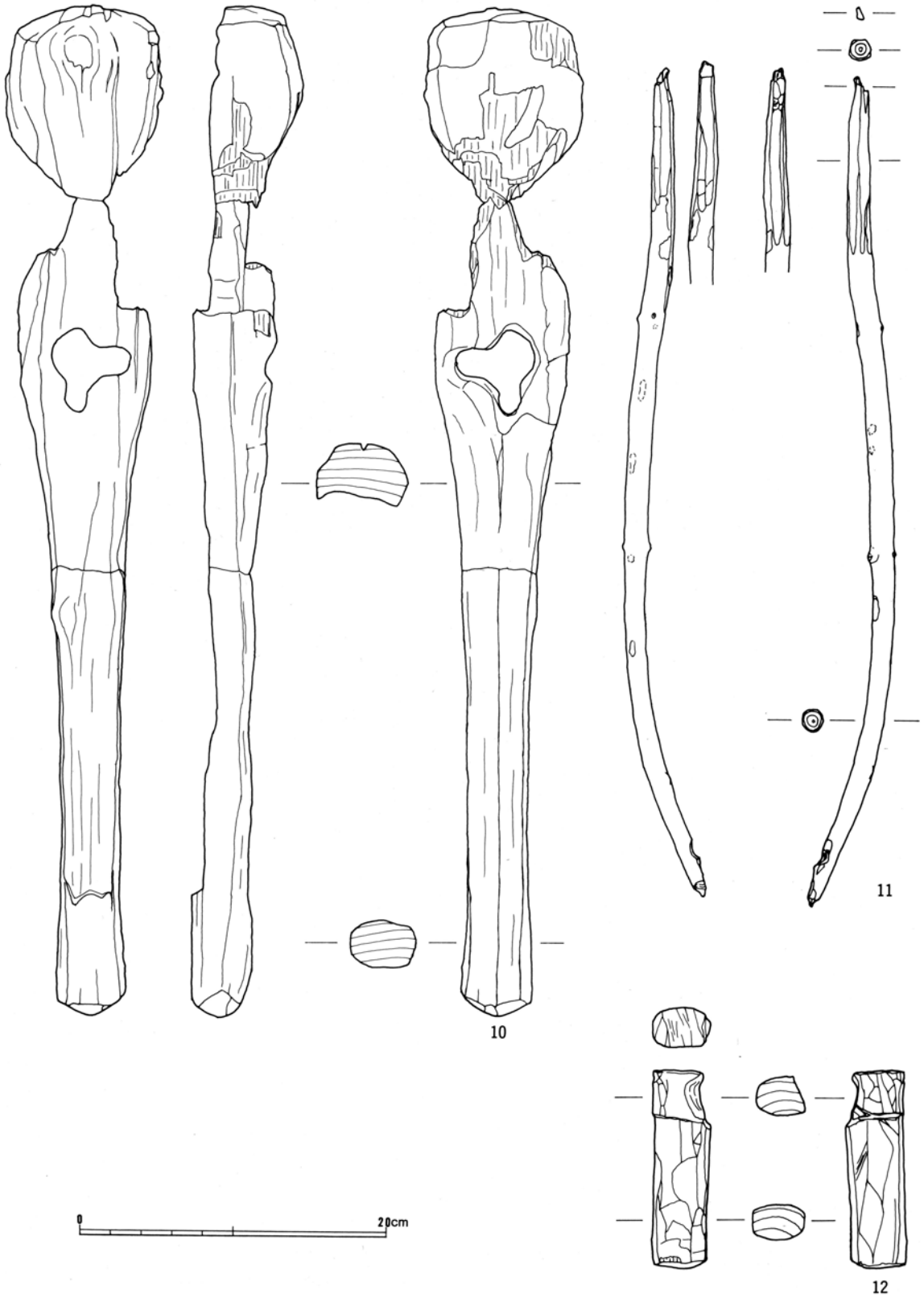
I期木製品実測図(2) (1 : 4) 62F SX01



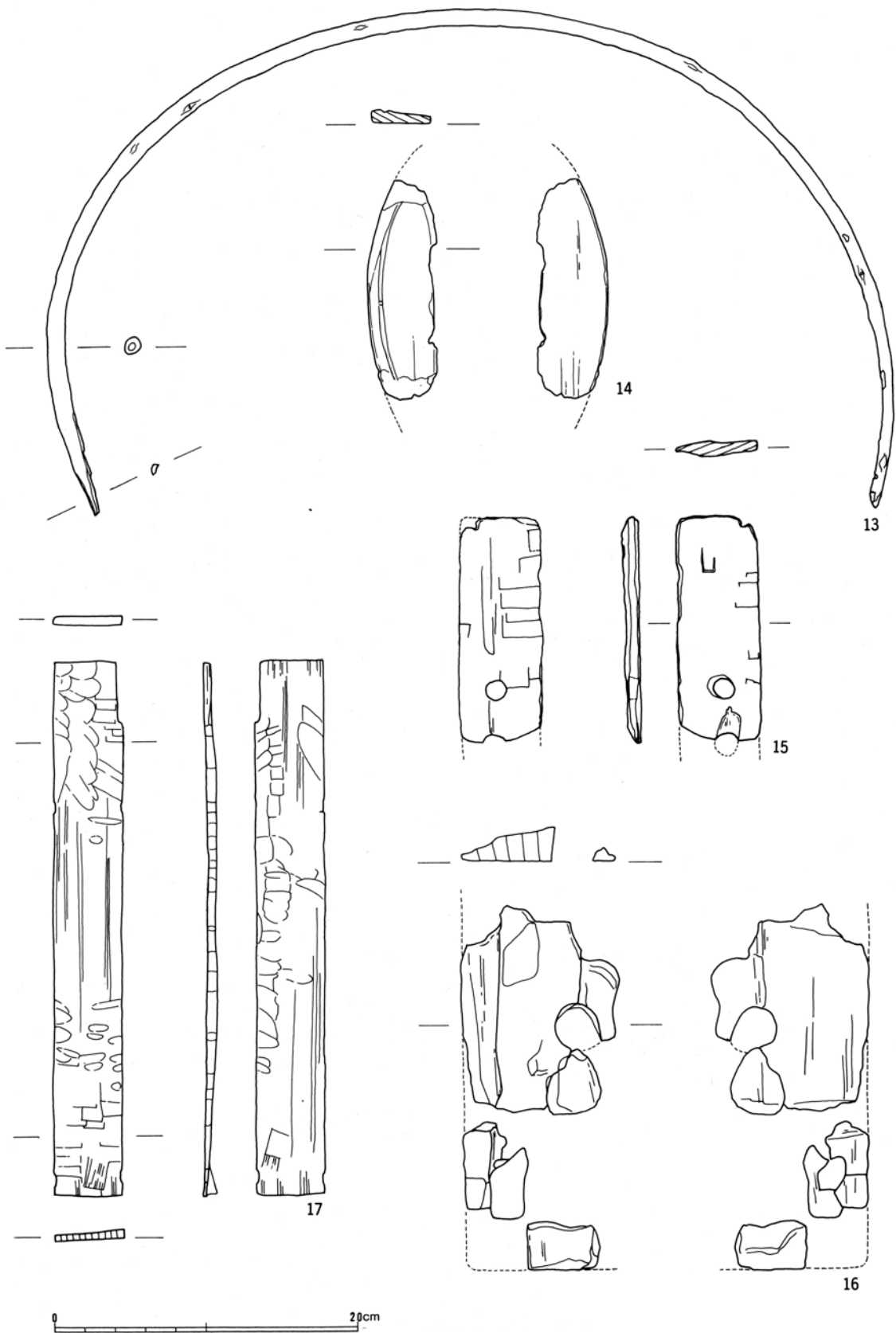
I期木製品実測図(3) (1 : 4) 62F SX01



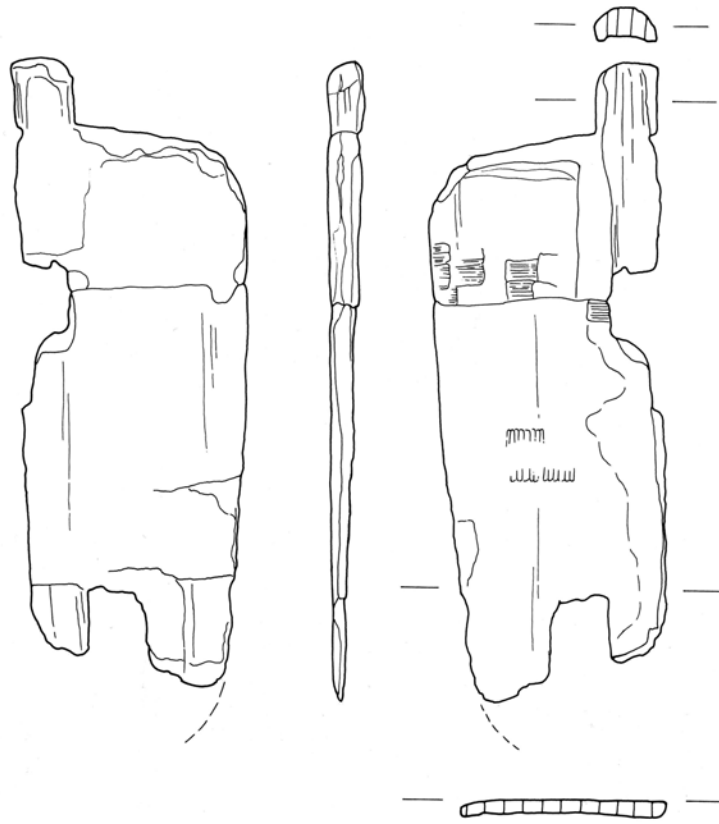
I期木製品実測図(4) (1 : 4) 62F SX01



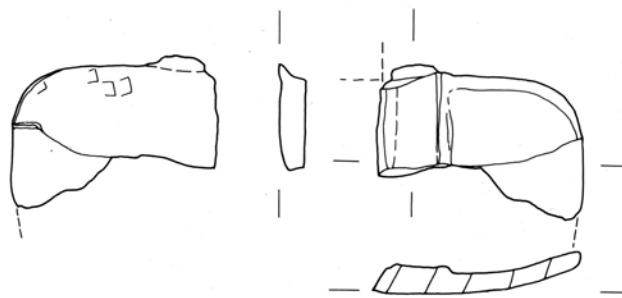
I期木製品実測図(5) (1 : 4) 62F SX01



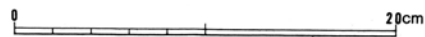
I期木製品実測図(6) (1 : 4) 62F SX01



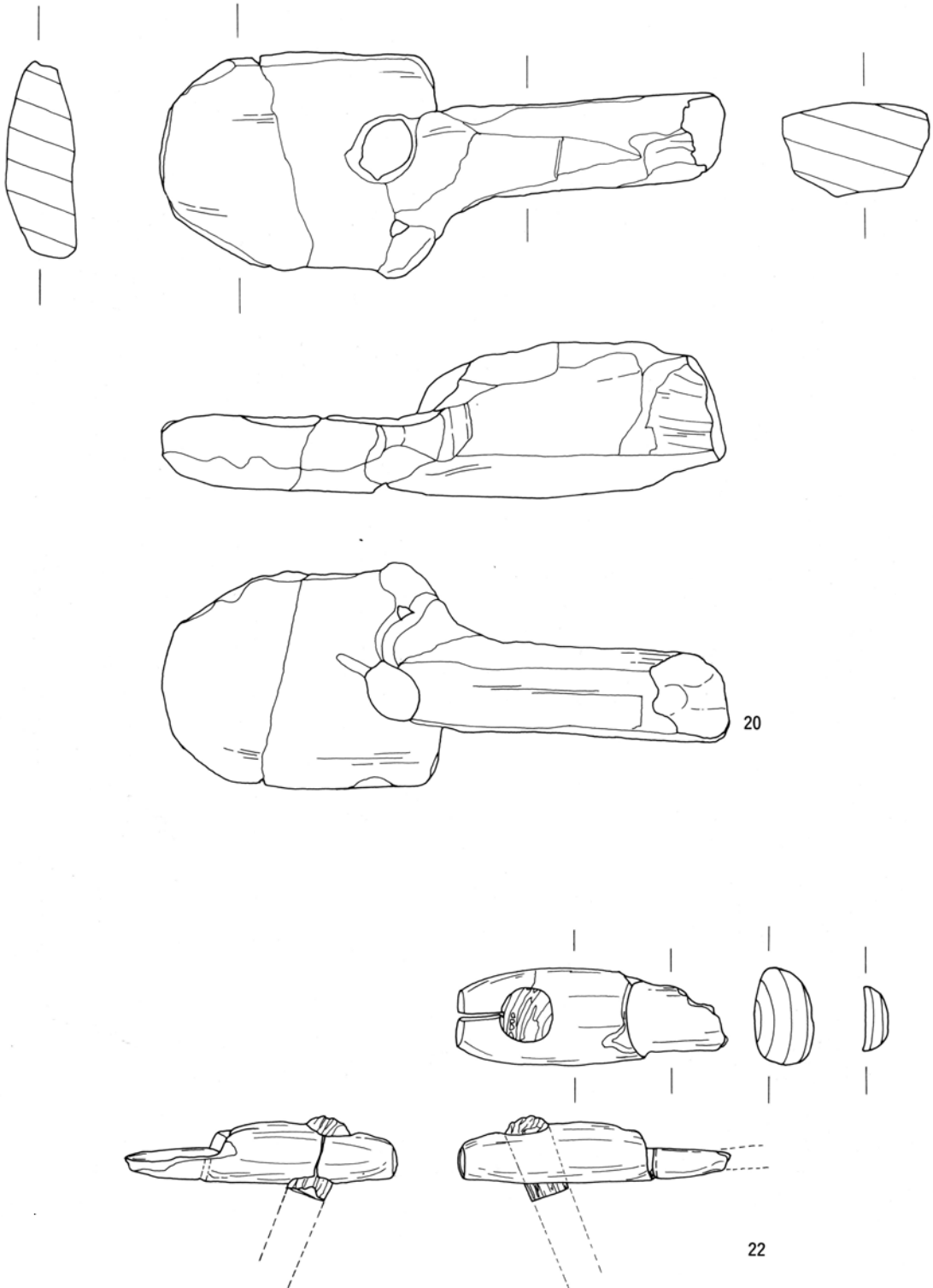
18



19



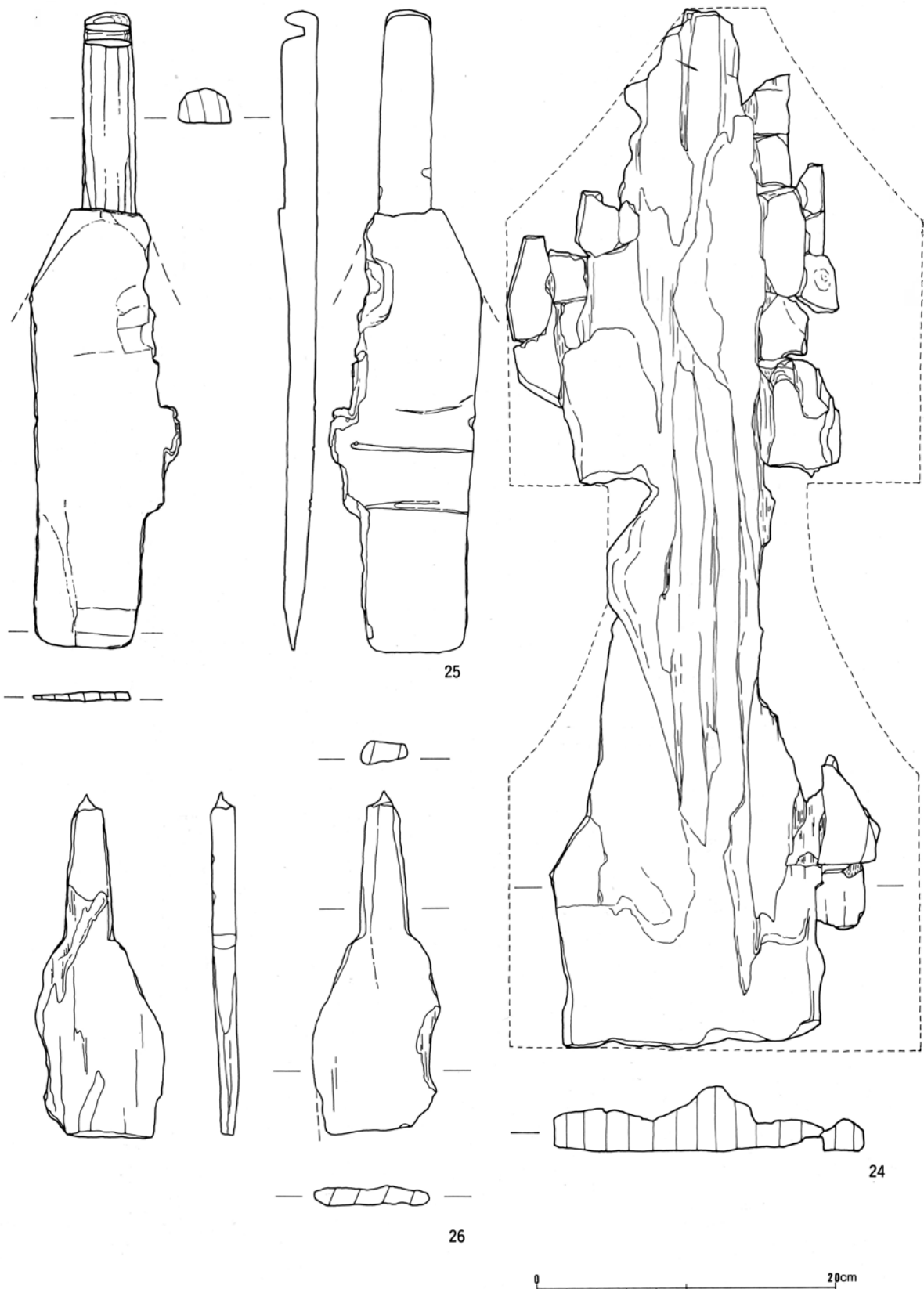
I期木製品実測図(7) (1 : 4) 62F SD60



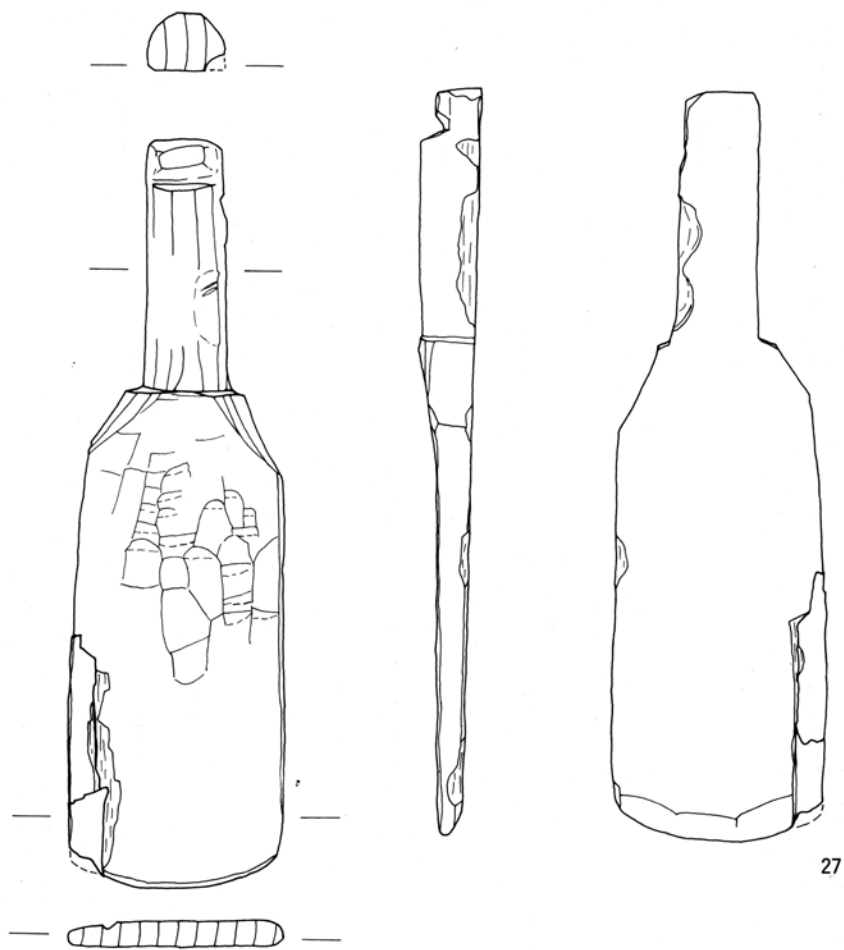
I 期木製品実測図(8) (1 : 4) 20 SD60 22 SD13



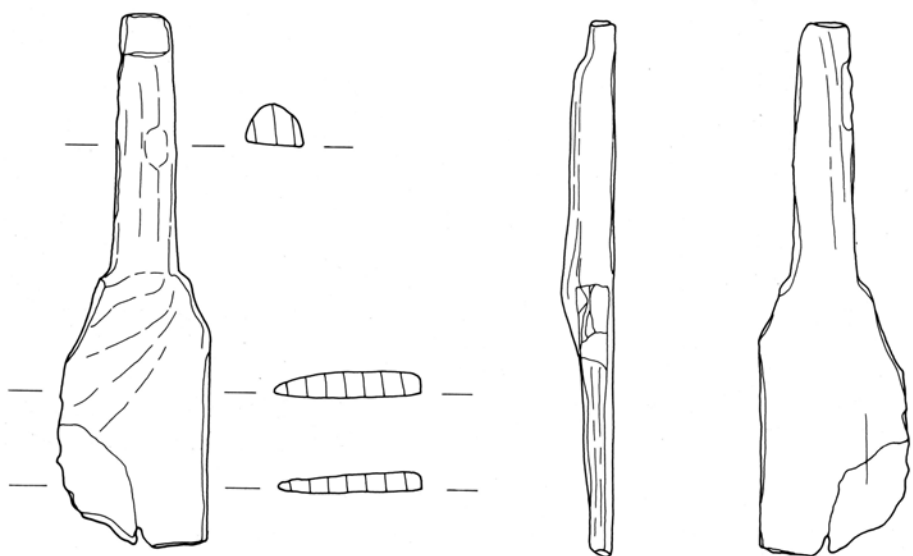
I 期木製品実測図(9) (1 : 8) 62F 21 SD60 23 SD13



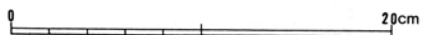
II-1 期木製品実測図(1) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点IV



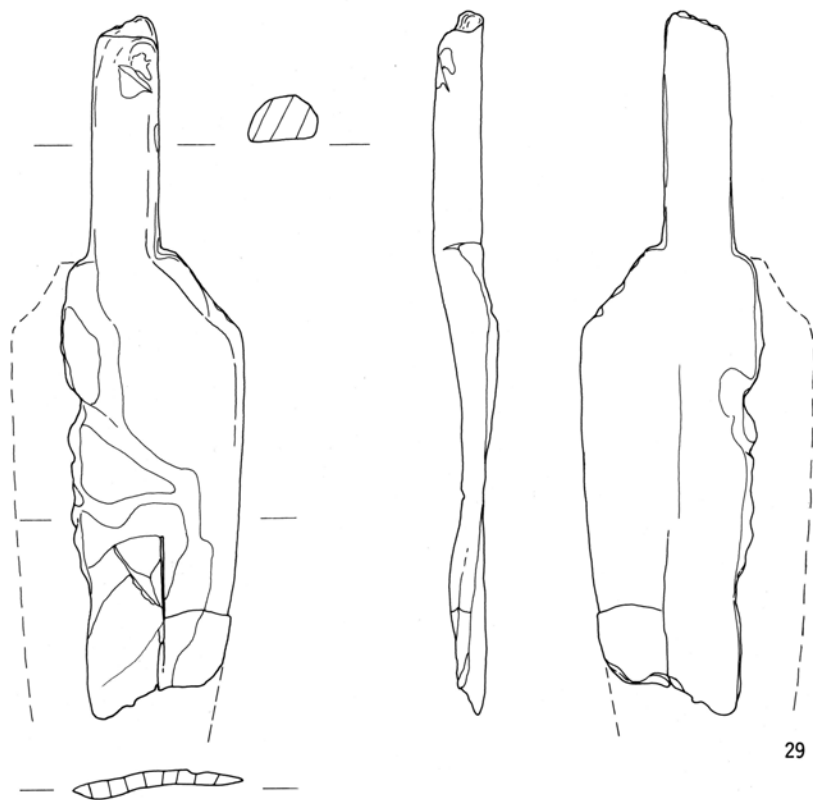
27



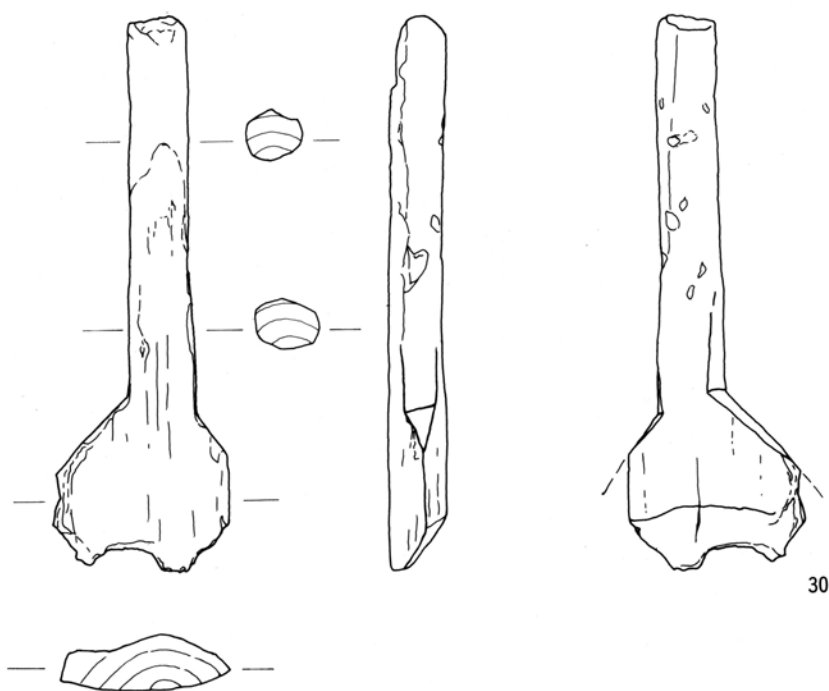
28



II-1期木製品実測図(2) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点IV



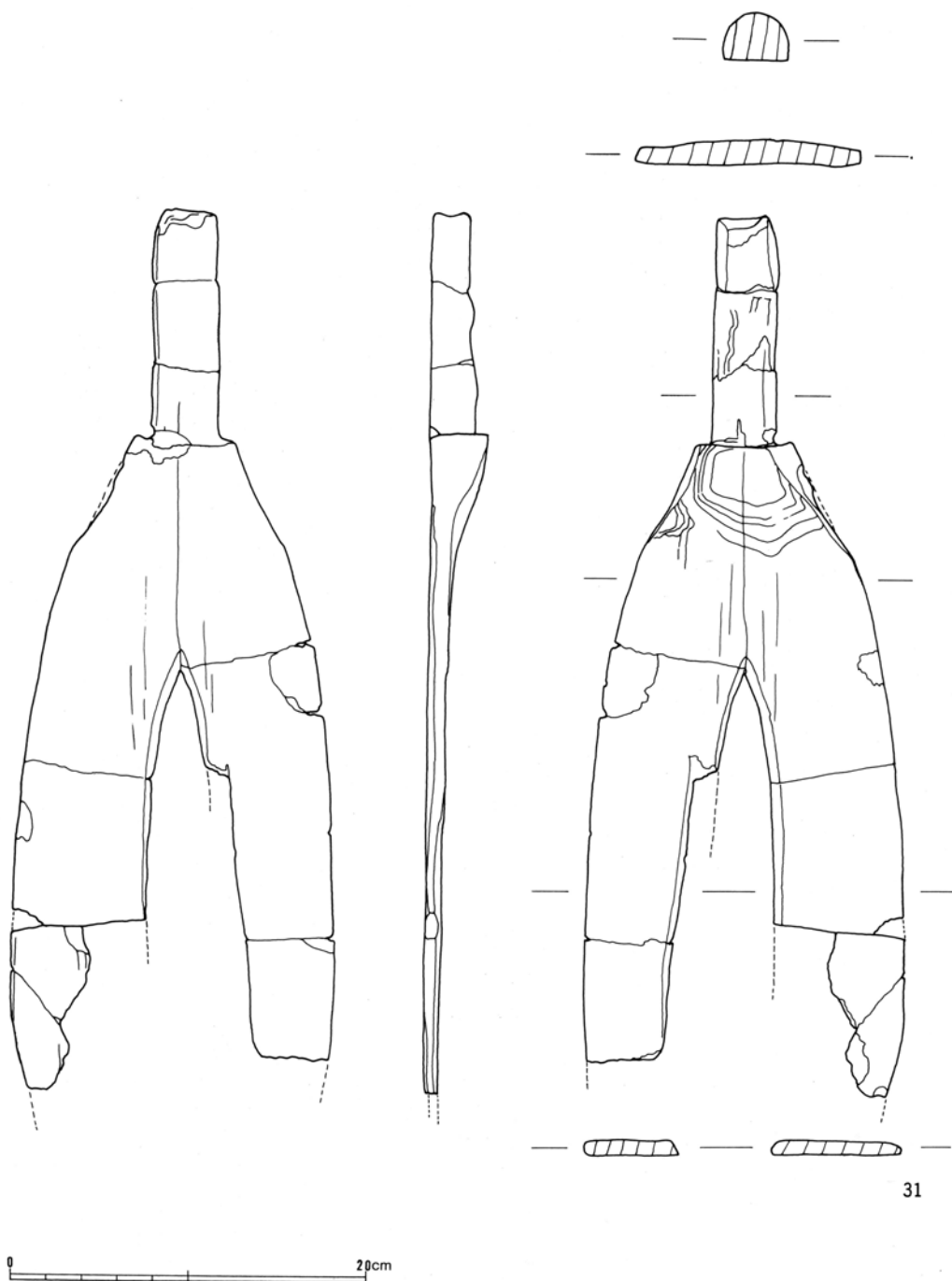
29



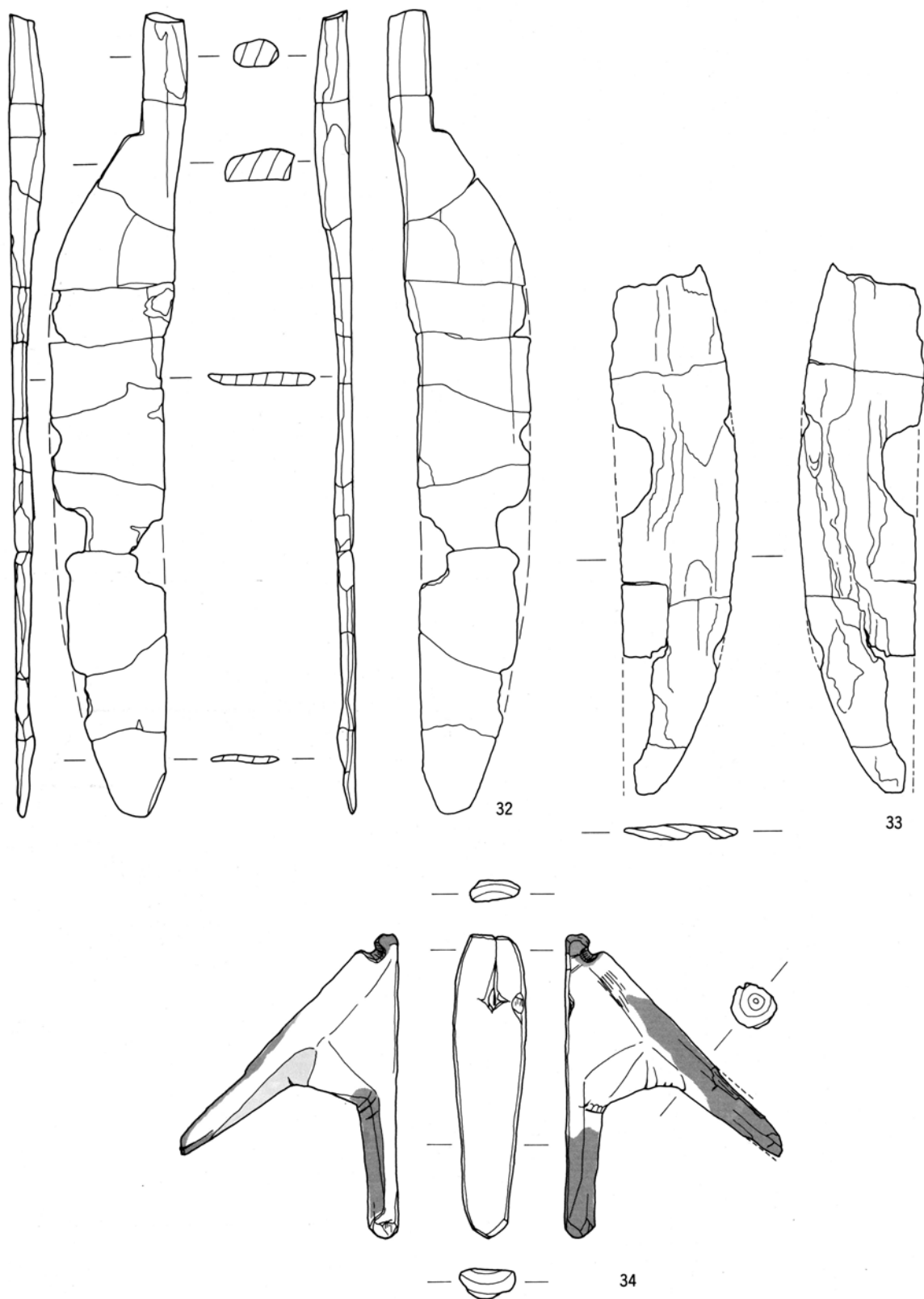
30

0 20cm

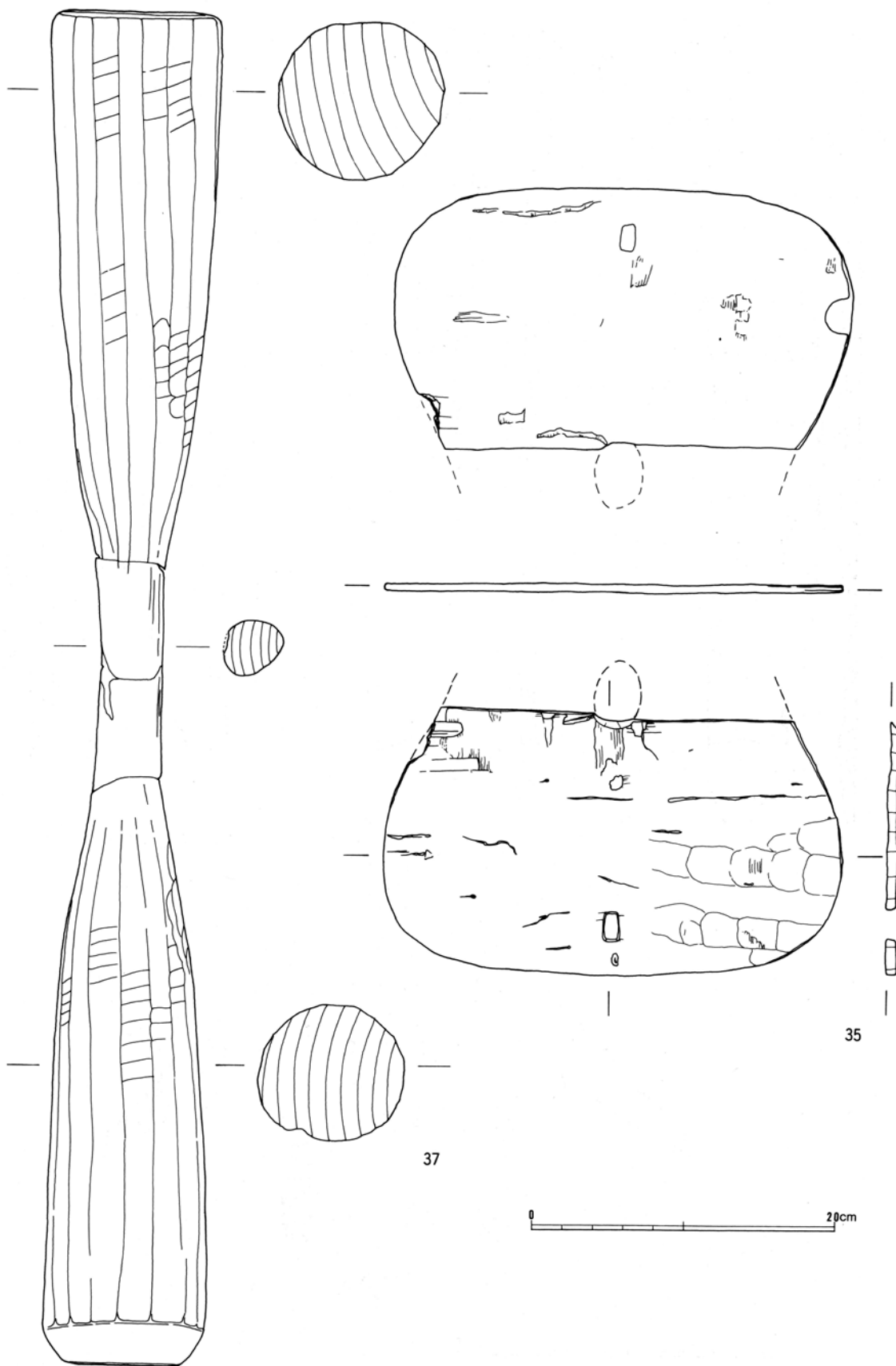
II-1 期木製品実測図(3) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点IV



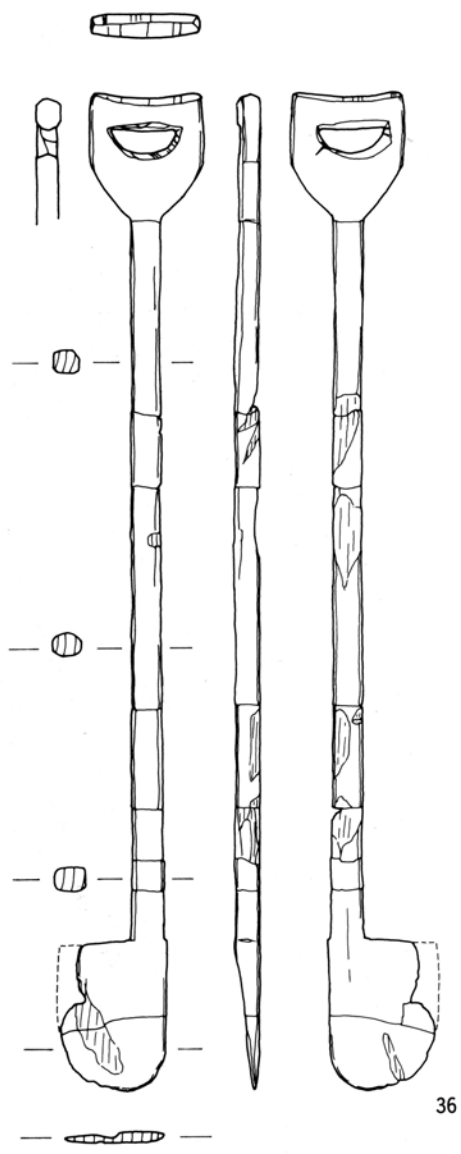
II-1期木製品実測図(4) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点IV



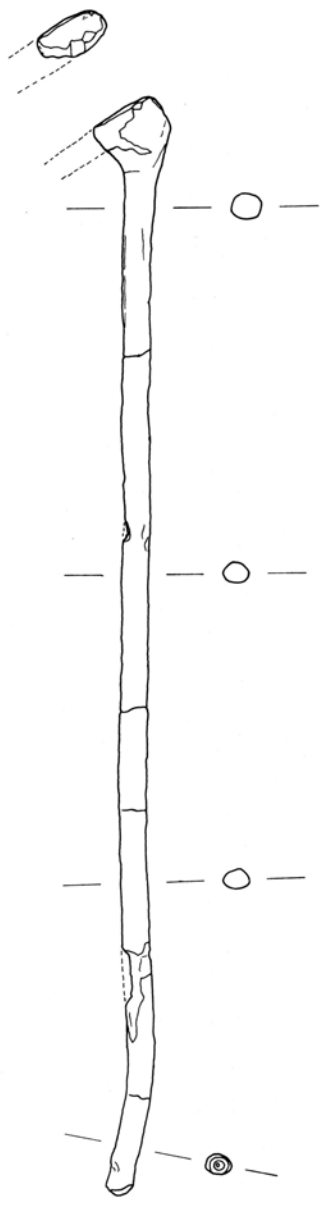
II-1 期木製品実測図(5) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点IV



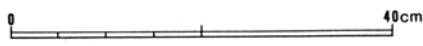
II-1期木製品実測図(6) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点IV



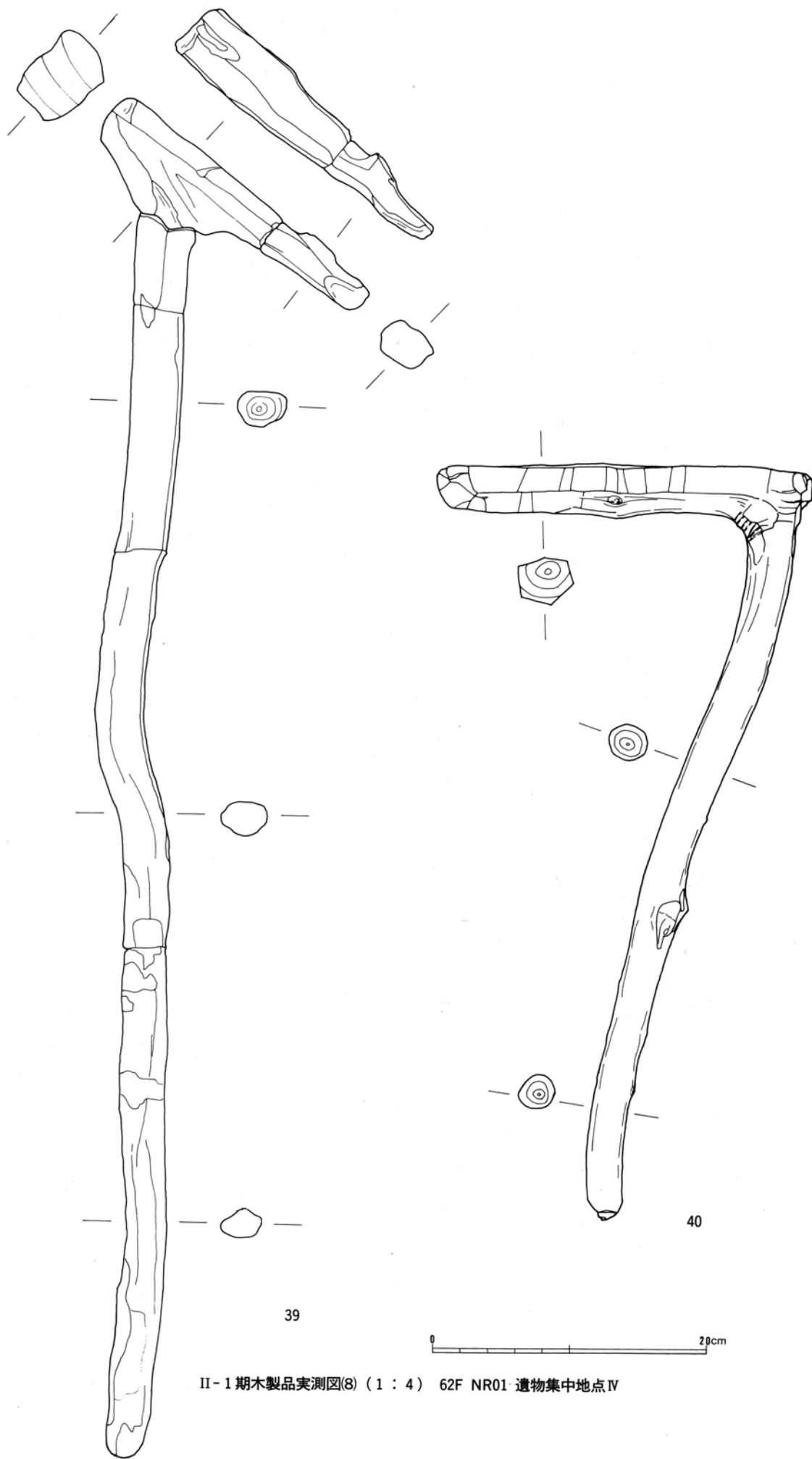
36



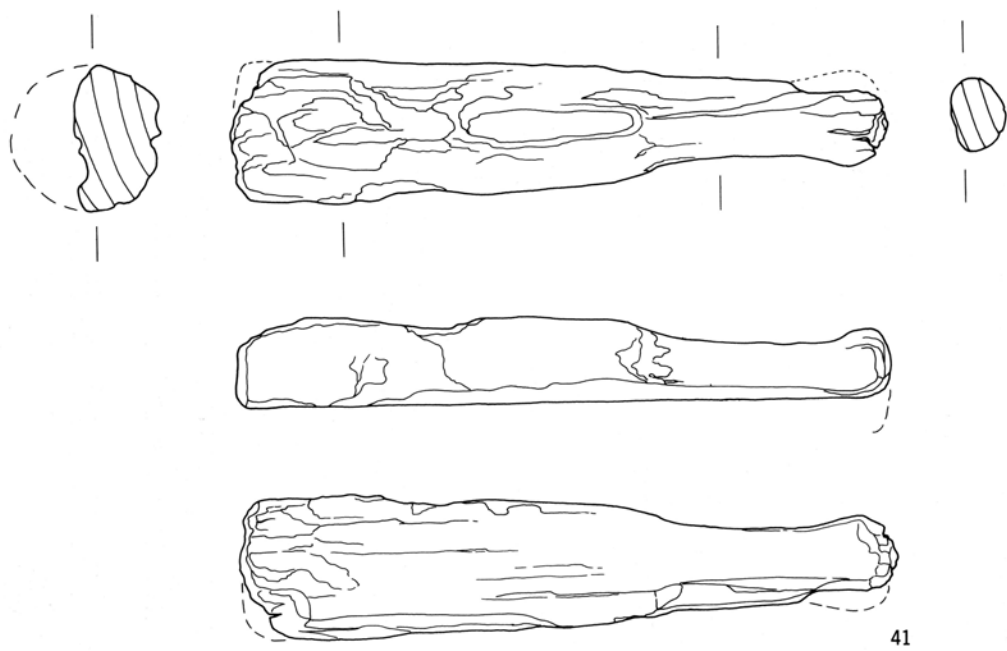
38



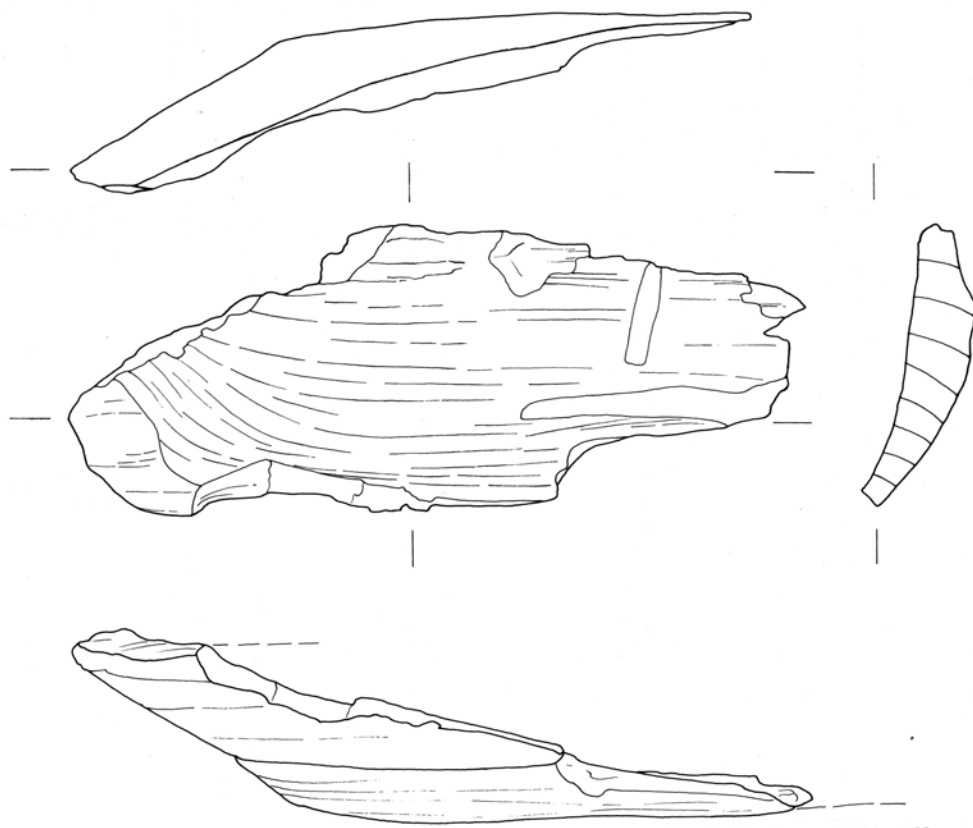
II-1 期木製品実測図(7) (1 : 8) 62F NR01 遺物集中地点IV



II-1期木製品実測図(8) (1 : 4) 62F NR01 遺物集中地点Ⅳ



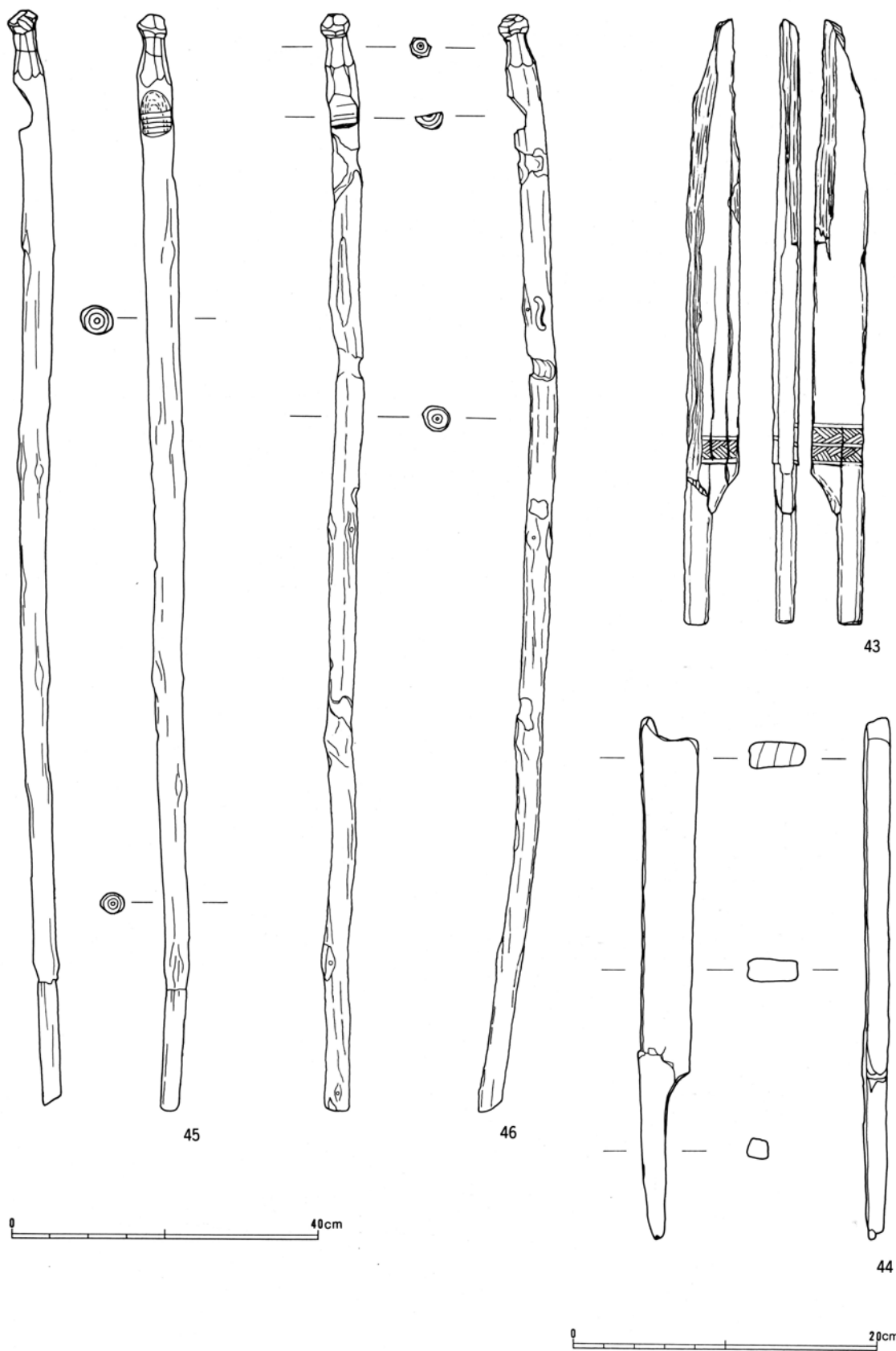
41



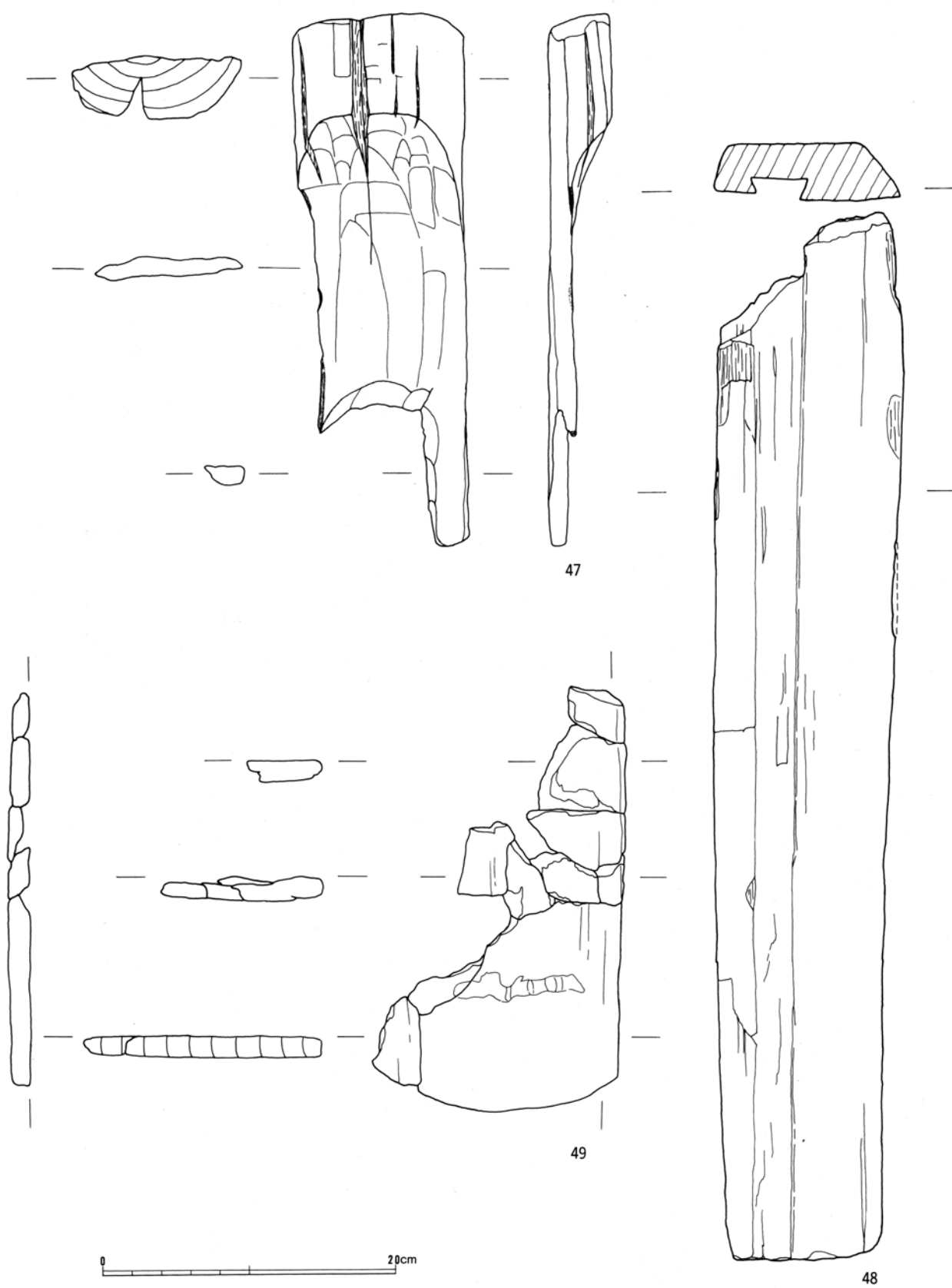
42



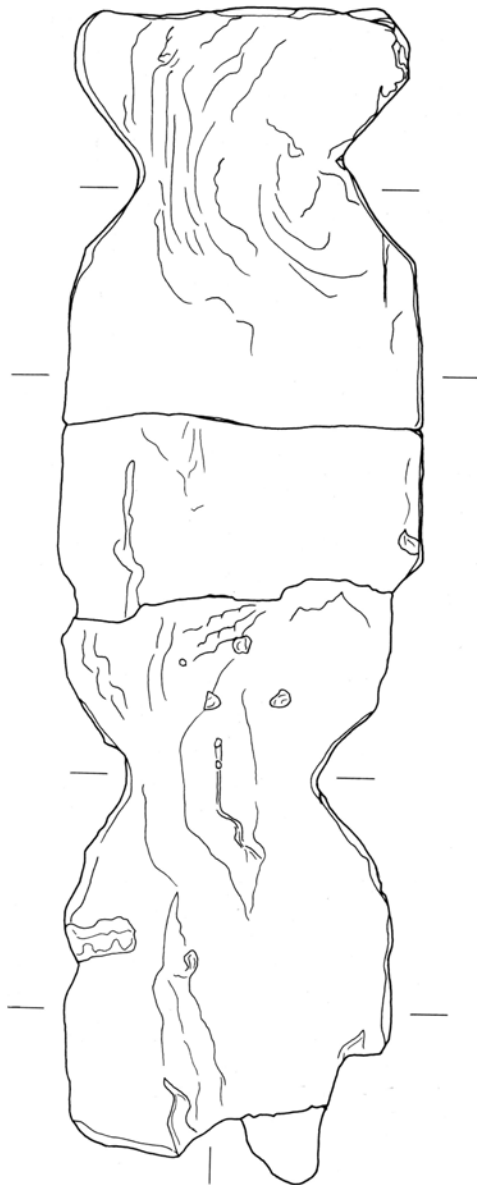
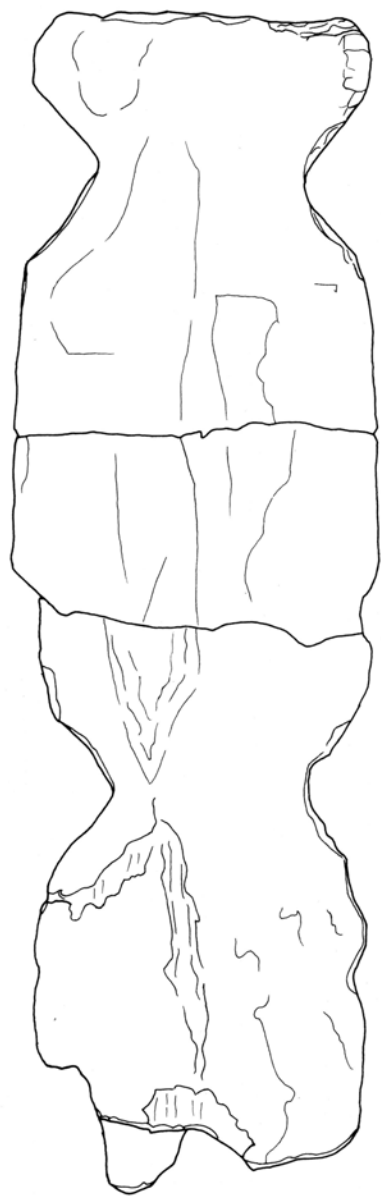
II-1期木製品実測図(9) (1:4) 62F NR01 遺物集中地点Ⅳ



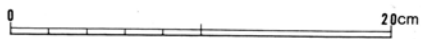
II-1 期木製品実測図(10) (1 : 4 · 1 : 8) 62F NR01 遺物集中地点IV



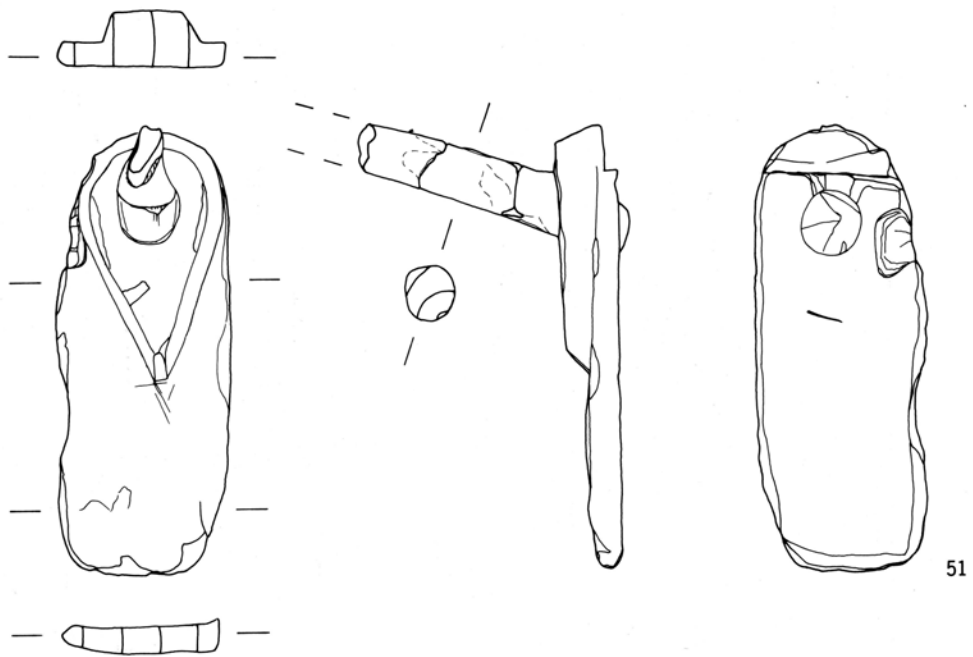
II-1期木製品実測図(11) (1:4) 62F NR01 遺物集中地点IV



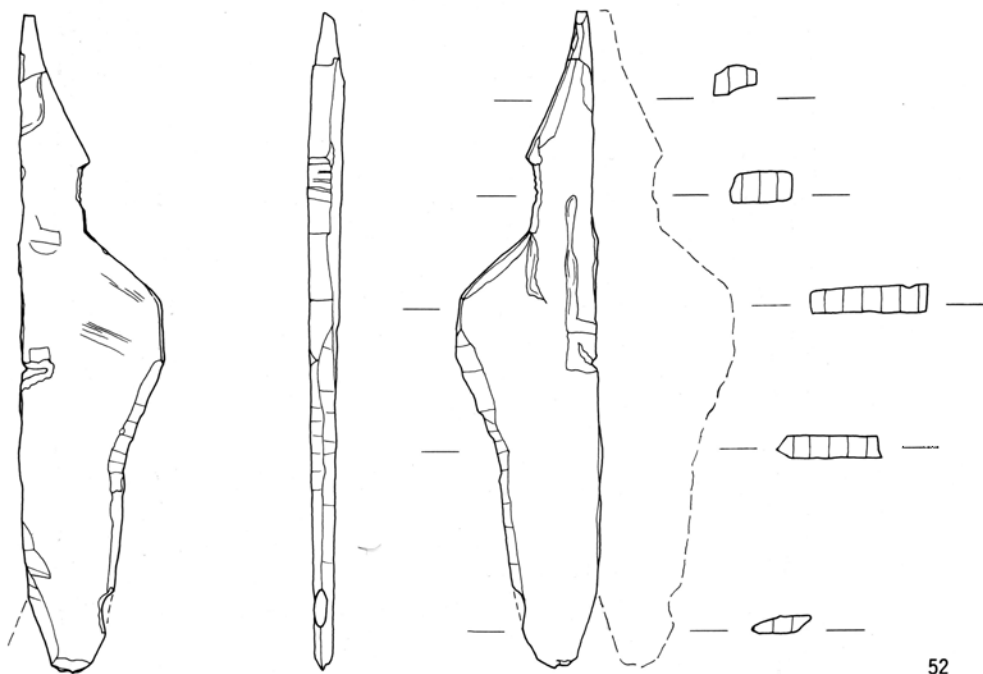
50



II-2 期木製品実測図(1) (1 : 4) 62F SX03



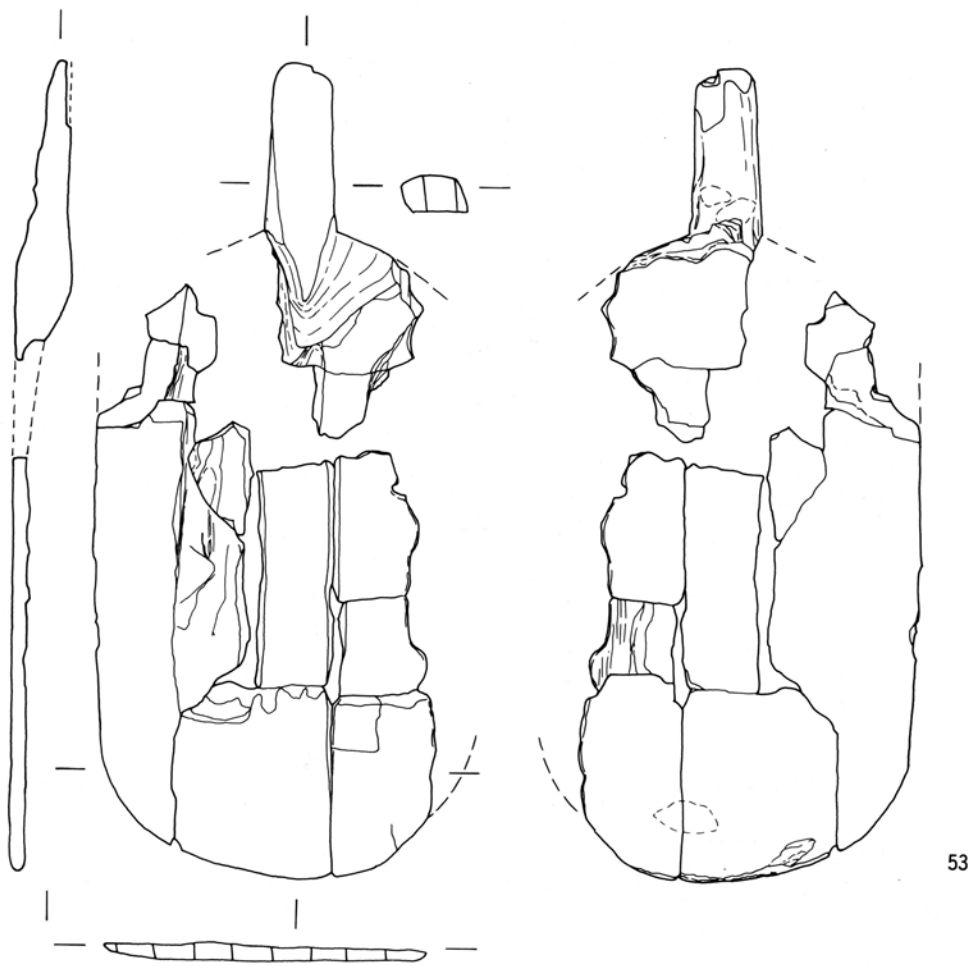
51



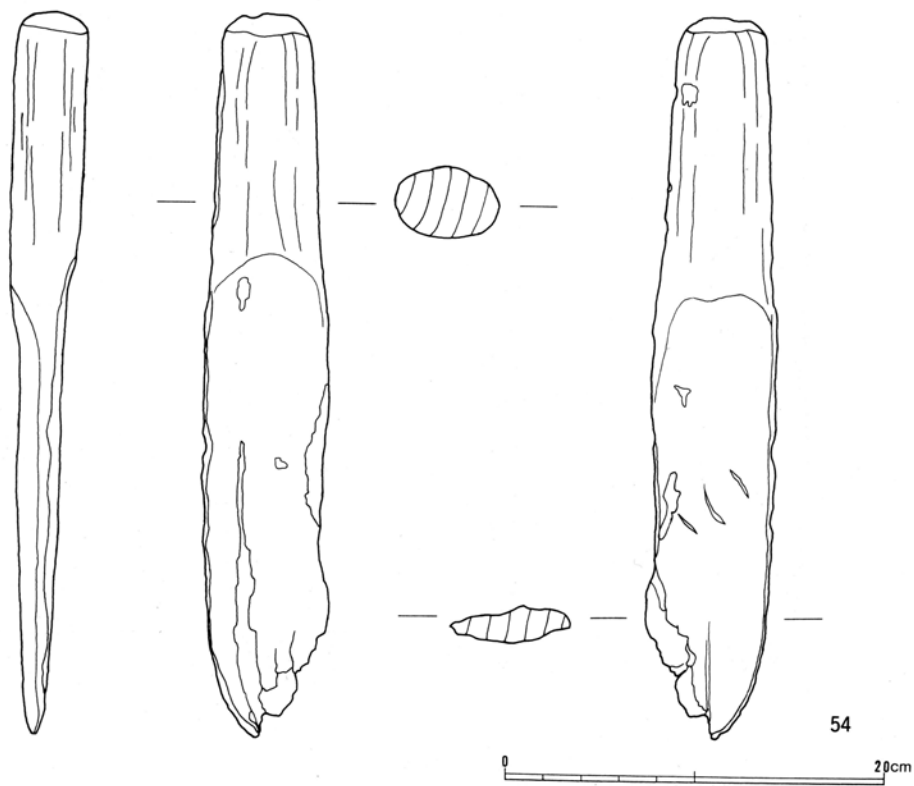
52



II-2期木製品実測図(2) (1:4) 62F SX03



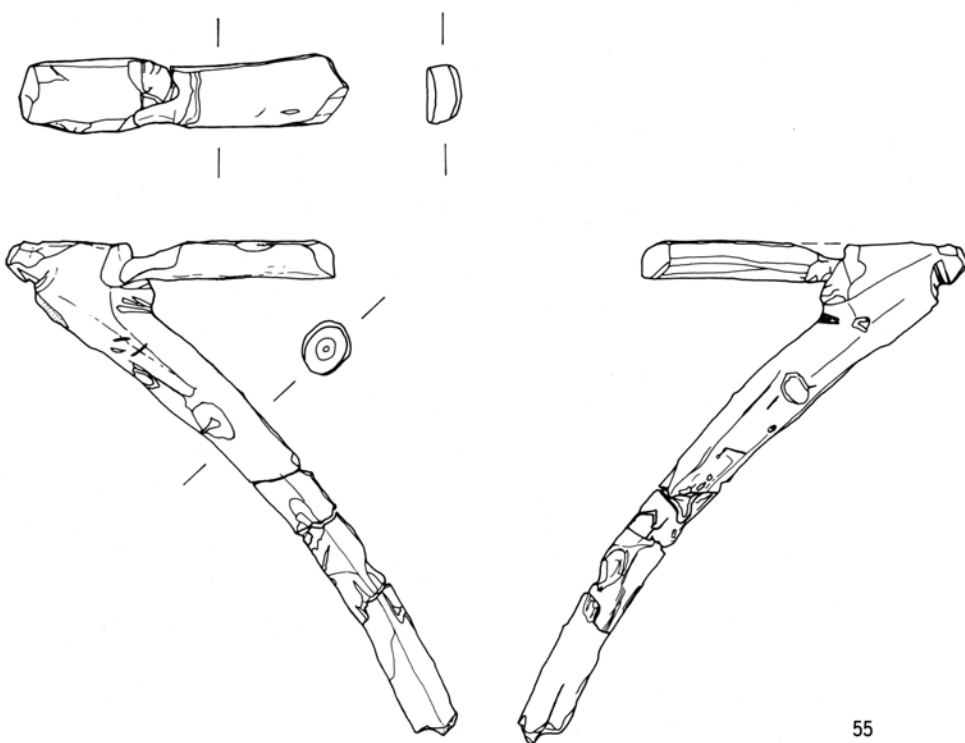
53



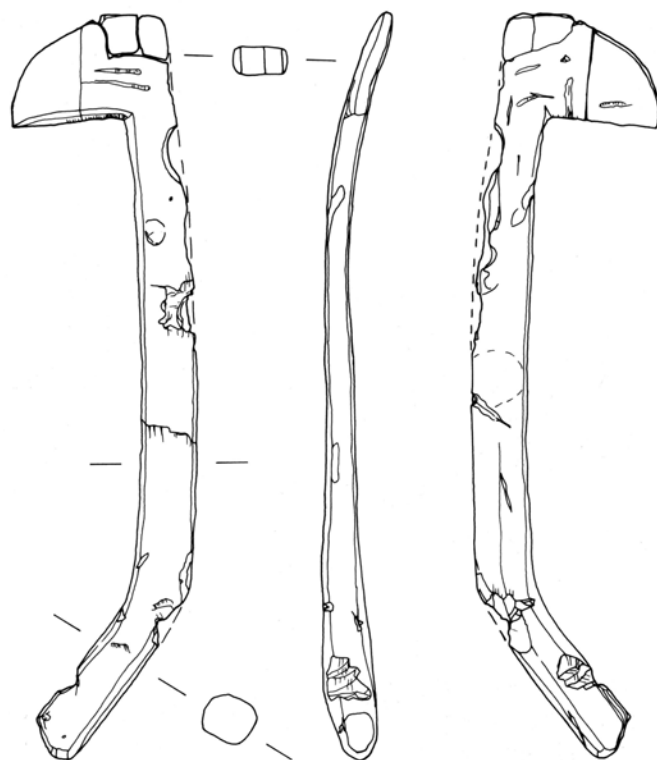
54

0 20cm

II-2 期木製品実測図(3) (1 : 4) 62F SX03



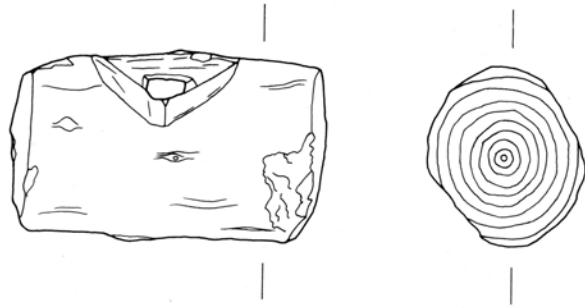
55



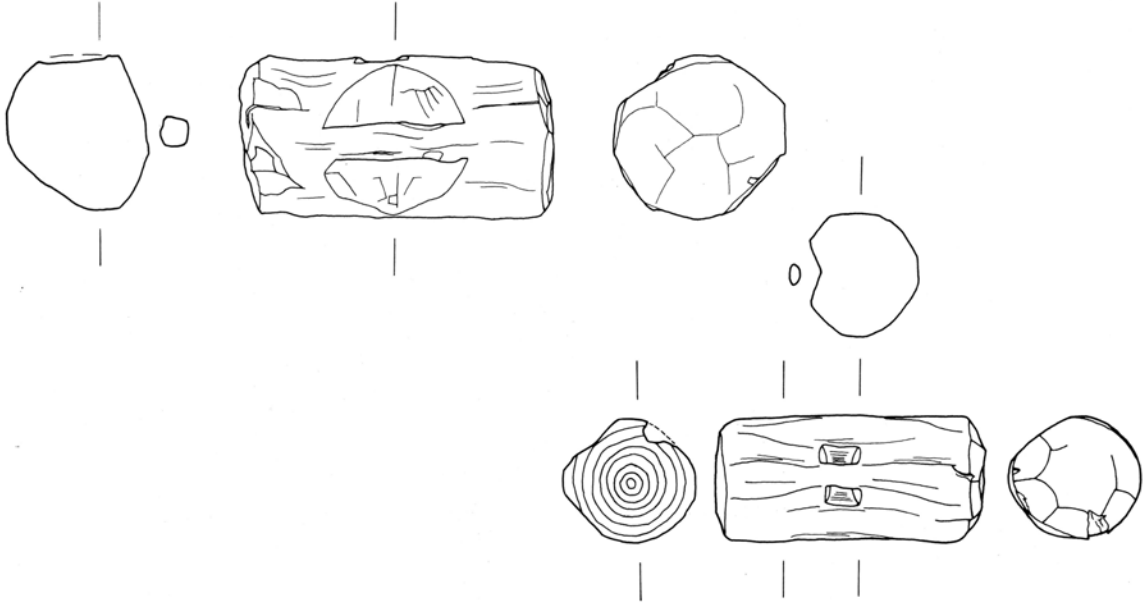
56



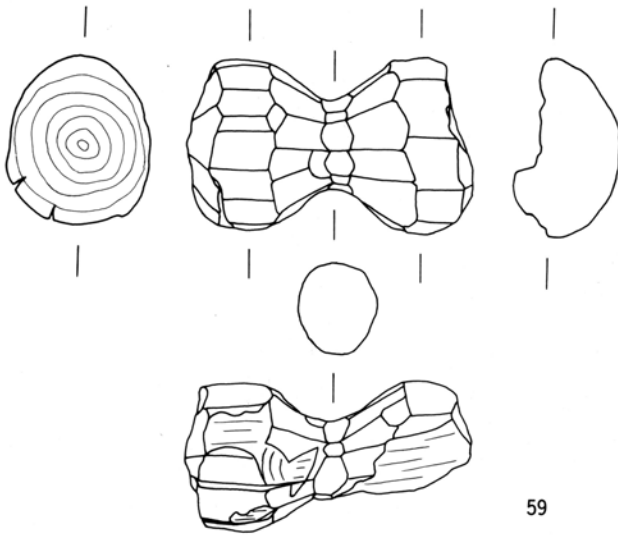
II-2 期木製品実測図(4) (1 : 4) 62F SX03



57

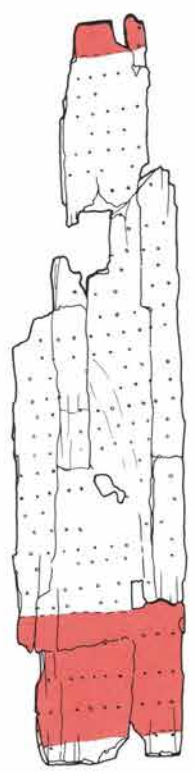
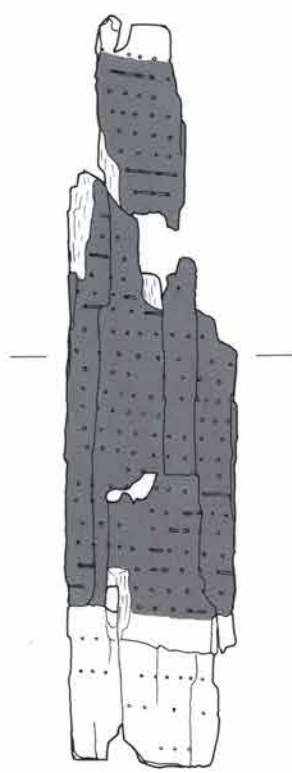


58

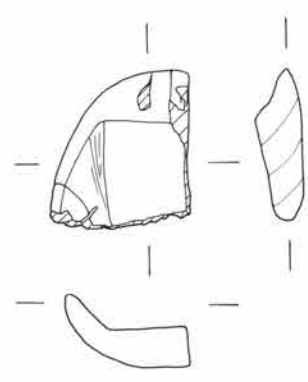


59

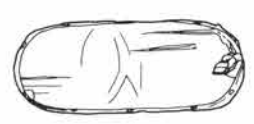
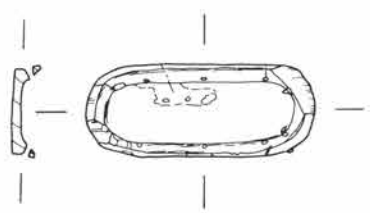




60

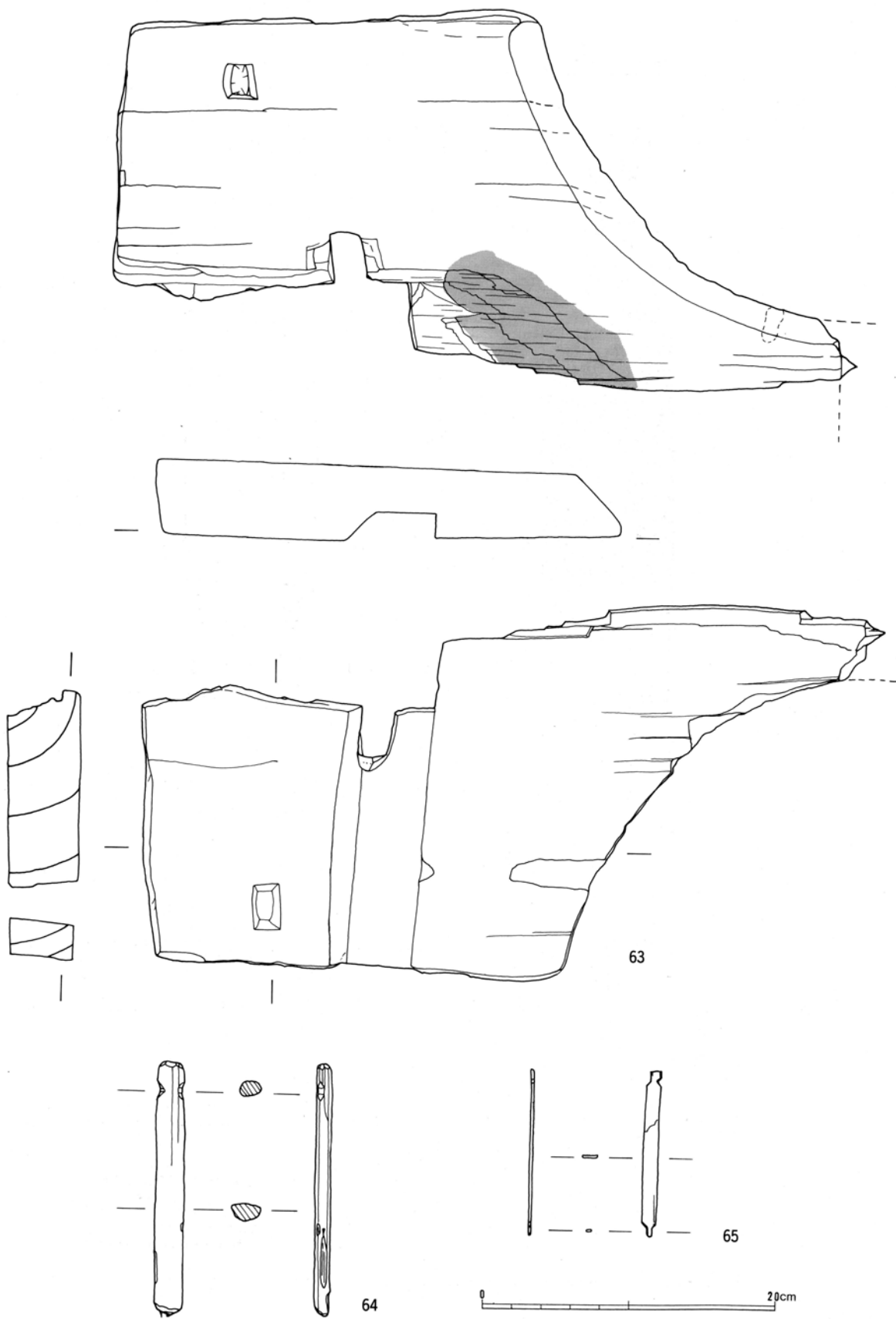


61

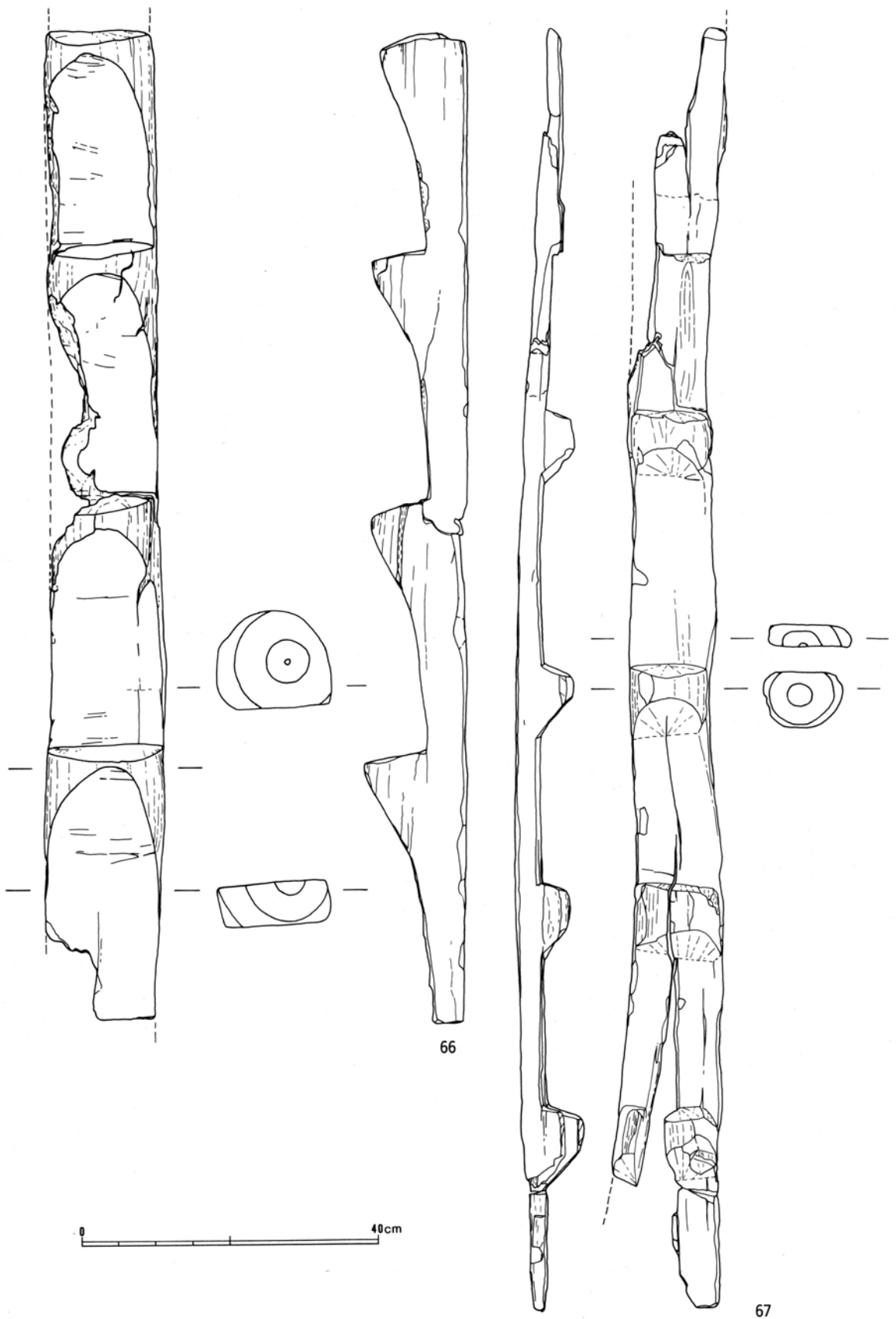


62

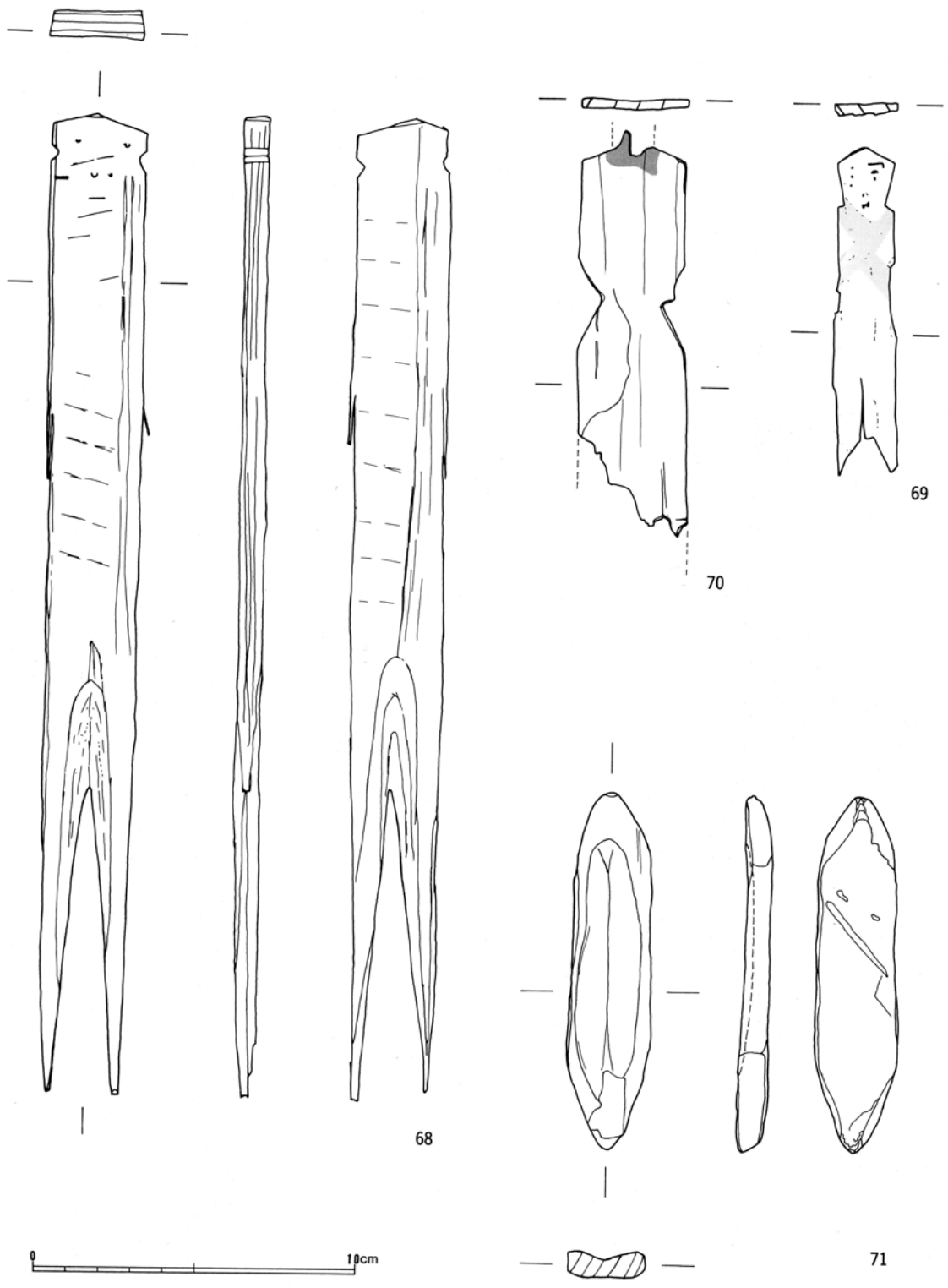




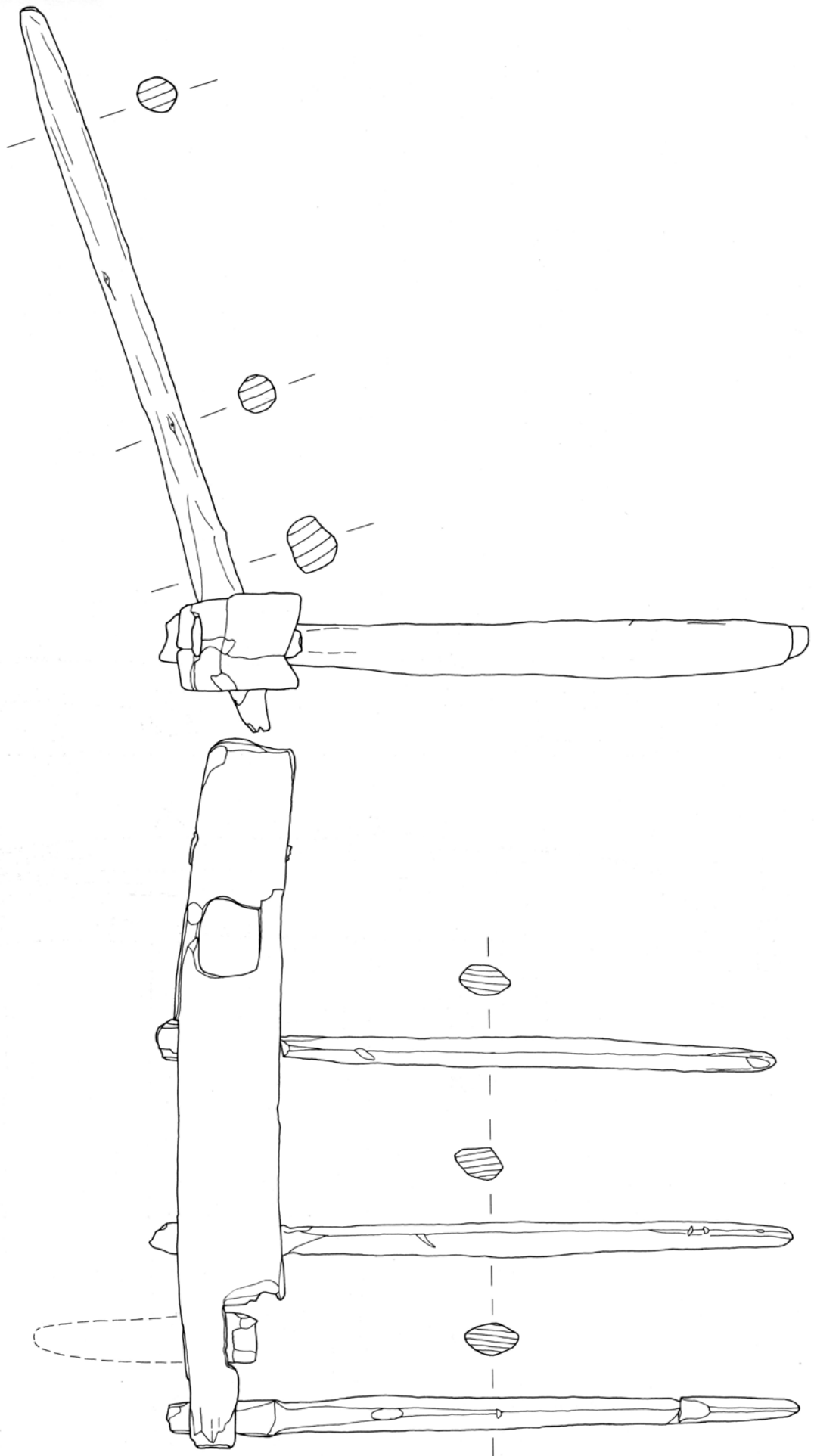
II-2期木製品実測図(7) (1:4) 62F SX03



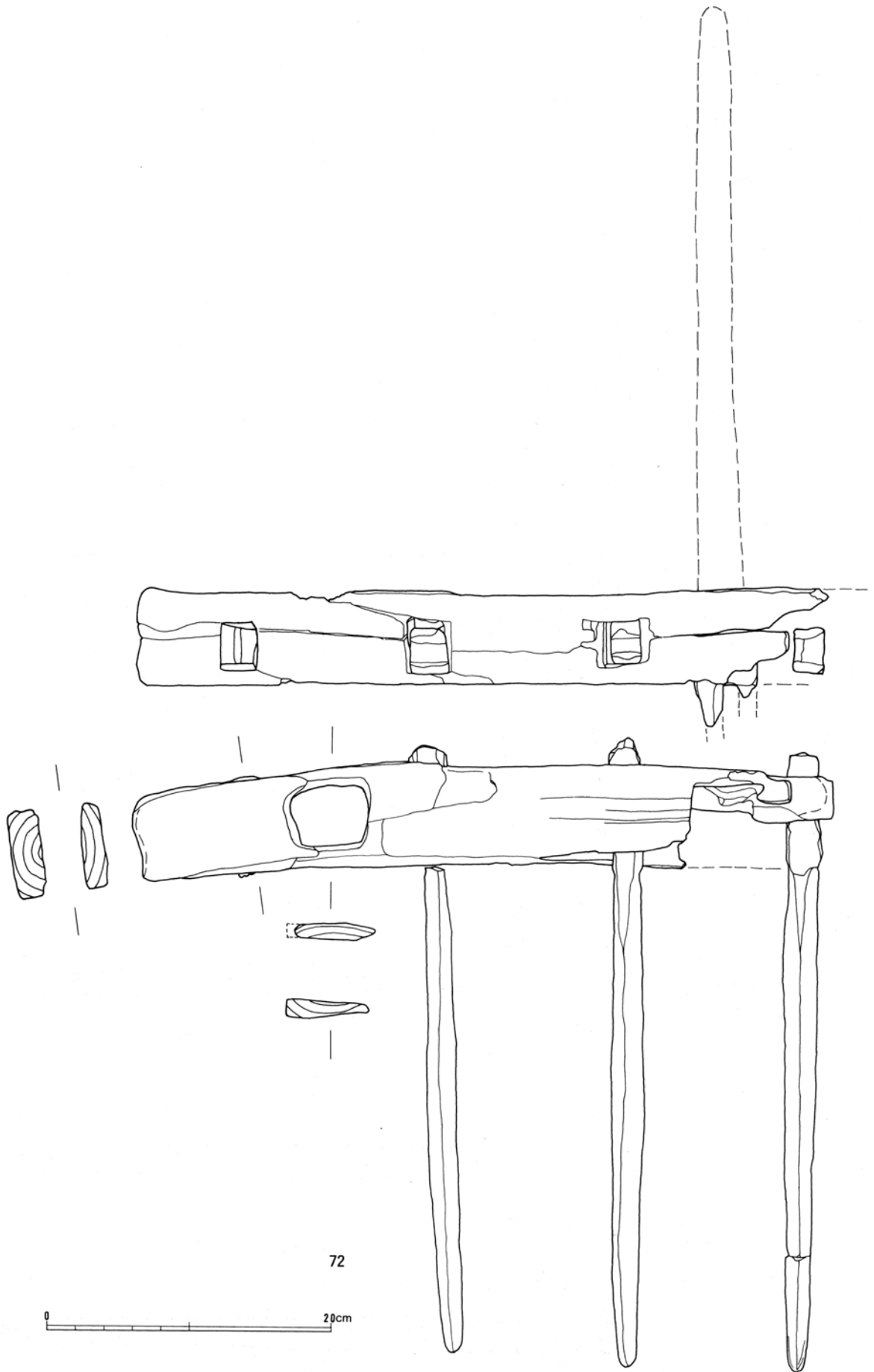
II-2 期木製品実測図(8) (1 : 4) 62F SX03



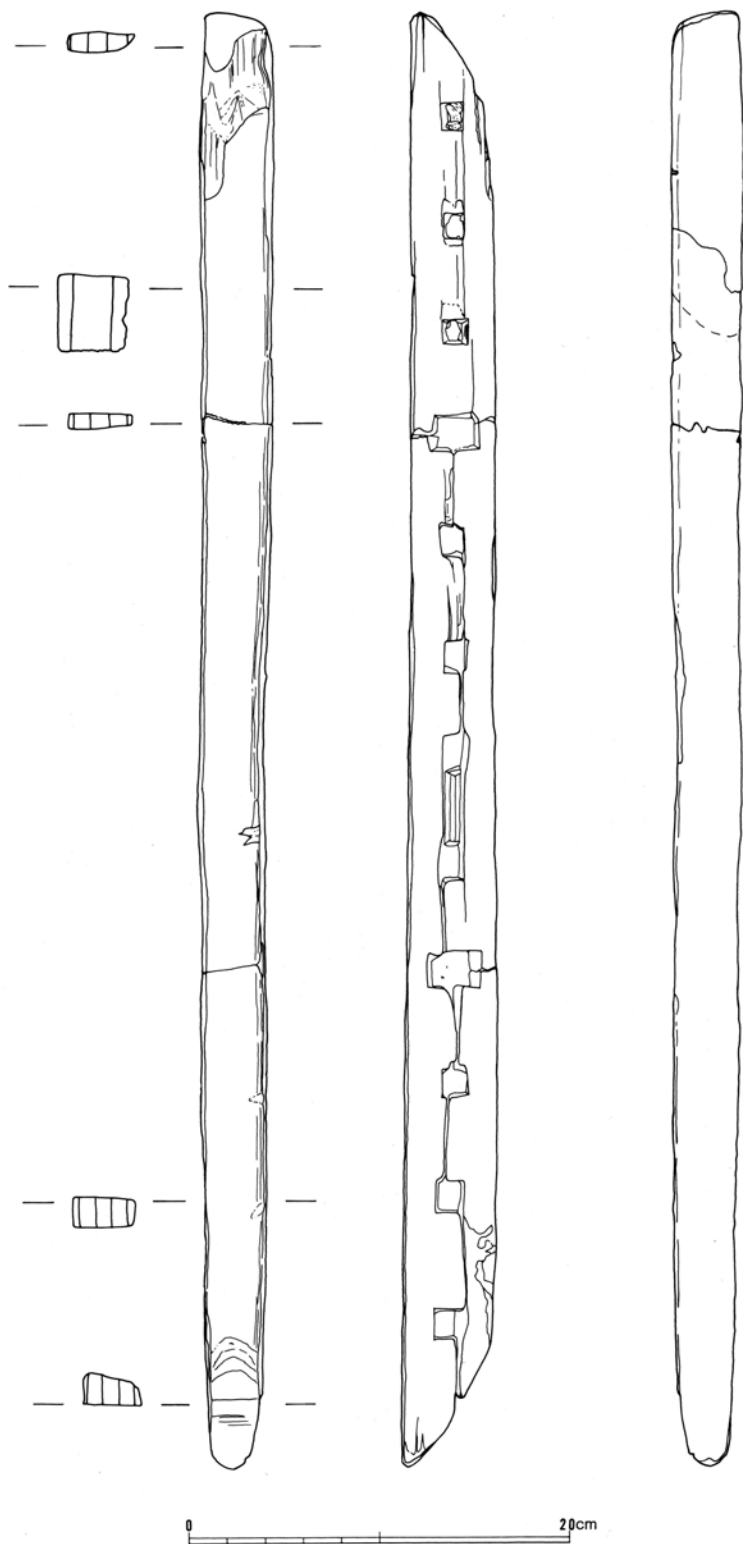
III-1期木製品実測図(1) (1:4) 62F SX04



III-1 期木製品実測図(2) (1 : 4) 62F SX04



III-1 期木製品実測図(3) (1 : 4) 62F SX04



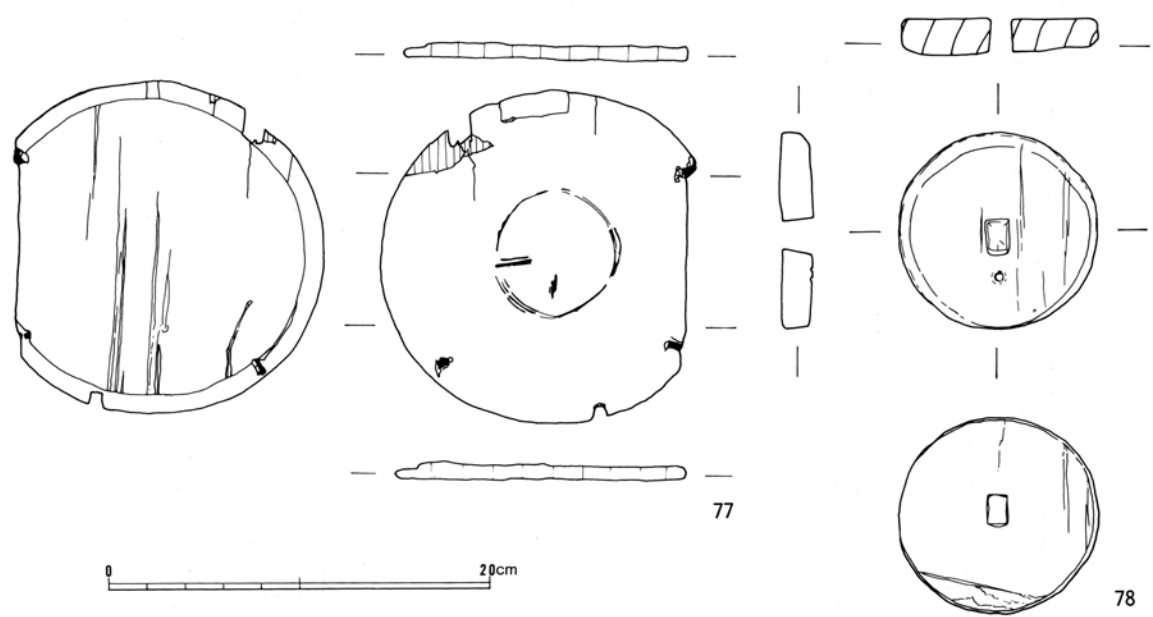
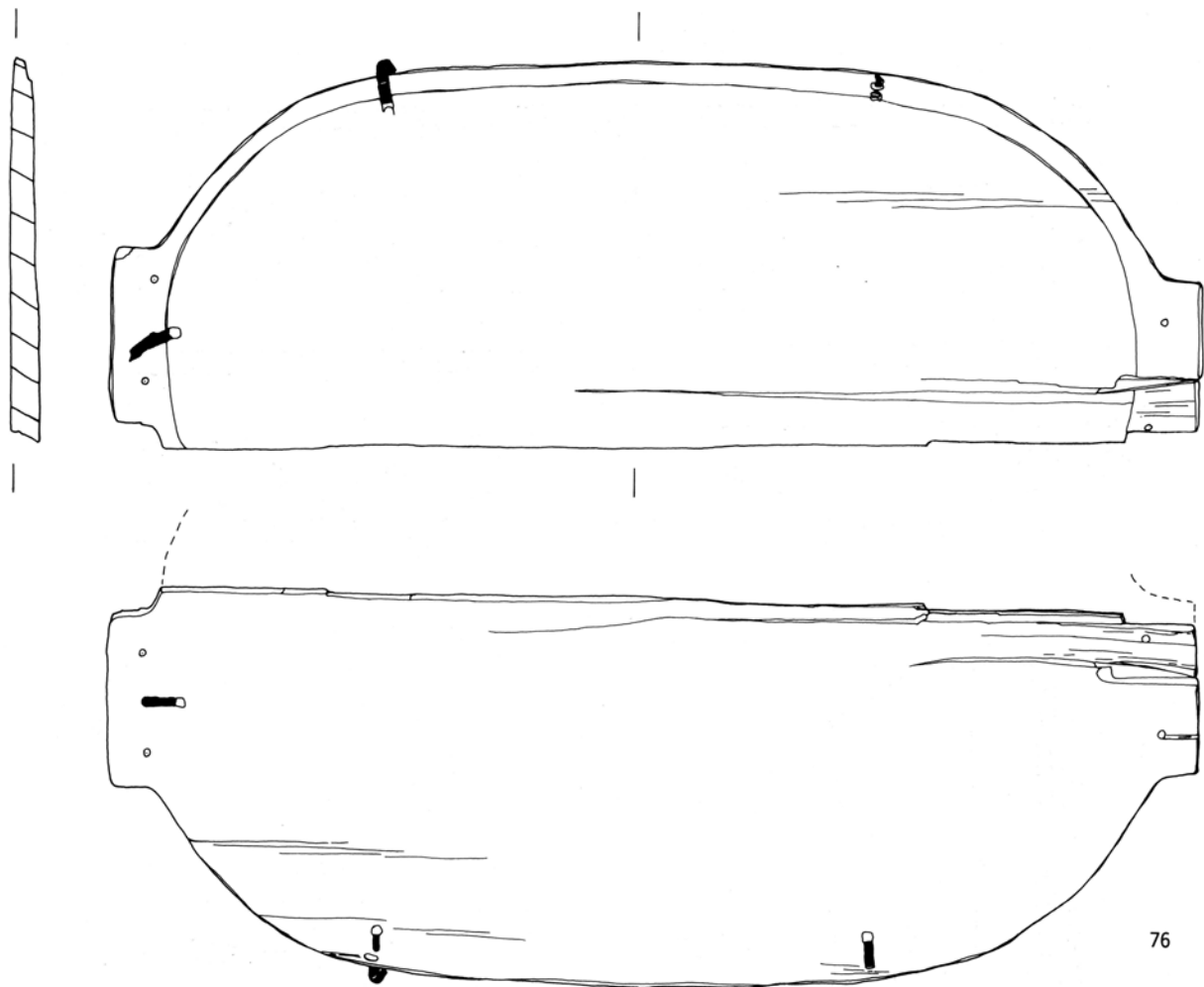
73

III-1期木製品実測図(4) (1:4) 62F SX04



0 20cm

III-1期木製品実測図(5) (1:4) 62F SX04



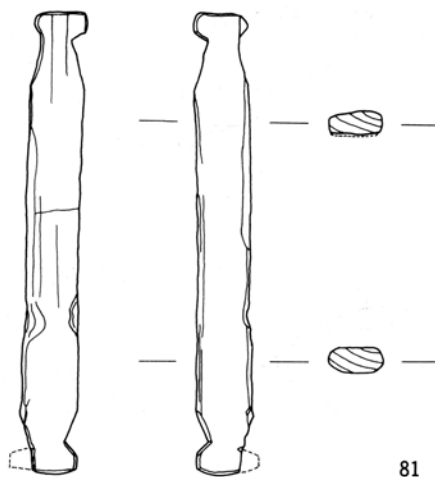
III-1 期木製品実測図(6) (1 : 4) 62F SX04



79

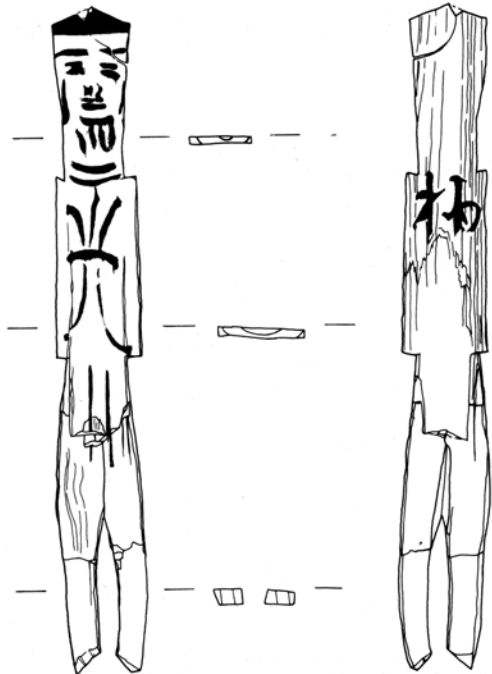
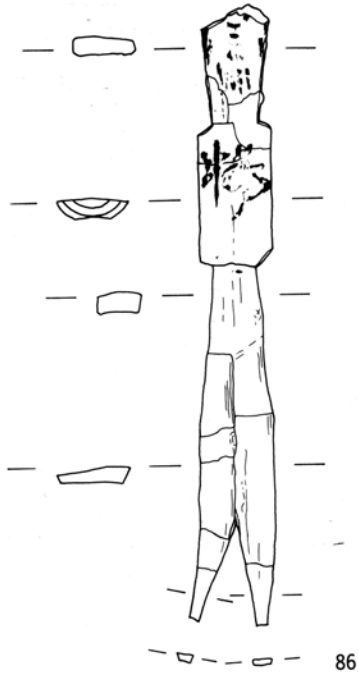
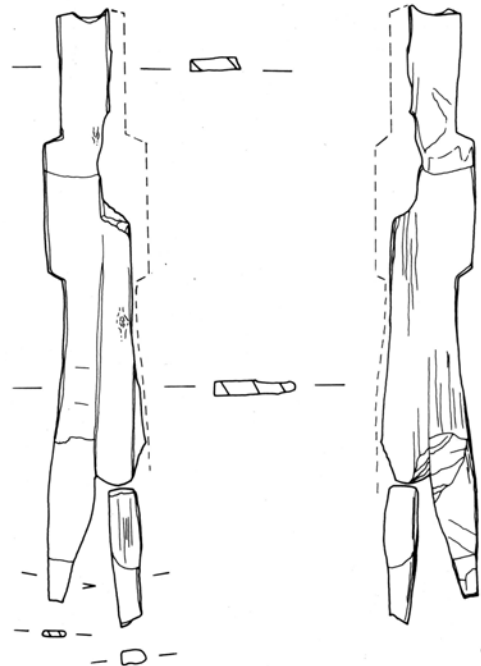
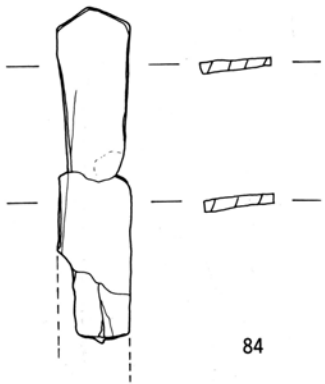
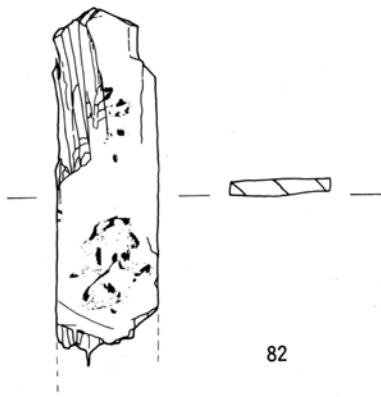


80



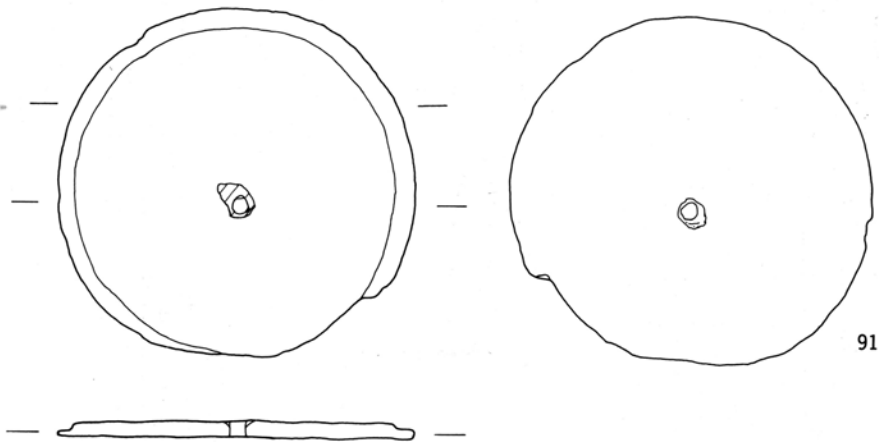
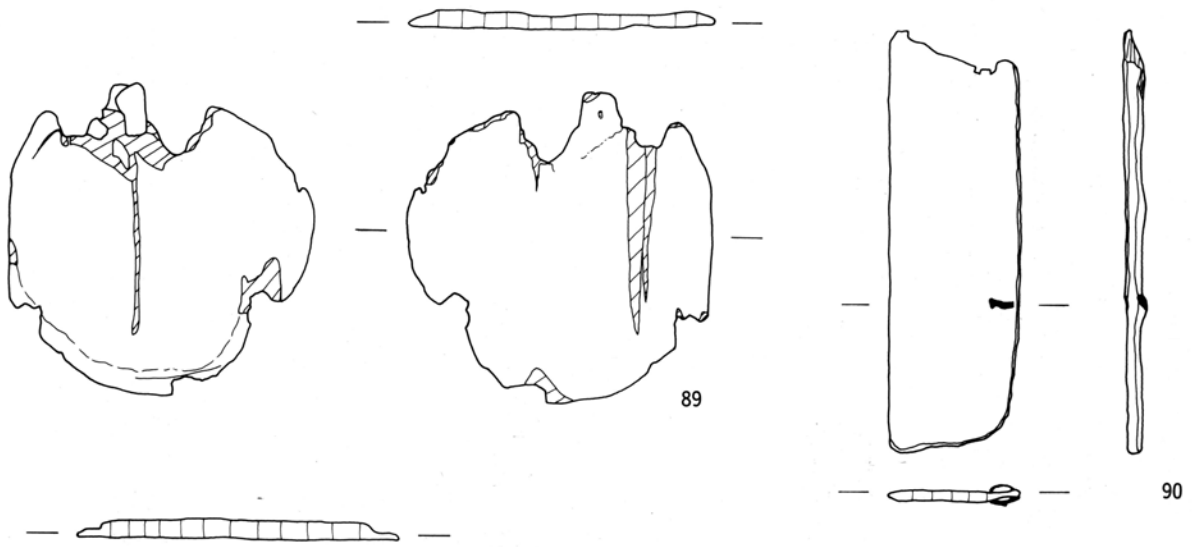
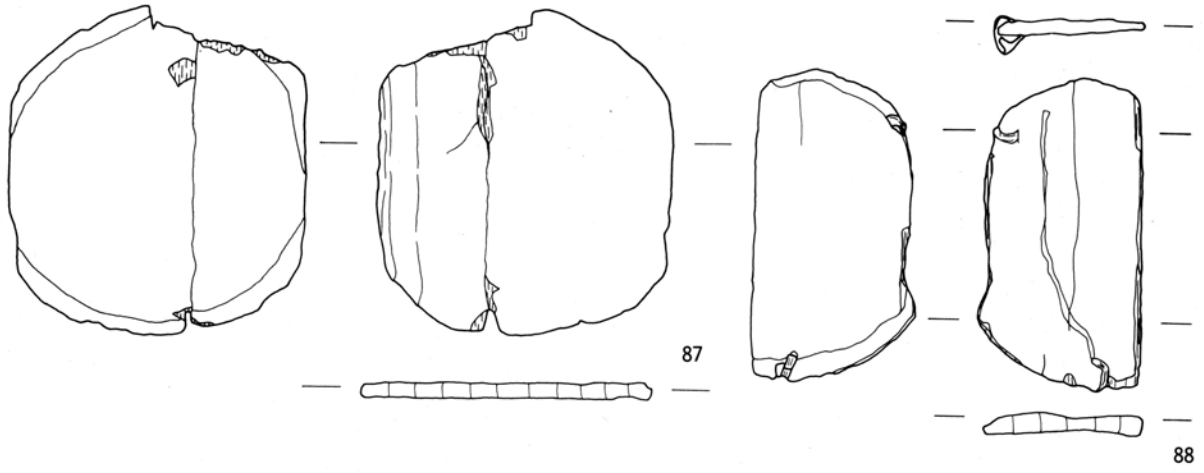
81





0 20cm

III-2 期木製品実測図(1) (1 : 2) 62F NR01 遺物集中地点 II



III-2期木製品実測図(2) (1:4) 62F NR01 遺物集中地点II

89A区

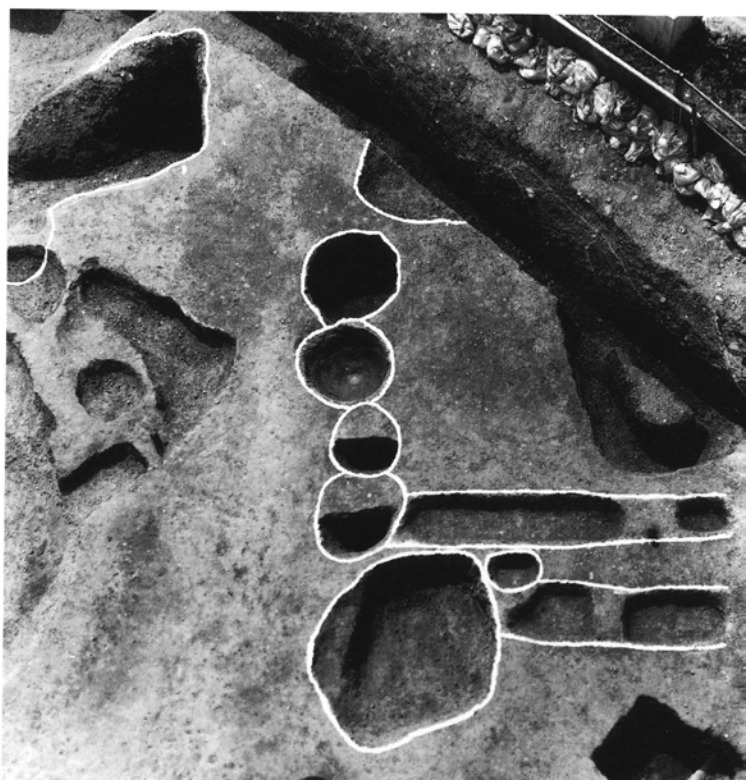
1. 全景  
北西から



2. SX01  
北から



3. 土坑群  
東から



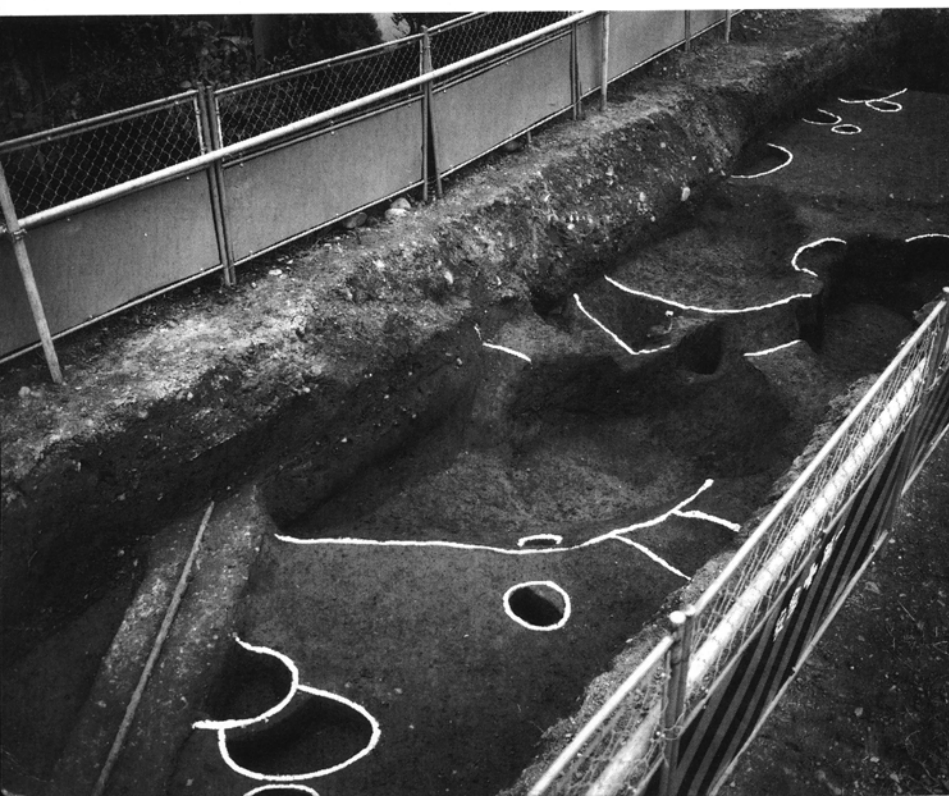
89B区



1. 全景  
南東から



2. SD01  
南から



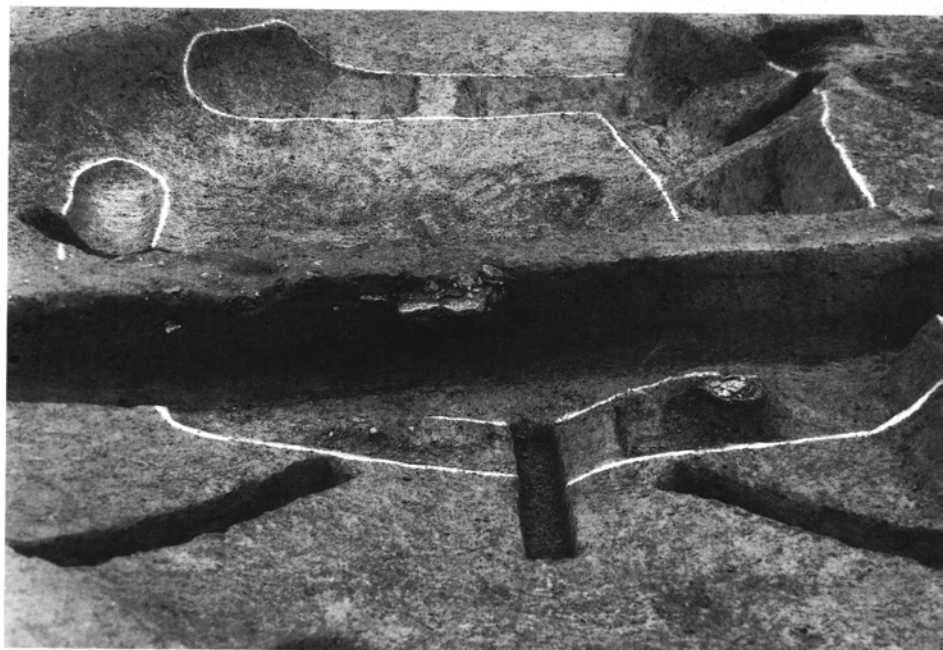
3. 方形周溝墓・土坑群  
東から

90A区

1. 全景  
東から



2. SZ06  
南から



3. SX01  
東から



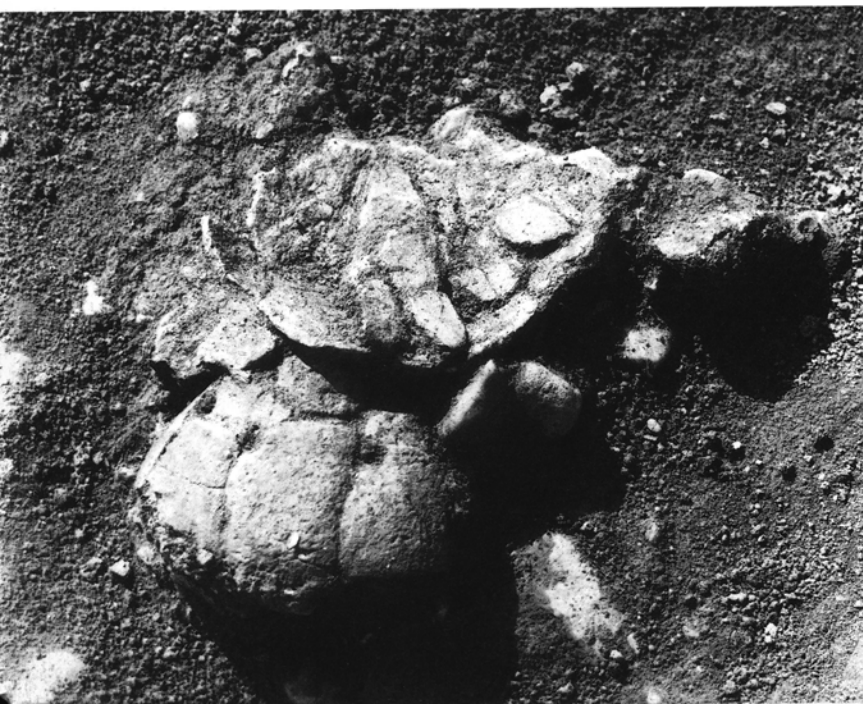
63D区 II・III期



1. 全景  
南から



2. SZ02  
西から



3. SZ02  
土器出土状況  
西から

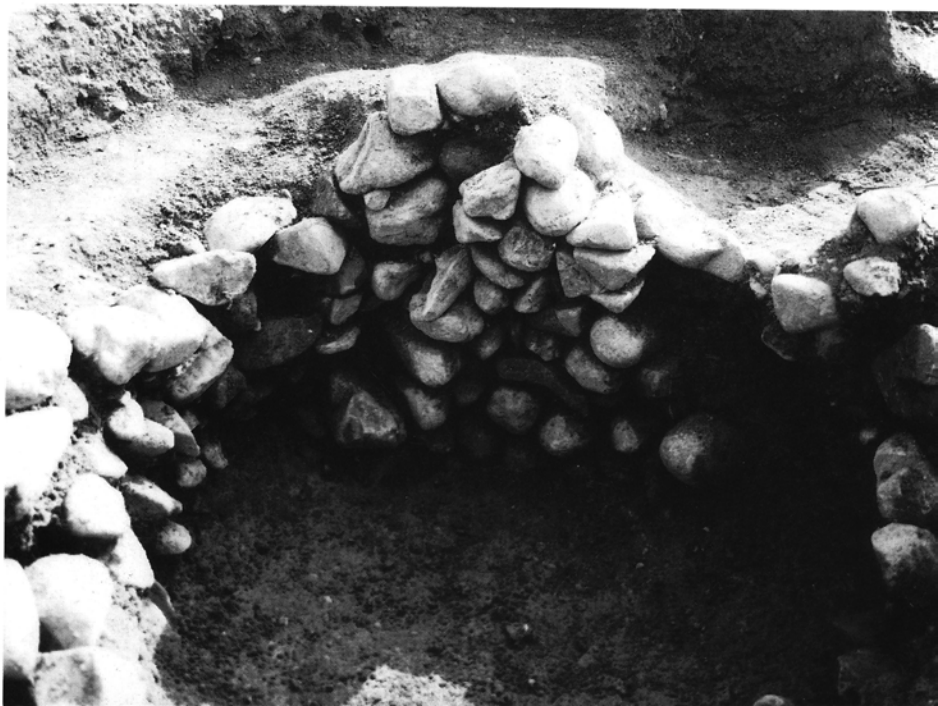
63D区 IV期



1. 全景  
東から

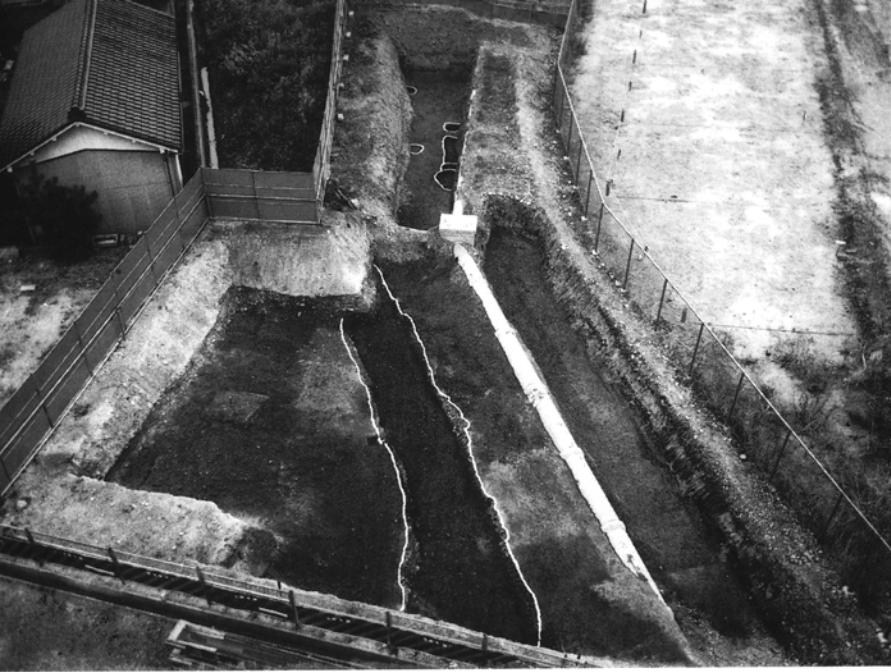


2. 全景  
南西から

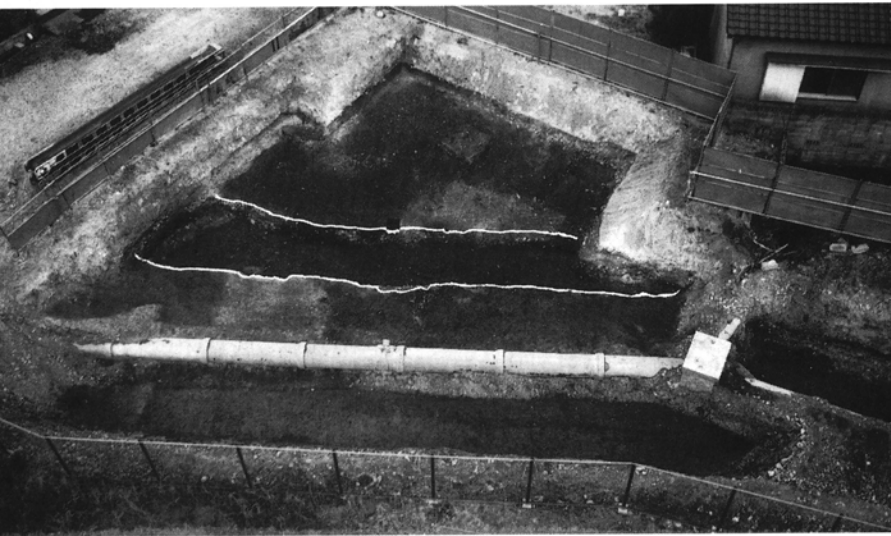


3. SE01  
北から

63B区



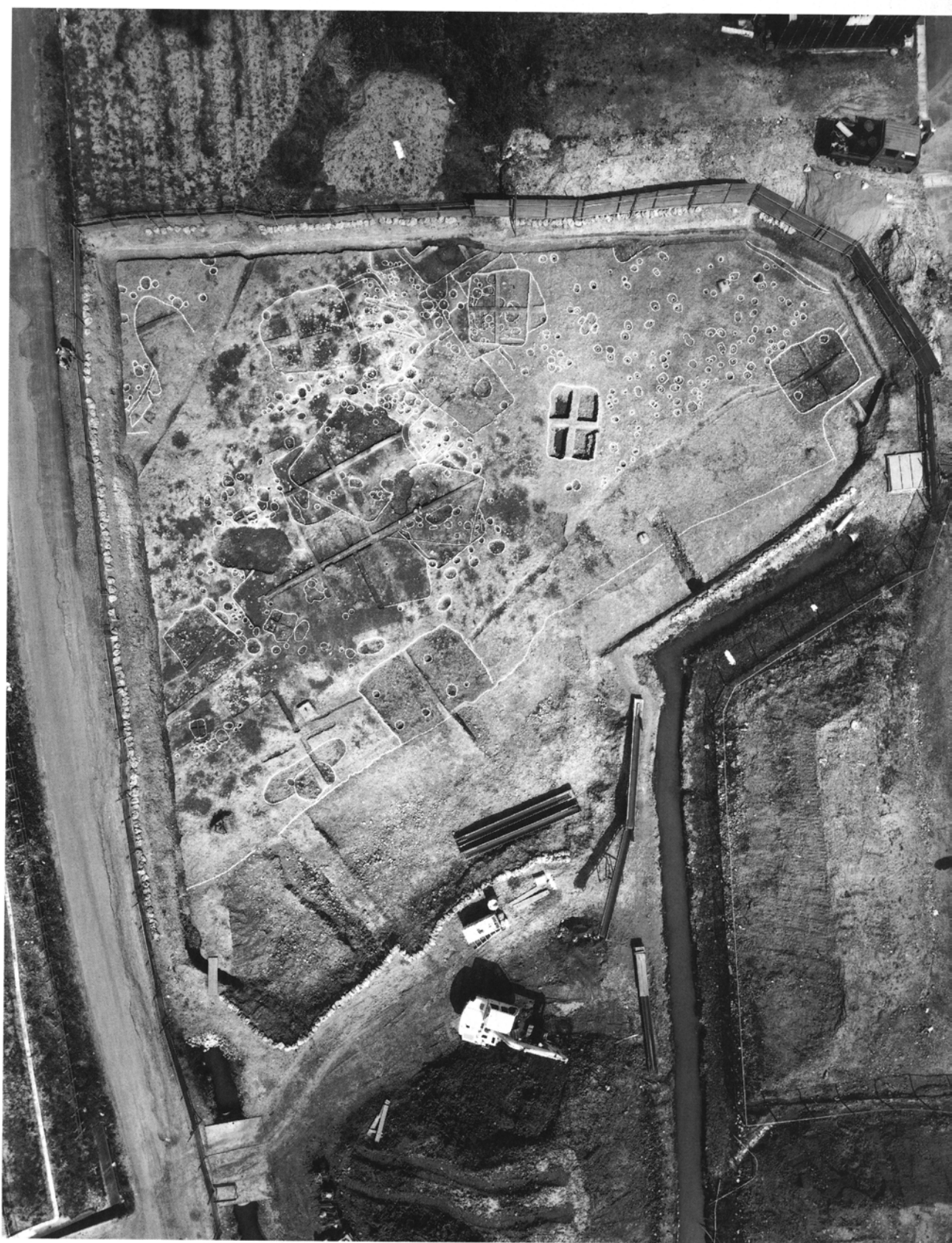
1. 全景  
西から



2. SD01  
南から



3. SD01  
西から

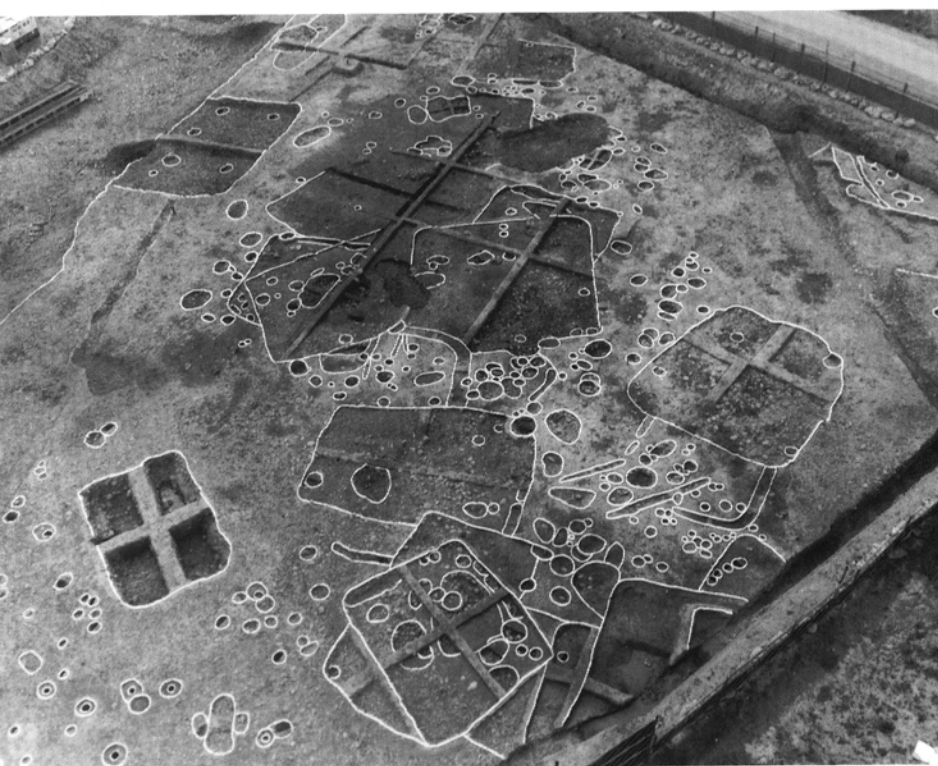


全景上空から

89C区



1. 全景  
北東から



2. 竪穴住居群  
北西から



3. SB16(手前)・15(奥)  
南から

89C区

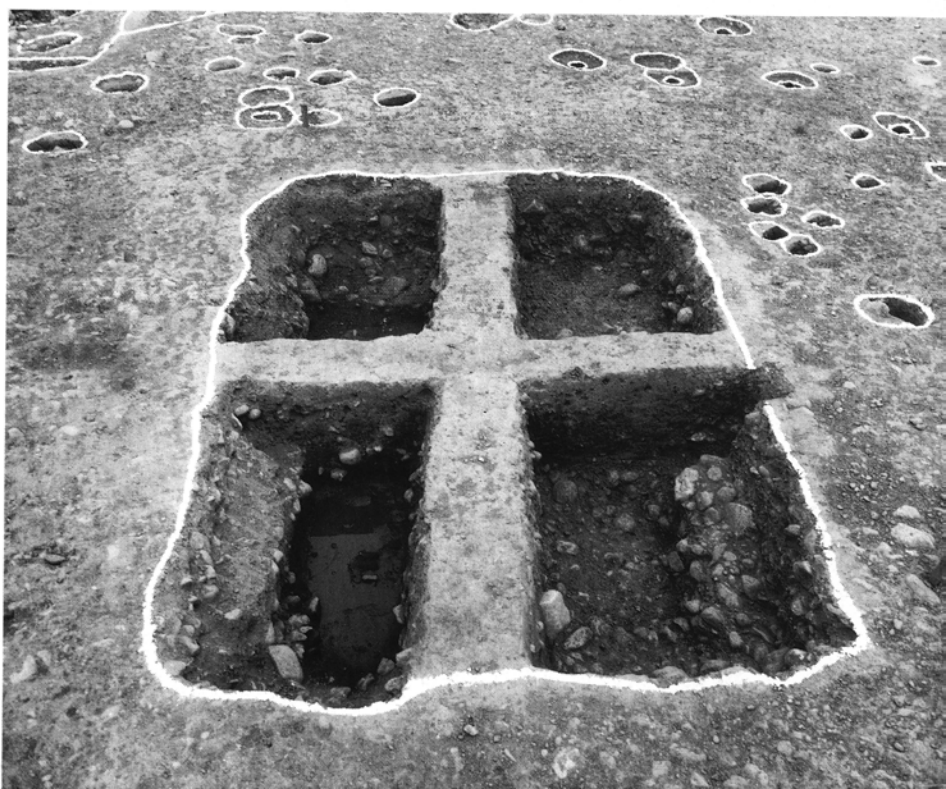
1. SB15  
北西から



2. SB09  
東から



3. SB18  
南西から



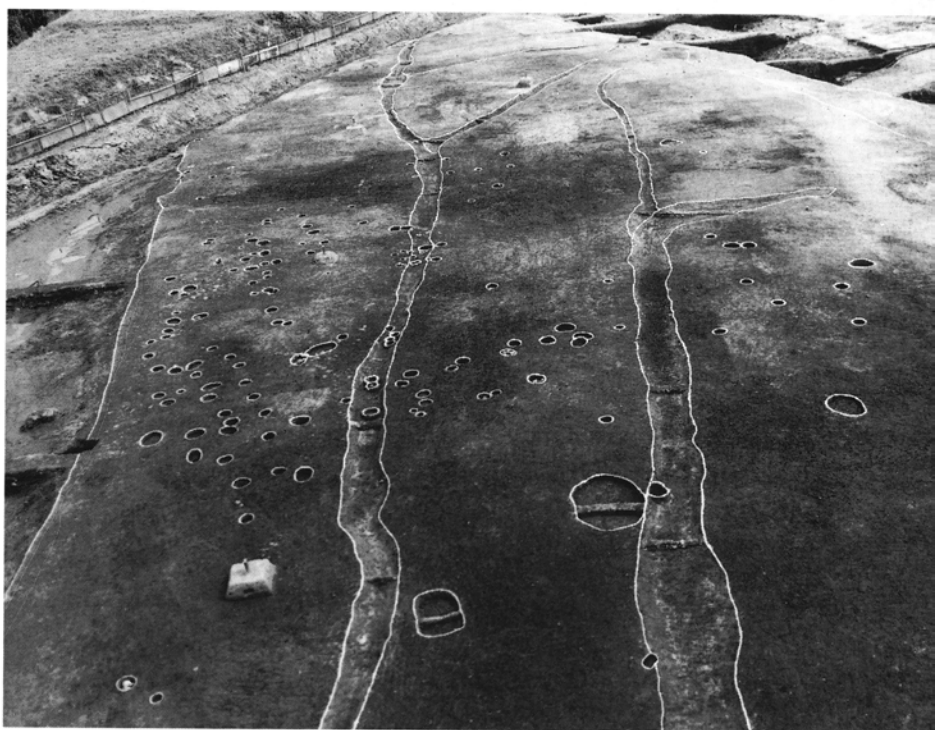


62F区 I期

1. 北半部  
南西から



2. 掘立柱建物群  
西から



3. SD60  
南西から



62F区 I期



1. SX01  
西から



2. SX01  
木製品出土状況  
北から



3. SX01  
広鋤出土状況  
北西から

62F区 I期

1. SX01  
広鋏出土状況  
南東から



2. SX01  
膝柄股鋏出土状況  
北東から



3. SX01  
横斧柄出土状況  
南西から(左)



4. SD60  
杓子出土状況  
北から(右)



62F区 I・II期



1. SD60  
板材出土状況  
南から



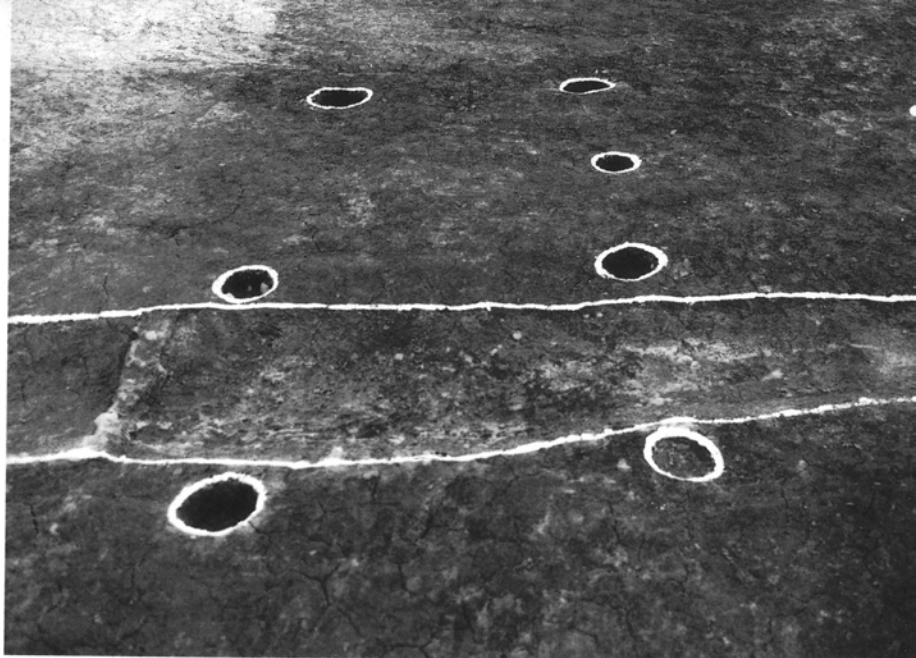
2. SD13  
木製品出土状況  
東から



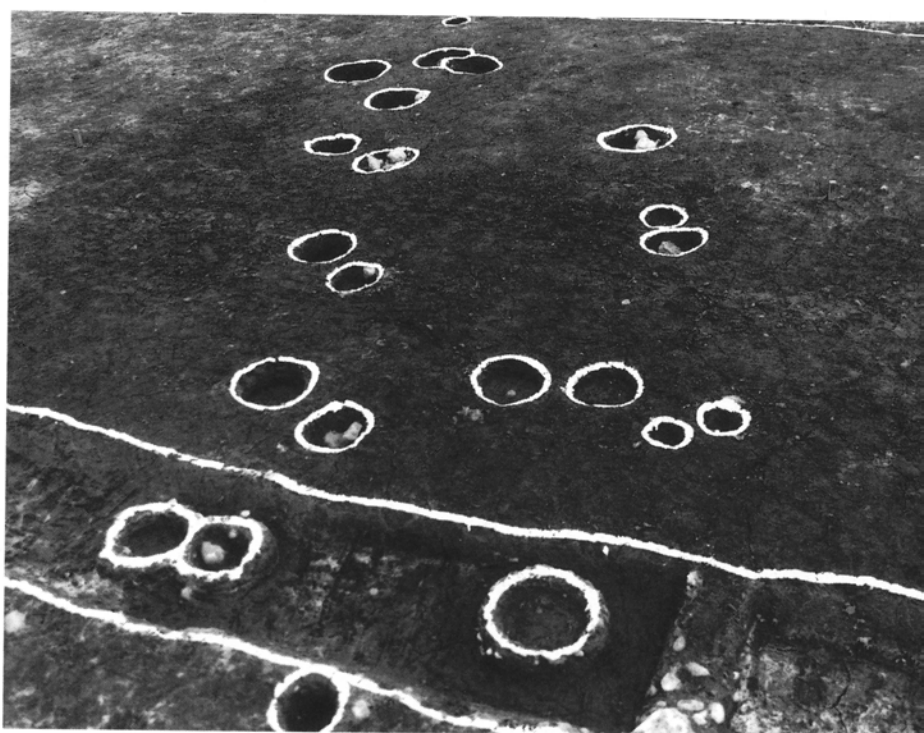
3. SD08  
一木鋤出土状況  
東から

62F区 I期

1. SB10  
検出状況  
北から



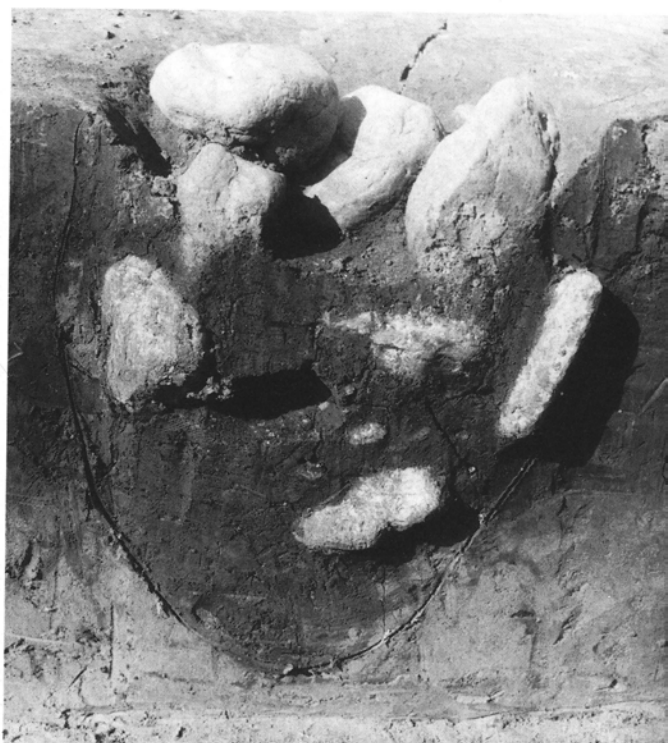
2. SB01・02  
検出状況  
北から



3. SB02P14柱穴  
検出状況  
南から(左)



4. 同左  
断ち割り状況  
東から(右)



62F区 II・III期



1. NR01  
全景  
西から



2. NR01  
SX03(右)・04(左)  
北東から



3. NR01  
SX03 (奥)・04 (手前)  
南東から

62F区 II-1期

1. NR01  
遺物集中地点Ⅳ  
木製品出土状況  
東から



2. NR01  
遺物集中地点Ⅳ  
一木鋤出土状況  
西から



3. NR01  
遺物集中地点Ⅳ  
膝柄股鋤出土状況  
西から



62F区 II-1期



1. NR01  
遺物集中地点Ⅳ  
横斧柄出土状況  
南から



2. NR01  
遺物集中地点Ⅳ  
竖杵出土状況  
南から



3. NR01  
遺物集中地点Ⅳ  
木製品出土状況  
西から

62F区 II-2



1. NR01  
SX03  
木製品出土状況  
西から



2. NR01  
SX03  
広楕出土状況  
南から(右)



3. NR01  
SX03  
ナスビ形膝柄楕  
出土状況  
北から(右)



4. NR01  
SX03  
狭楕出土状況  
北から(右)



5. NR01  
SX03  
楕出土状況  
東から(右)

## 62F区 II-2期



1. NR01  
SX03  
組合せ鋤出土状況  
北から



2. NR01  
SX03  
机天板出土状況  
南から



3. NR01  
SX03  
梯子出土状況  
東から

62F区 III-1期

1. NR01  
SX04  
南西から



2. NR01  
SX04  
木製品出土状況  
南から



3. NR01  
SX04  
ヨコヅチ  
出土状況  
西から(左)



4. NR01  
SX04  
折敷底板  
出土状況  
西から(右)



62F区 III期



- 1. NR01  
SX04  
人形出土状況  
北から(左)
- 2. NR01  
遺物集中地点 I  
墨書土器出土状況  
西から



- 3. NR01  
SX04  
人形出土状況  
西から(左)
- 4. NR01  
遺物集中地点 I  
墨書土器出土状況  
北から(左)



- 5. NR01  
遺物集中地点 II  
人形出土状況  
北から(左)
- 6. NR01  
遺物集中地点 II  
墨書土器出土状況  
南から(左)

62F区 III期

1. NR01  
遺物集中地点 I  
墨書土器出土状況  
北から



2. NR01  
SX04  
馬鍬出土状況  
南から(左)
3. 同左  
西から(右)



4. 同上  
細部  
西から



5. 同上  
細部  
東から

62F区 IV期



1. 水田検出状況  
南から

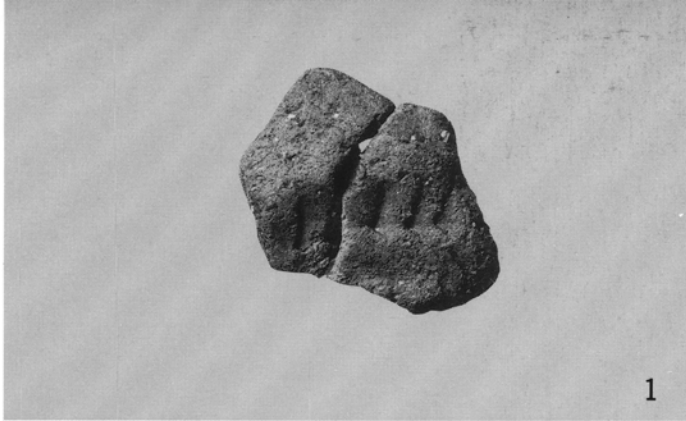


2. 同上  
南西から(左)

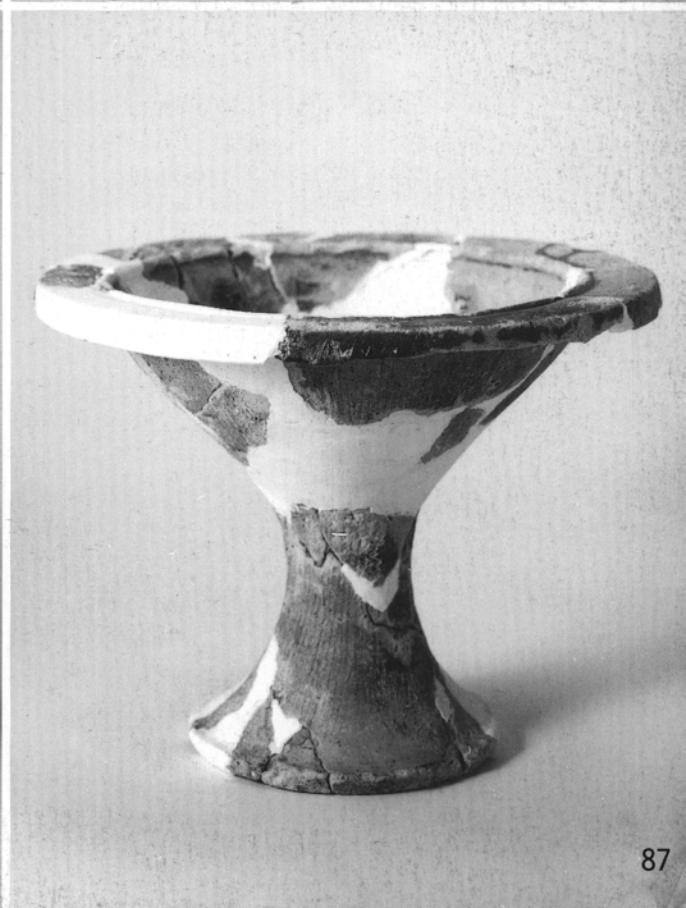
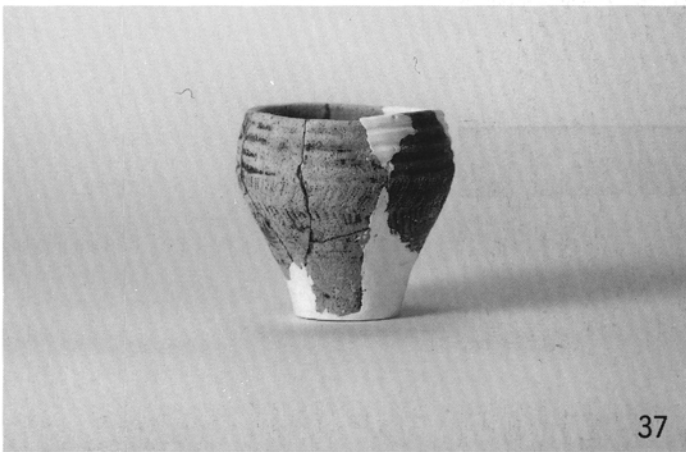


3. 同上  
全景  
上空から(下)

〇期



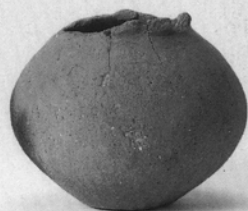
I期



II期



10



11



23



14



16



21



20



34



36

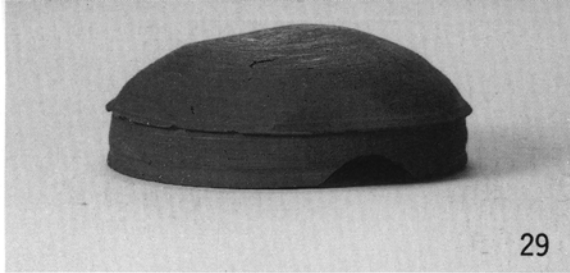


37



41

II期



29



27



33



49



57



54



58



59



68



60



61

II期



69



62



70



75



76



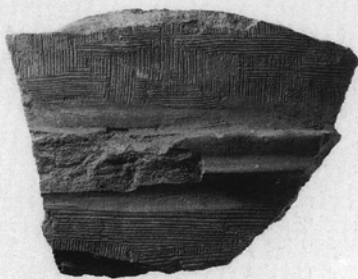
73



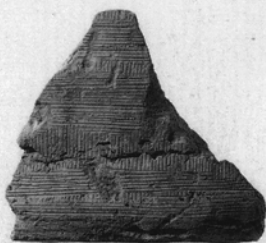
80



103

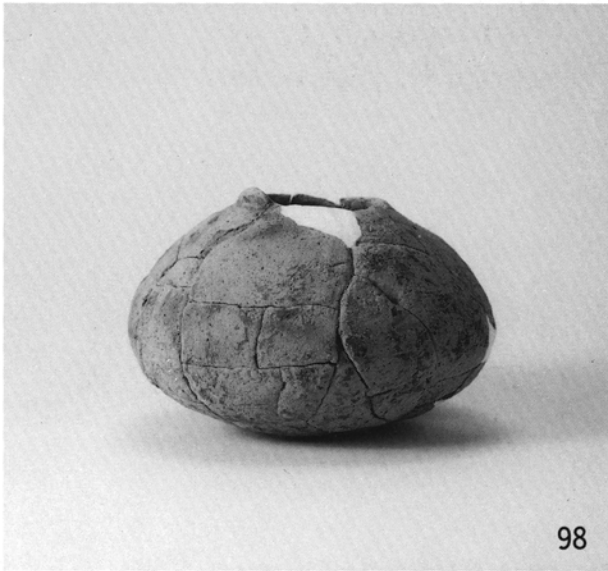


82

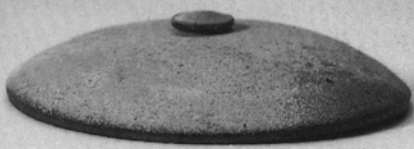


84

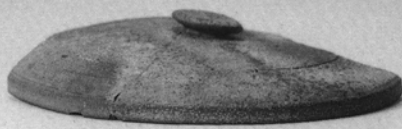
II期



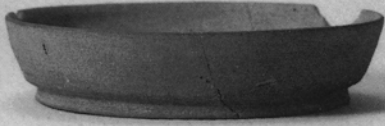
III期



1



2



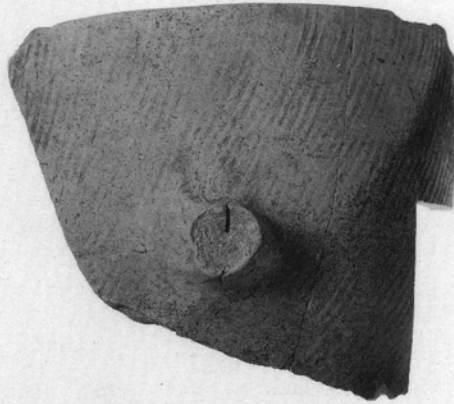
21



19



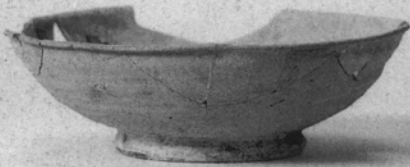
38



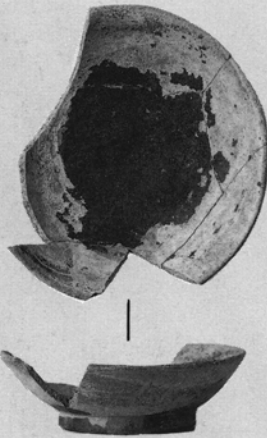
34



39



54



91



93



95

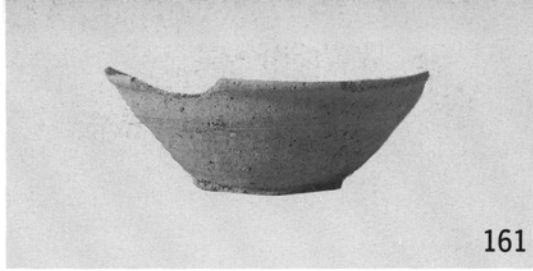


133



130

III期



161



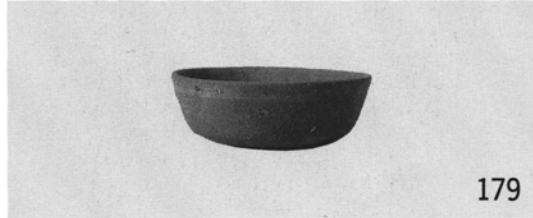
149



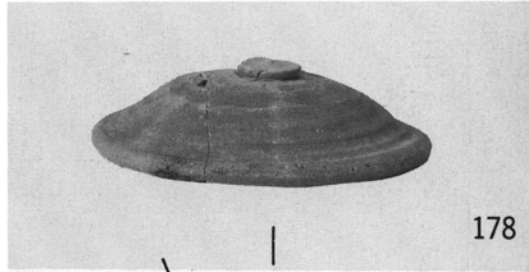
169



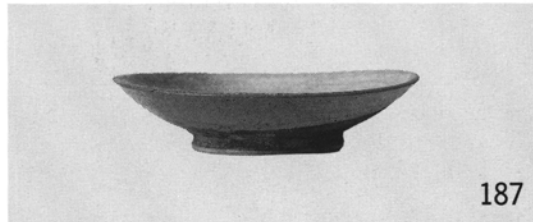
171



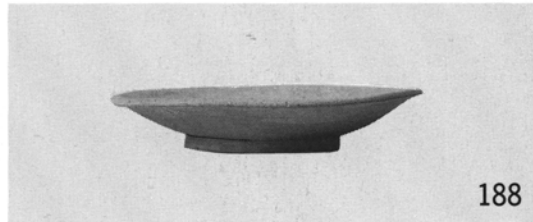
179



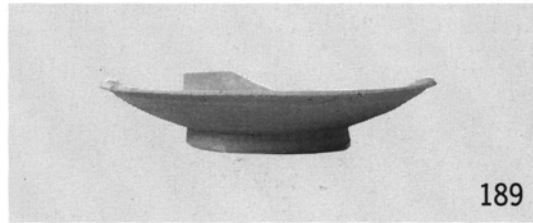
178



187



188



189



192



196



197



198

III期



201



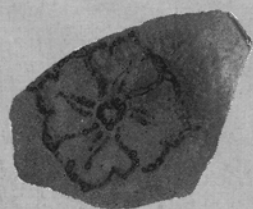
201



203



212



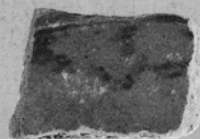
224



220



226



225



233



240



235



248



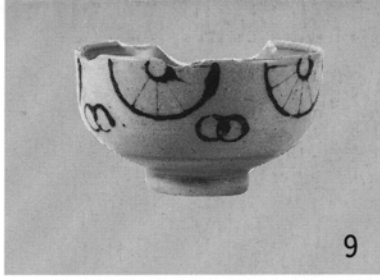
1



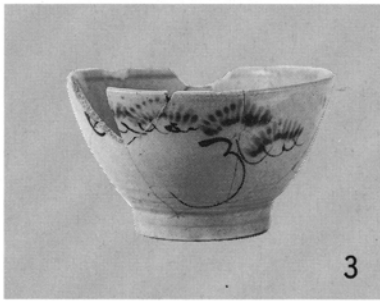
7

土製勾玉・陶製品

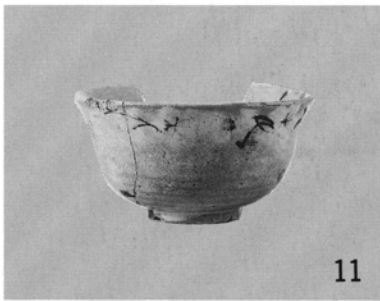
IV期



9



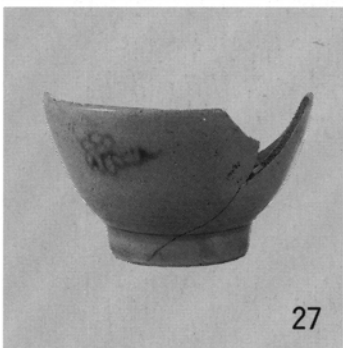
3



11



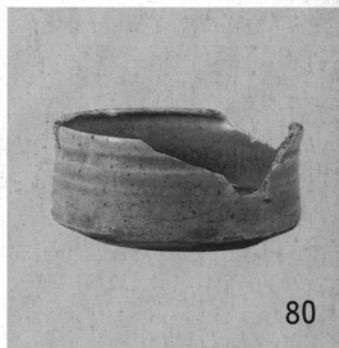
7



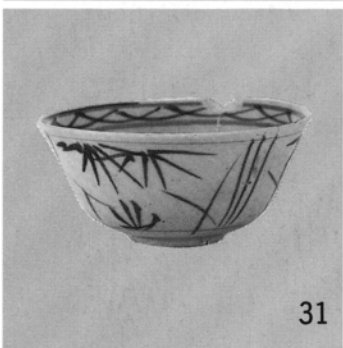
27



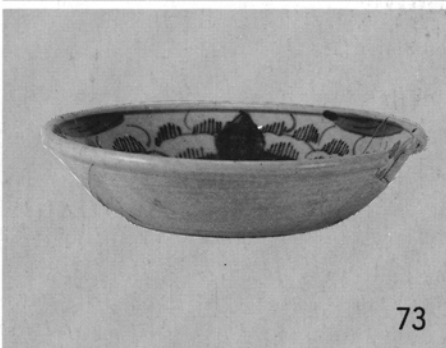
52



80



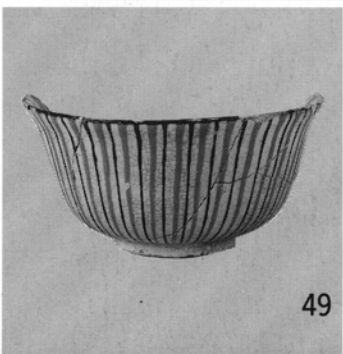
31



73



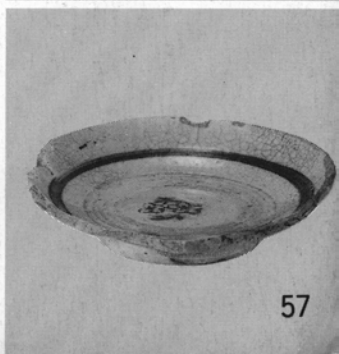
87



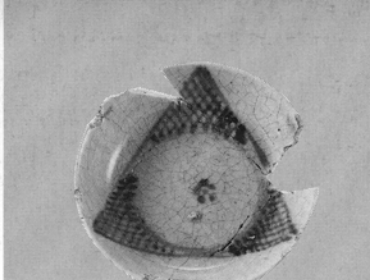
49



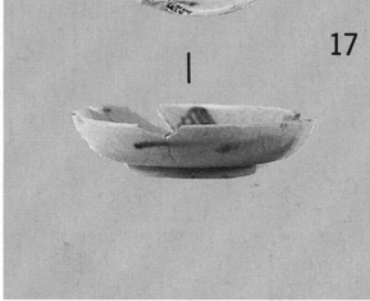
74



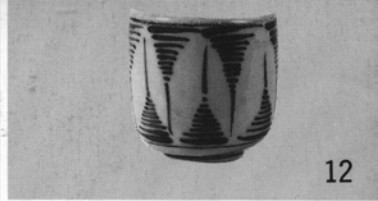
57



17



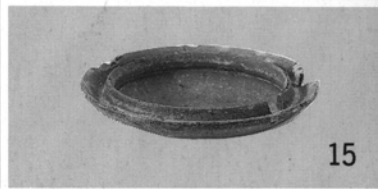
19



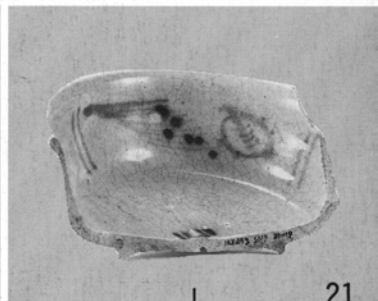
12



13



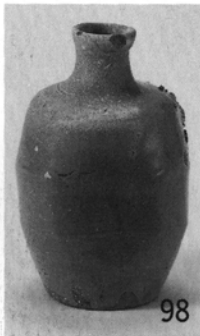
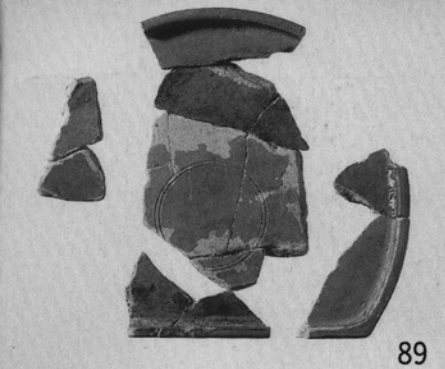
15



21



IV期



IV期



104



67



117



93



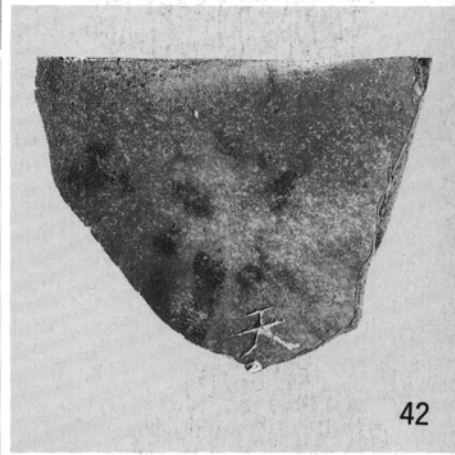
98



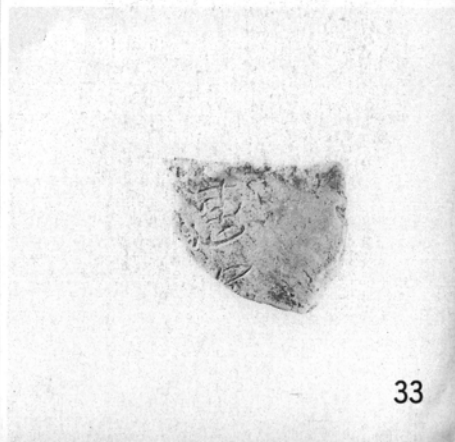
41



123

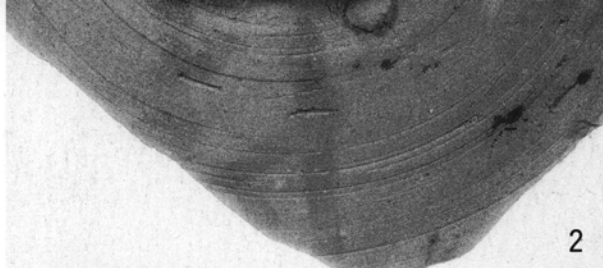
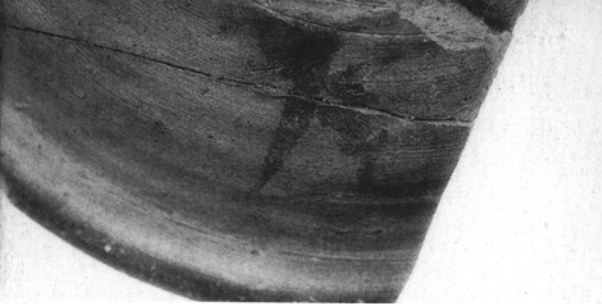


42



33

墨書土器



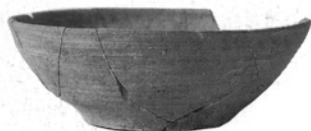
2



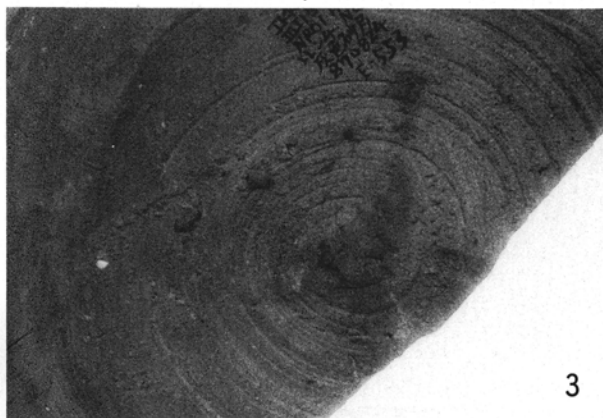
1



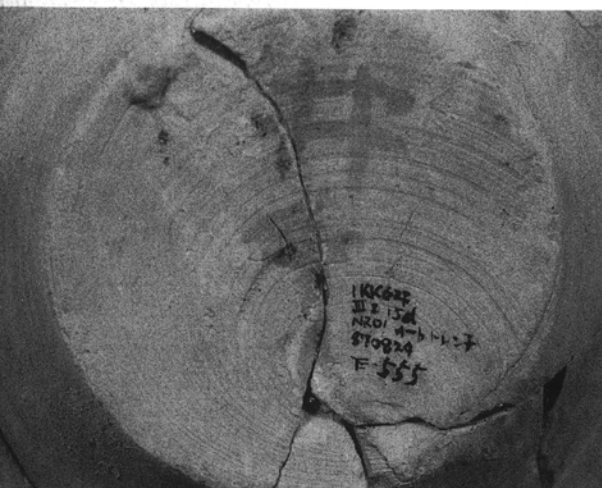
1



6



3



10068  
H. 154  
No. 4-1-1  
57024  
E-555



4



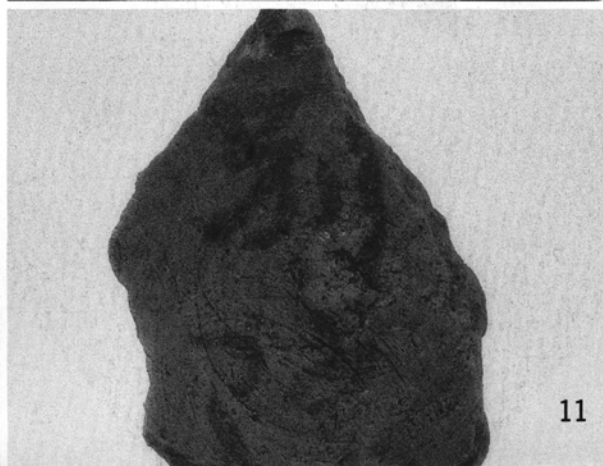
10068  
H. 154  
No. 4-1-1  
57024  
E-555

9



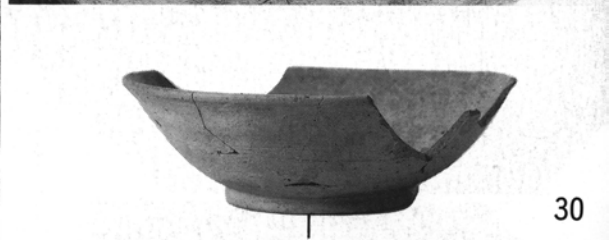
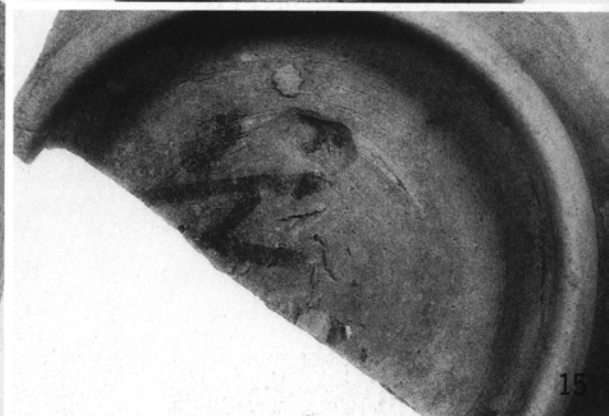
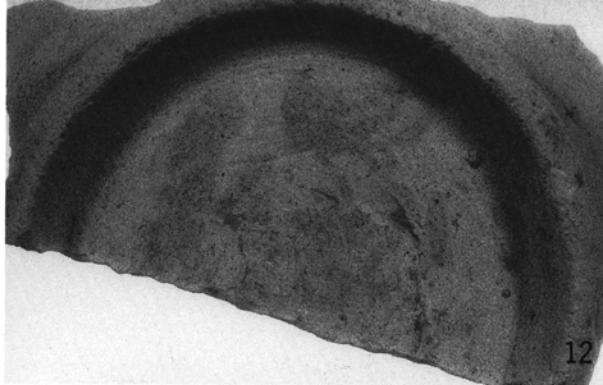
10068  
H. 154  
No. 4-1-1  
57024  
E-555

10



11

墨書土器

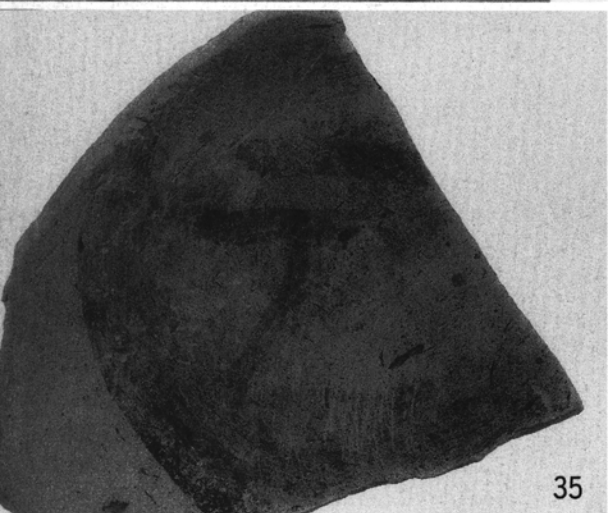


墨書土器



|

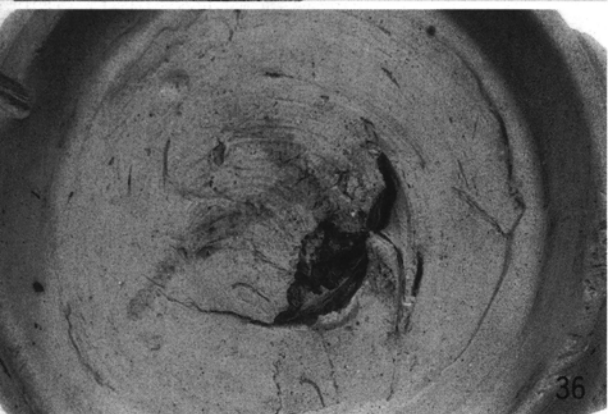
31



35



33

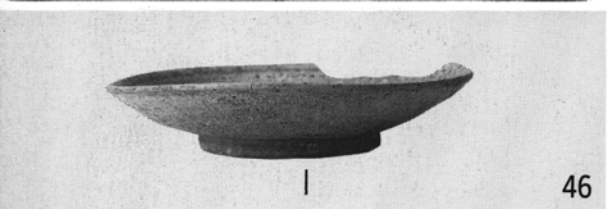


36



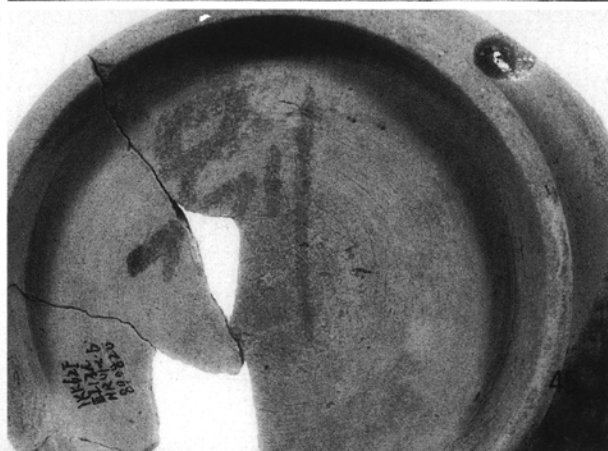
|

43

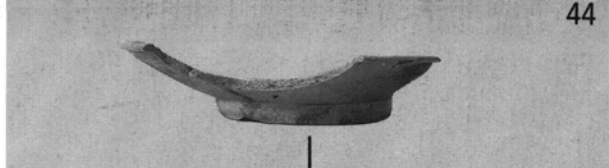


|

46



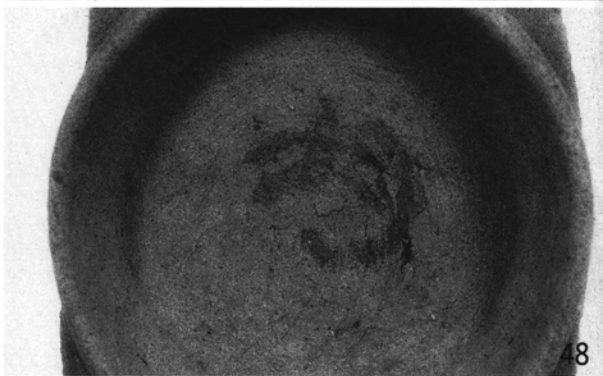
墨書土器



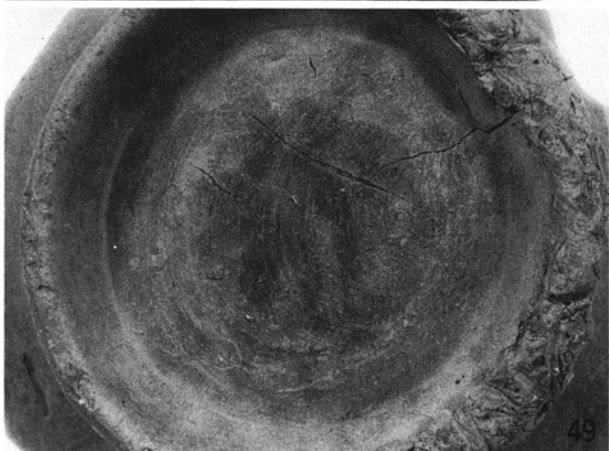
44



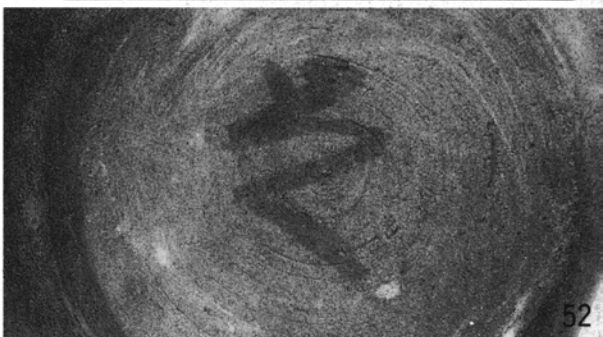
47



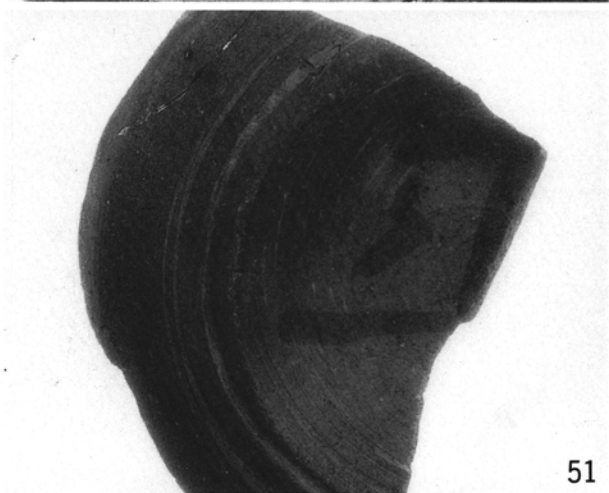
48



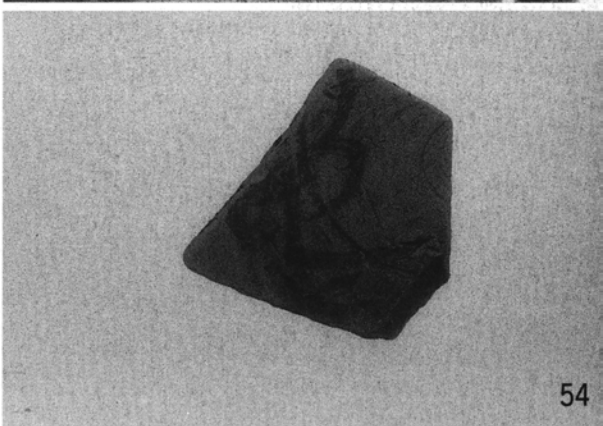
49



50

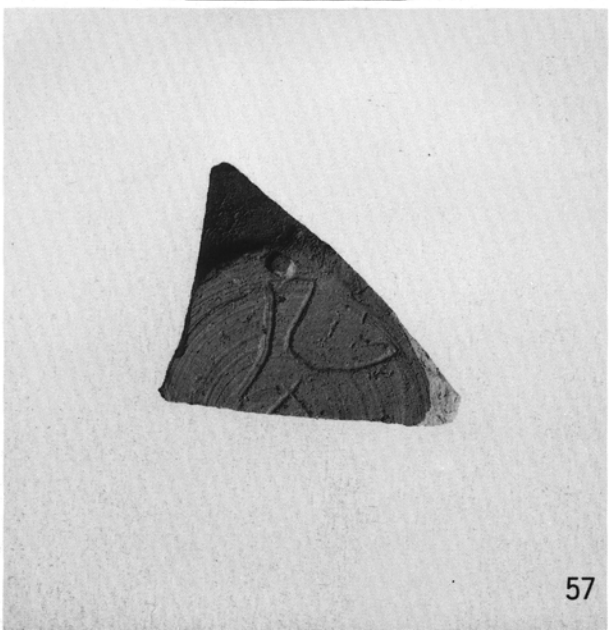


51

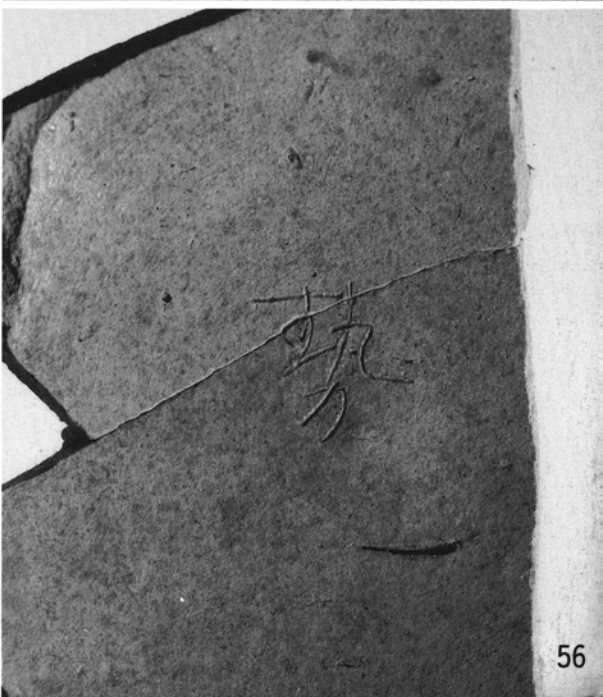


52

刻書土器



53



54

III期瓦



1



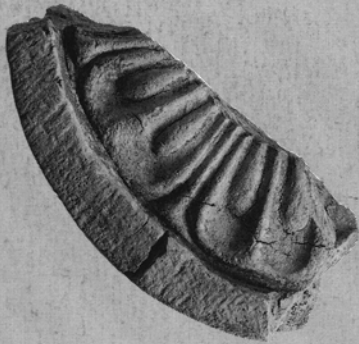
2



3



6



4



16

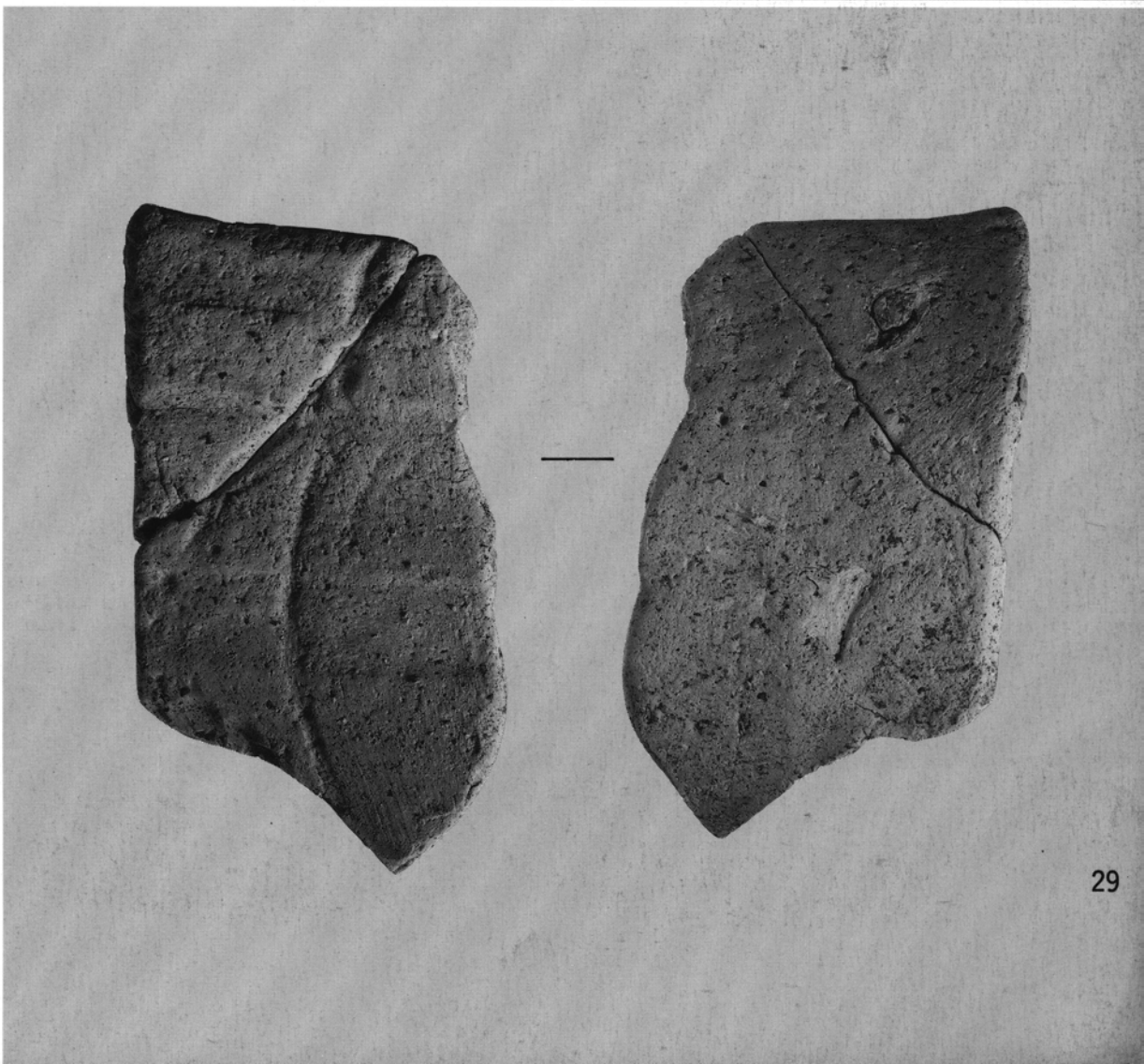
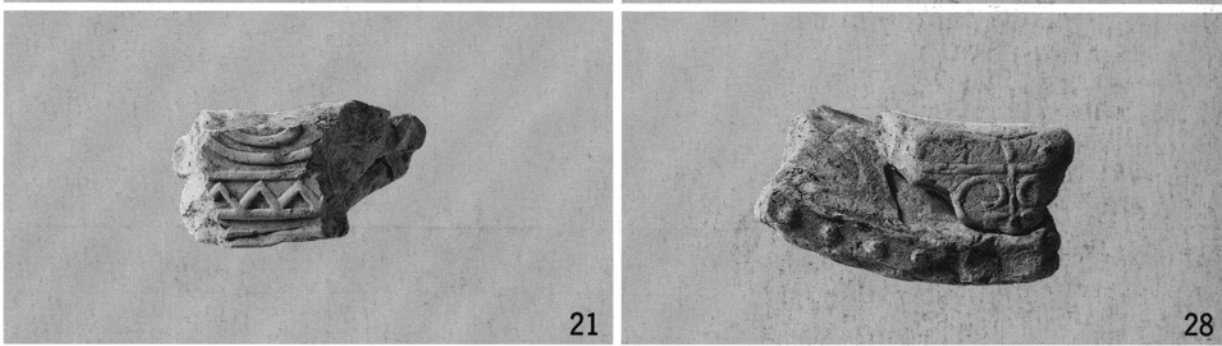
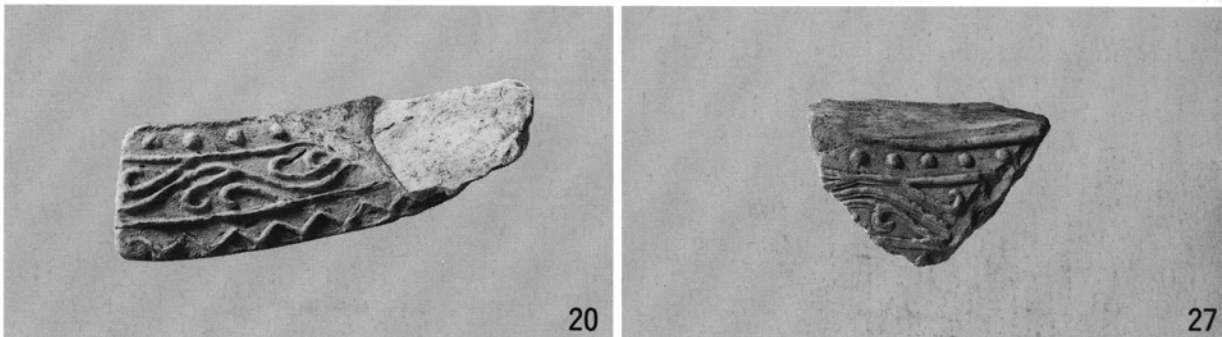
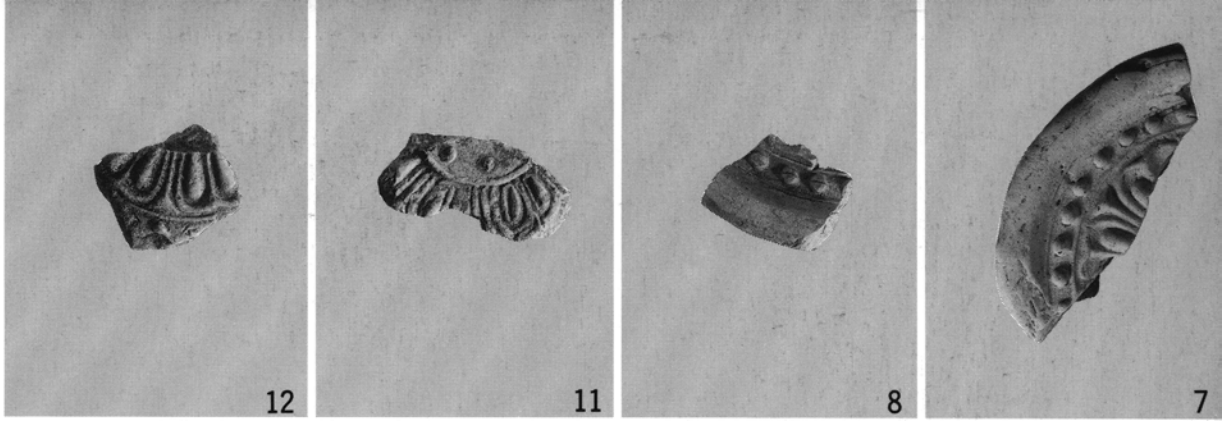


13

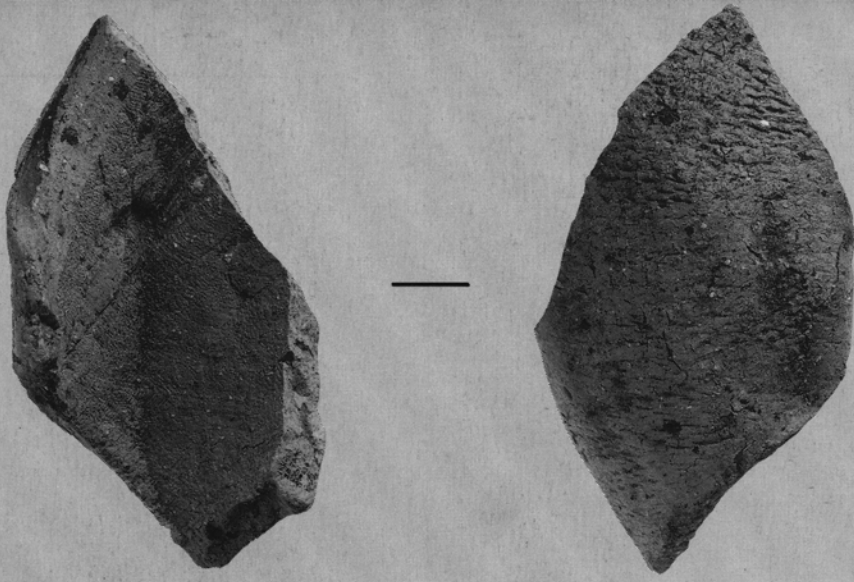


19

III期瓦



III期瓦

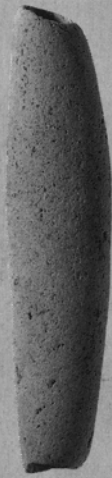


30

陶錘



2



3



4



5

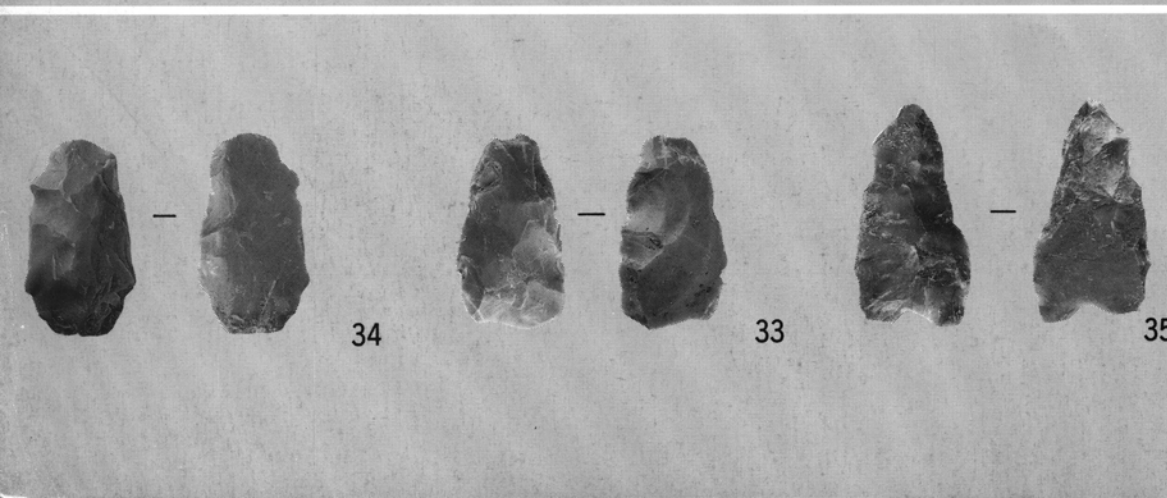
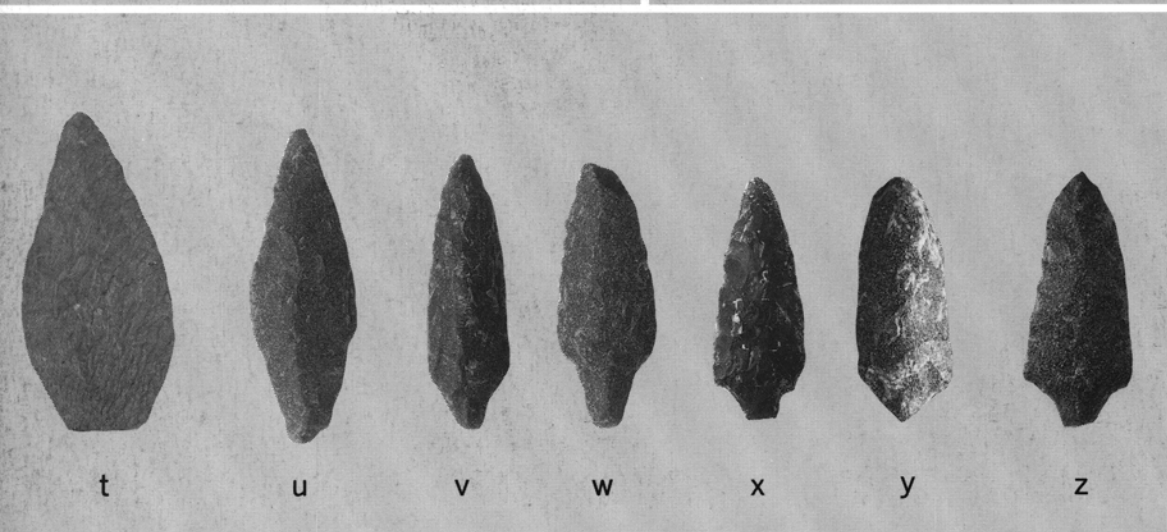
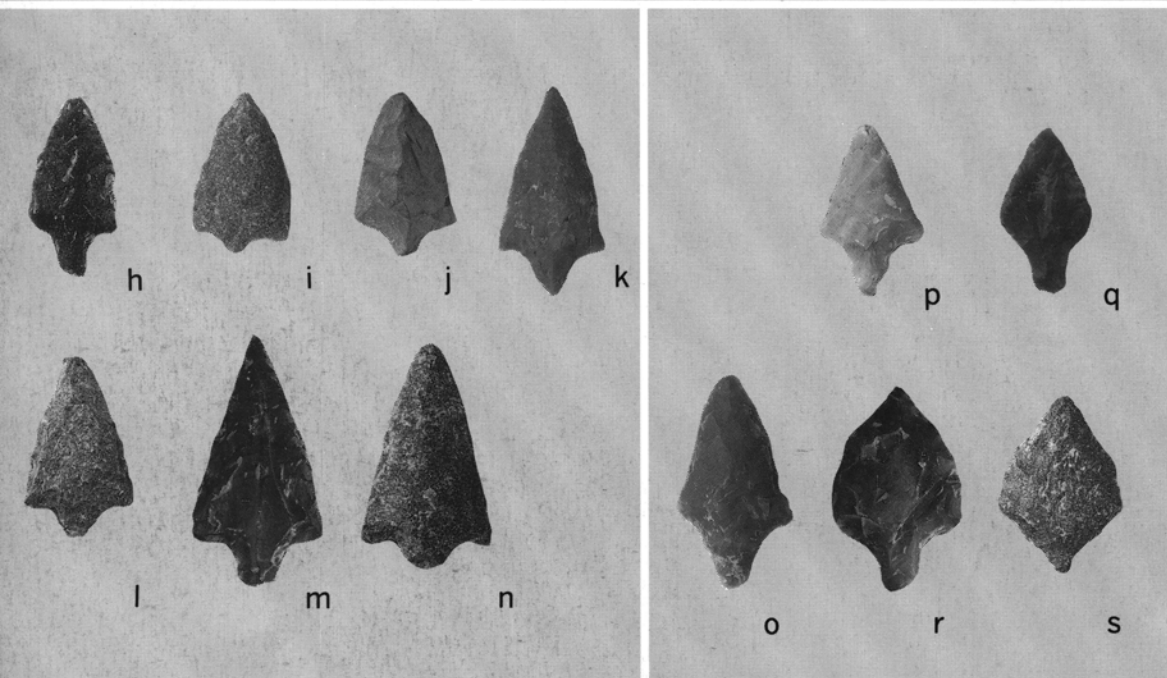
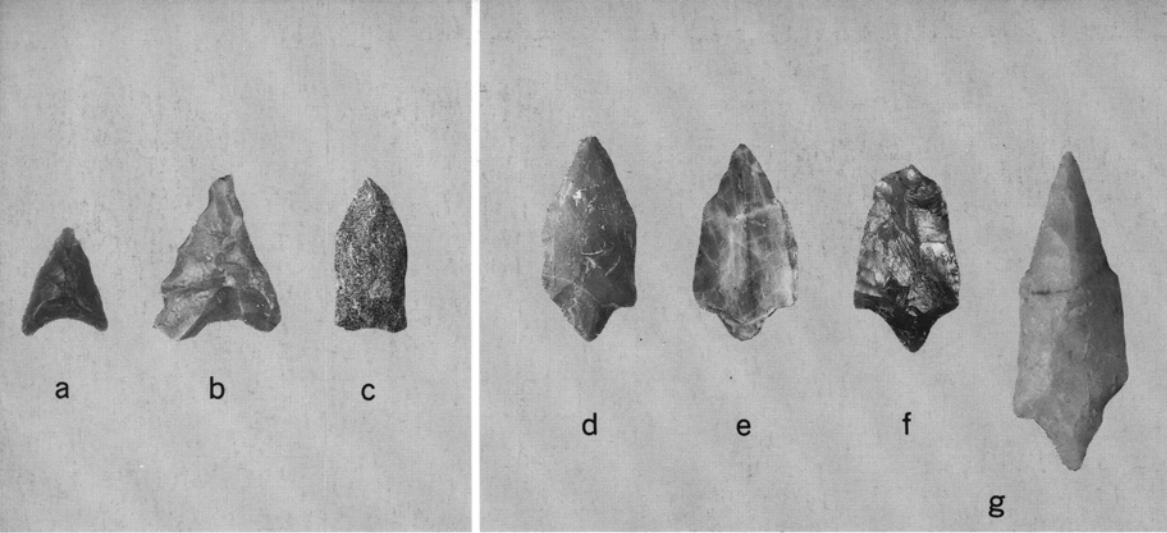


6

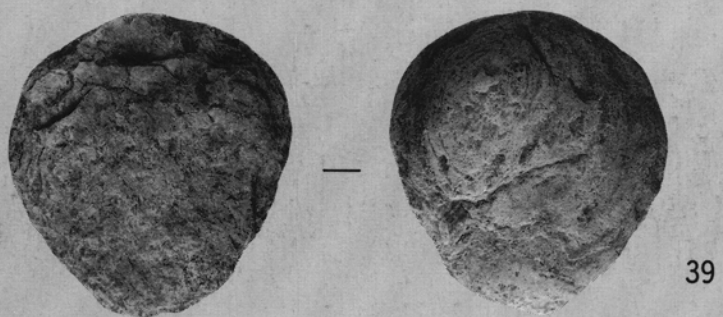
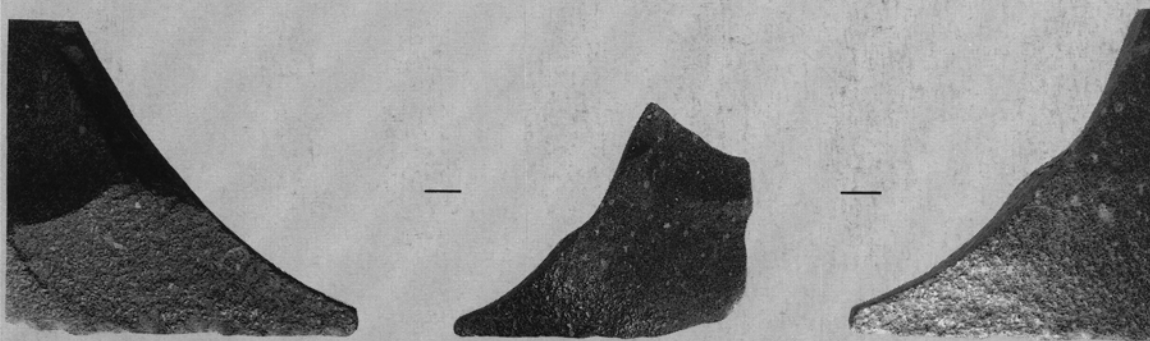
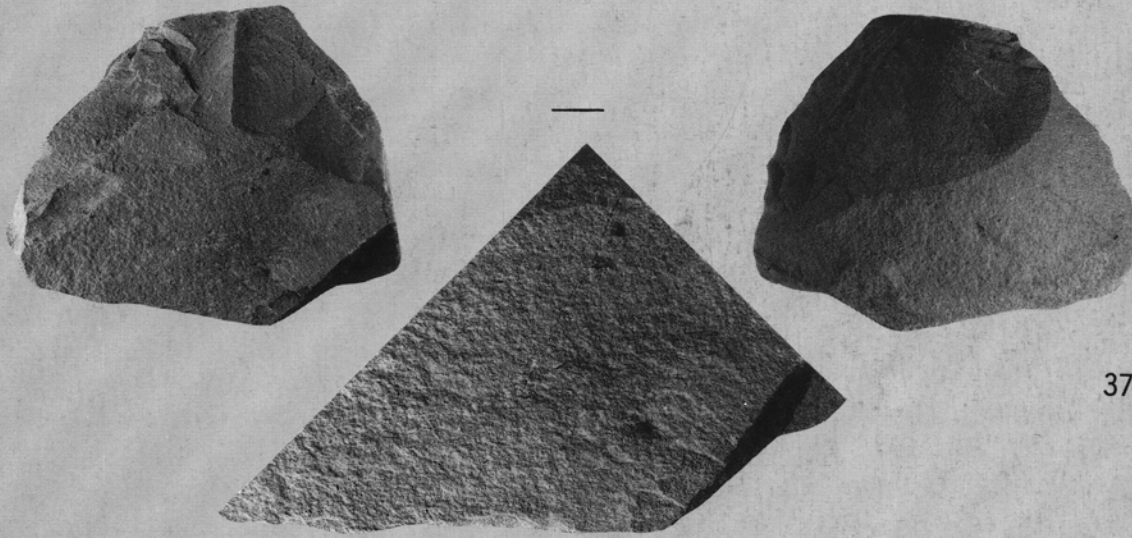
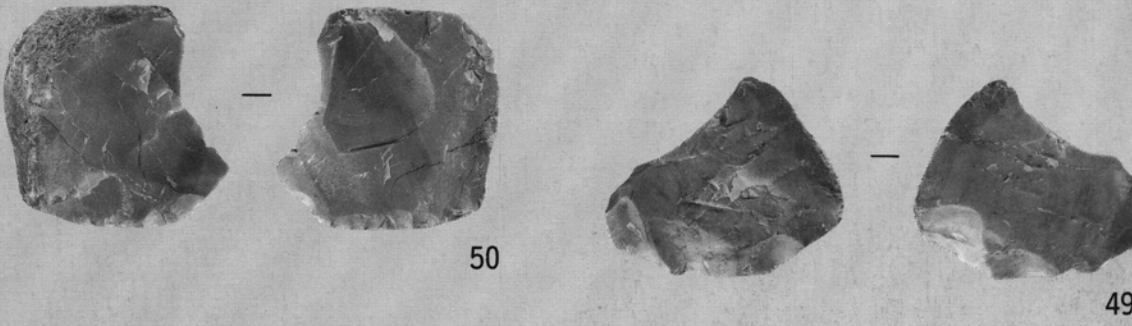
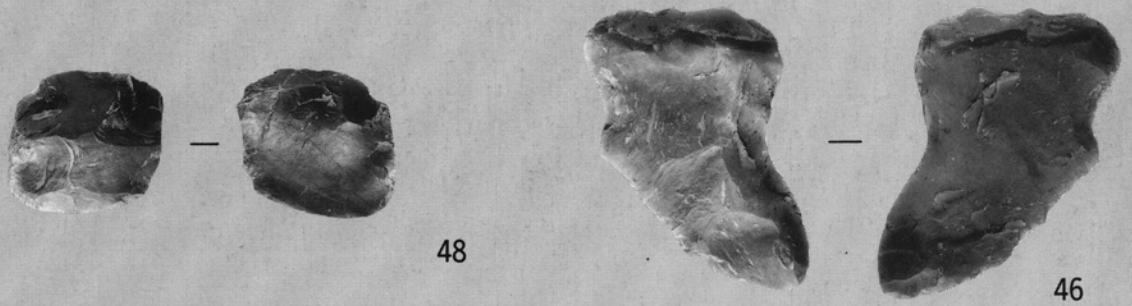
石製品



石製品



石製品



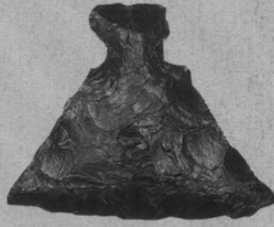
石製品



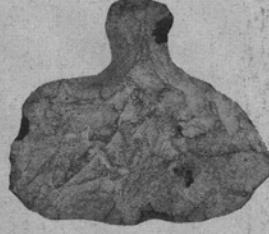
41



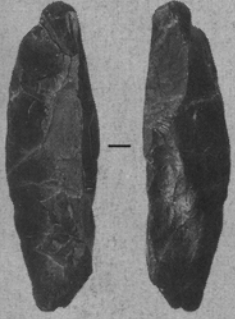
42



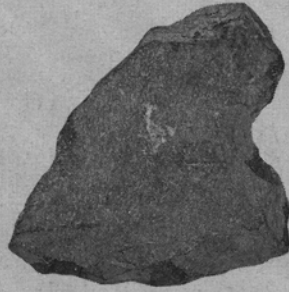
43



44



51



45



52



36



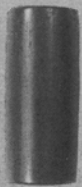
61



65



64



62



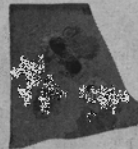
63



67



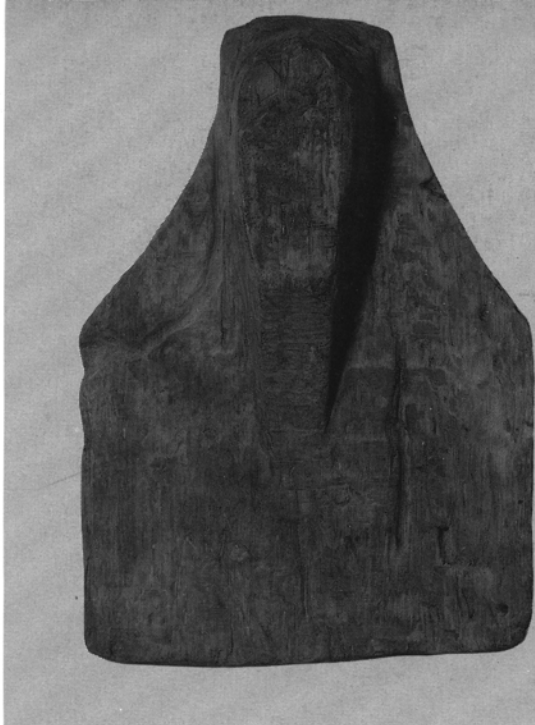
68



69



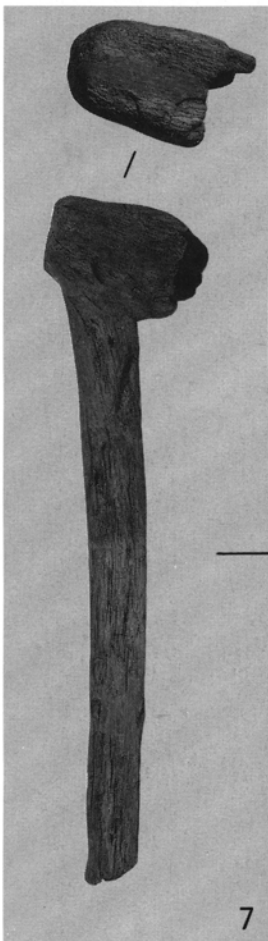
I期 木製品



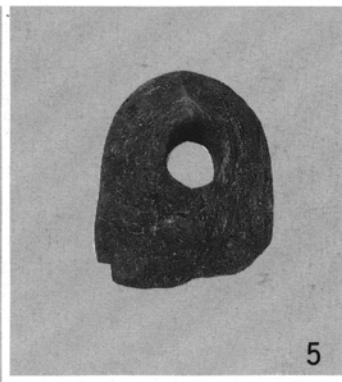
1



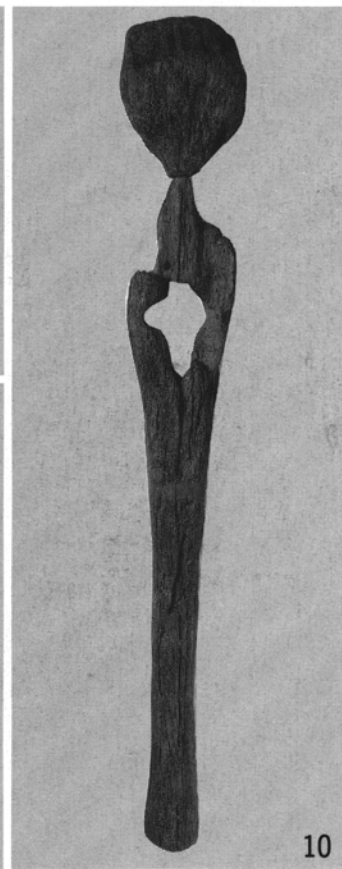
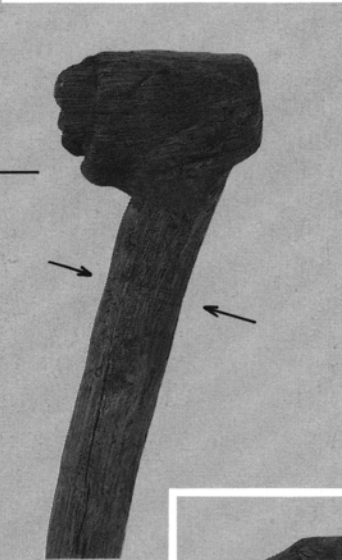
4



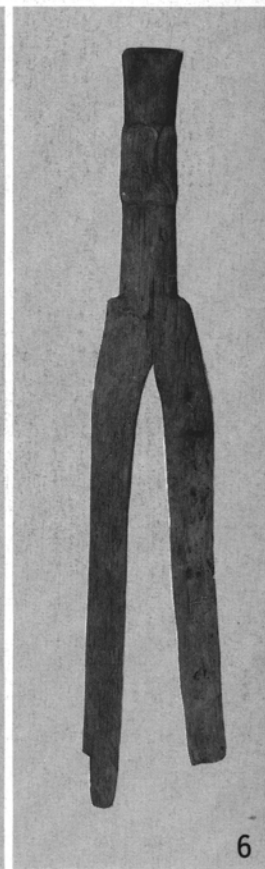
7



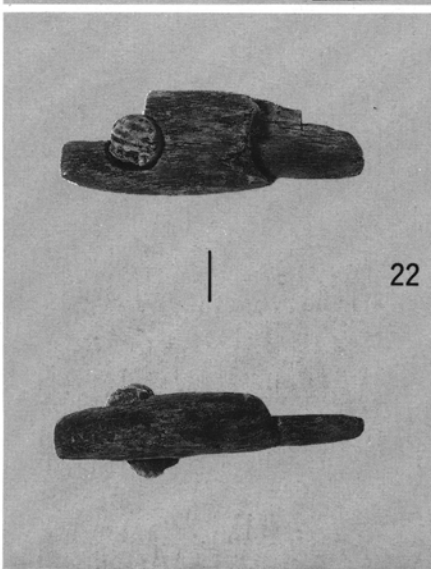
5



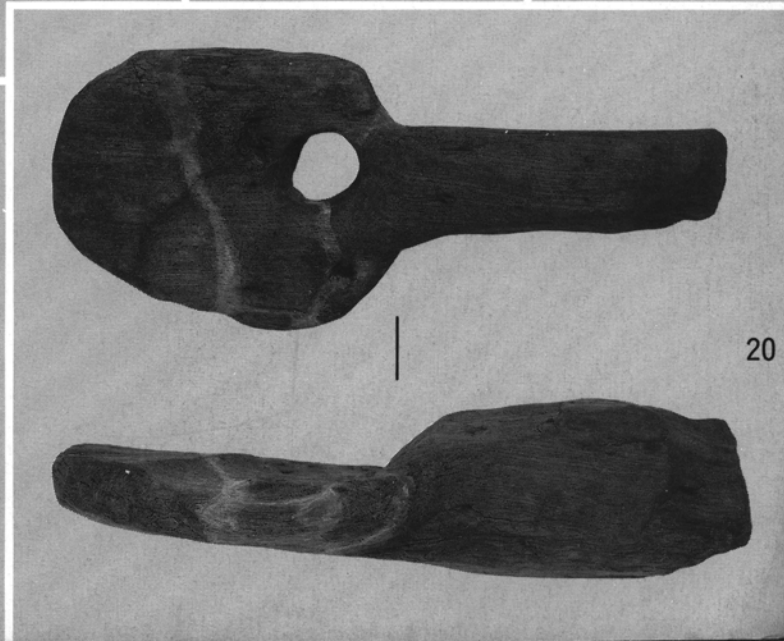
10



6



22

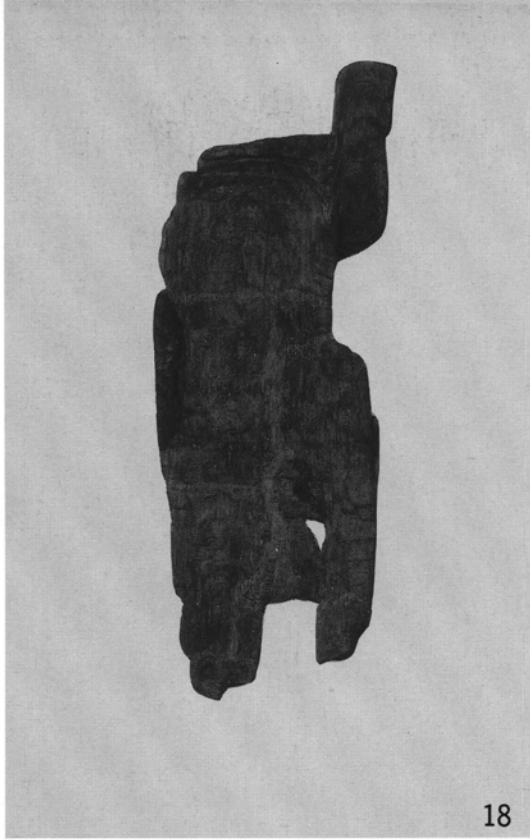


20

I 期 木製品

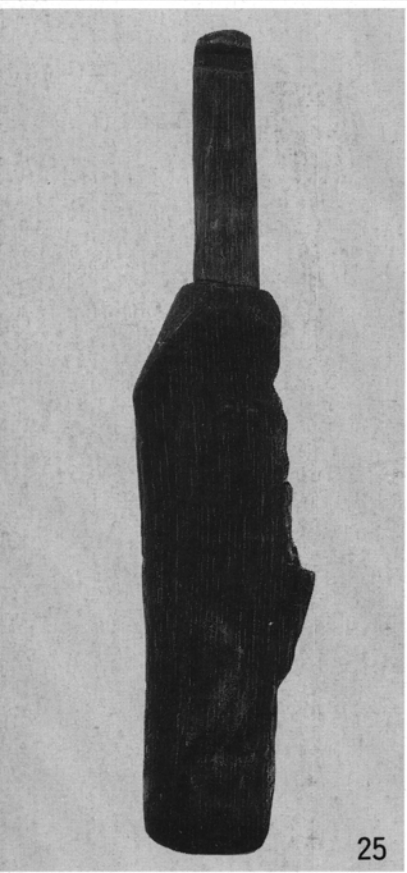


9

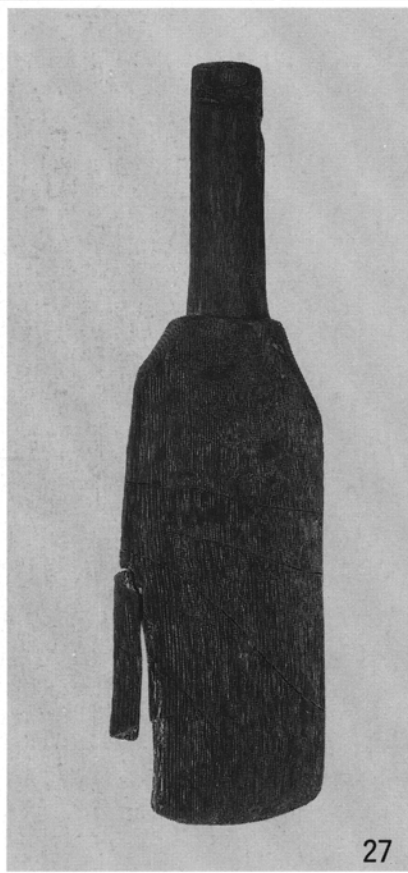


18

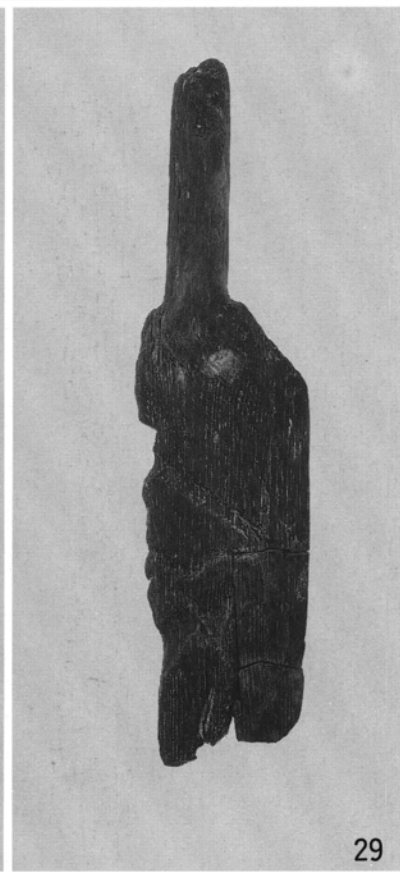
II-1期 木製品



25



27



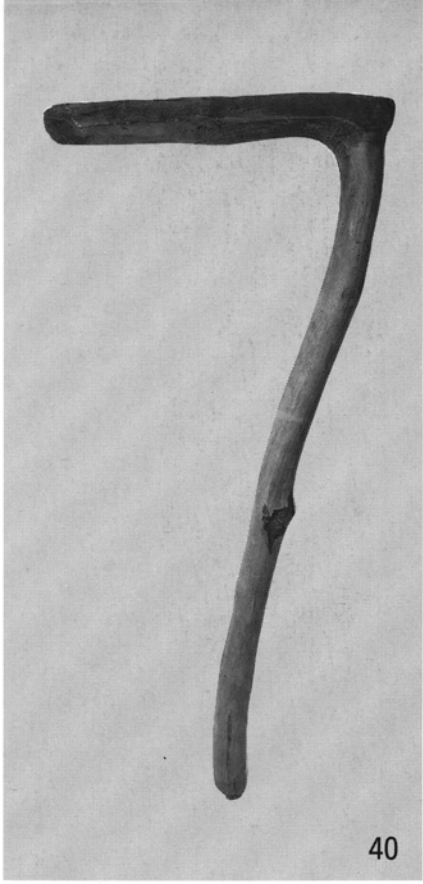
29



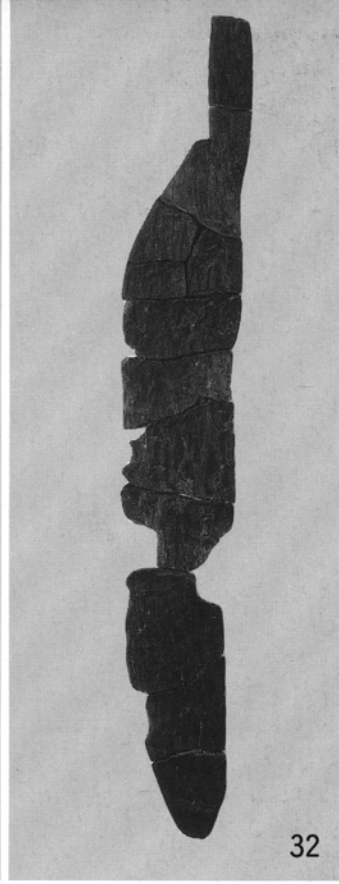
34



35



40



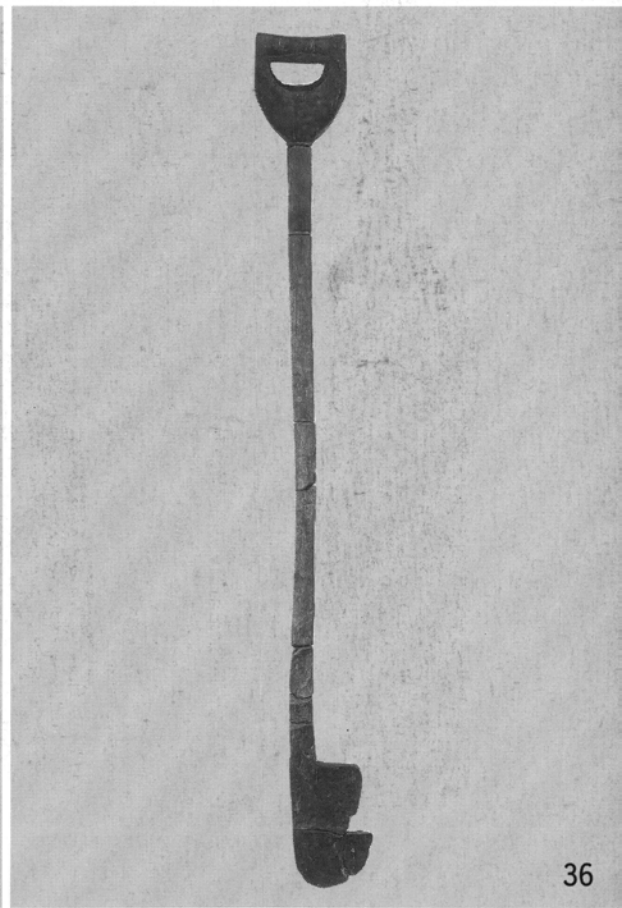
32



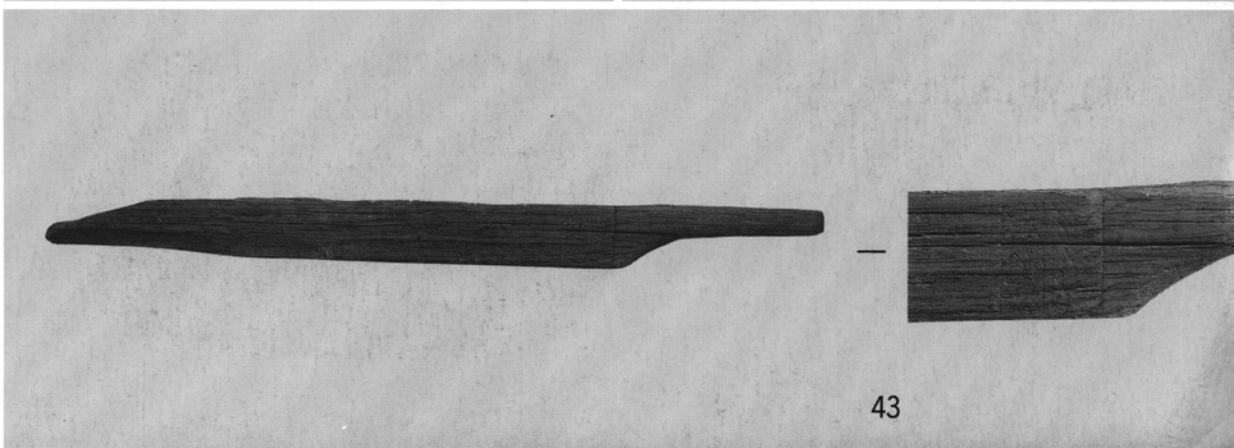
31



37



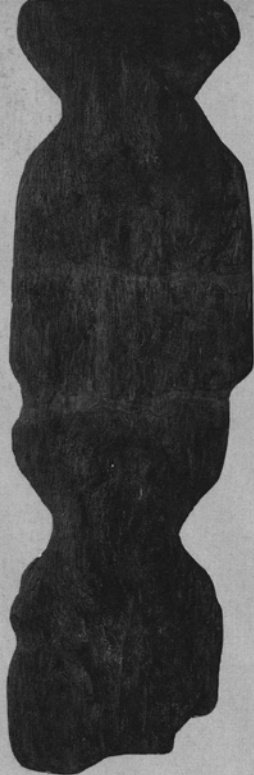
36



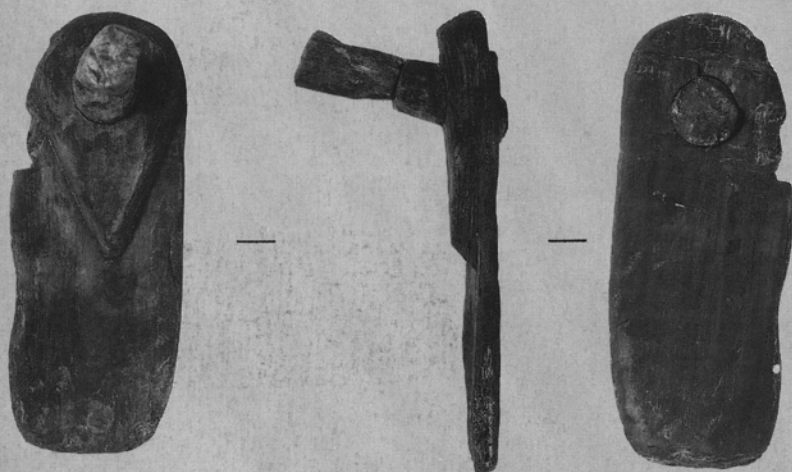
43



42



50



51



52



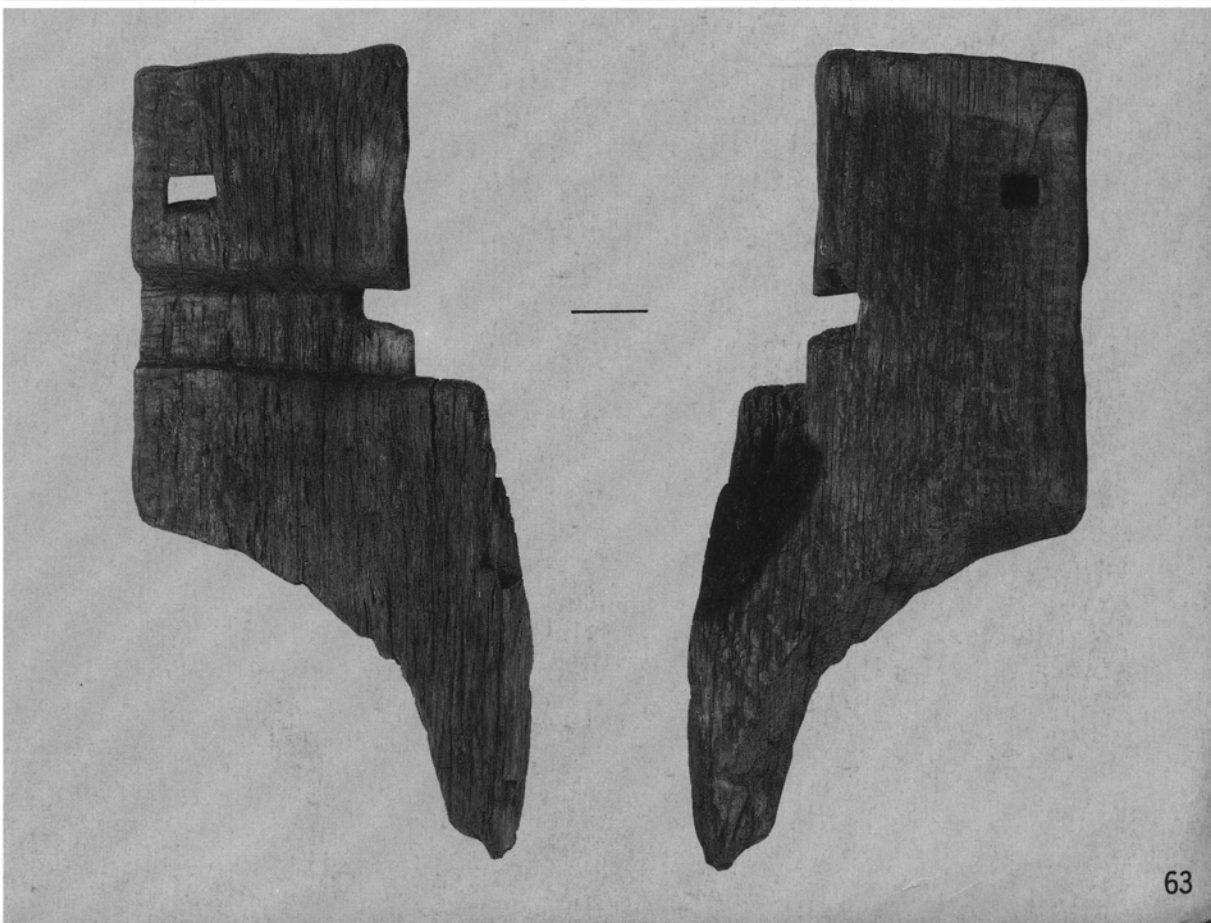
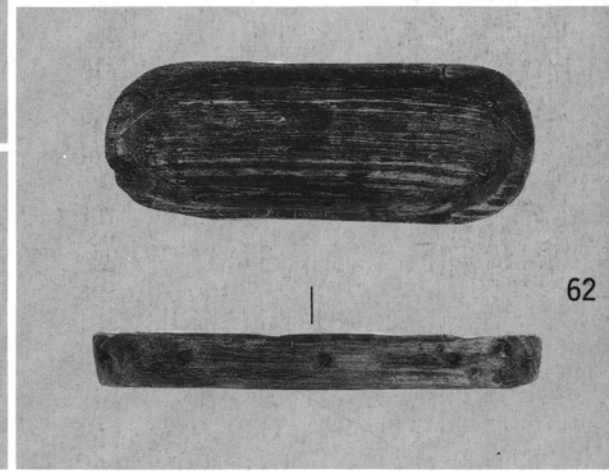
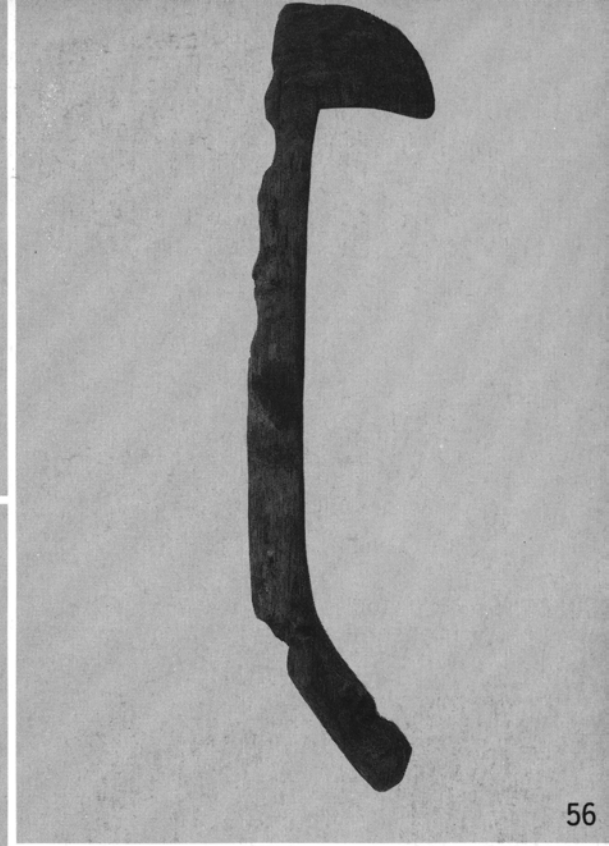
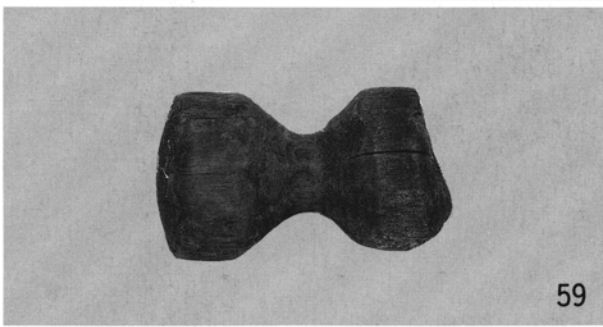
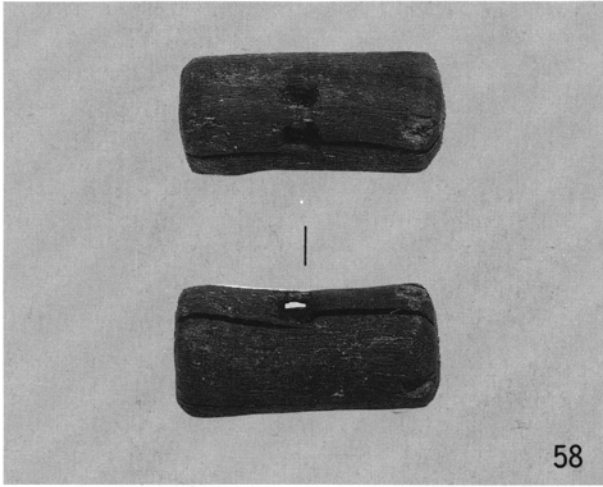
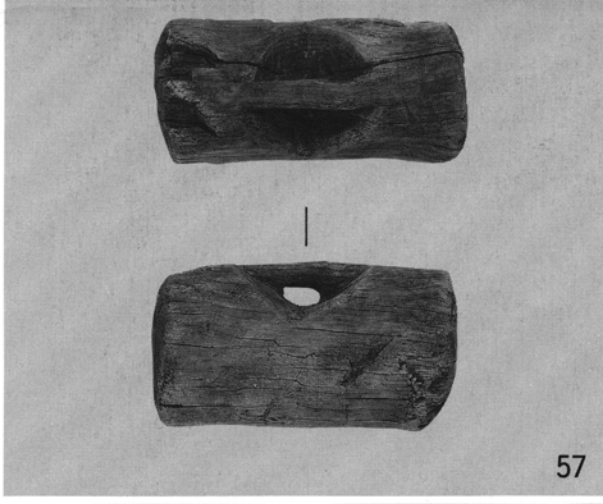
53

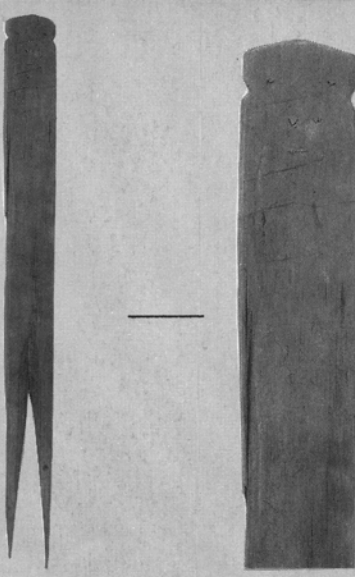


54

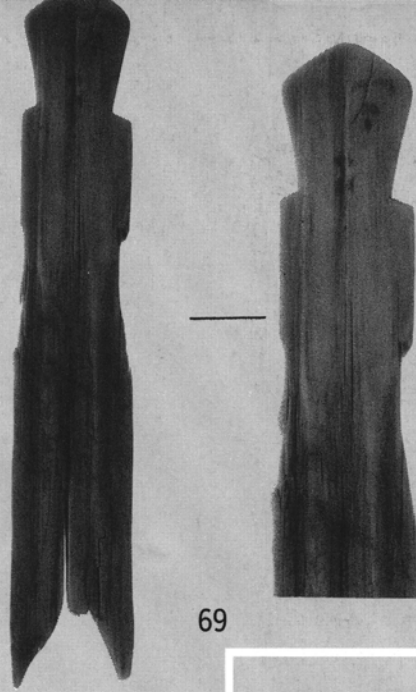


55

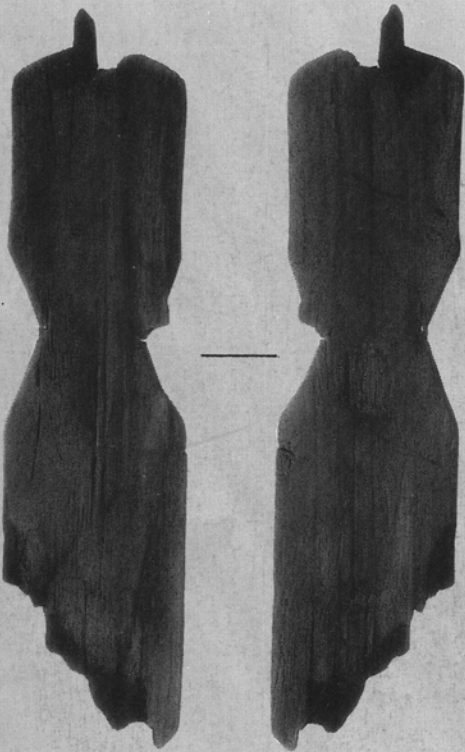




68



69



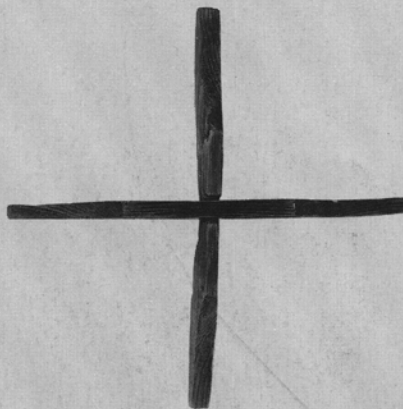
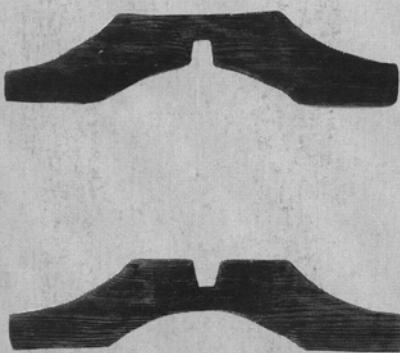
70



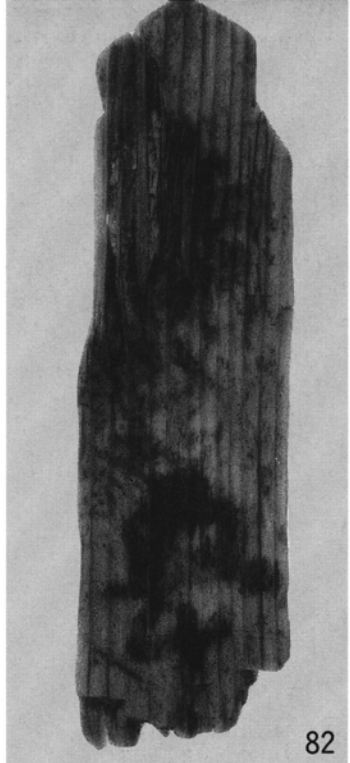
71



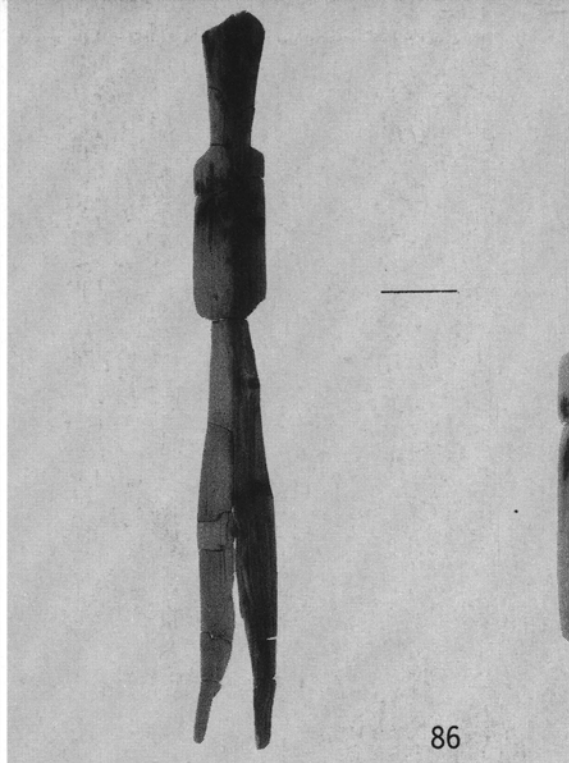
75



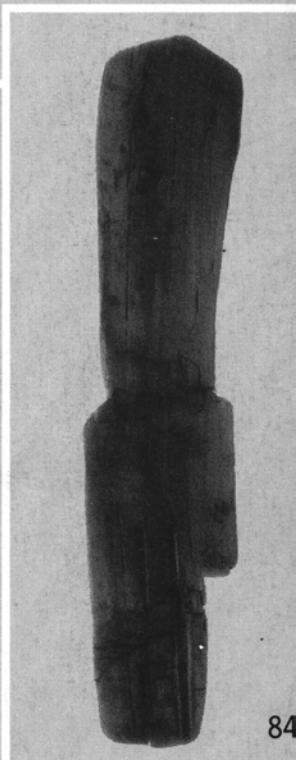
79



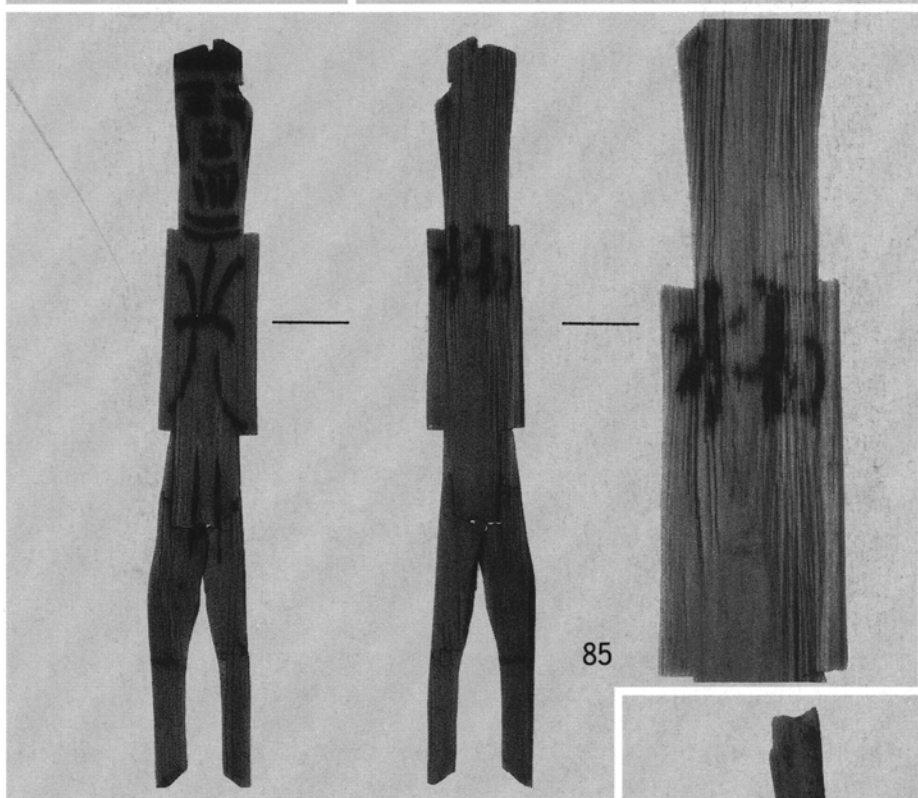
82



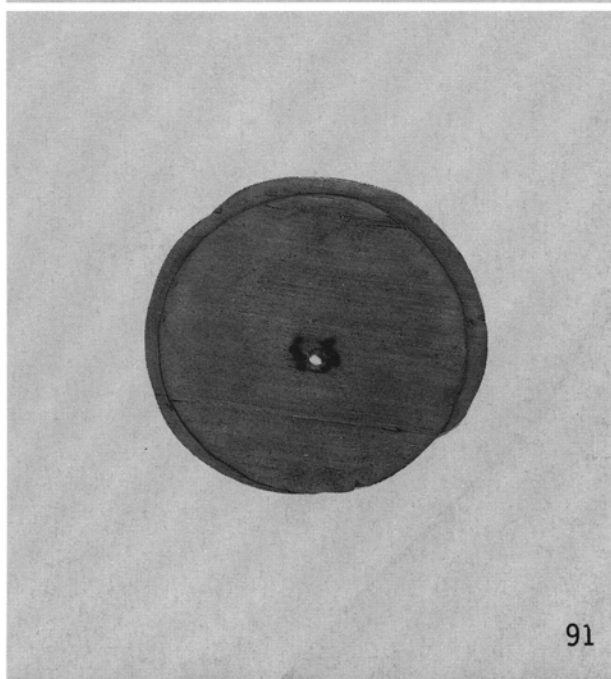
86



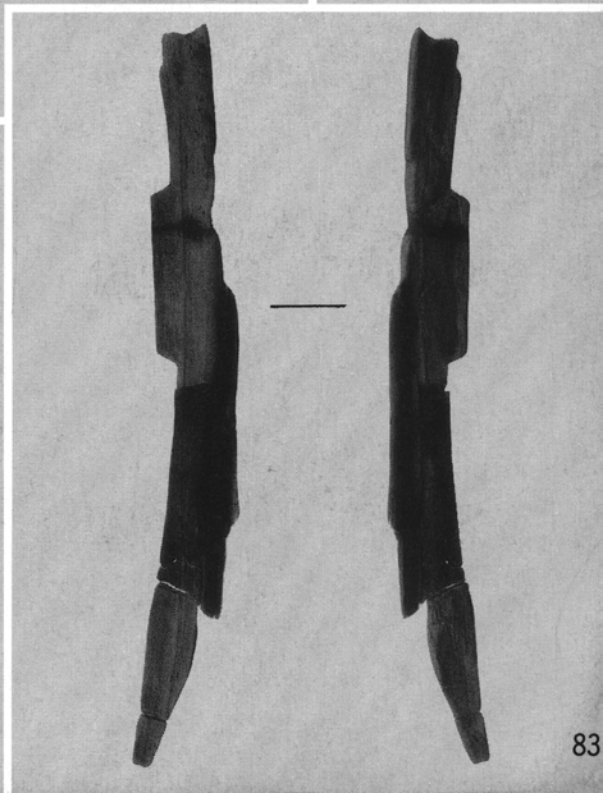
84



85



91



83

---

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第29集

**勝川遺跡 IV**

1992年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 日本印刷株式会社

---